

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 124

窪木遺跡 2

岡山県立大学建設に伴う発掘調査
IV

1998

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 124

窪木遺跡 2

岡山県立大学建設に伴う発掘調査

Ⅳ

1998

岡山県教育委員会



1. 縄文時代後期の土器（斜面堆積1）



2. 縄文時代後期の土器（斜面堆積1）

巻頭図版 2



1. 弥生時代中期の竪穴住居29（南西から）



2. 弥生時代の石製勾玉・管玉・玉未製品、古墳時代の管玉

S313

S375



3. 弥生時代の打製石包丁



1. 古代の建物63~68、溝196 (南から)



2. 古代の建物63~66 (南から)

巻頭図版 4



1. 古代の建物69（北から）



2. 古代の土壙195（北東から）



1. 陶馬 (C44)



2. 白磁・青磁

巻頭図版6



1. 灰釉陶器 (溝202、斜面堆積3、その他)



2. 灰釉陶器 (その他)



2315



2403



2404



2406



2407



2408



2409



2410



2411



2401



2402



2405

1. 緑釉陶器 (溝202)



2536



2543



2544



2541



2537



2535



2539



2540



2542



2538

2. 緑釉陶器 (斜面堆積3)

巻頭図版 8



2. 緑釉陶器 (その他)



1. 緑釉陶器 (その他)

序

岡山県は近年の著しい情報化・国際化の進展、高齢化社会の到来など多様な社会の変化に対応するため、新たに平成5年4月に岡山県立大学を設置いたしました。

岡山県教育委員会では、この県立大学の建設に当たって、建設予定地内における埋蔵文化財の取り扱いについて、関係当局と繰り返し協議を行いました。その結果、工事によってやむなく破壊される部分については記録保存のための発掘調査を行うこととし、平成元年度に確認調査を、引き続いて平成2年度から4年度にわたって主要な建物や付属施設についての全面調査を実施いたしました。

発掘調査報告書については、4分冊にわたって作成することとし、その第1分冊に当たる『南溝手遺跡1』については平成7年3月に、第2分冊に当たる『南溝手遺跡2』については平成8年3月に、さらに第3分冊に当たる『窪木遺跡1』についても平成9年3月に刊行いたしました。

そして今回報告いたします『窪木遺跡2』は、最終の第4分冊に当たり、発掘調査で明らかになった主に縄文時代後期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代にわたる遺跡の内容について、竪穴住居や掘立柱建物などの多くの遺構や土器、石器、鉄器などの豊富な出土遺物を整理し、掲載しております。

この報告書が学術研究に寄与できるばかりか、文化財の保護・保存のために活用され、一方で地域の歴史研究を一層深める資料として広く役立つならば幸甚に存じます。

発掘調査および報告書の作成に当たっては、岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の諸先生方から多くの御教示と御指導を賜りました。また、岡山県総務部県立大学建設準備室、岡山県土地開発公社、総社市教育委員会、ならびに地元の関係各位から暖かい御理解と御協力をいただきました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げる次第です。

平成10年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 籾本 克之

例 言

1. 本報告書は、岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部の建設に伴って岡山県教育委員会が岡山県総務部から依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した窪木(くぼぎ)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部の建設に伴う発掘調査報告書は4分冊にわたる刊行であり、本報告書はその第4分冊目にあたる。
3. 窪木遺跡は、岡山県総社市窪木(くぼぎ)に所在する。
4. 発掘調査は、1990(平成2)年3月から1993(平成5)年3月まで実施しており、今回報告する調査区の調査期間は1992(平成4)年6月から1992(平成4)年12月までである。
5. 発掘調査および報告書の作成にあたっては「岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

(故)鎌木義昌(岡山理科大学教授) 新納 泉(岡山大学助教授)
 亀田修一(岡山理科大学助教授) 間壁忠彦(倉敷考古館館長)
 近藤義郎(岡山大学名誉教授) 水内昌康(岡山県文化財保護審議会委員)
 高橋 護(ノートルダム清心女子大学教授)
 山本悦世(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手)
 中田啓司(元県立矢掛高等学校教諭)

6. 本報告書の作成は、1996(平成8)年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて、センター職員平井泰男、久保恵里子が担当して行った。
7. 本報告書の編集は、平井が中心となって行った。また、各遺構の執筆については、基本的には発掘調査担当者が分担し、文責は文末に明記した。
8. 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
9. 特殊な遺物および自然科学分野における鑑定、同定、分析などについては、下記の諸氏、機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、一部の成果については報告文を頂いた。

赤色顔料の分析	本田光子(別府大学文学部助教授)
石器・石製品の石材鑑定	妹尾 護(倉敷芸術科学大学助教授)
木製品樹種同定	畦柳 鎮(岡山商科大学教授)
プラント・オパール分析	株式会社古環境研究所
碧玉産地同定	藁科哲男(京都大学原子炉実験所)
土器胎土分析	白石 純(岡山理科大学自然科学研究所)
動物遺体鑑定	松井 章(奈良国立文化財研究所)
鉄滓分析	大澤正己(九州テクノリサーチ株式会社)
緑釉陶器鑑定	平尾政幸(叻京都市埋蔵文化財研究所)
	高橋照彦(国立歴史民俗博物館)

10. 出土遺物ならびに図面・写真類はすべて岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)に保管している。

凡 例

1. 本報告書にもちいた高度は海拔高であり、北方位については第1・5・6図が真北で、それ以外はすべて磁北である。なお遺跡付近の磁北は西偏6度40分を測る。
2. 本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺については明記しているが、おもなものについては一部例外はあるものの以下のように統一している。

遺 構

竪穴住居・建物(1/60) 井戸・袋状土壇・土壇・土壇墓(1/30)

遺 物

土器(1/4) 土製品(1/3) 石器・石製品(1/2、1/3)
金属製品(1/3) 玉類(1/1)

3. 本報告書における土層名称については、各発掘調査担当者によって表記方法が異なっており、統一できていない。
4. 本報告書に掲載した遺物の番号については、土器、土製品、石器・石製品、金属製品、木器・木製品、ガラス製品にわけて通し番号をつけ、土器以外については、下記を番号の前に付している。

土製品：C 石器・石製品：S 金属製品：M
木器：W ガラス製品：G

5. 本報告書の遺構・遺物の番号については、岡山県立大学建設に伴う発掘調査報告書の第3分冊である『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120 窪木遺跡1 岡山県教育委員会 1997』と同じ遺跡であることから、第3分冊からの通し番号をつけている。
6. 本報告書に掲載した土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのある図は、口径の不確かなものである。また、小片の土器については、傾きの不明確なものも多い。
7. 本報告書に掲載した地図のうち、第1図は国土地理院発行の1/50,000地形図「岡山北部」を、第6図は国土地理院発行の1/25,000地形図「総社東部」・「倉敷」を縮小複製し、加筆したものである。
8. 本報告書に掲載した土器の拓本のうち、口径の計測が不可能な個体については、断面図の左側に内面、右側に外面の拓本を載せている。
9. 土器観察表における色調は『新版標準土色帖(1988年版)』(農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修)によっている。
10. 本報告書にもちいた遺構・遺物の時期については弥生時代から古墳時代前期については第1表の編年対比表のように表記し、それ以外の時期については各執筆者の意向に沿っており、統一していない。なお、本報告書における古代・中世については8世紀から16世紀までを指している。

11. 本文中に『南溝手遺跡1』と記しているのは、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 南溝手遺跡1 岡山県教育委員会 1995年』、『南溝手遺跡2』と記しているのは、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107 南溝手遺跡2 岡山県教育委員会 1996年』、『窪木遺跡1』と記しているのは、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120 窪木遺跡1 岡山県教育委員会 1997年』のそれぞれの報告書を指している。

第1表 編年対比表

遺跡		百間川(註1)	雄 町(註2)	上東・川入(註3)	南溝手・窪木	
弥 生 時 代	前 期	津 島	百間川前期Ⅰ			弥生時代前期前葉
		門 田	百間川前期Ⅱ	雄 町 1		弥生時代前期中葉
			百間川前期Ⅲ	雄 町 2 船 山 3		弥生時代前期後葉
	中 期	南 方	百間川中期Ⅰ	高 田		弥生時代中期前葉
				雄 町 3		
		菰 池	百間川中期Ⅱ	船 山 5		弥生時代中期中葉
	菰 池 雄 町 4					
	後 期	前 山 Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前 山 東		弥生時代中期後葉
		仁 伍		雄 町 5		
	後 期	上 東	百間川後期Ⅰ	雄 町 7	上東・鬼川市Ⅰ	弥生時代後期前葉
				雄 町 8		
		グランド上層	百間川後期Ⅱ	雄 町 9	上東・鬼川市Ⅱ	弥生時代後期中葉
				雄 町 10		
		酒 津	百間川後期Ⅳ	雄 町 11	才 の 町 Ⅰ 才 の 町 Ⅱ	弥生時代後期末葉
		古 墳 時 代	前 期	王 泊 六 層	百間川古墳時代Ⅰ	雄 町 12
百間川古墳時代Ⅱ	雄 町 13				亀川上層	
百間川古墳時代Ⅲ	雄 町 14 雄 町 15				川入・大溝上層	古墳時代前期後葉

註1 岡山県教育委員会が1977年から実施している「百間川遺跡群」の発掘調査で用いられている編年である。

(文献『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅰ～Ⅻ』岡山県教育委員会、1980～1997年)

註2 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1』 岡山県教育委員会 1972年

註3 「川入・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』 岡山県教育委員会 1977年

本文目次

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯	1
第1節 発掘調査の契機	1
第2節 発掘調査の体制	3
第3節 発掘調査の経過	5
第4節 報告書の作成	9
第2章 遺跡の位置と環境	13
第3章 発掘調査の概要	17
第1節 調査区の概要	17
第2節 縄文時代の遺構・遺物	18
1. 概要	18
2. 遺構・遺物	18
(1) 土壌	18
(2) 斜面堆積	19
(3) その他の遺構・遺物	26
第3節 弥生時代前期～中期前葉の遺構・遺物	28
1. 概要	28
2. 遺構・遺物	28
(1) 竪穴住居	28
(2) 建物	35
(3) 土壌	37
(4) 溝	45
第4節 弥生時代中期中葉～後期の遺構・遺物	48
1. 概要	48
2. 遺構・遺物	48
(1) 竪穴住居	48
(2) 建物	59
(3) 袋状土壌	60
(4) 土壌	64
(5) 火処	77
(6) 柱穴	77
(7) 溝	78

(8) 護岸状遺構	91
(9) 石列	92
(10) その他の遺構・遺物	94
第5節 古墳時代の遺構・遺物	101
1. 概要	101
2. 遺構・遺物	101
(1) 竪穴住居	101
(2) 建物	113
(3) 土壇	114
(4) 柵列状遺構	115
(5) 溝	115
(6) 水田	131
(7) その他の遺構・遺物	131
第6節 古代・中世・近世の遺構・遺物	133
1. 概要	133
2. 遺構・遺物	133
(1) 建物	133
(2) 土壇	153
(3) 柱穴	158
(4) 柵列状遺構	159
(5) 溝	160
(6) 斜面堆積	170
(7) その他の遺構・遺物	180
第4章 まとめ	183
第1節 発掘調査成果の概要	183
第2節 南溝手遺跡・窪木遺跡出土の石器・石製品	201
第3節 古代の土器について	207
付載	
付載1 窪木遺跡出土土器の植物珪酸体分析	217
付載2 窪木遺跡・南溝手遺跡出土の碧玉製管玉、管玉片の産地分析	219
付載3 窪木遺跡出土土器に付着した赤色顔料について	229
付載4 窪木遺跡出土土器の胎土分析	230
付載5 窪木遺跡・南溝手遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査	239

挿 図 目 次

第1図 岡山県立大学の位置(斜線部分)(1/50000)	1	第31図 土壌125(1/30)	37
第2図 全調査区配置図(1)(1/4000)	7	第32図 土壌126(1/30)	37
第3図 全調査区配置図(2)(1/4000)	10	第33図 土壌127(1/30)	38
第4図 『窪木遺跡2』調査区およびグリッド設定図 (1/3000)	11	第34図 土壌128(1/30)	38
第5図 遺跡位置図	13	第35図 土壌129(1/30)・出土遺物(1/2)	38
第6図 周辺主要遺跡分布図(1/40000)	14	第36図 土壌130(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	39
第7図 Y A 2 A 区西壁土層断面図(1/80)	17	第37図 土壌131(1/30)	39
第8図 窪木遺跡2地形概略図(1/4000)	17	第38図 土壌132(1/30)	39
第9図 土壌124(1/30)・出土遺物(1/4)	18	第39図 土壌133(1/30)	40
第10図 縄文時代遺構全体図(1/1000)	18	第40図 土壌134(1/30)・出土遺物(1/4)	40
第11図 斜面堆積1・2平面図(1/300)	19	第41図 土壌135(1/30)	41
第12図 斜面堆積1・2断面図(1/80)	20	第42図 土壌136(1/30)・出土遺物(1/4)	41
第13図 斜面堆積1出土遺物(1)(1/4)	21	第43図 土壌137(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	41
第14図 斜面堆積1出土遺物(2)(1/4)	22	第44図 土壌138(1/30)	42
第15図 斜面堆積1出土遺物(3)(1/4)	23	第45図 土壌139(1/30)	42
第16図 斜面堆積1出土遺物(4)(1/4)	24	第46図 土壌140(1/30)	42
第17図 斜面堆積1出土遺物(5)(1/4)	25	第47図 土壌141(1/30)・出土遺物(1/4)	42
第18図 斜面堆積1出土遺物(6)(1/2・1/3)	26	第48図 土壌142(1/30)・出土遺物(1/4)	43
第19図 斜面堆積2出土遺物(1/4)	26	第49図 土壌143(1/30)	43
第20図 トレンチ1東壁断面図(1/80)	27	第50図 土壌144(1/30)	43
第21図 その他の出土遺物(縄文時代後期)(1/2・1/4)	27	第51図 土壌145(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	44
第22図 その他の出土遺物(縄文時代晩期)(1/4)	27	第52図 土壌146(1/30)	44
第23図 弥生時代遺構全体図(1)(Y A 1・2・3区北半、H C 1・ 2・6区)(1/300)	29・30	第53図 土壌147(1/30)	44
第24図 弥生時代遺構全体図(2)(1/1800)	31	第54図 土壌148(1/30)	45
第25図 弥生時代遺構全体図(3)(Y A 3区南半・5区) (1/300)	32	第55図 土壌149(1/30)	45
第26図 弥生時代遺構全体図(4)(H C 3・4区)(1/300)	33	第56図 土壌150(1/30)	45
第27図 弥生時代遺構全体図(5)(H C 3区南半)(1/300)	34	第57図 溝152~154・156~160断面図(1/30)・溝 153・157 出土遺物(1/2・1/4・1/3)	46
第28図 竪穴住居28(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	35	第58図 溝155(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	47
第29図 竪穴住居29(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	36	第59図 溝161断面図(1/60)	47
第30図 建物58(1/60)・出土遺物(1/2)	37	第60図 溝162断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	47
		第61図 溝163断面図(1/30)	47
		第62図 竪穴住居30(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	49
		第63図 竪穴住居31(1/60)・出土遺物(1/4・1/3・1/2・1/1)	50

第64図	竪穴住居32(1/60)・出土遺物(1)(1/4) ……………	51	第101図	土壙167(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	70
第65図	竪穴住居32出土遺物(2)(1/2) ……………	52	第102図	土壙168(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	70
第66図	竪穴住居32出土遺物(3)(1/3) ……………	53	第103図	土壙169(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	71
第67図	竪穴住居33(1/60) ……………	53	第104図	土壙170(1/60)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	71
第68図	竪穴住居34(1/60)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	54	第105図	土壙171(1/30) ……………	72
第69図	竪穴住居35(1/60)・出土遺物(1/3・1/4・1/2) ……………	55	第106図	土壙172(1/30) ……………	72
第70図	竪穴住居36(1/60)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	56	第107図	土壙173(1/30)・出土遺物(1/2) ……………	72
第71図	竪穴住居37(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	57	第108図	土壙174(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	73
第72図	竪穴住居38(1/60) ……………	58	第109図	土壙175(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	73
第73図	竪穴住居39(1/60) ……………	58	第110図	土壙176(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	74
第74図	建物59(1/60)・出土遺物(1/2) ……………	59	第111図	土壙177(1/30) ……………	74
第75図	建物60(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	60	第112図	土壙178(1/30) ……………	74
第76図	袋状土壙29(1/30) ……………	60	第113図	土壙179(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	74
第77図	袋状土壙30(1/30)・出土遺物(1/2) ……………	60	第114図	土壙180(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	75
第78図	袋状土壙31(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	61	第115図	土壙181(1/30) ……………	75
第79図	袋状土壙32(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	61	第116図	土壙182(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	75
第80図	袋状土壙33(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	62	第117図	土壙183(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	76
第81図	袋状土壙34(1/30) ……………	62	第118図	土壙184(1/30) ……………	76
第82図	袋状土壙34出土遺物(1/4) ……………	63	第119図	土壙185(1/30)・出土遺物(1/2) ……………	76
第83図	袋状土壙35(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	63	第120図	土壙186(1/30) ……………	77
第84図	土壙151(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	64	第121図	土壙187(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	77
第85図	土壙152(1/30) ……………	64	第122図	火処5(1/30) ……………	77
第86図	土壙153(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	64	第123図	柱穴出土遺物(1)(P1)(1/2) ……………	77
第87図	土壙154(1/30) ……………	65	第124図	柱穴出土遺物(2)(P2~P4)(1/4) ……………	78
第88図	土壙155(1/30) ……………	65	第125図	溝164断面図(1/30)・出土遺物(1/2) ……………	78
第89図	土壙156(1/30)・出土遺物(1/4・1/3・1/2) ……………	66	第126図	溝165断面図(1/80) ……………	78
第90図	土壙157(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) ……………	66	第127図	溝165出土遺物(1)(1/4) ……………	79
第91図	土壙158(1/30) ……………	67	第128図	溝165出土遺物(2)(1/4) ……………	80
第92図	土壙159(1/30) ……………	67	第129図	溝165出土遺物(3)(1/4) ……………	81
第93図	土壙160(1/30) ……………	67	第130図	溝165出土遺物(4)(1/3) ……………	81
第94図	土壙161(1/30) ……………	67	第131図	溝165出土遺物(5)(1/2) ……………	82
第95図	土壙162(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	67	第132図	溝166断面図(1/60) ……………	82
第96図	土壙163(1/30) ……………	68	第133図	溝166出土遺物(1)(1/4) ……………	83
第97図	土壙164(1/30) ……………	68	第134図	溝166出土遺物(2)(1/4) ……………	84
第98図	土壙165(1/30)・出土遺物(1)(1/2) ……………	68	第135図	溝166出土遺物(3)(1/2・1/3・1/6) ……………	85
第99図	土壙165出土遺物(2)(1/4) ……………	69	第136図	溝166出土遺物(4)(1/4) ……………	86
第100図	土壙166(1/30) ……………	69	第137図	溝166出土遺物(5)(1/6) ……………	87
			第138図	溝167断面図(1/30) ……………	87

第139図	溝168断面図(1/30)	87	第174図	竪穴住居44・45(1/60)・出土遺物(1)(1/4)	112
第140図	溝169断面図(1/80)	87	第175図	竪穴住居44・45出土遺物(2)(1/1・1/3・1/4)	113
第141図	溝169出土遺物(1/2・1/4)	88	第176図	建物61(1/60)・出土遺物(1/3)	113
第142図	溝170断面図(1/60)	88	第177図	建物62(1/60)	113
第143図	溝171断面図(1/80)	88	第178図	土壙188(1/30)・出土遺物(1/4)	114
第144図	溝171出土遺物(1/4・1/6)	89	第179図	土壙189(1/30)	114
第145図	溝172断面図(1/30)	90	第180図	土壙190(1/30)	114
第146図	溝173断面図(1/60)	90	第181図	土壙191(1/30)	115
第147図	溝174断面図(1/60)	90	第182図	土壙192(1/30)・出土遺物(1/4)	115
第148図	溝175断面図(1/60)・出土遺物(1/2)	90	第183図	柵列状遺構17(1/60)	115
第149図	護岸状遺構(1/30)・出土遺物(1/2・1/3)	91	第184図	溝176断面図(1/30)・出土遺物(1/3)	116
第150図	石列(1/30)	92	第185図	溝177・178断面図(1/60)・溝177出土遺物(1/4)	116
第151図	H C 2 B 区北壁断面図(1/60)	92			
第152図	その他の出土遺物(弥生時代1)(1/4)	93	第186図	溝179断面図(1/60)・出土遺物(1)(1/4・1/3・1/1)	117
第153図	その他の出土遺物(弥生時代2)(1/4)	94			
第154図	その他の出土遺物(弥生時代3)(1/3・1/1)	94	第187図	溝179出土遺物(2)(1/4)	118
第155図	その他の出土遺物(弥生時代4)(1/2)	95	第188図	溝179出土遺物(3)(1/4)	119
第156図	その他の出土遺物(弥生時代5)(1/2)	96	第189図	溝179出土遺物(4)(1/4)	120
第157図	その他の出土遺物(弥生時代6)(1/2)	97	第190図	溝179出土遺物(5)(1/4)	121
第158図	その他の出土遺物(弥生時代7)(1/2)	98	第191図	溝179出土遺物(6)(1/4)	122
第159図	その他の出土遺物(弥生時代8)(1/2・1/1・1/3)	99	第192図	溝179出土遺物(7)(1/4)	123
			第193図	溝179出土遺物(8)(1/4)	124
第160図	その他の出土遺物(弥生時代9)(1/3)	100	第194図	溝180断面図(1/20)	124
第161図	竪穴住居40(1/60)	101	第195図	溝181断面図(1/20)	124
第162図	古墳時代遺構全体図(1)(1/1800)	102	第196図	溝182断面図(1/30)・出土遺物(1/4)	125
第163図	古墳時代遺構全体図(2)(Y A 2 A・3~5区、 H C 1 A 区)(1/300)	103・104	第197図	溝183断面図(1/30)・出土遺物(1/4)	125
第164図	古墳時代遺構全体図(3)(H C 4・5区)(1/300)	105	第198図	溝184(1/30)	125
第165図	古墳時代遺構全体図(4)(H C 3区南半)(1/300)	106	第199図	溝184出土遺物(1/4)	126
			第200図	溝185断面図(1/60)・出土遺物(1/4・1/6)	126
第166図	竪穴住居40出土遺物(1/4)	107	第201図	溝186(1/60)・出土遺物(1)(1/3・1/4)	127
第167図	竪穴住居41(1/60)	107	第202図	溝186出土遺物(2)(1/4・1/6)	128
第168図	竪穴住居41出土遺物(1/4・1/3・1/1・1/2)	108	第203図	溝187出土遺物(1/4・1/6)	129
第169図	竪穴住居41カマド(1/30)	109	第204図	溝188断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	130
第170図	竪穴住居42(1/60)	109	第205図	溝189断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	130
第171図	竪穴住居42出土遺物(1)(1/4)	110	第206図	溝190断面図(1/30)	131
第172図	竪穴住居42出土遺物(2)(1/6)	110	第207図	その他の出土遺物(古墳時代1)(1/4・1/3)	131
第173図	竪穴住居43(1/60)・出土遺物(1/3・1/4)	111	第208図	その他の出土遺物(古墳時代2)(1/4)	132
			第209図	古代遺構全体図(1)(1/1800)	134

第210図	古代遺構全体図(2)(YA 2 A・2 B区、HC 1 A区)(1/300) ……………	135・136	第243図	土壌204(1/30) ……………	158
第211図	古代遺構全体図(3)(YA 3区南半・5区)(1/300) ……………	137	第244図	土壌205(1/30) ……………	158
第212図	中世・近世遺構全体図(1)(1/1800) ……………	138	第245図	柱穴5(P 5)(1/30)・出土遺物(1/4・1/3) ……………	159
第213図	中世・近世遺構全体図(2)(YA 1・2A・2B区、HC 1 A・6区)(1/500) ……………	139	第246図	柱穴6(P 6)(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	159
第214図	中世・近世遺構全体図(3)(YA 3区南半・5区、HC 3区)(1/500) ……………	140	第247図	柵列状遺構18(1/60)・出土遺物(1/2) ……………	159
第215図	建物63(1/60) ……………	141	第248図	溝191断面図(1/60)・出土遺物(1/4・1/3) ……………	160
第216図	建物64(1/60) ……………	142	第249図	溝192~196断面図(1/60)、溝192・195出土遺物(1/4) ……………	160
第217図	建物65(1/60) ……………	143	第250図	溝197~201断面図(1/60)、溝196・197・199出土遺物(1/4) ……………	161
第218図	建物66(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	144	第251図	溝202断面図(1/60)・出土遺物(1)(1/3) ……………	162
第219図	建物67(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	145	第252図	溝202出土遺物(2)(1/4) ……………	163
第220図	建物68(1/60) ……………	146	第253図	溝202出土遺物(3)(1/4) ……………	164
第221図	建物69出土遺物(1/4) ……………	146	第254図	溝202出土遺物(4)(1/4) ……………	165
第222図	建物69・70、柱穴列A・B・C、土壌195~198(1/80) ……………	147・148	第255図	溝203~207断面図(1/30)、溝204・206出土遺物(1/4) ……………	166
第223図	建物70、P-19(1/20)・出土遺物(1/4) ……………	149	第256図	溝208・222・223(1/300) ……………	167
第224図	柱穴列B、P-28(1/20)・出土遺物(1/4) ……………	149	第257図	溝208断面図(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	167
第225図	建物71(1/60) ……………	150	第258図	溝209~216断面図(1/30) ……………	168
第226図	建物72(1/60) ……………	150	第259図	溝217断面図(1/30) ……………	169
第227図	建物73(1/60) ……………	151	第260図	溝218・219断面図(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	169
第228図	建物74(1/60) ……………	151	第261図	溝220断面図(1/30) ……………	169
第229図	建物75(1/60) ……………	152	第262図	溝221断面図(1/30) ……………	169
第230図	建物76(1/60) ……………	152	第263図	溝222断面図(1/60) ……………	170
第231図	建物77(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	152	第264図	溝223断面図(1/60) ……………	170
第232図	土壌193(1/30) ……………	153	第265図	斜面堆積 3 断面図(1/80) ……………	170
第233図	土壌194(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	153	第266図	斜面堆積 3 出土遺物(1)(1/4) ……………	171
第234図	土壌195(1/10)・出土遺物(1/4) ……………	154	第267図	斜面堆積 3 出土遺物(2)(1/4) ……………	172
第235図	土壌196(1/10)・出土遺物(1/4) ……………	154	第268図	斜面堆積 3 出土遺物(3)(1/4・1/3) ……………	173
第236図	土壌197(1/10)・出土遺物(1/4) ……………	155	第269図	その他の出土遺物(古代・中世・近世1)(1/3) ……………	174
第237図	土壌198(1/10)・出土遺物(1/4・1/3) ……………	155	第270図	その他の出土遺物(古代・中世・近世2)(1/4) ……………	175
第238図	土壌199(1/10)・出土遺物(1/4) ……………	156	第271図	その他の出土遺物(古代・中世・近世3)(1/4) ……………	176
第239図	土壌200(1/10)・出土遺物(1/4) ……………	157	第272図	その他の出土遺物(古代・中世・近世4)(1/4) ……………	177
第240図	土壌201(1/30) ……………	157	第273図	その他の出土遺物(古代・中世・近世5)(1/4) ……………	178
第241図	土壌202(1/30) ……………	157	第274図	その他の出土遺物(古代・中世・近世6)(1/4) ……………	179
第242図	土壌203(1/30) ……………	158	第275図	その他の出土遺物(古代・中世・近世7)(1/4) ……………	180
			第276図	その他の出土遺物(古代・中世・近世8)(1/3) ……………	181
			第277図	その他の出土遺物(古代・中世・近世9)(1/6・1/4) ……………	

1/2・1/3)	182
第278図 斜面堆積1出土土器(1/4)	186
第279図 南溝手遺跡・窪木遺跡の弥生時代前期遺構概略 図(1/4000)	188
第280図 南溝手遺跡・窪木遺跡の弥生時代中期後葉～後	

期前葉遺構概略図(1/2500)	190
第281図 南溝手遺跡・窪木遺跡出土弥生時代中期前葉～ 中葉の土器(1/10)	194
第282図 「窪木・山陰川」法量分布図	207
第283図 各遺跡出土土器法量分布図	208

表 目 次

第1表 編年対比表	凡例
第2表 全調査一覧表(南溝手遺跡・窪木遺跡)	8
第3表 第4分冊掲載対象調査区一覧表	9
第4表 南溝手遺跡および窪木遺跡出土石器・石製品 一覧表	201
第5表 石鎌の長さによる分布範囲	202
第6表 焼失住居の数	206
第7表 窪木遺跡出土緑釉陶器一覧表	214

第8表 窪木遺跡出土灰釉陶器一覧表	216
第9表 竪穴住居一覧表	257
第10表 建物一覧表	257
第11表 土製品一覧表	257
第12表 石器・石製品一覧表	259
第13表 土器観察表	263
第14表 新旧遺構名称対照表	283

図 版 目 次

巻頭図版1-1. 縄文時代後期の土器(斜面堆積1)	
- 2. 縄文時代後期の土器(斜面堆積1)	
巻頭図版2-1. 弥生時代中期の竪穴住居29(南西から)	
- 2. 弥生時代の石製勾玉・管玉・玉未製品、 古墳時代の管玉	
- 3. 弥生時代の打製石包丁	
巻頭図版3-1. 古代の建物63～68、溝196(南から)	
- 2. 古代の建物63～66(南から)	
巻頭図版4-1. 古代の建物69(北から)	
- 2. 古代の土壌195(北東から)	
巻頭図版5-1. 陶馬	
- 2. 白磁・青磁	
巻頭図版6-1. 灰釉陶器(溝202、斜面堆積3、その他)	
- 2. 灰釉陶器(その他)	
巻頭図版7-1. 緑釉陶器(溝202)	
- 2. 緑釉陶器(斜面堆積3)	
巻頭図版8-1. 緑釉陶器(その他)	

- 2. 緑釉陶器(その他)	
図版1 遺跡周辺の地形(航空写真;1985年)	
図版2-1. 斜面堆積1断面(YA3区、南東から)	
- 2. 斜面堆積1(HC2B・YA3区、南西から)	
- 3. 斜面堆積1(HC2A区、北西から)	
図版3-1. 竪穴住居28(YA2A区、北東から)	
- 2. 竪穴住居29(YA2B区、南西から)	
- 3. 竪穴住居30(YA2A区、東から)	
図版4-1. 竪穴住居31(HC1A区、東から)	
- 2. 竪穴住居32(HC1A区、南西から)	
- 3. 竪穴住居34(YA2A区、西から)	
図版5-1. 竪穴住居35(YA2A区、東から)	
- 2. 竪穴住居37(YA3区、南西から)	
- 3. 竪穴住居38(HC3区、東から)	
図版6-1. 竪穴住居39(HC3区、北から)	
- 2. 袋状土壌33(YA5区、西から)	
- 3. 袋状土壌34(YA5区、東から)	

- 図版7-1. 土塙165 (HC1A区、南西から)
 - 2. 土塙170 (YA2A区、東から)
 - 3. 土塙175 (YA2B区、北東から)
- 図版8-1. 土塙182 (YA3区、東から)
 - 2. 土塙183 (YA3区、南から)
 - 3. 溝162・165 (YA2B区、南西から)
- 図版9-1. 溝166 (YA3・HC2B区、南西から)
 - 2. 溝166木器出土状況 (YA3区、西から)
 - 3. 溝170・208 (HC4区、北から)
- 図版10-1. 溝171・187 (HC4区、北西から)
 - 2. 護岸状遺構 (HC5区、北から)
 - 3. 竪穴住居40・41 (YA3区、西から)
- 図版11-1. 竪穴住居41のカマド (YA3区、北から)
 - 2. 竪穴住居42 (YA3区、北東から)
 - 3. 竪穴住居42 (YA3区、北東から)
- 図版12-1. 竪穴住居43 (YA3区、南から)
 - 2. 竪穴住居44・45 (YK区、西から)
 - 3. 土塙192 (YA3区、西から)
- 図版13-1. 溝176・177 (YA2A区、北から)
 - 2. 溝179 (YA2A区、南から)
 - 3. 溝179断面 (YA2区、南から)
- 図版14-1. 溝183 (YA3区、西から)
 - 2. 溝184 (YA3区、西から)
 - 3. 溝185木器出土状況 (YA4区、西から)
- 図版15-1. 溝186 (HC5区、北西から)
 - 2. 溝188・189 (HC3区、西から)
 - 3. 古墳時代の水田 (YA4区、南から)
- 図版16-1. 建物67・68 (YA2A区、北から)
 - 2. 建物68 (YA2A区、南から)
 - 3. 建物68、P-11 (YA2A区、東から)
- 図版17-1. 建物68、P12 (YA2A区、西から)
 - 2. 建物70、P-19 (YA2A区、南西から)
- 3. 建物71 (YA3区、西から)
- 図版18-1. 建物72 (YA3区、北から)
 - 2. 建物73 (YA3区、北から)
 - 3. 建物75 (YA3区、南から)
- 図版19-1. 土塙196 (YA2A区、南東から)
 - 2. 土塙197 (YA2A区、東から)
 - 3. 土塙198 (YA2A区、南西から)
- 図版20-1. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)
 - 2. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)
- 図版21-1. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)
 - 2. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)
- 図版22-1. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)
 - 2. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)
- 図版23 弥生時代の土器
- 図版24 古墳時代の土器 (溝179出土)
- 図版25-1. 古代の土器 (土塙195・196・197・198出土)
 - 2. 古代の土器 (溝202出土)
 - 3. 古代の土器 (斜面堆積3出土)
- 図版26-1. 縄文時代後期の石器 (斜面堆積1出土)
 - 2. 弥生時代中期の石器 (竪穴住居28出土)
- 図版27-1. 弥生時代中期の石器 (竪穴住居32出土)
 - 2. 弥生時代中期の石器 (溝165・166出土)
- 図版28-1. 弥生時代の打製石包丁
 - 2. 弥生時代の大型蛤刃石斧
- 図版29-1. 弥生時代の石斧
 - 2. 土製品、古銭、石器、木鏃
- 図版30-1. 弥生時代・古墳時代の土製品
 - 2. 古代の陶硯
- 図版31-1. 古代・中世の土製品
 - 2. 古墳時代・古代・中世の鉄器
- 図版32-1. 古代・中世の鉄器
 - 2. 土製品 (羽口)

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

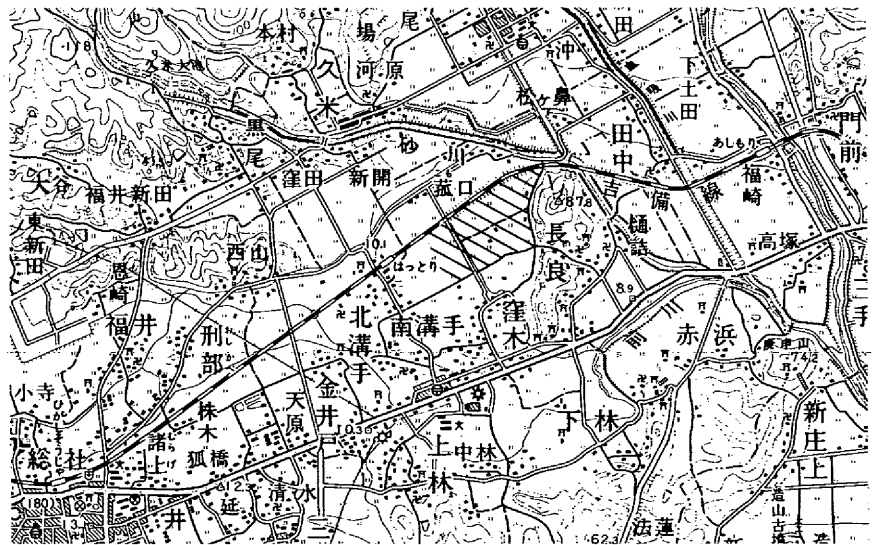
第1節 発掘調査の契機

これまで岡山県が大学教育にかかわってきたのは、岡山県立短期大学のみであり、早くから4年制大学の設立を望む県民の声があがっていた。県当局としては、1986(昭和61)年11月10日、『岡山県高等教育検討委員会(会長：小坂淳夫重井医学研究所付属病院院長)』を設置。全体会議3回、専門委員会7回の開催を経て、1987(昭和62)年12月21日、『岡山県高等教育検討委員会』から「岡山県における高等教育機関整備の基本的なあり方」についての答申があった。これをうけて、1988(昭和63)年5月、岡山県総務部に高等教育整備対策室が設置され、ここに初めて行政的窓口が開かれる。同年9月30日、『県立大学構想検討委員会(会長：高橋克明岡山大学学長)』を設置。全体会議6回、分科会14回を重ね、1989(平成元)年8月2日、『県立大学構想検討委員会』から「県立大学の基本構想について」の答申がなされた。

その建設地が総社市窪木・同南溝手にわたる水田地帯、約31haと決定したのは、1989(平成元)年12月であった。予定地は、北辺がほぼJR吉備線で、東辺が長良山、西と南は新設の道路によって、囲まれる。建設前のこの一帯は「備中国服部郷図」が今なお残る広びろとした水田地帯であり、もし備中国府関連の遺構群に当たれば保存処置に腐心せざるを得なくなるだろう、と当初から予測された。したがって1日も早く、遺跡の概要をつかむ必要があったのである。

県事業に起因する発掘調査を担う、調査第一課は、平成元年度の事業として'90(平成2)年3月1日から同月13日まで、柳瀬昭彦課長補佐を責任者とし内藤善史文化財保護主任、椿真治主事などを配して、さっそく第一次の試掘調査にとりかかった。それは、広大な敷地全域にわたって、長さ5m、幅2mの試掘坑を合計49カ所に設定して掘削し、土層関係や出土遺物を検証しながら、古地形の復元、および各時代にわたる

遺構の粗密関係などをとらえようとするものであった。およそ2週間で所期の目的を果たすことができた試掘調査の結果によれば、遺物の出土は、量的な多寡の違いはあってもいずれの試掘坑からも見られ、全面調査の必要があると判断された。また、幅約40mの旧河道が北西方向から東流しつつ南西方向へと走流する



第1図 岡山県立大学の位置(斜線部分)(1/50,000)

こと、および北東部においてかなり広い湿地帯が形成されているらしいなど、古環境についてもある程度の所見を得た。

年度の改まった1990(平成2)年4月、高等教育整備対策室を県立大学建設準備室に改組。この年から本格調査に着手することになり、柳瀬課長補佐に加え桑田俊明、小松原基弘、川崎新太郎、横山定、竹原伸之などの調査員が配属されて、まず計画変更の少ないと思われる管理棟1,585㎡および本部棟1,906㎡と図書館1,853㎡をとりあえず本年度の調査対象地とすることに決した。しかしなおこの段階においては、全体構想についての基本設計が描かれていたとはいえ、細かな実施設計を成し遂げるまでには至っていなかったため建設計画が煮つまるにつれ、管理棟予定地が変更となり、結果的には建物の建設地にならなかった。

1990(平成2)年10月に至ってようやく実施計画が固まった。県立大学建設準備室から年度当初の計画を大幅に上回る事業計画が急にもちこまれた。それは、アトリエ棟、デザイン学部棟、情報工学部棟、学生会館、北学部共通棟、合わせて約9,100㎡もの対象地を平成2年度の第4四半期中に完掘してほしいというものであった。所長をはじめ幹部職員は、それぞれ年間事業を推進しつつある段階において突如として持ち込まれたこの要望に、一様に頭をかかえこんだことはいうまでもない。とはいえ、県立大学の建設は県政の最重点施策であり、なんとしても期待にそうべく努力するほかはない、と全体計画の見直しを図りはじめた。ところが、いずれの調査現場も一人として余分な調査員を配属しているわけがなく、思案のすえ調査員数の多い山陽自動車道関連の遺跡にかかわっていた調査第二課の職員を、配転するほかはないという結論に達し、平成3年1月の年度途中から調査員15名の大部隊を送り込む異例の処置をとらざるを得なかったのである。こうして、この最大の難局をどうにか乗り切ることができたといってよい。

年度の明けた1991(平成3)年4月1日からは、ひき続き調査第一課の重点事業の一つとして位置づけがなされ、常時10名の調査員が現地に張りつき、調査を継続する計画が立てられた。おもな調査地としては、南学部共通棟、保健福祉学部棟、短期大学部に加え、学部棟と一体的な付帯施設としてのエネルギーセンターや浄化槽のほか、やがて各建物をむすぶ共同溝と排水溝の予定地などがあがってきた。なかでも、各学部棟を連結する共同溝は、平均7mもの幅をもって延々と伸び連なるもので、調査対象地の大幅な増加をもたらした。また保健福祉学部棟は6階建てで建設工事がおよそ14~15ヵ月を要するとのことである。そうであれば1993(平成5)年4月1日開学を実現するには、逆算すると平成3年9月までが調査の許容限度となる。そこで、9月にもまたふたたび大きな山場を迎えたため、この年にも調査第二課からの助力をあおぐとともに総社市や北房町から専門職員の応援を求めるなどして、どうにか新たな難局を切り抜けることができた。

継続事業となった1992(平成4)年度は、別添組織表に記したとおり10名の調査員が担い、常時9名4班集体で取り組むこととなった。すでに昨年において、主要建物の敷地に関してはほぼ全体にわたって調査を完了したばかりでなく、建物間を結ぶ共同溝・排水溝の一部にも着手していたので、この年は共同溝の残部分と正面の堀割、中道川および山陰川の付け替えに伴う場所が主要な調査対象地となったほか、部室棟、プールの建設地、渡り廊下部分についての発掘調査が加わった。これら調査面積の合計は約15,000㎡。ちなみに足掛3年間にわたって実施した、この事業にかかわる発掘調査面積はおよそ60,000㎡におよぶ結果となった。

(葛原)

第2節 発掘調査の体制

岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部の建設に伴う発掘調査は、岡山県教育委員会が岡山県総務部から依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成元年度に確認調査を、そして平成2年度から4年度にかけて全面調査を実施した。

今回報告する窪木遺跡の調査については、平成2年度から平成4年度にかけて実施したものである。平成3年度の調査においては、北房町教育委員会の専門職員の応援を得た。

また発掘調査および報告書作成にあたっては、遺跡の保護・保存ならびに発掘調査にあたっての専門的な指導・助言を得るために、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱した(例言参照)。

発掘調査

1989(平成元)年度

岡山県教育委員会

教育長 竹内康夫

教育次長 竹本博明

文化課

課長 鬼澤佳弘

課長代理 河野 衛

課長補佐(埋蔵文化財係長) 伊藤 晃

主 査 藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 長瀬日出明

次 長 河本 清

(総務課)

課 長 竹原成信

課長補佐(総務係長) 藤本信康

(調査第一課)

(課長事務取扱) 河本 清

第一係

課長補佐(第一係長) 柳瀬昭彦

文化財保護主任 内藤善史

主 事 椿 真治

1990(平成2)年度

岡山県教育委員会

教育長 竹内康夫

教育次長 杉井道夫

文化課

課 長 鬼澤佳弘

課長代理 光吉勝彦

課長補佐(埋蔵文化財係長) 伊藤 晃

主 査 藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 長瀬日出明

次 長 河本 清

(総務課)

課 長 竹原成信

課長補佐(総務係長) 藤本信康

主 任 平松郁男

(調査第一課)

(課長事務取扱) 河本 清

第一係

課長補佐(第一係長) 柳瀬昭彦

文化財保護主任 桑田俊明

文化財保護主事 小松原基弘

文化財保護主事 川崎新太郎

主 事 横山 定

主 事 竹原伸之

(調査第二課)

課 長 葛原克人

第一係

文化財保護主任 光永真一

文化財保護主事 広瀬隆明

文化財保護主事 安井 悟

第二係

文化財保護主査 中野雅美

文化財保護主事 福田計治

主 事 久保恵里子

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

第三係
 第三係長 岡田 博
 文化財保護主査 野上和信
 文化財保護主事 栗尾昭和
 (調査第三課)
 課 長 正岡陸夫
 第一係
 文化財保護主査 江見正己

文化財保護主任 平井泰男
 文化財保護主任 川崎 肇
 文化財保護主事 平松義則
 主 事 横山伸一郎
 第二係
 文化財保護主査 岡本寛久
 文化財保護主任 吉久正見

1991(平成3)年度

岡山県教育委員会
 教 育 長 竹内康夫
 教育次長 森崎岩之助
 文化課
 課 長 鬼澤佳弘(1991年12月まで)
 渡邊淳平(1992年1月から)
 課長代理 大橋義則
 課長補佐(埋蔵文化財係長) 柳瀬昭彦
 主 査 時長 勇
 岡山県古代吉備文化財センター
 所 長 横山常實
 次 長 河本 清
 (総務課)
 課 長 藤本信康

課長補佐(総務係長) 小西親男
 主 査 平松郁男
 (調査第一課)
 課 長 葛原克人
 第一係
 課長補佐(第一係長) 松本和男
 文化財保護主任 桑田俊明
 文化財保護主任 平井泰男
 文化財保護主任 光永真一
 文化財保護主事 川崎新太郎
 文化財保護主事 大橋雅也
 文化財保護主事 柴田英樹
 主 事 久保恵里子
 主 事 守屋佳慶

1992(平成4)年度

岡山県教育委員会
 教 育 長 竹内康夫
 教育次長 森崎岩之助
 文化課
 課 長 渡邊淳平
 課長代理 松井新一
 課長補佐(埋蔵文化財係長) 柳瀬昭彦
 主 査 時長 勇
 岡山県古代吉備文化財センター
 所 長 横山常實
 次 長 河本 清
 文化財保護参事 葛原克人
 (総務課)
 課 長 北原 求

課長補佐(総務係長) 小西親男
 主 査 石井 茂
 (調査第一課)
 (課長事務取扱) 葛原克人
 文化財保護主幹 松本和男
 第二係
 課長補佐(第二係長) 岡田 博
 文化財保護主任 平井泰男
 文化財保護主任 光永真一
 文化財保護主任 三上修二
 文化財保護主事 川崎新太郎
 主 事 竹原伸之
 主 事 久保恵里子
 主 事 長門 修

市町村専門職員協力者

総社市教育委員会 高田明人 前角和夫 高橋進一
 北房町教育委員会 島田宮子

発掘調査協力者

難波雅志 浜本雅樹 大谷博志 山田悌史 藤岡耕一 錦戸 正

第3節 発掘調査の経過

1. 確認調査

(1) 一次調査

岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、県教育委員会と県総務部との間で事前協議を重ねたが、その時点では予定敷地内の埋蔵文化財の存在は、総社市教育委員会による備中国府跡緊急確認調査で部分的に周知されていたに過ぎなかった。県教育委員会は、平成5年4月開校予定のこの事業については一連の工事工程を勘案すれば、早急に用地内の埋蔵文化財の状況を把握する必要があると判断し、協議をすすめた結果、予定用地内全域を対象にしてトレンチによる調査に入ることとなった。

調査は、現在の田面レベルから想定される旧地形を参考にして、約30～100m間隔に2×5mのトレンチを45か所設定し、人力で掘り下げる方法を取り、さらに調査の過程で補足トレンチを4か所追加し(調査面積計465㎡)、調査期間は平成2年3月2日～3月13日を要した。

調査の結果、大局的には微高地・旧河道(低位部を含む)・湿地とに3区分できる土層観察を得た。また、弥生時代前期の竪穴住居や溝などの遺構および縄文時代晩期から中・近世に至る遺物を検出することができた。

(2) 二次調査

一次調査の結果を踏まえ、基本的には校舎等の恒久構造物および工事掘削にかかる部分について調査を実施する必要があるとの結論に達し、平成2年4月から本調査を実施することとなった。調査の過程で、11月になって用地の南西部分にあたる調整池の設置設計が示されたため、掘削を伴う約2万㎡を対象にしての確認調査(二次調査)が必要になった。

この地点は、一次調査では微高地と旧河道の存在が予測されていたが、掘削予定レベルと各地点での遺跡の上面レベルとの関係をより詳細に把握する必要があると判断し、予定地に設定した10mのグリッドを基にして計51か所を調査の対象とした。トレンチは1×1.5m、深さ1m前後の最小規模にとどめ、重機を使用した。調査の期間は、平成2年11月16・17日の2日間を要した。調査の結果、旧河道は予測よりもかなり蛇行して対象地内に存在するようで、微高地はそれに分断される形で2か所に広がっていることが判明した。実施設計の掘削予定レベルは、調整池の西側(以下西区)が海拔8.85m、東側(以下東区)が同8.20mであり、断面図と照合すると、西区の西半分では包含層上面が辛うじて遺存し、同東半部では表土あるいは床土内でどうか削平がおさまること、東区は微高地のほとんどの部分で包含層あるいは、遺構上面に削平を受けることが看取された。

県教育委員会は、以上の結果を基に最小限の掘削に留めて遺跡に影響が及ばないように、県総務部に設計変更を申し入れた。その後県総務部から、西区は西南部で海拔8.95m、中央部で同8.85m、東端部で同8.75mとして地形に沿って表土を剥ぐ程度の掘削に留め、東区は全体に30cm上げて海拔8.50m、一部南西端は同8.60mにし、調整池の容量の不足分は、東区の東側を約10m拡張することと同区

南東隅に約45×20mの集水樹(底で海拔7.20m)を設置することで解消できるという設計変更案が県教育委員会に提示された。

検討協議の結果、当初計画では約2万㎡のうち6割以上について調査の必要があったが、計画変更により東区の南西隅と集水樹設置地点が発掘調査対象とならざるを得ないものの、全体の9割近くが保存されること、これ以上の設計変更は調整池の容量基準等からしてむずかしいことなどから、この設計変更案に添って発掘調査を実施することになった。

なお、トレンチの位置図や断面図など確認調査結果の詳細については、「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』(岡山県教育委員会 1995年刊)において報告している。(柳瀬)

2. 全面調査

全面調査は平成2(1990)年4月から平成5(1993)年3月まで実施した。調査対象地となったのは工事によって掘削される範囲で、おもに学部棟、図書館・講堂・体育館などの建物や用水路、共同溝、調整池などであった。このため調査区は、不定形なものや小面積のものも多かったし、また調査員の班編成との関係で同じ調査区を区分して調査を実施した地区もある。さらに発掘調査は建設工程のからみで急ぐところから着手していったため、隣り合う調査区であるにもかかわらず年度を越えて調査せざるを得ない場合もあった。

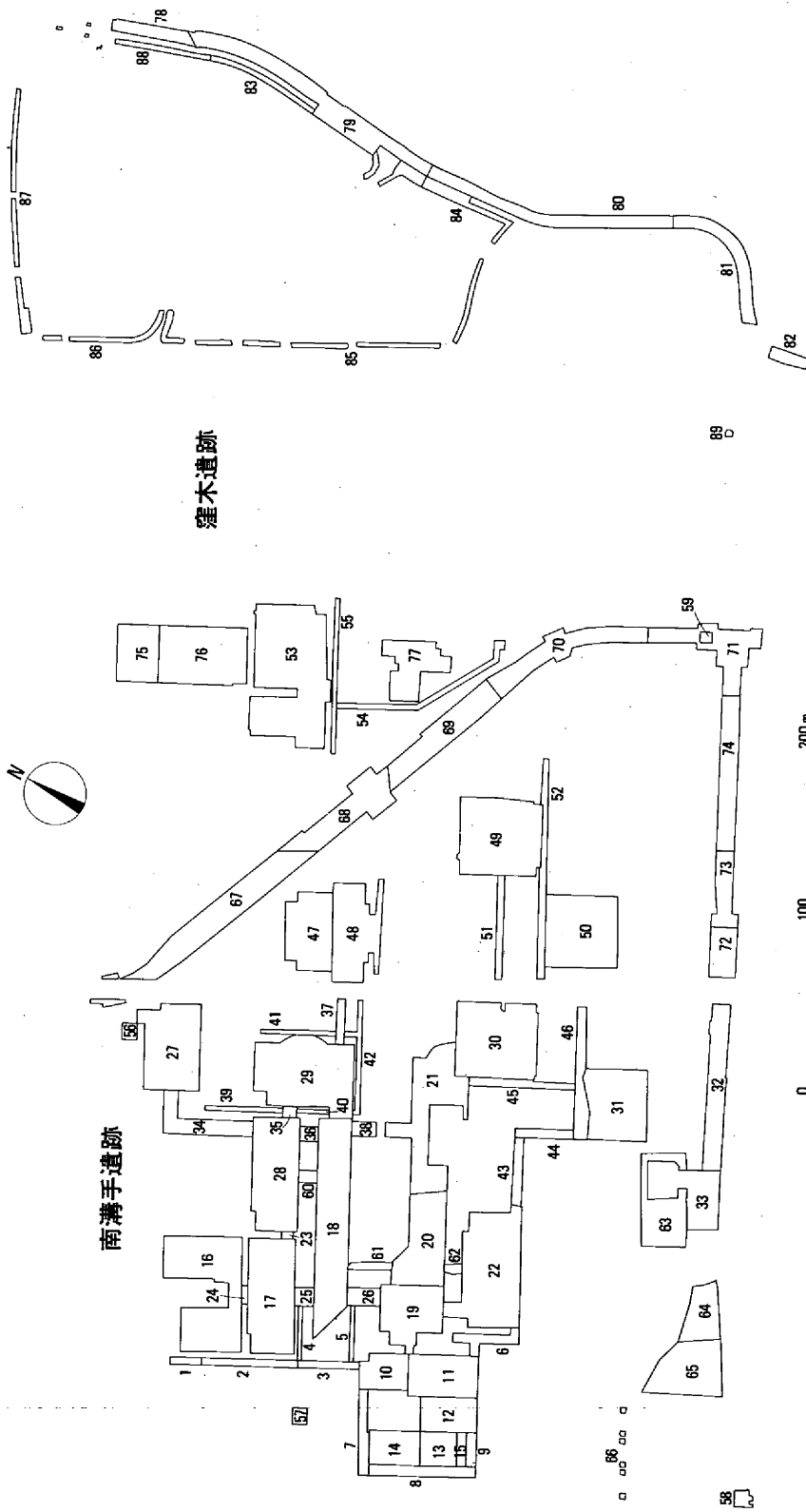
調査区の名称についてはそれぞれの工事原因名の頭文字をアルファベットで表記することにし、全体の調査区の位置および調査区名については、第2・3図に示した。また、各調査区の調査期間および面積については第2表に示した。なお、各調査区に対応する遺跡名については、現在の用地内における行政区名称に従い、南溝手遺跡と窪木遺跡の二つの名称となっている(第2図)。

発掘調査は国土座標に沿った形で基準杭を設定して行なったが、全体のグリッド割りは調査時点では実施しなかった。

また、現耕作土および近世水田層までは重機によって除去したほか、その後も深い河道の調査においては重機を使用して対応した。

発掘調査を開始した平成2年度の段階では、実施設計がなお十分に煮詰まっていなかったが、まず調査員5名の1班編成で着手した。最初に調査に入ったのは管理棟予定地(K区)であった。この調査区は調査終了間近に設計変更となり、調査はその時点で終え保存措置を行なった。その後本部棟(HO区)、図書館(TO区)の調査を進めた。ところが、平成2年10月になって、実施設計がほぼ固まるとともに開学が平成5年4月に決定されたのに伴い、建設工事期間を差し引いた発掘調査期間が決定され、アトリエ棟(AT区)やデザイン学部棟(DE区)、情報工学部棟(JY区)など主要な学部棟を含む緊急を要する調査区(約9,100㎡)が設定された。そのため急遽平成3年1月から3月までは調査員を増員し、21名による7班体制で調査終了を目指して懸命の努力を払った。DE区で弥生時代前期の住居跡から管玉の未製品や玉砥石が出土したのはこの時期である。

平成3年4月からは新しい調査員10名と北房町教育委員会の専門職員1名(6月まで)の4班体制で、各建物を結ぶ共同溝や排水路などの調査区が発掘調査を開始した。しかしその後、6階建てが計画された保健福祉学部棟(HF区)や短期大学部棟(TD区)など工事を急がざるを得ない調査区が設定されたため、これまた総社市教育委員会の専門職員3名の応援を受けるなどして、7月から9月まで6班体制でエネルギーセンター(EN区)、講堂(KO区)、あるいは浄化槽(JO区)などの調査を実施



- | | | | | | |
|-----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1~5. H1~5 (排水路) | 19~21. KY1~3 (共通棟南) | 31. JO (浄化槽) | 49. HO (本部棟) | 59. ZC1 (暫定沈砂池) | 72~74. HW1~3 (堀割) |
| 6. H10 (排水路) | 22. HF (保健福祉学部棟) | 32~33. YO1・2 (余水吐) | 50. K (管理棟予定地) | 60. WR-E (渡り廊下) | 75. PU1 (プール) |
| 7~9. H11~13 (排水路) | 23~26. K6~9 (共同溝) | 34~38. K1~5 (共同溝) | 51. K10 (共同溝) | 61. WR-A (渡り廊下) | 76. PU2・3 (プール) |
| 10~15. TD1~6 (短期大学部棟) | 27. EN (エネルギーセンター) | 39~42. H6~9 (排水路) | 52. H20 (排水路) | 62. WR-C (渡り廊下) | 77. BU (部室棟) |
| 16. AT (アトリエ棟) | 28. JY (情報工学部棟) | 43. H14 (排水路) | 53. TA (体育館) | 63~65. NC1~3 (西調整池) | 78~82. YA1~5 (山陰川) |
| 17. DE (デザイン学部棟) | 29. FU (学生会館) | 44~46. H15~17 (排水路) | 54~55. H18・19 (排水路) | 66. TE (テニスコート) | 83~88. HC1~6 (東調整池) |
| 18. IN (共通棟北) | 30. TO (図書館) | 47~48. KO1・2 (講堂) | 56~58. BO1~3 (防火水槽) | 67~71. CH1~5 (中道川) | 89. YK (野球場) |

1~46, 56~58, 60~66は南溝手遺跡 47~55, 59, 67~89は窪木遺跡

第2図 全調査区配置図(1) (1/4000)

していった。H15区から縄文時代後期後葉の靱痕土器が出土したのはこの時期である。

平成4年に入ると、西調整池(NC区)の調査に入ることとなった。この部分は遺跡内で最も遺構密度の高い地区であったが、他調査区からの応援を得て、平成4年3月にはほぼ完了することができた。この時期の調査においてNC3区では縄文時代後期中葉の土器がまとまって出土し、のちの土器胎土分析によってイネのプラント・オパールが検出された。なおNC3区のトレンチ調査で検出した縄文時代後期の集石遺構などについては、工事の影響がなくなったため図面作成、写真撮影等を実施したのち、砂によって被覆し現状凍結を図った。3月22日にはそれまでに出土したおもな遺物や、調査中であったNC区とJO区を中心とした現地説明会を開催し、約100名の人々が見学に訪れた。

平成4年4月からは、常時9名の4班を編成して発掘調査を開始した。おもな調査対象地となったのは用地内のほぼ中央を流れていた中道川の改修工事(CH区)や堀割水路(HW区)、部室棟(BU区)などに伴う調査区であった。HW区では縄文時代晩期後葉の丹塗り磨研の壺や鉢、弥生時代後期の家屋線刻絵画土器が出土し注目された。平成4年の後半は、発掘調査も大詰めに近づき、おもに用地の東に位置する山陰川の改修工事(YA区)や東調整池(HC区)とプール(PU区)の調査を行なった。この地区では、それまで少なかった奈良・平安時代の遺構や遺物が多く検出された。

こうして、平成4年12月をもってほとんどの調査区の発掘調査を終了させることができた。その後平成5年3月にはテニスコート部分の調査を2週間実施し、すべての発掘調査が完了した。

発掘調査に関わる埋蔵文化財保護対策委員会は平成2年度に3回、平成3年度に4回、平成4年度に3回開催し、その都度貴重なご助言を賜った。(平井)

調査区	調査期間	面積(m ²)	調査区	調査期間	面積(m ²)
K(管理棟予定地)	900416~900713	1,600	H20(排水路)	911025~911209	480
HO(本部棟)	900716~901127	1,906	NC3(西調整池)	920105~920331	1,063
TO(図書館)	901001~910116	1,902	TD4・5(短期大学部棟)	910812~911025	912
TA(体育館)	910107~910331	2,977	H11~13(排水路)	910701~910911	751
AT(アトリエ棟)	910107~910703	2,576	TD6(短期大学部棟)	910906~910918	97
DE(デザイン学部棟)	910107~910331	1,647	CH1(中道川)	920401~920706	1,681
FU(学生会館)	910107~910331	1,983	BU(部室棟)	920606~921009	814
JY(情報工学部棟)	910107~910331	1,683	HC3(東調整池)	920916~921211	596
IN(共通棟北)	910107~910331	2,077	HC4(東調整池)	920916~921211	212
YO2(余水吐)	910404~911015	972	HC5(東調整池)	920916~921211	430
HF(保健福祉学部棟)	910606~910920	2,106	NC2(西調整池)	920401~920408	300
BO1(防火水槽)	911011~911025	79	HW2(堀割)	920409~920618	434
H14(排水路)	911015~911022	200	HW3(堀割)	920506~920618	870
H18・19(排水路)	911018~911216	559	YA1(山陰川)	921001~921211	333
CH3(中道川)	911210~920311	1,024	YA2A(山陰川)	920715~921211	747
YO1(余水吐)	910404~910704	925	YA2B(山陰川)	920618~920714	716
BO3(防火水槽)	910512~910627	78	HC1A(東調整池)	920928~921211	189
ZC1(暫定沈砂池)	910706~910711	43	HC1B(東調整池)	920715~920805	46
KY2・3(共通棟南)	910702~911022	2,802	HC2A(東調整池)	920715~920828	148
H15~17(排水路)	911023~911213	863	HC6(東調整池)	921001~921211	172
NC1(西調整池)	911215~920331	898	CH2(中道川)	920401~920527	976
K6~9(共同溝)	910404~910513	349	CH4(中道川)	920513~920704	985
H1~5(排水路)	910510~910624	593	CH5(中道川)	920706~920930	945
BO2(防火水槽)	910512~910612	79	PU2・3(プール)	921001~921211	1,530
KY1(共通棟南)	910621~910904	1,020	HW1(堀割)	920401~920507	420
EN(エネルギーセンター)	910905~911116	1,490	YA3(山陰川)	920609~921021	1,060
KO2(講堂)	911115~920312	1,274	YA4(山陰川)	920910~921013	530
KO1(講堂)	911204~920331	774	YA5(山陰川)	921007~921021	146
K1~5(共同溝)	910404~910612	956	HC2B(東調整池)	920728~920904	265
H6~9(排水路)	910516~910619	493	YK(野球場)	921126~921210	15
TD1~3(短期大学部棟)	910604~911011	2,017	PU1(プール)	921013~921209	770
JO(浄化槽)	911009~920313	1,284	TE1~6(テニスコート)	921203~921210	54
NC2(西調整池)	920124~920331	509	WR-A(渡り廊下)	920508~920515	103
H10(排水路)	910701~910812	249	WR-C(渡り廊下)	920508~920515	58
K10(共同溝)	911025~911210	180	WR-E(渡り廊下)	920508~920515	72

第2表 全調査区一覧表(南溝手遺跡・窪木遺跡)

第4節 報告書の作成

報告書の作成は、全調査区を4年次において行うこととし、すでに県立大学キャンパスの西半分にあたる南溝手遺跡については、平成6(1994)年度に第1分冊である『南溝手遺跡1』を、ついで平成7(1995)年度に第2分冊として『南溝手遺跡2』を刊行した。また県立大学キャンパスの東半分の窪木遺跡については平成8(1996)年度に第3分冊として『窪木遺跡1』を刊行している。

今回報告する第4分冊は『窪木遺跡2』とし、窪木遺跡のうち最も東寄りにあたる調査区を対象としている(第3図)。

整理作業については、平井泰男、久保恵里子の2名で、平成8(1996)年度に実施した。発掘調査総面積は5,605㎡で、発掘調査時の遺構総数は約254、出土遺物は約488箱であった。

出土遺物の水洗・注記は発掘調査時にすでに終了させていたため、報告書作成のための整理作業は土器の復元作業から開始し、実測土器の選定抽出を行った。土器復元作業と並行して石器・土製品・金属器・木器などの抽出も行い台帳の作成や実測が必要なものの選定を行った。

このようにして選定した遺物については、土器が1,332点、石器約300点、土製品・金属器・木器約170点などの実測を行うことができた。実測作業はおもに補助員が実施し、出来上がった実測図については、調査員が検討を加えるという手段を用いた。遺物のトレースはすべて調査員が行った。

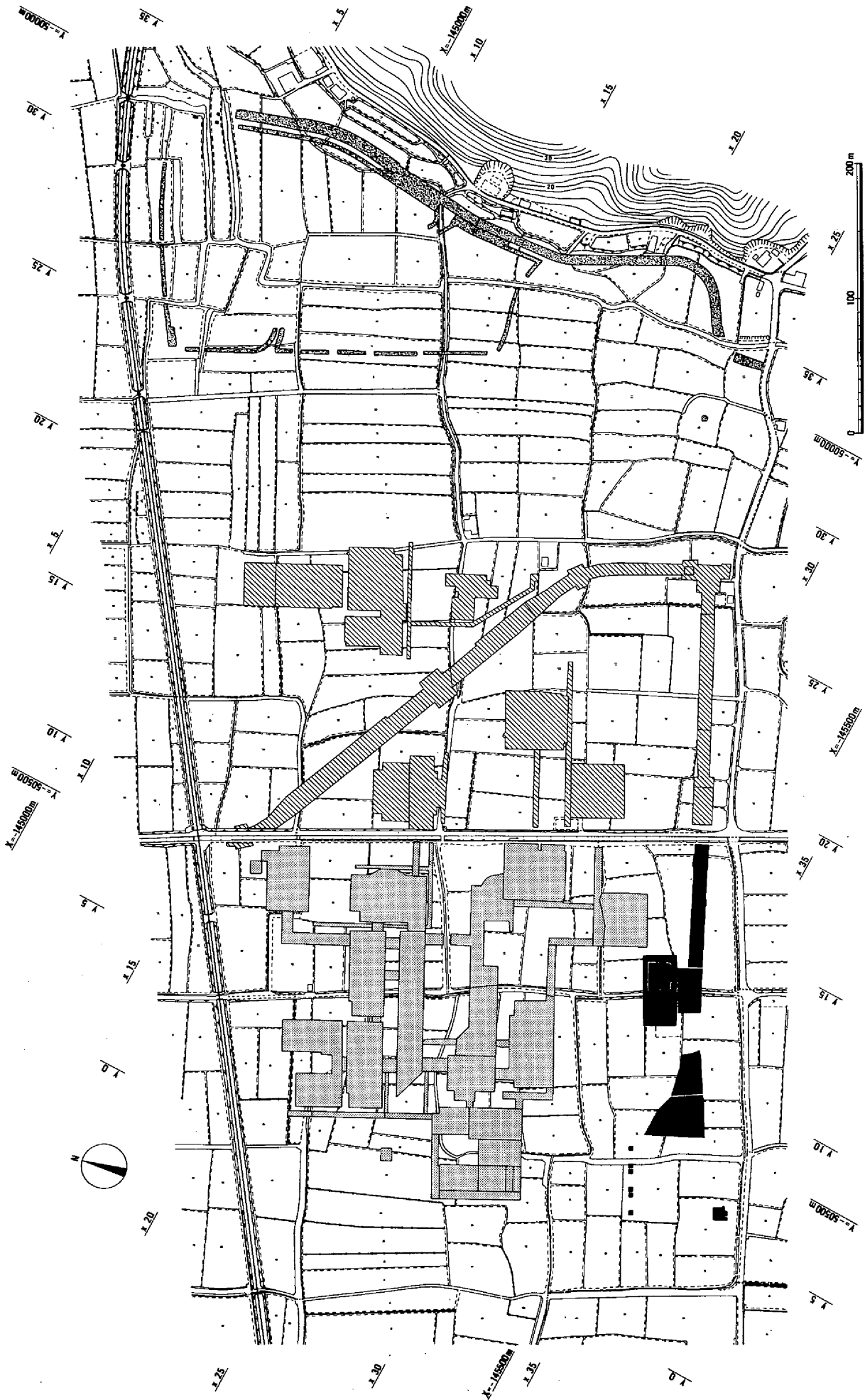
報告書に掲載できた遺物は、編集段階で一部割愛したため土器が1,201点、石器・石製品は288点、土製品は78点、金属器(鉄器・銅器)は37点、木器38点である。

遺構については、整理担当者2名が調査区を分担して図面整理を行い、トレースについては担当者および補助員が行った。今回の報告書では、発掘調査段階で遺構と認識していたものについては、ほぼすべて掲載している。

編集作業においては、まず遺構・遺物は並べて掲載することとし、かつ説明は時代ごとに節を分けて行うこととした。節立てについては、基本的に『南溝手遺跡1』・『南溝手遺跡2』・『窪木遺跡1』に準拠することとした。

調査区名	調査期間	面積㎡	担当者
YA1(山陰川)	1992.10.1~1992.12.11	333	平井・三上
YA2A(山陰川)	1992.7.15~1992.12.11	747	平井・三上
YA2B(山陰川)	1992.6.18~1992.7.14	716	平井・三上
YA3(山陰川)	1992.6.9~1992.10.21	1,060	葛原・川崎・久保
YA4(山陰川)	1992.9.10~1992.10.13	530	葛原・川崎・久保
YA5(山陰川)	1992.10.7~1992.10.21	146	葛原・川崎・久保
HC1A(東調整池)	1992.9.28~1992.12.11	189	平井・三上
HC1B(東調整池)	1992.7.15~1992.8.5	46	平井・三上
HC2A(東調整池)	1992.7.15~1992.8.28	148	平井・三上
HC2B(東調整池)	1992.7.28~1992.9.4	265	葛原・川崎・久保
HC3(東調整池)	1992.9.16~1992.12.11	596	岡田・竹原
HC4(東調整池)	1992.9.16~1992.12.11	212	岡田・竹原
HC5(東調整池)	1992.9.16~1992.12.11	430	岡田・竹原
HC6(東調整池)	1992.10.1~1992.12.11	172	平井・三上
YK(野球場)	1992.11.26~1992.12.10	15	葛原・川崎・久保

第3表 第4分冊掲載対象調査区一覧表



第1分冊
 第2分冊
 第3分冊
 第4分冊

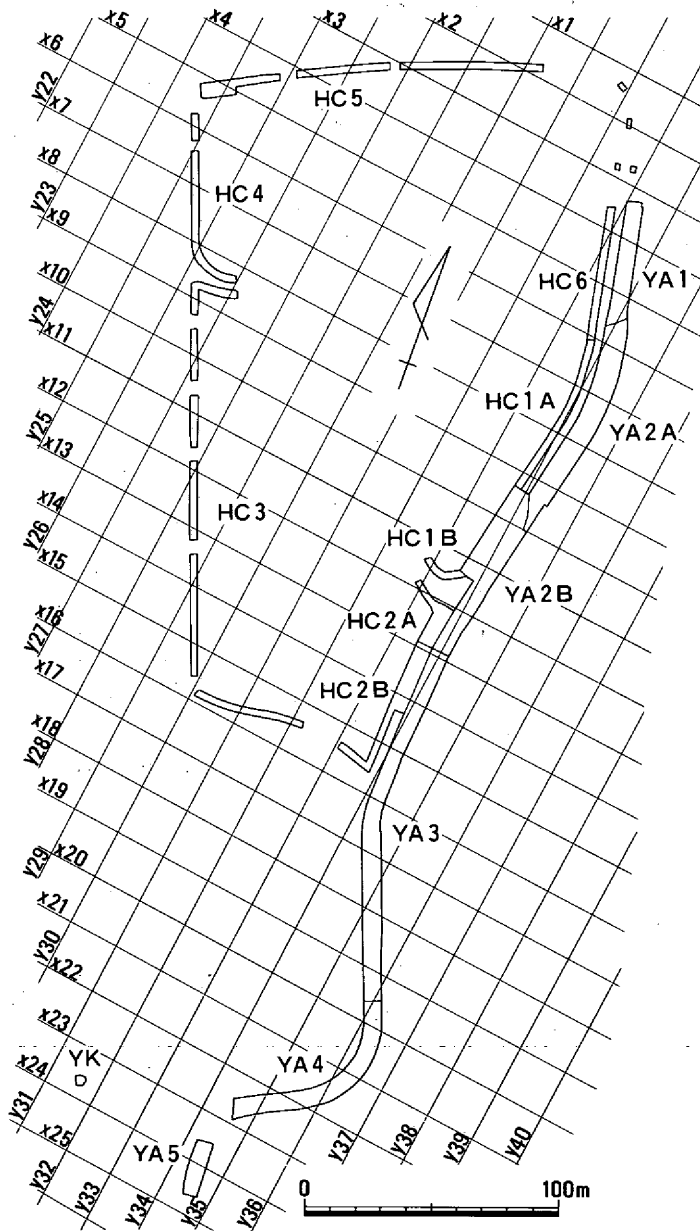
第3図 全調査区配置図(2) (1/4000)

なお遺構・遺物の番号については窪木遺跡という一つの遺跡の報告書であることから、『窪木遺跡1』からの通し番号をつけることにした。

遺物のうち土器・土製品・石器については観察表を作成した。そのため本文中ではこれらの説明を省略したところも少なくない。

遺構全体図については、調査区が南北に細長いため掲載方法に苦慮したが、折り込みページを極力少なくする方針をとったため、見づらい点があると思われるが了とされたい。

土器観察表はスペースの関係から十分なものにはなっていないが、特徴欄における記載のうち、縄文時代の巻貝はヘナタリ貝あるいはカワアイ貝を想定しており、アルカ属貝条痕としているのは貝の特定はできないが、ハイガイなどのアルカ属に属する二枚貝による条痕を指している。また、ケズリは原体は不明ながらも砂粒の動きが観察できたもので、通常ヘラケズリとされている調整である。ミ



第4図 『窪木遺跡2』調査区およびグリッド設定図 (1/3000)

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

ガキについても原体は明らかではないが、通常ヘラミガキと呼称されている調整である。ハケメは板材による線条痕を指している。板ナデはハケメほど顕著ではないが、板材でナデたような条痕が観察されたものである。色調については、外面の色調のみを記載している。土器によっては複数の色調をもつものもあったが、主要な色調のみを記載した。胎土については記載していないが、基本的には長石・石英・雲母といった花崗岩起源の砂礫を含んでおり、特徴的な胎土をもつ土器については、備考欄に記載するようにした。

特徴的あるいは特殊と考えられた遺物のうち、専門的知識を必要とするものについては、例言に記載した諸氏・機関に鑑定・同定や分析を依頼し、その一部については付載として報文を掲載することにした。

写真図版については、ページ数の確保が難しくなったため、必要最少限の写真を掲載するにとどまっている。

文章の執筆については、遺構については基本的に発掘調査担当者が分担し、文責は文末に記載するようにしている。(平井)

報告書作成体制

1996（平成8）年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	黒瀬定生
文化課	
課長	大場 淳
課長代理	松井英治
参事	葛原克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）	
	平井 勝
主査	若林一憲
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	河本 清

次長	高塚恵明
文化財保護参事	正岡陸夫
(総務課)	
課長	丸尾洋幸
課長補佐（総務係長）	井戸丈二
主査	木山伸一
(調査第一課)	
課長	高畑知功
課長補佐（第一係長）	江見正己
文化財保護主査	平井泰男
	(報告書作成担当)
文化財保護主事	久保恵里子
	(")

報告書作成協力者

阿部典子 伊原史子 遠藤七都子 川上陽子 河内一美 中野晴美 平田純子
松野千里 三垣佐知子

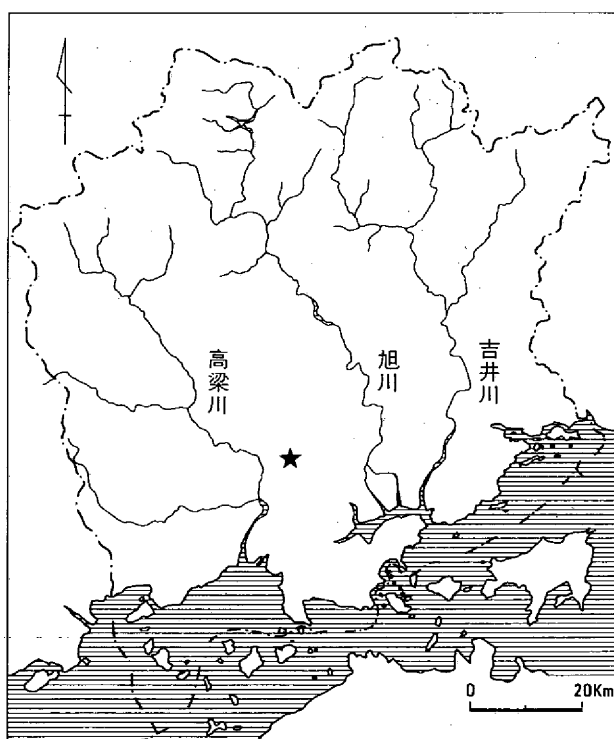
第2章 遺跡の位置と環境

窪木遺跡は、南縁を都窪丘陵などの低位丘陵、北縁を吉備高原南端の山地に挟まれた東西に細長い総社平野の東半部に位置する。当遺跡は、南溝手遺跡⁽¹⁾と同一集落と考えられ、遺跡の範囲は南北約0.5km、東西約1kmにおよび、幾つかの微高地部と低位部で構成されている。総社平野はもとは高梁川の乱流による氾濫原と考えられており、発掘調査や現在の地形に残された痕跡から旧地形の復原も成されている。旧河道のひとつ、現在の前川にその名残をとどめる流れは「備中国風土記」逸文の「宮瀬川」に比定され、古代の郡境にあたると考えられている⁽²⁾。この宮瀬川より南は窪屋郡、北は賀陽郡となり、当遺跡は古代の律令行政区画でいうところの賀陽郡に包括される。

さて、海浜部からやや奥まったこの平野に至るには、高梁川・足守川を北上する川沿いのルートや南部の丘陵の谷あい抜けるルートが考えられるが、これらのルート沿いには著名な弥生墳丘墓や古墳、古代寺院などが数多く分布している。丘陵越えのルートのひとつに水別峠越えがあり、峠を北に抜けると古代の官道山陽道と交差する。この付近には作山古墳や宿寺山古墳などの大前方後円墳やこもり塚古墳・緑山8号墳・江崎古墳といった巨石墳が築かれ、備中国分寺・備中国分尼寺が建立されている。さらに三須と上林の間を北へ抜けると総社平野中央部に至るが、そこは現在残る「北国府」「南国府」などの地名から備中国府推定地の最有力候補とされている⁽³⁾。南溝手・窪木遺跡はこの備中国府推定地に隣接しており、古代古備政権の中核の一画に位置しているといえよう。鬼ノ城はこの中核域を見下ろす背後の山上に位置している。

総社平野内における集落址の調査から当遺跡周辺の歴史をふりかえると、総社平野周辺で現在確認されている旧石器時代の遺跡としては、高梁川をのぞむ北縁の丘陵上に位置している浅尾遺跡⁽⁴⁾・宝福寺裏山遺跡⁽⁵⁾が著名であるが、造山古墳の東側にある独立小丘陵上でもナイフ形石器が数点出土している⁽⁶⁾。当遺跡の南約1kmに位置する窪木薬師遺跡⁽⁷⁾では旧石器時代のナイフ形石器が包含層中より出土しているが、これは平野内に人々が既に居住していたのではなく、近隣の丘陵上や台地上に遺跡が存在し、そこから流れ込んできたと考えられている。

平野内では、真壁遺跡⁽⁸⁾から縄文時代早期の遺物が出土しており、早いところではこの期に微高地の形成が始まっていたことを示唆している。しかし、ほかには長良山斜面から押型文土器片が出土しているのみ⁽⁹⁾



第5図 遺跡位置図



●墳墓 ■集落跡 ▲窯跡 □寺院跡 〃古墳群 (「岡山市遺跡分布図」および岡山市遺跡地図」に準じる)

1. 窪木遺跡 2. 南溝手遺跡 3. 窪木宮後遺跡 4. 長良山遺跡 5. 深町遺跡 6. 栢寺廃寺 7. 備中国府推定地
8. 金井戸新田遺跡 9. 北溝手遺跡 10. 服部遺跡 11. 西山遺跡・西山古墳群 12. 中山遺跡・中山古墳群 13. 奥ヶ谷窯跡
14. 福井大塚古墳群 15. 金黒池遺跡 16. 新山廃寺 17. 鬼ノ城 18. 千引遺跡 19. 千引かなくろ谷遺跡 20. 随庵古墳
21. 余町遺跡 22. 足守庄関連遺跡 23. 南坂遺跡 24. 南坂2号墳 25. 上土田4号墳 26. 上土田1号墳 27. 延寿寺
28. 鶴免遺跡 29. 生石神社境内弥生墳丘墓 30. 高松田中遺跡 31. すりばち池古墳群 32. 尼子山古墳
33. 西山遺跡群弥生遺跡 34. 明神遺跡 35. 宮後遺跡 36. 浅尾遺跡 37. 西三軒屋遺跡 38. 樋本遺跡 39. 三軒屋遺跡
40. 屋毛手遺跡 41. 惣善寺遺跡 42. 真壁遺跡 43. 三手遺跡 44. 高塚遺跡 45. 庚申山遺跡 46. 折敷山遺跡・折敷山古墳
47. 小造山古墳 48. 夫婦塚古墳 49. 翁塚古墳 50. 鶴亀遺跡 51. 窪木薬師遺跡 52. 中林遺跡 53. 亀山下遺跡
54. 亀山塚 55. 山屋敷遺跡 56. 金井戸・見延遺跡 57. 緑山8号墳 58. 緑山17号墳 59. 三須島田遺跡 60. 美野田遺跡
61. 天満遺跡 62. 三須廃寺 63. 清水角遺跡 64. 作山古墳 65. 山津田遺跡 66. 江崎古墳 67. 備中国分寺
68. こうもり塚古墳 69. 備中国分尼寺 70. 法蓮23号墳 71. 新池大塚古墳 72. 造山古墳 73. 柳山古墳 74. 千足古墳
75. 造山古墳付6号墳 76. 矢部堀越貝塚

第6図 周辺主要遺跡分布図 (1/40,000)

で、平野部に立地する遺跡の動向から、微高地が安定した居住域となるのは縄文時代後期以降のようである。真壁遺跡の南に位置する三軒屋遺跡⁽¹⁰⁾では中期から晩期の、屋毛手遺跡⁽¹¹⁾・惣善寺遺跡⁽¹²⁾では後・晩期の遺構や遺物が検出されている。また、南溝手遺跡から出土した石器群や後期中葉の土器から検出されたイネのプラント・オパール⁽¹³⁾が示唆するように、沖積平野への進出が稲作の導入といった生活基盤の変化に密接に結びついているのではないかと考えられる。

弥生時代前期になると、真壁遺跡のほか足守庄関連遺跡⁽¹⁴⁾や山津田遺跡⁽¹⁵⁾など広範囲に遺跡が散見され、沖積平野の安定と微高地の拡大をうかがい知ることができる。当遺跡では前期最古段階の遺構が多数確認されており、県下における弥生時代の始まりや編年を考える上で新しい知見を与えている。また南溝手遺跡では弥生時代前期の「松菊里型」住居や玉作り、中期のガラス滓などにみられるように⁽¹⁶⁾積極的に新技術を導入しており、いちはやく対外的に開けた地域であったと推察される。

前期以降平野部の集落はさらに展開をみせ、多くは弥生時代中期後半から後期前半にかけて最盛期を迎えている。そうした中のひとつが、後期後半には墳丘墓を築き、古墳時代にいたっては大前方後円墳や巨石墳の造営主体となる一大勢力へ発展していったと考えられる。しかし、総社平野内に高塚遺跡⁽¹⁷⁾や津寺遺跡⁽¹⁸⁾、足守川加茂・矢部南向遺跡⁽¹⁹⁾といった大集落に匹敵するような集落は確認されておらず、実態は不明な点が多い。

古墳時代の集落についても不明な点が多いが、近年の総社市教育委員会の調査などでその実態が明らかにされつつある⁽²⁰⁾。なかでも、後期になって集落遺跡が急速に増加したことは従来から指摘されているが、鉄生産の進展がその背景のひとつとして考えられている⁽²¹⁾。実際、平野部の窪木薬師遺跡で5世紀前半から7世紀前葉にかけての鍛冶集団の居住した集落が確認されており、丘陵・山地では千引かなぐろ谷⁽²²⁾といった6世紀後半に遡る製鉄遺跡が存在し、また随庵古墳のように鍛冶道具一式を副葬する古墳が築かれるなど、鉄生産や鉄器製作と関連深い遺跡が多く存在している。加えて、亀山下遺跡⁽²⁴⁾といった須恵器工人集落と考えられる遺跡の存在や、TK73型式に先行する奥ヶ谷窯跡⁽²⁵⁾が築かれるなど、農耕に依拠するだけでなく、鉄生産や須恵器製作など当時の先端技術のいちはやい導入と展開がこの地の経済基盤の一端を支え、さらには後の吉備政権をなす勢力を支えていったと考えられる。

古代には、先に述べたように、備中国賀陽郡に属し、備中国府域の最有力地⁽²⁶⁾や白鳳期創建の栢寺⁽²⁷⁾廃寺に隣接している。当遺跡の長良山山際の調査区の一部では奈良および平安期の建物群や緑釉、灰釉、陶馬、陶硯などが出土しており、官衙に付随する施設と考えられる⁽²⁸⁾。しかし、平地部では溝や柵列および水田で占められており、後世の削平も考慮に入れないと見なければならないが、すでにこの一帯が耕地として利用されていた可能性を示唆している。また、国府域の研究はおもに文献資料に残された地名の比定から進められてきたが、総社市教育委員会によって実施された国府推定域内の調査においても国府の存在を示す物証がなく、いまだ明らかとなっていない。一方、推定地に南接する金井戸・見延遺跡⁽²⁹⁾や、約4km西方にある宮後遺跡⁽³⁰⁾からは奈良期の遺構や遺物が検出されており、大きく視点を変えてみなければならないのかもしれない。

当遺跡周辺は条里区画の残る地域としても古くから注目されているが、平野東端に位置する足守庄関連遺跡では、平安時代には条里に基づく地割と水田の再開発が施行されたことが確認されている。当地と足守地域は郷は違いが条里方向の同一性や足守地域を本拠地とする賀陽氏が栢寺廃寺の地に賀陽地門満寺を再建するなど深い関りのある地である。当遺跡の平安時代の溝の一部でその掘削方向が、地形に沿って弧を描くものから現在の地割りと合致する方向に変化していることが確認されてお

り、足守地域と同じ頃条里に編入された可能性が高い。

古代から中世における集落の調査例としては平安時代末から中世にかけての鍛冶関連遺構が検出された樋本遺跡⁽³¹⁾や屋敷地と考えられる真壁遺跡、中林遺跡⁽³²⁾、金井戸新田遺跡⁽³³⁾、清水角遺跡⁽³⁴⁾などがある。当遺跡においても屋敷地や土墳墓が検出されているが大部分は水田域である。「備中国賀夜郡服部郷⁽³⁵⁾郷図」では当遺跡周辺は田畑として利用されていた事がうかがえるが、周辺遺跡の調査成果や南溝手遺跡および当遺跡の調査地全面に中世以降水田層が継続的に堆積していることから、遅くとも中世には平野内の大部分が水田化され、現在と変わらぬ景観を呈していたと推察される。(久保)

註

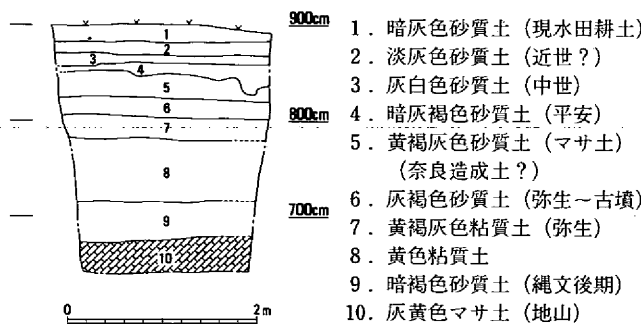
- (1) 「南溝手遺跡1・2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100・107 岡山県教育委員会 1995・1996
- (2) 葛原克人「吉備豪族の誕生」『歴史手帖』4巻6号 名著出版 1976
「三須・畠田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 総社市教育委員会 1993
- (3) 「備中国府跡 緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7 総社市教育委員会 1989
- (4) 「浅尾遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編纂委員会 1987
- (5) 間壁葎子「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館集報』第2号 1967
「宝福寺裏山遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編纂委員会 1987
- (6) 黒住・雲山遺跡、甬崎天神山遺跡など「山陽自動車道建設に伴う発掘調査8」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 1994
- (7) 「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 岡山県教育委員会 1993
- (8) 「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編纂委員会 1987
- (9) 「長良遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編纂委員会 1987
- (10)~(12) 「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』5 総社市教育委員会 1985
- (13) 「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 岡山県教育委員会 1996
- (14) 『足守庄(足守幼稚園)関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1994
- (15) 「山津田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 総社市教育委員会 1984
- (16) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995
- (17)・(18) 「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』19~21 岡山県教育委員会 1989~1991
- (19) 「足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 岡山県教育委員会 1995
- (20) 鶴免遺跡、鶴亀遺跡、金井戸新田遺跡、中林遺跡など
- (21) 「三須・畠田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 総社市教育委員会 1993
- (22) 「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報』1 総社市教育委員会 1991
- (23) 『随庵古墳』総社市教育委員会 1965
- (24) 「前川地区は場整備事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 総社市教育委員会 1994
- (25) 「中国横断自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会 199
- (26) (3)と同じ。国府域の比定については第2章第2節に簡潔にまとめられている。
- (27) 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会
- (28) 来年度刊行予定の「窪木遺跡2」に記載
- (29) 国道429号線改良工事に伴う発掘調査を岡山県古代吉備文化財センターで1992年度から断続的に継続中。金井戸・見延遺跡はその一部で、調査成果については担当者から教示を得た。
- (30) 総社市教育委員会からの御教示による。
- (31) 「樋本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65 岡山県教育委員会 1987
- (32) 「平成4年度は場整備事業に伴う発掘調査の概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』3 総社市教育委員会 1994
- (33) 「金井戸新田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』3 総社市教育委員会 1994
- (34) 「清水角遺跡」『総社市埋蔵文化財調査報告』1 総社市教育委員会 1984
- (35) 高重進「中世村落の復元—服部郷図による農業経営の分析—」『史学研究』第73号 史学研究会1959

第3章 発掘調査の概要

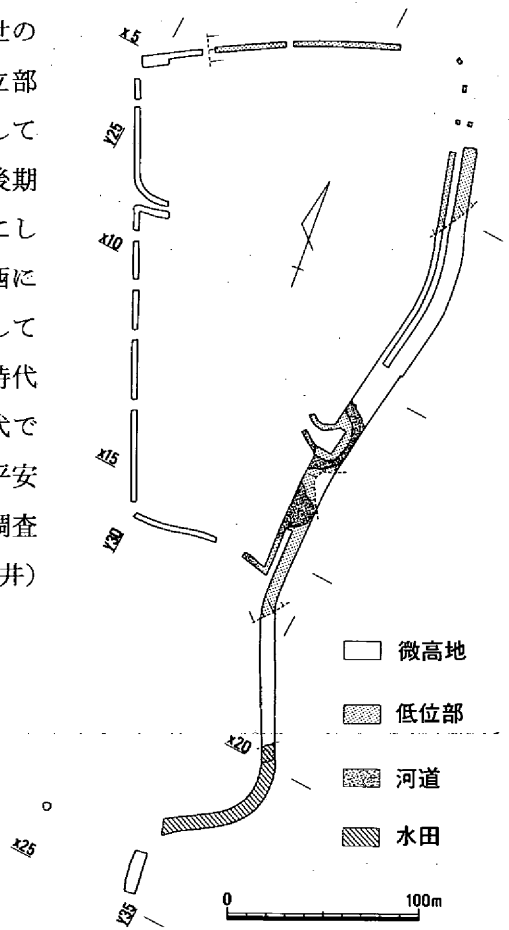
第1節 調査区の概要

調査区は、川の付け替えや調整池の護岸工事に伴って設定しているため、細長い部分が多い。調査前の状況は、YA2A・HC1Aが丘陵裾部に開墾された水田で、標高は約9mである。その他は、それより一段低い平地に形成された水田で、標高は8m前後であった。また、北端部のHC5区東半部周辺には水路が集中しており、湿地状を呈していた。こうしたことから基本的な土層関係は、調査区の地形ごとに異なっている。第7図は、多数の遺構・遺物を検出した丘陵裾部の調査区であるYA2Aの西壁土層断面図である。現在の水田耕作土の下には厚さ約30cmの水平堆積層があり、中世・近世の水田耕作に関係する土層と考えられる。4層は平安時代中期の包含層で、柱穴や溝などの遺構は5層を掘り込んでいる。5層は花崗岩の風化土(いわゆるマサ土)で、奈良時代～平安時代前期の建物などはこの層の除去中に検出することができた。6・7層は弥生時代～古墳時代の包含層で、遺構は8層を掘り込んでいた。9層は縄文時代後期の包含層である。微高地部分では現水田耕作土の直下に、部分的には中・近世水田層をはさむものの、弥生時代以降の基盤層である黄色砂質土が存在しており、弥生～中世の遺構・遺物を検出することができた(第174図)。また低位部にあたる地区では、中・近世の土層が40～60cm前後堆積していた(第140・201図)。検出できた遺構・遺物は縄文時代後期から中・近世にわたっており、次節以降で報告することになっているが、概略を記すと、縄文時代後期の土器は東から西に張り出した丘陵先端部の斜面堆積層からまとめて出土しており、東側の丘陵裾部に集落の存在が想定できる。弥生時代には竪穴住居や土壇などが多数検出できている。古墳時代では竈付きの竪穴住居や水田が特筆できる。奈良時代から平安時代の建物や遺物がまとめて検出できたことも今回の調査区の特徴である。

(平井)



第7図 YA2A区西壁土層断面図 (1/80)



第8図 窪木遺跡2地形概略図 (1/4000)

第2節 縄文時代の遺構・遺物

1. 概要

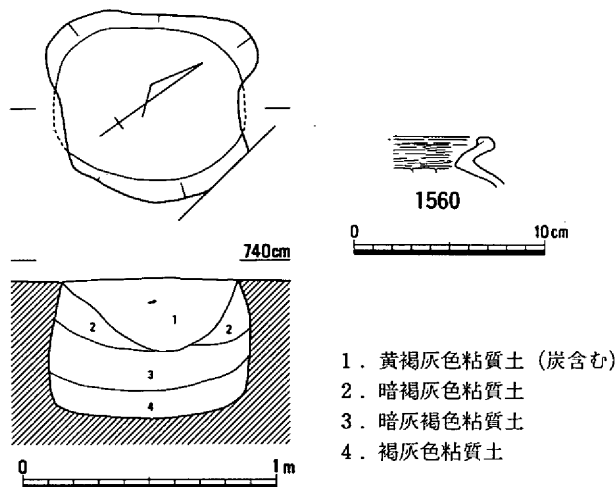
縄文時代の遺構・遺物は後期と晩期段階のもので、最も東側に位置するYA1・2・3、HC1・2区においてのみ検出することができた。明確な遺構は晩期中葉の土壌84のみで、遺物(土器・石器)はおもに調査区の東側に位置する長良山から西にのびた丘陵端部に位置する斜面堆積層中から出土している。このうち斜面堆積1からは後期の土器・石器が出土した。土器はいわゆる「中津式」併行期のものが主体で、これに少量の「津雲A式」などが含まれていた。斜面堆積1で確認できた後期の遺物包含層は北側のYA2B区に設定したトレンチ1およびYA2A・HC1A区での坪掘りにおいても検出することができたが、遺物はごく少量であった。晩期の遺物は、斜面堆積1を切っている斜面堆積2や弥生前期以降の基盤層中から少量ではあるが出土している。(平井)

2. 遺構・遺物

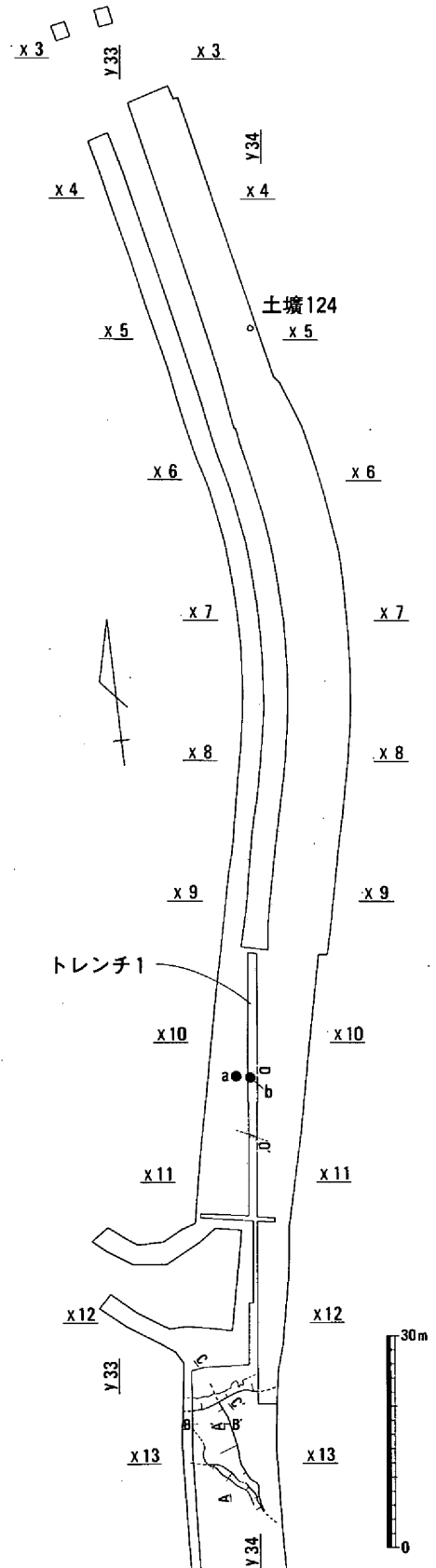
(1) 土 壙

土壙124(第9図)

YA1区のX5ラインの北において検出した土壙で、検出は比較的困難であった。平面形は図示したような不整形



第9図 土壙124 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第10図 縄文時代遺構全体図 (1/1000)

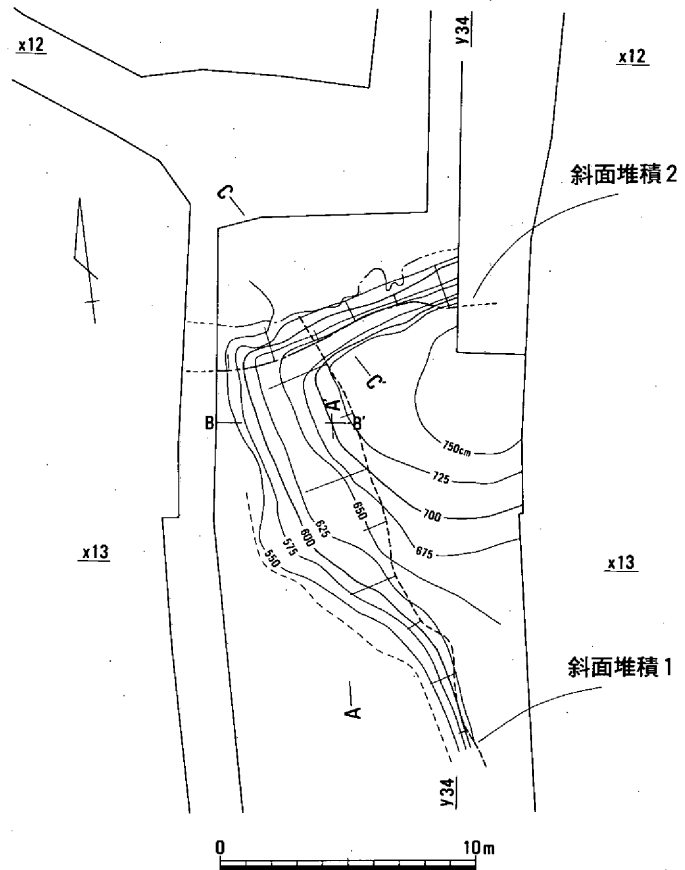
ではあるが、底面は楕円形を呈している。深さは検出面から56cmで、断面形は一部袋状になっていた。埋土は四層に分離でき、図の1層と2～4層とは時間差を考えることができる。遺物は、1層から縄文時代晩期中葉の土器片が少量出土したのみである。(平井)

(2) 斜面堆積

斜面堆積1

長良山から舌状に張り出した丘陵裾部の斜面で縄文時代後期の土器を比較的多く含む堆積層が確認され、ここで斜面堆積1として報告する。

第11図は丘陵地山面の等高線図で、斜面堆積1とした包含層の検出面上面の肩口を破線で示している。第12図は堆積状況を示している。A-A'断面は南斜面の堆積状況で、4層は古代～中世の遺物を含み、8層上面が弥生時代以降のベース、13～15層が縄文時代後期包含層にあたりと考えている。特に14層からの出土が多かった。9～12層は砂と粘土の互層で、河道の存在が示唆される。第12層からもごくわずかではあるが当期と思われる土器片が出土している。B-B'断面では3・4層がA-A'断面の8層に、5層が13～15層に対応する。2層は弥生時代前期中葉～後葉の溝162埋土である。C-C'断面では縄文時代後期包含層は確認されていない。



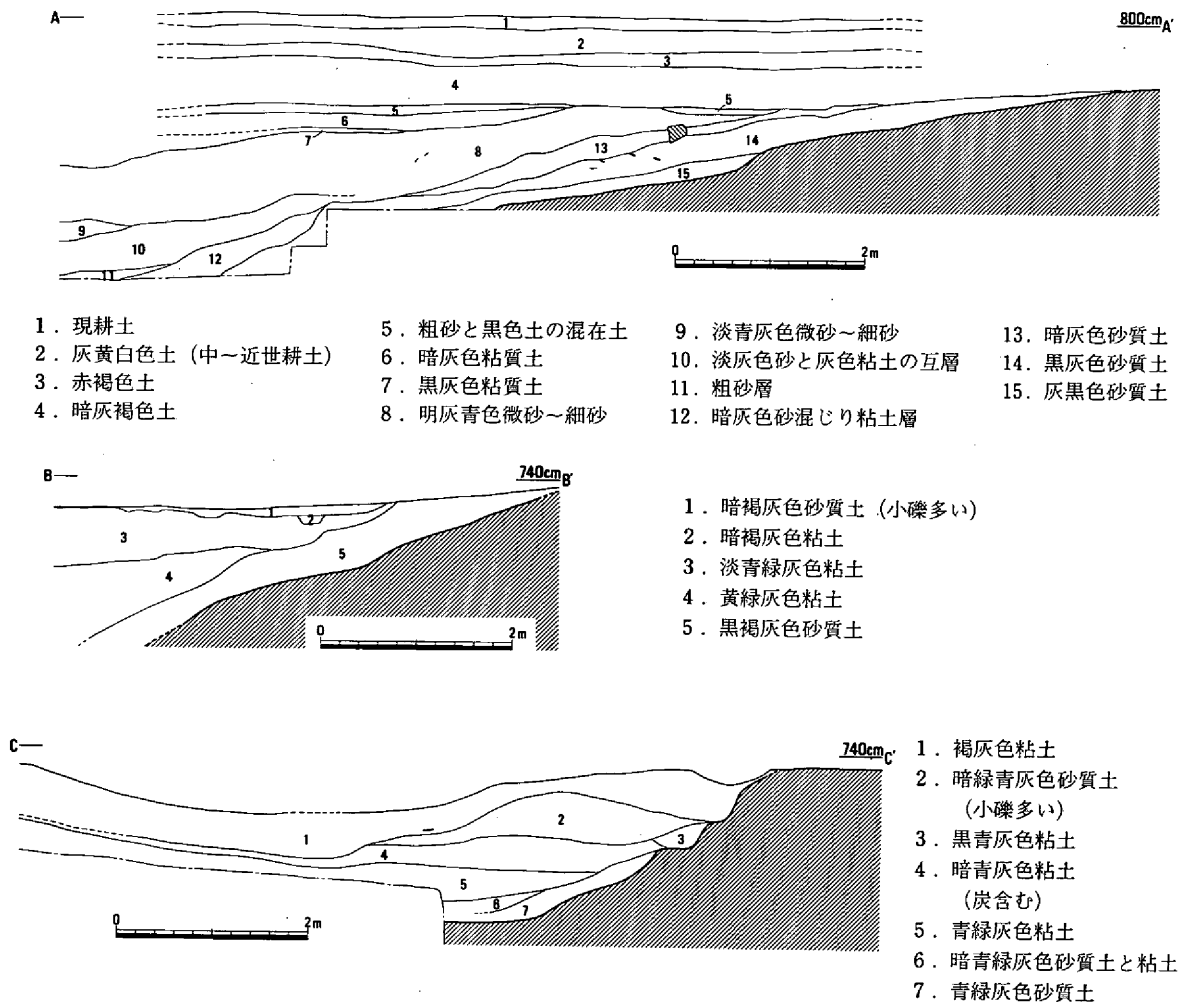
第11図 斜面堆積1・2平面図 (1/300)

1561～1595は有文の口縁部片で、1561～1586は磨消縄文を施す。縄文の施文原体は巻貝による擬縄文7点、LR1点、RL5点で、1571・1579・1580・1583・1586は沈線のみで構成されている。いずれも細めの沈線であるが、1562では沈線内に細かな筋が幾条も観察されており、巻貝の頂部を使って引かれたと考えられるものもある。1581・1614では押し引き沈線が用いられており、沈線内および沈線の末端に刺突を加えている。沈線の末端に刺突を加える手法は1561においても認められる。文様構成には窓枠状のモチーフや紡錘文、J字文などがみられる。1561・1562は大きな台形の波状口縁で、中期的な様相を残している。1583・1584は口縁端部に面を作り、端部上面に沈線を加えている。1584は3本沈線で構成され福田K2式の範疇で考えられる。1587・1589は縄文を地文とするもので、原体はRLである。1590は口縁端部に面を作り、端部上面と口縁部に縄文帯を有する。1591・1592は口縁端部を内側に折り込むもので、1584・1592の外面には3本沈線による磨消縄文がみられ、福田K2式期と考えられる。1593・1594は口縁端部外面を肥厚させ、波頂部を中心に対向連弧文を施した津

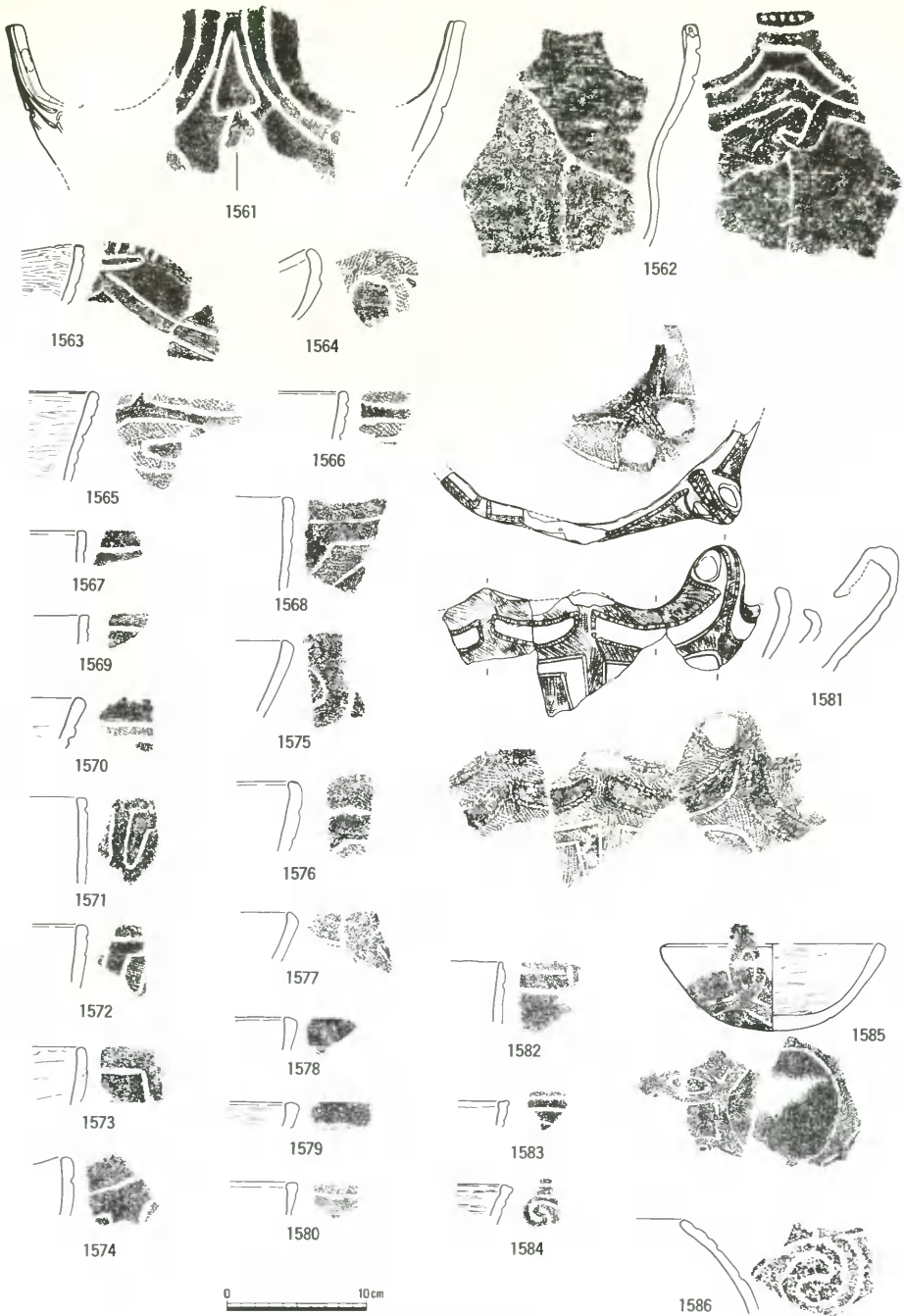
雲A式とされるもので、1593の口縁部以下には沈線が数状垂下されている。1595は口縁部に細い沈線を3条巡らし、体部外面にも同様の沈線を垂下させているが、垂下させた条線の特徴から1593・1594と同様の一群と考えられる。1596・1597は渦巻状の突起部と考えられる。

1598～1635は有文の体部片で、1598～1633が磨消縄文、1633～1635が縄文を地文とするものである。38点のうち、巻貝による擬縄文17点、RL12点、沈線のみ6点、不明3点で、LRは認められなかった。文様構成は口縁部と同じく紡錘文やJ字文、渦巻文が多いが、1625のように沈線の末端が入り組むものや1630～1632など3本沈線で構成されるものも若干混在している。1637～1682は無文の口縁部片で、1637～1672・1674～1676は巻貝による条痕もしくはナデで器壁を調整しており、粗製の深鉢と考えられる。1674～1676の口縁端部には刻みが施されている。1673・1678～1682は内外ともに丁寧に磨いており、口縁端部は内側に肥厚もしくは折り曲げている。浅鉢であろう。1683～1703は無文の体部片で、1683～1696は巻貝および原体不明の条痕が器表面に残されている。1695は条痕地にヘラで斜線を加えたもので、洗谷貝塚のⅦ類に類似したものがみられる。1697～1699は縦に垂下された沈線文があり、1593～1595に対応する体部片と考えられる。1700・1701はアルカ属貝条痕を施しており、縄文時代晩期に降る可能性が高い。1704～1714は底部で、1714以外は平底になっている。

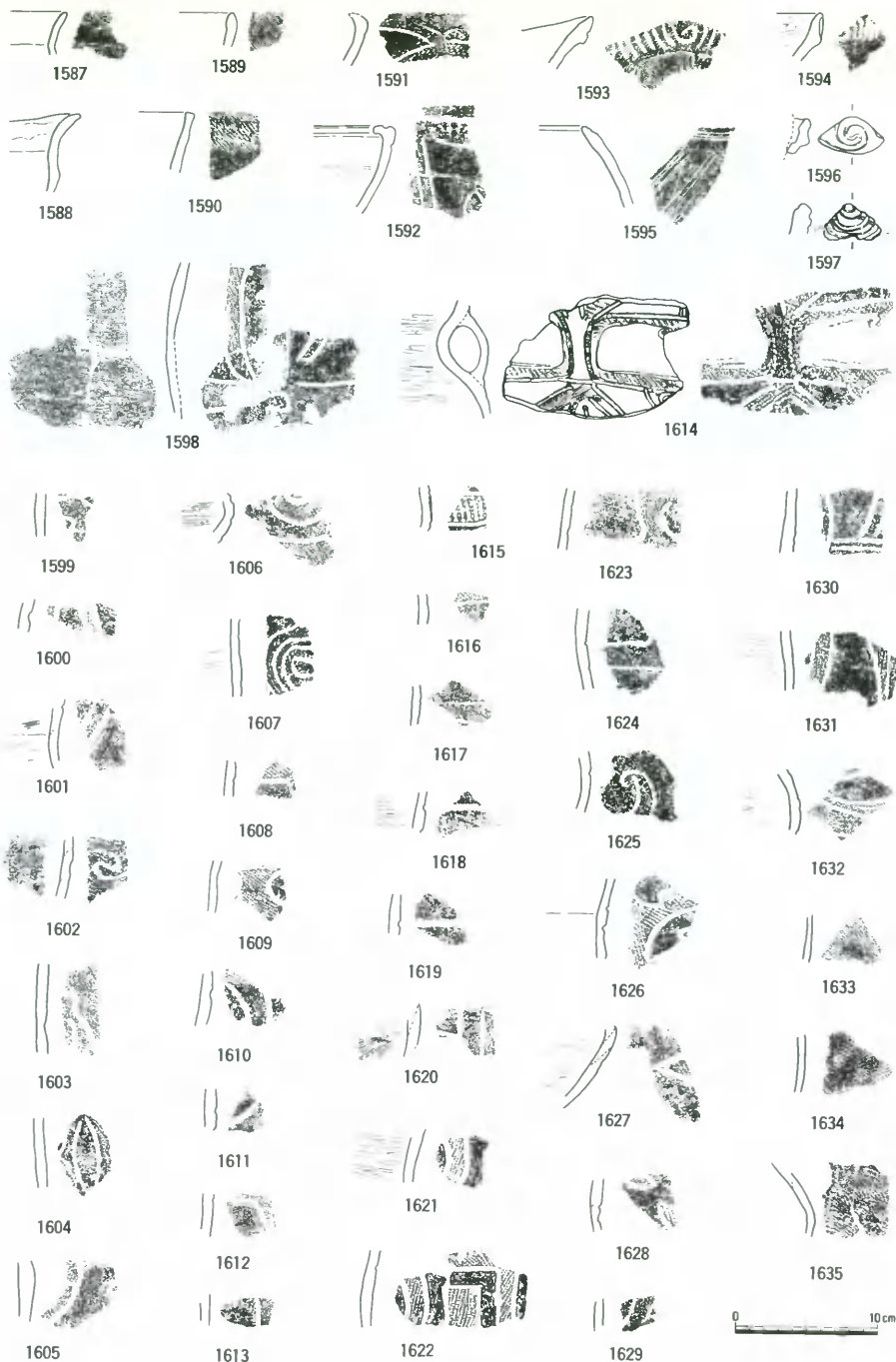
以上、出土土器全体では中津式期を中心として若干の時期幅が認められるが、1625・1630は溝162



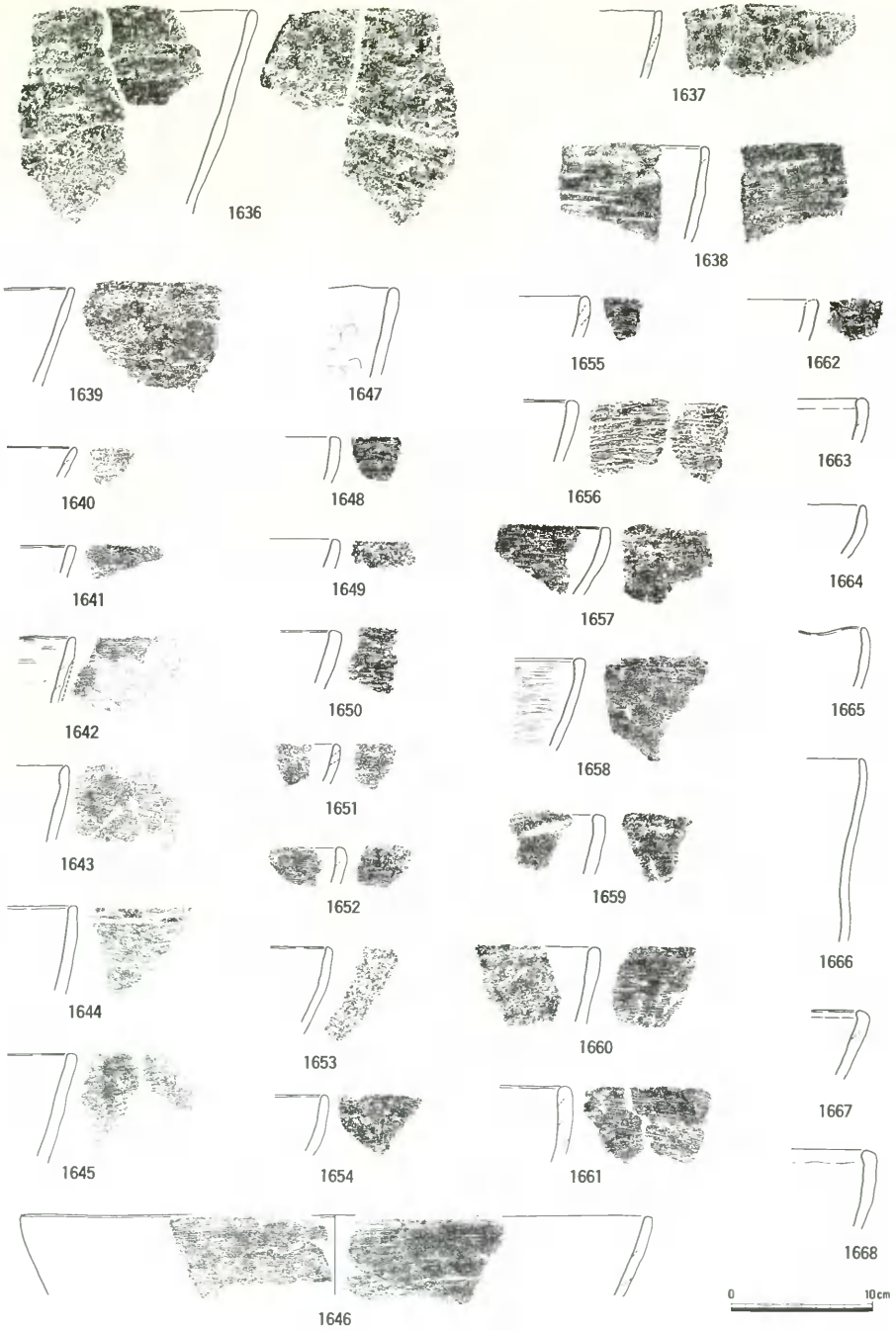
第12図 斜面堆積1・2断面図 (1/80)



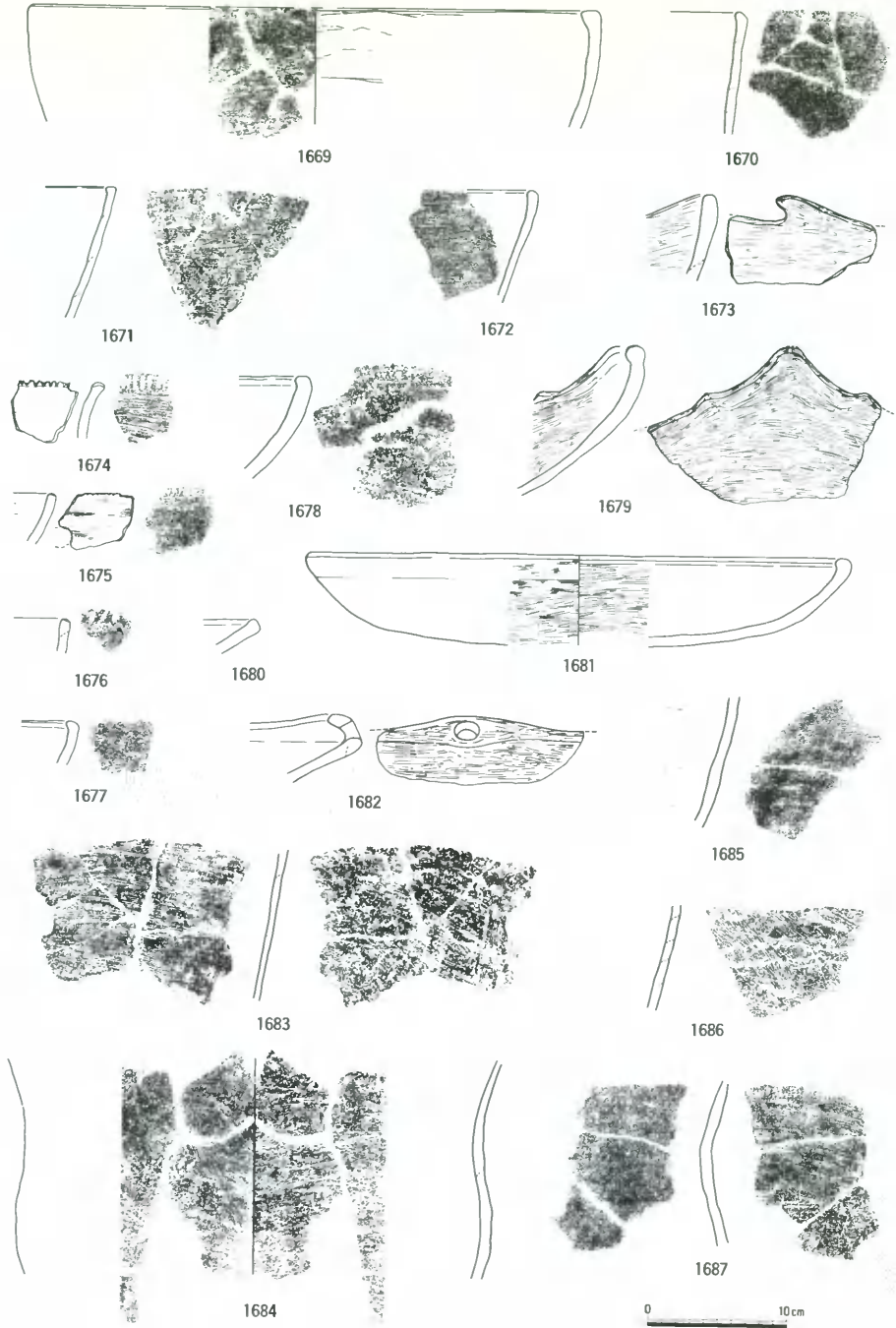
第13図 斜面堆積1出土遺物(1) (1/4)



第14図 斜面堆積1出土遺物(2) (1/4)



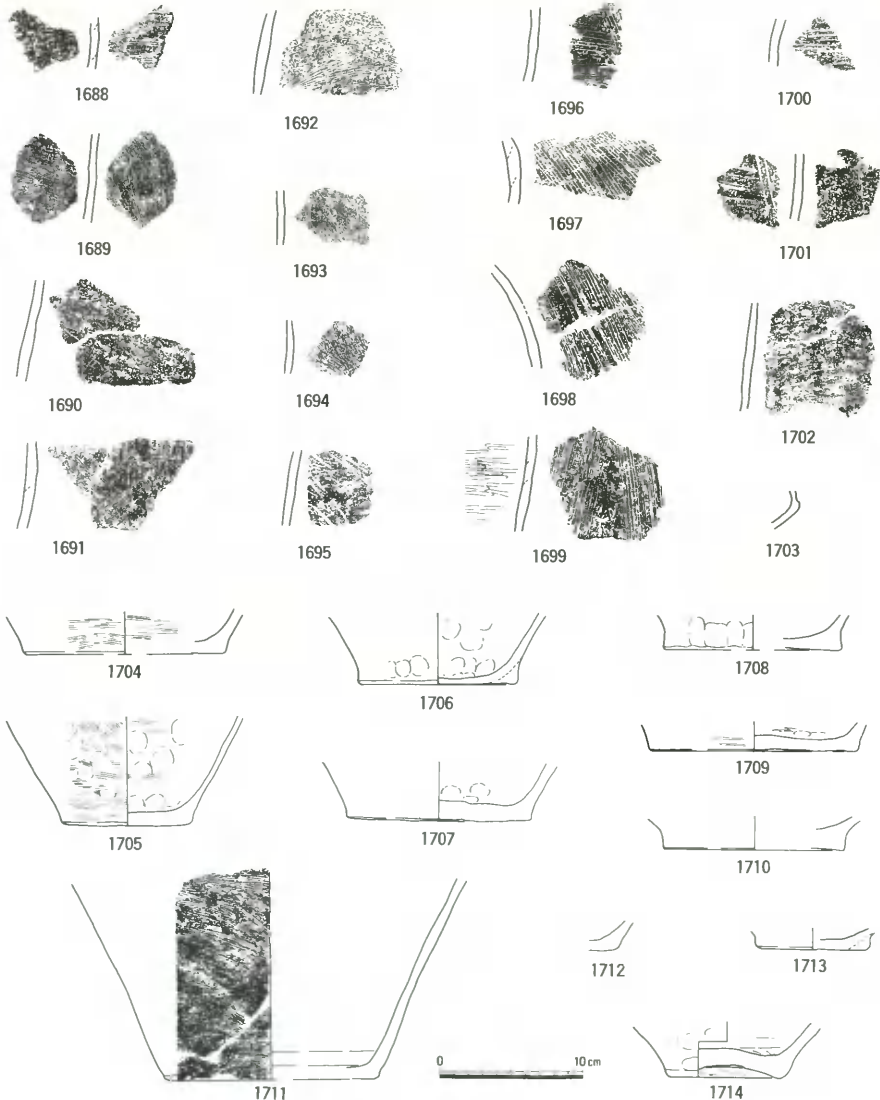
第15図 斜面堆積1 出土遺物(3) (1/4)



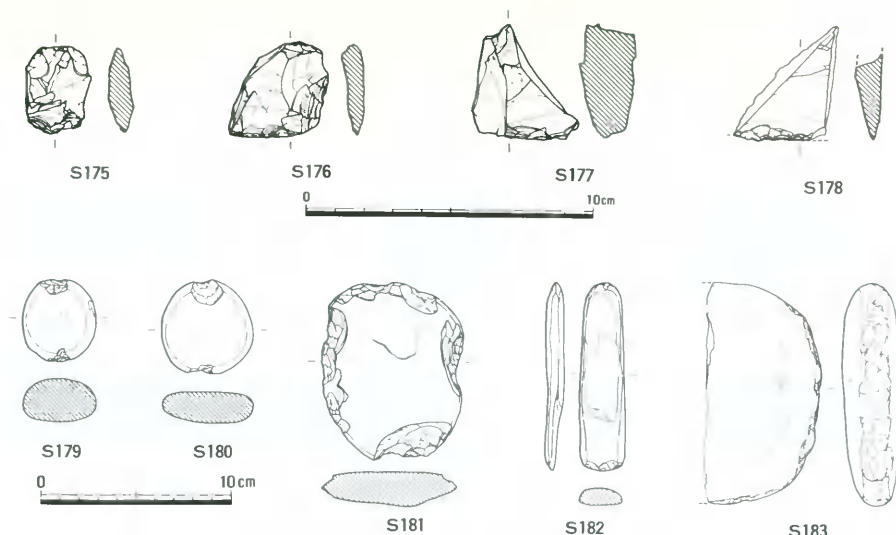
第16図 斜面堆積1出土遺物(4) (1/4)

に混在して出土しており、また1591・1631・1632および津雲A式とした6点はいずれも丘陵北西部のHC2A区から出土したもので、調査時点で層位的な取り上げを行っていないので断定できないが、地点によって若干時期の降る堆積層が存在した可能性も考えられる。いずれにしても南溝手遺跡では後期中葉の包含層が確認されているが、その時期まで降る遺物はみられなかった。両者の関係は確認できていないが、立地的にも全く別の堆積層と考えたほうが妥当であろう。

石器はサヌカイト製の剝片石器や石錘などが出土しており、第18図に図示している。S182は薄く細長い形状の自然礫の先端に剝離調整を加えたもので、加工具の一種ではないかと考えている。(久保)



第17図 斜面堆積1 出土遺物(5) (1/4)



第18図 斜面堆積1出土遺物(6) (1/2・1/3)

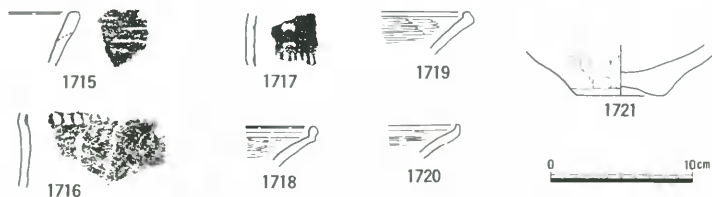
斜面堆積2(第10~12、19図)

YA2B・HC2A区の南半部において検出した。調査区の東側からのびる丘陵の先端部の北斜面を抉るようなかたちで堆積しており、西側では後期の斜面堆積1を切っている。堆積土層と出土遺物は第12図のC-C'断面で説明すれば、図の1層は弥生時代前期の堆積層で、前期後半の土器が出土している。2~7層は小礫や炭粒を含む粘土と砂質土で、縄文時代後期と晩期の土器が出土している。晩期の土器は中葉段階のものが多かった。これらに対応する土層は、北側に設定したトレンチでは約36m続いており、南側に下がる地点を確認することができた(第10図、20図5層)。したがってこの斜面堆積2は丘陵先端部を抉って流れる旧河道の堆積層ではないかと考えている。(平井)

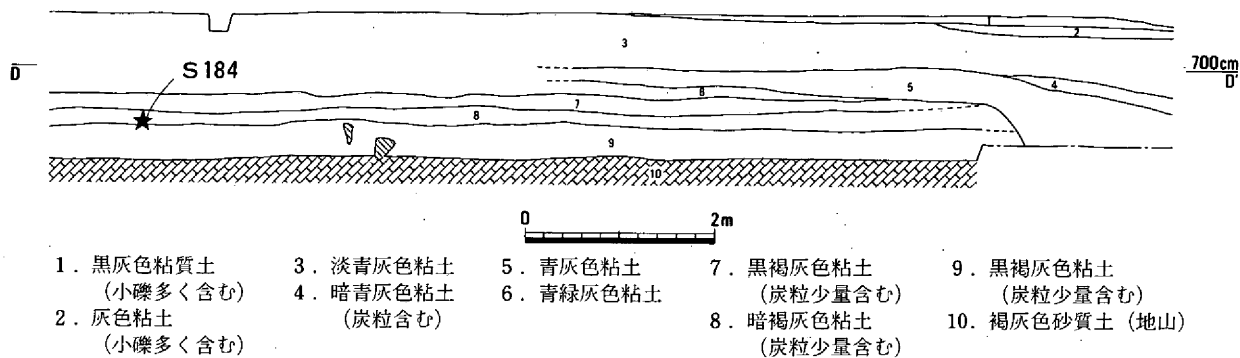
(3) その他の遺構・遺物

トレンチ1(第10・20図)

YA2B区において弥生時代以前の遺構・遺物や土層の堆積状況を調べるために東西・南北に設定したトレンチである(第10図)。その結果、先述した縄文時代晩期の斜面堆積2の続きや縄文時代後期の包含層の存在を確認することができた。図示した断面図(第20図)では、1・2層が弥生時代前期に、3~6層が縄文時代晩期に、7~9層が縄文時代後期に相当すると思われる。遺物は3層の上端



第19図 斜面堆積2出土遺物(1/4)



第20図 トレンチ1東壁断面図 (1/80)

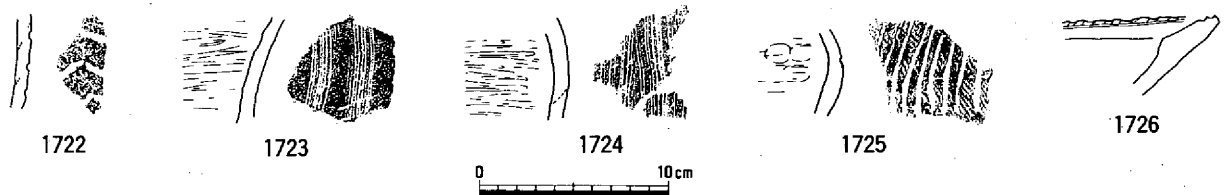
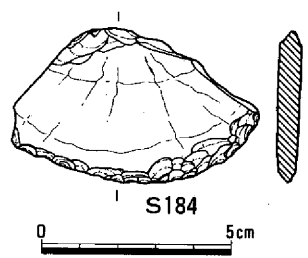
部から晩期中葉の土器が、また8層からは石器S184が出土した。

縄文時代後期の遺物

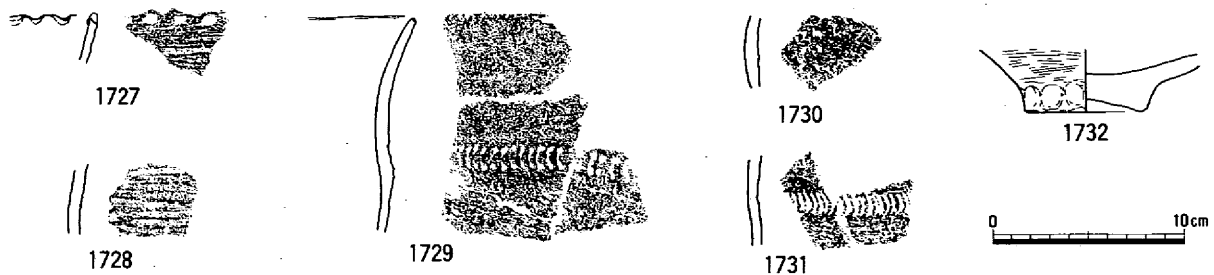
斜面堆積1以外から出土した後期の土器はごく少量ではあるが、第21図に示した。1722・1723はYA2A区で遺構検出中から、1724・1725は晩期の斜面堆積2から、1726はYA2A区の後期包含層から出土した。1722は中津式、1723・1724は津雲A式、1725は彦崎K1式前後、1726は福田K2～彦崎K1式頃ではなかろうか。

縄文時代晩期の遺物

晩期土器の出土量もごく少量である。1727・1729はYA2B区の弥生時代以降の基盤層最上層から出土し、地点は1727が第10図のa地点、1729がb地点である。1728はYA2A区で遺構検出中から、1730・1731はHC2A区の弥生時代中期中葉の溝160から、1732は斜面堆積2から出土した。時期はいずれも晩期中葉であろう。(平井)



第21図 その他の出土遺物 (縄文時代後期) (1/2・1/4)



第22図 その他の出土遺物 (縄文時代晩期) (1/4)

第3節 弥生時代前期～中期前葉の遺構・遺物

1. 概要

調査区の北端部HC5区周辺は湿地で、HC3区とHC2、YA3・4区との間にはおそらく河道や溝が走っていたものと想定できる。それ以外の部分は微高地部分ではあるが、遺構・遺物が確認できたのは、東から張り出した丘陵裾部に位置するYA2A・2B・3区とHC1A・6区に限られており、竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、土壇26基、溝12条を報告している。竪穴住居28は、全体の約1/2が検出できているが、埋土中からサヌカイトの石器や剥片が比較的多く出土しているのが特徴である。また竪穴住居29は、炭化材・炭・焼土が多く残存しており、火災を被っていることが明確であるが、出土遺物はわずかであった。土壇は不整形なものが多いが、土壇130については、形状や規模などから墓の可能性も考えられる。また土壇129・131・145については、形状や埋土中に炭・灰を多く含むことから、竪穴住居の中央穴の可能性も考えられるが明確にはならなかった。溝についてはいずれも小規模なもので、水路と考えられる溝は少ない。(平井)

2. 遺構・遺物

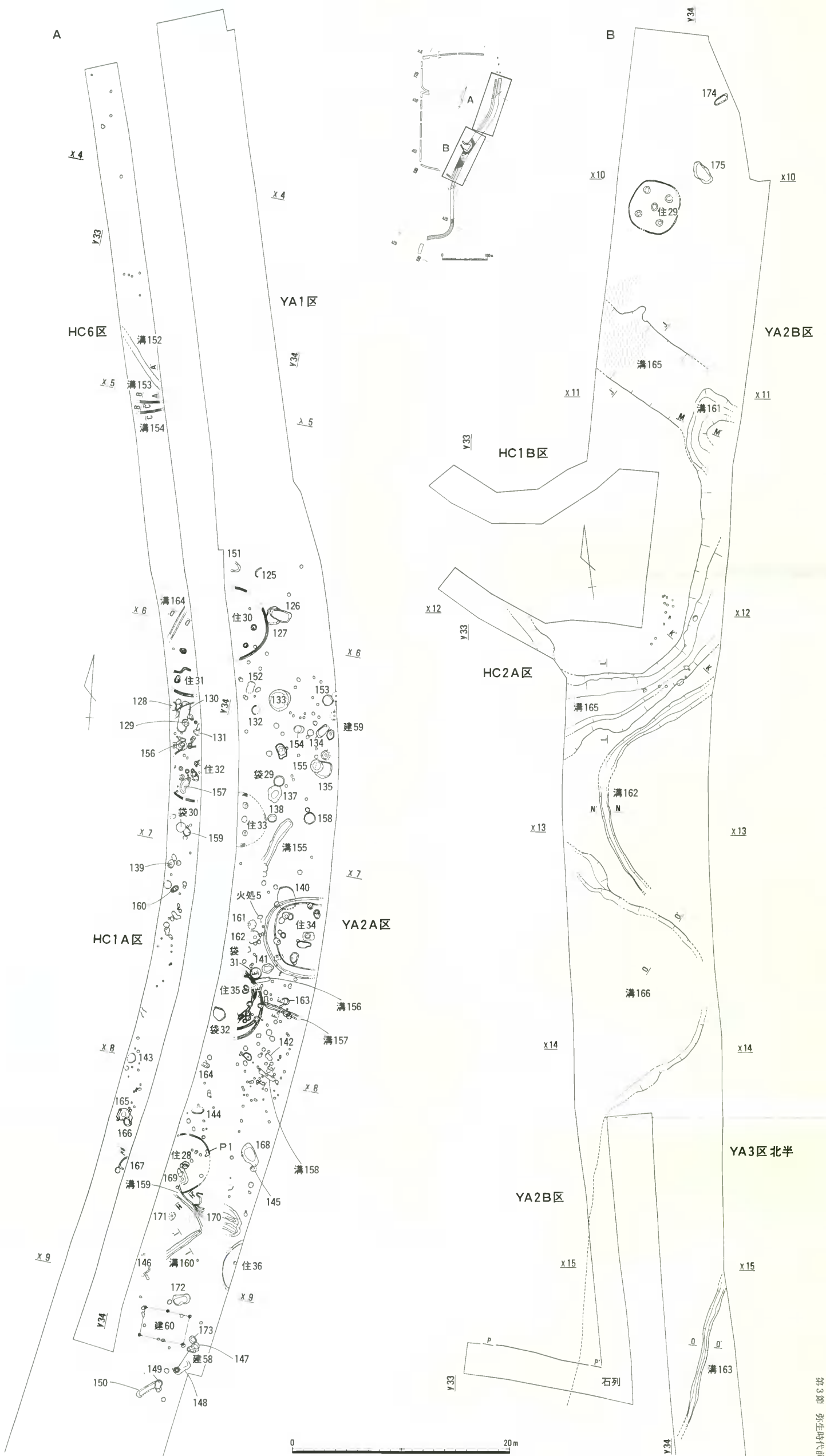
(1) 竪穴住居

竪穴住居28(第28図、図版3-1)

YA2A区の南端部に位置する。後世の溝などによって切られている部分も多く、また埋土の識別が困難であったことや一部調査区外にのびていることなどから、検出は難しかった。検出できた平面形は不整形な円形で、床面までの深さは最大でも5cm残存していたにすぎない。埋土は灰黄色粘質土で、中期後葉～後期の竪穴住居の埋土とは異なっていた。床面には若干の凹凸が認められた。壁際には一部に壁体溝らしき溝が認められたが、壁体溝は基本的には存在していないものと判断している。柱穴は検出できなかったが、床面のほぼ中央にあたる位置に土壇が検出できた。この土壇は平面形が不整形な楕円形で、深さは床面から13cm前後を測り、埋土の最下層には炭・灰が多く堆積していた。また東西の端に杭状の穴が存在しているのが特徴的である。遺物は少量の土器片と鏃、錐、楔、スクレイパーなどの石器が出土している。時期は弥生時代中期前葉～中葉であろう。(平井)

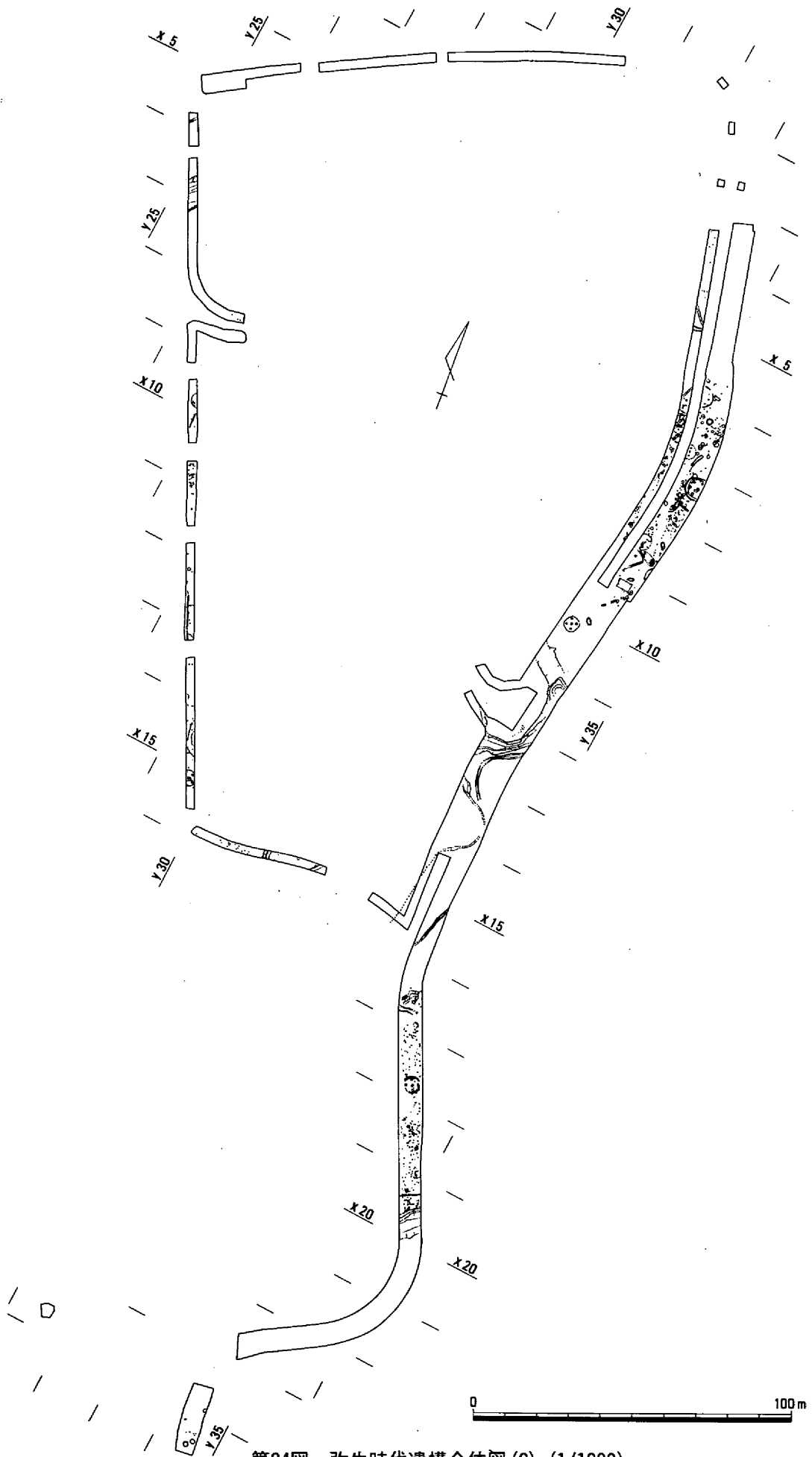
竪穴住居29(第29図、巻頭図版2-1、図版3-2)

YA2B区の北半部において検出した。平面形は隅丸形状で、床面までの深さは約10cm残存していた。検出面および床面上には図示したように焼土や炭化材・炭などが遺存していた。このうち焼土については炭化材や炭よりは上に堆積している場合が多い。炭化材については出土位置や太さなどから垂木材と考えられるものが数本確認できる。また炭層はA断面で見られるように、中央土壇内にも続いている。床面はほぼ平らで、壁体溝は検出できなかった。柱穴は4本確認できた。P1・2・3において柱材が残っていることや、図の5層の位置にまで焼土塊や炭が堆積していることが特徴である。床面のほぼ中央には長楕円形の土壇が存在している。遺物は弥生時代中期前葉の土器片や石器片が少量出土したのみである。(平井)

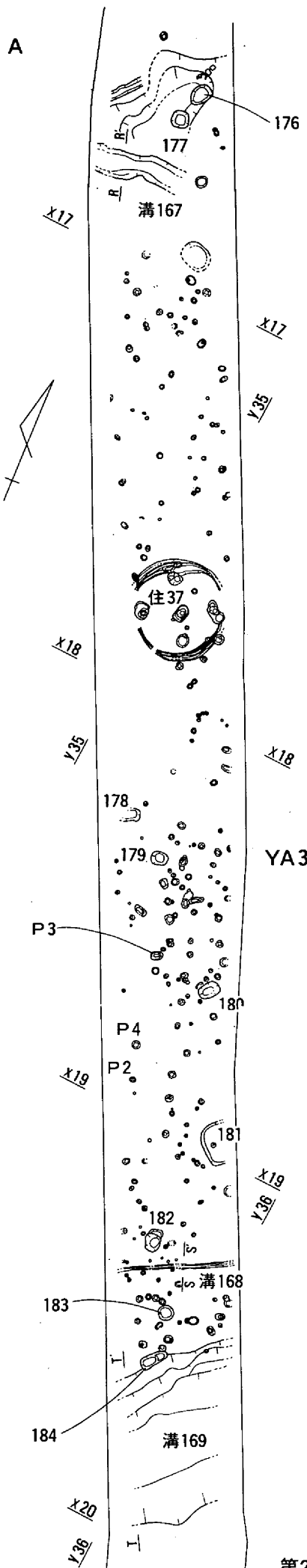


番号のみは土坑、住は竪穴住居、建は建物、袋は袋状土坑、Pは柱穴

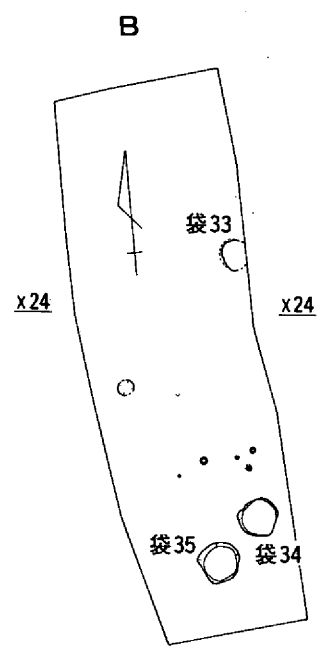
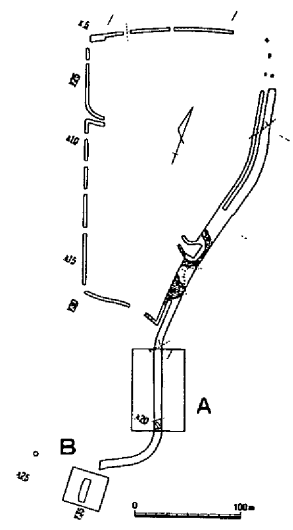
第23図 弥生時代遺構全体図(1) (YA1・2・3区北半、HC1・2・6区) (1/300)



第24図 弥生時代遺構全体図(2) (1/1800)



YA3区 南半

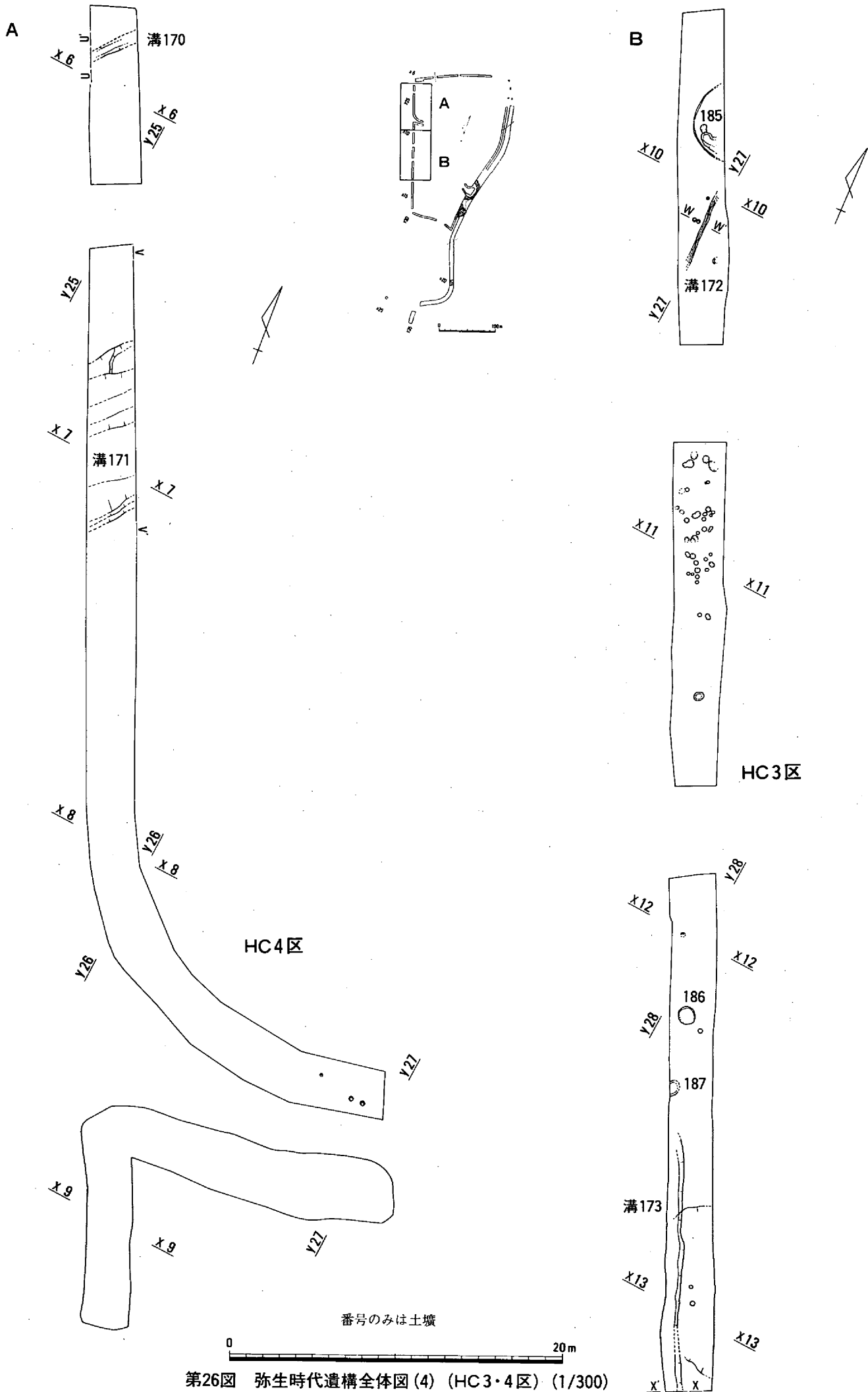


YA5区

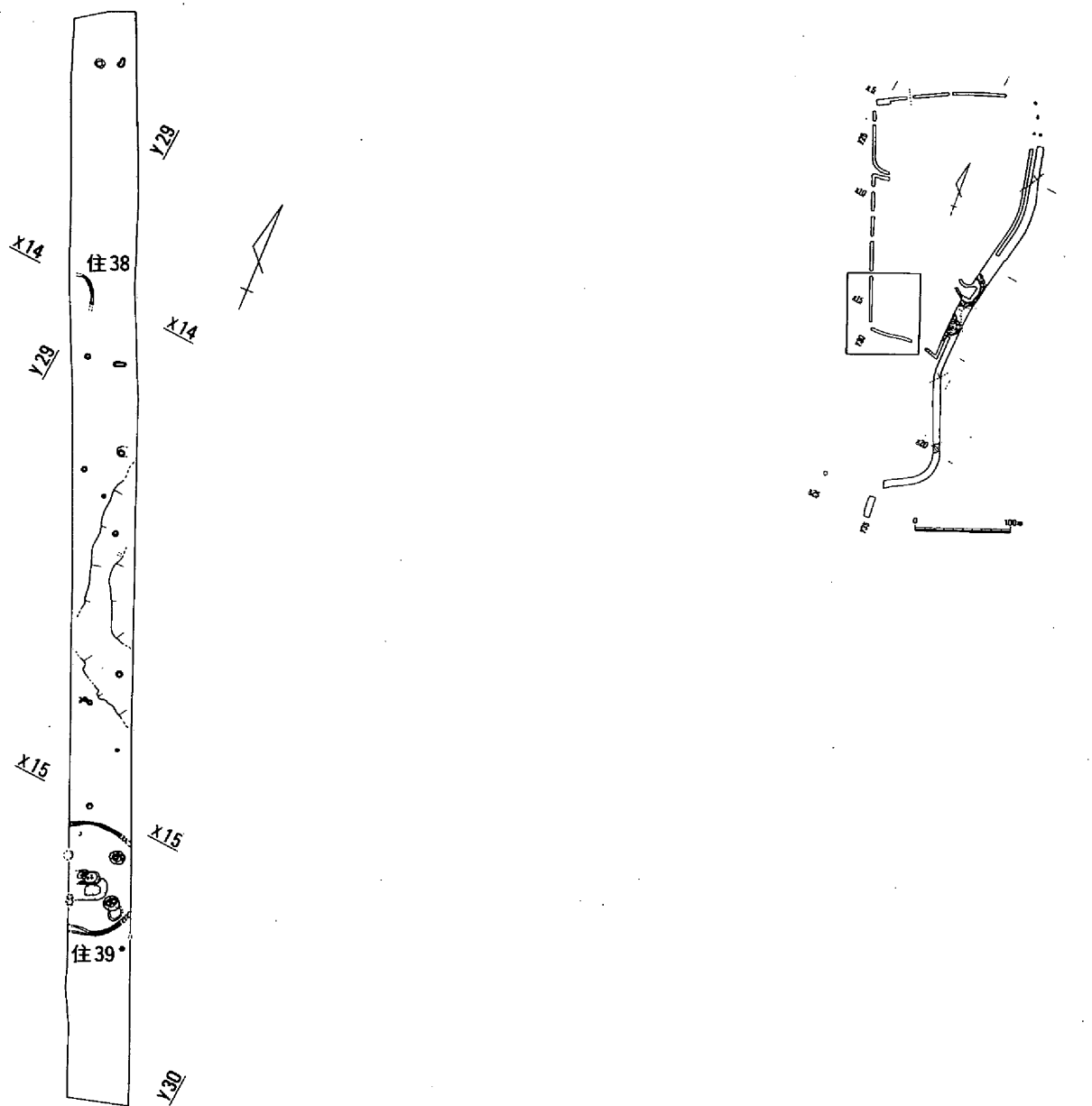
番号のみは土城、住は竪穴住居、袋は袋状土城、Pは柱穴



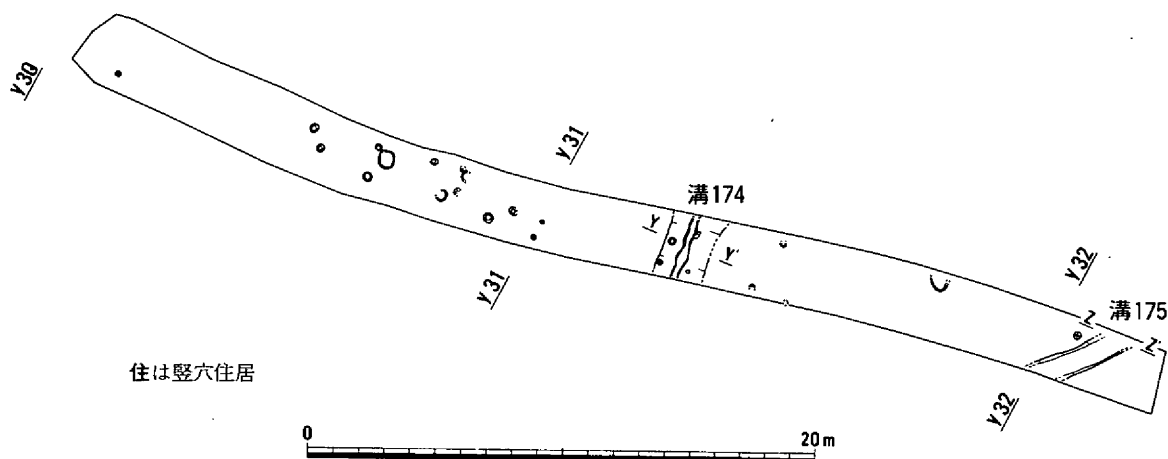
第25図 弥生時代遺構全体図(3) (YA3区南半・5区) (1/300)



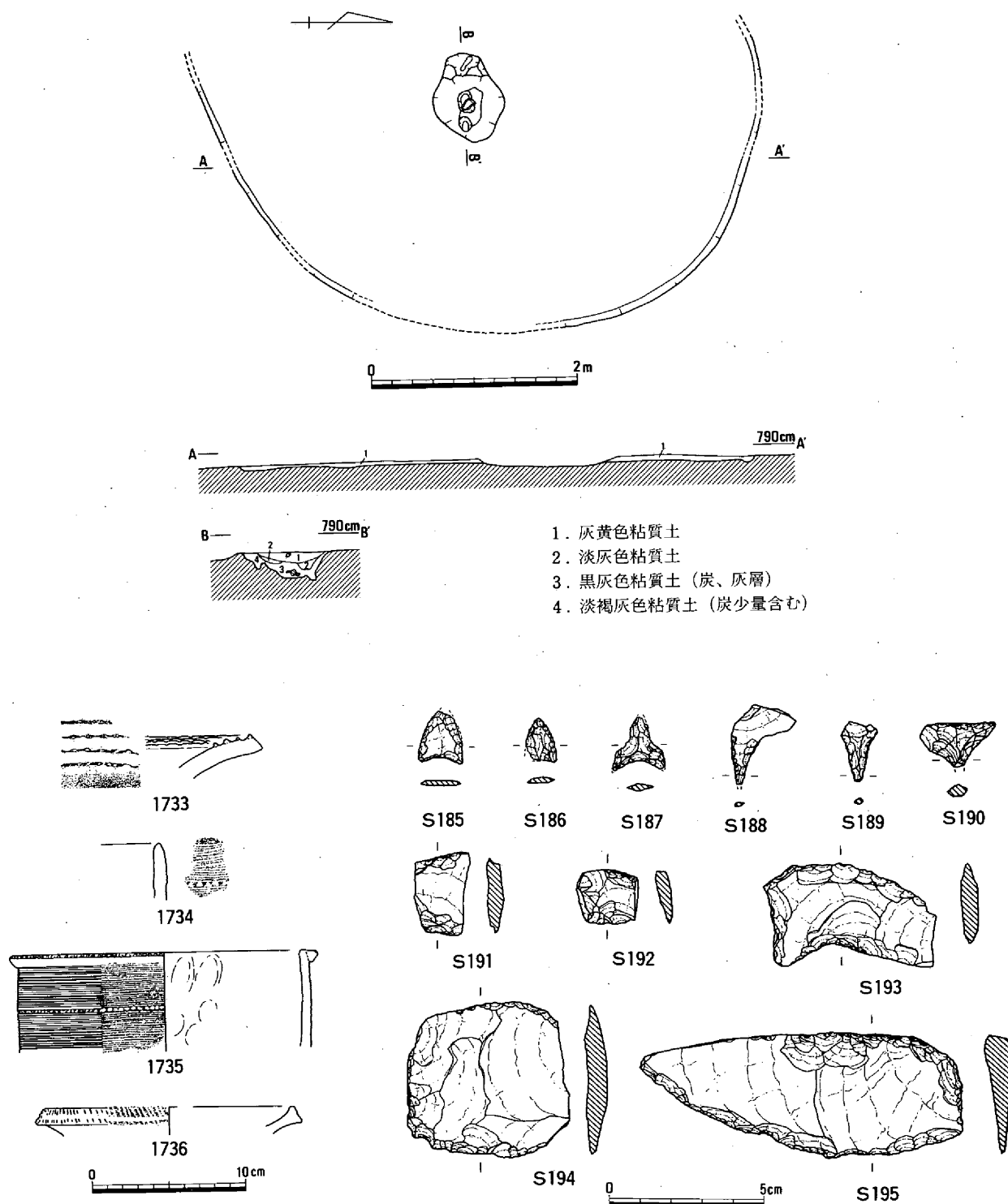
第26図 弥生時代遺構全体図(4) (HC3・4区) (1/300)



HC3区 南半



第27図 弥生時代遺構全体図(5) (HC3区南半) (1/300)

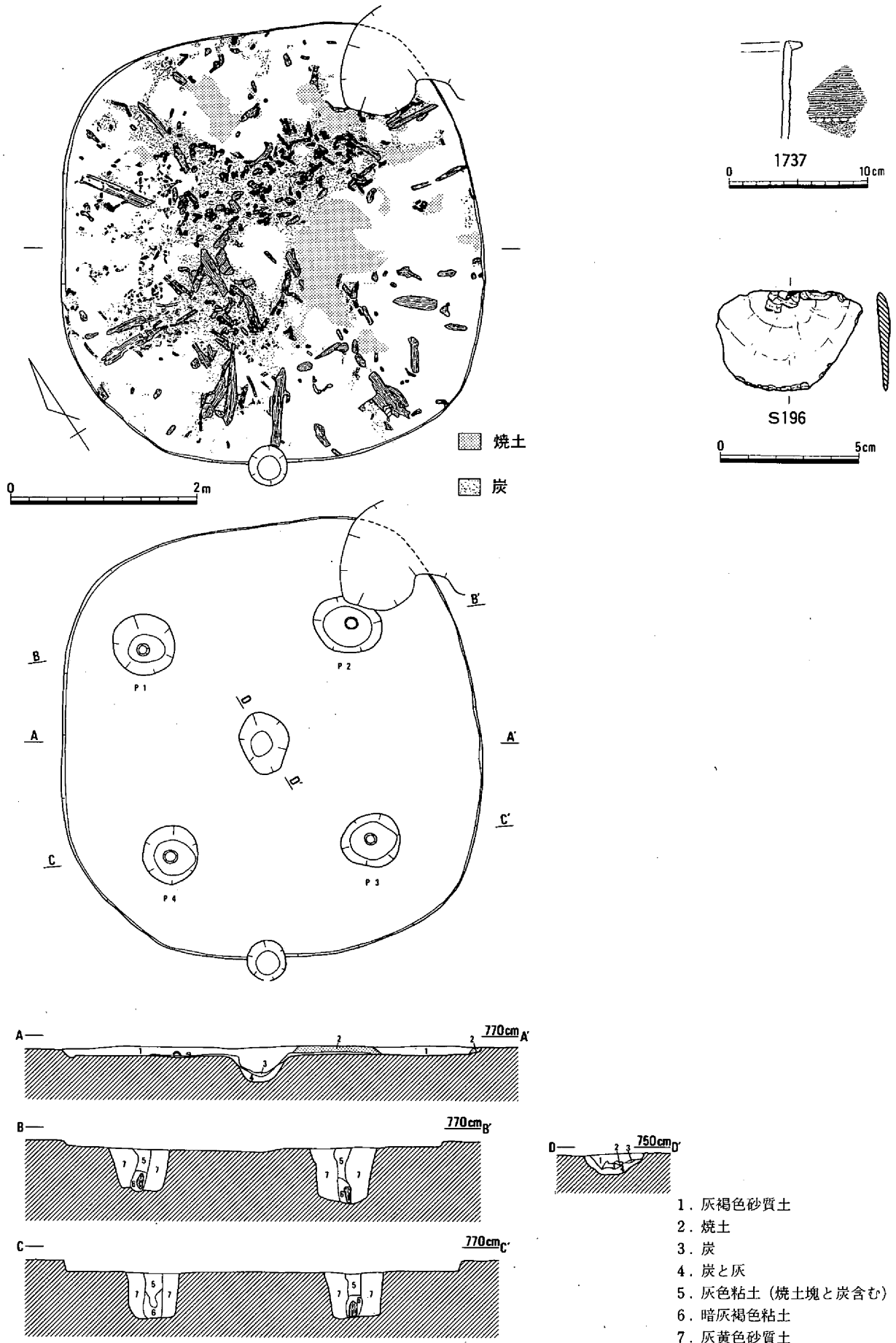


第28図 竪穴住居28 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

(2) 建 物

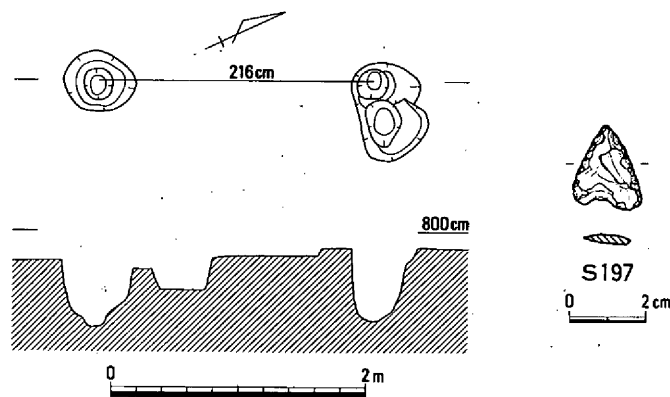
建物58(第30図)

YA 2 A区の南端部に位置する。2本の柱穴の存在から建物と推定した根拠は、まわりの柱穴に比べて規模が大きいこと、および2本ともに同じような状態で柱材が残存していたことである。規模は径50cm前後の円形～楕円形で、深さは50～60cm残存していた。



第29図 竪穴住居29 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

残存する2本の柱穴は西側の梁行に相当し、桁行が東側の調査区外にのびているものと考えられる。遺物は各柱穴から弥生土器の小片が、また北側の柱穴からは石鏃S197が出土した。時期は北側の柱穴が土壌147に、南側の柱穴が土壌148によって切られていることなどから、弥生時代前期後葉～中期前葉と考えておきたい。(平井)



第30図 建物58 (1/60)・出土遺物 (1/2)

(3) 土 壙

土壌125(第31図)

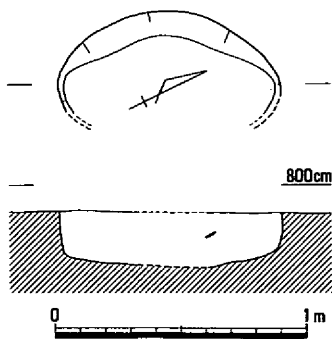
YA2A区の北端部に位置する。南東部は古墳時代の溝176によって切られているが、平面形は長楕円形で、深さは約20cm残存していた。埋土は暗褐色砂質土である。遺物は、弥生時代前期後葉ではないかと考えられる土器の小片が少量出土している。(平井)

土壌126(第32図)

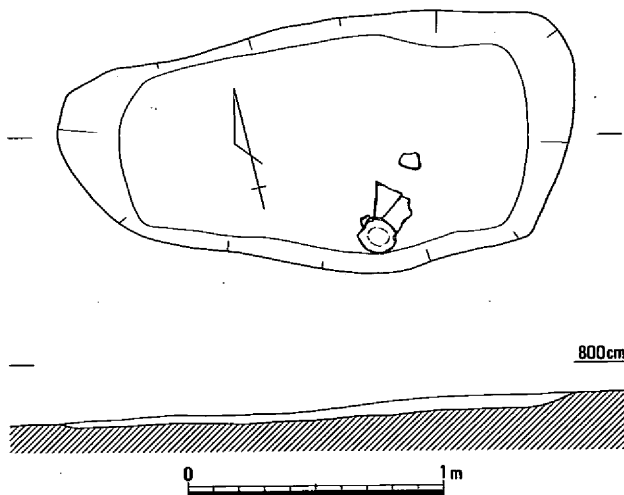
YA2A区の北端部の土壌125の南、竪穴住居30の東隣りにおいて検出した。土壌127を切るかたちで検出できており、平面形は約2×1mの西側が狭い不整長方形である。深さは検出面から5cm前後残存していたにすぎない。埋土は灰褐色砂質土が一層のみであった。遺物は弥生時代前期後葉と考えられる土器片とサヌカイトの剝片が少量出土している。(平井)

土壌127(第33図)

YA2A区の北端部において検出できた。この土壌は調査の最終段階において確認したもので、当初は図示したような10cm前後の礫がまとまって存在していたため、周辺の土層を精査することによって土壌と判断した。しかしながら埋土は灰褐色砂質土で、周辺の土との区別はかなり難しく、また礫以外に遺物が全く出土しなかったことや平面形が不定形であることから、人為的なものではない可能性もある。時期は明確ではないが弥生時代前期後葉頃と考えている。(平井)



第31図 土壌125 (1/30)



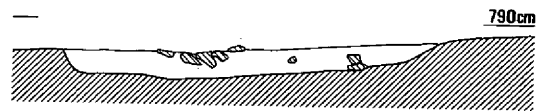
第32図 土壌126 (1/30)

土壌128(第34図)

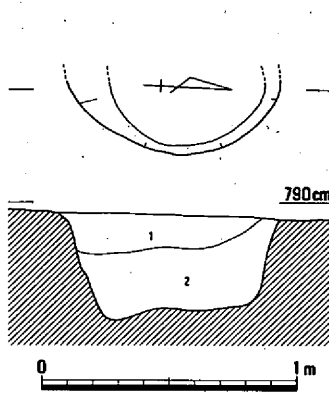
HC1A区の北端部、竪穴住居31の南において検出した。平面形は西半部が側溝に切られているが、長径約80cmの楕円形であったと推測できる。断面形は逆台形で、深さは42cm残存しており、埋土は二層に分離できた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は明確ではないが弥生時代前期後葉～中期前葉と考えられる。(平井)

土壌129(第35図)

HC1A区の北端部、土壌128の南東部に位置する。平面形は約70×58cmの楕円形で、深さは26cm残存していた。埋土は二層に分離でき、下層には炭や灰が含まれており、竪穴住居の中央穴の可能性も考えられる。遺物は弥生時代中期前葉の土器片と鎌・楔などの石器が少量出土している。(平井)

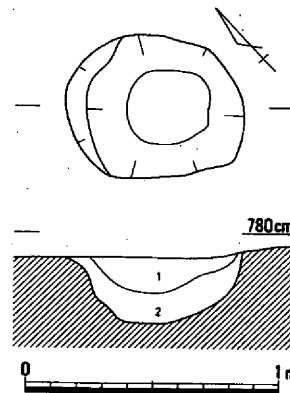


第33図 土壌127 (1/30)



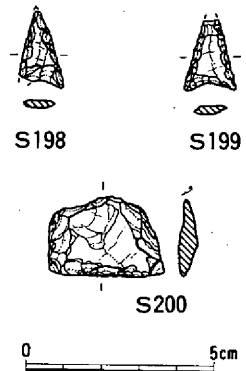
1. 灰褐色砂質土 2. 暗褐色粘質土

第34図 土壌128 (1/30)



1. 黄褐色砂質土 2. 暗灰色粘質土 (炭、灰含む)

第35図 土壌129 (1/30)・出土遺物 (1/2)

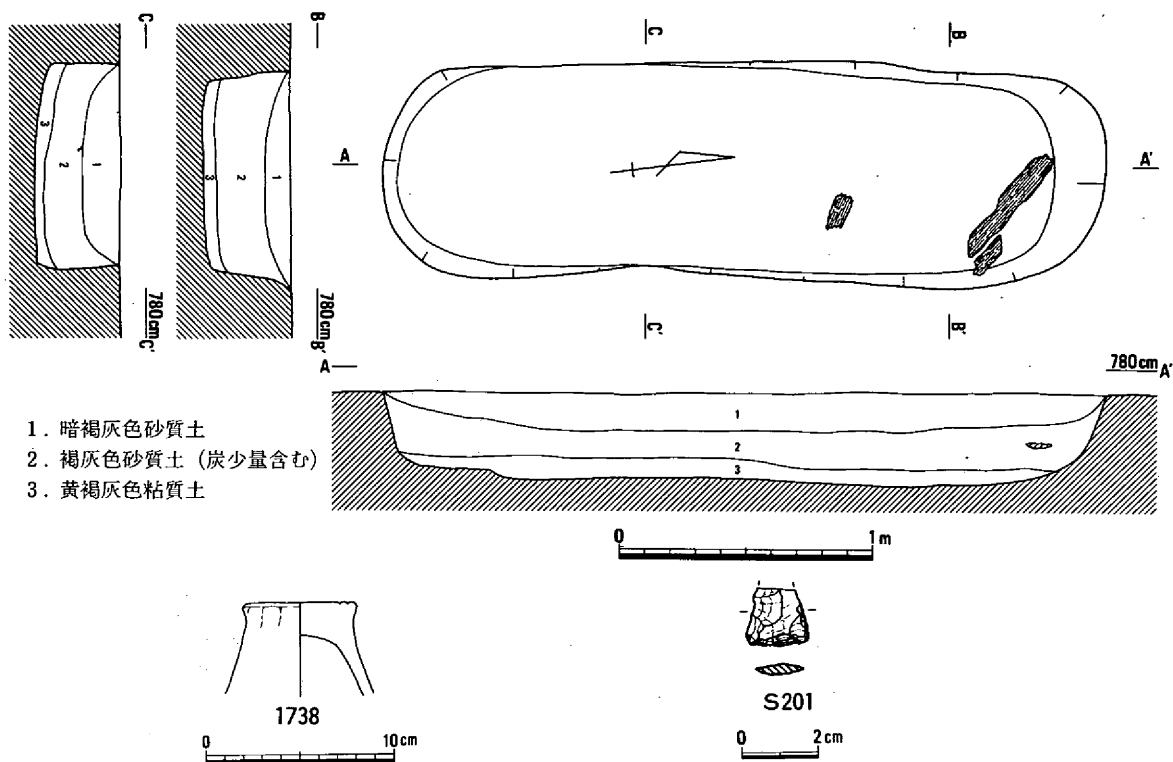


土壌130(第36図)

YA2A区の北端部において土壌129に切られるかたちで検出できた。平面形は約285×88cmの長方形形状を呈し、深さは検出面から36cm残存していた。東西の長辺側の壁面は垂直にちかく立ち上がっていたが、南北の壁面はゆるやかに立ち上がっている。埋土は三層に分離でき、図の2層には炭化材や炭を含んでいた。遺物は少量の弥生時代中期前葉の土器片や11点のサヌカイト製の鎌や楔・剝片が出土している。形状から土壌墓の可能性も考えられるが、明確ではない。(平井)

土壌131(第37図)

HC1A区の北端部、土壌130の南東部において検出した。平面形は古墳時代の溝や側溝によって一部を切られているため明確ではないが、70×50cm前後の長楕円形であったと考えられる。断面形は皿形で、埋土は二層に分離でき、下層には炭や灰が含まれていたため、竪穴住居の中央土壌である可

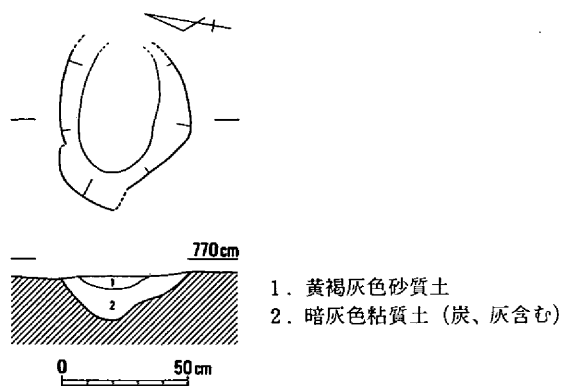


第36図 土壙130 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

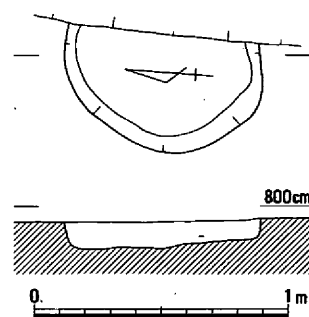
能性が考えられる。遺物は僅かな土器片とサヌカイト片が出土したのみである。時期は弥生時代前期後葉～中期前葉ではなかろうか。(平井)

土壙132(第38図)

YA2A区の北端部に位置する。東側が古墳時代の溝179に切られているが、平面形は直径80cm前後の円形ではなかろうか。深さは10cm前後残存しており、埋土は灰褐色砂質土で、底面はほぼ平らであった。遺物は弥生時代前期後葉～中期前葉の土器片が少量出土したのみである。(平井)



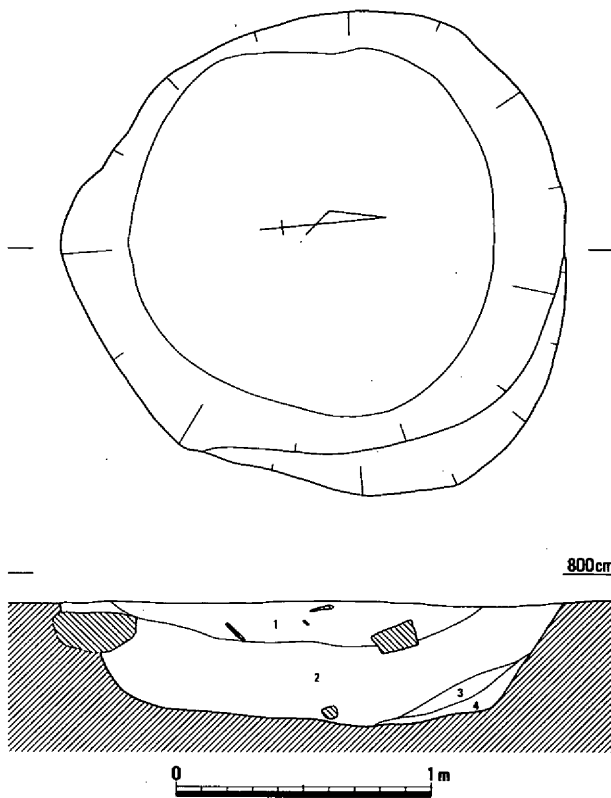
第37図 土壙131 (1/30)



第38図 土壙132 (1/30)

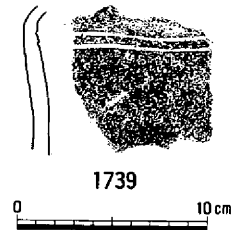
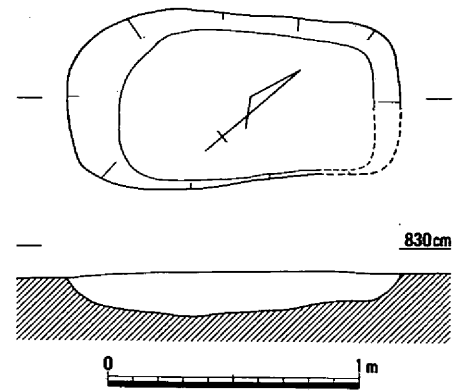
土壙133(第39図)

YA2A区の北端部、土壙132の北東部に位置する。平面形は直径2m前後の円形で、深さは約50cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は四層に分離することができた。遺物は、弥生時代前期後葉と考えられる土器片が少量とサヌカイトの剥片が1片出土しているのみである。(平井)



1. 灰褐色砂質土 (焼土多く含む) 3. 灰黄色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土 4. 灰褐色砂質土

第39図 土壌133 (1/30)



第40図 土壌134 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌134(第40図)

YA 2 A区の北端部、土壌133の南東部に位置する。平面形は約132×72cmの長形状で、深さは約16cm残存していた。埋土は炭を含む灰褐色砂質土である。遺物は、弥生時代前期中葉の土器が少量出土したのみである。 (平井)

土壌135(第41図)

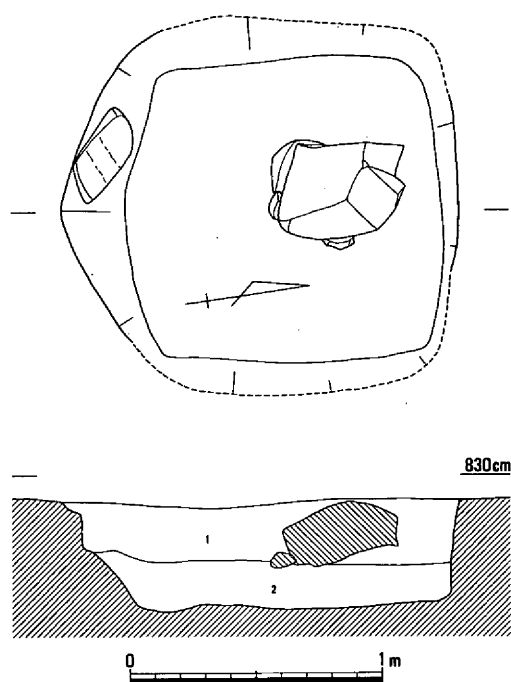
YA 2 A区の北端部、土壌134の南に位置する。平面形は北西部が土壌155によって、また東端部は側溝によって切られているが、160×150cm前後の長形状を呈していたものと考えられる。深さは約40cm残存しており、底面はほぼ平らであった。埋土は二層に分離でき、上層には大きな石が埋まっていた。遺物は弥生時代前期後葉～中期前葉の土器片とサヌカイト片が少量出土した。 (平井)

土壌136(第42図)

YA 2 A区の北端部、土壌135の西に位置する。平面形は134×86cm前後の不整長楕円形で、深さは26cm残存していた。断面形は皿形ではあるが、二段堀りのような状況が認められた。埋土は暗褐灰色砂質土である。遺物は、弥生時代前期後葉の土器片とサヌカイト片が少量出土した。 (平井)

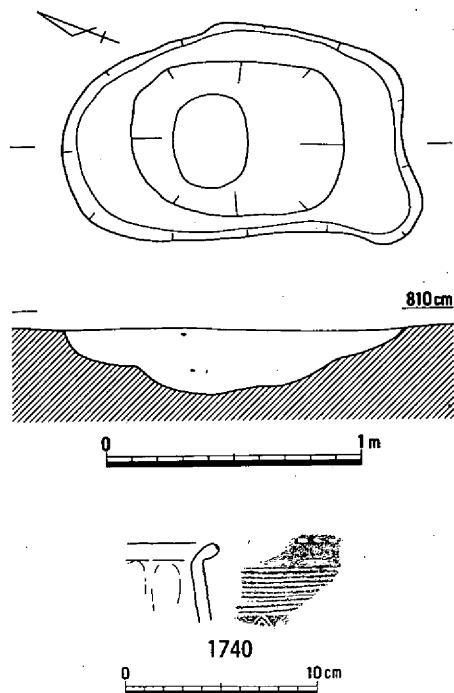
土壌137(第43図)

YA 2 A区の中央部、土壌136の南に位置する。北端部の一部は袋状土壌29に切られている。平面形は150×130cm前後の不整楕円形で、深さは20cm前後を測る。埋土は、炭を含む暗褐灰色砂質土である。遺物は弥生時代前期後葉の土器片、およびサヌカイトの鏃・剝片や約4×3.5×0.5cmの大きさに1cm弱の小穴のあいた溶結凝灰岩(人工品ではない?)が出土している。 (平井)



1. 暗褐灰色砂質土 2. 灰褐色砂質土 (黄色砂質土含む)

第41図 土壙135 (1/30)



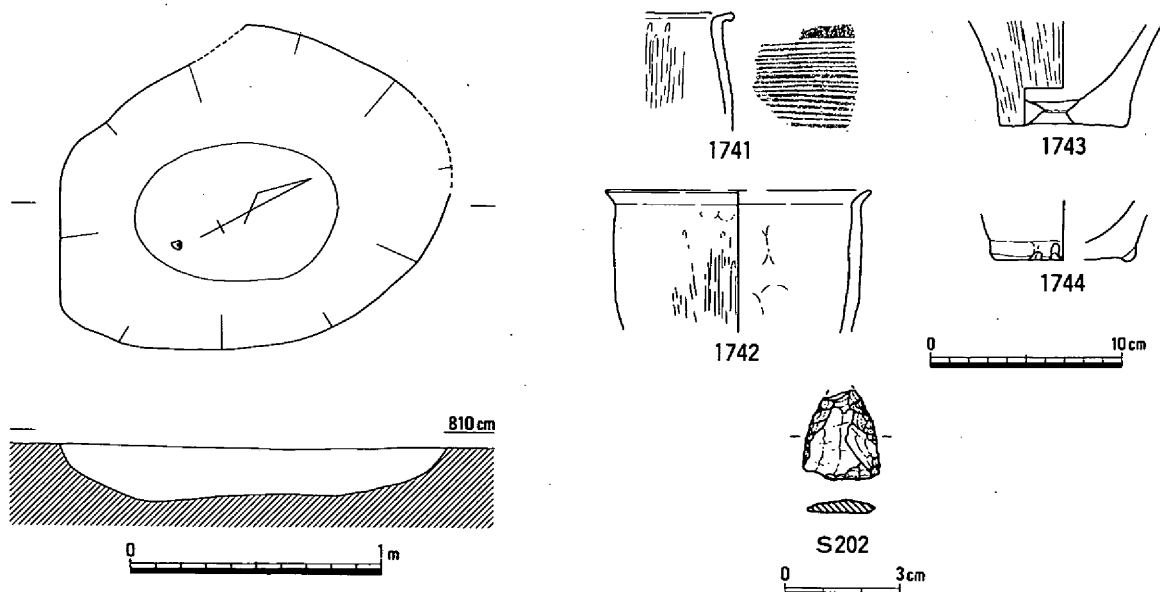
第42図 土壙136 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙138(第44図)

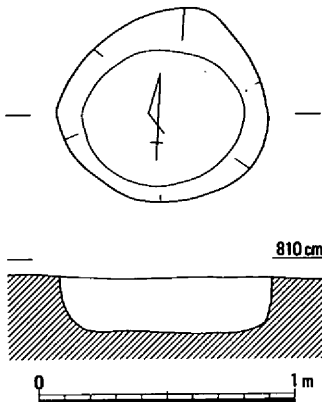
YA 2 A区の中央部、土壙137の南に位置する。平面形は直径80cm前後の円形で、深さは22cm残存していた。底面はほぼ平らで、埋土は灰褐色砂質土が一層のみである。遺物は弥生時代前期と思われる土器片が少量出土したのみである。(平井)

土壙139(第45図)

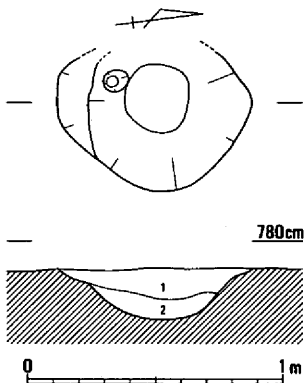
HC 1 A区の中央部において検出した。西端部は側溝によって切られているが、平面形は76×65cm前後の楕円形であったと推測できる。深さは約20cm残存しており、断面形は皿形である。埋土は二層



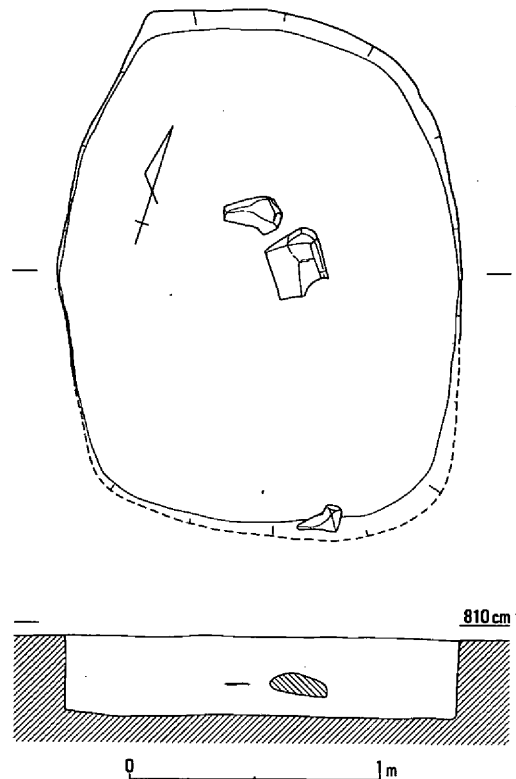
第43図 土壙137 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



第44図 土壌138 (1/30)



第45図 土壌139 (1/30)



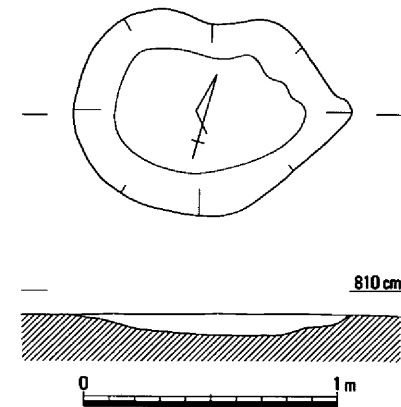
第46図 土壌140 (1/30)

に分離でき、下層には炭・灰を含んでいるため、竪穴住居の中央土壌である可能性も考えられる。遺物は弥生時代前期?の土器片とサヌカイトの剥片が少量出土している。(平井)

土壌140(第46図)

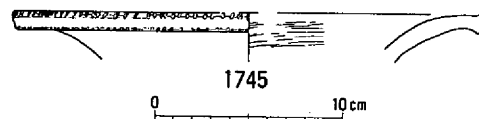
YA2A区の中央部において検出した。南東部は竪穴住居34に切られているが、平面形は210×160cm前後の長方形であったと考えられる。深さは32cm残存しており、底面はほぼ平らで、壁面は垂直にちかく立ち上がっている。埋土は炭を含む暗褐色灰色砂質土で、20cm前後の礫も含まれていた。遺物は弥生時代前期後葉と考えられる土器片とサヌカイトの剥片が少量出土している。(平井)

土壌141(第47図)



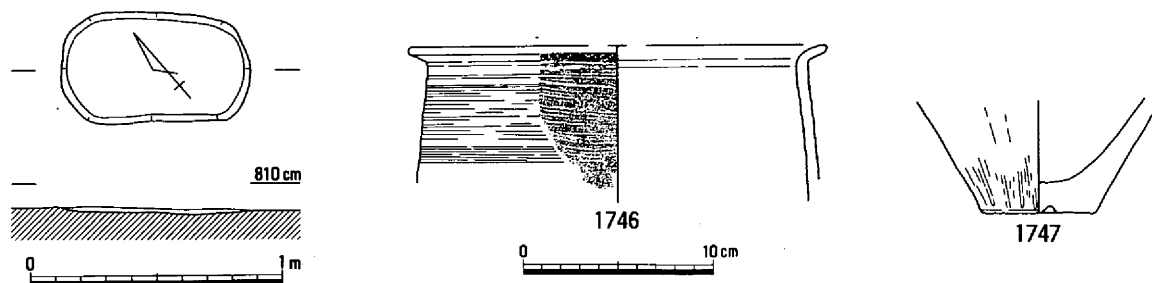
第47図 土壌141 (1/30)・出土遺物 (1/4)

YA2A区の中央部において検出した。平面形は110×80cm前後の不整楕円形で、深さは約10cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は暗褐色灰色砂質土が一層のみである。遺物は弥生時代前期後葉前後の土器片が少量出土している。(平井)



土壌142(第48図)

YA2A区の中央部、土壌141の南に位置する。平面形は75×42cm前後の長方形で、深さは3cmほど残存していたにすぎない。埋土は暗褐灰色砂質土が一層のみである。遺物は弥生時代中期前葉の土器片が少量出土している。(平井)



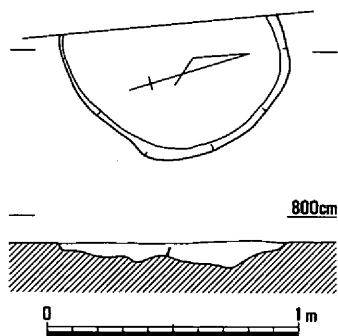
第48図 土壌142 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌143(第49図)

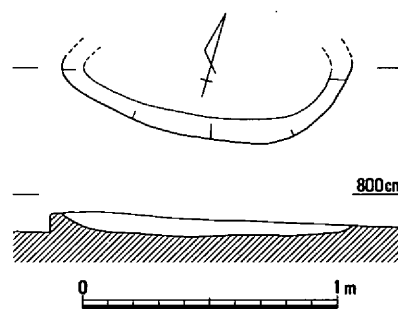
HC1A区の南半部において検出した。西側は調査区外にのびているが、平面形は直径80cm前後の円形ではなかったかと推測できる。深さは最大でも約10cm残存していたにすぎない。断面形は皿形で、底面には凹凸が認められた。埋土は灰褐色砂質土が一層のみである。遺物は弥生時代中期前葉?の土器片が少量出土している。(平井)

土壌144(第50図)

YA2A区の南端部において検出した。北半部はトレンチによって切られているため全体の形状は明らかではない。深さは約8cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は炭を含む暗褐灰色砂質土である。遺物は少量の弥生時代中期前葉?の土器片とサヌカイトの剝片が1片出土している。(平井)



第49図 土壌143 (1/30)



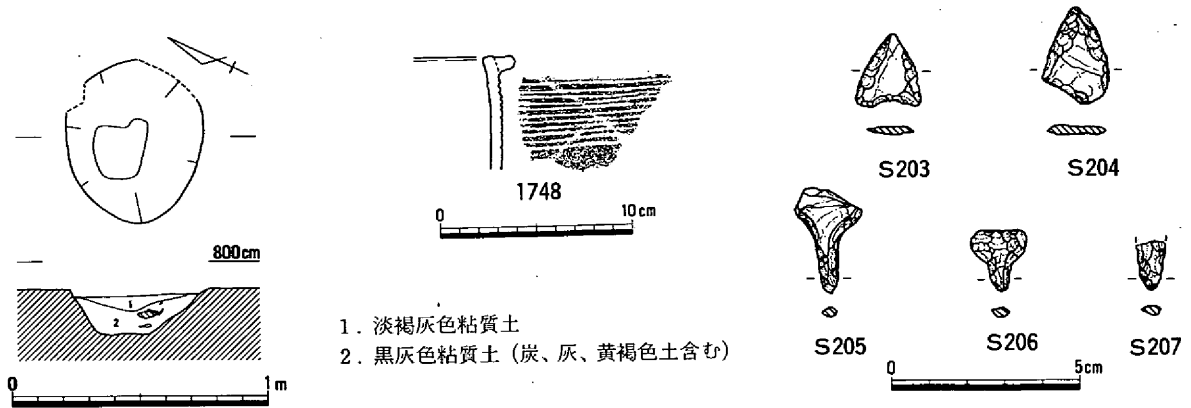
第50図 土壌144 (1/30)

土壌145(第51図)

YA2A区の南端部、土壌144の南東部に位置する。平面形は東端部を側溝によって切られているが、66×54cm前後の楕円形で、深さは約18cm残存していた。断面形は逆台形にちかい。埋土は二層に分離でき、下層には炭・灰を多く含んでいるため、竪穴住居の中央土壌である可能性も考えられる。遺物はおもに図の2層から弥生時代前期後葉の土器片が、また図示したようなサヌカイト製の鎌・錐のほかに6点の楔片や剝片が出土している。(平井)

土壌146(第52図)

YA2A区の南端部、土壌145の南西部に位置する。平面形は東側が古墳時代の溝178に、また西側

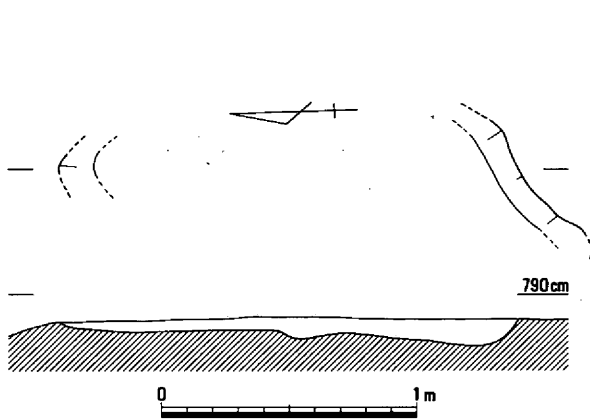


第51図 土壌145 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

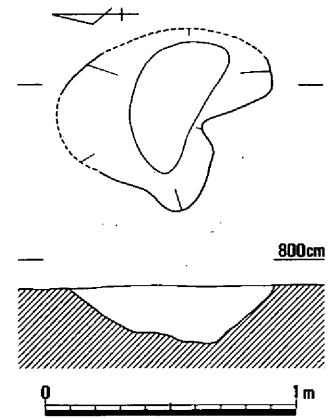
は側溝によって切られているため不明である。深さは最深部で約10cm残存しており、埋土は暗褐灰色砂質土である。遺物は弥生時代中期前葉?の土器片が数片出土したのみである。(平井)

土壌147(第53図)

YA2A区の南端部において建物58の柱穴を切るかたちで検出できた。平面形は不整形で、深さは23cm残存していた。埋土は炭・焼土粒を含む暗褐灰色砂質土が一層のみである。遺物は弥生時代前期後葉～中期前葉の土器片が少量出土したのみである。(平井)



第52図 土壌146 (1/30)



第53図 土壌147 (1/30)

土壌148(第54図)

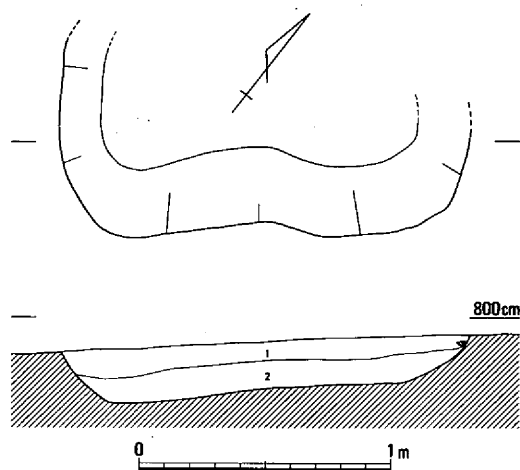
YA2A区の南端部において建物58の柱穴を切る形で検出できた。平面形は北端部がトレンチによって切られているため明らかではないが、おそらく長方形状を呈していたものと考えられる。深さは約20cm残存していた。埋土は二層に分離することができ、いずれも炭・焼土を含んでいた。遺物は弥生時代中期前葉?の土器片が少量出土している。(平井)

土壌149(第55図)

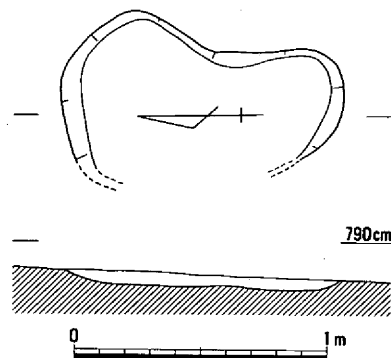
YA2A区の南端部、土壌148の南西部に位置し、土壌150を切るかたちで検出できた。平面形は不整形で、深さは約6cm残存していた。埋土は小礫や炭粒を含む褐灰色砂質土である。遺物は弥生時代中期前葉?の土器片が少量出土したのみである。(平井)

土壌150(第56図)

YA2A区の南端部に位置する。土壌149と平安時代の溝203に切られている。検出できた平面形は



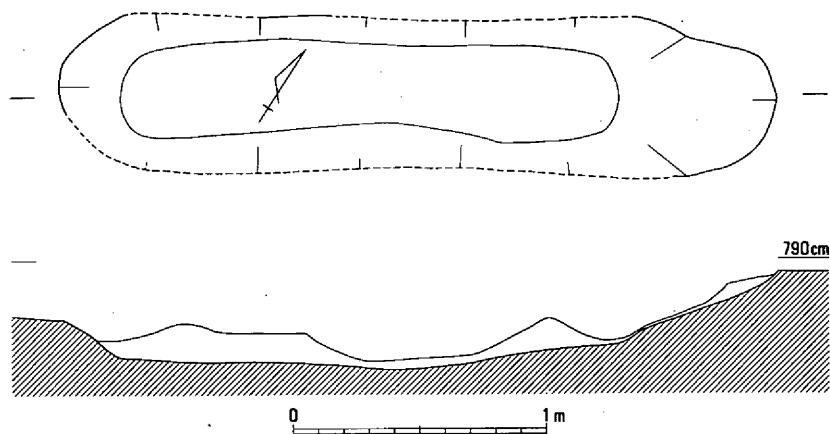
第54図 土壇148 (1/30)



第55図 土壇149 (1/30)

1. 暗灰色粘質土
(黄色粘土ブロック、炭、焼土を含む)
2. 褐灰色粘質土
(黄色粘土ブロック、炭、焼土を含む)

283×61cm前後の長楕円形で、深さは最大で15cm残存していた。埋土は暗灰色粘土である。遺物は出土しなかったが、時期は土壇149に切られていることから、弥生時代前期後葉～中期前葉と考えておきたい。(平井)



第56図 土壇150 (1/30)

(4) 溝

溝152(第23・57図)

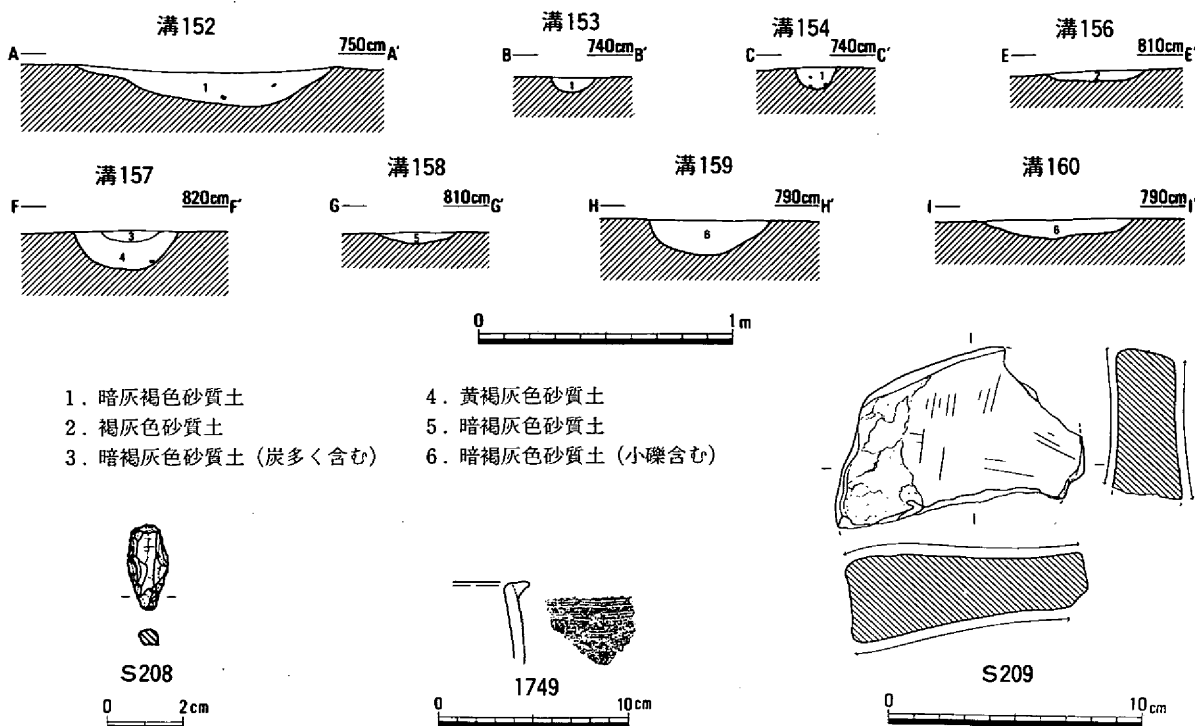
H C 6区の中央部において北西—南東方向に確認できた。幅は50cm前後で、深さは最大で14cm残存していた。底面の海拔高は7.3m前後である。断面形は皿形で、埋土は暗灰褐色砂質土である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代前期後葉ではないかと考えられる。(平井)

溝153・154(第23・57図)

H C 6区の中央部、溝152の南において検出した溝である。2条の溝は東西にほぼ並行している。規模も近似しており、幅15～20cm、深さ5～10cmである。底面の海拔高は7.25～7.30mで、調査区内では西側が高い。埋土はいずれも暗灰褐色砂質土が一層のみであった。遺物は溝153から少量の土器片が、また溝154からは少量の土器片とサヌカイトの錐S208と剝片が1片出土している。時期は明確ではないが、弥生時代前期後葉と考えられる。(平井)

溝155(第23・58図)

Y A 2 A区の中央部に位置する。南側は古墳時代の溝179に切られており、検出できたのは長さ約4.5mで、北側についても本来続いていたのか、削平されて検出できなかったのかは明らかではない。



第57図 溝152~154・156~160断面図 (1/30)・溝153・157出土遺物 (1/2・1/4・1/3)

幅は65~90cm、深さは最大で約15cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は炭を含む暗褐灰色砂質土が一層のみである。底面の海拔高は7.9m前後である。遺物は土器、石器が出土しており、土器は図示したように同一の高さで面的に出土しており、798はほぼ完形に接合・復元することができた。石器は図示した以外に石核と剝片が出土している。時期は弥生時代中期前葉である。(平井)

溝156・157(第23・57図)

YA2A区の中央部に位置し、いずれも竪穴住居35に切られている。検出できた規模は、溝156が長さ約1.5m、幅30~40cm、深さ5cm前後で、溝157が長さ約3.5m、幅40cm前後、深さ15cm前後である。底面の海拔高は、溝156が8.0m、溝157が7.95m前後である。遺物は溝156から少量の土器片が、溝157から少量の土器片1749や砥石S209とサヌカイトの剝片が1片出土している。時期は明確ではないが、弥生時代前期後葉~中期前葉であろうと考えている。(平井)

溝158(第23・57図)

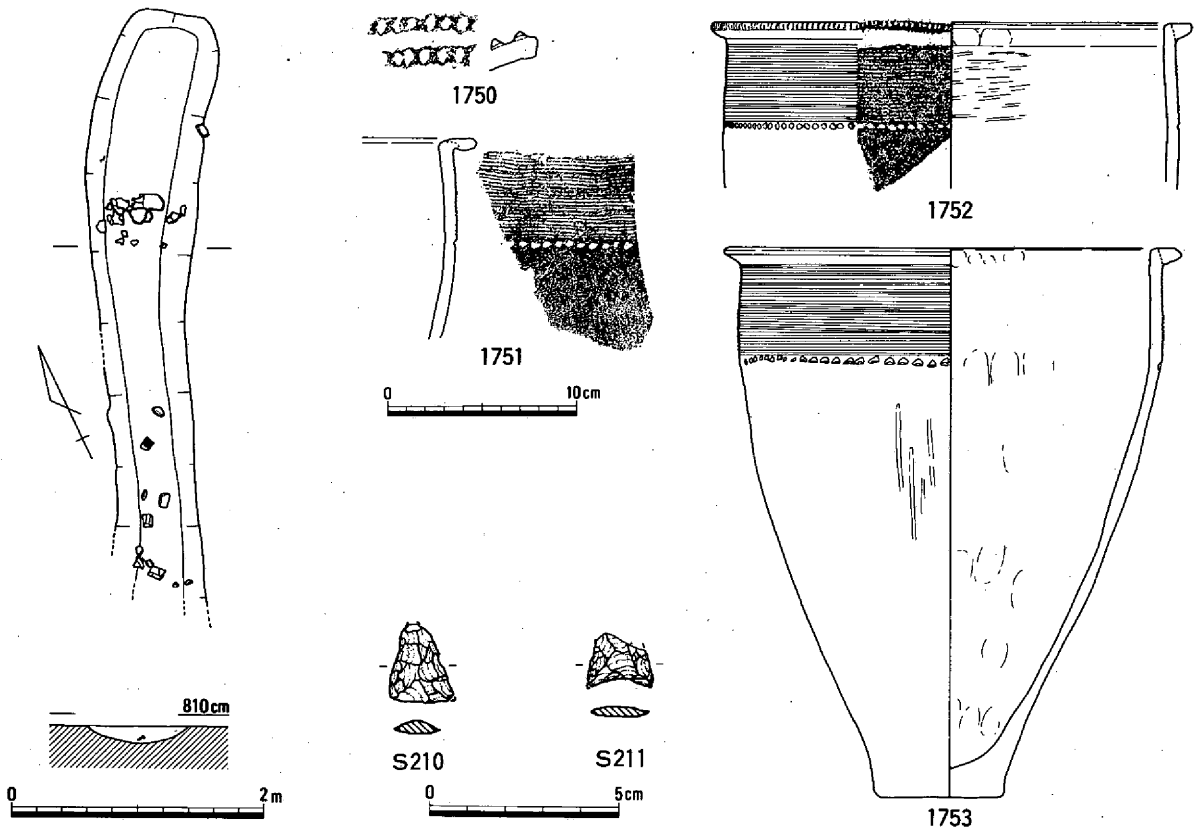
YA2A区の中央部、溝157の南に位置する。検出できた規模は、長さ約1.7m、幅30cm前後、深さ5cm前後で、断面形は皿形、埋土は暗褐灰色砂質土である。底面の海拔高は、7.95m前後である。遺物は少量の土器片が出土したのみである。時期は弥生時代前期~中期前葉であろう。(平井)

溝159・160(第23・57図)

YA2A区の南端部に位置する。検出できた規模は、溝159が長さ約4.5m、幅50cm前後、深さ15cm前後で、溝160が長さ約4m、幅60cm前後、深さ5~10cmである。切り合い関係は認められず、何かを画する溝の可能性が高い。遺物は溝159から少量の土器片とサヌカイトの楔・剝片が、溝160から少量の土器片とサヌカイトの剝片が出土した。時期は弥生時代中期前葉であろう。(平井)

溝161(第23・59図)

YA2B区の中央部に位置し、溝165に切られている。調査地は粘土で湧水があり、検出が難しく、平面・深さとも明確ではない。埋土は木片や葉を多く含む茶黒灰色粘土であった。時期は出土した少



第58図 溝155 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

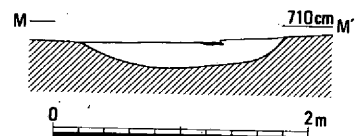
量の土器片などから弥生時代前期と考えている。

(平井)

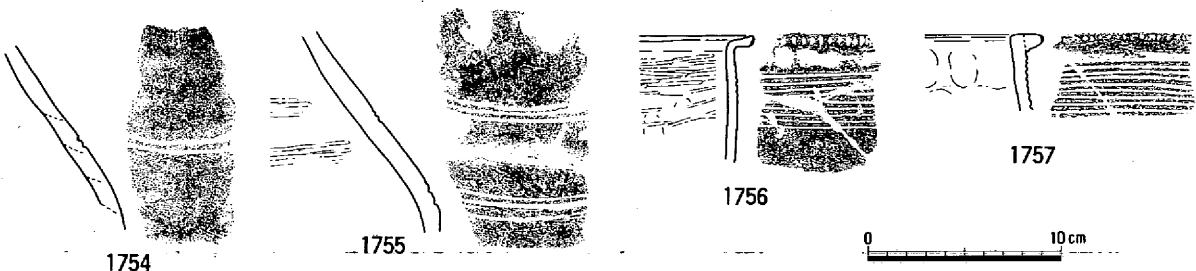
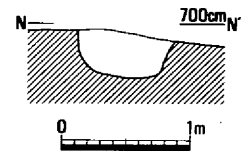
溝162(第23・60図、図版8-3)

YA2B、HC2A・2B区にわたって検出できた溝で、長さは約22m、幅は約70～150cm、深さは10～20cmであった。断面形は北側が皿形で、南側は逆台形にちかかった。埋土は小礫を含む黒灰色砂質土で、底面の海拔高は7m前後であった。遺物は少量の弥生時代前期中葉～後葉の土器片やサヌカイトの錐が出土した。

(平井)



第59図 溝161断面図 (1/60)

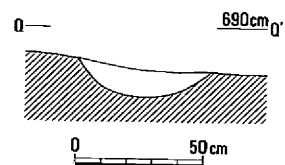


第60図 溝162断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

溝163(第23・61図)

YA3区北端に位置する。幅50cm前後で、底面の海拔高は6.63mを測る。YA2区とYA3区の間広がる低位部に沿っており、その位置関係や検出面から溝162に続く溝と考えられる。

(久保)



第61図 溝163断面図 (1/30)

第4節 弥生時代中期中葉～後期の遺構・遺物

1. 概要

地形は、弥生時代前期～中期前葉と大きな変化はなく、北端部のHC 5区周辺が湿地で、HC 2、YA 3・4区には丘陵の裾部に沿うかたちで溝が掘られていたものと想定できる。それ以外は微高地で、居住域になっていた。検出できた遺構は、竪穴住居10軒、掘立柱建物2棟、土壇37基、袋状土壇7基、溝12条、火処1、護岸状遺構1、石列1、柱穴などである。時期が特定できない遺構もあるが、時期ごとに立地が変化していることがうかがえる。例えば中期中葉では遺構は丘陵裾部に位置するYA 2A・2B区、HC 1A・1B区に集中しているが、中期後葉では全体の遺構数は少ないものの、ほとんどが南のYA 3区に集中している。ところが後期前葉にはYA 3区には検出されず、YA 2A区やHC 1A区以外にYA 5区やHC 3区でも確認できている。後期後葉になるとYA 3区のみで竪穴住居が検出されているが、この調査区では古墳時代前期前葉にも引き続いて竪穴住居や土壇が形成される。注目される遺物としては竪穴住居31から出土した緑色安山岩か緑色頁岩製の勾玉および管玉などの未製品や溝166・171から出土した木製の鍬や建築材、護岸状遺構出土の木製鍬、および時期は特定できないが磨製石鍬や分銅形土製品、ガラス小玉などがある。(平井)

2. 遺構・遺物

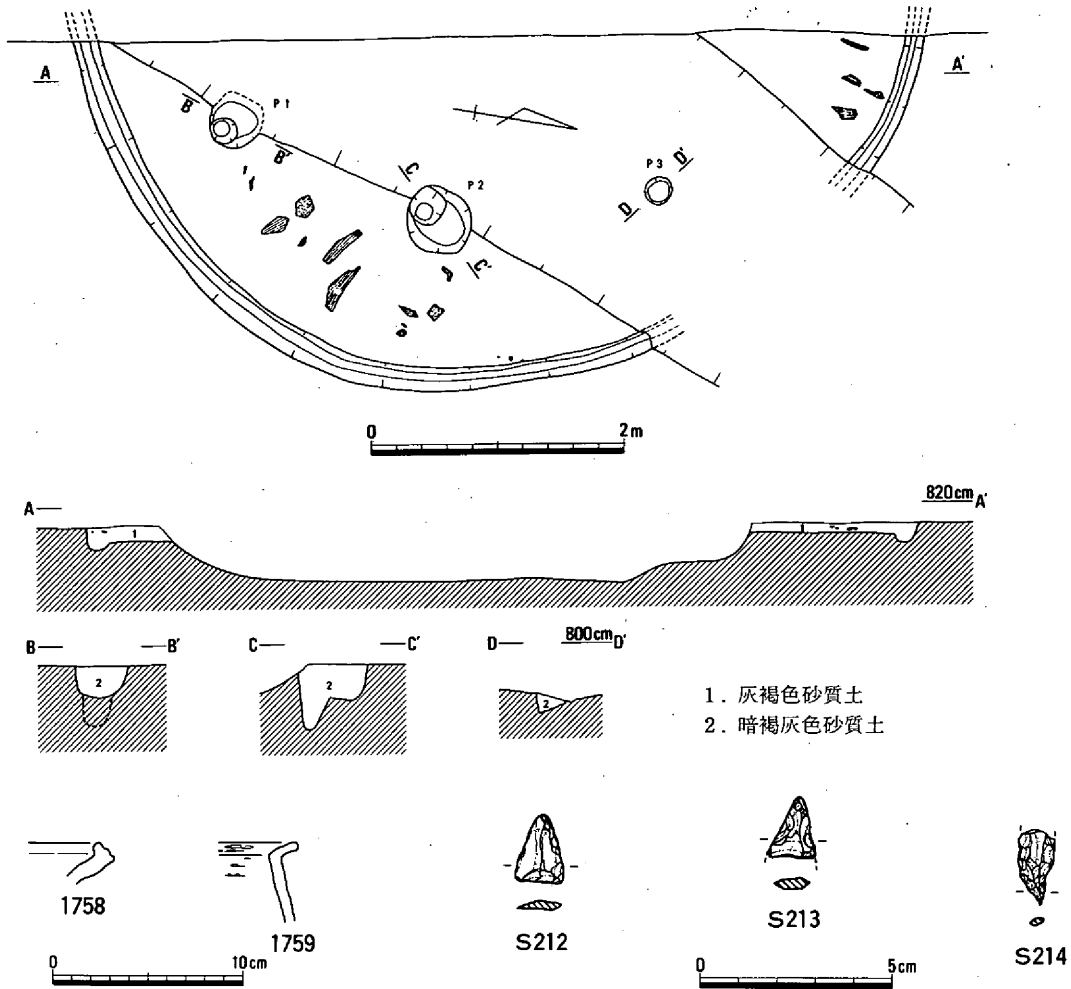
(1) 竪穴住居

竪穴住居30(第62図、図版3-3)

YA 2A区の北端部に位置する。中央部は古墳時代の溝179に切られ、また西半部は調査区外にのびている。検出できた平面形はほぼ円形で、深さは15cm前後残存していた。壁に沿って幅15cm前後、深さ7cm前後の溝が掘られている。床面上には図示したような状況で炭化材が残存しており、その一部は垂木材と考えられる。柱穴は3本確認することができた。掘り方は40～50cmの円形で、底面には柱痕跡が確認できる。P 3の底面は自然の石でとまっている。遺物は少量の土器片とサヌカイト製の鍬・錐や剝片が出土している。時期は弥生時代中期前葉～中葉ではなかろうか。(平井)

竪穴住居31(第63図、図版4-1)

HC 1A区の北端部に位置する。調査区の幅が狭いことや北側が現在の水田造成のために削平されており、検出できたのは、南側の壁の一部と壁体溝、2本の柱穴、および間仕切りの可能性も考えられる細い溝と焼土面のみである。深さは20cm前後残存していた。柱穴は直径50cm前後の不整円形で、床面からの深さは50cm前後で、P 1・2ともに底面には扁平な石が据えられていた。遺物は少量の土器片や石器が出土している。このうち土器は中期前葉のものが多く、それ以外に中期後葉～後期前葉の土器が数点含まれている。石器は図示した以外にもサヌカイトの剝片が10片あまり出土しているが、S215は砥石か扁平片刃石斧、S216は擦ったと考えられる部分が一面確認できる。S217～220は鍬、S221は打製石包丁片である。この竪穴住居内から出土した遺物のうちで特に注目されるのは、S222～225の玉と未製品である。S222は長さ1cmの小型の勾玉の完形品である。内外面とも研磨され、



第62図 竪穴住居30 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

穿孔は両面穿孔である。S223は約半分が欠損しているが管玉の未製品と考えられ、上面と下面のすべて、および側面の一部が研磨されている。また径約1.5mmの円孔が長さ約2mm穿たれている。側面まで完全に研磨する以前に穿孔が行われ、その途中で破損したものと推測したい。S224は図示したような扁平な石材のうち、左上の側面を除いて各面とも部分的ではあるが研磨が施されている。勾玉の製作途中かもしれない。S225は図の広い面のほぼ全てと側面の一部が研磨されている。管玉の製作途中であろうか。なおS222・223・224は平面図に示した位置のほぼ床面上から、またS225はP2の埋土中から出土した。S222～225の石材については、緑色安山岩か緑色頁岩という鑑定報告をうけている。S222～225の時期については、竪穴住居の一部のみしか調査できていないことや出土土器が少量でしかも時期幅があることから特定することはできない。出土土器からは弥生時代中期前葉から後期前葉の幅で捉えることができる。(平井)

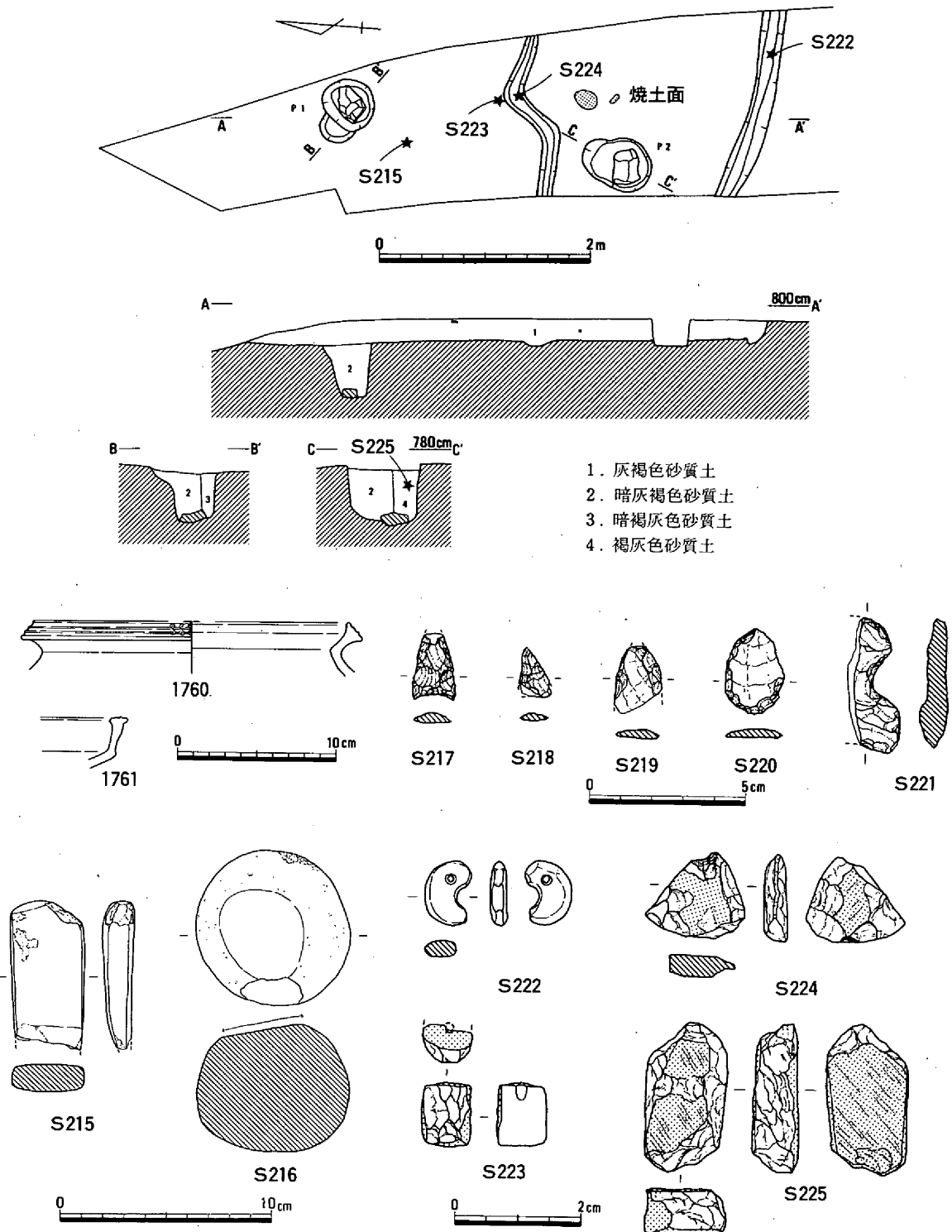
竪穴住居32(第64～66図、図版4-2)

HC1A区の北端部、竪穴住居31の南に位置する。調査区の幅が狭いことや土壌・柱穴・溝などの遺構が密集していたことなどから、検出は困難であった。竪穴住居32と考えたのは第64図の平面図の南側の部分で、根拠は壁体溝と考えられる溝、炭化材・焼土、一括廃棄土器の存在である。推定できる平面形は、直径5.1m前後の円形である。床面上には図示したような状態で炭化材と焼土が確認できたが、これらは後世の溝176・191などによって失われている部分も多い。また南端部には土器が一

括廃棄されており、この土器は1763・1764のように接合・復元することができた。

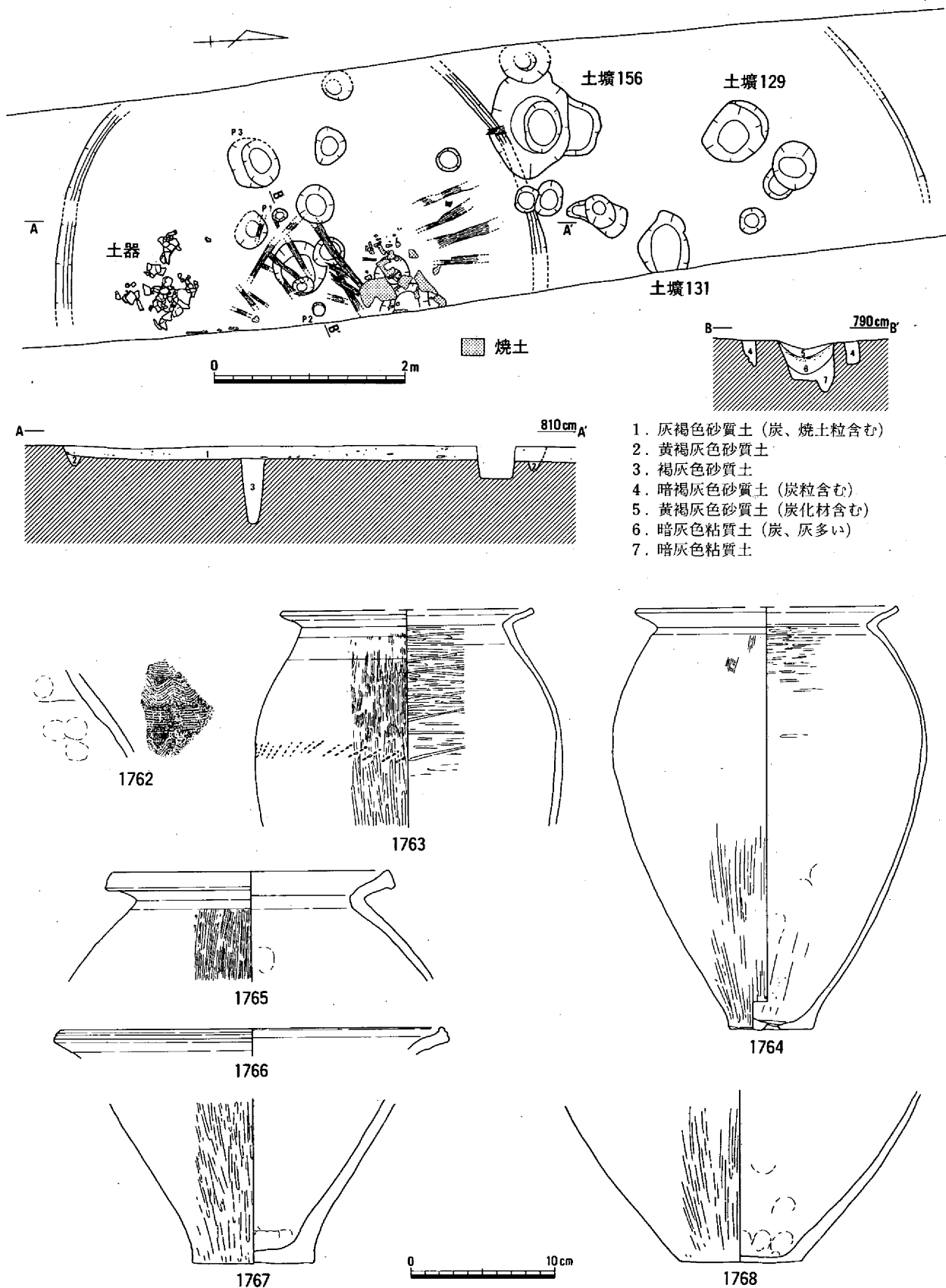
床面上からは幾つかの土壇や柱穴を検出することができた。これらのうち、検出できた場所や形状から、図のP1・2およびその間に挟まれた土壇を「中央土壇」と想定したい。支柱穴については、ある程度しっかりした柱穴を図示しているが、明確にすることはできなかった。

遺物は土器・石器が出土した。土器の出土は多くない。石器は多く出土している。図示した石器の

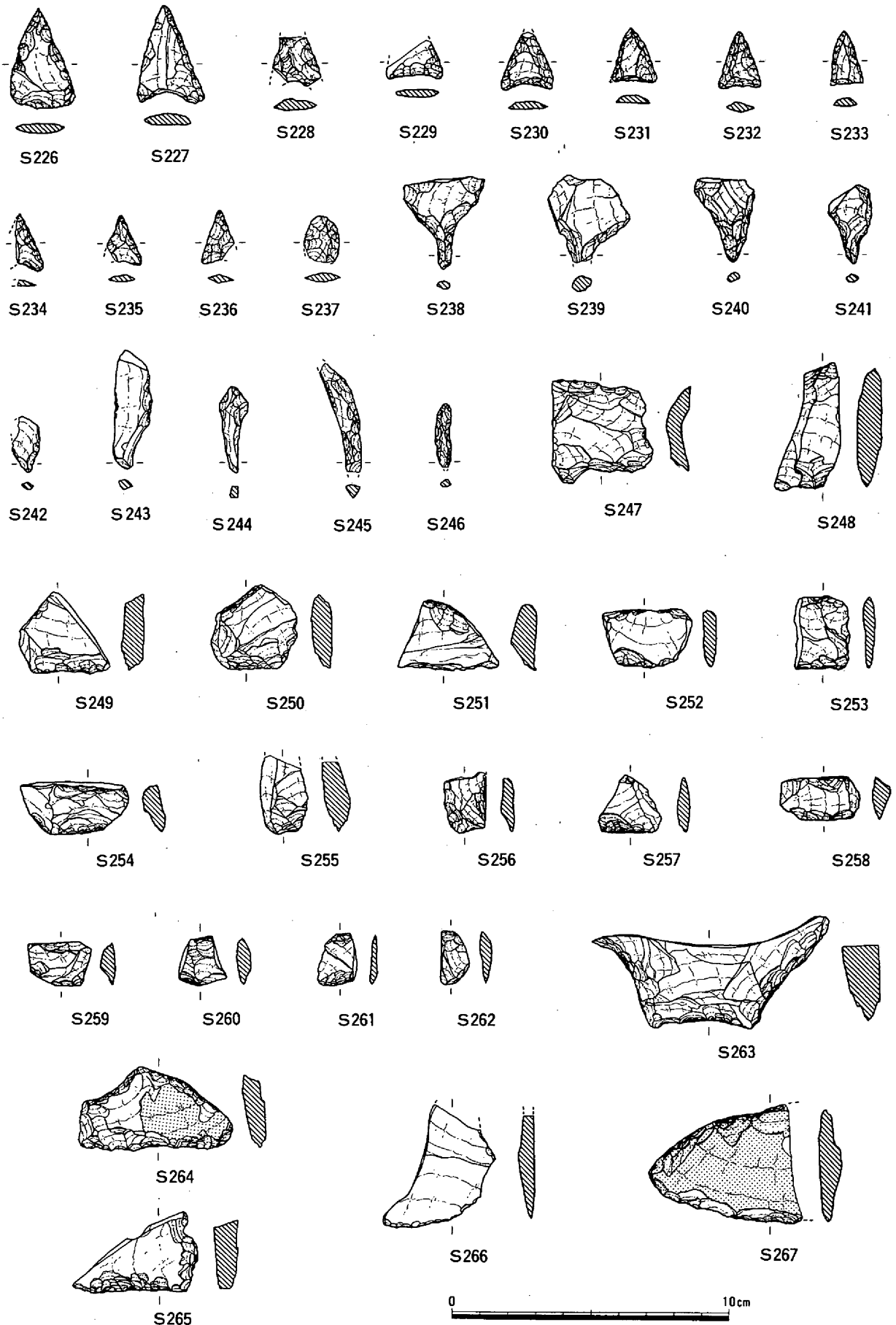


第63図 竪穴住居31 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)

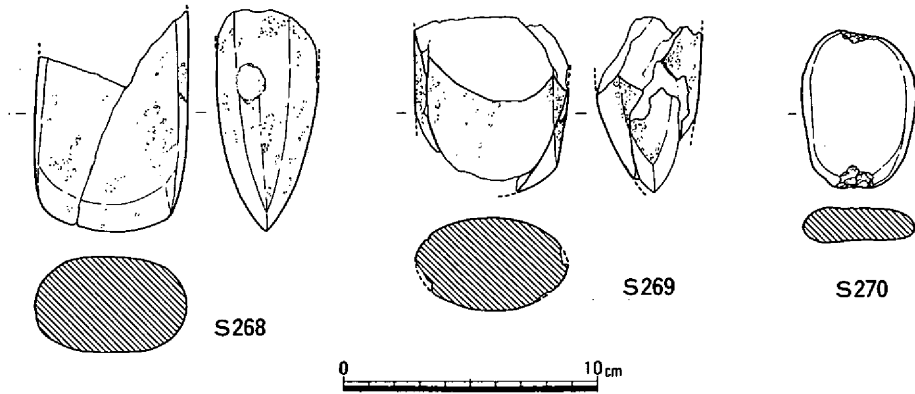
出土地点は、S226・253・260・264・265が柱穴内から、S242が北側の壁体溝内から、そのほかは埋土中および床面中からで、特に床面上には調査時点でサヌカイトの剥片が多く認められたので土と



第64図 竪穴住居32 (1/60)・出土遺物 (1) (1/4)



第65図 竪穴住居32出土遺物(2) (1/2)

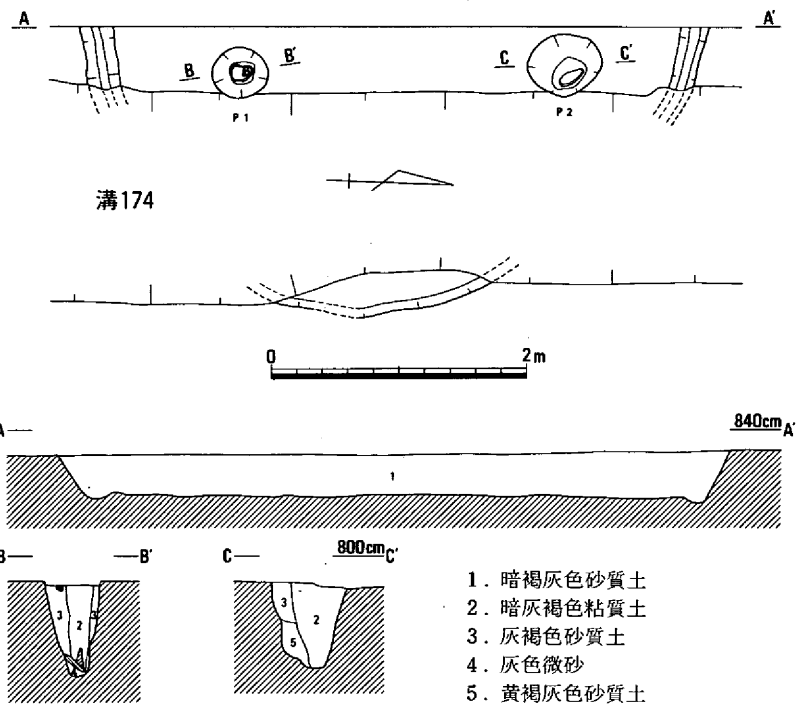


第66図 竪穴住居32出土遺物(3) (1/3)

もに採集して、その後の洗浄作業によって多数発見することができた。出土土器の時期は、弥生時代中期前葉～中葉であろう。

なお竪穴住居32の北側には、図示したように、竪穴住居の壁かもしれない円弧状の落ち込みや土壇129・131・156のような埋土に炭・灰を含んでいる土壇や柱穴が存在しており、竪穴住居の存在が推測できるが、明確なかたちで検出することはできなかった。

(平井)



第67図 竪穴住居33 (1/60)

竪穴住居33(第67図)

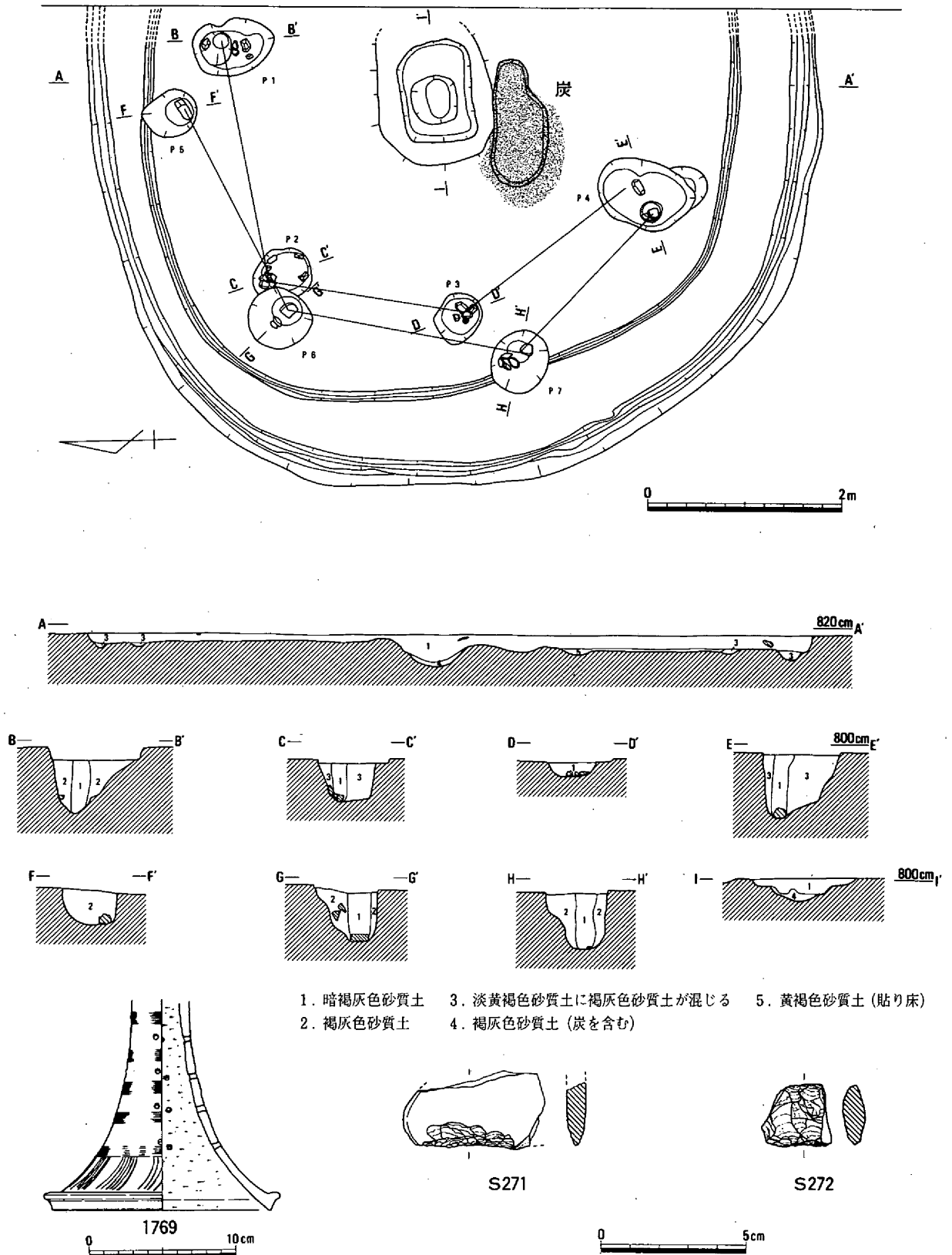
YA2A区の北半部に位置する。古墳時代の溝179に切られていることや西側が調査区外にのびることから、全体の形状は明らかではないが、平面形は円形で、深さは35cm前後残存していた。壁際には幅20cm前後、深さ5cm前後の壁体溝が部分的に確認できた。柱穴は2本検出できた。P1の底には柱材(カツワ)の一部と扁平な根石が、またP2には扁平な根石が存在していた。遺物はほとんど出土しなかった。時期は明らかではないが、弥生時代中期中葉～後期ではなかろうか。(平井)

竪穴住居34(第68図、図版4-3)

YA2A区の中央部に位置する。調査地は湧水が著しく、検出作業は困難であった。壁体溝が二重に確認できたことから、この竪穴住居は古・新の二時期あることが推測できる。平面形は古・新しいずれも不整形円形を呈すると考えられる。主柱穴は検出した位置から考えて、P1・2・3・4が古段階の、P5・6・7・4が新段階の柱穴と判断している。そしてP1・2・3には10cm前後の礫が、またP4・5・6・7には扁平な石が根石として据えられていた。床面のほぼ中央には土壇が一基存在している。

第3章 発掘調査の概要

この土壌は平面形が約110×70cmの長方形で、深さは約25cmで、下層には炭を含んでいた。またこの土壌のまわりには図示したような幅20cm前後で、高さ2～3cmの土手状の高まりが確認できた。さらにこの土壌の南西部には深さ5cm前後の不整長楕円形のくぼみがあり、その内容と周囲には図示した

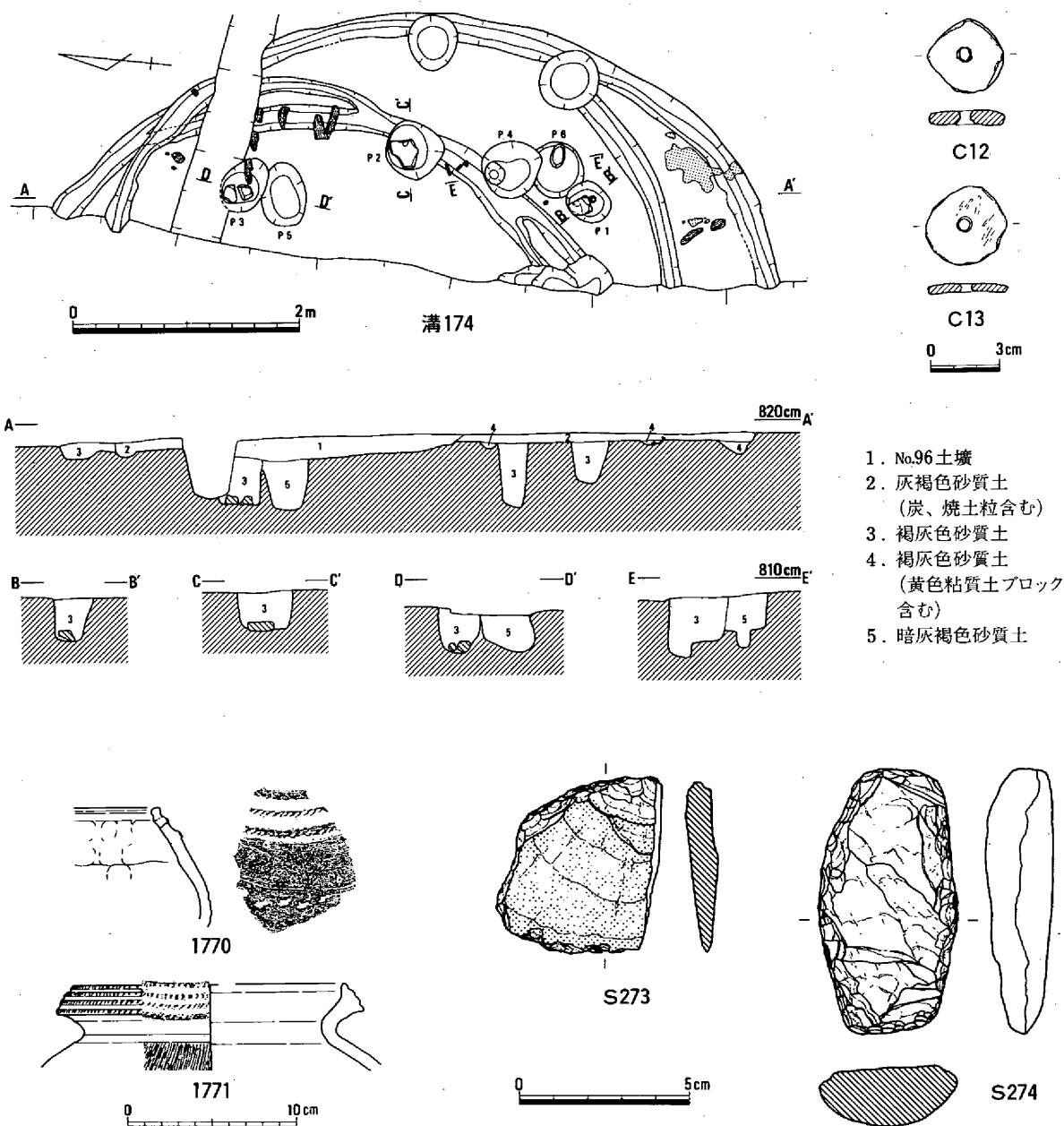


第68図 竪穴住居34 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

ように炭の層が堆積していた。この「中央土壌」は古・新階段とも共有していたものと考えられる。遺物は少量の土器片と図示した石器以外に鎌や剥片が出土している。出土した土器の時期は弥生時代前期後葉～中期中葉が多いが、少量の後期前葉の土器が含まれていた。(平井)

竪穴住居35(第69図、図版5-1)

YA2A区の中央部、竪穴住居34の南西部に位置する。西側が古墳時代の溝179に切られているが、図示したように切り合い関係のある数条の壁体溝が検出できたことから、建て替えが行われているものと考えられる。最も新しい段階の竪穴住居は、規模が最大になっており、主柱穴は検出位置や切り合い関係からP1・2・3が相当するであろう。P1・2・3は底に扁平な根石を据えている点も共通している。また床面上には少量ではあるが炭化材と焼土が残存しており、焼失した可能性が考えられる。これ以前の段階は明確ではないが南側で約1m内側に検出した壁体溝の段階を想定したい。この



第69図 竪穴住居35 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/4・1/2)

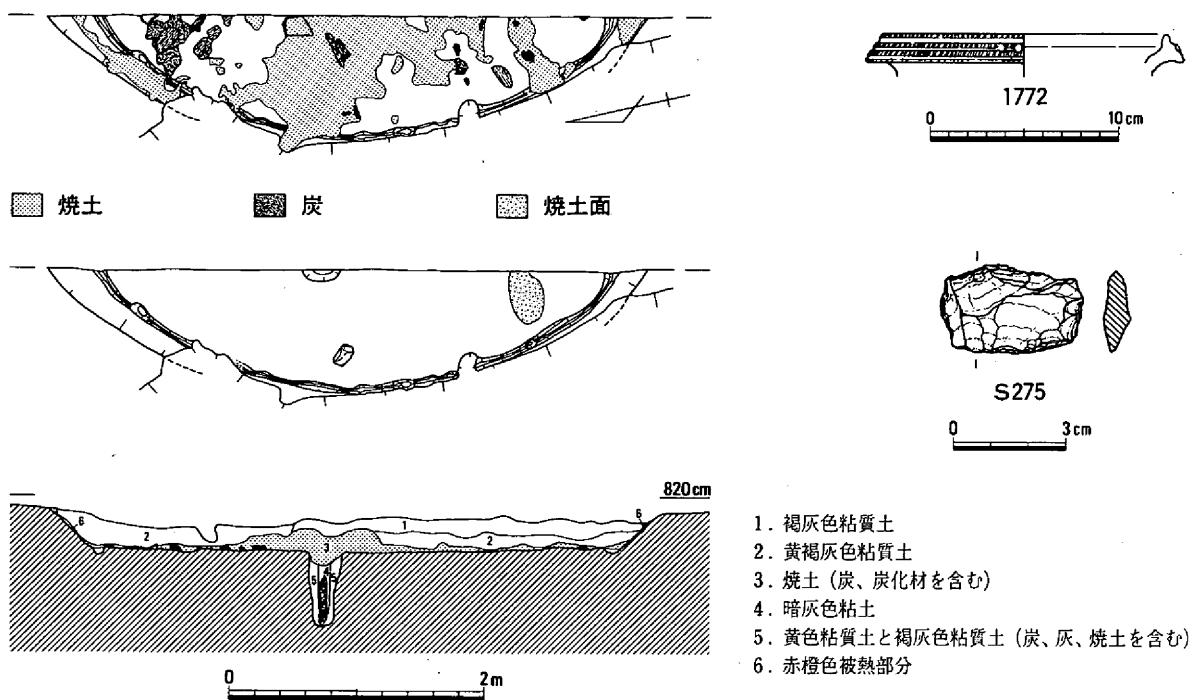
段階に伴う主柱穴も明確ではないが、P 4・5であると考えておきたい。最古段階の竪穴住居は、最新段階の壁体溝に切られている最も規模の小さい壁体溝の段階を想定している。この段階の竪穴住居に伴う主柱穴は不明である。遺物は弥生時代中期中葉の少量の土器片とサヌカイトの打製石包丁S 273・打製石鎌S 274や剝片、および土製紡錘車C 12・13が出土している。(平井)

竪穴住居36(第70図)

Y A 2 A区の南端部に位置する。検出できた平面形は円形で、深さは約30cm残存していた。壁際には幅10cm前後、深さ5cm前後の壁体溝が巡っている。床面上には図示したように焼土、炭、炭化材が残存していた。また壁面には強く熱を受けた痕跡が確認でき(断面図の6層)、火災を被ったことが窺える。床面はほぼ平らで、南端部に焼土面が、また中央部には柱穴が1本検出できた。柱穴は直径30cm前後の円形で、深さは床面から約60cmと深く、柱材(ネズミサシ)も残存していた。遺物は少量の弥生時代中期中葉の土器片とサヌカイトの楔や剝片が出土している。(平井)

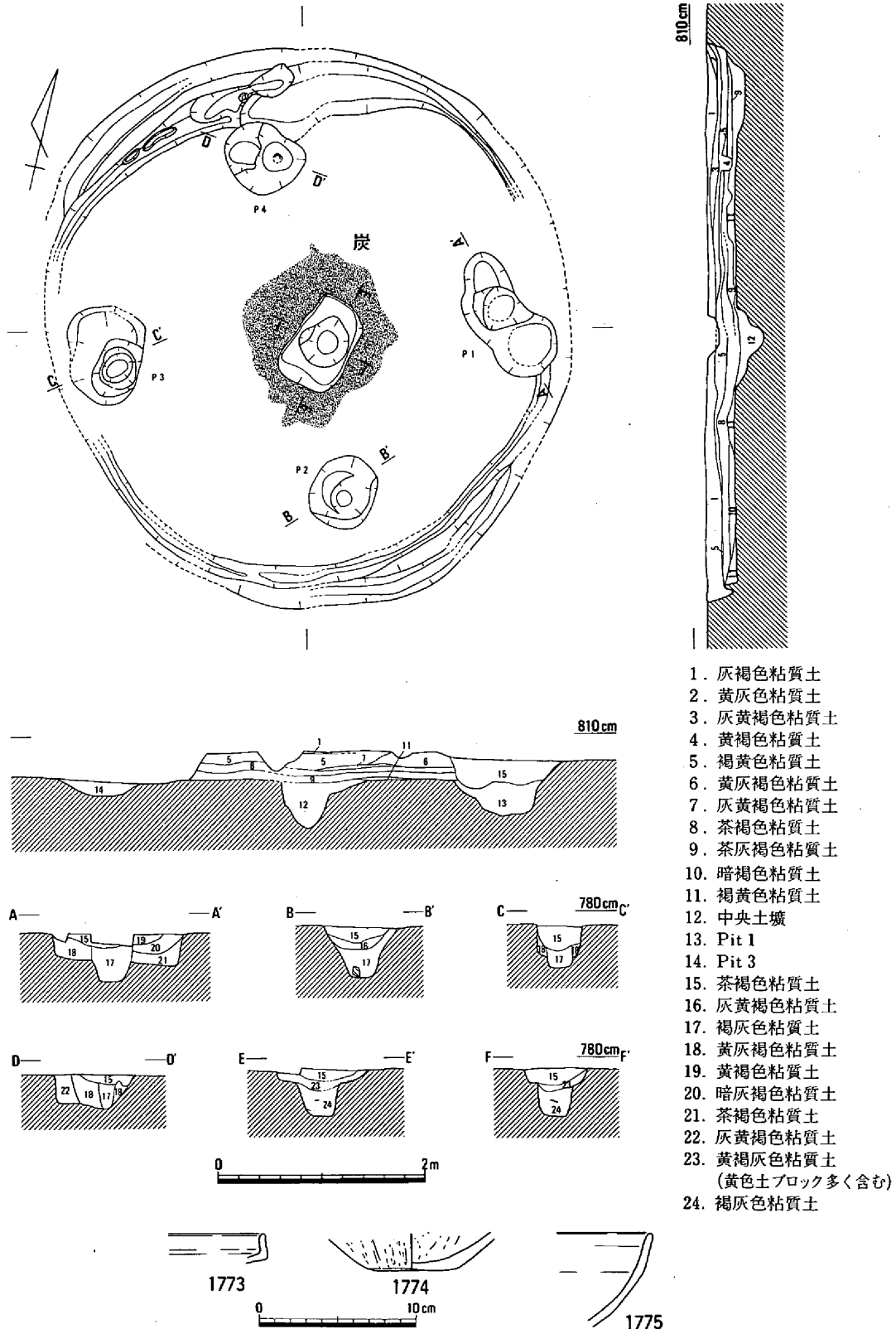
竪穴住居37(第71図、図版5-2)

Y A 3区中央部の微高地上に位置する。壁体溝や土層断面の状況から1層~7層までとそれ以下の2面の床面が確認でき、拡張された状況が看取される。床面の海拔高は7層下面で約7.8m、11層下面で7.7mを測る。前者については床面を平面的に検出することができず、第7図の平面図は、完掘後の状況である。柱穴は4本しか検出されておらず、P 1やP 4では切り合いがみられることから、この4本が主柱穴で、拡張後も継続して使用されたと考えられる。P 1の南半は古い段階の壁体溝の上にかかっており、このことの傍証となろう。中央穴は、8・9層より上方へ立ち上がらないことから、拡張前の竪穴住居に伴うものと考えられる。拡張後の竪穴住居の中央穴は不明である。上面は90×55cmの長方形で、15cm下がった所からは直径30~35cmの円形の2段掘りの構造を有している。深さは全体で47cmあり、底面の海拔高は約7.2mを測る。中央穴を中心とした周囲の床面には炭が分布しており



第70図 竪穴住居36(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)

中央穴の中段にも炭が薄く堆積していたが、被熱痕は認められなかった。時期は、凹線の施された甕口縁部や平底の残る甕底部が出土していることと、後述する古墳時代前期初頭の竪穴住居42に切られていることから、弥生時代後期末葉と考えられる。(久保)



第71図 竪穴住居37 (1/60)・出土遺物 (1/4)

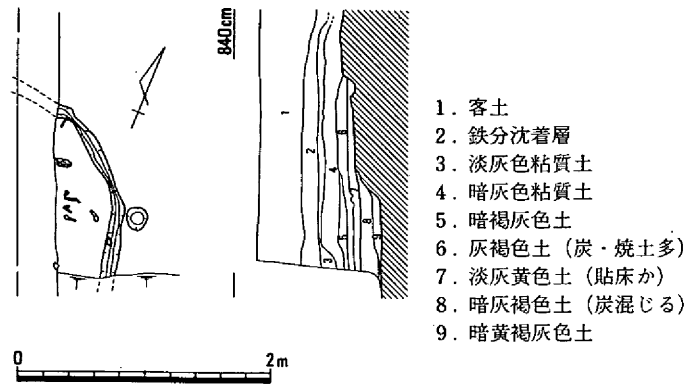
竪穴住居38(第72図、図版5-3)

竪穴住居39の北方約26mに位置する円形の竪穴住居の一部である。残存状態は第72図に掲げるようにごくわずかであり、形態については円形以外の可能性も否定できない。壁体溝は比較的残りがよく、明瞭な弧を描く。北側の壁体溝から南約65cmの位置で一段深まる肩が検出されているが、これは

おそらく古い時期の竪穴住居の掘り方と考えられ、この竪穴住居38は最終的に拡張住居と理解してよいだろう。時期的には弥生時代後期に比定される。(岡田)

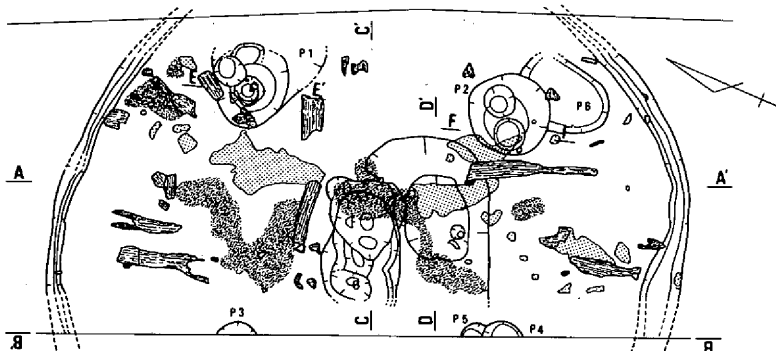
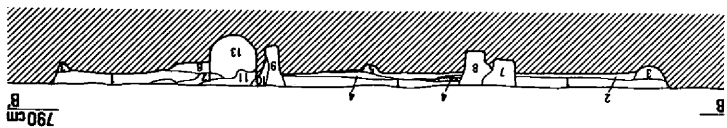
竪穴住居39(第73図、図版6-1)

直径約580cm前後を測る円形の竪穴住居である。検出面から床面まではわずか10cm足らずの残存状態の悪い竪穴住居である、第73図に示すように炭化した建築材が床面上位で検出され、火災に遭って

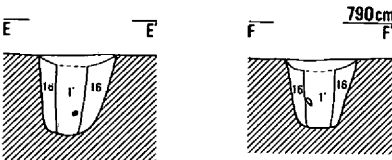
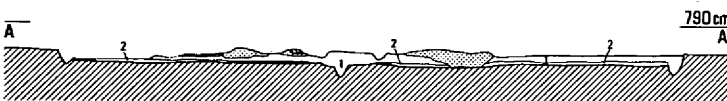


第72図 竪穴住居38 (1/60)

1. 客土
2. 鉄分沈着層
3. 淡灰色粘質土
4. 暗灰色粘質土
5. 暗褐色土
6. 灰褐色土 (炭・焼土多)
7. 淡灰黄色土 (貼床か)
8. 暗灰褐色土 (炭混じる)
9. 暗黄褐色土



■ 炭 ■ 焼土



1. 暗灰褐色粘質土
- 1'. 1層に炭多く混じる
2. 灰黄色粘質土 (貼り床)
3. 灰色粘質土
4. 黄色土 (貼り床)
5. 暗灰褐色粘質土
6. 灰色粘質土
7. 暗灰色粘質土 (黄色土混じる)
8. 暗灰色粘質土 (焼土少し混じる)
9. 灰色粘土
10. 灰色粘質土 (焼土多く混じる)
11. 淡灰黄色粘質土 (焼土少し混じる)
12. 灰黄色粘質土 (焼土多く混じる)
13. 灰色粘土
14. 明灰褐色粘質土
15. 灰色粘質土 (黄色土粒多く混じる)
- 15'. 上層より黄色土粒小さい
16. 黄灰褐色粘質土

第73図 竪穴住居39 (1/60)

廃棄された住居跡であることは明白である。

P 1～4の4本の柱穴によって建築された可能性が高く、それらの対角線の交差する位置に炉と考えられる中央ピットが検出されている。南北方向のP 1—P 2間、P 3—P 4間が、東西のP 1—P 3、P 2—P 4間よりかなり長く、棟方向は南北と理解できるだろう。P 1・P 2はそれぞれ径約20cm前後の柱痕跡が観察される。

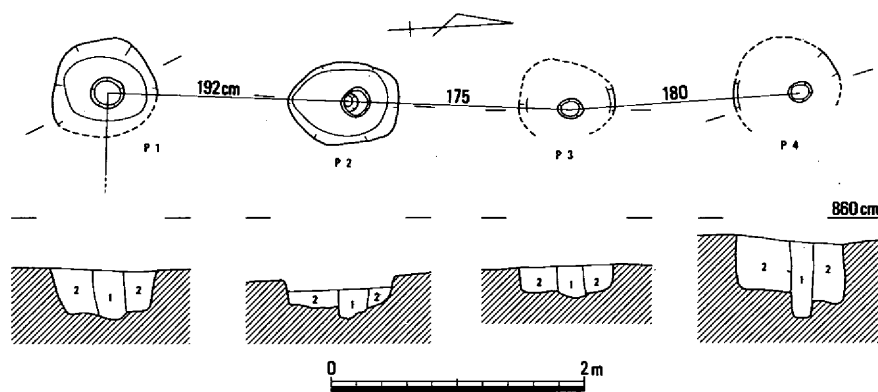
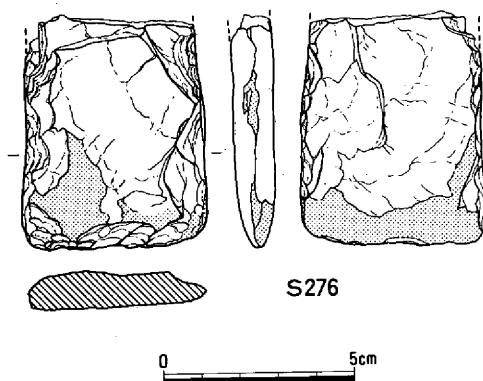
出土遺物は土器細片のみであるが、弥生時代後期前葉に比定されることは確実である。(岡田)

(2) 建 物

建物59(第74図)

YA 2 A区の北端部に位置する。ほぼ同規模の柱穴が、同じような間隔で、直線上に並んで検出できたことから建物と判断した。

柱穴の平面形は側溝に切られるなどして不明確な部分もあるが、径70～80cmの円形や楕円形で、深さは25～60cm残存しており、底面にはいずれも柱痕跡が確認できた。それぞれの柱穴で特徴的なのは、柱を据えた後に埋めた土である図の2層が、あたかも版築かのように灰褐色砂質土と黄色砂質土が交互に堅くつきしめられていることである。遺物は少量の弥生土器片と石斧未製品S276が出土した。時期はP 4が土壌153に切られていると判断したため、弥生時代後期前葉かそれ以前と考えているが、未調査区に建物はのびており、古代の可能性もある。(平井)



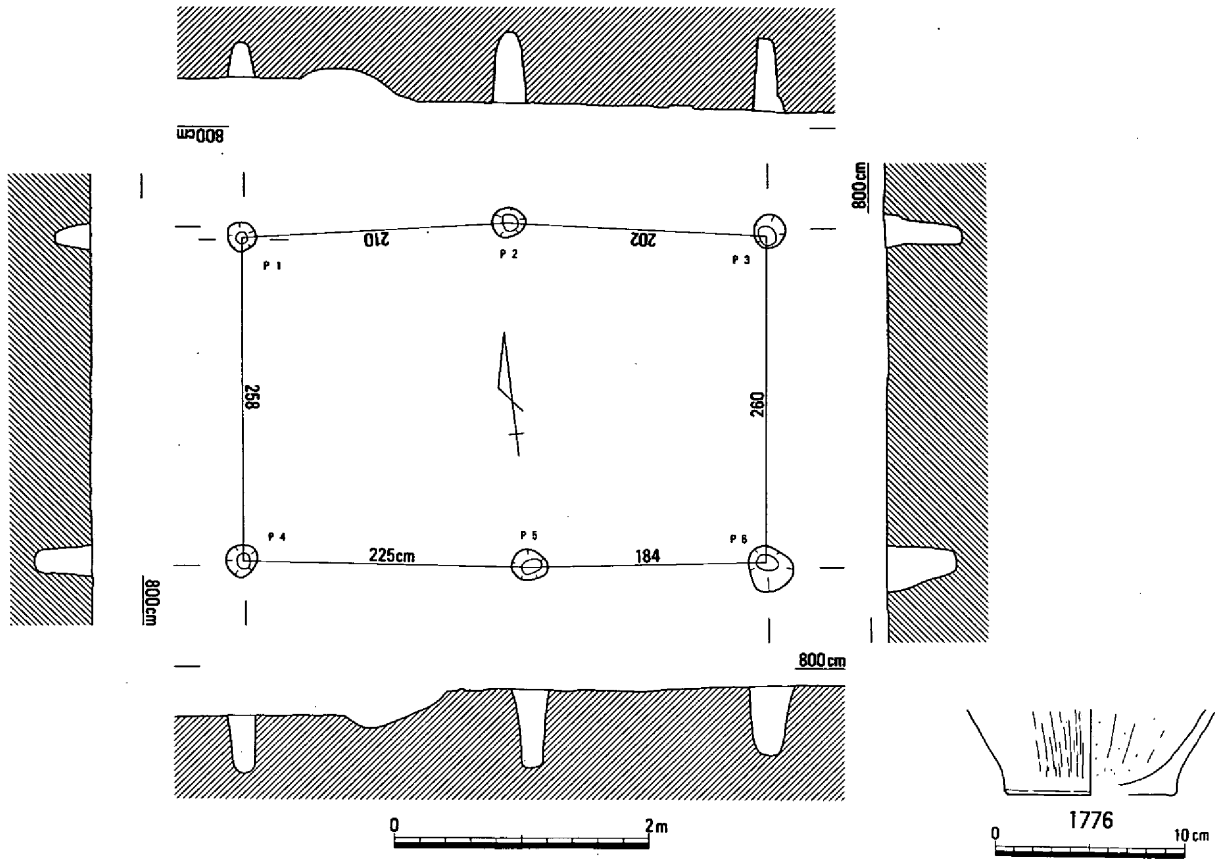
1. 暗褐灰色砂質土

2. 灰褐色砂質土(黄色砂質土ブロック混じる)

第74図 建物59 (1/60)・出土遺物 (1/2)

建物60(第75図)

YA 2 A区の南端部に位置する2×1間の掘立柱建物である。各柱穴は直径20～30cmの円形で、深さは30～60cm残存していた。埋土は黄色粘質土の混じった暗褐灰色粘質土である。遺物は少量の弥生時代中期後葉の土器片とサヌカイトの剝片が出土している。(平井)

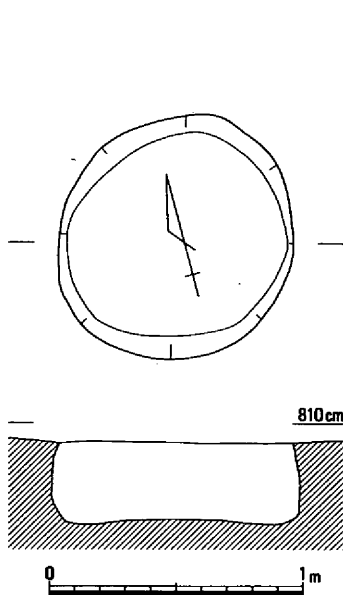


第75図 建物60 (1/60)・出土遺物 (1/4)

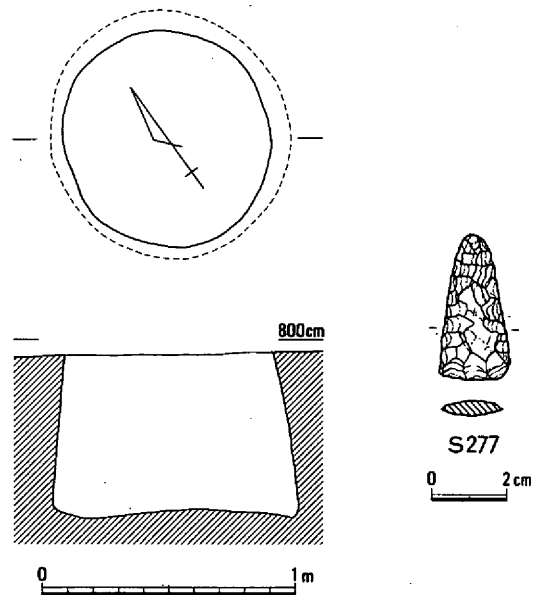
(3) 袋状土壌

袋状土壌29(第76図)

YA 2 A区の北半部の竪穴住居33の北東部に位置する。土壌137を切っている。平面形は約96×92 cmの楕円形で、深さは約33cm残存していた。断面形は一部袋状になっており、底面は中央部がわずか



第76図 袋状土壌29 (1/30)



第77図 袋状土壌30 (1/30)・出土遺物 (1/2)

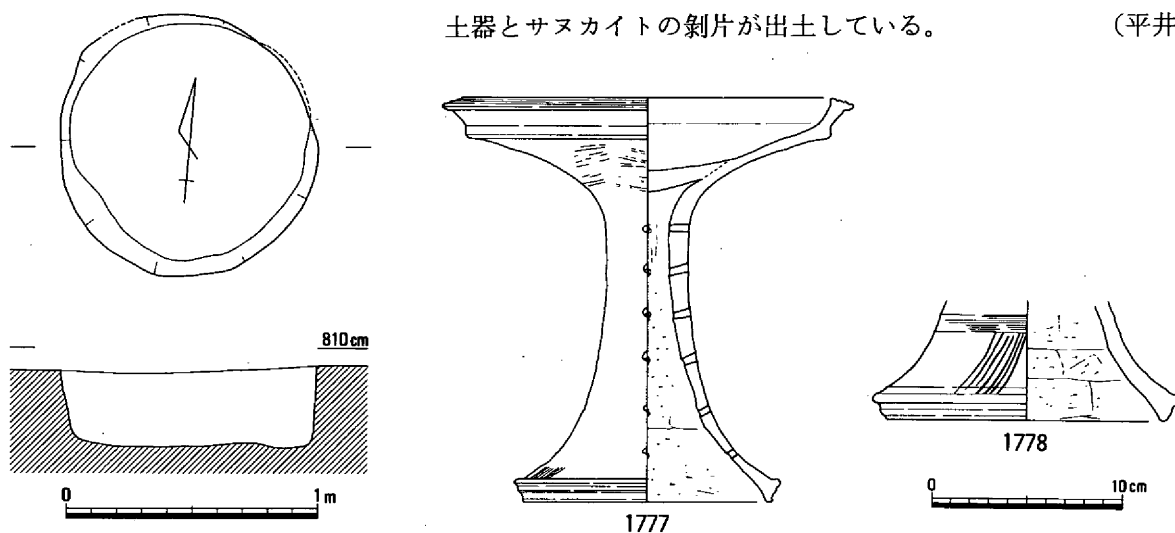
ではあるが盛り上がっている。埋土は灰褐色砂質土であった。遺物は少量の弥生時代後期前葉の土器片が出土している。(平井)

袋状土壙30(第77図)

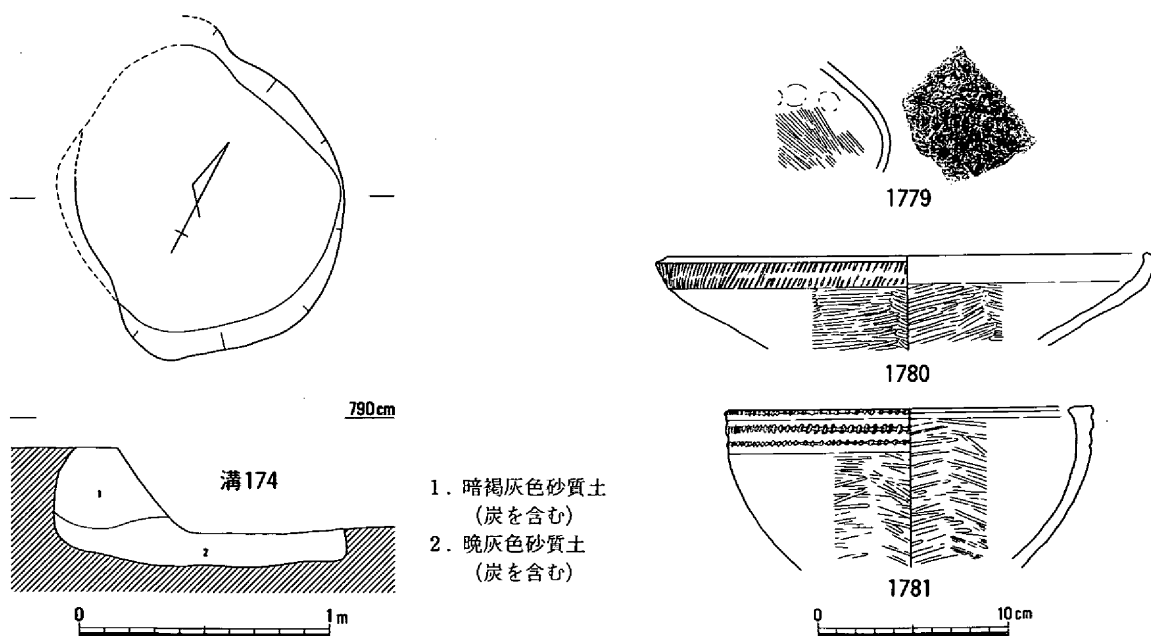
HC1A区の中央部の竪穴住居32の南に位置する。土壙159を切っている。平面形は約86×80cmの楕円形で、深さは約64cm残存していた。断面形は袋状で、底面は中央部がわずかではあるが盛り上がっている。埋土は炭粒・焼土粒を含む灰褐色砂質土であった。遺物は少量の弥生時代中期中葉?の土器片とサヌカイトの鏃S277や剝片が出土している。(平井)

袋状土壙31(第78図)

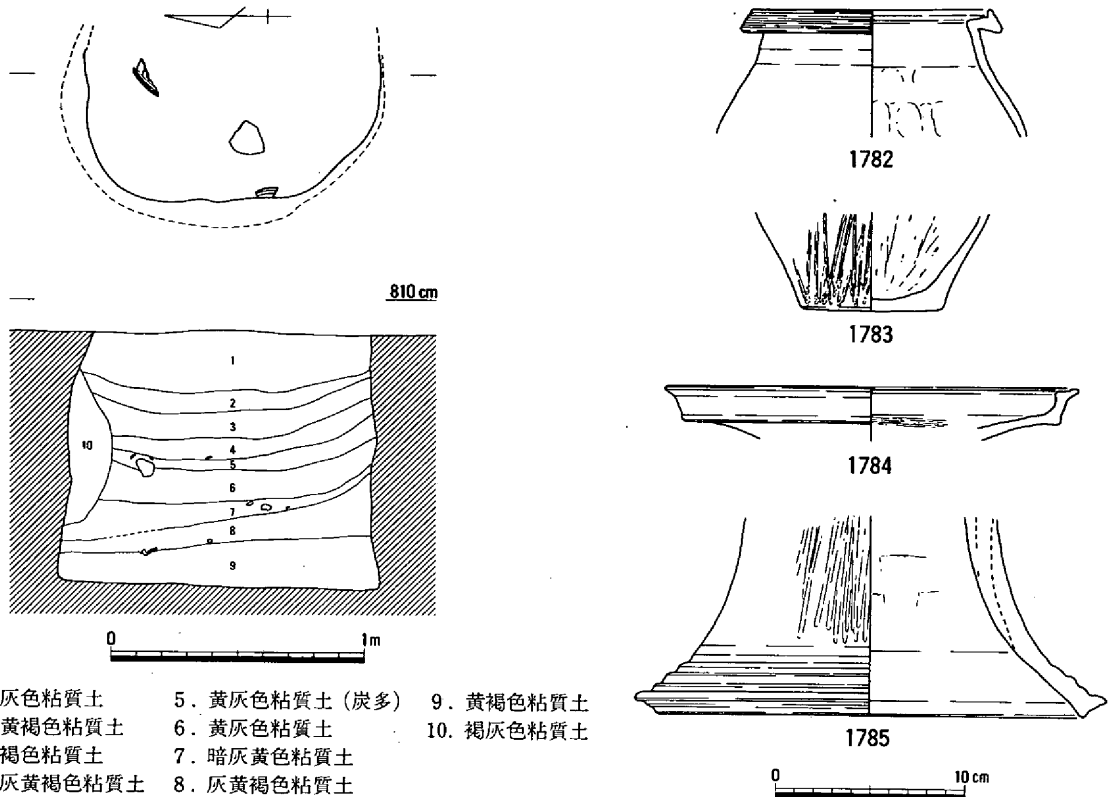
YA2A区の竪穴住居34と35の間に位置する。平面形は約106×100cmの楕円形で、深さは約31cm残存していた。断面形は一部ではあるが袋状になっている。底面はほぼ平らで、部分的に凹凸が認められた。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は弥生時代後期前葉の土器とサヌカイトの剝片が出土している。(平井)



第78図 袋状土壙31 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第79図 袋状土壙32 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- | | | |
|-------------|----------------|------------|
| 1. 褐灰色粘質土 | 5. 黄灰色粘質土 (炭多) | 9. 黄褐色粘質土 |
| 2. 灰黄褐色粘質土 | 6. 黄灰色粘質土 | 10. 褐灰色粘質土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 7. 暗灰黄色粘質土 | |
| 4. 濃灰黄褐色粘質土 | 8. 灰黄褐色粘質土 | |

第80図 袋状土壙33 (1/30)・出土遺物 (1/4)

袋状土壙32(第79図)

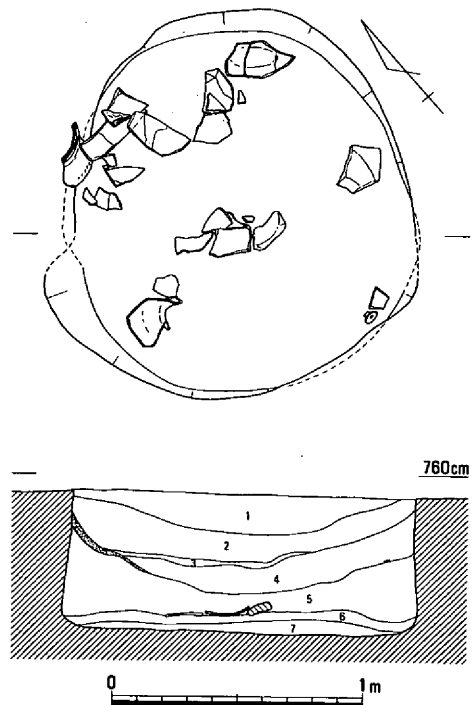
YA 2 A区の中央部に位置する。東側が古墳時代の溝179に切られているが、平面形は楕円形であったと推測できる。深さは約46cm残存していた。断面形は袋状で、底面には凹凸は認められた。遺物は弥生時代中期中葉の土器が出土している。(平井)

袋状土壙33(第80図、図版6-2)

YA 5区北半に位置する。東半が調査区外となるため全容は不明であるが、南北軸の上面長110cm、底面長126cmで、深さ103cmを測る。底面はほぼ平らで海拔高は6.95mである。埋土は十層に分かれ、5・8層には炭が堆積していた。10層は側壁の崩壊土であろう。土器は4層以下から出土しているが、全て細片のうえ底面に接するものはなく、埋没時に流入、投棄されたものと考えられる。時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(久保)

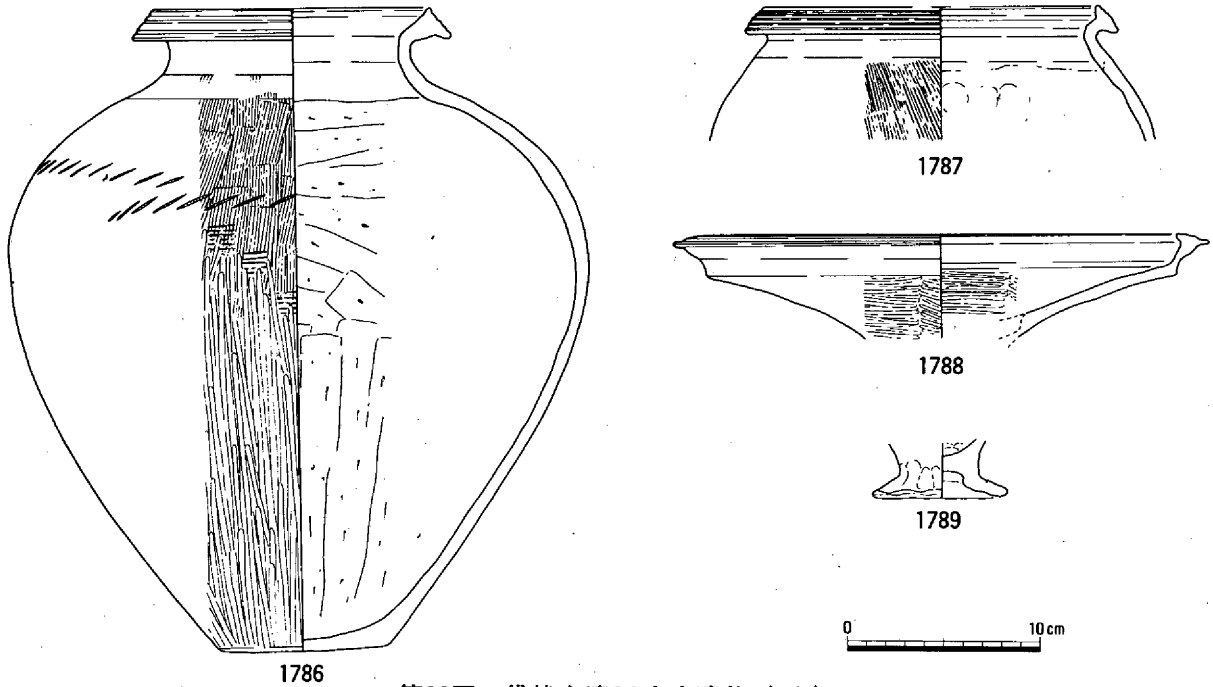
袋状土壙34(第81図、図版6-3)

袋状土壙33の南に位置する。西側が部分的に崩れているが、検出面で135×145cmの不整円形で、底面は直径約140cmに広がっている。削平のため深さは55cm程度



- | | |
|------------|------------------|
| 1. 淡褐灰色粘質土 | 5. 淡灰黄色粘質土 |
| 2. 淡灰黄色粘質土 | 6. 灰色粘質土 (炭、焼土多) |
| 3. 淡黄色粘質土 | 7. 淡黄色粘質土 |
| 4. 淡灰褐色粘質土 | |

第81図 袋状土壙34 (1/30)

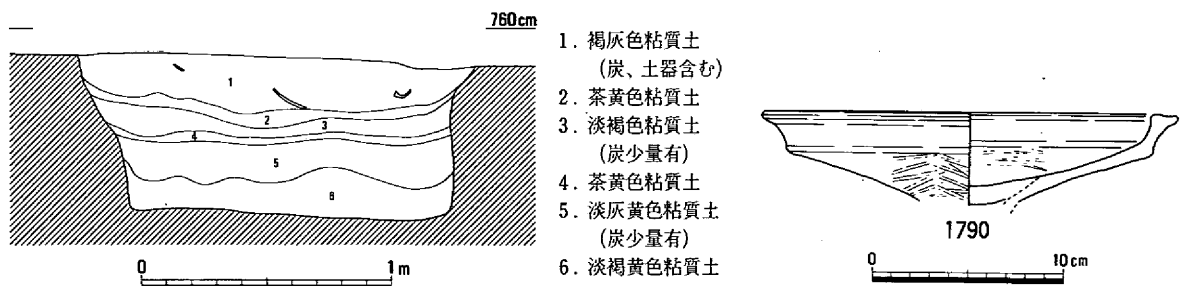


第82図 袋状土壙34出土遺物 (1/4)

と浅いが、底面の海拔高は6.95mを測り、本来は少なくとも袋状土壙33と同程度の深さを有していたと想定される。埋土は七層に分かれるが、4層と5層の間および7層には炭が堆積していた。土器は4～6層から出土しているが、第81図は6層上面での検出状況である。時期は袋状土壙33と同じく弥生時代後期前葉である。(久保)

袋状土壙35(第83図)

袋状土壙34の西に位置する。検出面上面が肩崩れをしているため断面は台形ではないが、規模や埋土の状況から袋状土壙33・34と同様の様相を呈すると考えられる。底面の規模は直径約130cm、海拔高は6.85mを測る。埋土は六層に分かれるが炭の堆積層はみられなかった。1・3・5層には炭化物や土器細片を若干含んでいたが、土器の多くは1層から出土している。時期は、袋状土壙33・34と同じく弥生時代後期前葉であるが、1790の口縁端部は袋状土壙34出土の1788と比べて拡張面が小さく、古い要素がうかがえる。(久保)



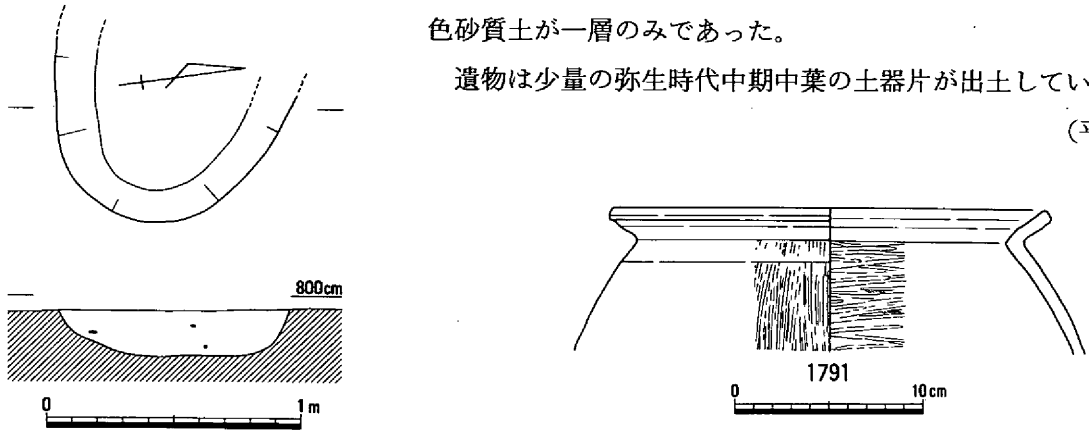
第83図 袋状土壙35 (1/30)・出土遺物 (1/4)

(4) 土 壙

土壙151(第84図)

YA2A区の北端部に位置する。西側は中世以降に削平されている。平面形はおそらく長楕円形で、深さは18cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は灰褐色砂質土が一層のみであった。

遺物は少量の弥生時代中期中葉の土器片が出土している。
(平井)

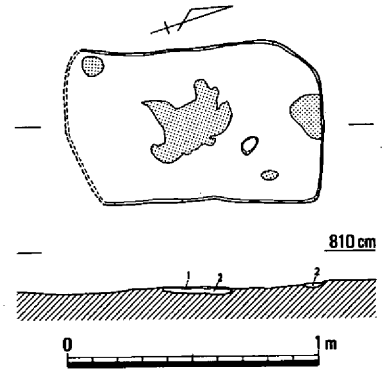


第84図 土壙151 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙152(第85図)

YA2A区の北端部、竪穴住居30の南に位置する。遺構検出中に焼土塊と熱を受けて地山が淡赤橙色に変色した部分が確認できたため、周辺を精査したところ、図示したような約100×60cmの長方形で、深さ1～2cmの浅い落ち込みを検出することができたため、ここでは土壙として報告している。共伴する出土遺物がないため時期は明らかではないが、検出面や埋土などから、弥生時代中期中葉～後期と考えるべき。

(平井)



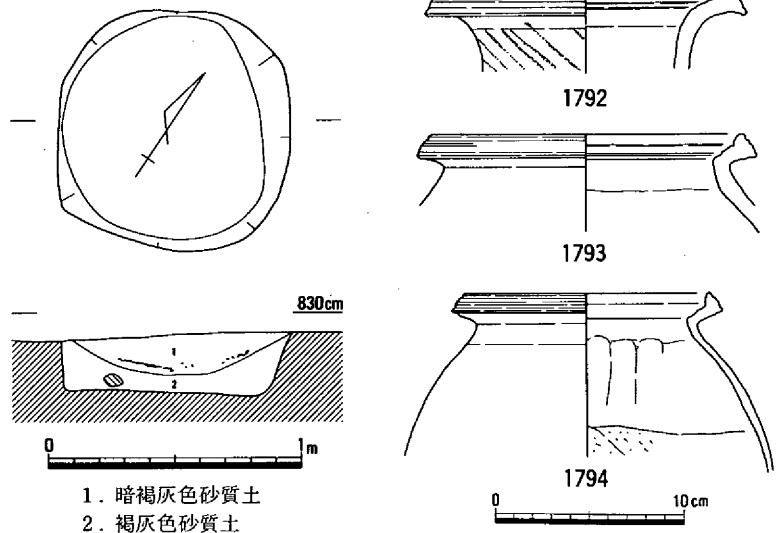
1. 焼土塊 (橙色) 2. 地山変色部分 (淡赤橙色)

第85図 土壙152 (1/30)

土壙153(第86図)

YA2A区の北端部に位置し、建物59のP4を切っている。平面形は約95×90cmの楕円形で、深さは約25cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は二層に分離することができた。

遺物はおもに上層(図の1層)から、少量の弥生時代中期後葉から後期前葉の土器片1792～1794とサヌカイトの剥片が1片、および小礫が出土している。
(平井)



1. 暗褐色砂質土
2. 褐色砂質土

第86図 土壙153 (1/30)・出土遺物 (1/4)

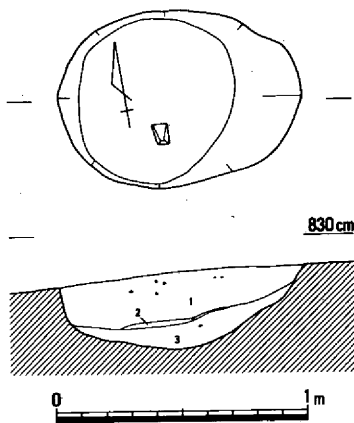
土壌154(第87図)

YA2A区の北端部、土壌153の南東部に位置する。平面形は約97×70cmの楕円形で、深さは約30cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は三層に分離することができた。遺物はおもに上層から少量の土器片やサヌカイトの剥片が出土している。

時期は出土土器から弥生時代中期中葉ではないかと考えている。(平井)

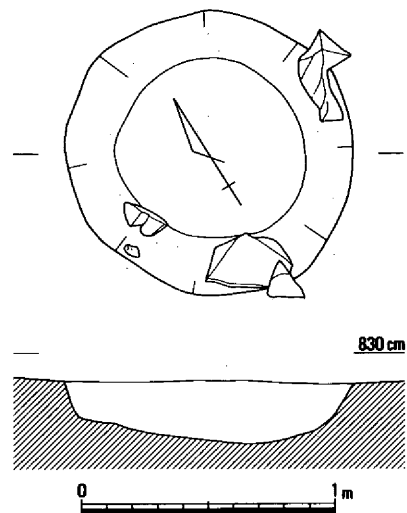
土壌155(第88図)

YA2A区の北半部、土壌154の南東に位置する。土壌135を切っている。平面形は直径約110cmの円形で、深さは約25cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は灰褐色砂質土が一層のみであった。埋土中には図示したように大きな礫が含まれていた。遺物は少量の土器片とサヌカイトの剥片が出土している。時期は出土土器から弥生時代中期中葉ではないかと考えている。(平井)



1. 褐灰色砂質土 2. 表層 3. 暗褐灰色砂質土

第87図 土壌154 (1/30)



第88図 土壌155 (1/30)

土壌156(第89図)

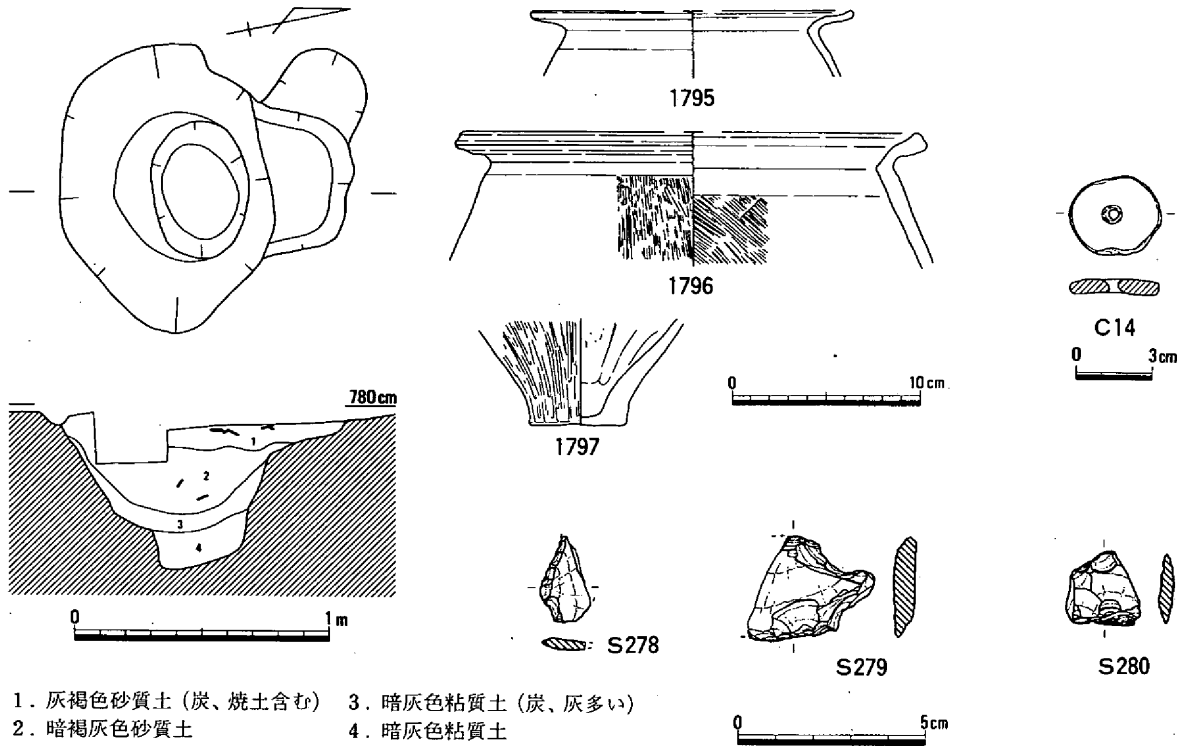
HC1A区の北半部の土壌129の南で、竪穴住居32に切られるかたちで検出できた。平面形は図示したように不整形で、深さは最深部までで約60cm残存していた。埋土は四層に分層することができた。これらは大きくは、1と2・3と4層に区分でき、また断面の形状から考えて掘り直しが行われていたものと考えられる。遺物は土器、石器、土製紡錘車が出土した。図示した遺物のうち出土層位の明らかなものは、1795が1層から、S278が4層から、S280が2層からである。石器は図示した以外にもサヌカイトの剥片が比較的多く出土しているのが特徴である。時期は出土土器から弥生時代中期中葉であると考えられる。炭・灰が多く含まれている3層の存在から、竪穴住居の中央穴の可能性も考えられるが、明らかではない。(平井)

土壌157(第90図)

HC1A区の北半部に位置する。竪穴住居32との切り合い関係は明確でない。平面形は図示したような不整形で、深さは約28cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は炭を少し含む灰褐色砂質土が一層のみであった。中央部の底面には20cm前後の礫が存在していた。

遺物は少量の弥生時代中期前葉～中葉の土器片1798・1799とサヌカイトの錐S281が出土している。

(平井)



1. 灰褐色砂質土 (炭、焼土含む) 3. 暗灰色粘質土 (炭、灰多い)
 2. 暗褐色砂質土 4. 暗灰色粘質土

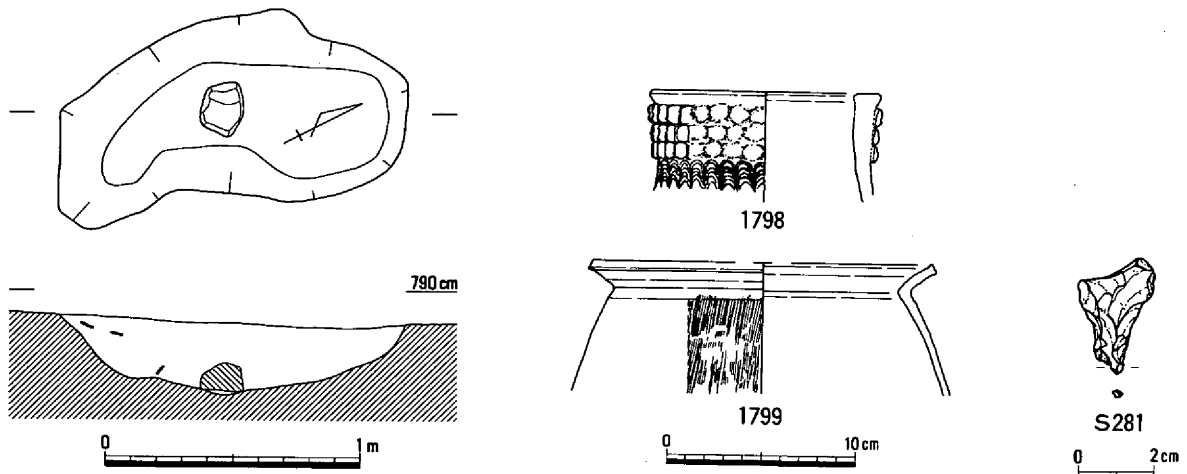
第89図 土壌156 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

土壌158(第91図)

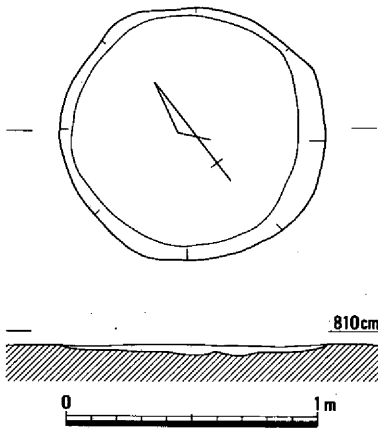
YA 2 A区の北半部に位置する。平面形は直径1 m前後の円形で、深さは約5 cm残存していたにすぎない。断面形は浅い皿状で、埋土は灰褐色砂質土であった。遺物は少量の土器片が出土したのみである。時期は明確ではないが、弥生時代中期中葉～後期と考えておきたい。(平井)

土壌159(第92図)

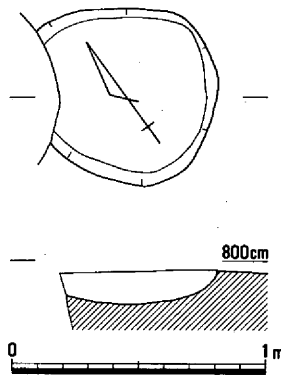
HC 1 A区の北半部、竪穴住居32の南で袋状土壌30に切られるかたちで検出した。平面形はおそらく楕円形で、深さは約13cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は炭粒を少量含む灰褐色砂質土である。遺物は少量の土器片とサヌカイトの剝片が出土している。時期は出土土器から弥生時代中期中葉ではないかと考えられる。(平井)



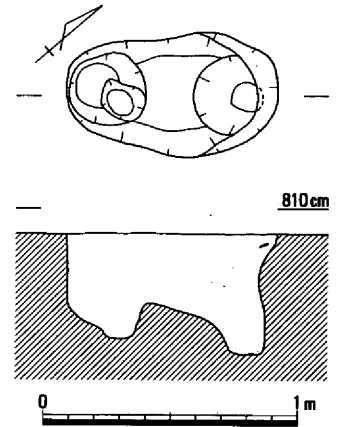
第90図 土壌157 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)



第91図 土壙158 (1/30)



第92図 土壙159 (1/30)



第93図 土壙160 (1/30)

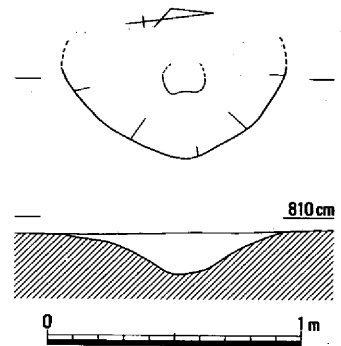
土壙160(第93図)

HC 1 A区の中央部、土壙139の南に位置する。平面形は約83×50cmの長楕円形で、底面の端部には柱穴状の穴が2つ存在しているのが特徴である。埋土は灰褐色砂質土であった。遺物は少量の土器片とサヌカイトの剥片が出土しており、時期は弥生時代中期後葉であろう。(平井)

土壙161(第94図)

YA 2 A区の中央部、竪穴住居34の西に位置する。西半部は古墳時代の溝179に切られている。平面形はおそらく楕円形で、深さは約16cm残存していた。埋土は暗褐灰色砂質土が一層のみであった。

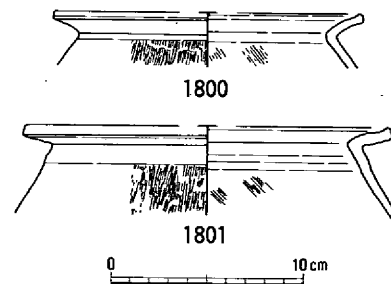
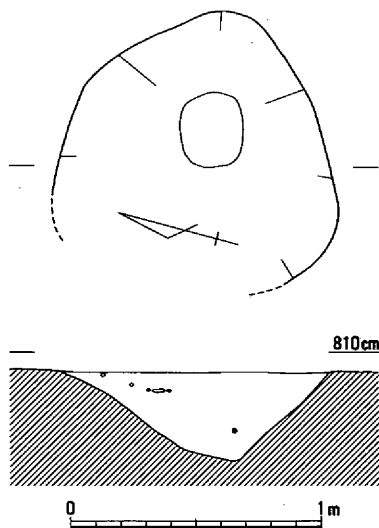
遺物は少量の土器片が出土したのみである。時期は明確ではないが弥生時代中期中葉～後期ではなかろうか。(平井)



第94図 土壙161 (1/30)

土壙162(第95図)

YA 2 A区の中央部、土壙161の南において検出した。西端部は一部古墳時代の溝179に切られているが、平面形は不整楕円形で、深さは約35cm残存していた。断面形は中央に向かって強くせばまっており、埋土は焼土塊を含む灰褐色砂質土であった。遺物は少量の土器片が出土している。時期は出土土器から弥生時代中期中葉と考えられる。(平井)



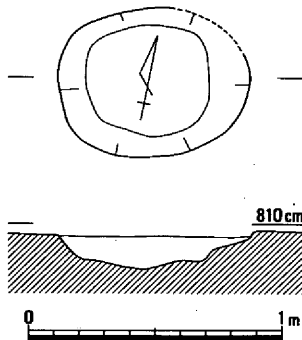
第95図 土壙162 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌163(第96図)

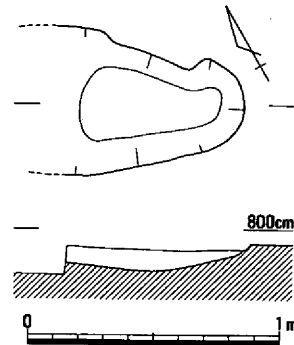
YA2A区の中央部、溝157の北において検出した。平面形は約75×60cmの楕円形で、深さは約14cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は灰褐色砂質土であった。遺物は少量の土器片が出土したのみである。時期は明確ではないが、弥生時代中期中葉～後葉ではなかろうか。(平井)

土壌164(第97図)

YA2A区の中央部、袋状土壌32の南において検出した。西端部は側溝に切られており、全体の形状は不明である。深さは約10cm残存しており、埋土は炭を含む暗褐灰色砂質土であった。遺物は少量の土器片とサヌカイトの剥片が出土している。時期は明確ではないが、出土土器から弥生時代中期中葉ではなかろうか。(平井)



第96図 土壌163 (1/30)

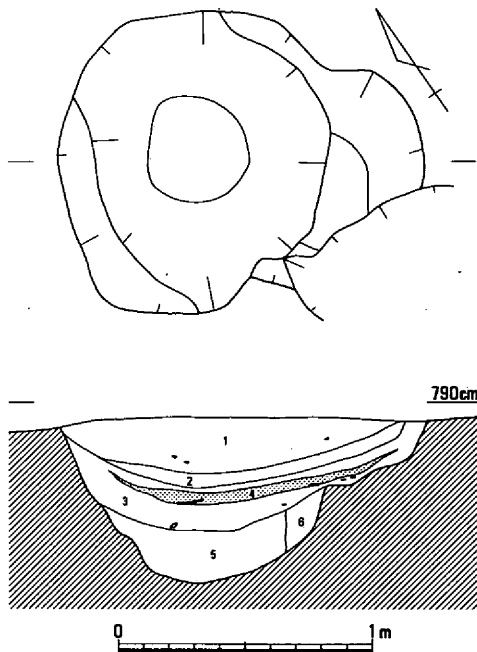


第97図 土壌164 (1/30)

土壌165(第98・99図、図版7-1)

HC1A区の南端部に位置する。南東部の一部は土壌166に切られている。平面形は図示したような不整楕円形で、深さは約66cm残存していた。東西の断面形は二段になっており、埋土は六層に分離

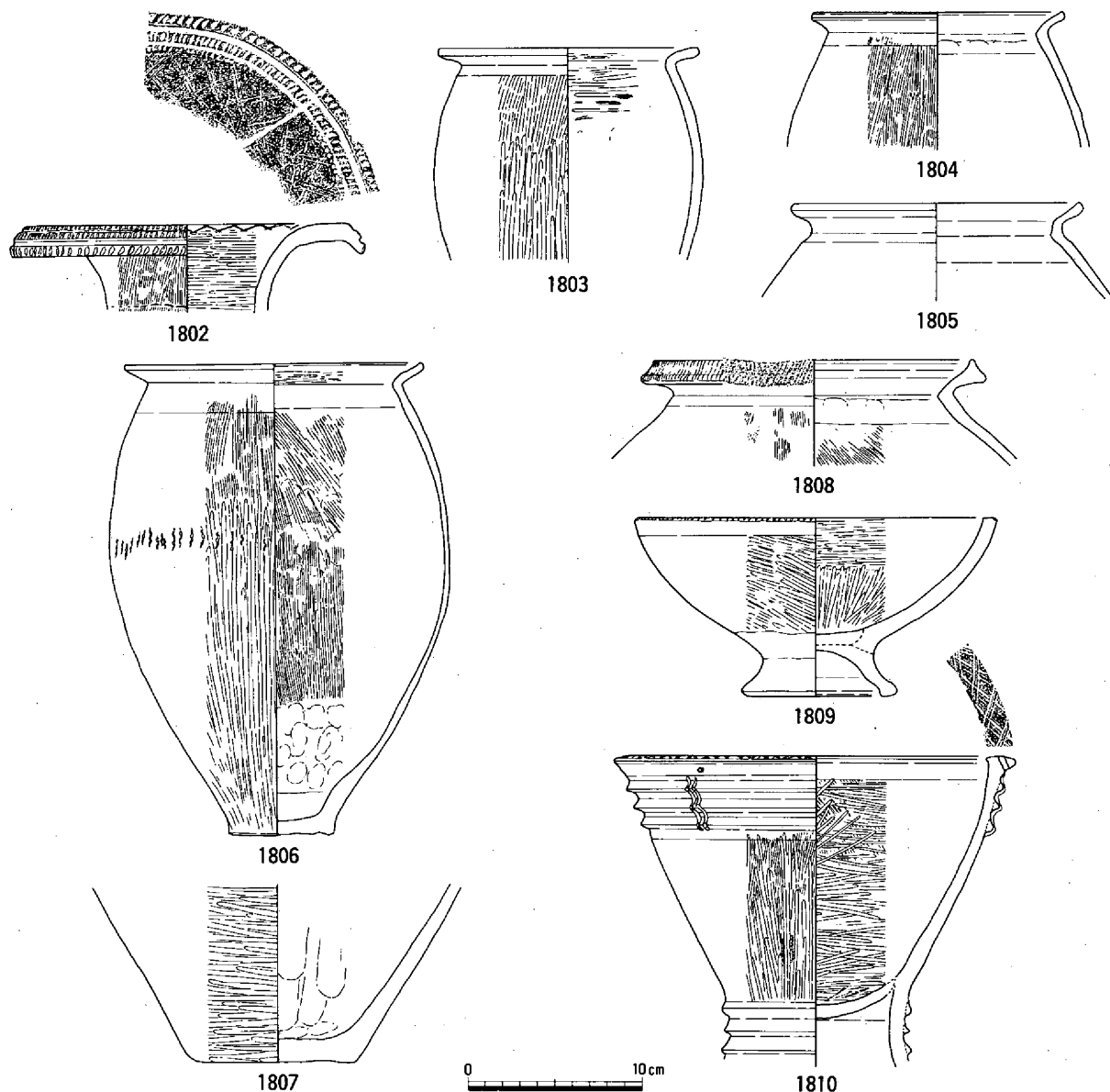
することができた。遺物は土器、石器が出土している。土器は比較的多く出土している。図示した土器のうち、1805・1810は上層、1802・1803・1809は下層からの出土である。石器は錐S282は剥片が出土している。土器の時期は甕では口縁部内面がミガキのものとヨコナデのものがあり、弥生時代中期前葉～中葉であろう。(平井)



1. 黄褐灰色粘質土(土器含む) 2. 褐灰色細砂
3. 暗褐灰色粘質土(土器含む) 4. 炭、焼土(土器含む)
5. 黄灰色粘質土 6. 灰黄色粘質土

第98図 土壌165 (1/30)・出土遺物(1) (1/2)





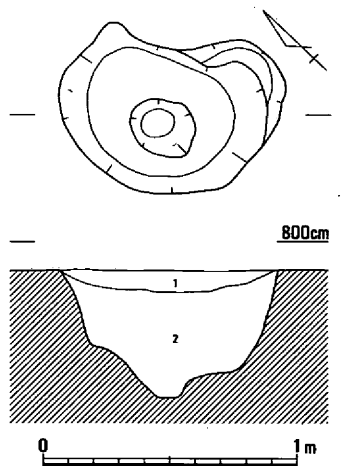
第99図 土壌165出土遺物(2) (1/4)

土壌166(第100図)

HC1A区の南端部に位置し、土壌165を切るかたちで検出できた。平面形は不整形な楕円形で、深さは約50cm残存していた。埋土は二層に分離でき、底面の中央には柱穴状のくぼみが認められた。遺物は少量の土器片が出土したのみである。時期は明確ではないが、弥生時代中期前葉～中葉であろう。(平井)

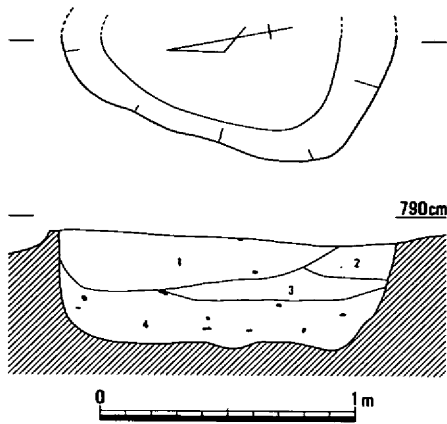
土壌167(第101図)

HC1A区の南端部に位置する。東半部は調査区外にのびているため、全体の形状は明らかでない。深さは約44cm残存しており、埋土は四層に分離することができた。遺物は少量の土器片とサヌカイトの剥片が出土している。時期は出土土器から弥生時代中期中葉であると考えられる。(平井)

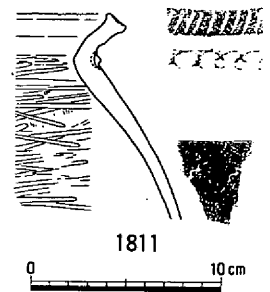


1. 灰褐色砂質土 2. 暗褐色灰色砂質土

第100図 土壌166 (1/30)



1. 暗褐灰色砂質土 (炭、焼土含む)
2. 褐灰色砂質土
3. 黄褐灰色砂質土
4. 黄灰色砂質土 (炭含む)

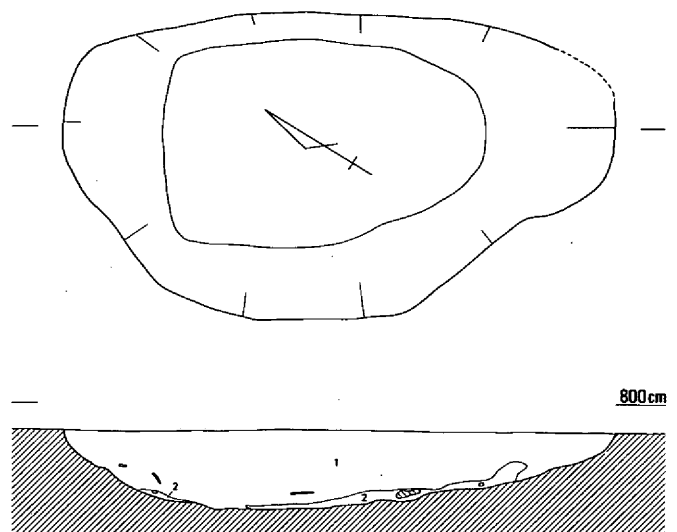


第101図 土壌167 (1/30)・出土遺物 (1/4)

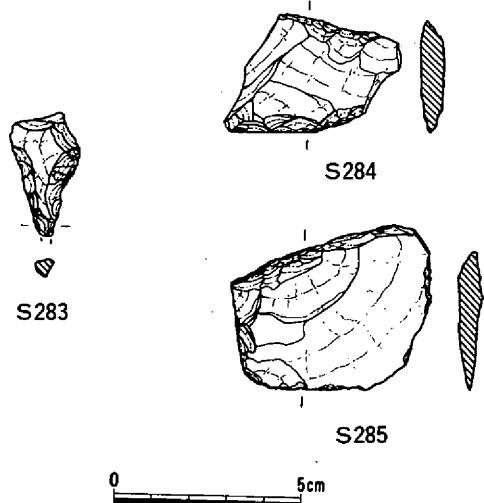
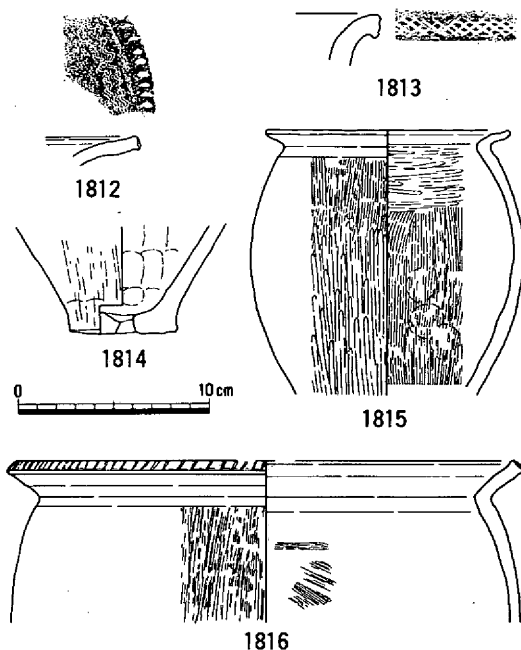
土壌168(第102図)

YA2A区の南半部に位置する。平面形は約220×120cmの不整長楕円形で、深さは約22cm残存していた。断面形は皿形で、底面には部分的に炭・焼土層が認められた。遺物は土器、石器が出土している。土器には壺1812・1813・甕1814～1816などがあり、石器には錐S283・スクレイパーS284・285や剥片がある。

時期は出土した土器から弥生時代中期中葉であると考えられる。(平井)



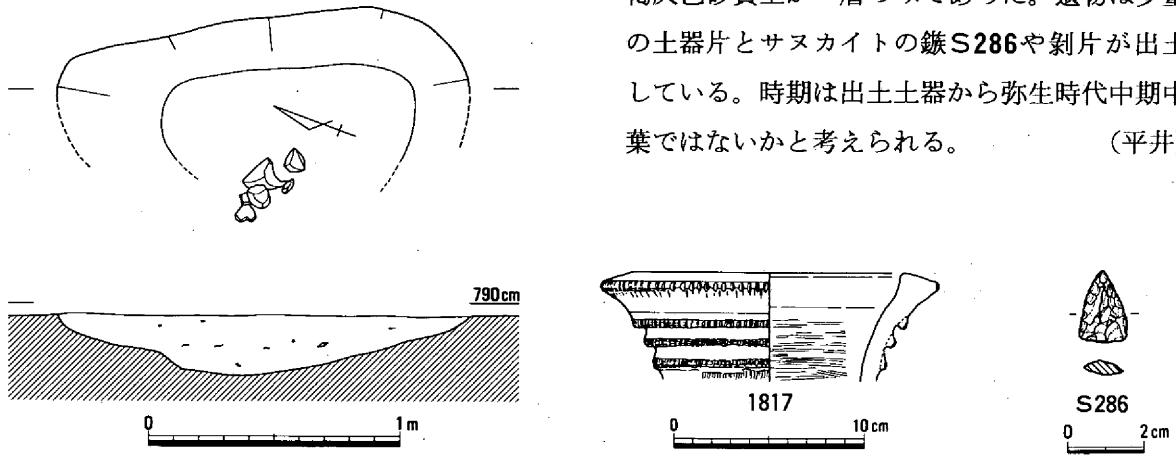
1. 暗褐灰色砂質土 (炭粒、焼土粒含む)
2. 炭、焼土



第102図 土壌168 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

土壙169(第103図)

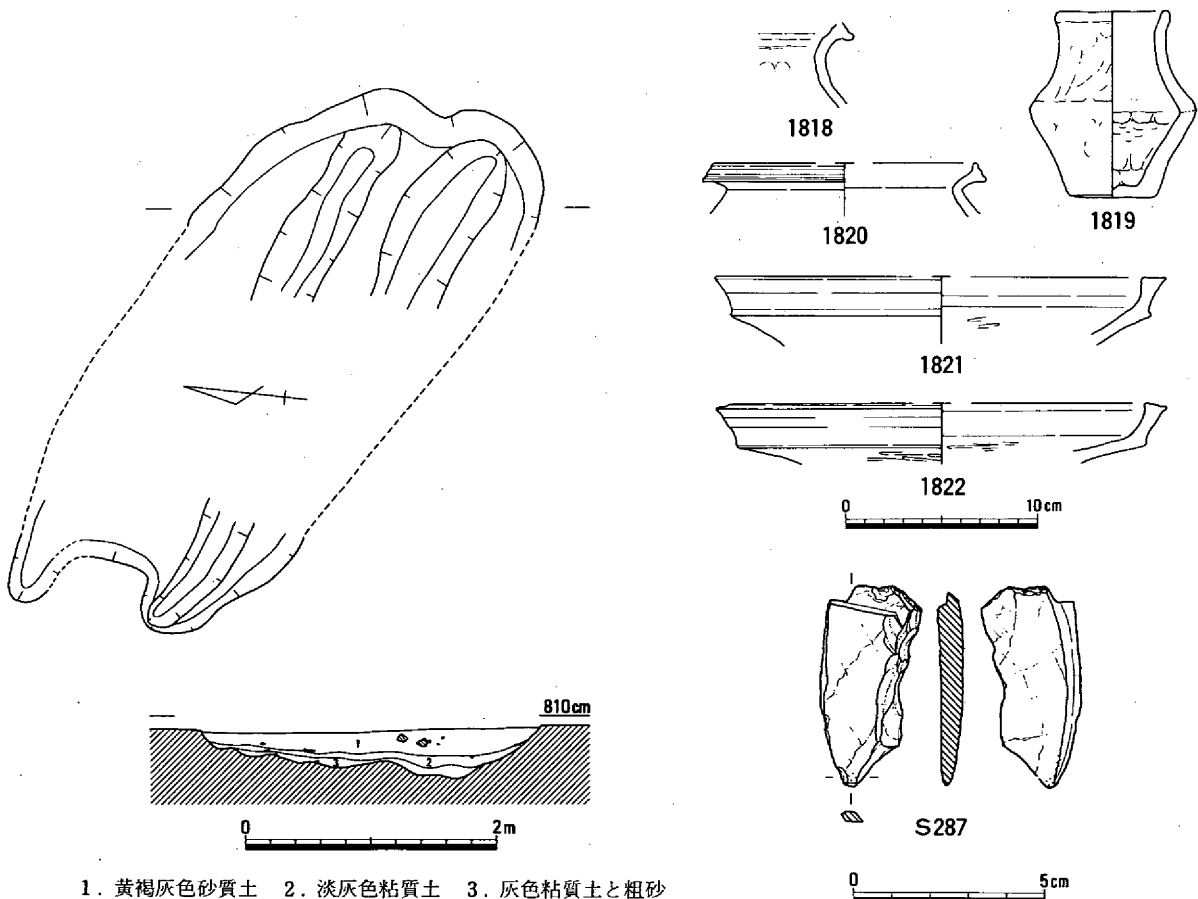
YA2A区の南半部で竪穴住居28を切るかたちで検出した。西側は古墳時代の溝177に切られている。平面形は長楕円形と推定でき、深さは約24cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は炭を含む黄褐灰色砂質土が一層のみであった。遺物は少量の土器片とサヌカイトの鏃S286や剝片が出土している。時期は出土土器から弥生時代中期中葉ではないかと考えられる。(平井)



第103図 土壙169 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

土壙170(第104図、図版7-2)

YA2A区の南半部、竪穴住居28の南東部に位置する。中央部は古墳時代の溝179によって大きく切られている。平面形は検出が困難であったため明確ではない。深さは約40cm残存しており、底面には溝状のくぼみが二条認められた。遺物は土器・石器が出土している。土器には壺1818・1819、甕1820・1821・1822、鏃S287が出土している。



1. 黄褐灰色砂質土 2. 淡灰色粘質土 3. 灰色粘質土と粗砂

第104図 土壙170 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)

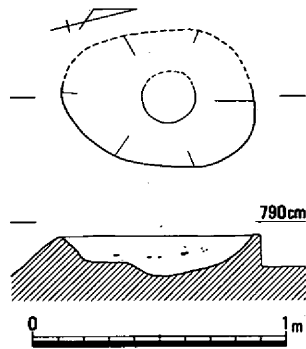
1820、高杯1821・1822などがあり、石器にはサヌカイトの錐S287や剝片がある。時期は出土土器から弥生時代後期前葉であると考えられる。(平井)

土壙171(第105図)

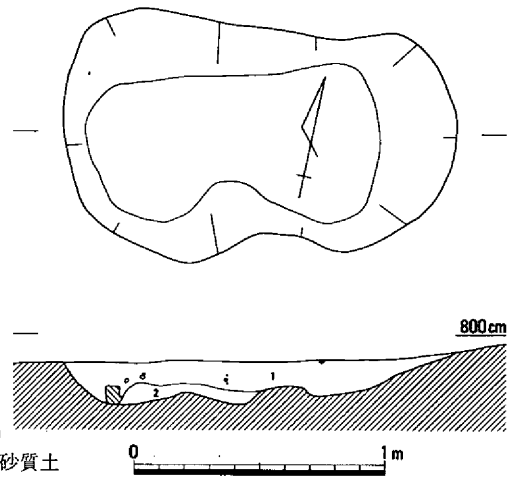
YA2A区の南端部、竪穴住居28の南に位置する。西半部は古墳時代の溝177に切られている。平面形は楕円形で、深さは約16cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は焼土・炭を含む灰褐色砂質土一層のみである。遺物は少量の土器片とサヌカイト片が出土したのみで、時期は明確ではないが、弥生時代中期前葉～中葉と考えられる。(平井)

土壙172(第106図)

YA2A区の南端部、建物60の北に位置する。平面形は不整楕円形で、深さは約17cm残存していた。埋土中には炭・焼土・灰を含んでいた。また底面には凹凸が認められた。遺物は少量の土器片が出土したのみで、時期は明確ではないが、弥生時代中期中葉と考えるべき。(平井)



第105図 土壙171 (1/30)

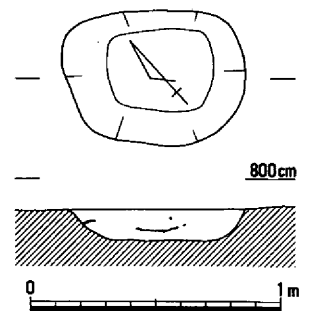


1. 暗褐色粘質土
(炭、焼土、灰を含む)
2. 褐色砂質土と淡黄色砂質土

第106図 土壙172 (1/30)

土壙173(第107図)

YA2A区の南端部、建物60の東において検出した。平面形は約72×54cmの楕円形で、深さは約12cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は炭・焼土粒を含む淡褐色砂質土が一層のみであった。遺物は少量の土器片やサヌカイトの楔が出土している。時期は明確ではないが、弥生時代中期中葉と考えるべき。(平井)

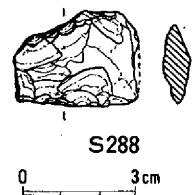


土壙174(第108図)

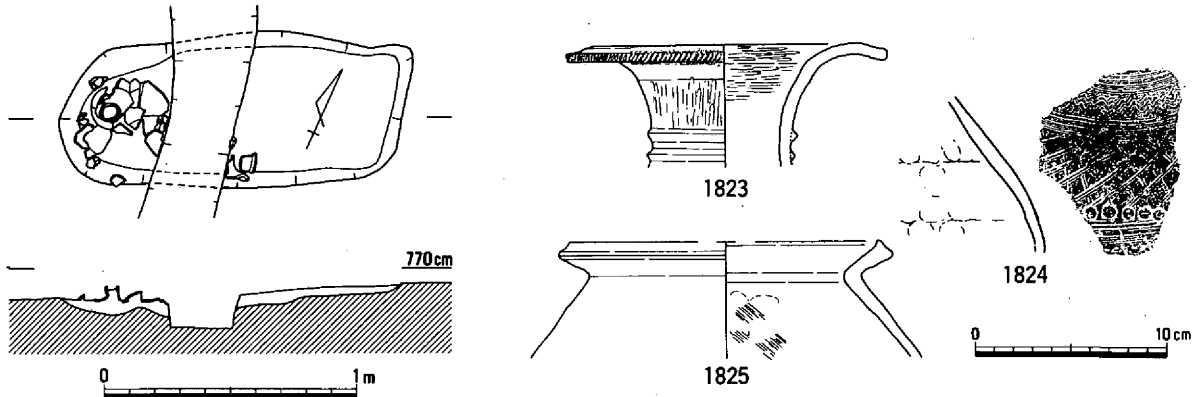
YA2B区の北端部に位置する。中央部は側溝に切られている。平面形は約136×60cmの長方形で、深さは約6cm残存していた。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は土器が西半部からまとまって出土したほかに、サヌカイトの剝片が1片出土している。時期は出土土器から弥生時代中期中葉であると考えられる。(平井)

土壙175(第109図)

YA2B区の北端部、竪穴住居29の北東部に位置する。古代の溝207に切られるなどして、検出できた平面形は図示したように不整形で、深さは約20cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は二層に

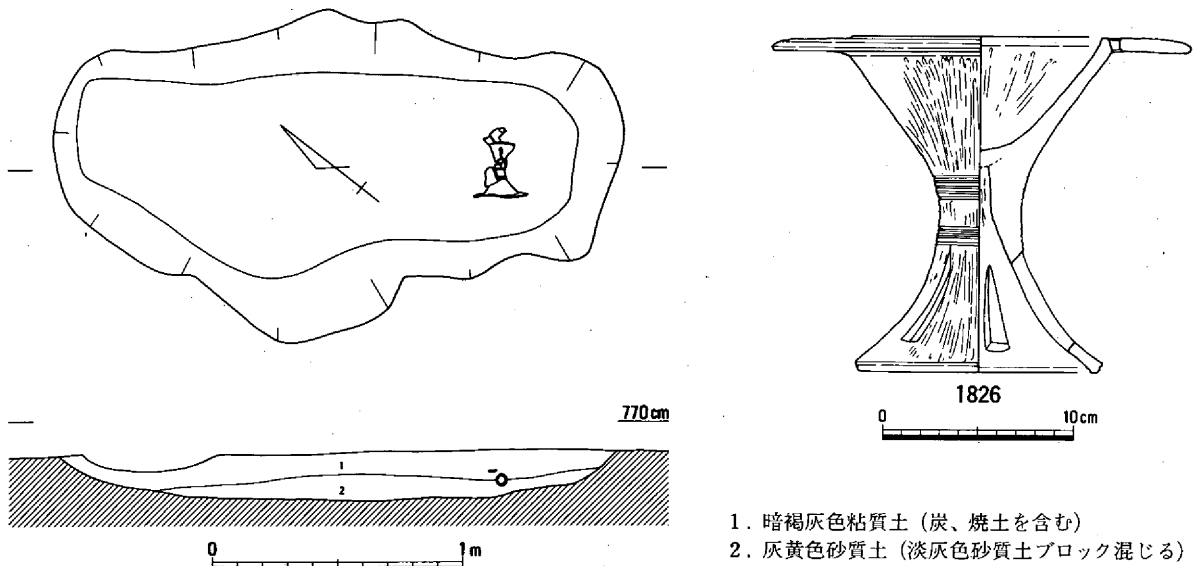


第107図 土壙173 (1/30)
・出土遺物 (1/2)



第108図 土壌174 (1/30)・出土遺物 (1/4)

分離することができた。遺物は南東隅から高杯1826がまとまって出土したほかに、サヌカイトの楔が出土している。時期は出土土器から弥生時代中期中葉であると考えられる。(平井)



第109図 土壌175 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌176(第110図)

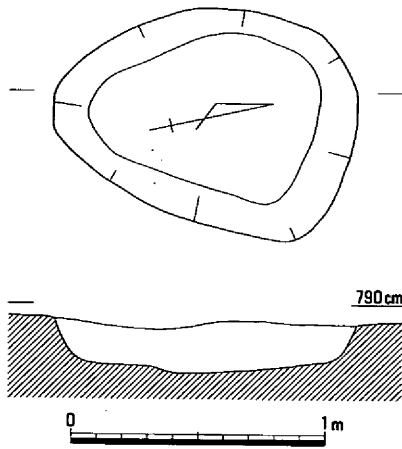
YA 3区中央の微高地部の北縁に位置する。120cm×85cmの不整楕円形で、検出面からの深さ20cm、底面の海拔高7.62mを測る。底面は平らでないが、壁体は比較的急に立ちあがり、ほぼ逆台形を呈している。埋土は単層で、灰褐色土で埋没している。時期は土器が若干出土しており、弥生時代中期後葉と考えられる。(久保)

土壌177(第111図)

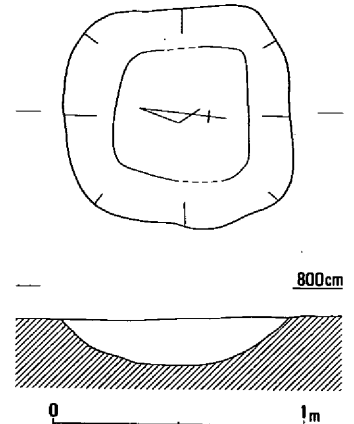
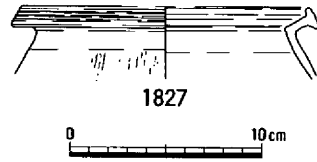
土壌176の南に位置する。東西85cm、南北90cmを測り、隅の丸い正方形を呈する。断面は皿状で、最も深い部分で海拔7.69mを測る。時期の特定できる遺物の出土はないが、後述する土壌179とよく似た形状で、また同じ灰褐色砂質土で埋没しており、同時期である可能性が高い。(久保)

土壌178(第112図)

土壌177の南、YA 3区中央の微高地部の中央付近に位置する。調査区西側側溝に西半が切られており、全容は不明である。底面の海拔高は7.76mを測る。埋土は単層で、褐灰色砂質土で埋没してい



第110図 土壌176 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第111図 土壌177 (1/30)

る。出土遺物は皆無で時期の特定はできないが、周囲の状況から弥生時代と考えた。(久保)

土壌179(第113図)

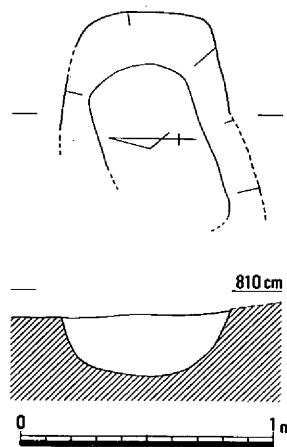
土壌178の南に位置する。上面は85cm×66cmの不整形だが、底面は1辺40cmの方形を呈している。断面は底面がほぼ平らで、逆台形を呈している。検出面からの深さ38cm、底面の海拔高7.69mを測る。埋土は単層で、灰褐色砂質土で埋没している。図示した土器のほかスクレイパーも出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(久保)

土壌180(第114図)

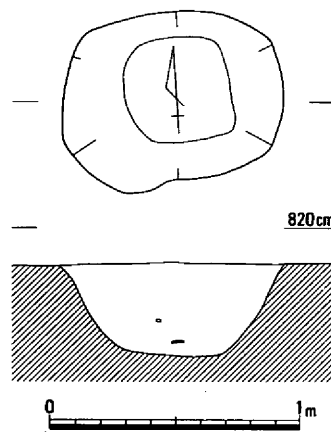
土壌179の東南に位置する。105cm×80cmの不整楕円形を呈する。断面は、検出面から約10cm下がったところで中央が1段深くなっており、底面の海拔高は最も深い部分で7.83mを測る。埋土は単層で、褐灰色粘質土で埋没していた。土器は内側の段の肩口付近で出土しており、図示した2点が、各々2ヶ所にまとまって出土した。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(久保)

土壌181(第115図)

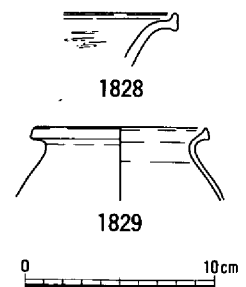
土壌180の南に位置する。東側が調査区外となるため全容は不明であるが、西南部分がほぼ直角に曲がっており、方形～長方形を呈する可能性が高い。南北の長さは約220cmである。底面はほぼ平らで、検出面からの深さ15cm、底面の海拔高7.6mを測る。埋土は単層で、褐色粘質土で埋没している。時期の特定できる遺物はなく、弥生時代に含めてはいるが、古墳時代前期に降る可能性もある。(久保)

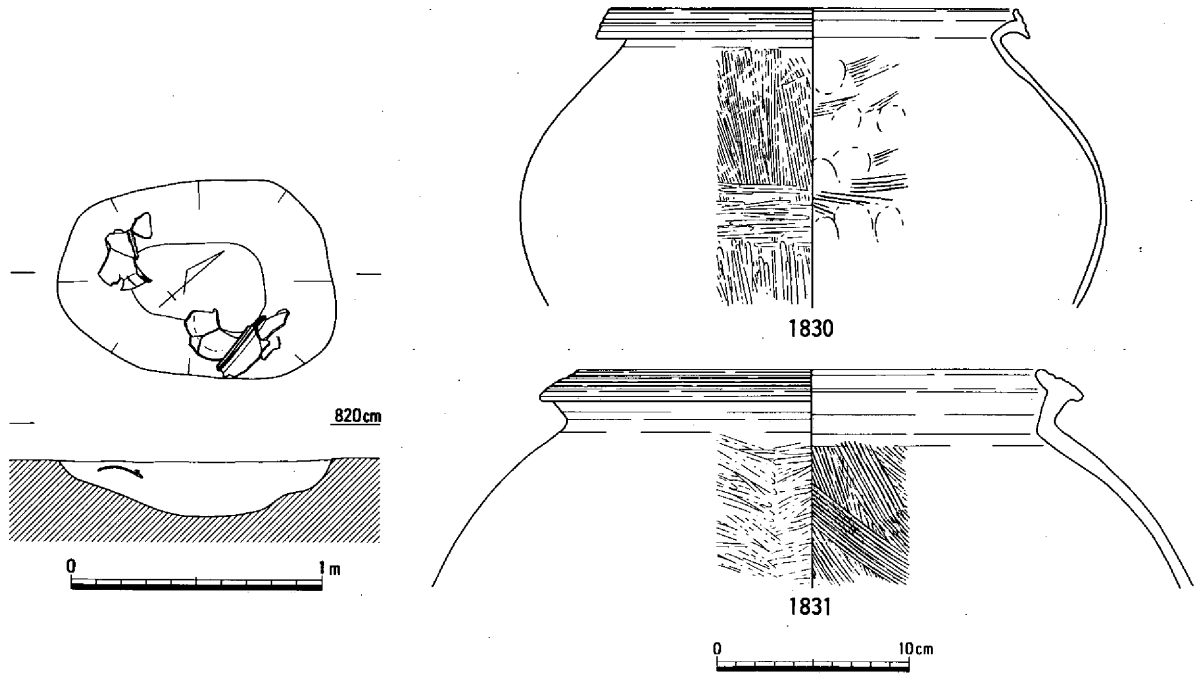


第112図 土壌178 (1/30)



第113図 土壌179 (1/30)・出土遺物 (1/4)

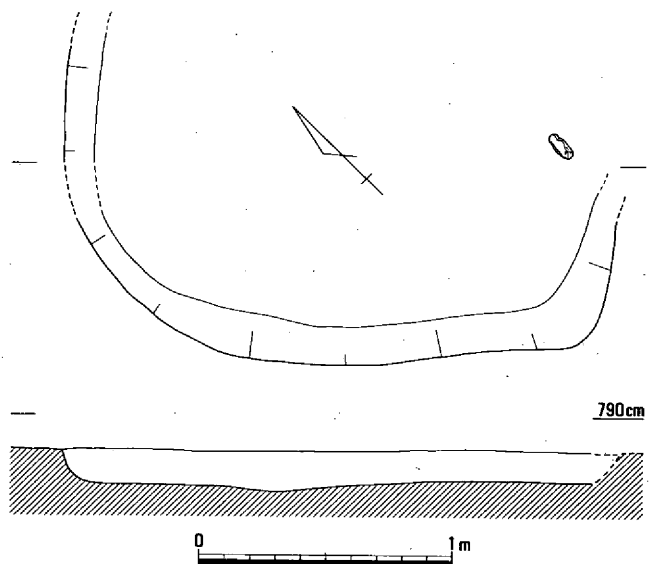




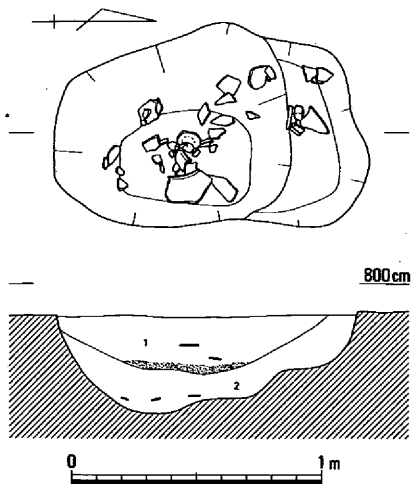
第114図 土壇180 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壇182(第116図、図版7-3)

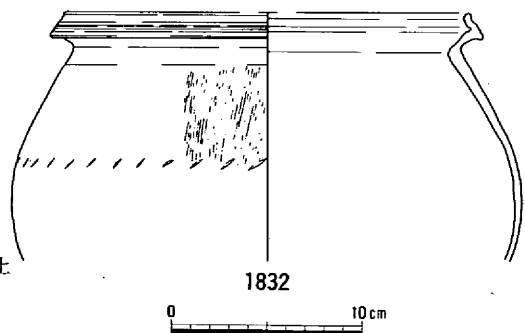
土壇181の南に位置する。125cm×75cmの不整形で、底面も安定していない。また北側には、検出面から24cm下がった位置に段を有している。底面の海拔高は最も深い部分で7.48mを測る。埋土は二層に分かれ、1層の底面には炭が堆積していた。各層から土器が出土しているが、細片が多く時期差は認められなかった。図化したのは1832の甕のみで、弥生時代中期後葉と考えられる。(久保)



第115図 土壇181 (1/30)



1. 褐灰色粗砂混じり砂質土
2. 灰黄褐色粘質土



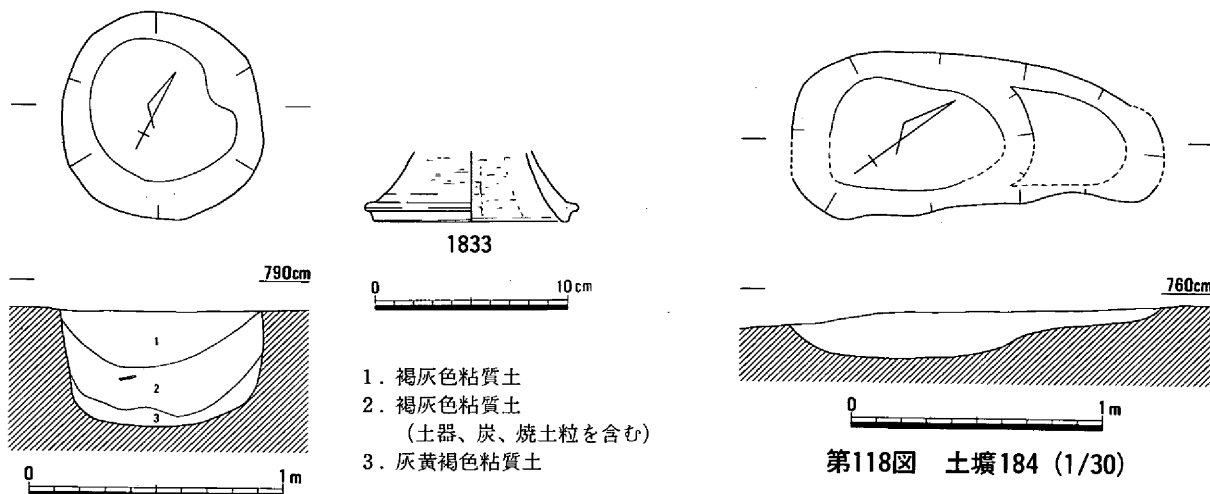
第116図 土壇182 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙183(第117図、図版8-1)

土壙182の南に位置する。直径約80cmの円形で、検出面からの深さ45cm、底面の海拔高は7.31mを測る。埋土は三層に分かれ、2層に炭や焼土粒と共に土器細片が若干含まれていた。1833は高杯の脚裾部で、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(久保)

土壙184(第118図)

土壙183の南にあり、YA3区微高地部の南縁に位置する。150cm×60~65cmの不整長方形で、北半の、検出面から10cm下がった位置に段を有している。埋土は単層で、炭や焼土の混じった灰黄褐色粘質土で埋没していた。時期の特定できる遺物の出土はなく、埋土や周囲の状況から弥生時代に含めたが、断定はできない。(久保)



第117図 土壙183 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙185(第119図)

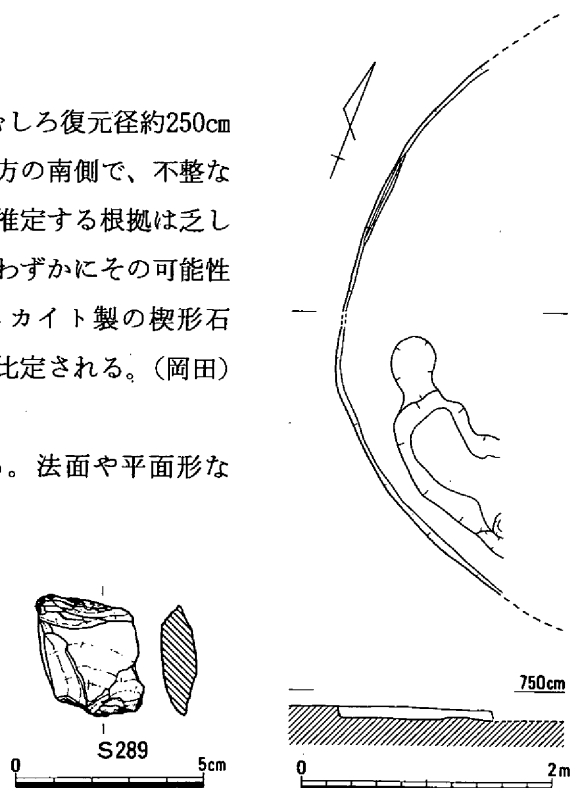
溝172の北約3mに位置する。土壙というよりはむしろ復元径約250cm前後の竪穴遺構というべき形状を呈している。掘り方の南側で、不整なたわみが検出されている。柱穴の痕跡もなく住居と推定する根拠は乏しいが、壙底すなわち床面は水平に保たれているのでわずかにその可能性があるとみてよいだろう。出土遺物にはS286のサヌカイト製の楔形石器が出土している。时期的には弥生時代中期中葉に比定される。(岡田)

土壙186(第120図)

径100cm、深さ約50cm余りを測る円形の土壙である。法面や平面形など形状からすると袋状土壙の下半と推定できる。残存する埋積土は四層で、ほとんどが水平堆積である点に注意される。弥生時代中期中葉以降に比定される。(岡田)

土壙187(第121図)

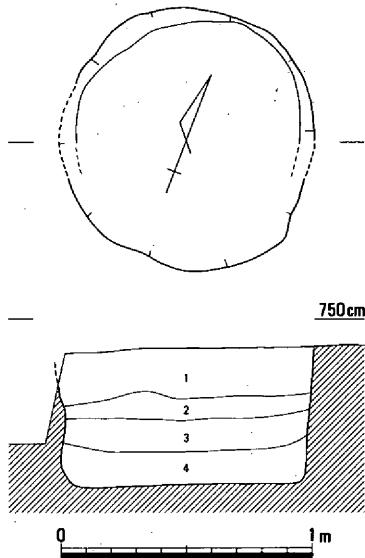
土壙186の南約4mで検出された長円形の土壙である。壙底は丸みもち下層では灰白



第119図 土壙185 (1/30)・出土遺物 (1/2)

色の粘土が埋積している。

出土遺物としては1層からは炭片とともに1834・1835の鉢が出土しており、弥生時代中期後葉に廃棄された遺構と推定される。(岡田)



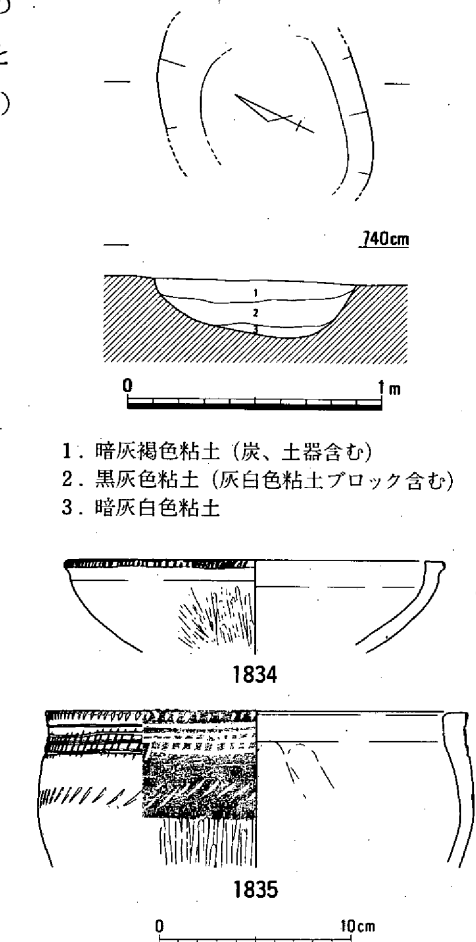
- 1. 淡灰青褐色粘質微砂
- 2. 暗灰青褐色粘質微砂
- 3. 暗灰色粘質土
- 4. 淡灰青色粘質土

第120図 土壌186 (1/30)

(5) 火 処

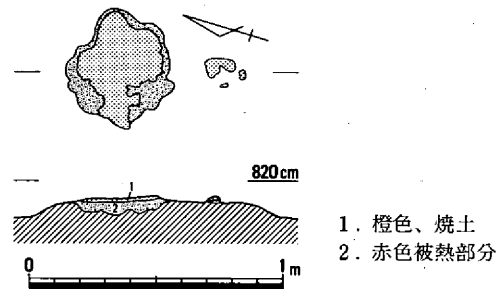
火処 5

YA2A区の中央部、竪穴住居34の西に位置する。弥生時代の遺構を検出中に図示したようなかたちで、橙色の焼土面と地山が熱によって変色した部分が確認できた。時期を特定できる遺物は出土しなかったが、検出面などから弥生時代と考えられる。(平井)



- 1. 暗灰褐色粘土 (炭、土器含む)
- 2. 黒灰色粘土 (灰白色粘土ブロック含む)
- 3. 暗灰白色粘土

第121図 土壌187 (1/30)・出土遺物 (1/4)



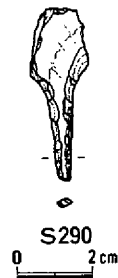
- 1. 橙色、焼土
- 2. 赤色被熱部分

第122図 火処5 (1/30)

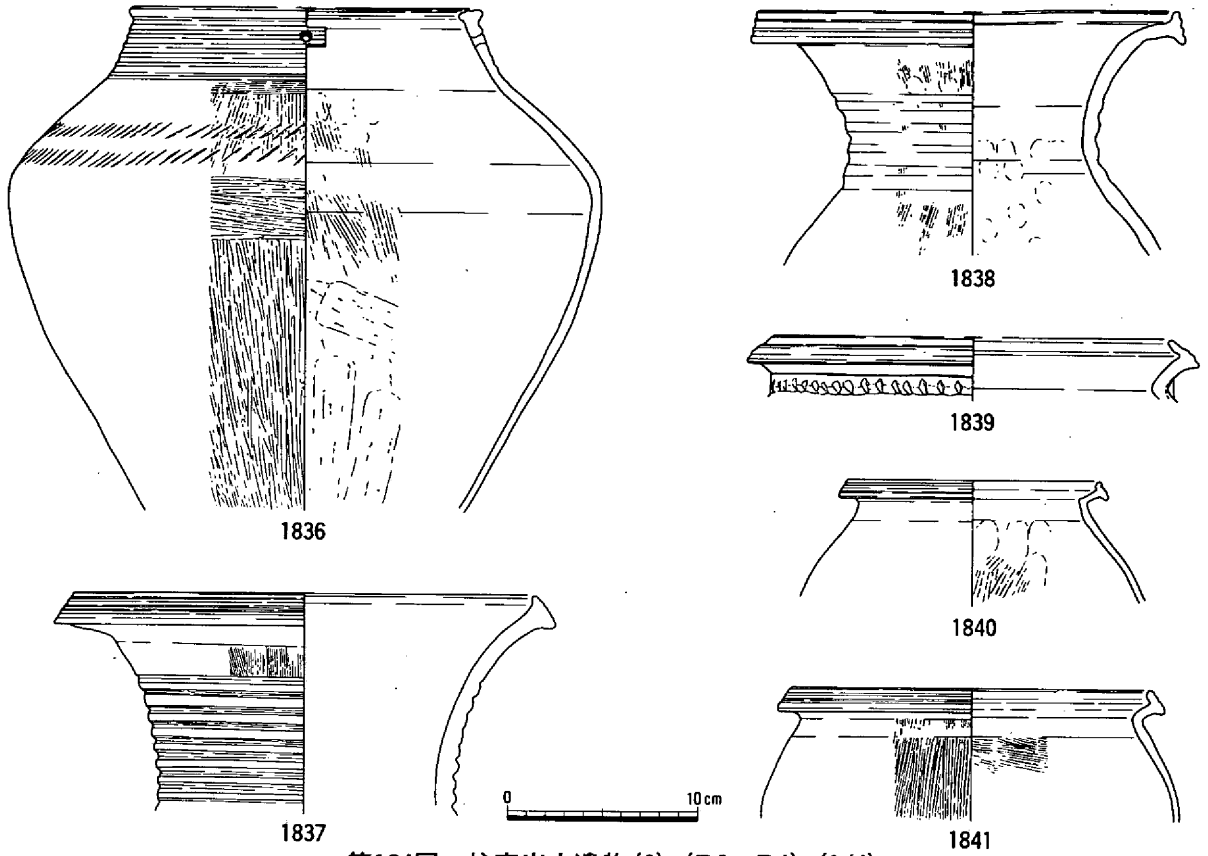
(6) 柱 穴

おもにYA2A・3・5区、HC3・4区において多数検出することができた。規模は直径40cm以下の円形のものが多い。ただし時期が特定できる遺物が出土する柱穴は少ないため、弥生時代の全体図に示した柱穴のうちには古墳時代のものが少量含まれている可能性がある。

第123図のS290はP1から出土した錐の完形品で、僅かではあるが先端部に磨耗痕が認められる。また第124図に示した土器のうち、1836・1838・



第123図 柱穴出土遺物 (1) (P1) (1/2)



第124図 柱穴出土遺物(2) (P2~P4) (1/4)

1839はP 2から、1837・1840はP 3から、1841はP₄から出土している。

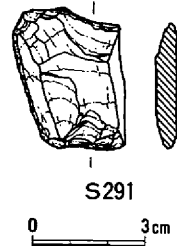
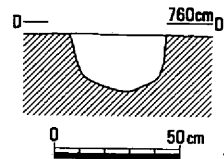
(平井)

(7) 溝

溝164(第23・125図)

HC 6 区の南端部に位置する。検出できた長さは約3 m、幅は40cm前後、深さは20cm前後で、底面の海拔高は7.35m前後である。埋土は黄色ブロック土を含む暗褐灰色粘質土である。遺物は少量の土器片とサヌカイトの楔S291が出土している。

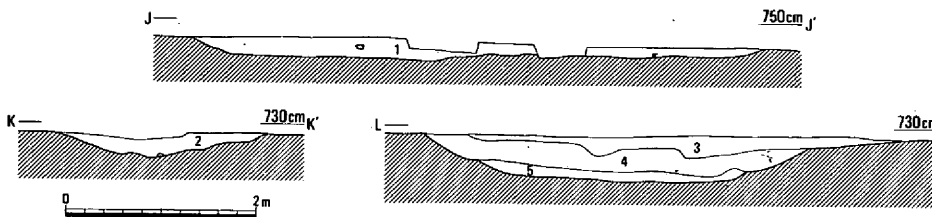
(平井)



溝165(第23・126~131図、図版8-3)

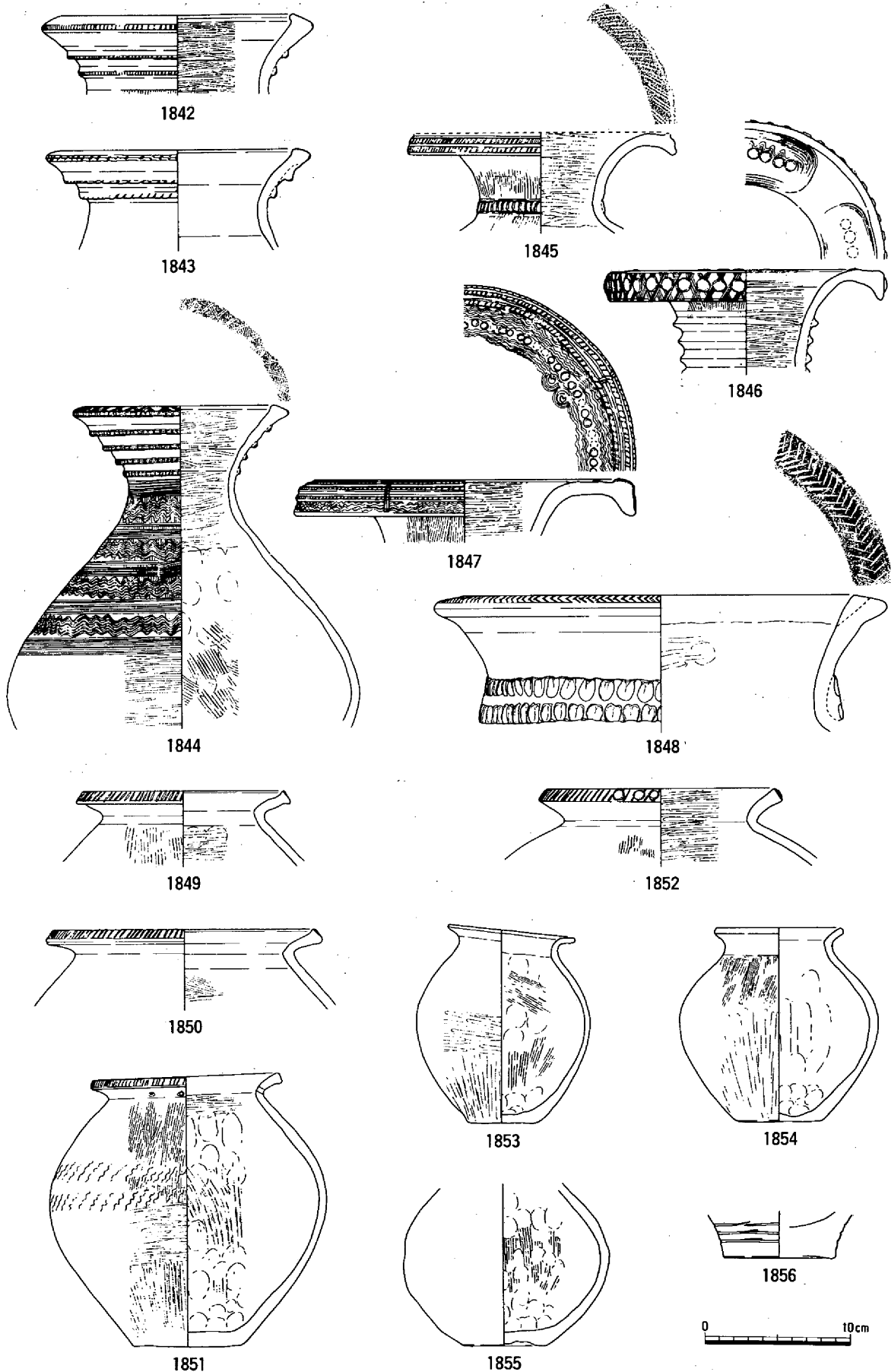
第125図 溝164断面図(1/30)・出土遺物(1/2)

YA 2 B区とHC 2 A区に位置する。検出できた長さは約50mで、幅は約3~6 mである。深さは約20~50cm残存しており、底面の海拔高は約6.9~7.3mで、南に向かって徐々に低くなっていた。断

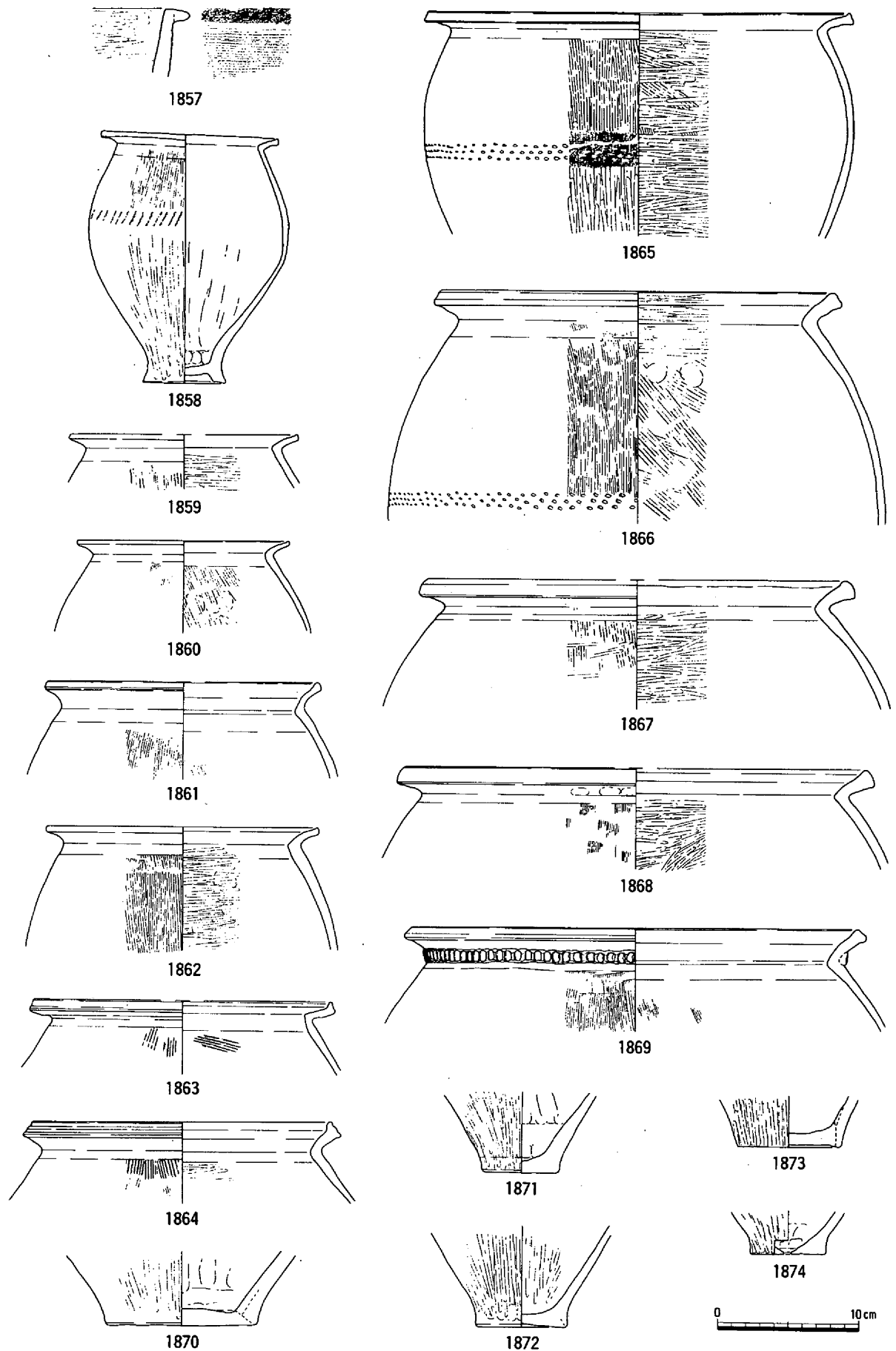


1. 黒灰色粘土
2. 黒灰色粘質土(小礫多い)
3. 黒灰色砂質土(小礫多い)
4. 黒灰色粘土(炭含む)
5. 青灰色粘土(炭含む)

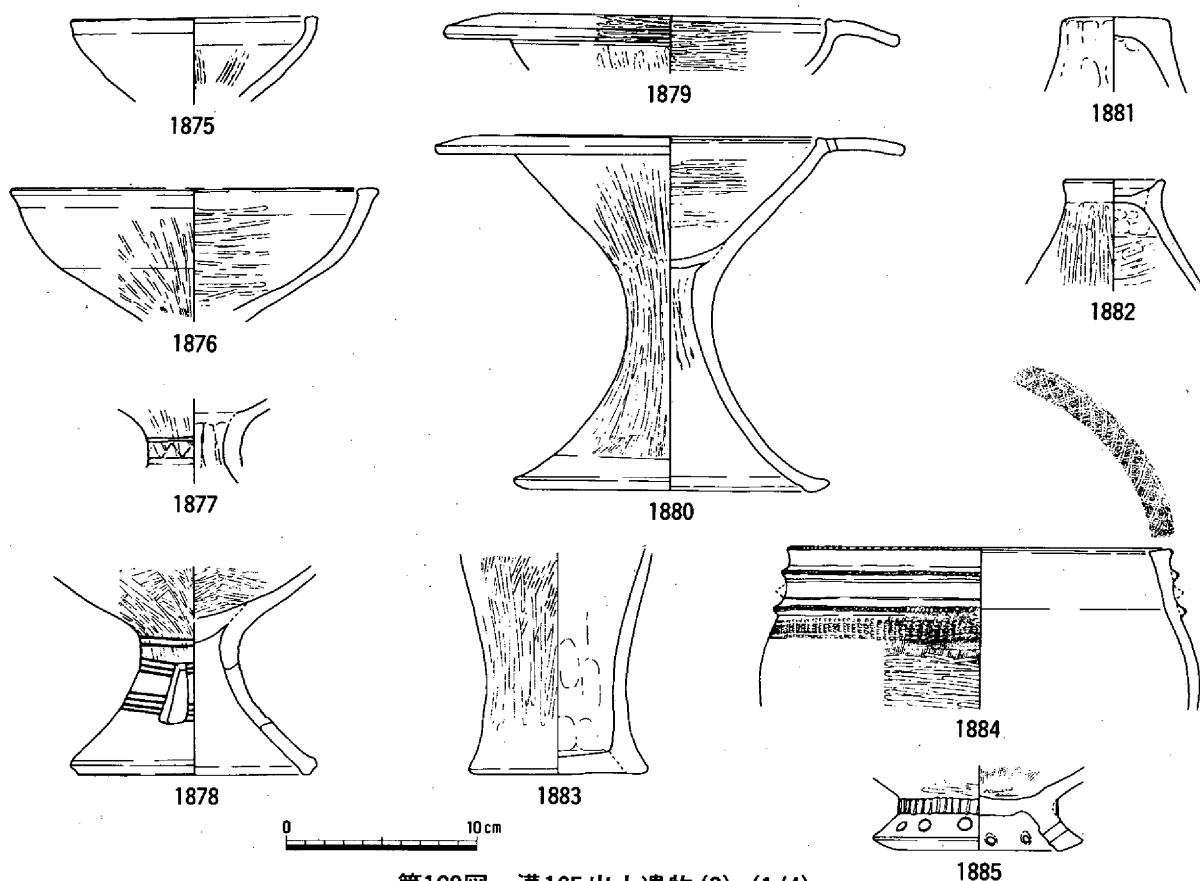
第126図 溝165断面図(1/80)



第127図 溝165出土遺物(1) (1/4)

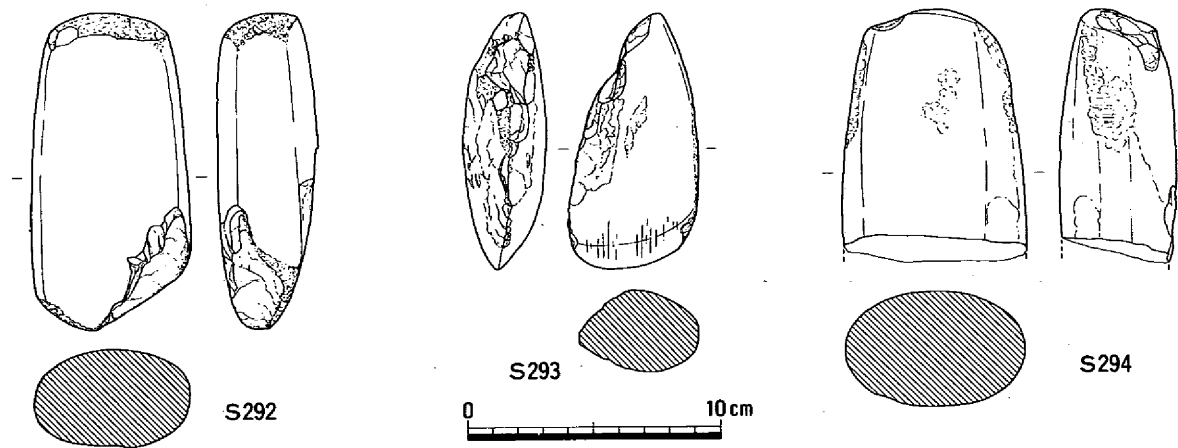
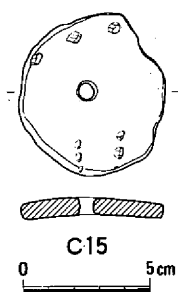


第128図 溝165出土遺物(2) (1/4)

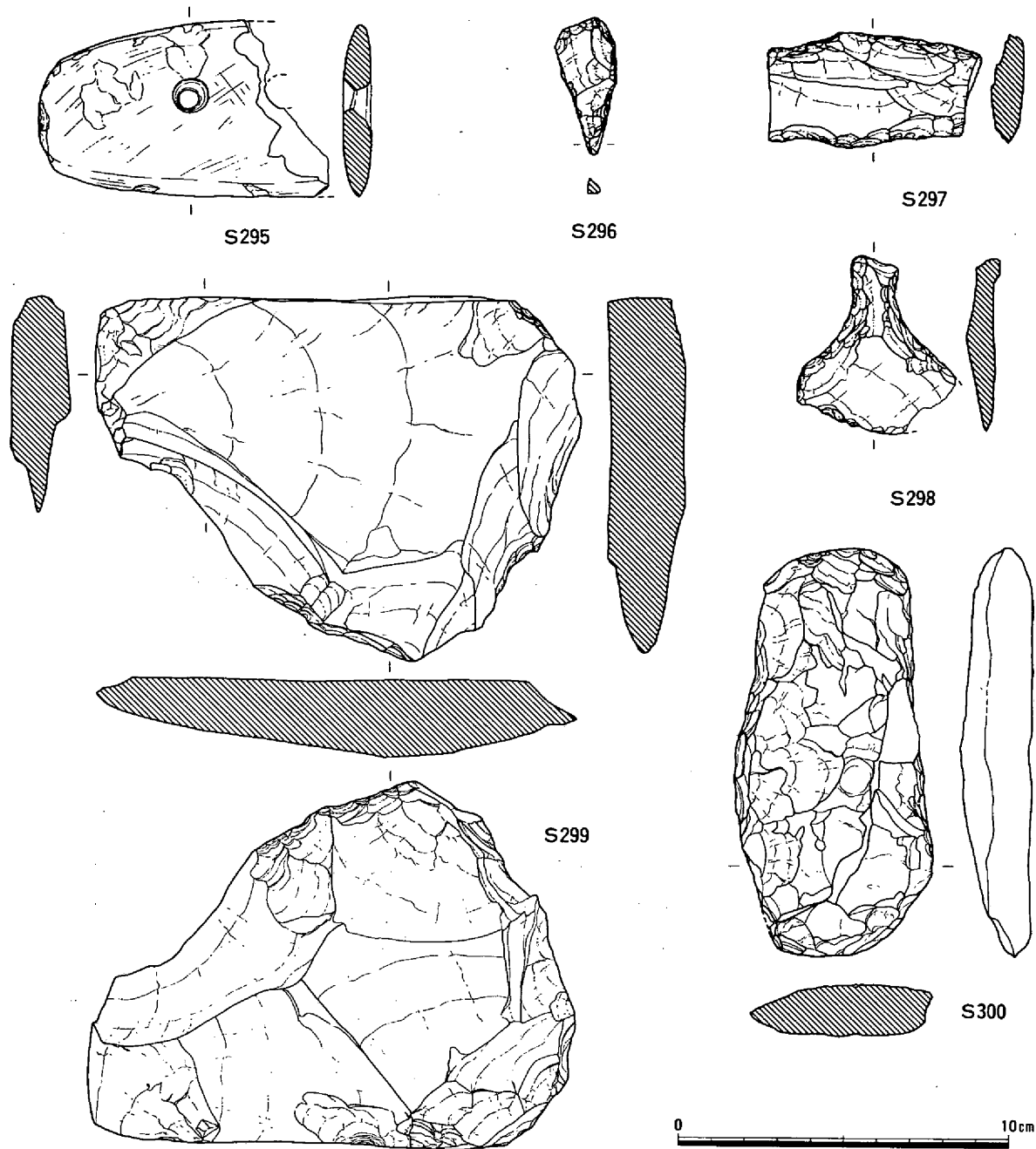


第129図 溝165出土遺物(3) (1/4)

面形は基本的に皿形で、埋土の状況は一律ではなかった。遺物は比較的多く、コンテナ約6箱の土器・土製品や石器が出土した。土器は1856が弥生時代前期であるほかは中期前葉～中葉と考えられる。C15は土器片転用の紡錘車で、表面には刺突文が認められる。図示した石器は石斧S292～294、磨製石包丁S295、石錐S296、スクレイパーS297、石匙S298、石核S299、石鋏S300で、これ以外にも砥石や剥片が出土している。(平井)



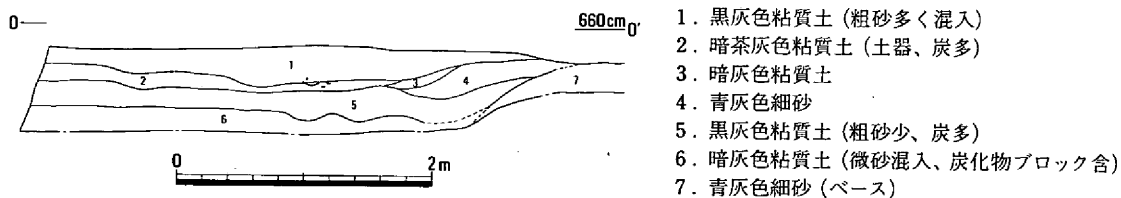
第130図 溝165出土遺物(4) (1/3)



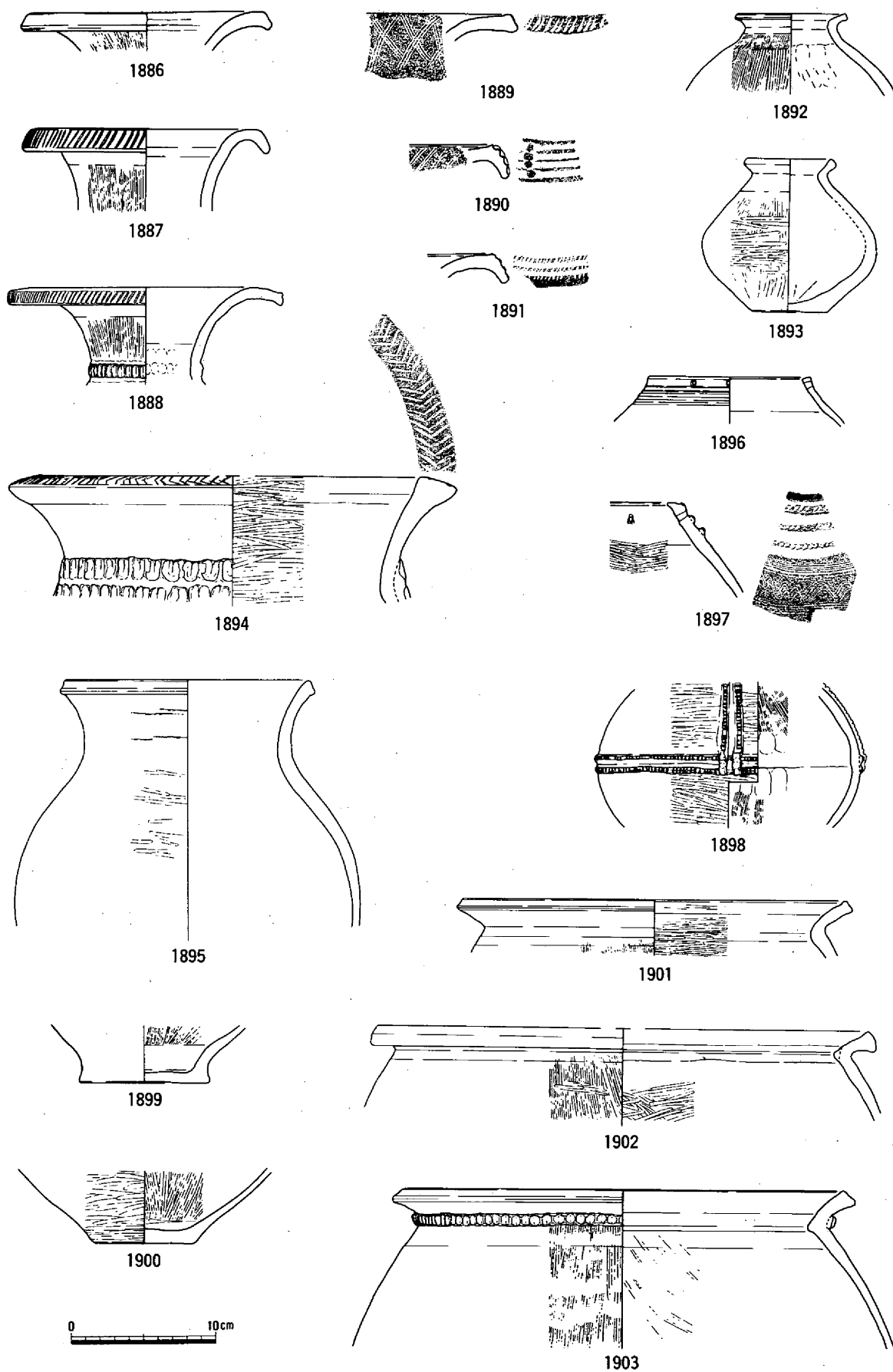
第131図 溝165出土遺物(5) (1/2)

溝166(第23・132~137図、図版9-1・2)

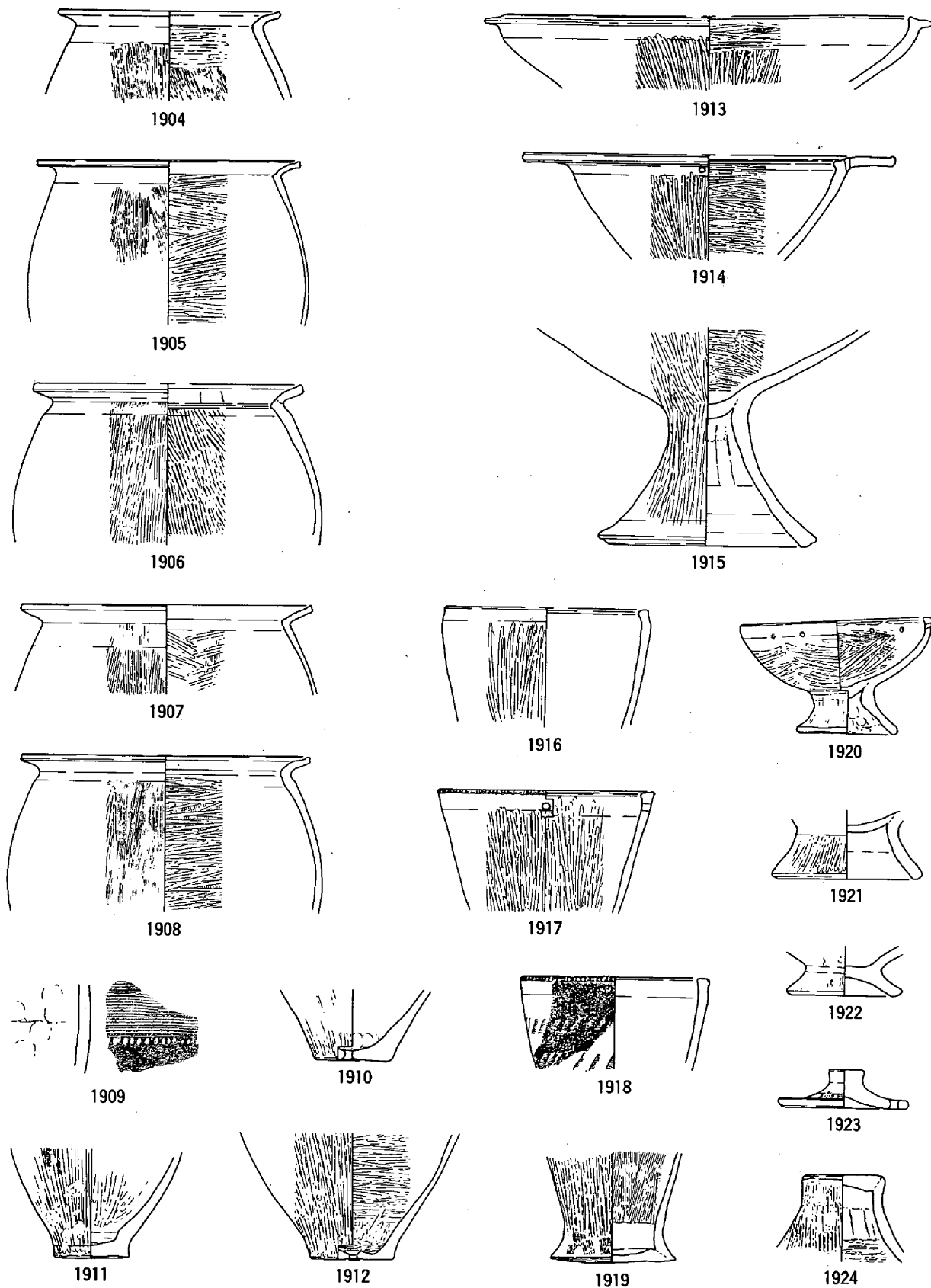
溝165の南で、舌状に張り出した丘陵部を挟んだ南側に位置する。調査区が狭いため半円状の平面しか捉えられなかったが、大規模な溝の、蛇行したコーナー部分と考えられる。砂や有機質遺物を多



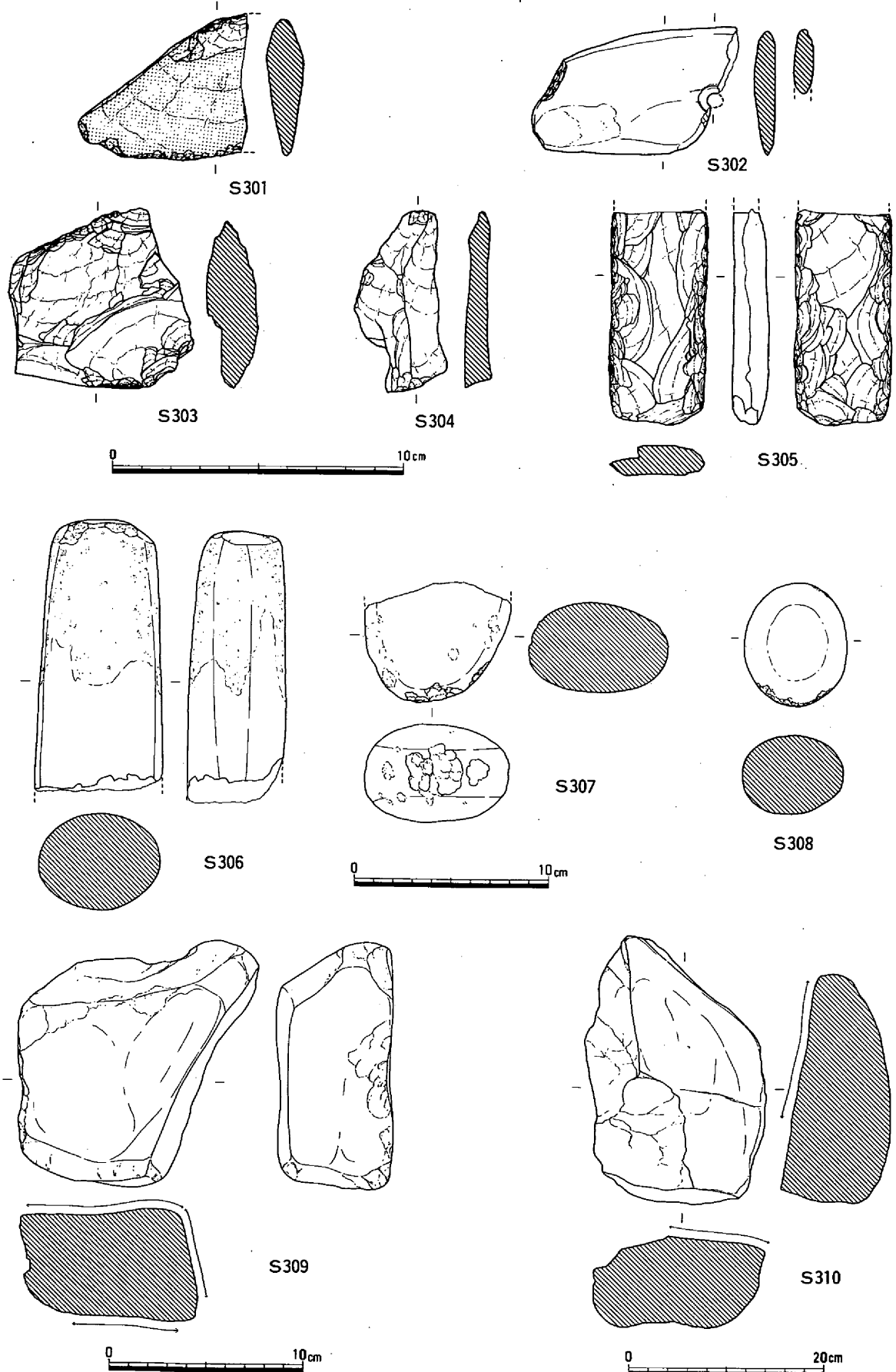
第132図 溝166断面図 (1/60)



第133図 溝166出土遺物(1) (1/4)



第134図 溝166出土遺物(2) (1/4)



第135図 溝166出土遺物(3) (1/2・1/3・1/6)

く含んだ粘質土で埋没していた。また、HC 2 B区北壁のP-P'断面の12層は溝166埋土と同様の暗灰色粘質土が西に下って堆積しており、溝166の続きと想定される。ベースが砂で崩れやすく、湧水も激しかったため底面は明らかにできなかった。比較的多くの遺物が出土したが、土器は主に1～3層から、木器や石器の多くは5層以下から出土している。W61は6層下面から出土している。時期は弥生時代中期中葉で溝165と同時期と考えられるが、溝165の海拔高は1m近く高く、同一の流路とは考えにくい。溝165は溝166に直行しており、支流ではないかと考えられる。 (久保)

溝167(第25・138図)

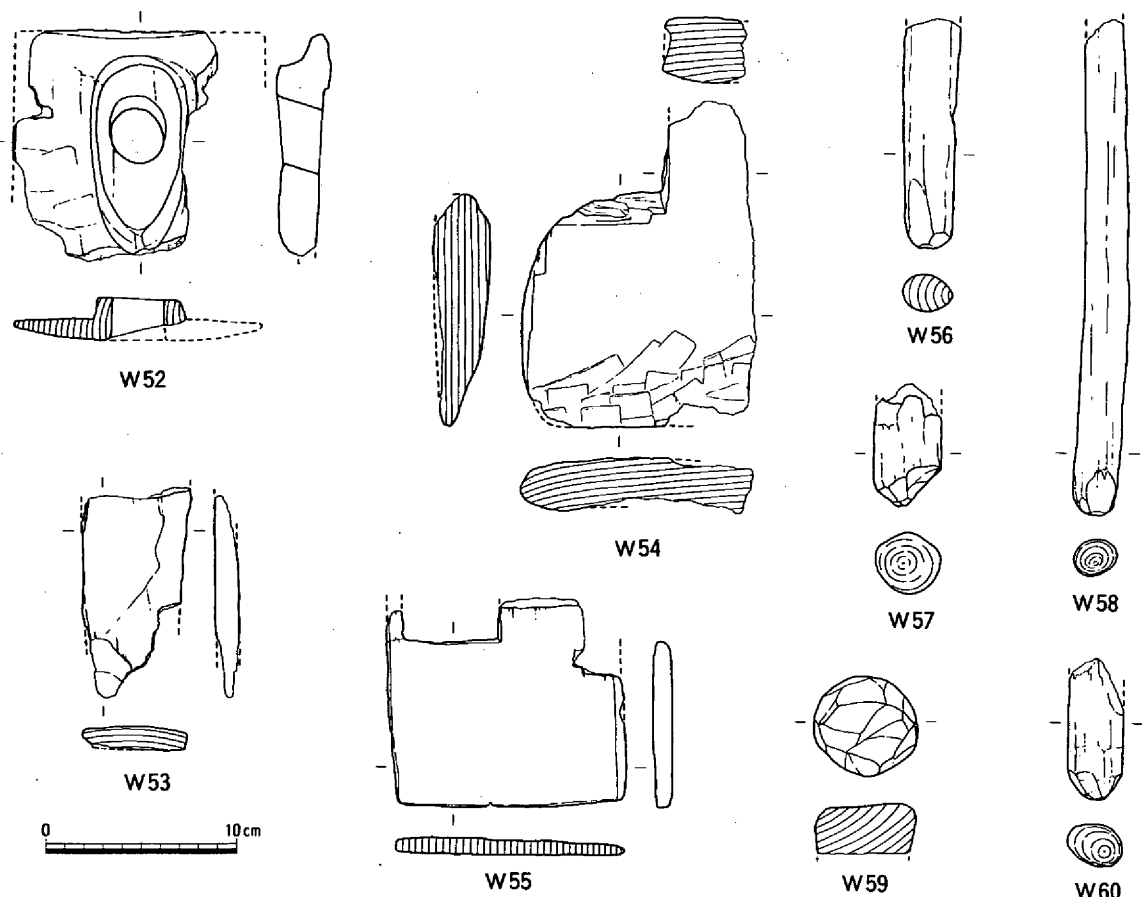
YA 3区中央の微高地部の北縁に沿って検出された。幅は最も広いところで1mをこえるが、深さは10cm程度と浅く一定しておらず、人為的な遺構でな無いかもしい。後述する古墳時代前期初頭の竪穴住居が上面で検出されており、少なくともそれ以前に埋没していたと考えられる。 (久保)

溝168(第25・139図)

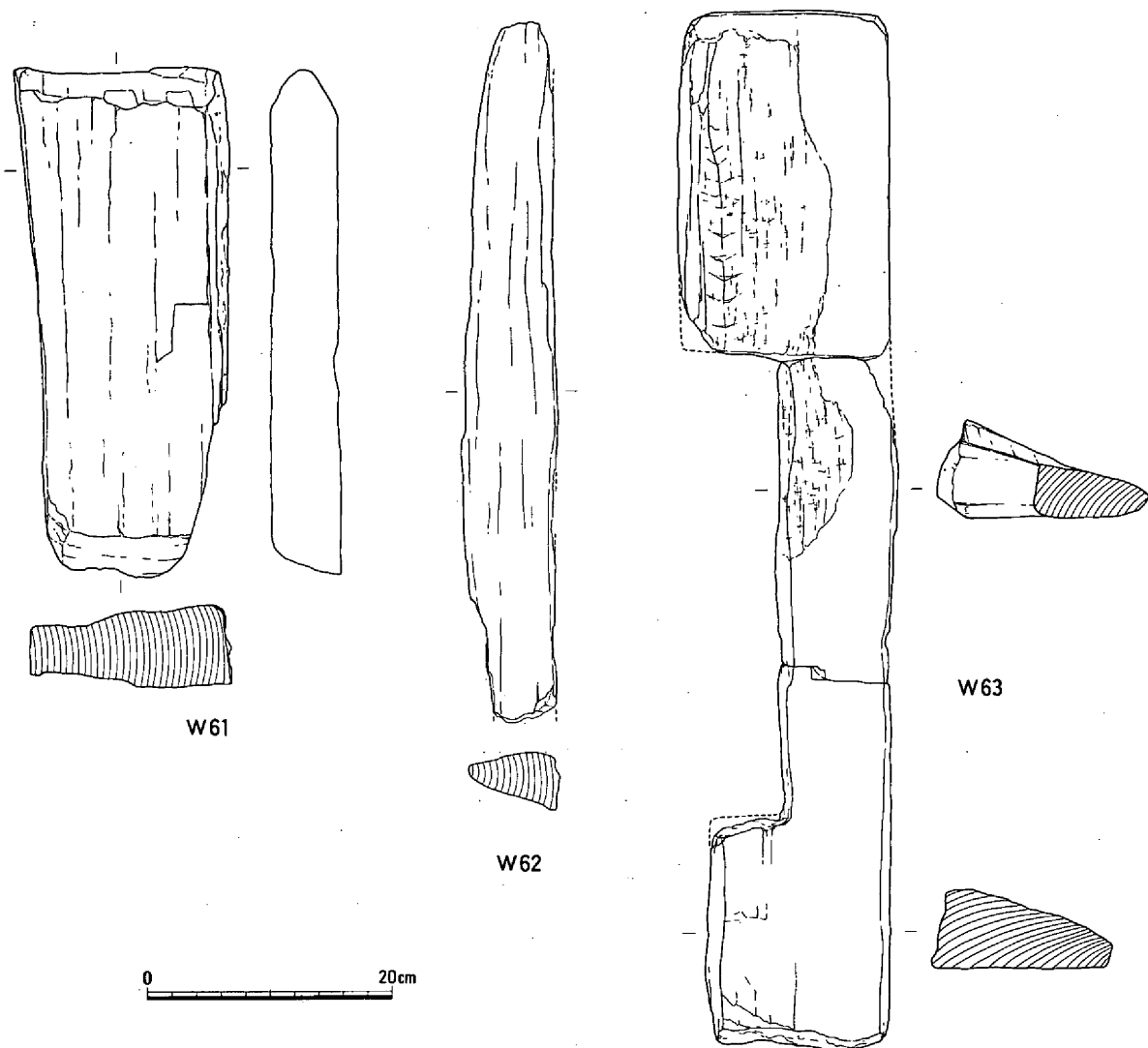
YA 3区中央の微高地部の南端、土壙182の南に位置する。幅約20cm、深さ約10cmの断面U字のしっかりした溝で、水路の可能性はある。底面の海拔高は7.82mを測る。出土遺物はないが、周辺の土壙群と同じ褐灰色砂質土で埋没しており、弥生時代と考えた。 (久保)

溝169(第25・140・141図)

溝168の南で、YA 3区微高地部とYA 4区低位部の境に位置する。調査範囲が狭いため全容は不明である。斜面に位置するため南側の掘り方はあまり明確ではないが、確認された範囲では幅7mをこえる大規模な溝である。底面の海拔高は6.4mを測る。土器および石器が若干出土しているが、木器



第136図 溝166出土遺物(4) (1/4)

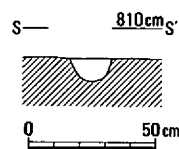


第137図 溝166出土遺物(5) (1/6)

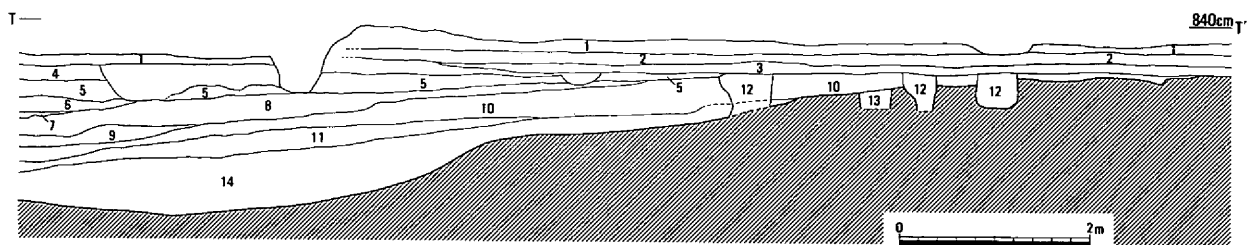


第138図 溝167断面図 (1/30)

1. 黄灰色砂混じり土
2. 暗灰黄色粘質土



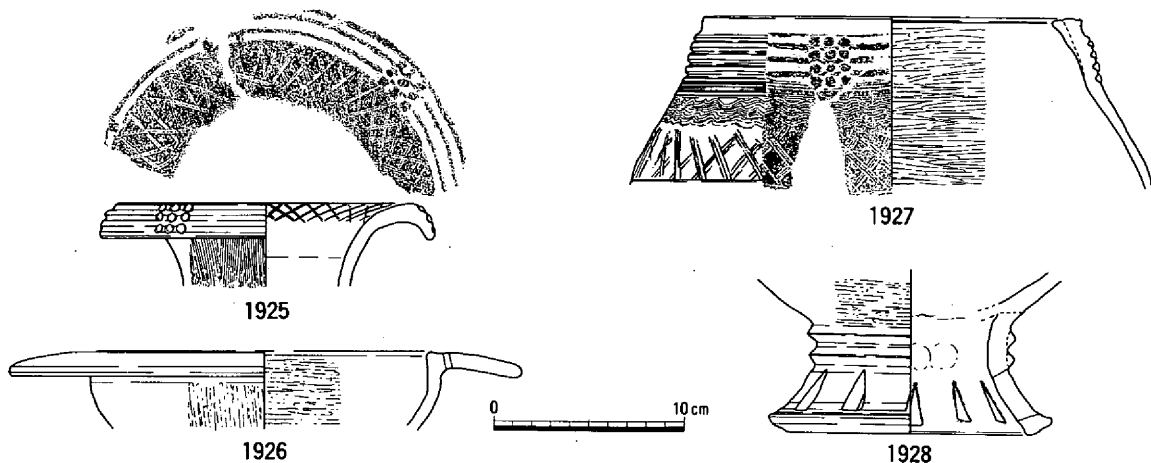
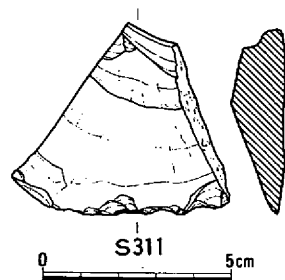
第139図 溝168断面図 (1/30)



- | | | | |
|-----------------|----------------|-------------|-------------------|
| 1. 灰色粘質微砂 (現耕土) | 5. 淡灰黄色粘質微砂 | 9. 黄色粗砂 | 13. 黄褐色粘質土 |
| 2. 淡黄色粘質微砂 | 6. 灰色砂混じり粘質土 | 10. 灰色粘土 | 14. 暗灰色粘質土 (溝166) |
| 3. 淡灰黄色粘質微砂 | 7. 黄色粗砂 | 11. 暗灰色粘土 | |
| 4. 淡黄灰色粘質微砂 | 8. 黒灰褐色砂混じり粘質土 | 12. 暗茶褐色粘質土 | |

第140図 溝169断面図 (1/80)

は出土していない。時期は弥生時代中期中葉で溝166と同時期と考えられる。また溝166同様の暗灰色粘質土で埋没しており、溝166と同一流路の可能性が高い。溝166はYA3区の微高地部を挟んだ北側に位置しており、長良山から続く微高地部の縁辺に沿って、蛇行しながら走流していたと想定される。(久保)

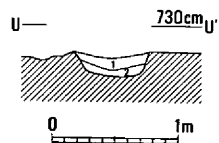


第141図 溝169出土遺物 (1/2・1/4)

溝170(第26・142図、図版9-3)

HC4区の北端で検出された北東から南西方向に流れるとみられる直線的な溝である。検出範囲が狭く溝の肩も不明瞭であるが、幅は約60cm、深さ約15cmを測り断面形は逆台形を示している。

埋積土は上層に炭混じりの暗青色粘質土、下層にはやはり炭混じりの黒青色粘質土である。出土遺物が皆無であるため時期の断定はできないが弥生時代に比定されることに疑い余地はない。(岡田)

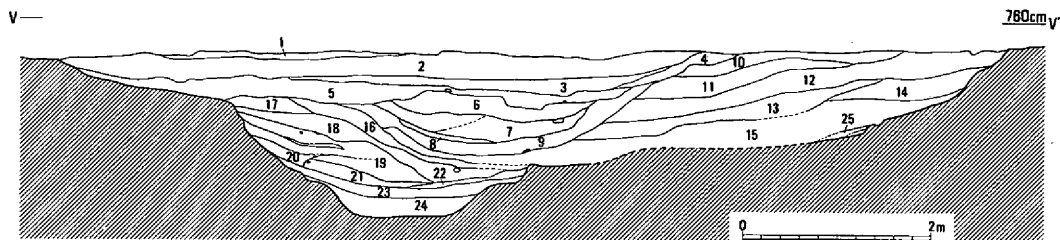


1. 暗青色粘質土 (炭混じり)
2. 黒青色粘質土 (炭混じり)

第142図 溝170断面図 (1/60)

溝171(第26・143・144図、図版10-1)

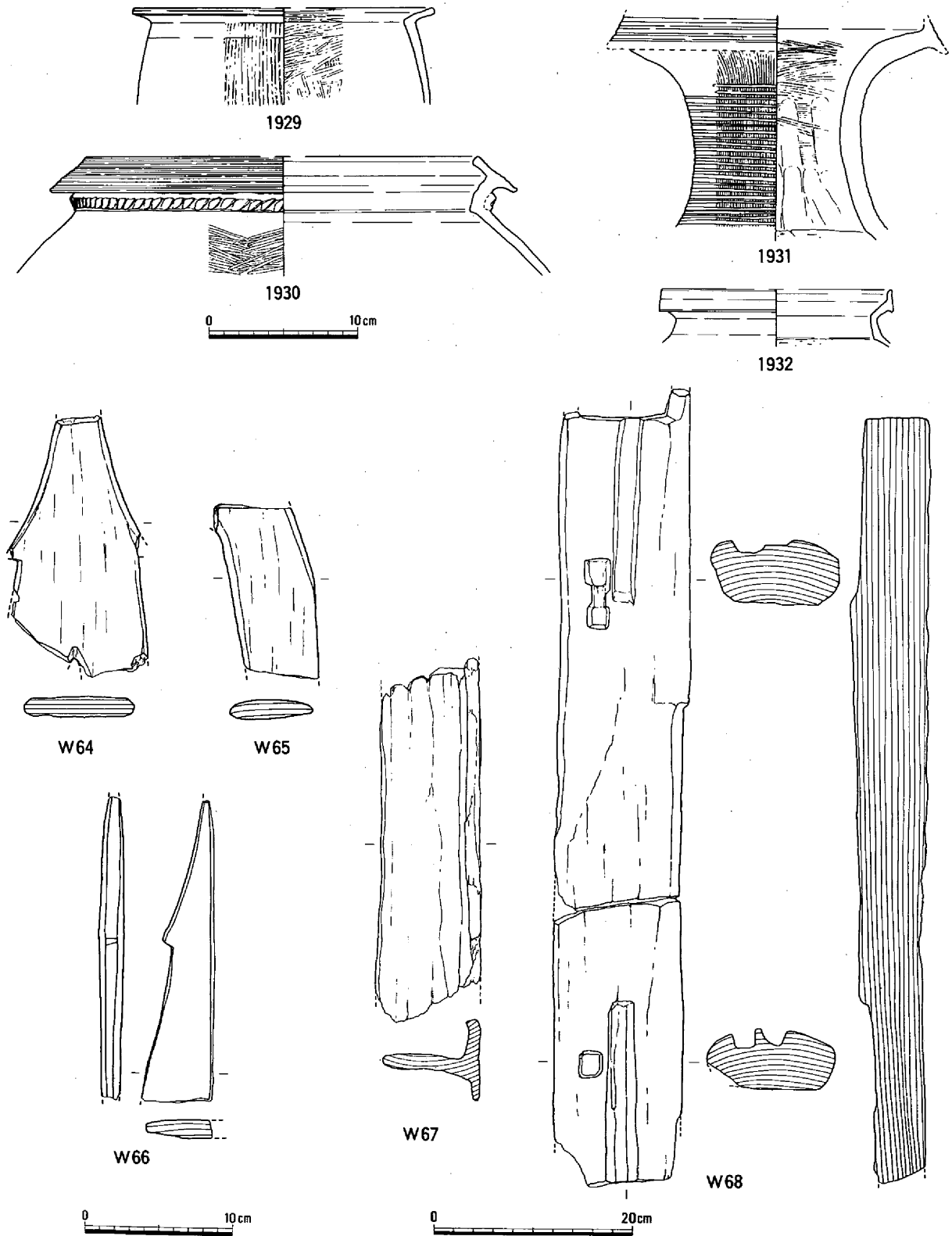
溝170の南方約20mで検出された北東から南西方向に走流するとみられる、最大幅約9mを測る複数



- | | | | |
|-----------------------|-------------|-----------------------|---------------------|
| 1. 黒灰色微砂粘土 | 7. 粗砂層 | 13. 細砂粘土 (黄灰色土ブロック含む) | 19. 暗灰色粘土と白灰色砂の縞状堆積 |
| 2. 淡青灰色粘土 | 8. 縞状の微砂層 | 14. 淡青灰色細砂 | 20. 暗灰色微砂粘土 |
| 3. 暗灰~黒灰色微砂粘土 (炭と砂混在) | 9. 灰黒色粘土層 | 15. 縞状の粗砂層 | 21. 細砂と粗砂の縞状堆積 |
| 4. 淡黄灰色粘土 (白色粗砂含む) | 10. 暗灰青色粘土 | 16. 黒灰色細砂 | 22. 淡黄灰色微砂粘土 |
| 5. 暗灰~青灰色粘土 | 11. 灰青色粘土 | 17. 青灰色粘土 | 23. 白色粗砂 |
| 6. 黒灰色粘土 (木質多く含む、ピート) | 12. 暗灰色微砂粘土 | 18. 白灰~淡灰色細砂 | 24. 灰褐色弱粘質土 (ピート) |

第143図 溝171断面図 (1/80)

の溝が集まった流路である。第143図に示す土層断面図では、1～5層が最終埋積層となり、6～9層が直前に機能していた溝であることがわかる。同様に、17・18層から下位、そして10層から15層までの古い時期の溝の存在と重なりを確かめることができる。したがって大きく3ないし4条の溝の変遷が現われている。出土遺物には弥生時代中期中葉の甕1929などのほか後期の壺1931・1932があるが、



第144図 溝171出土遺物 (1/4・1/6)

第3章 発掘調査の概要

これらは上層から出土している。また木製品も湿潤な条件が幸いして遺存しており、又鍬W64～66のほか建築材と推定されるW68などが確認されている。時期的には土器が示すように弥生時代中期～後期に比定される。(岡田)

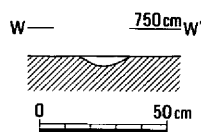
溝172(第26・145図)

土壌185のすぐ南で検出された、ほぼ東西方向を示す直線的な溝である。幅約20cm弱、深さ約20cm前後を測る。断面形は凸レンズ形を示している。出土遺物は土器細片がわずかに確認されているが時期を特定できるものはない。層的に弥生時代に比定されることに疑う余地はない。(岡田)

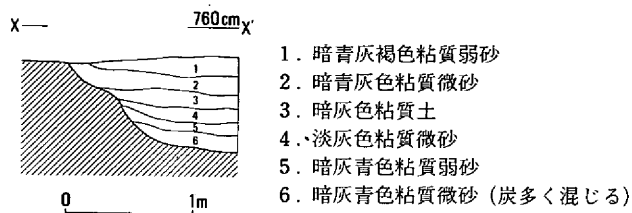
溝173(第26・146図)

南北方向の狭長な調査区の西辺に沿った状態で検出された。検出部分は直線的で北の端は土壌187まで達しておらず西方に穏やかに曲がっている。第146図の土層断面図を見ると、深さは70cm以上、最大検出幅は1m以上を測り、復元推定幅は2m前後を越えるものと考えられる。

埋積土は六層の灰色を主体とした粘質の微砂層が水平に堆積しており、徐々に埋没したことが考えられる。出土遺物には弥生土器が少量認められ、中期に比定される可能性が高い。(岡田)



第145図 溝172断面図 (1/30)



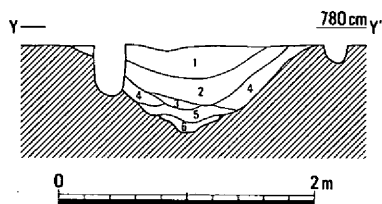
第146図 溝173断面図 (1/60)

溝174(第27・147図)

H C 3区南半で検出された南北方向の溝である。幅約190cm、深さ約70cmを測り断面形はV字形を呈している。下層は徐々に埋積した状況が観察されるので、用排水などの目的で掘り開かれた溝である可能性がある。出土遺物は土器細片のみであるが、弥生時代後期の範囲に比定される。(岡田)

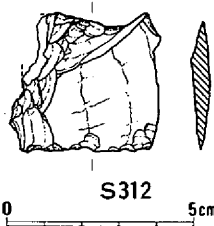
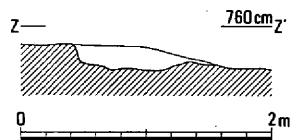
溝175(第27・147図)

溝174の東約15mで検出された。北東から南西方向を示し、幅約1m前後、深さ約20cmを測る。このあたりから東に地形が下がることが確認されており、西方の微高地の東端にあたる位置を占めている。出土遺物にはS312のサヌカイト剥片がある。弥生時代後期の範囲おさまるとみられる。(岡田)



- 1. 灰黄褐色土
- 2. 暗灰褐色土
- 3. 黄褐色土
- 4. 淡灰黄褐色土
- 5. 黄色土
- 6. 黄色土と暗灰色土の混在土

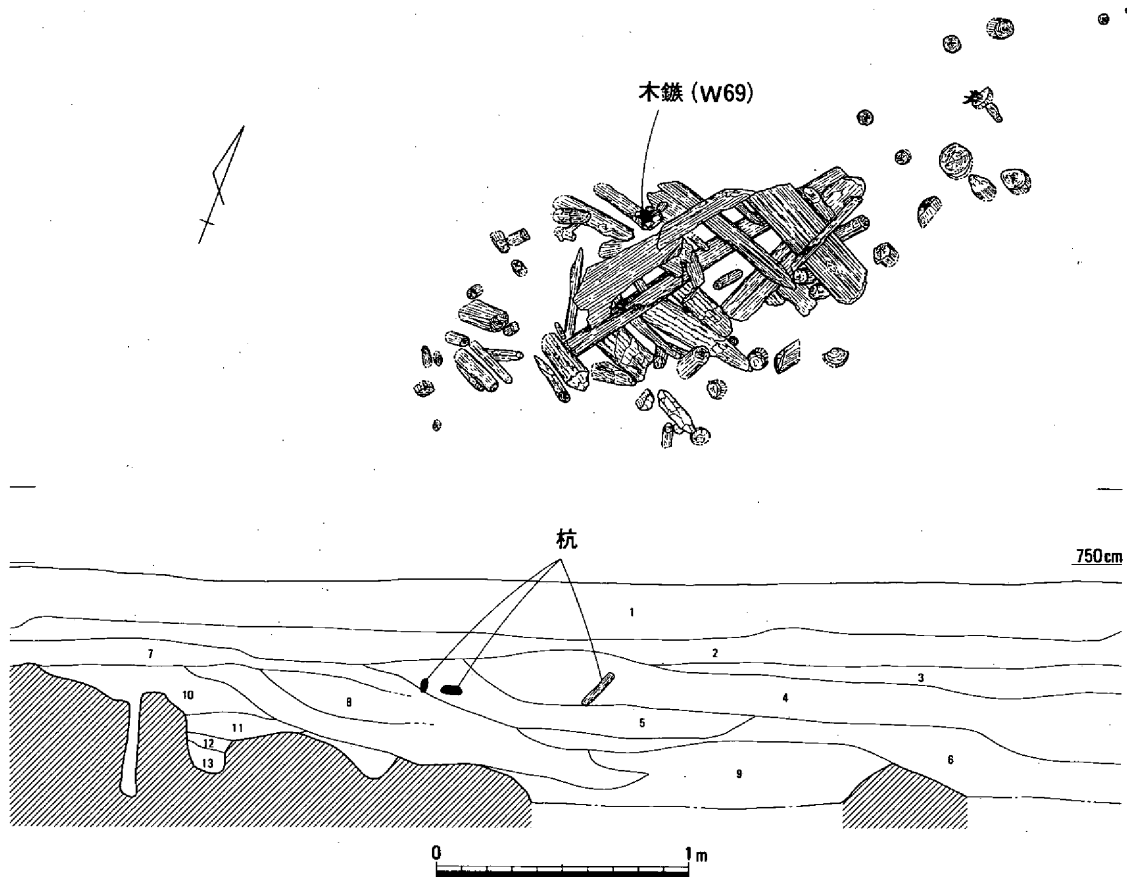
第147図 溝174断面図 (1/60)



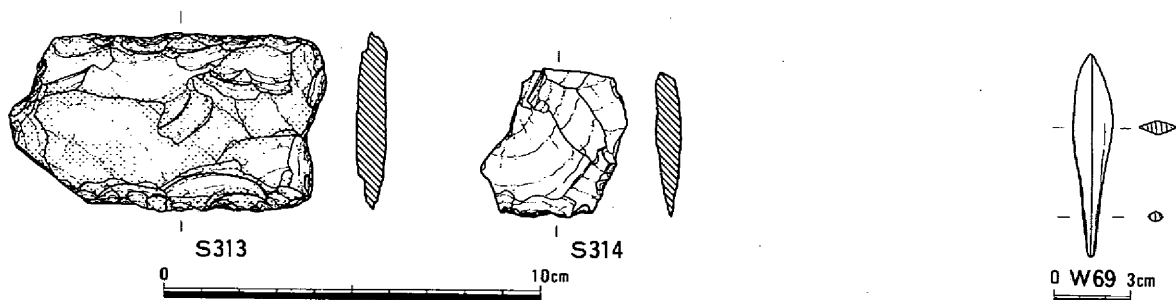
第148図 溝175断面図 (1/60)・出土遺物 (1/2)

(8) 護岸状遺構

HC 5区で検出された遺構である。径10～20cm前後の芯持ちの杭材をほぼ南北方向に30本以上打ち込み、その間にみかん割り用材あるいは板材を挟み込んだ状態で姿を現した。検出部分は溝の堆積状態が認められ、砂質の粘土あるいは砂が埋積しているのでその溝の護岸施設の肩と理解している。発掘調査はこの範囲が、設計変更により掘削が及ばないことが決まったためこの護岸遺構も現状保存が実現することとなり、上面の検出に留めることとした。したがって用材のサンプル採取も行なわなかったが、肉眼的にはコナラ・アベマキなどの用材が確認された。出土遺物にはごく少量の弥生土器



- | | | | |
|---------------------------|------------|-----------|---------|
| 1. 淡灰白褐色粘質弱砂 | 5. 灰白色粘質微砂 | 9. 黒灰色砂 | 13. 灰色砂 |
| 2. 暗灰白色粘質微砂 | 6. 粗砂 | 10. 灰白色砂 | |
| 3. 暗灰色粘質微砂 | 7. 暗灰白色砂質土 | 11. 灰色微砂 | |
| 4. 暗灰白色粘質微砂 (黄灰色小ブロック混じる) | 8. 暗灰色粘質微砂 | 12. 灰色粘質土 | |



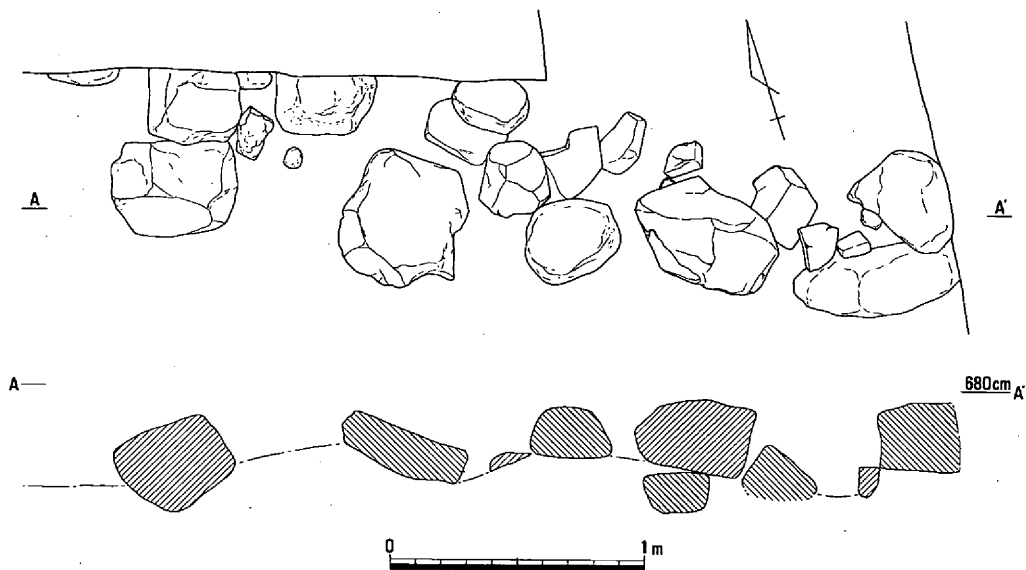
第149図 護岸状遺構 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3)

の細片とS313のサヌカイト製打製石包丁とS314のサヌカイト剥片のほかに、W69の木鏝が出土している。これらはいずれも護岸状遺構の上面および杭材の隙間から出土したものである。中でも木鏝の出土は珍しいが、狩猟目的というよりは漁撈に使用された可能性が高いと考えられる。樹種はヒノキかスギと推定されている。時期は弥生時代後期前葉に比定される可能性がもっとも高い。(岡田)

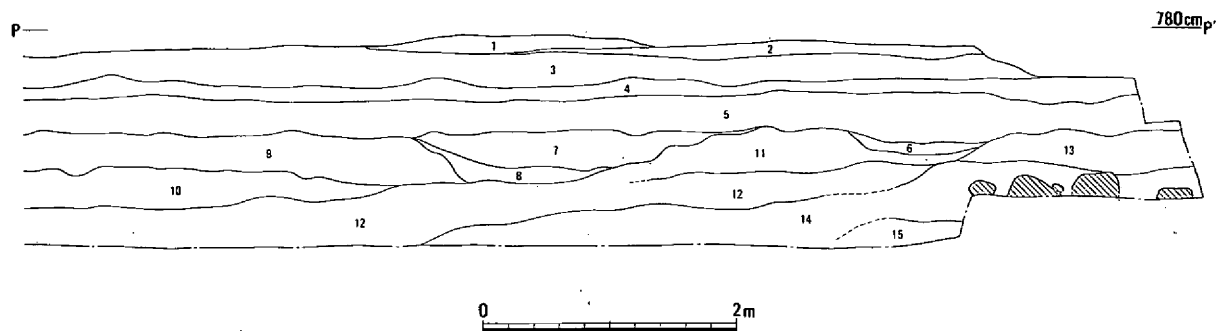
(9) 石 列

石列

HC2B区の北東角に位置する。30cm~50cm前後の人頭大の礫が50~70cm間隔でほぼ東西方向に列をなしており、特にA-A'断面にかかる礫は平らな面を上にして、ほぼレベルを揃えた状態で検出されている。その側面にはこれらの礫を支えるように一回り小さな礫が配されている。この構造や斜面に直行する位置関係にあることから、石垣などの斜面を補強したり土の流出を止めるための施設とは考えにくく、この場所が比較的低位で地盤が脆弱なことを考慮に入れると、飛石のような足場として使用されたのではないかと考えられる。時期は出土遺物が無いため断定できないが、第151図の12層が溝166と考えられることから、弥生時代中期中葉以前に遡る可能性が高い。(久保)

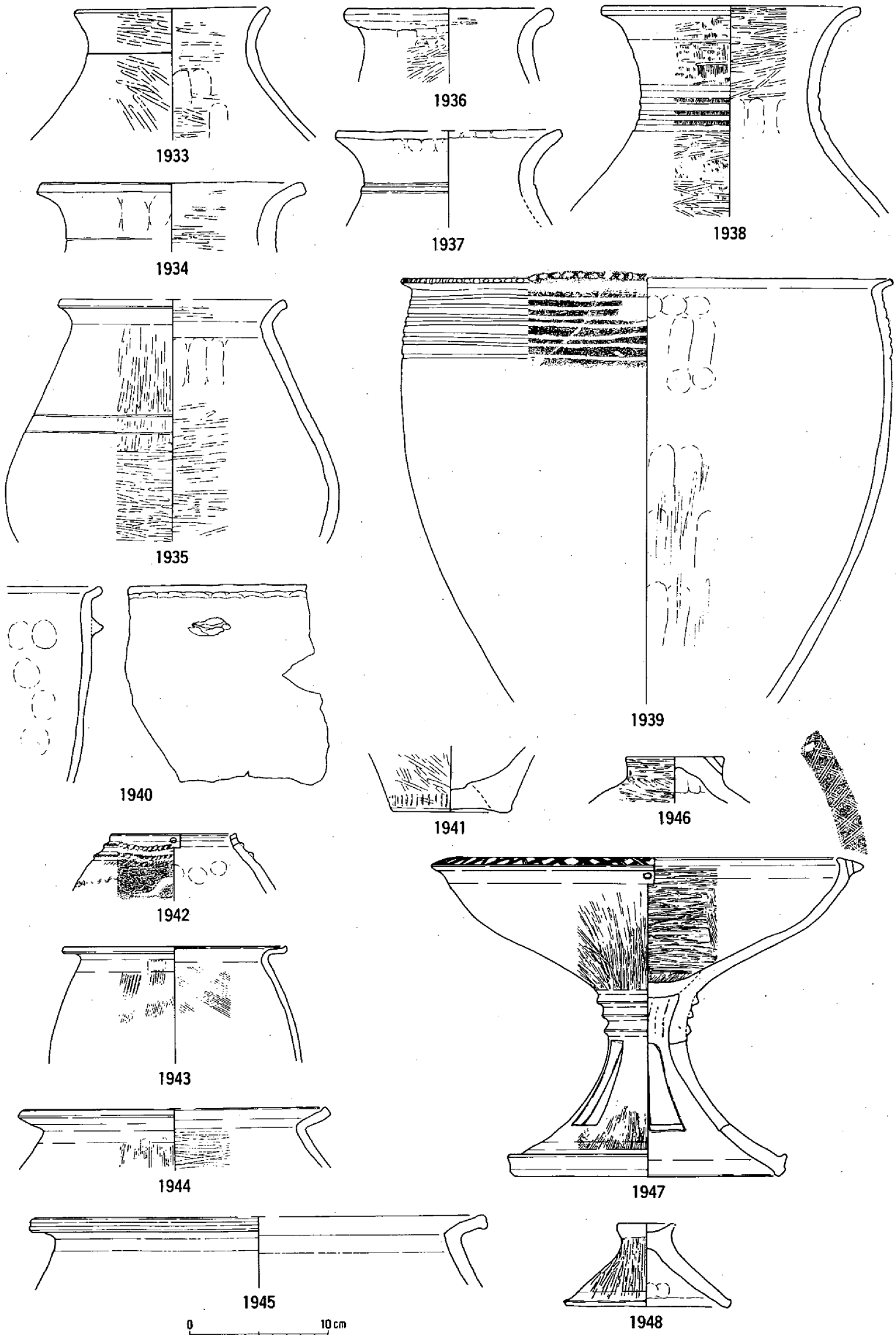


第150図 石列 (1/30)

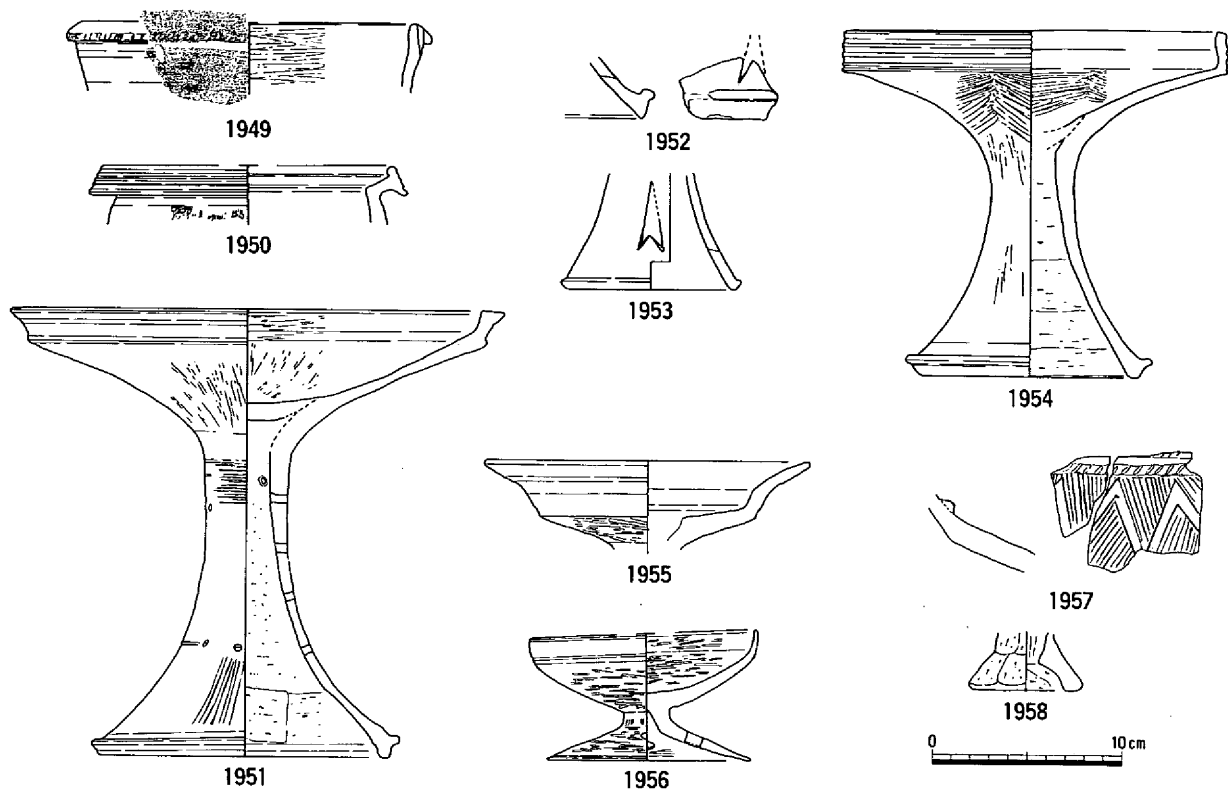


- | | | | |
|-----------|------------|----------------|-------------------|
| 1. 褐色鉄分層 | 5. 暗褐色粘質土 | 9. 暗灰色粘質土 | 13. やや青みがかった灰色粘質土 |
| 2. 黄灰色砂質土 | 6. 淡青灰色粗砂層 | 10. 暗褐色粘質細砂 | 14. 暗灰色粗砂混じり粘質土 |
| 3. 褐色砂質土 | 7. 灰褐色粘質土 | 11. 暗灰色粘質土 | 15. 灰色シルト質粘土 |
| 4. 淡褐色粘質土 | 8. 褐色粘質土 | 12. 暗灰色砂混じり粘質土 | |

第151図 HC2B区北壁断面図 (1/60)



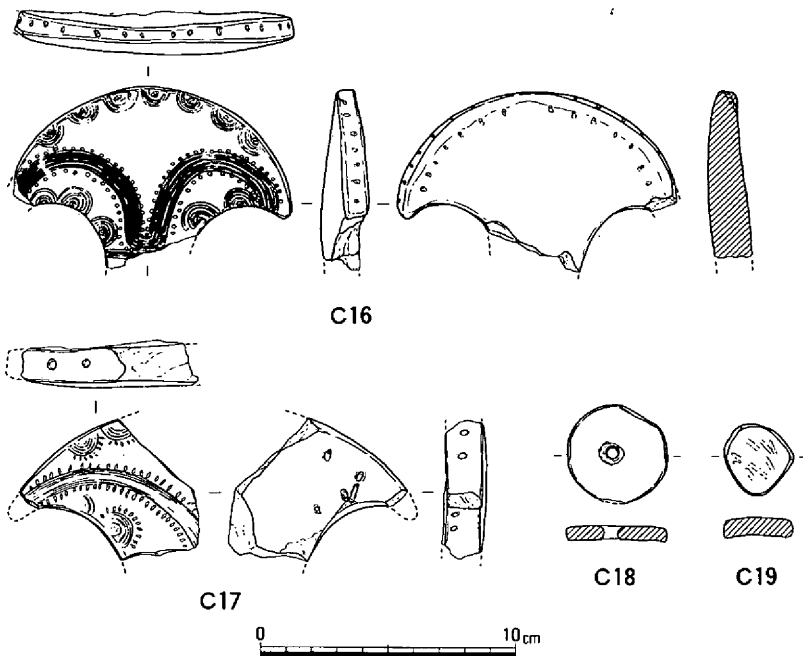
第152図 その他の出土遺物（弥生時代1）（1/4）



第153図 その他の出土遺物 (弥生時代2) (1/4)

(10) その他の遺構・遺物

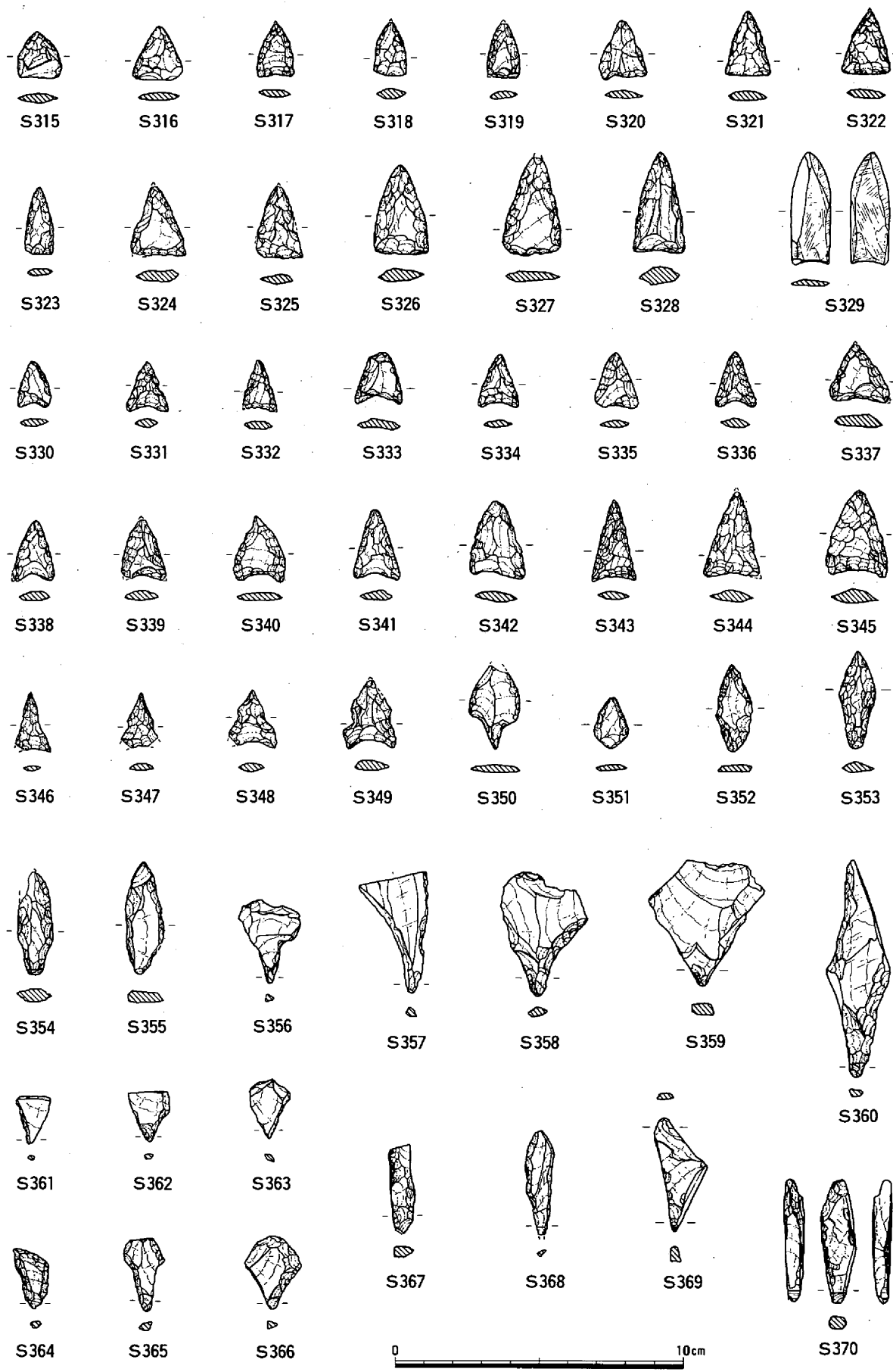
これまで報告した以外の遺構としては浅い土壇状或は溝状の遺構があったのみである。遺構に伴わないおもな遺物については図示している。土器のうち1957は2004と同一個体であろう。分銅形土製品のうちC16はYA2A区の北端部の東側溝から、C17はHC2B区の包含層から出土し、いずれもクシ描きと刺突で文様は表現されている。G27はガラス小玉で色調は淡青色である。石器のうちS329



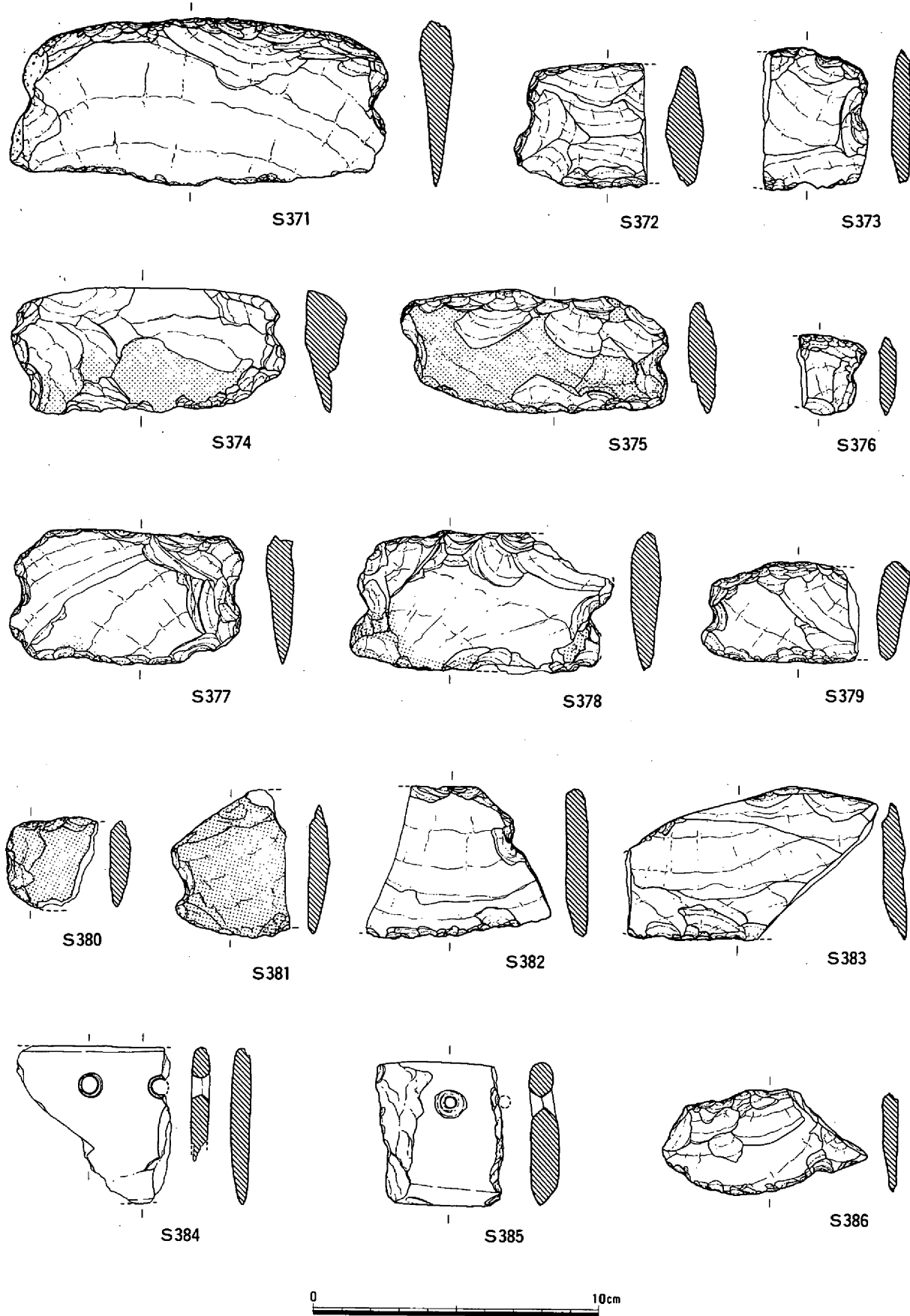
第154図 その他の出土遺物 (弥生時代3) (1/3・1/1)

はYA2A区の中央部から出土した粘板岩製の磨製石鏃で、S370の先端部には使用による磨耗痕が、またS375・378にはコーングロスが明瞭に観察できる。S432はYA2A区の北部から出土し、石材は竪穴住居31から出土した勾玉や管玉未製品に類似している。
(平井)

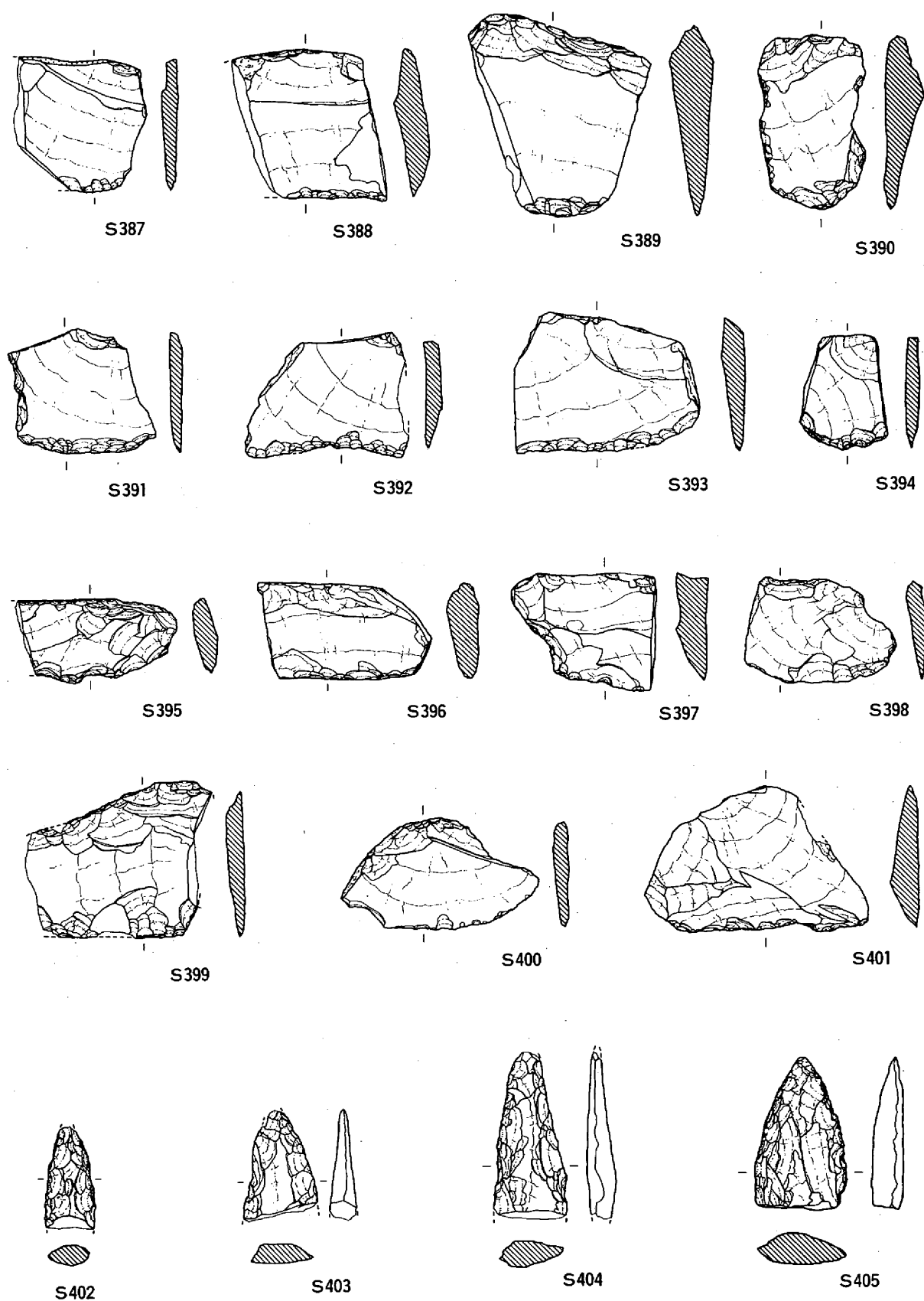




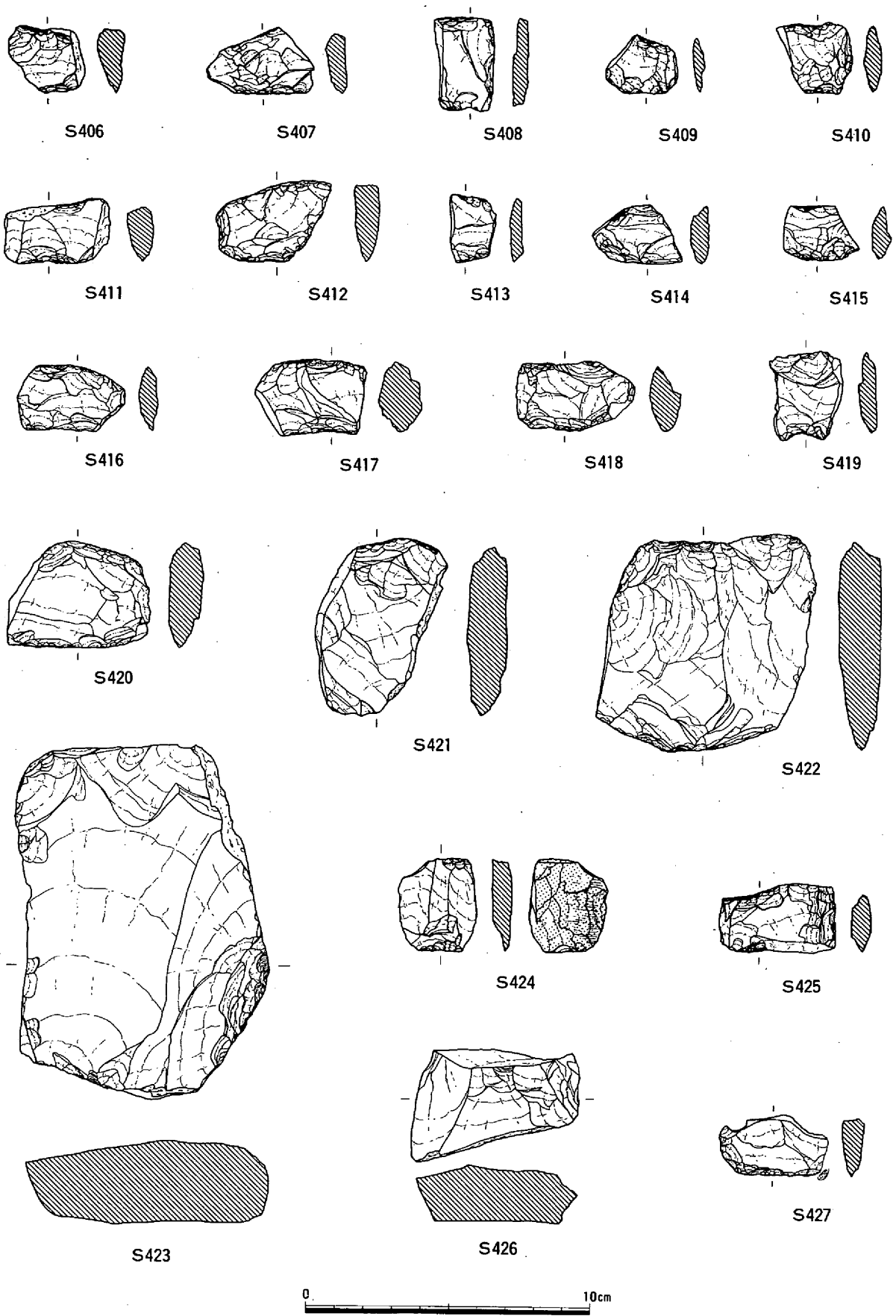
第155図 その他の出土遺物 (弥生時代4) (1/2)



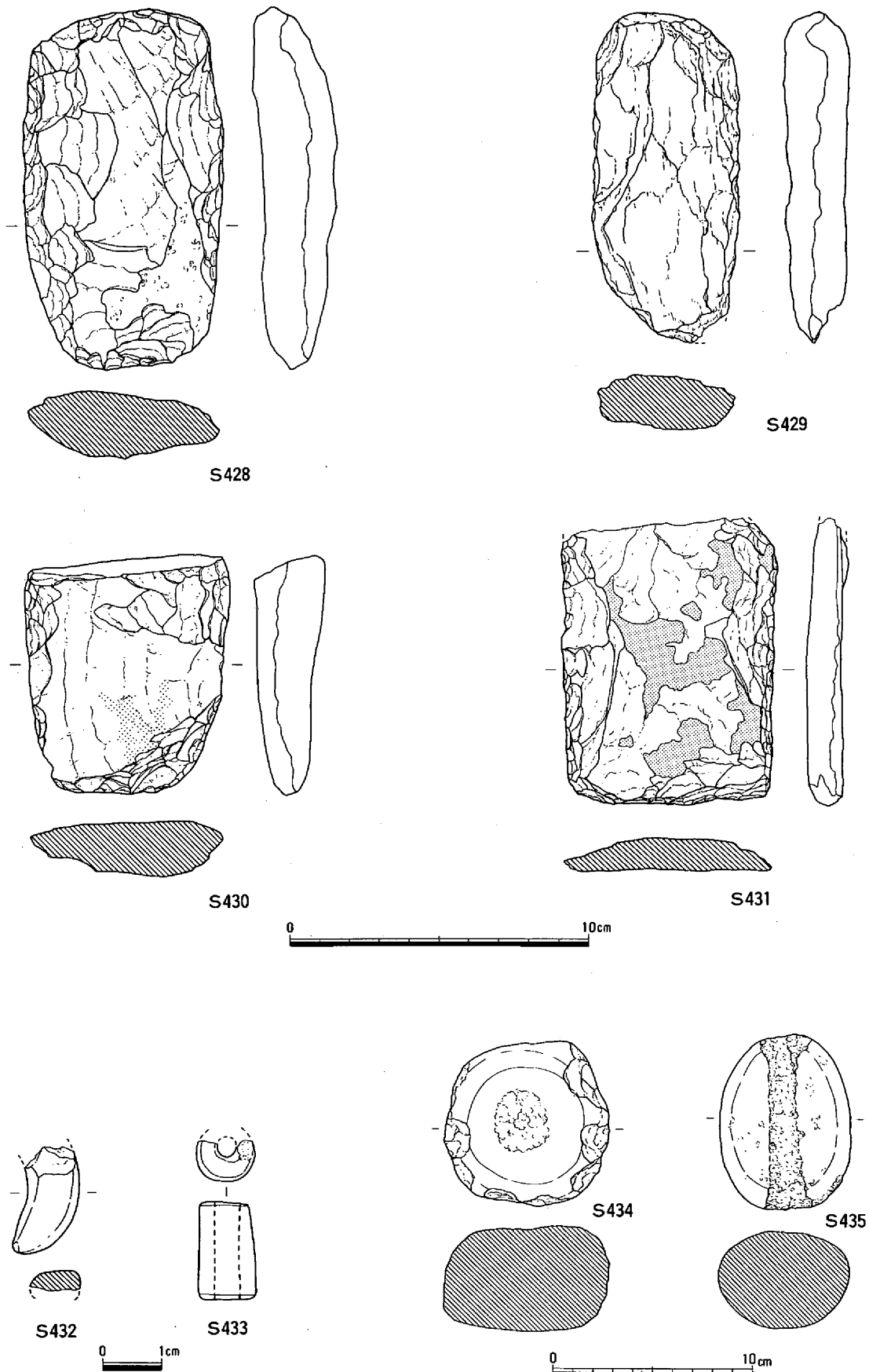
第156図 その他の出土遺物 (弥生時代5) (1/2)



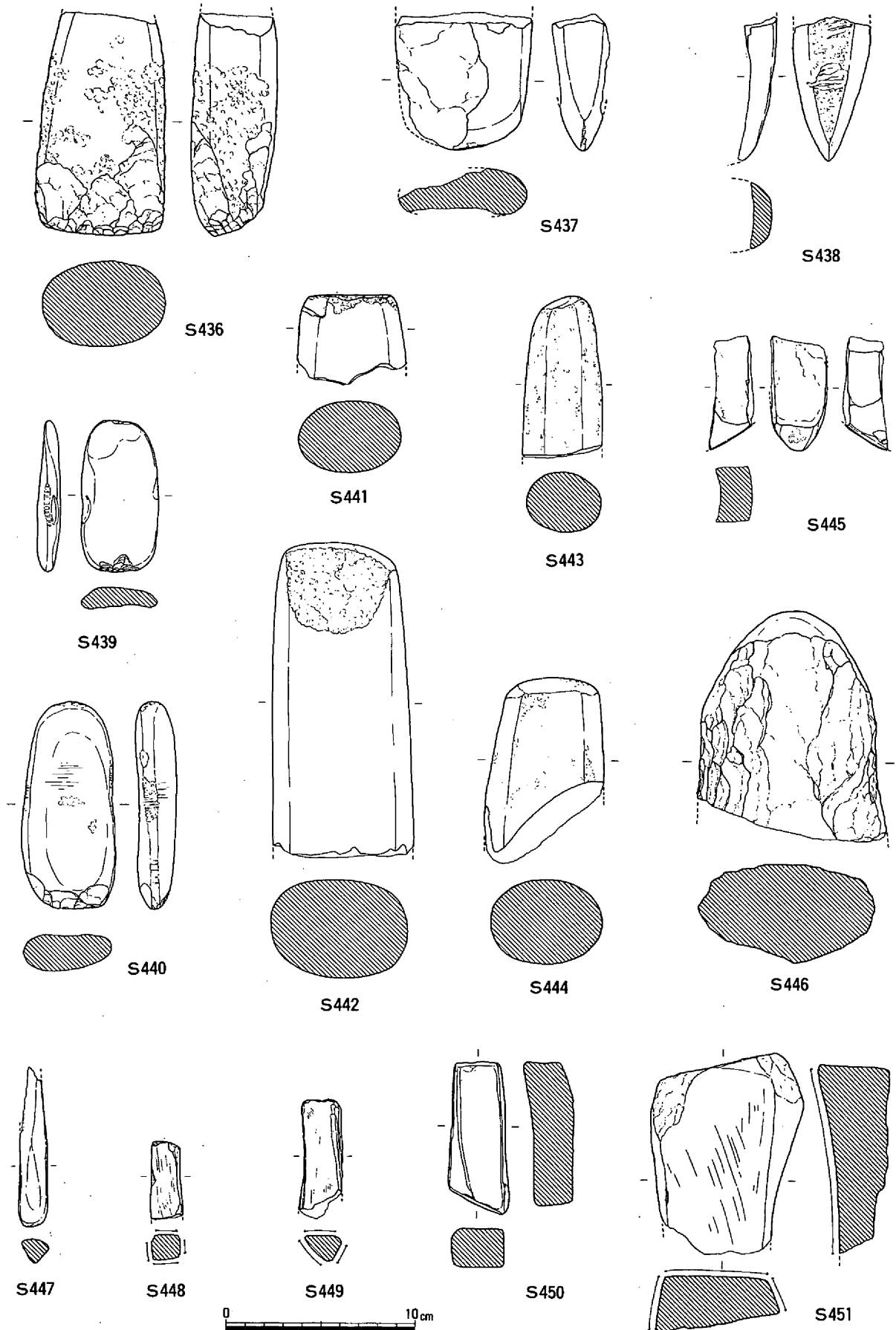
第157図 その他の出土遺物（弥生時代6）（1/2）



第158図 その他の出土遺物 (弥生時代7) (1/2)



第159図 その他の出土遺物 (弥生時代8) (1/2・1/1・1/3)



第160図 その他の出土遺物 (弥生時代9) (1/3)

第5節 古墳時代の遺構・遺物

1. 概要

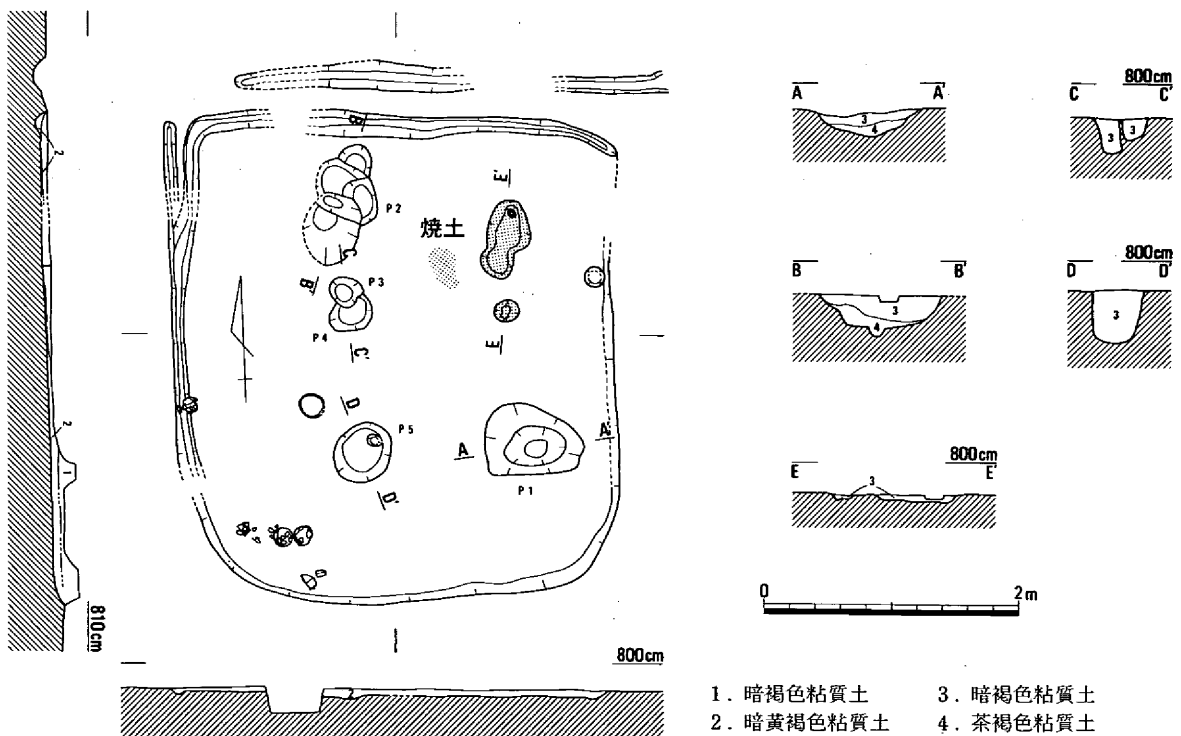
弥生時代に比べて古地形は基本的には変わらないが、遺構・遺物の数は少ない。時期的には前期前葉のものが多く、竪穴住居5軒、掘立柱建物1棟、土壇4基、溝13条と水田が検出できた。これらのうち竪穴住居はYA3区にのみ存在しており、弥生時代においては多くの遺構が存在していたYA2A区とHC1A区には土壇1基と溝5条が検出できたのみである。ただしYA2A区の溝179からは搬入品を含む多量の土器が出土しており、集落の中心は調査地の東側に存在しているのではなかろうか。後期の遺構は竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、溝2条が検出できており、竪穴住居4にはカマドが築かれている。遺物としては、溝185出土の平底鉢や木製品が注目される。(平井)

2. 遺構・遺物

(1) 竪穴住居

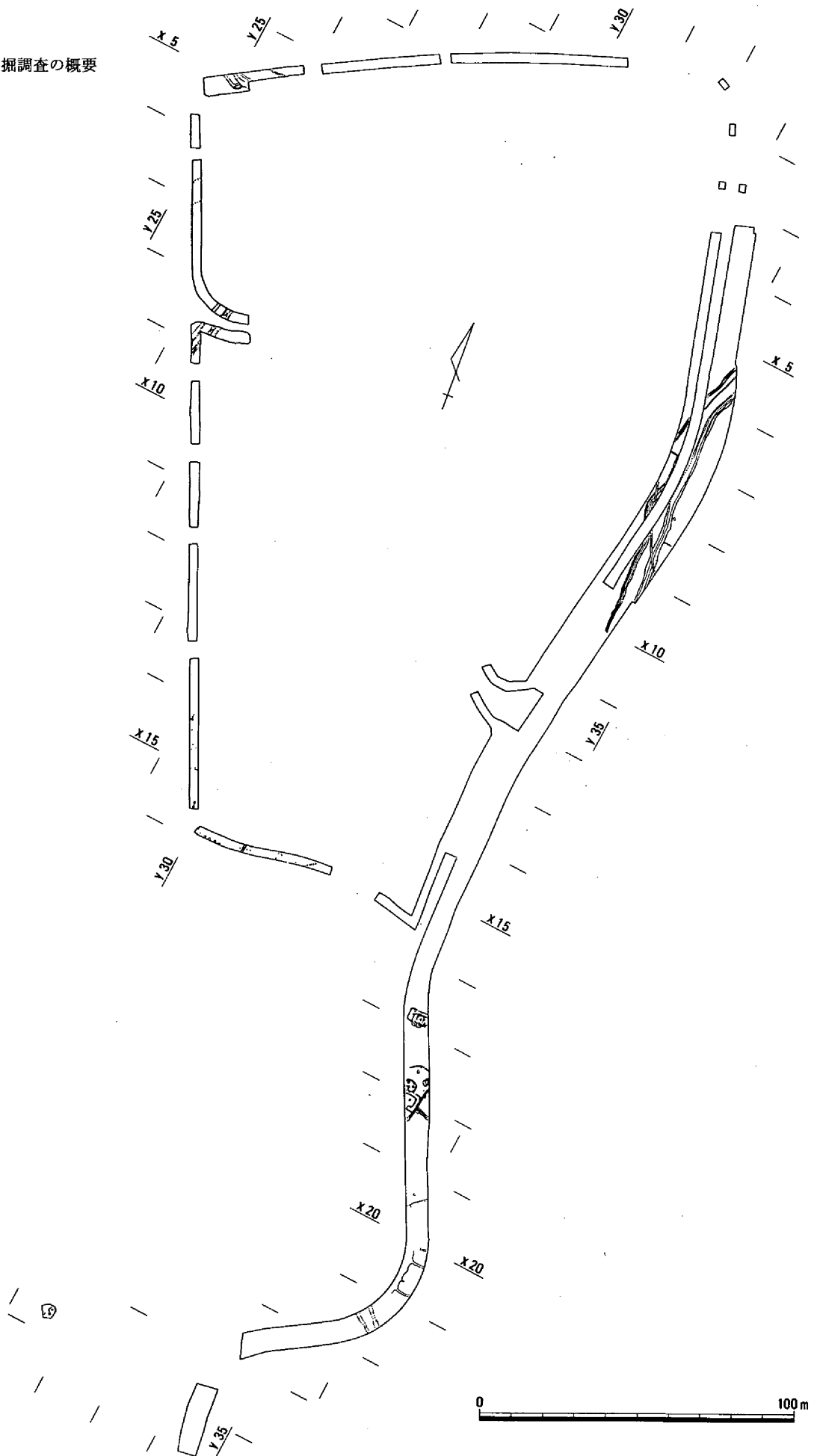
竪穴住居40(第161・166図、図版10-3)

YA3区中央の微高地部に位置する。上面をかなり削平されているうえ、後述する竪穴住居41と重複していたが、南北385cm、東西350cmの方形のプランを検出することができた。床面の一部は、竪穴住居41検出面と同一面になっている。壁体溝も北側と西側の2辺しか検出されていないが、全周するものと思われる。また、西辺はその北側で2又に分かれており、当住居の北側でも北辺に平行する溝

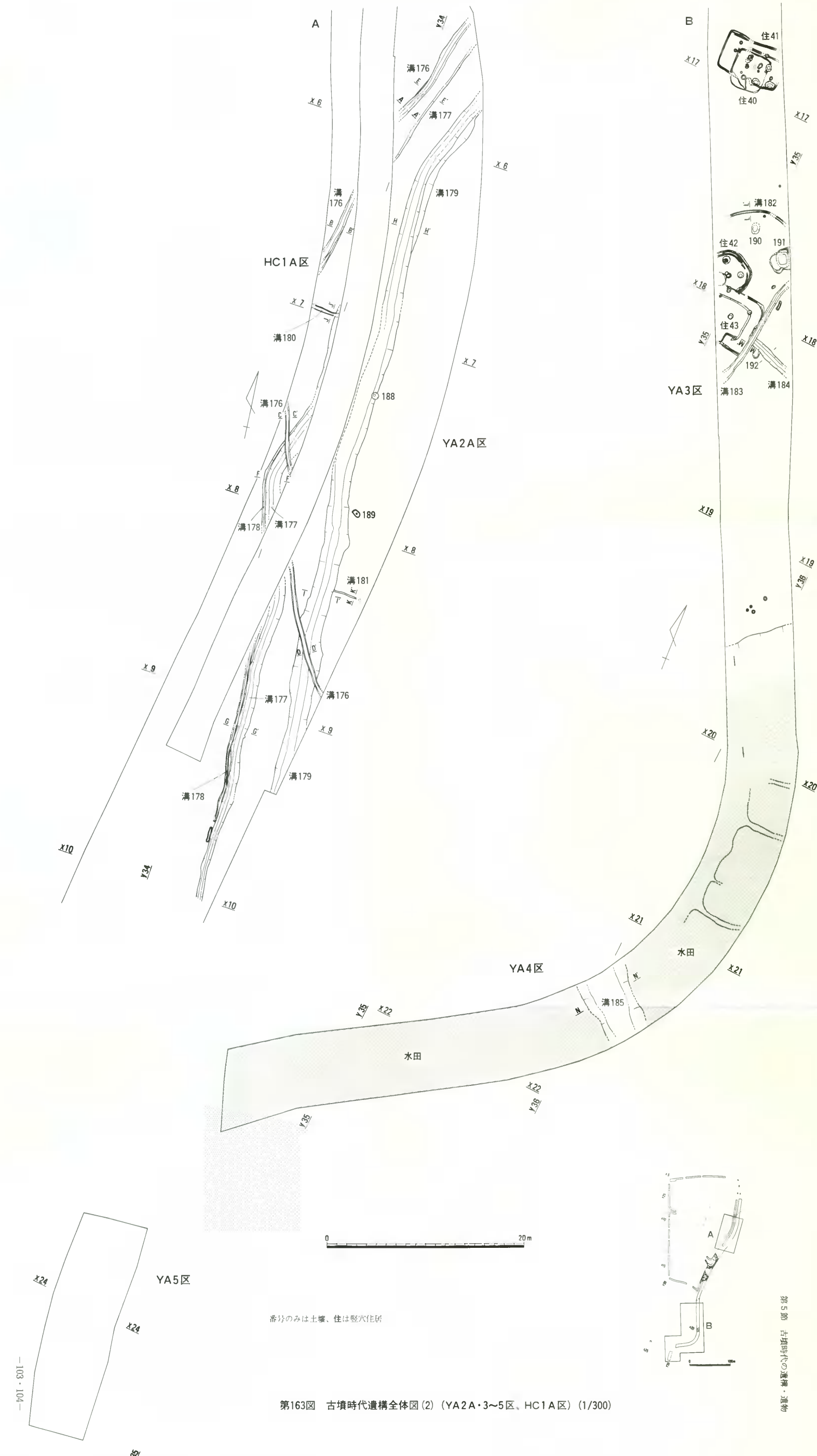


第161図 竪穴住居40 (1/60)

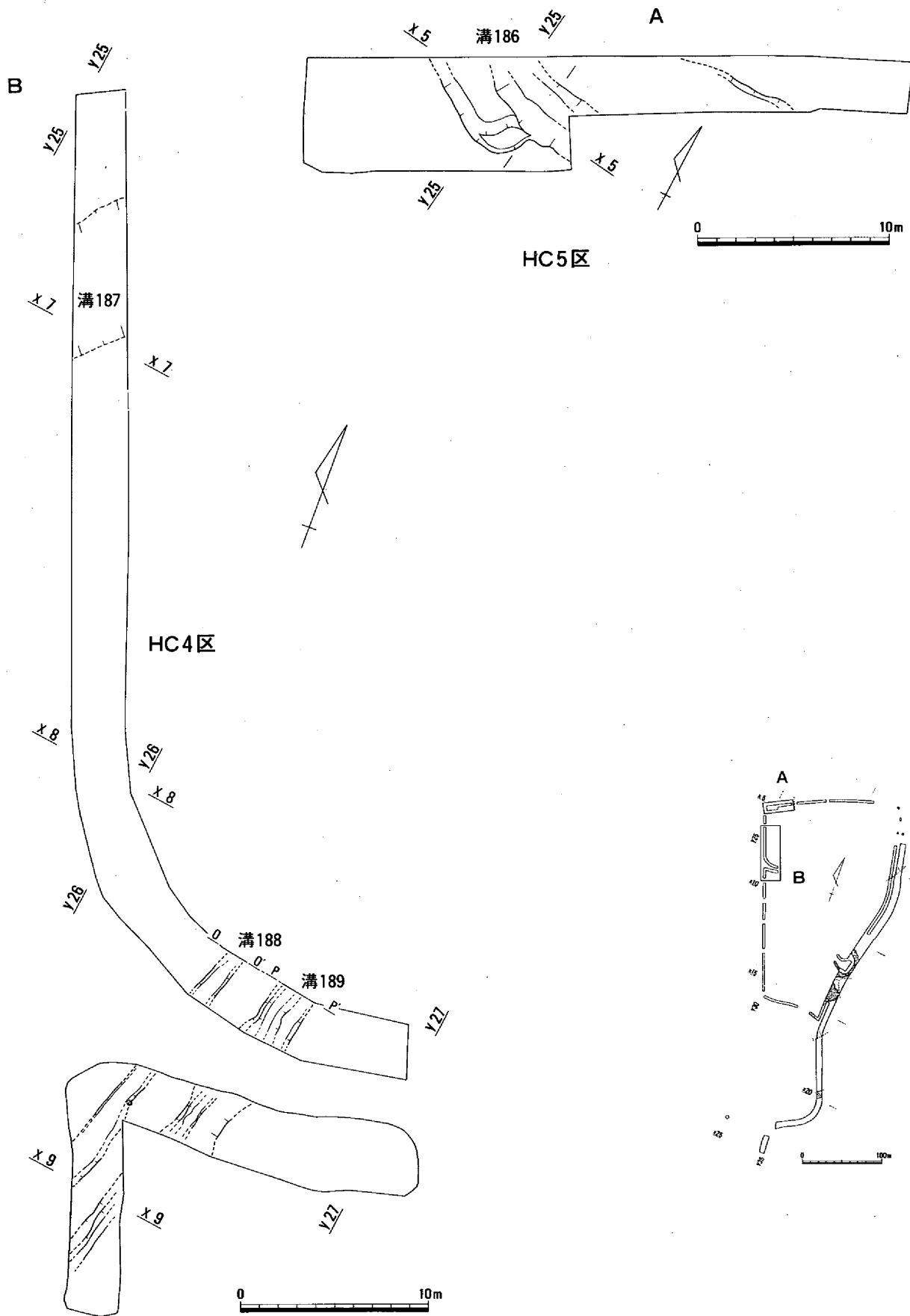
第3章 発掘調査の概要



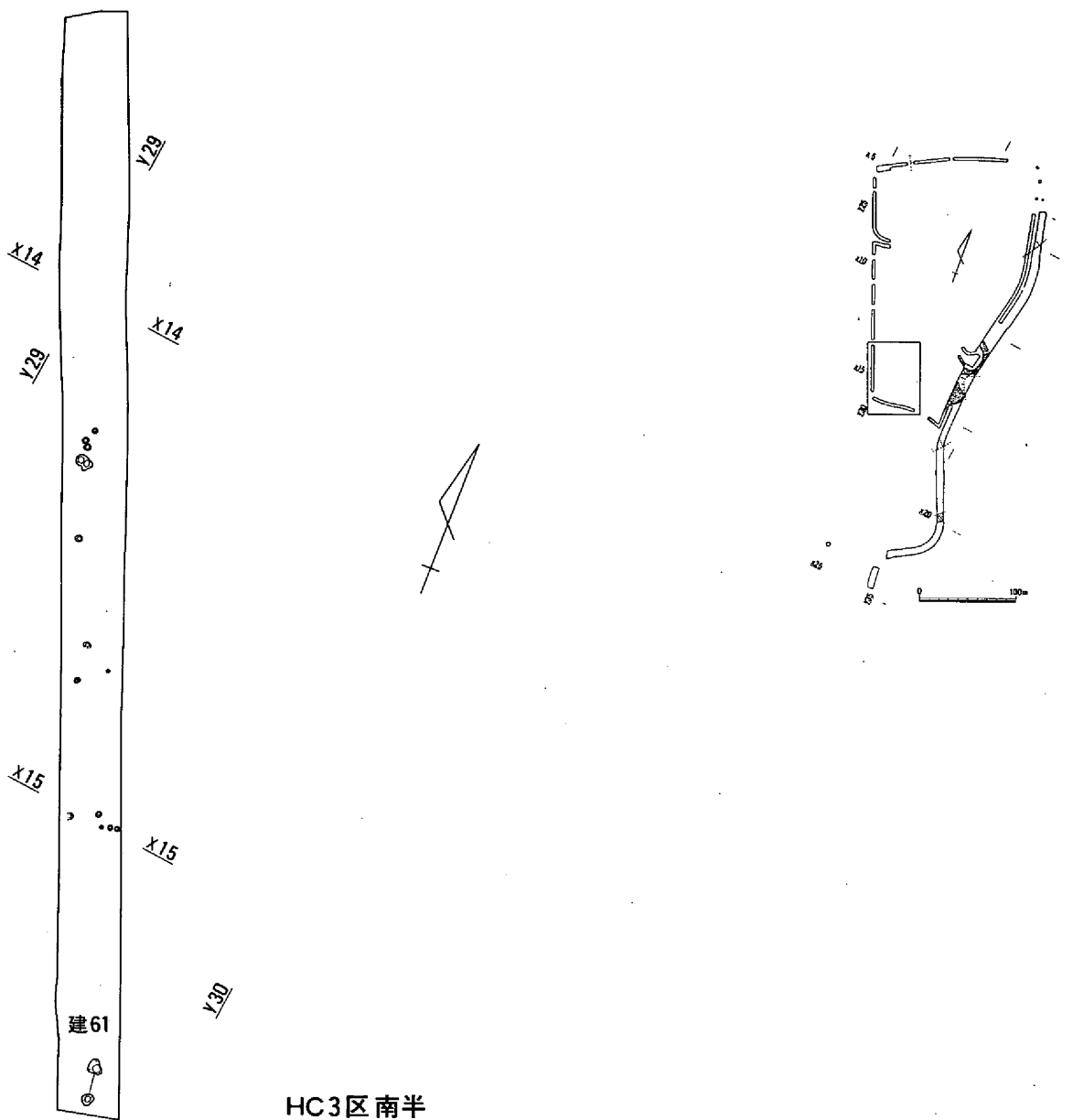
第162図 古墳時代遺構全体図(1) (1/1800)



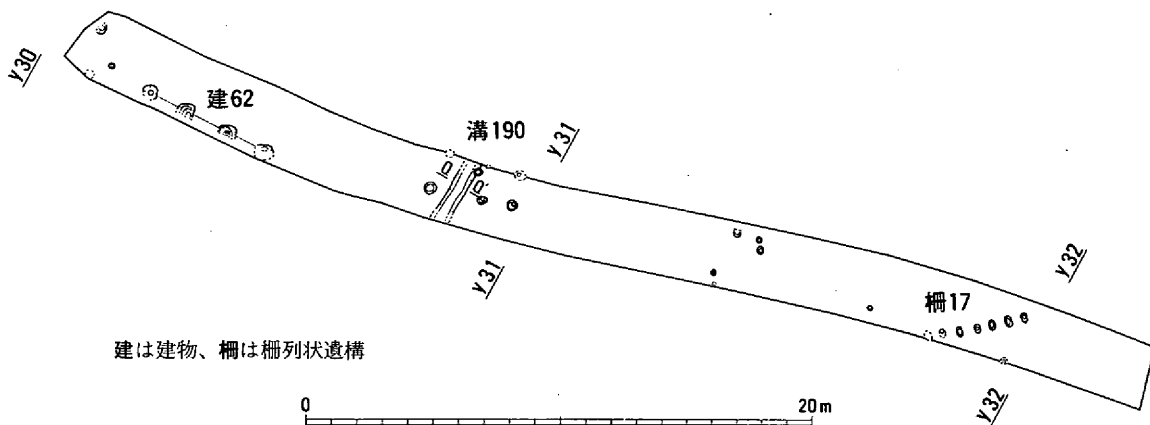
第163図 古墳時代遺構全体図(2) (YA2A・3~5区、HC1A区) (1/300)



第164図 古墳時代遺構全体図(3) (HC4・5区) (1/300)



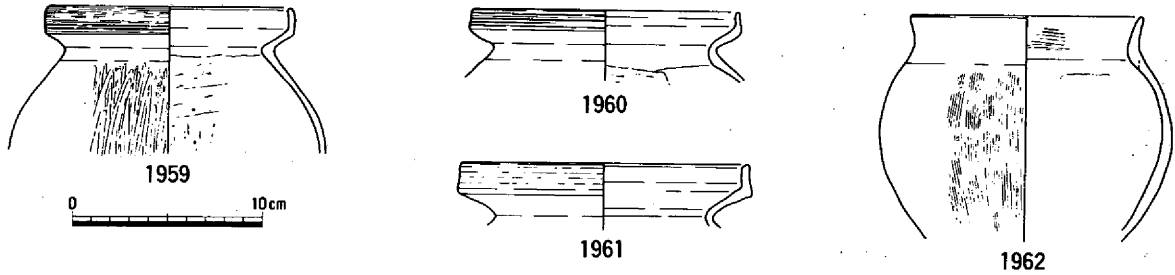
HC3区南半



建は建物、柵は柵列状遺構

第165図 古墳時代遺構全体図(4) (HC3区南半) (1/300)

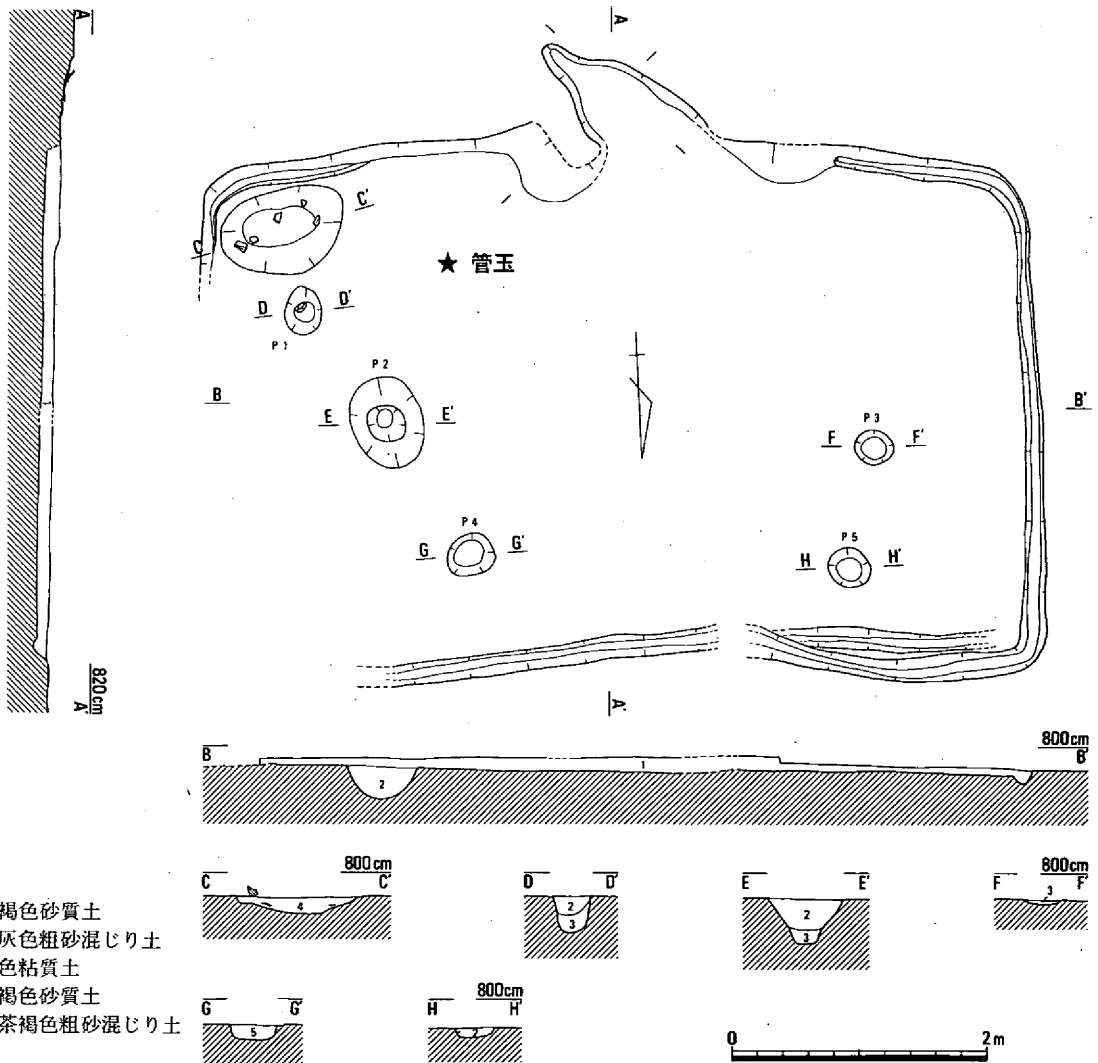
が検出されたことから、建て替えが行われた可能性がある。柱穴らしき遺構は5つ検出されたが、当住居に伴うかどうか明らかではなく、支柱穴も特定できなかった。遺物は、竪穴住居南西隅の床面および西側溝上面で土器が数個体まとまって出土している。1959・1962は南西隅から出土した土器である。時期は古墳時代前期前葉と考えられる。(久保)



第166図 竪穴住居40出土遺物 (1/4)

竪穴住居41(第167～169図、図版10—3・11—1)

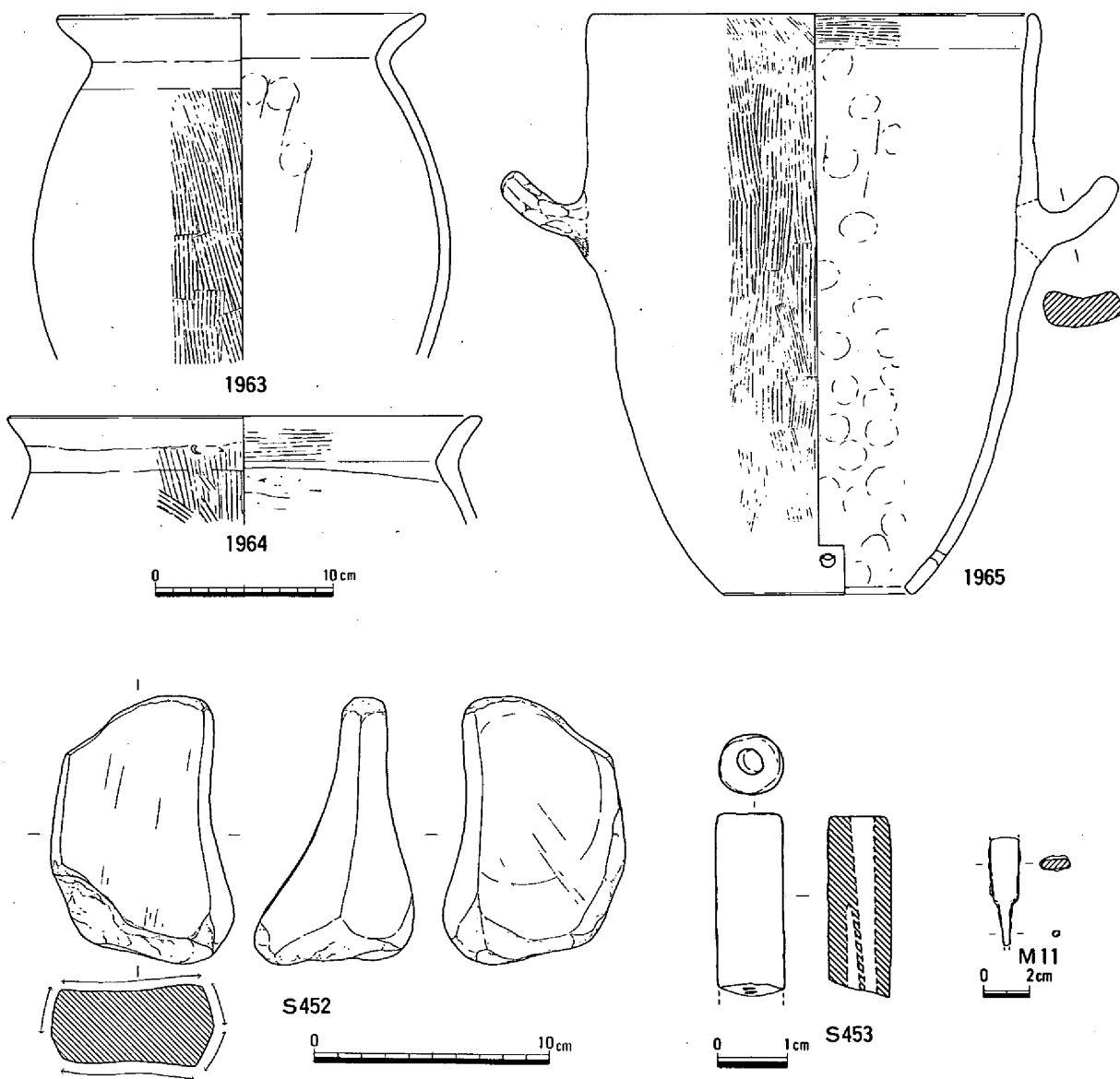
竪穴住居40と重複して検出された。北西部分が調査区外となるため全容は明らかではないが、東西



第167図 竪穴住居41 (1/60)

第3章 発掘調査の概要

650cm、南北400cmの長方形を呈する竪穴住居と考えられる。削平が激しく、検出面からの深さは10cm程度しかない。壁体溝は幅15~20cm、深さ6~10cmで、カマド部分は途切れている。柱穴は5本検出されており位置関係からP2とP3の2本柱となる可能性が考えられるが、P3は浅く底面が被熱しており、特定はできなかった。南東角の壁体溝の内側に100cm×65cmの楕円形の土壇があるが、覆土除去後に検出され、竪穴住居40の位置から外れることから当竪穴住居に付随する施設と考えられる。土壇内から土器細片や砥石S452が出土している。カマドは南辺中央に付設されているが削平による損壊が激しいため、構造は明らかでない。竪穴住居に対して斜めに造り付けられている。燃焼部は最大幅55cmで、約60cm奥に入ったところから急に狭くなっており、この先が煙道となると考えられる。燃焼部前面は被熱のため赤変していた。燃焼部の直上で1964が、前庭部と思われるところから1963と1965が出土している。管玉S453は床面で、鉄鏃M11は住居覆土から出土している。覆土内には古墳時代前期前葉の土器も混在しており、M11は竪穴住居40に伴う可能性もある。時期は古墳時代後期で、周辺の遺構の状況から6世紀代と考えられる。(久保)



第168図 竪穴住居41出土遺物 (1/4・1/3・1/1・1/2)

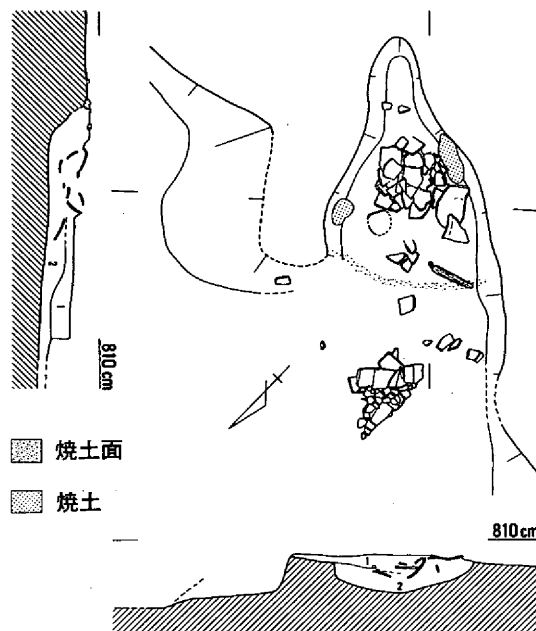
竪穴住居42(第170～172図、図版11-2・3)

竪穴住居41の南で、微高地部のほぼ中央に位置する。南半を竪穴住居43に切られているが、円形に近い隅丸方形を呈し、P1～3を含めた4本主柱と想定される。堆積状況から拡張が認められ、壁体溝も2重に巡っている。壁体溝内側の東西幅は古段階で415cm、新段階で460cm、底面の海拔高は古段階で7.7m、新段階で7.95mを測る。主柱穴は切り合いが認められず、柱穴を踏襲したまま拡張したと考えられる。中央穴内には炭や焼土が堆積していたが、被熱痕は認められなかった。第170図は新段階の床面の検出状況で、出土遺物もおおむね新段階に伴う床面や柱穴から出土したものである。P1・2・4からはそれぞれ比較的良好な状態で1967・1973・1975が出土しており、埋土の状況から、

柱材を抜き取った後に人為的に埋め置かれたものと考えられる。時期は、甕の肩部の張りや平底の痕跡がみられ高杯が短脚であるなど、古墳時代前期の中でも古く位置付けられる。(久保)

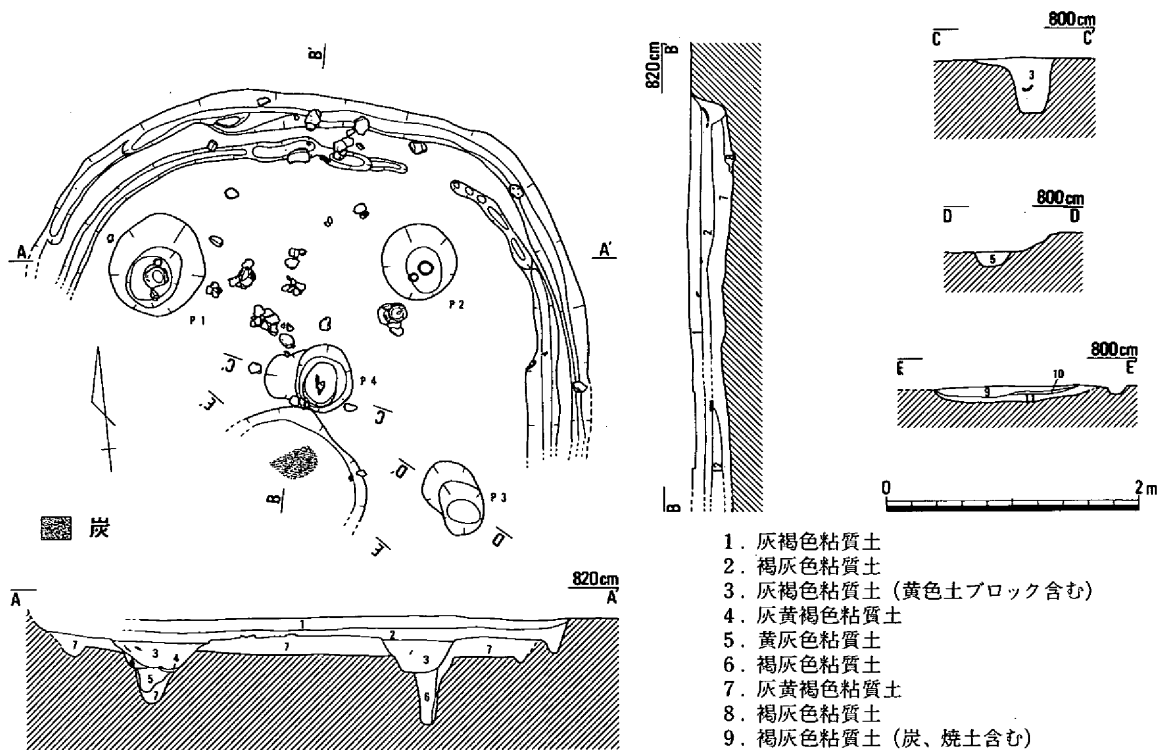
竪穴住居43(第173図、図版12-1)

竪穴住居42の南半を切って掘削されている。西南部分が調査区外となるため全容は不明であるが、



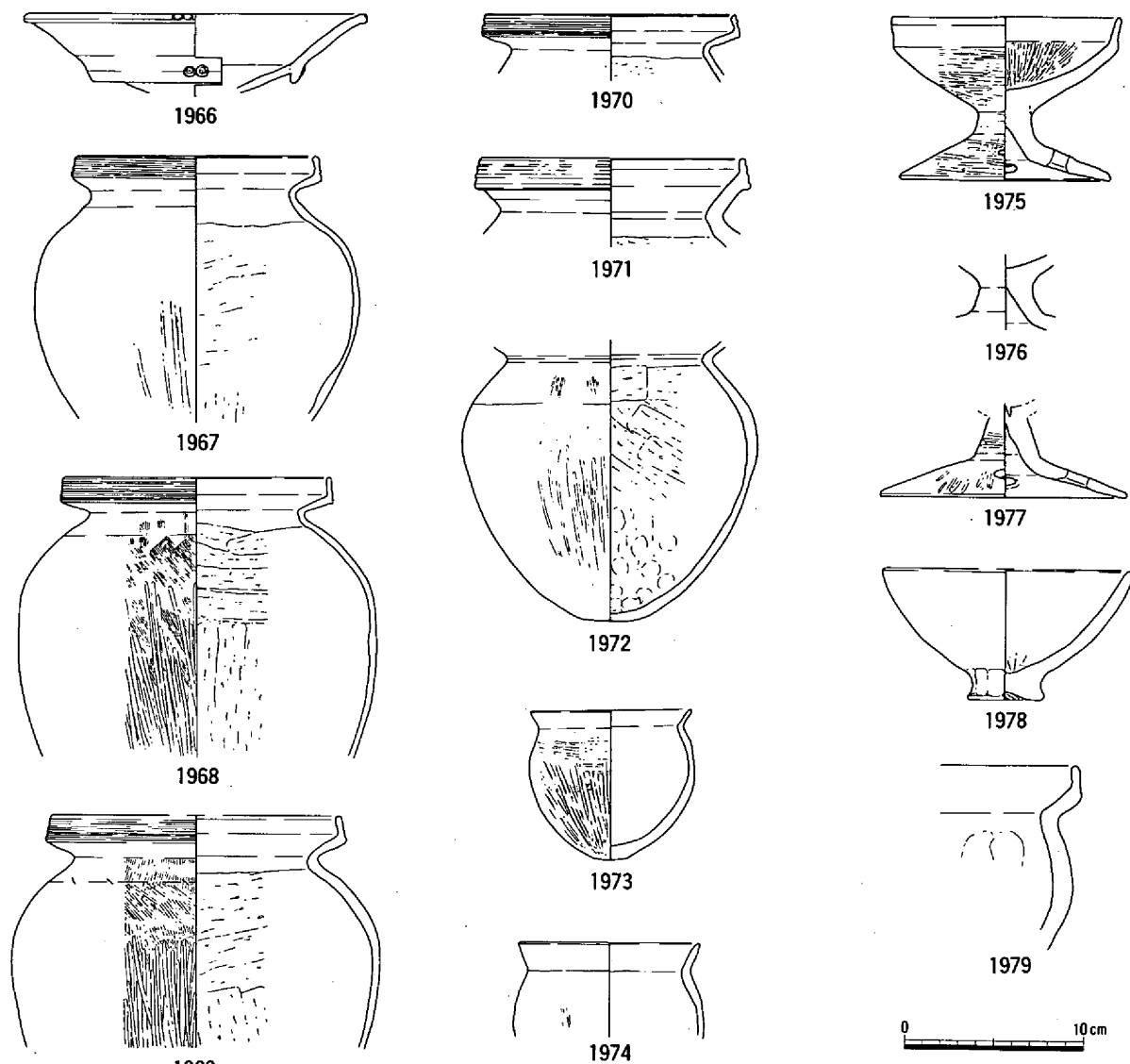
- 1. 暗褐色砂質土
- 2. 炭、焼土混在層

第169図 竪穴住居41 カマド (1/30)



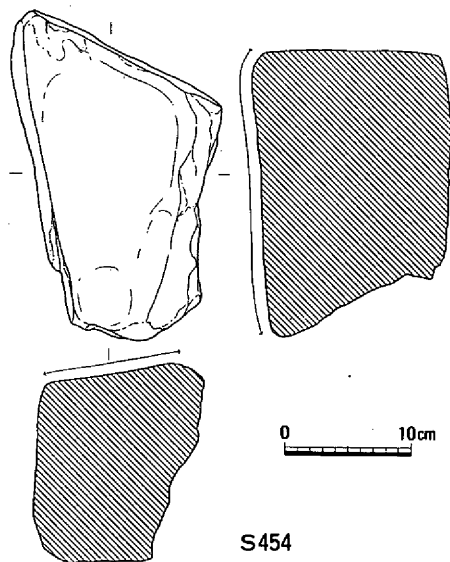
- 1. 灰褐色粘質土
- 2. 褐灰色粘質土
- 3. 灰褐色粘質土 (黄色土ブロック含む)
- 4. 灰黄褐色粘質土
- 5. 黄灰色粘質土
- 6. 褐灰色粘質土
- 7. 灰黄褐色粘質土
- 8. 褐灰色粘質土
- 9. 褐灰色粘質土 (炭、焼土含む)
- 10. 炭層
- 11. 褐灰色粘質土 (黄褐色ブロック多く含む)
- 12. 中央穴

第170図 竪穴住居42 (1/60)

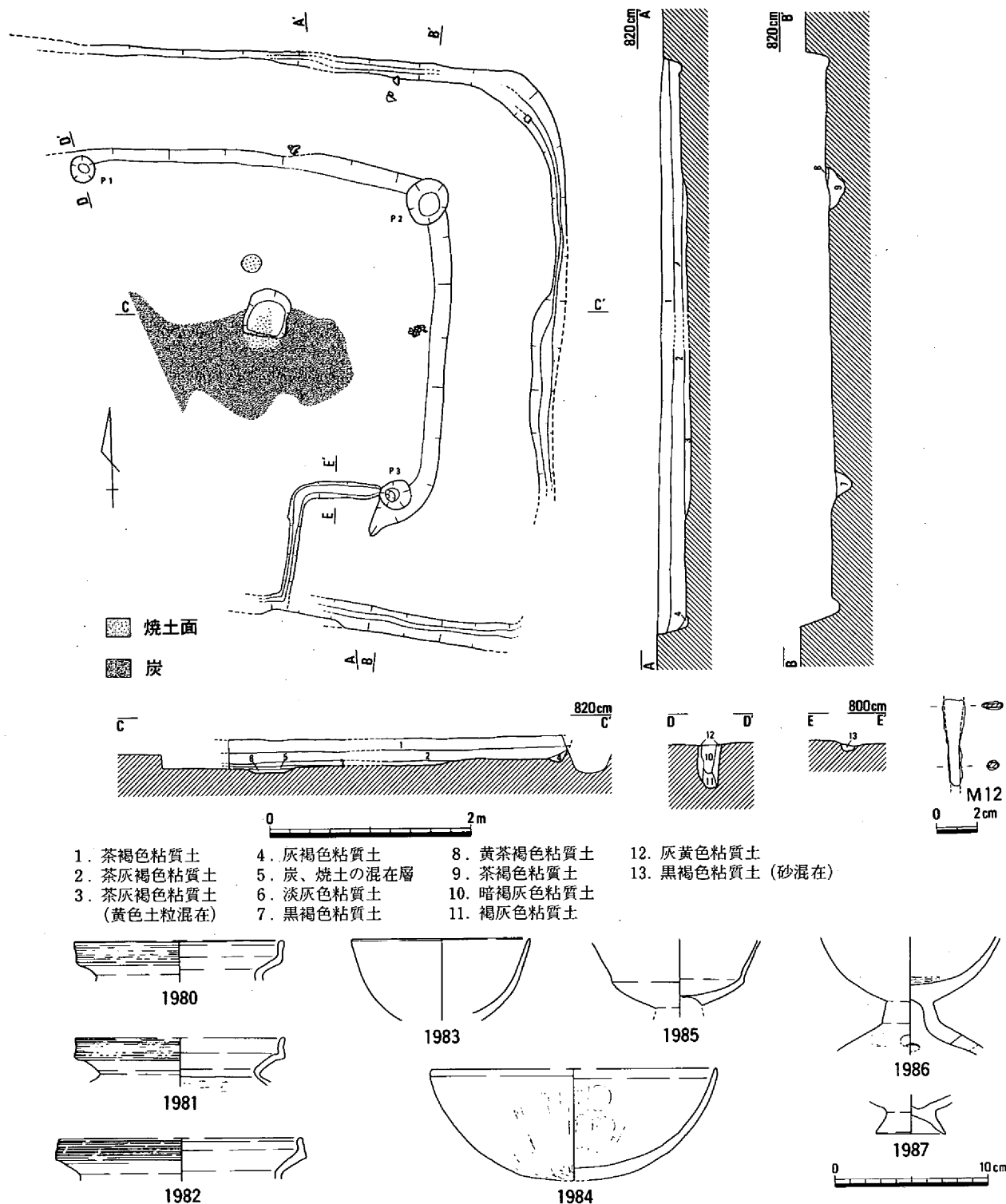


第171図 竪穴住居42出土遺物(1) (1/4)

隅丸方形を呈しており、P1～3を含む4本支柱と考えられる。ベットは南辺中央で開口しており、入り口を想定できる。ベット上面の海拔高は7.57m、床面中央部の海拔高は7.7mである。ベットの切れる部分にはP3から壁体溝にむけて逆L字状に溝が検出されているが、南辺のベットの上面のレベルはこの溝に向かって徐々に低くなっており、ベット上の排水のための溝と考えられる。中央穴は60cm×45cmの方形で、深さは5cmと浅い。中央穴内には炭や焼土が堆積し、底面には被熱痕跡が認められた。周囲に炭や焼土塊も散在しており、屋内火処として利用されたと考えられる。時期は土器から古墳時代前期前葉と考えられる。(久保)



第172図 竪穴住居42出土遺物(2) (1/6)

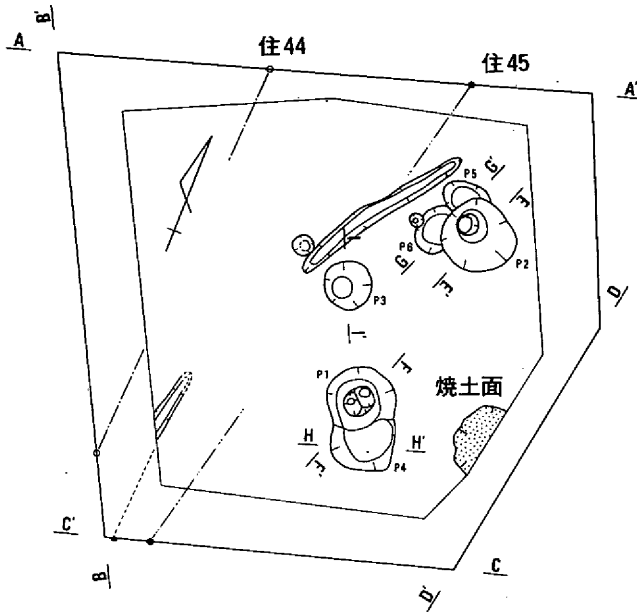


第173図 竪穴住居43 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/4)

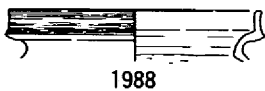
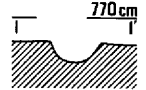
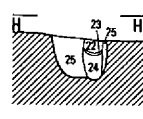
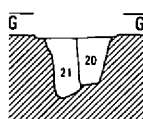
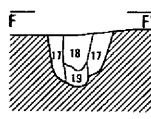
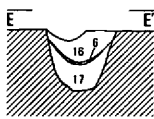
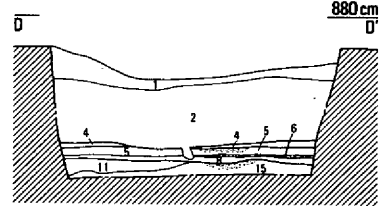
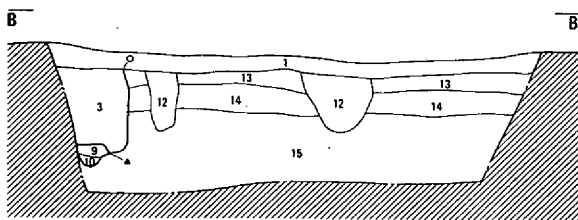
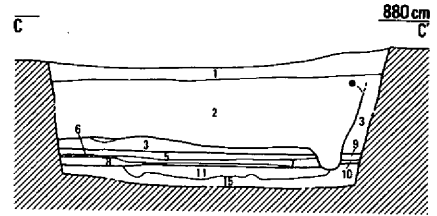
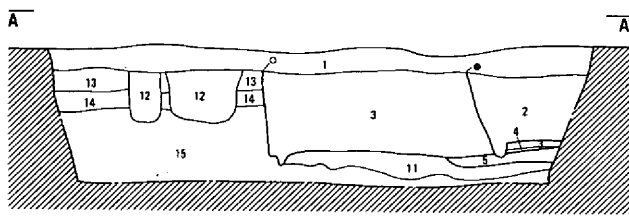
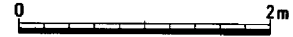
竪穴住居44・45(第174・175図、図版12-2)

本来調査対象地ではなかったが、土木工事関係者が廃材を埋めるため重機で穴を掘ったところ微高地や遺構が確認され排土に比較的多くの遺物が混入していたことから急遽作業を中断し、穴の底面の精査および側壁断面の観察、排土からの遺物の抽出を行った。竪穴住居44は3～10層で、検出された遺構はこの竪穴住居44に伴うと考えられる。また断面では被熱面が2面確認され、各被熱面の間に炭層や貼床らしき層が堆積していることから2面の床面を想定できる。中央部に南北に走る小溝は最古

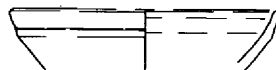
第3章 発掘調査の概要



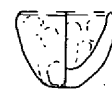
1. 灰色粘質微砂 (現耕土)
2. 暗褐色粘質土 (住居A)
3. 茶褐色粘質土 (住居B)
4. 暗褐色粘質土 (住居B')
5. 茶灰褐色粘質土
6. 炭層
7. 灰色粘土と黄色粘土粒の混在土 (貼床か)
8. 褐色粘質土 (住居C)
9. 黄茶褐色粘質土 (住居C壁体溝)
10. 暗茶褐色粘質土 (住居C壁体溝)
11. 褐色粘質土 (整地層?)
12. 暗褐色粘質土 (弥生時代の遺構)
13. 暗灰色粘質土
14. 褐黄色粘質土 (ベース)
15. 明茶黄色粘質微砂 (ベース)
16. 茶灰褐色粘質土
17. 灰褐色粘質土
18. 暗褐色粘質土
19. 暗灰色粘質土
20. 茶褐色粘質土
21. 暗茶褐色粘質土
22. 暗茶褐色粘質土
23. 灰色粘土
24. 褐灰色粘質土
25. 茶灰褐色粘質土



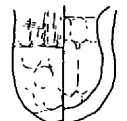
1988



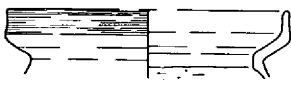
1991



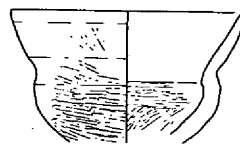
1993



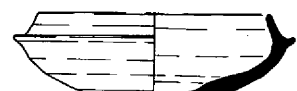
1994



1989



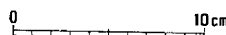
1992



1995



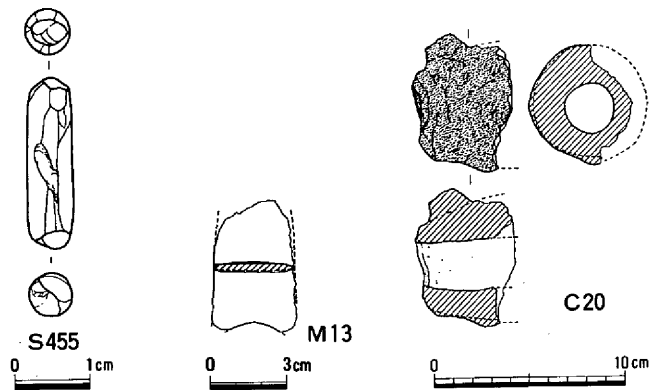
1990



第174図 竪穴住居44・45 (1/60)・出土遺物(1) (1/4)

段階の壁体溝に対応するものであろう。

8層下面の海拔高は約7.6mである。堅穴住居45は3層にあたるが、平面的な遺構は検出できなかった。床面の海拔高は約7.8mである。出土土器は古墳時代前期前葉と古墳時代後期の2相に分かれ、それぞれの堅穴住居に伴うものであろう。排土から玉、鉄器、フイゴ羽口、鉄滓なども出土したがどちらの堅穴住居に伴うか特定はできなかった。(久保)

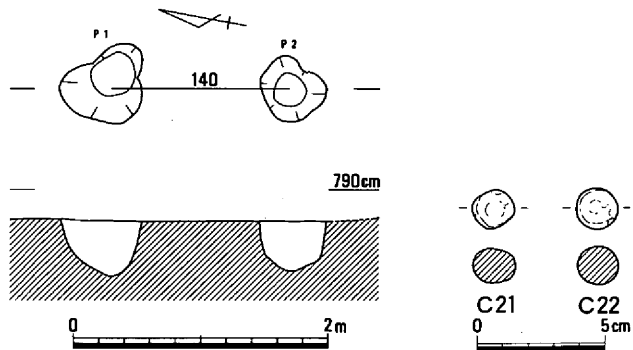


第175図 堅穴住居44・45出土遺物(2) (1/1・1/3・1/4)

(2) 建物

建物61(第176図)

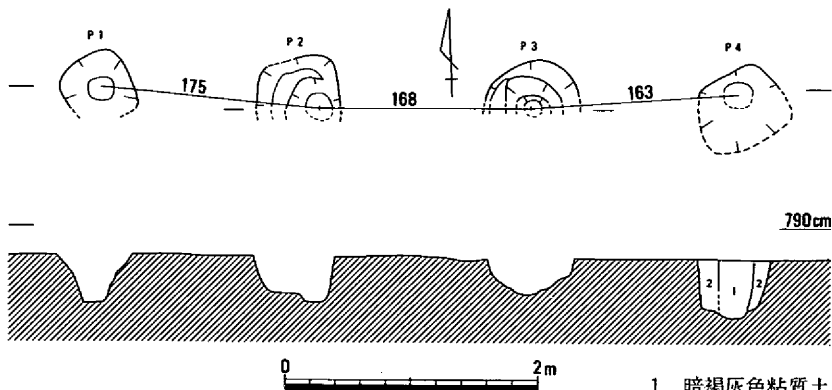
HC 3区で検出された南北方向を示す2本の柱穴列である。柱穴の掘り方は不整な円形を呈し、上面で掘り直しの痕跡も認められる。検出範囲の状況から推定すると、建物の西側部分と想定される。柱穴間の距離は約140cmを測る。出土遺物として北側のP1から土製の丸玉C21・C22が出土している。时期的には古墳時代後期と推定される可能性が高い。(岡田)



第176図 建物61 (1/60)・出土遺物 (1/3)

建物62(第177図)

建物61の南東約10mで検出された総柱建物の北側部分と想定される柱穴列である。4本の柱穴は、円形のP3を除いていずれも隅丸の方形を示しているが、大きさや辺の方向はまちまちである。一直線に並ぶ状態ではないが、いずれも深さが近似し柱の痕跡が良く残る共通性がある。P4ではその痕跡がきわめて良好に観察された。出土遺物はごく少量であったが、古墳時代前期前葉に比定される可能性が高い。(岡田)



第177図 建物62 (1/60)

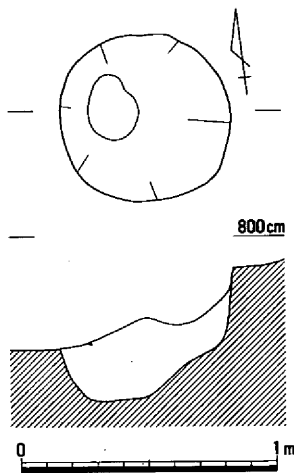
(3) 土 壙

土壙188(第178図)

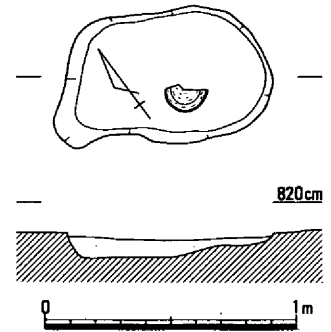
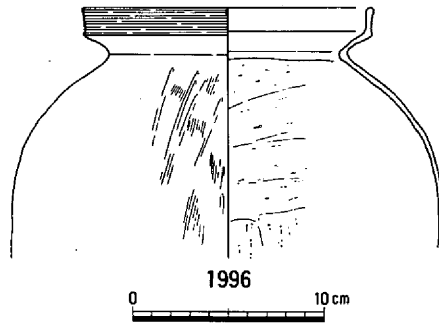
YA2A区の中央部、溝179の東肩部に位置する。溝179を掘り上げた後に検出できたが、前後関係は明確ではない。平面形は直径約66cmの円形で、深さは約52cm残存していた。埋土は炭を含む灰褐色砂質土が一層のみであった。遺物は少量の土器片が出土している。時期は出土土器から古墳時代前期前葉であると考えられる。(平井)

土壙189(第179図)

YA2A区の中央部の溝179の東隣りに位置する。検出できた平面形は図示したように不整形で、断面形も一定していない。底面にも凹凸があり、人為的な土壙ではない可能性も考えられる。深さは最大で約10cm残存していた。埋土は暗褐色砂質土である。埋土中からは6世紀後半頃の須恵器が出土している。(平井)



第178図 土壙188 (1/30)・出土遺物 (1/4)



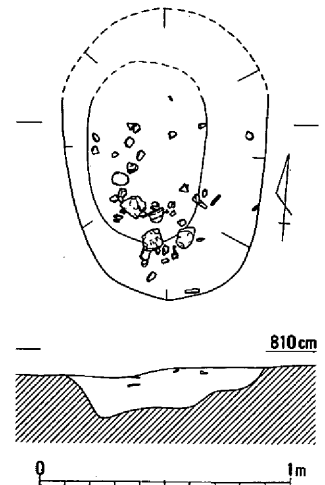
第179図 土壙189 (1/30)

土壙190(第180図)

YA3区の中央の微高地上で、竪穴住居42の北に位置する。80×115cmの楕円形を呈する。底面は凸凹で一定していないが、最も深い部分で深さ20cm、底面の海拔高7.81mを測る。埋土は単層で、黒褐色砂質土で埋没していた。上面近くから、礫や炭化物に混じって土器が若干出土している。土器は細片で図化し得なかったが古墳時代前期前葉と考えられる。(久保)

土壙191(第181図)

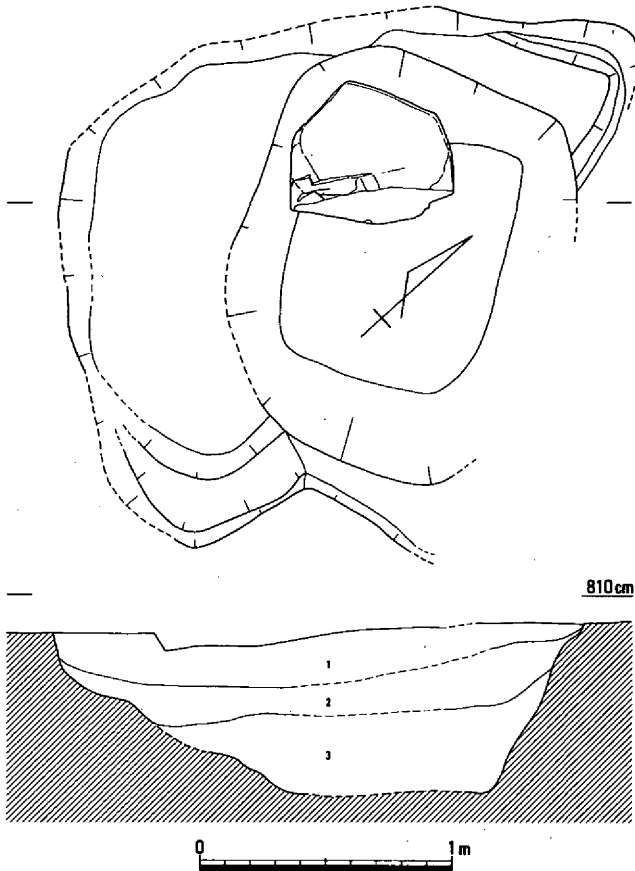
土壙190の東に位置する。東側は調査区外になり全容は不明である。上面は不整形であるが、西側が段状に下がっており、下段は約160cm×120cmの長方形を呈している。深さ65cm、底面の海拔高は約7.3mを測る。北西部の段の肩口にかかるように約40cm×60cmの角礫が落ち込んでいたが、人為的に置かれたものか東側の丘陵部から崩落してきたものか特定できなかった。甕口縁部片が出土しており、古墳時代前期前葉と考えられる。(久保)



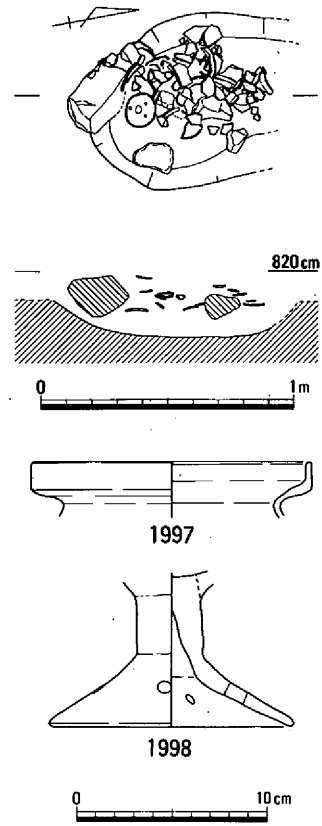
第180図 土壙190 (1/30)

土壙192(第182図、図版12-3)

土壙191の南に位置する。深さ10cm程度と浅く、掘り方を明確に検出できなかった。底面の海拔高は7.94mを測る。比較的多くの土



1. 暗茶褐色粘質土 (砂多) 2. 茶褐色粘質土 3. 暗黄灰褐色粘質土 (砂少、粘強)
 第181図 土壌191 (1/30)



第182図 土壌192 (1/30)
 ・出土遺物 (1/4)

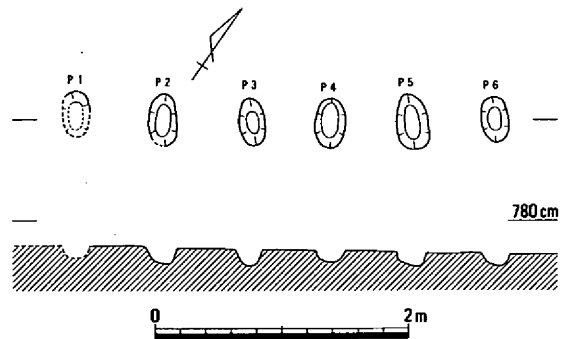
器が出土しているがいずれも細片で、2点しか図化し得なかった。時期は古墳時代前期前葉であるが、竪穴住居42・43と比べて高杯脚部が若干長さを増しており、後出すると考えられる。(久保)

(4) 柵列状遺構

柵列状遺構17

建物62の東方約30mで検出された長円形を呈する、連続する柱穴状の掘り込み遺構である。検出範囲が限られているため全容は明らかではないが柵列のような機能をもった遺構である可能性がもっとも高いと思われる。大小の差はあるが基本的な平面形はきわめて近似している。

掘り方の間隔は40~50cmで南西から北東方向に続く。時期は古墳時代に比定される。(岡田)

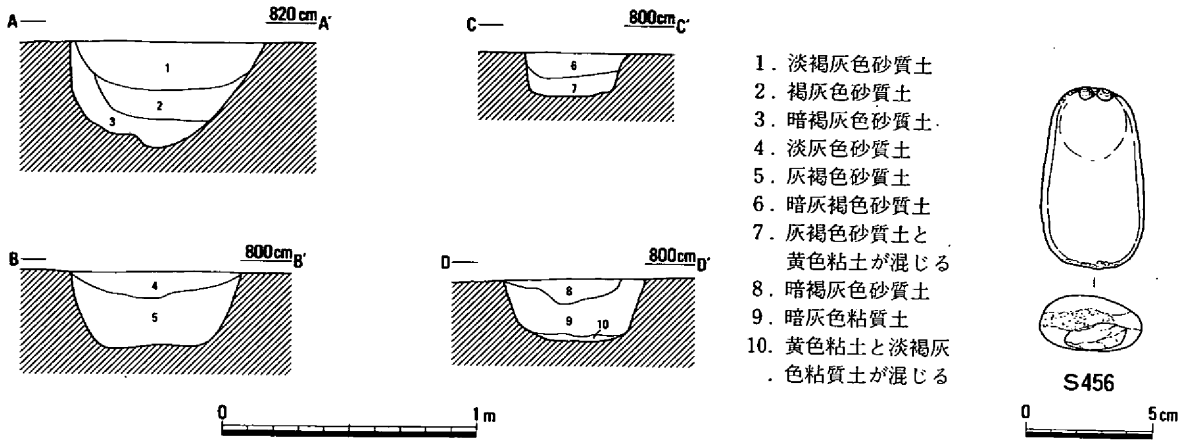


第183図 柵列状遺構17 (1/60)

(5) 溝

溝176(第163・184図、図版13-1)

YA2A区とHC1A区で検出した溝で、幅や深さ、断面の形状、埋土などから同一の溝と判断している。幅は40~80cm、深さは約25~40cmであった。遺物は少量の弥生土器、古墳時代前期の土師器、

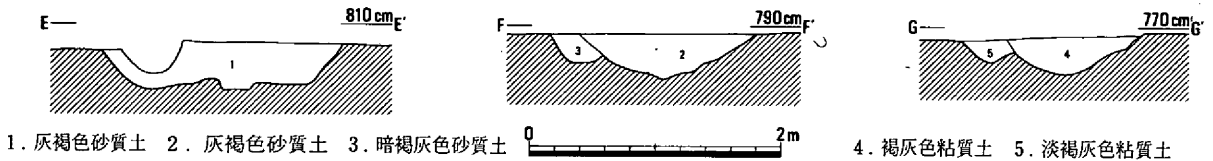


第184図 溝176断面図 (1/30)・出土遺物 (1/3)

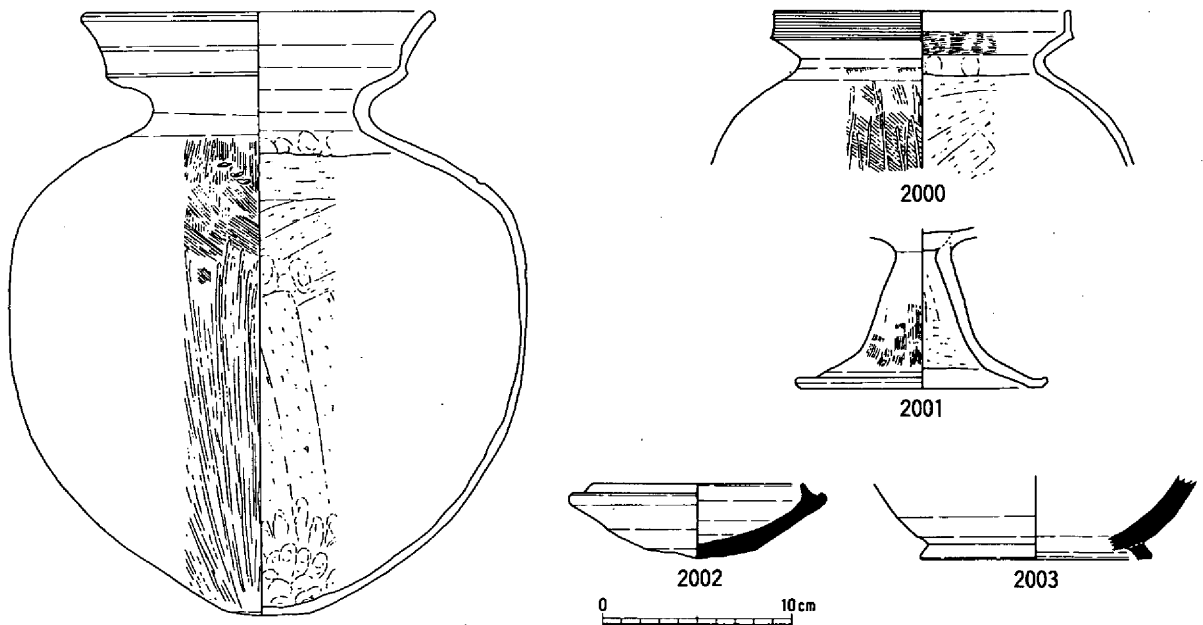
5世紀後半～6世紀前半の須恵器や敲石S456が出土しているが、後述する溝177・178・179を切っていることや包含層中からは6世紀後半～7世紀前半の須恵器が多く出土していることから、7世紀前半前後の時期と考えている。
(平井)

溝177(第163・185図、図版13-1)

YA2A区とHC1A区に位置し、規模や埋土から同一の溝と判断した。幅は約0.6～1.9mで、深さは約25～40cm残存していた。南半部では溝178を切っている。出土した土器の時期は古墳時代前期前葉の土師器が圧倒的に多く、7世紀前葉頃の須恵器が数片と古代の須恵器2003が1片含まれていた。このうち古代の須恵器はYA2A区の南半部から出土しており、上層に存在している古代の遺構や包含層からの混入品であると考えている。7世紀前半の須恵器についても上層にこの時期の須恵器を含む包含層が存在していたことから混入品の可能性も考えられるが明確ではない。したがってこの



1. 灰褐色砂質土 2. 灰褐色砂質土 3. 暗褐色灰色砂質土 4. 褐色粘質土 5. 淡褐色粘質土



第185図 溝177・178断面図 (1/60)・溝177出土遺物 (1/4)

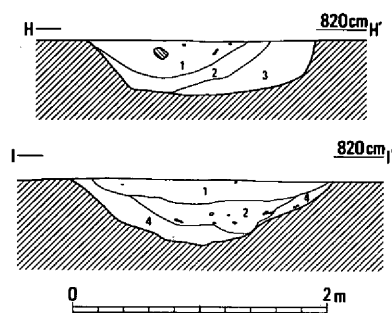
溝の時期については古墳時代前期前葉から7世紀前葉の幅で捉えておきたい。(平井)

溝178(第163・185図)

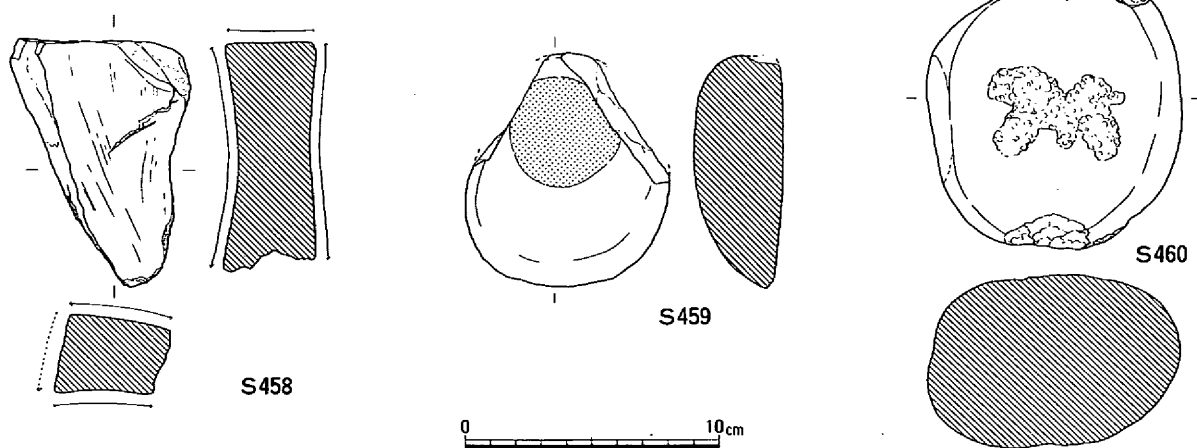
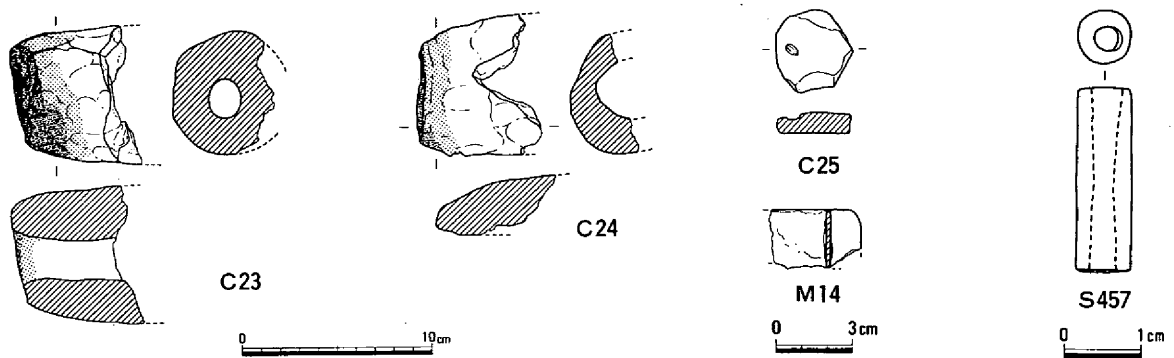
HC1A区とYA2A区に位置し、規模や埋土から同一の溝と判断した。東側の肩は前述した溝177によって切られており、幅は40cm前後、深さは20~30cm前後であった。遺物は少量の土器片やサヌカイト片が出土した。時期については出土遺物からは明らかでなく、ほぼ溝177に沿って掘削されていることから、溝177と同じく古墳時代前期前葉から7世紀前葉の幅で考えている。(平井)

溝179(第163・186~193図、図版13-2・3)

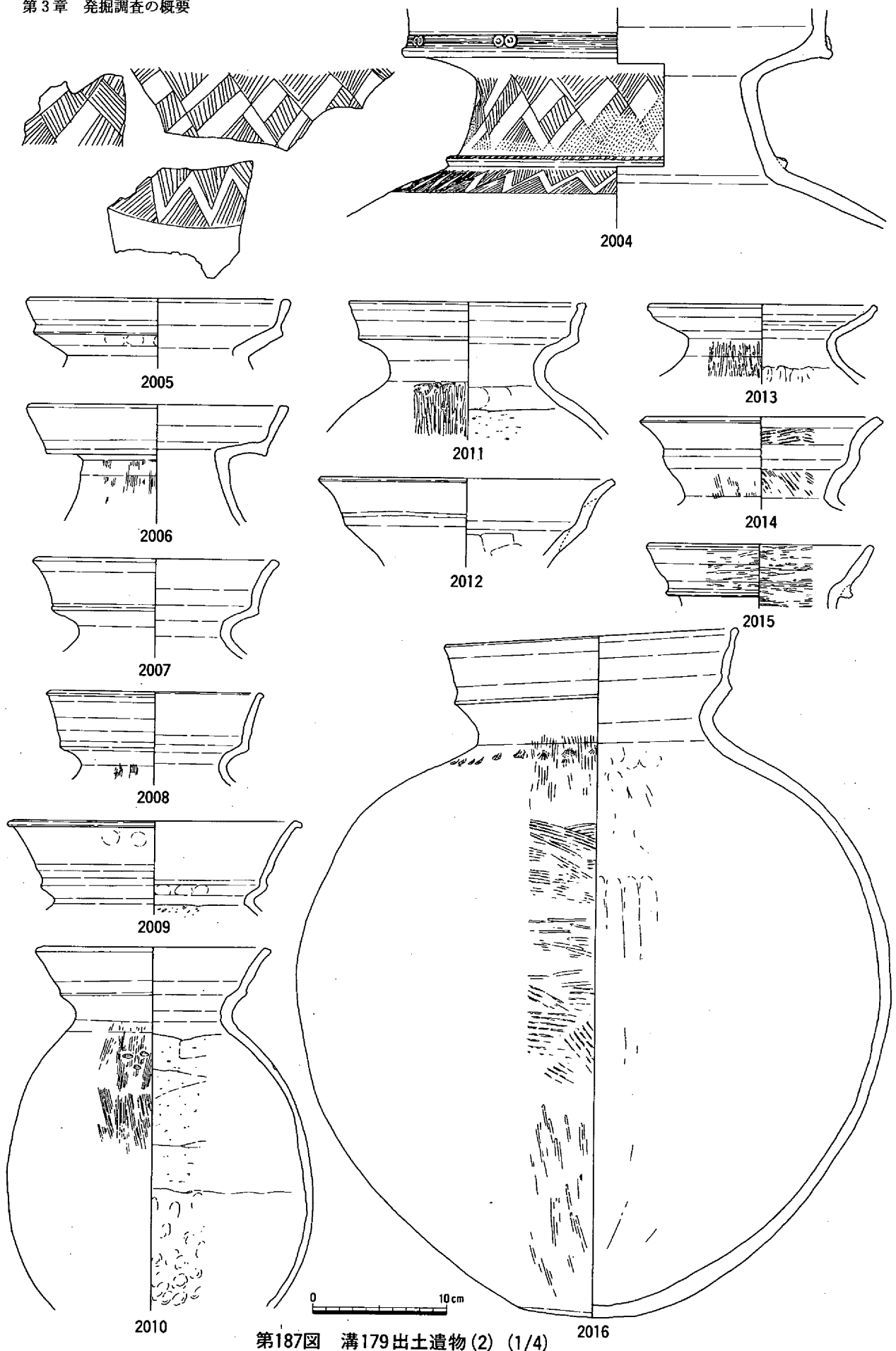
YA2A区において検出した溝で、幅は約1.4~2.5m、深さは40~55cm前後である。底面の海拔高は7.5~7.7mで北側が高い傾向にあった。遺物はコンテナ約90箱出土した。ほとんどが土器で、土製品、石器、石製品、鉄器などが少量含まれており、多くは上層(第186図の1・2層に相当する)からの出土である。土製品のうちC23・24は羽口である。図の左端の先端部には鉄滓が少し付着していたり、胎土中の鉱物がアメ状に溶けている。ただしこの2点の羽口については、出土地点がYA2A区の南半部で、この地点では溝を検出するまでに古墳時代後半の遺物が多く出土していたことや第207図に示したような羽口も出土していることから、出土したのは溝内ではあるが、後世の時期(6世紀後半~7世紀前半?)の混入品である可能性を考えている。C25は円板状土製品で、表面に粗痕が確認



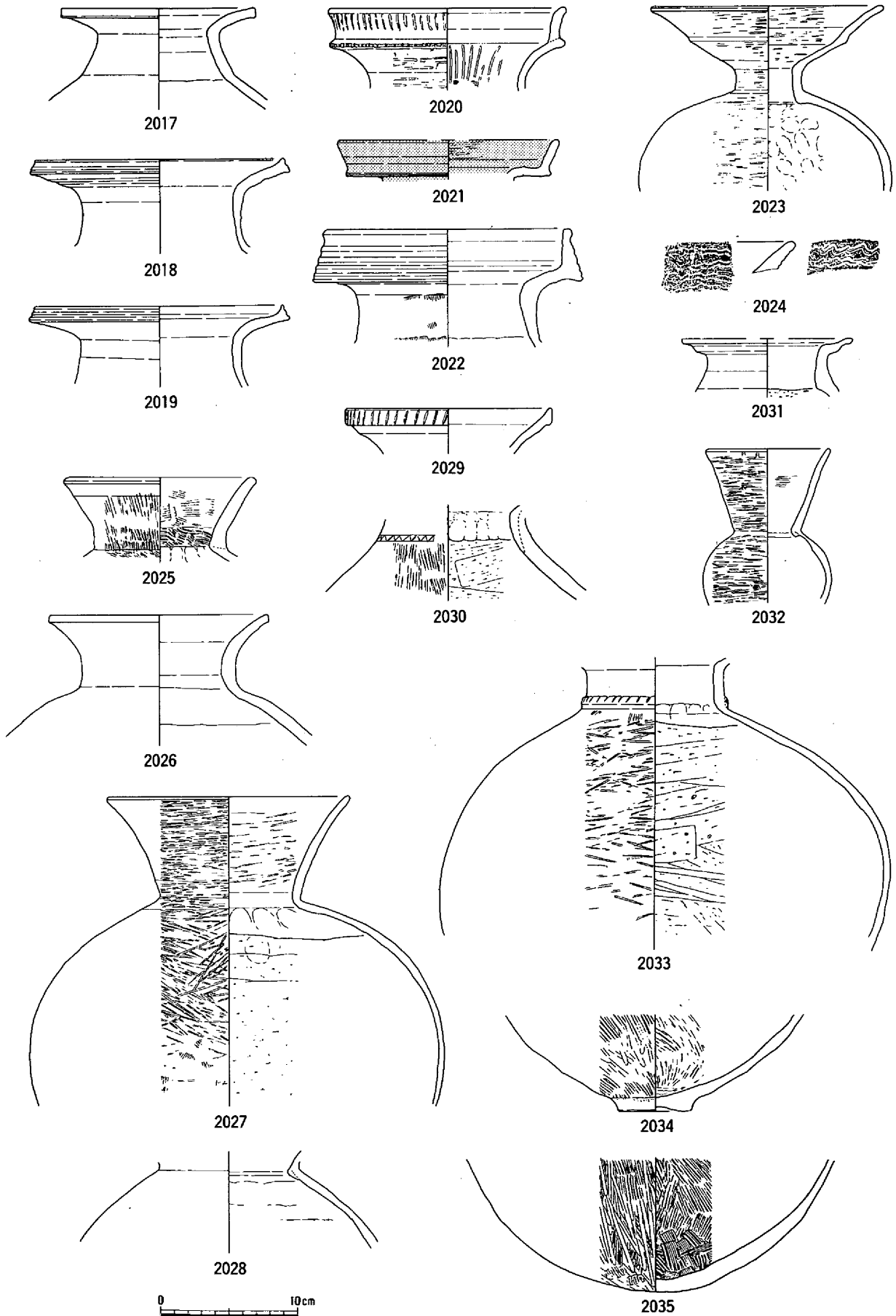
- 1. 黒褐色粘質土(土器多い)
- 2. 暗灰褐色粘質土(土器多い)
- 3. 褐灰色砂質土
- 4. 暗褐色粘質土



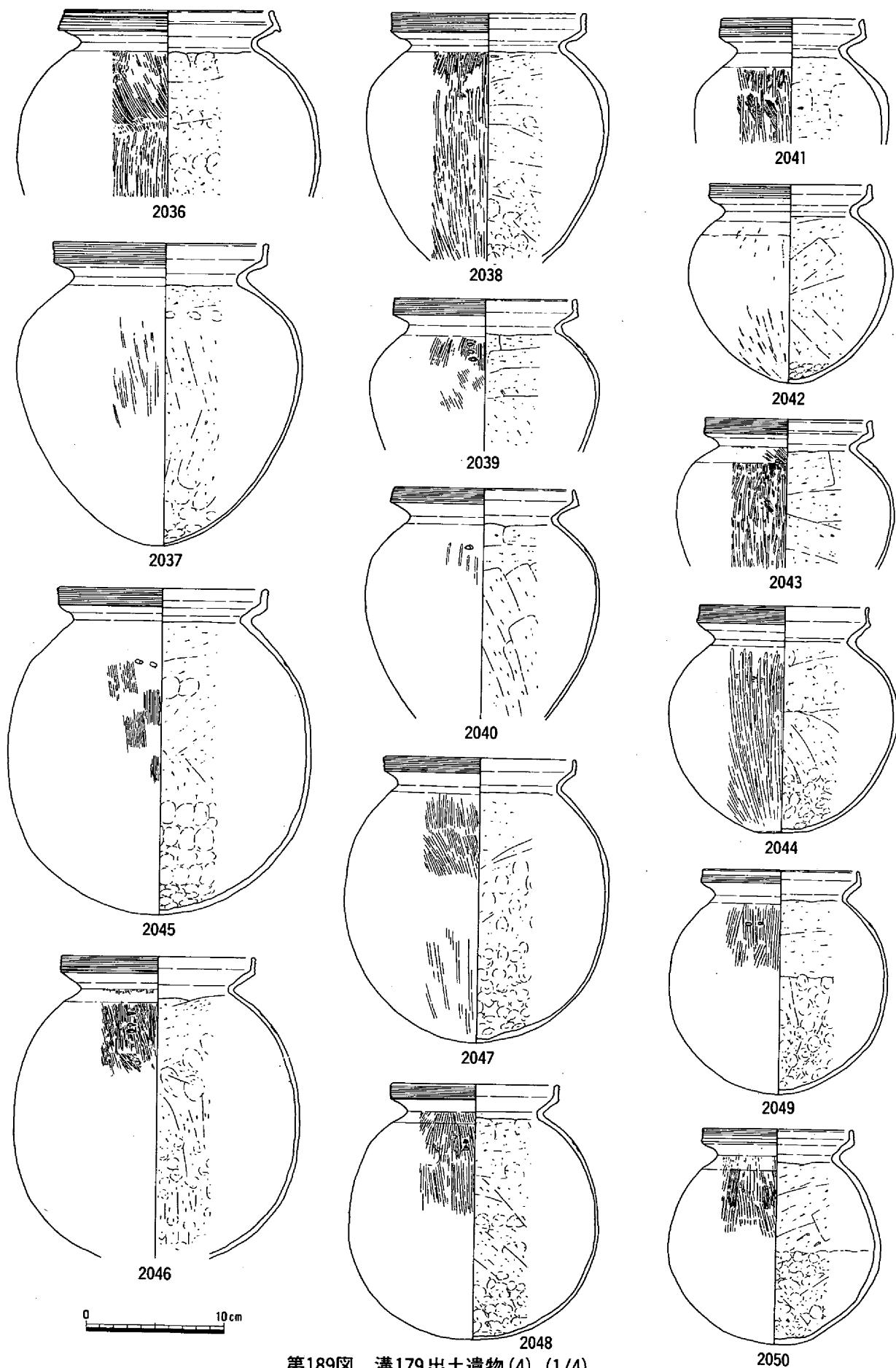
第186図 溝179断面図(1/60)・出土遺物(1)(1/4・1/3・1/1)



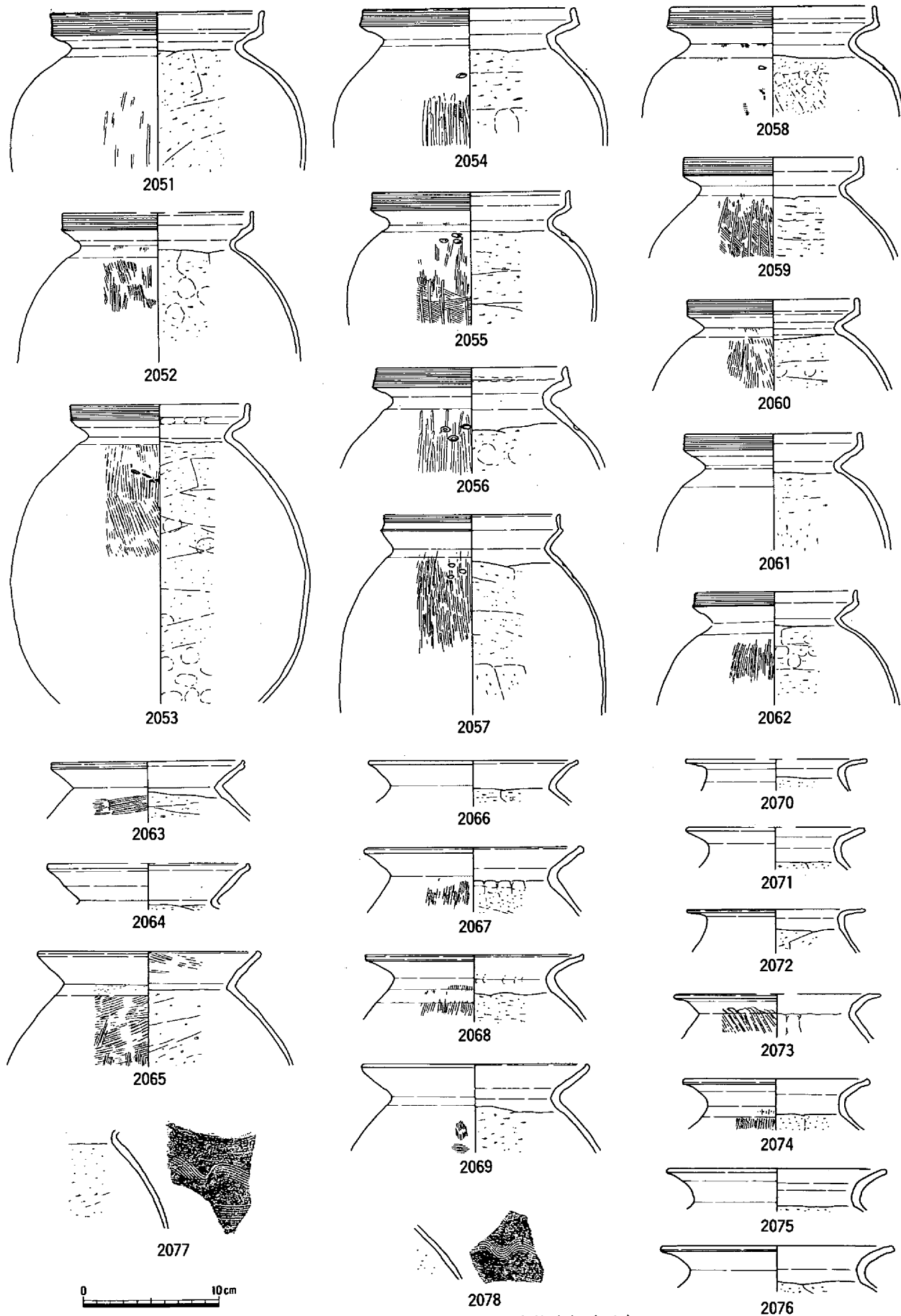
第187図 溝179出土遺物(2) (1/4)



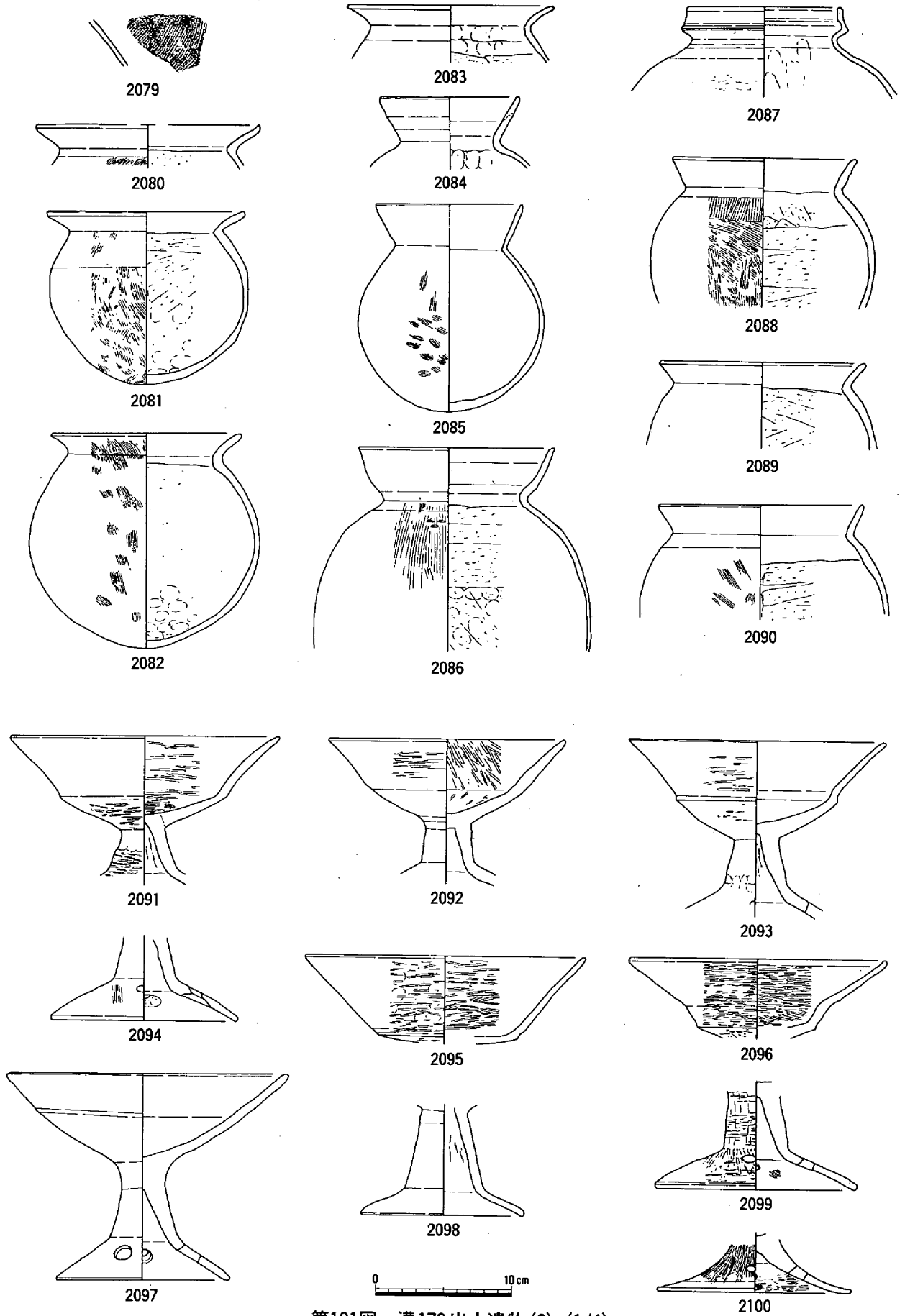
第188図 溝179出土遺物(3) (1/4)

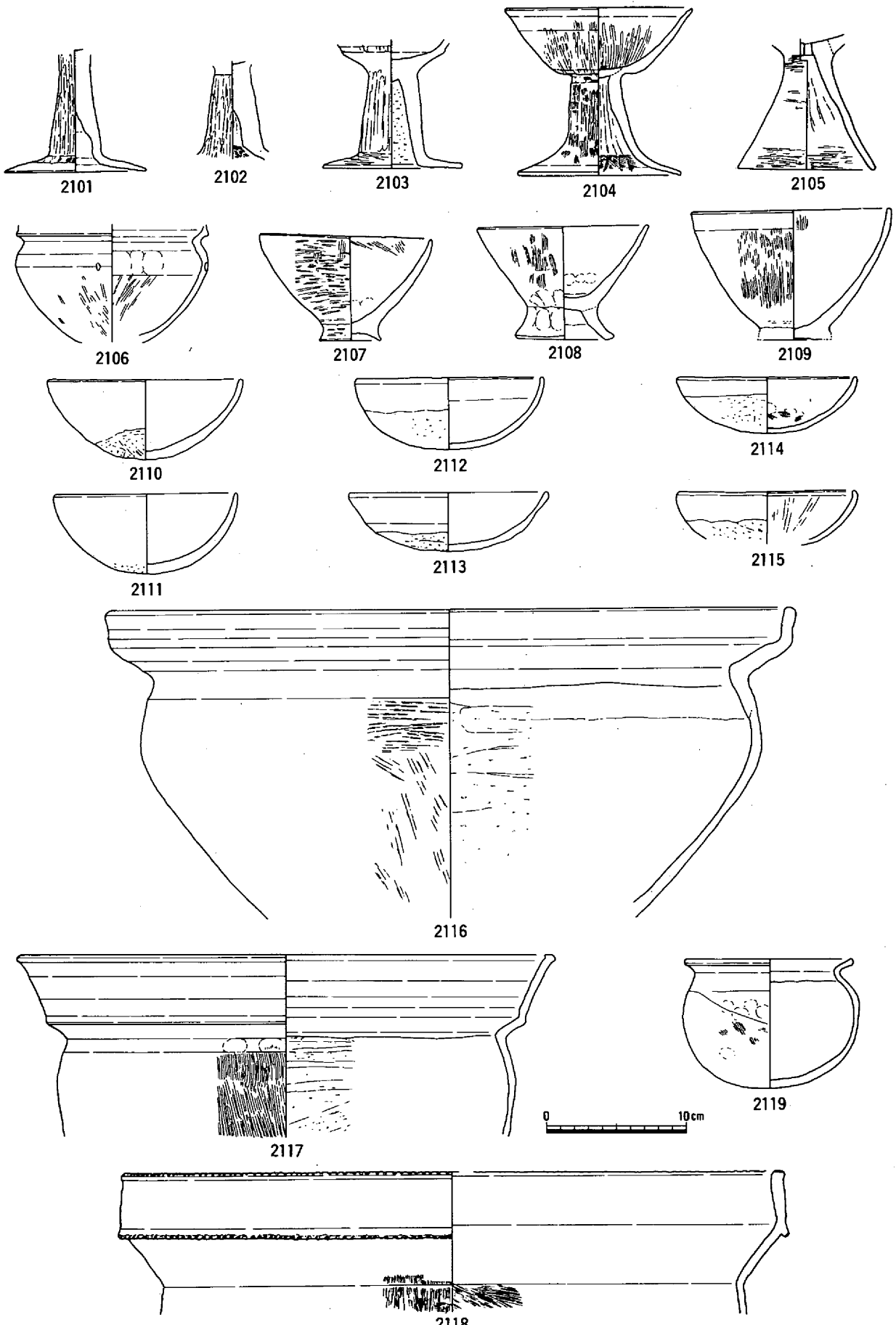


第189図 溝179出土遺物(4) (1/4)

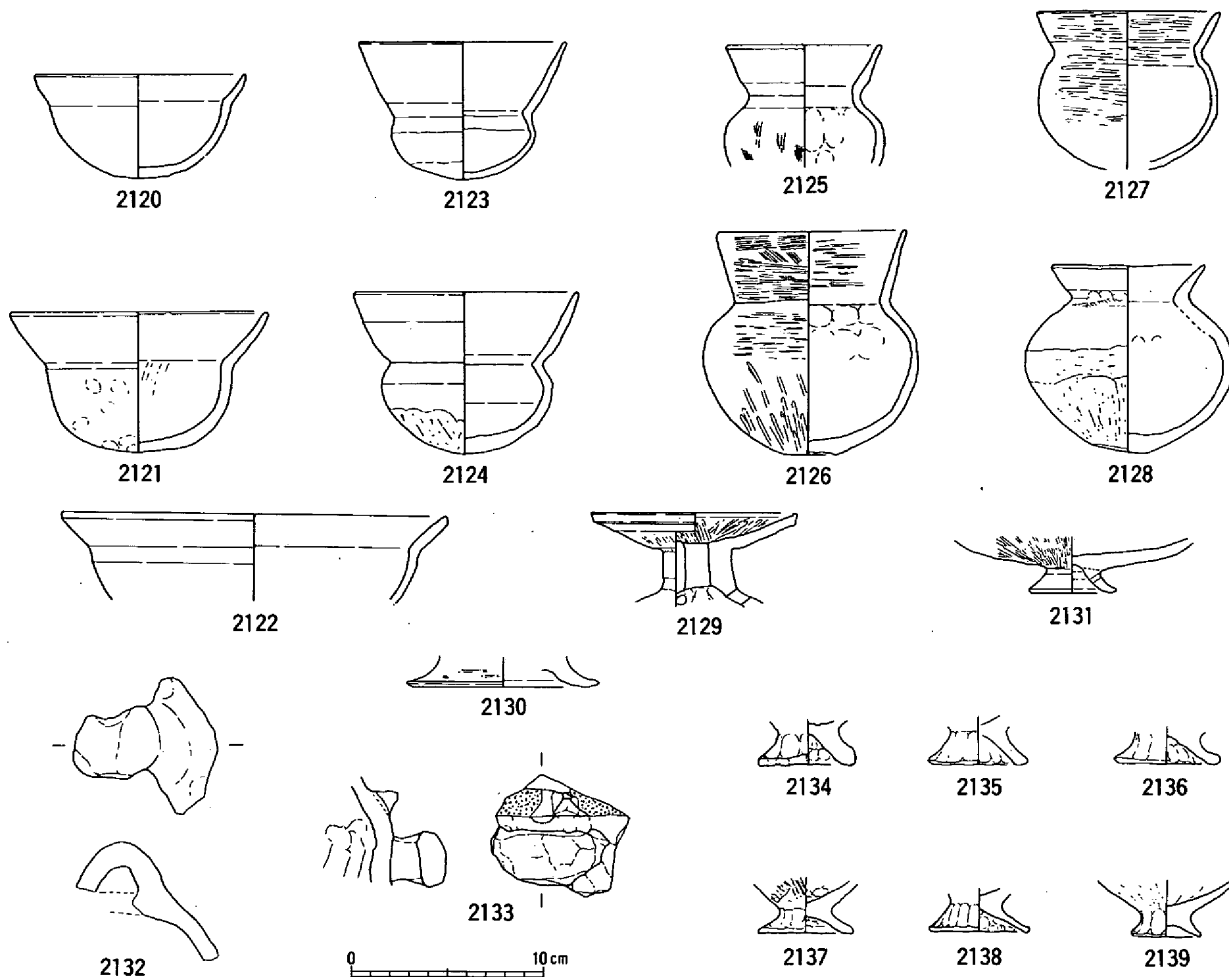


第190図 溝179出土遺物(5) (1/4)





第192図 溝179出土遺物(7) (1/4)



第193図 溝179出土遺物(8) (1/4)

できた。M14は鉄片で、器種は不明である。S457は碧玉製の管玉である。2004は口縁部と頸部内外面、および胴部外面に赤色顔料が塗布されている。時期は弥生時代後期末葉であろう。第188図には、器形において岡山・総社平野以外の特徴が認められると判断した壺を掲載している。甕のうち2063～2065は白っぽい胎土と胴部外面の右上がりの細かいタタキメが特徴的である。2077・2078は白い胎土で、胴部外面にクシ描き波状文が施されている。2079～2082はいわゆる生駒西麓の胎土である。鉢のうち2119の内面には朱が付着している(付載参照)。2118は口縁部の刻目が特徴的である。2113は低脚杯である。2122は生駒西麓の胎土である。2132・2133は「コシキ形土器」などと呼ばれている土器であるが、口径の大きい方を下と考えて図化している。2134～2139は製塩土器である。土器の時期は古墳時代前期前葉が主体であろう。

(平井)

溝180(第163・194図)

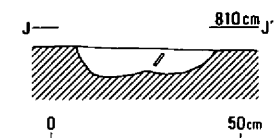
HC1A区の北半部に位置する。幅は40cm前後、深さは15cm前後で、底面の海拔高は8m前後である。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は少量の土器片が出土し、時期は古墳時代前期前葉と考えている。

(平井)

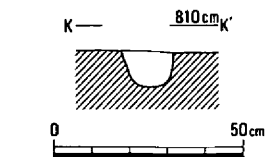
溝181(第163・195図)

YA2A区の南半部に位置する。幅は25cm前後、深さは約20cmで、底面の海拔高は7.95m前後である。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は少量の古墳時代前期前葉の土器片が出土している。

(平井)



第194図 溝180断面図 (1/20)



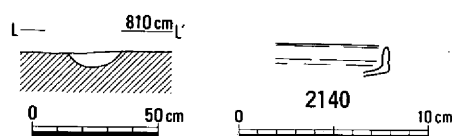
第195図 溝181断面図 (1/20)

溝182(第163・196図)

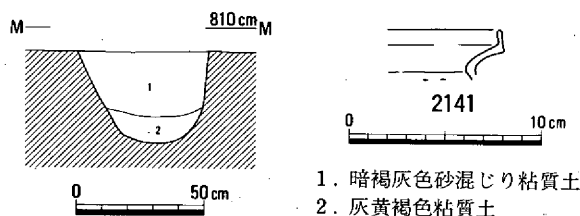
YA 3区中央の微高地上で、土壌190の南に位置する。幅約25cm、深さ5cm、海拔高7.85mを測る。北に弧を描いており、壁体溝の可能性も考えたが、対になる溝や主柱穴となる柱穴も認められなかった。埋土は単層で、褐灰色砂質土である。出土した土器から古墳時代前期前葉と考えられる。(久保)

溝183(第163・197図、図版14-1)

溝182の南に位置する南北方向の溝で、微高地部を斜めに横断している。幅50~60cm、検出面からの深さ35cmを測る断面U字のしっかりした溝で、底面の海拔高は北端で7.75m、南端で7.64mと北から南へ下がっている。溝176のような水路の可能性が考えられる。埋土は二層に分かれるが遺物はあまり出土していない。時期は古墳時代前期前葉で、切り合い関係から竪穴住居43および溝184より新しく位置付けられる。(久保)



第196図 溝182断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)



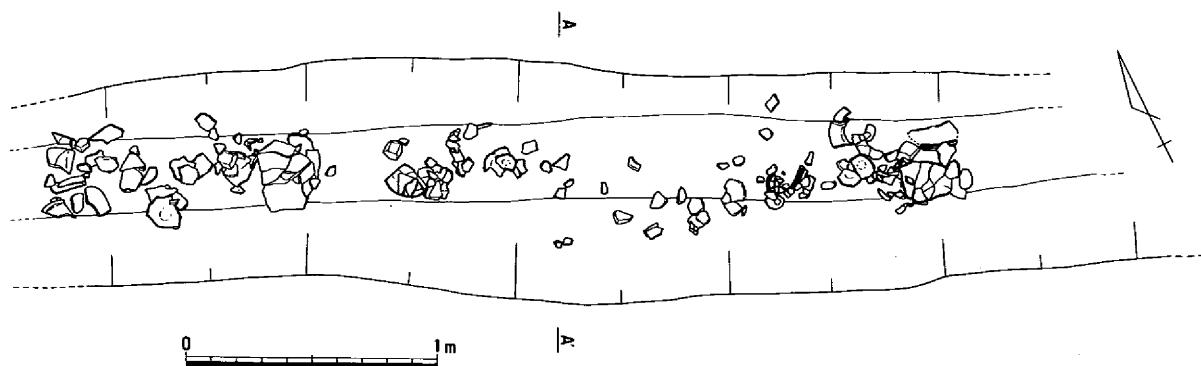
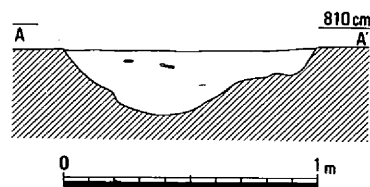
第197図 溝183断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝184(第163・198・199図、図版14-2)

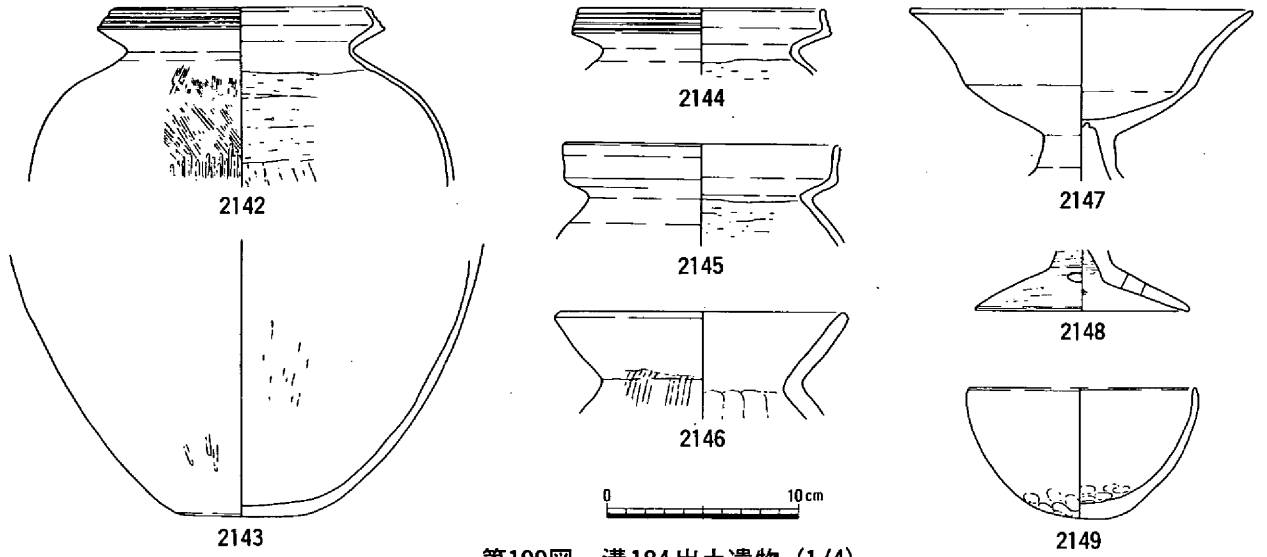
溝183に直行する東西方向の溝で、東側を溝183に切られている。上面の幅は80~90cmを測るが、中ほどに段があり、幅約40cmに狭くなっている。底面の海拔高はほぼ一定しており、約7.7mを測る。埋土は褐灰色粘質土の単層で、主に中段より上位で比較的多くの土器が出土しており、廃絶時に投棄したものと想定される。2142の口縁端部外面は凹線文を施し、2144は細い沈線を1条ずつ引いている。2143・2149は平底を残し、総体的に古墳時代前期のかなり古い様相を示している。切り合いを明らかにすることはできなかったが、竪穴住居43や土壌192より古く位置付けられる。(久保)

溝185(第163・200図、図版14-3)

低位部にあたるYA 4区に位置する。後述する水田層の上面において検出されている。幅約4 m 50 cmで、底面の海拔高は5.9mを測る。埋土は四層に分かれ、底面には5 cm前後の礫が堆積していた。出土遺物は主に4層から出土しており、この層には二枚貝や木質などの有機質遺物を多く含んでいた。木製品もこの層から出土している。W70

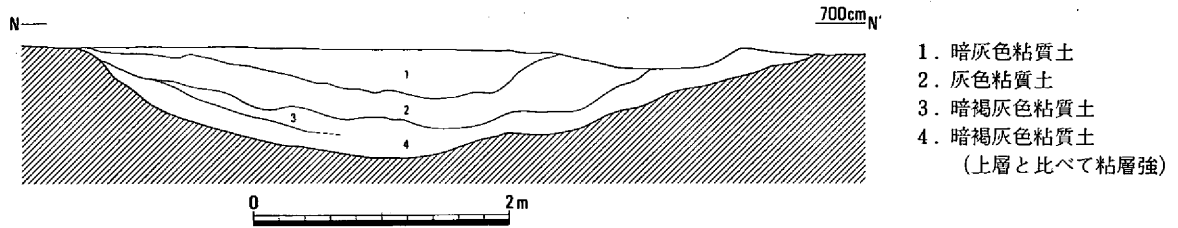


第198図 溝184 (1/30)

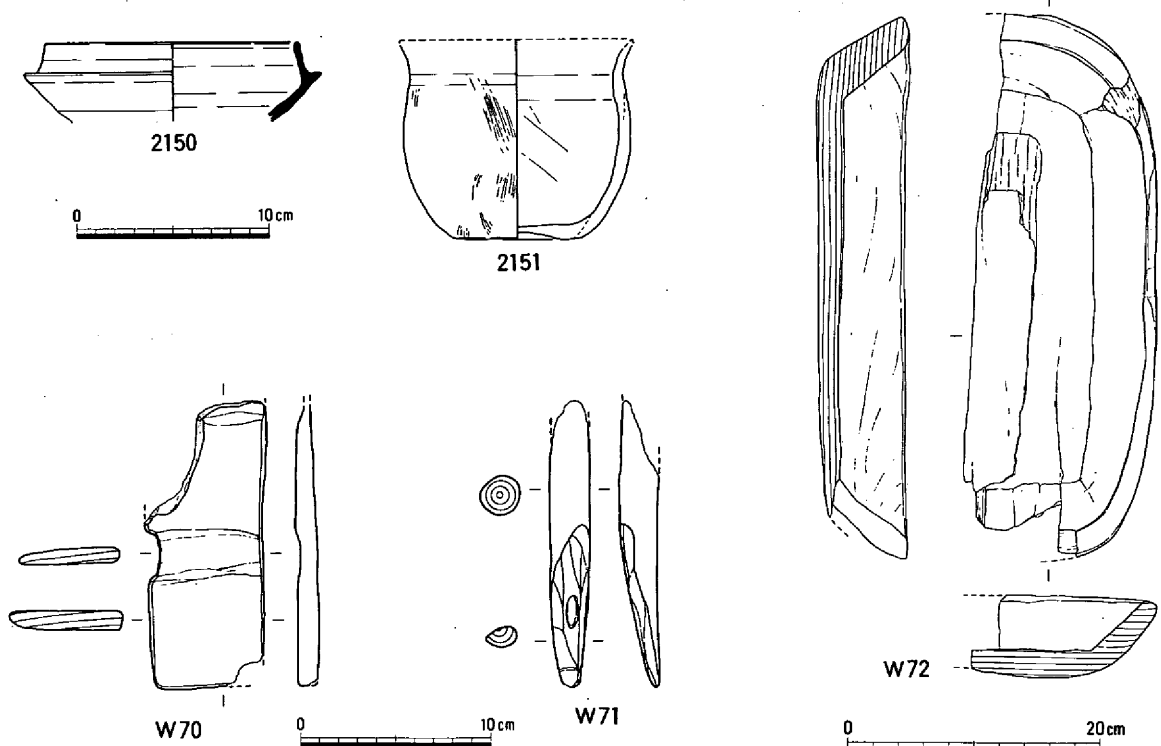


第199図 溝184出土遺物 (1/4)

は厚さ2 cm足らずの薄い長方形の板材で、上面中央部に幅2～3 cmのくぼみがみられる。組み合わせで使用されるのであろうが建築材とするには厚みがなく、用途は不明である。W71は杭、W72は約半



- 1. 暗灰色粘質土
- 2. 灰色粘質土
- 3. 暗褐色粘質土
- 4. 暗褐色粘質土
(上層と比べて粘層強)

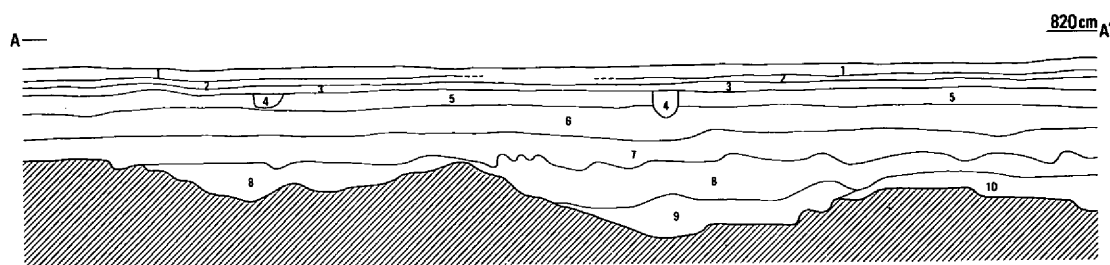
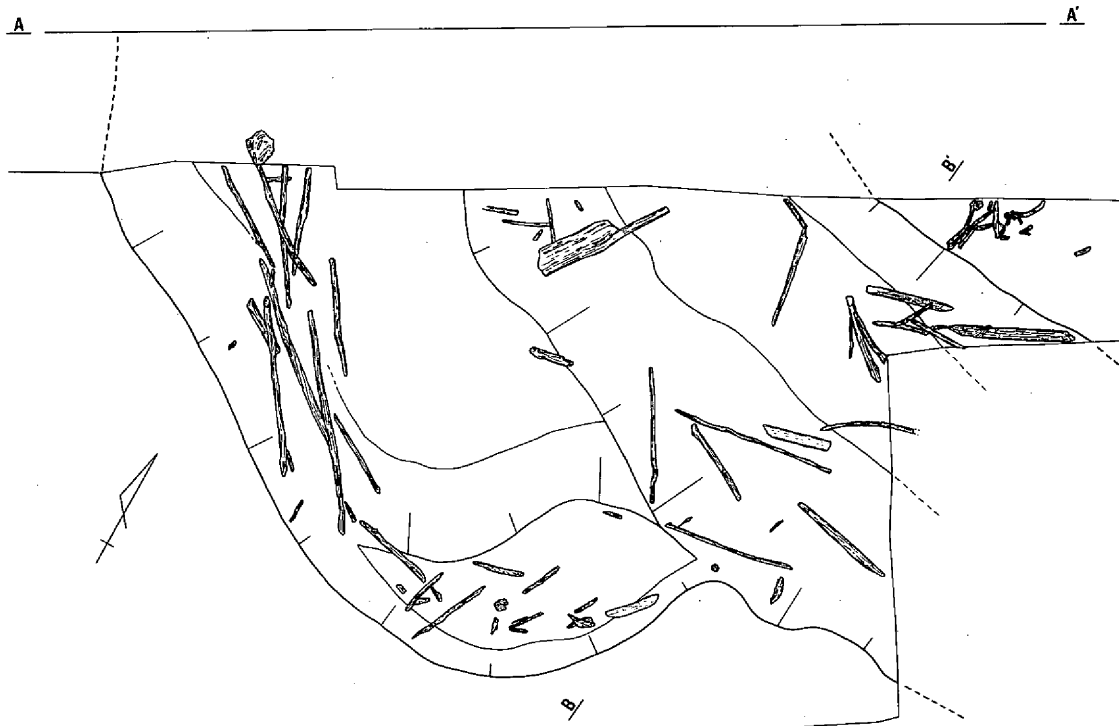
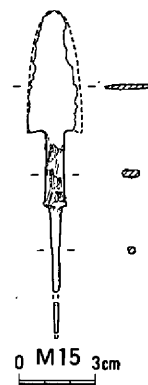


第200図 溝185断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/6)

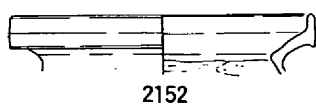
分を欠くが、本来は楕円形をした槽と思われる。2151は平底の鉢で、外面には平行叩き痕が残されていた。形態から朝鮮半島系軟質土器との関りが想定される。時期は6世紀前半と考えられる。(久保)

溝186(第164・201・202図、図版15-1)

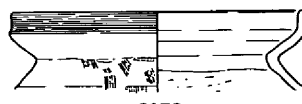
HC 5 Aで検出されたほぼ東西方向の溝である。第201図に示すようにもっとも最大の幅は10mを越えることが確かめられているが、出土遺物や溝としての形状の残りが良かった部分は第201図に示す範囲である。



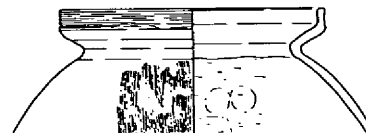
- | | |
|---|---|
| <p>1. 表土
2. 青灰色土
3. 粗砂混じり淡褐色土 730cm
4. 暗渠
5. 淡灰色土</p> | <p>6. 淡黄灰色土
7. 淡褐色土
8. 暗灰-黒灰色微砂質粘土
9. 灰黄色微砂質粘土
10. 粗砂混じり青灰色粘土</p> |
|---|---|



2152

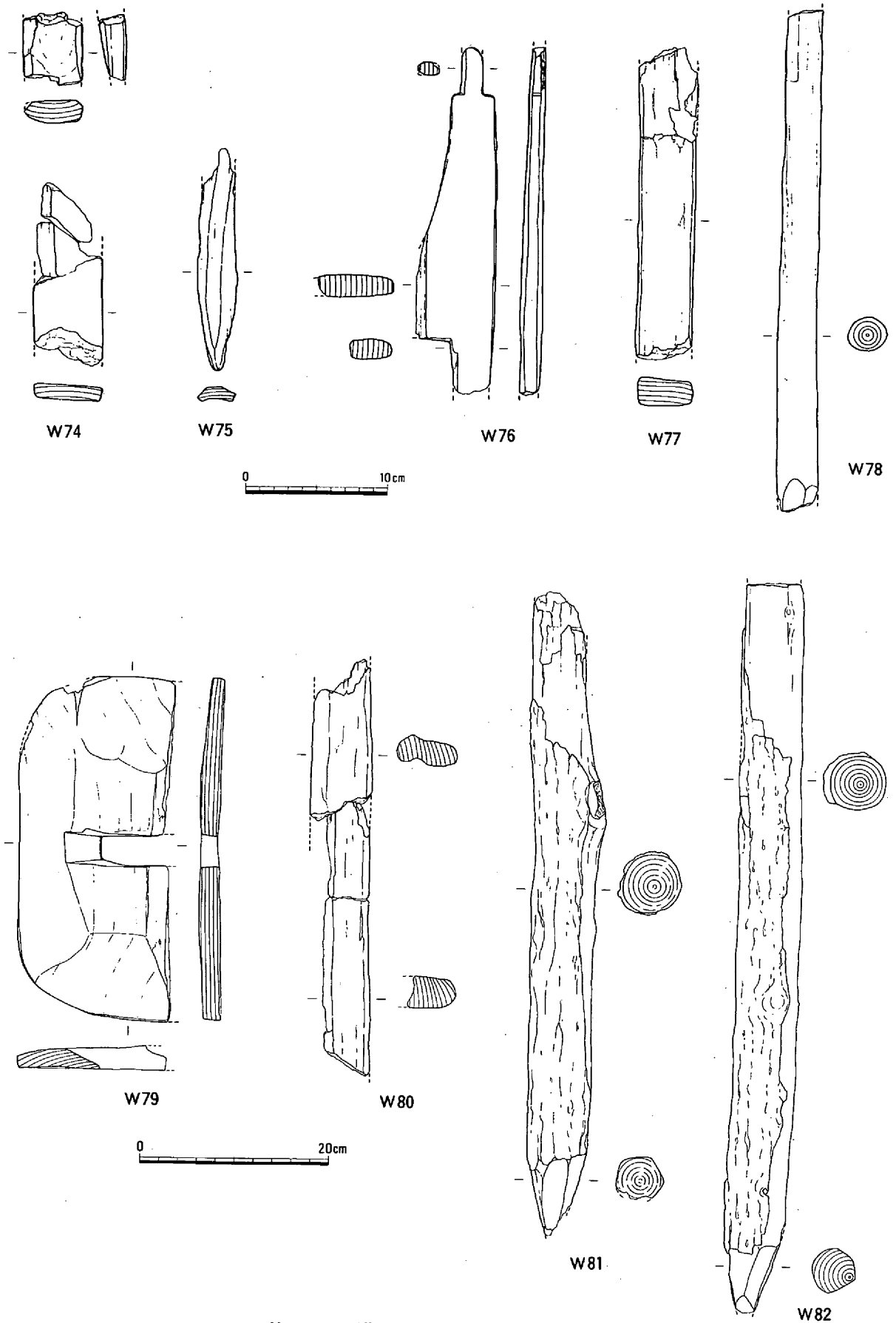


2153



2154

第201図 溝186 (1/60)・出土遺物(1) (1/3・1/4)

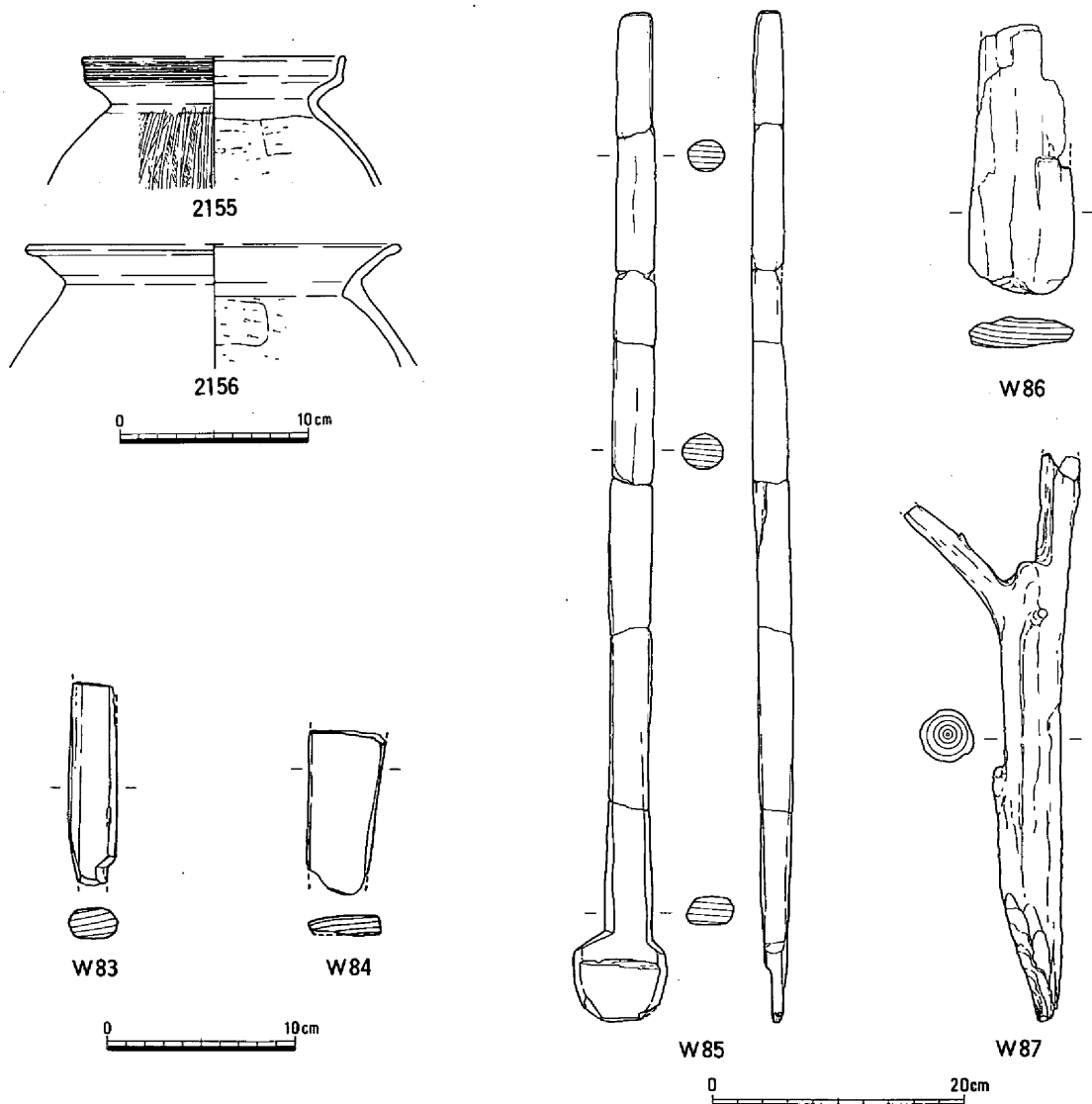


第202図 溝186出土遺物(2) (1/4・1/6)

溝の流走方向はほぼ西から東へと考えられるが、全容は明らかではない。溝の検出範囲の西側は蛇行するように大きな膨らみがあり、そこからも流木が多数出土している。これらはあたかも流れついたかのような状態が観察され、長さ1.5m前後の芯持ちの流木が加工された板材などのほかに出土している。これらは大きさなどが均一で、おそらく伐採された後集積されていたものが、増水などが原因で流出したのではないかと推察される。

出土遺物の多くは暗灰色ないし黒灰色の微砂質粘土から発見されている。土器としては2152～2154の土師器甕があるが破片の中にも須恵器の出土はみられない。M15の完形に近い鉄鏃の出土が特筆される。湿潤な条件の中で木製品の中には、斧台の可能性のあるW73や農耕具かと思われるW76のほかに鼠返しと考えられるW79がある。W81・82など樹皮を付けたまま先端を加工した杭材はいずれも芯持ちでアベマキである。溝の時期は以上の遺物から古墳時代前期前葉に比定される。 (岡田) 溝187(第143・164・203図、図版10-1)

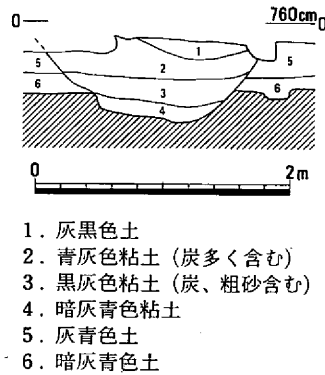
溝186の南西方約20mで検出された南北方向の溝である。検出範囲がきわめて狭いので北方へ延びて溝186との関係は明らかではないが、同じ溝の支流である可能性もある。



第203図 溝187出土遺物 (1/4・1/6)

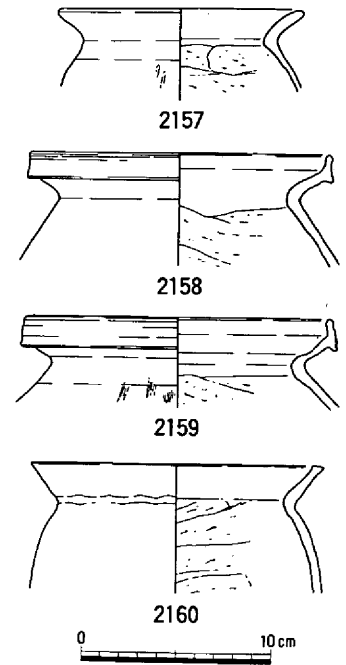
出土遺物には2155・2156の土師器のほかW83～87の木製品がある。W84は又鋤の一部と考えられる板目材である。W85は先端が丸く加工された特殊な農耕具のような面取材であるが、未製品の可能性がある。W87は芯持ちの杭と考えられるが枝がそのまま残されている。時期は古墳時代前期前葉に比定される。(岡田) 溝188(第164・204図、図版15-2)

ほぼ南北方向に検出された溝である。検出全長約15mで幅約170cm、深さ約70cm前後を測る。溝の底レベルは溝186とはさほど変わりなく急激な地形の変化は看取されない。溝の断面形は逆台形に近い。2・3層には炭が多く含まれ後述の溝189の1層と共通する。出土遺物には2157～2160の弥生時代終末期および土師器が出土している。溝の存続時期は弥生時代後期から続き最終的に古墳時代前期前葉に埋没した可能性がもっとも高い。(岡田)



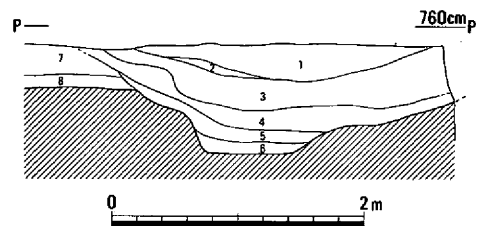
1. 灰黒色土
2. 青灰色粘土 (炭多く含む)
3. 黒灰色粘土 (炭、粗砂含む)
4. 暗灰青色粘土
5. 灰青色土
6. 暗灰青色土

第204図 溝188断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

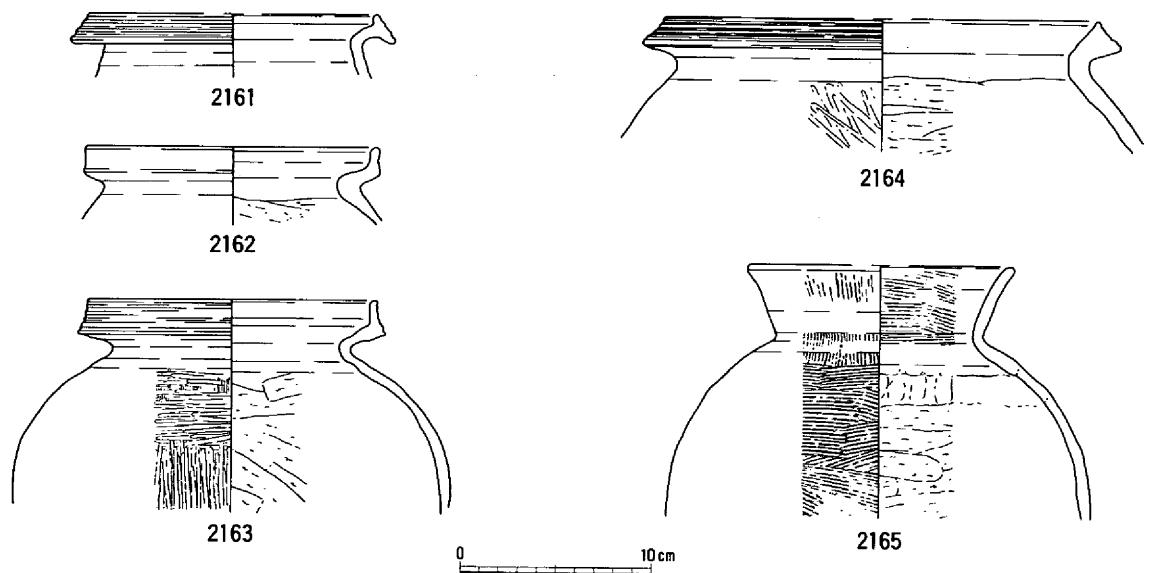


溝189(第164・205図、図版15-2)

溝188と平行し東方約3mで検出された溝である。本来は数条の溝が集まっていた可能性がある。溝の断面形は溝188と似ている。出土遺物には、弥生時代後期から古墳時代前期前葉の土器が出土しているが最終埋没時期は後者である。(岡田)



1. 炭混じり暗灰色土
2. 暗灰色土
3. 暗灰色土 (炭多く含む)
4. 暗青灰色粘質土
5. 黒灰色土
6. 淡黄灰色粘土混じり暗灰色土
7. 灰青色土
8. 暗灰青色土

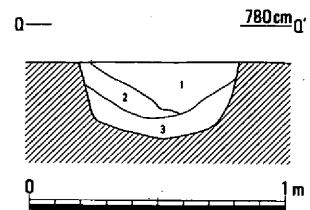


第205図 溝189断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

溝190(第165・206図)

建物62の東方約8mで検出された南北方向の直線的な溝である。北方では最終的に湿地となるので、微高地との境界あたりまで延びる可能性をもつ。

溝の断面形は逆台形を呈し、最下層には淡褐色土が埋積している。検出部分では幅約60cm、深さ約30cmを測る。出土遺物は弥生土器(弥生後期後葉)細片および土師器(古墳時代前期前葉)があるが、溝の埋没時期は後者であろう。(岡田)



- 1. 暗灰黄褐色土
- 2. 暗灰黄褐色土 (黄色土ブロック含む)
- 3. 淡灰褐色土

第206図 溝190断面図 (1/30)

(6) 水 田

水田

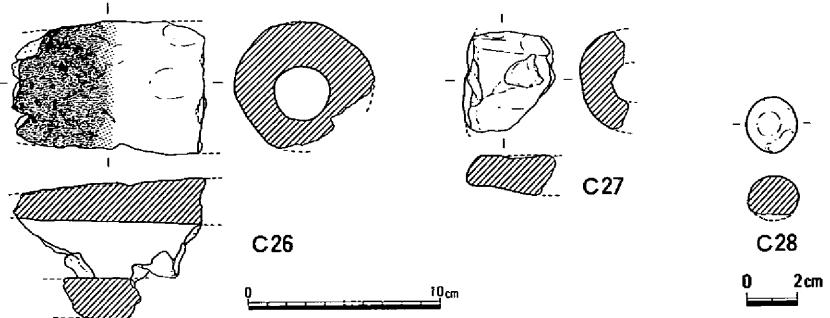
YA4区の低位部で、第140図の10層上面において幅15cm、高さ2cm程度の畦畔状の盛り上がりを検出した。検出および堆積状況から『窪木遺跡1』と同様の水田と考えられる。古環境研究所において分析を行った結果、この10層から2400個/gのプラント・オパールが検出されている。土層断面の状況からYA4区全域にわたって水田が広がっていたと想定されるが、東半は重機によって掘削されており畦畔は確認できなかった。HC5区東半およびYA2区とYA3区の間にも低位部が存在するが、古代以降の削平の影響をうけたためか水田層を確認することはできなかった。(久保)

(7) その他の遺構・遺物

その他の遺構としては浅い土壇状や溝状の遺構および柱穴があった。このうち柱穴については、古代・中世のもの以外は識別が困難であったため、弥生時代の遺構全体図に掲載したもののなかには古墳時代の柱穴が含まれている可能性がある。

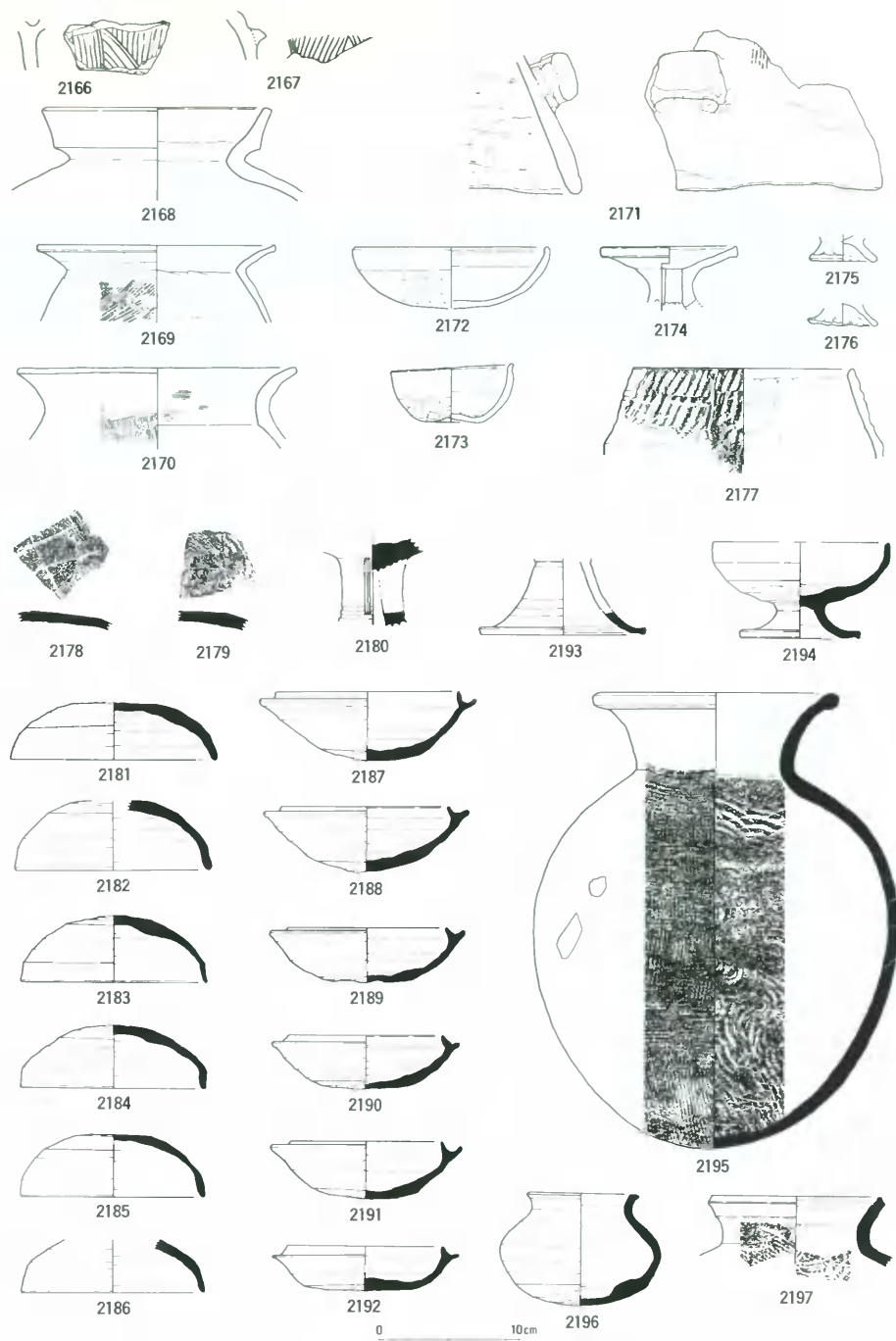
遺構に伴わなかった古墳時代の遺物としては、土師器、須恵器、土製品、および炉壁、鉄滓などがある。土師器のうち2171は「コシキ形土器」とも呼ばれている土器であるが、口径の広い方を下と考えて図化している。2175は古墳時代前期の、2177は後期の製塩土器であろう。須恵器は6世紀後半～7世紀前半の時期のものが多かった。これらは奈良時代の造成土と考えられる土層中から古代の遺物とともに出土した。土製品のうちC26・27は羽口、C28は土玉である。C26の先端部は鉋物がアメ状に溶けている。炉壁、鉄滓についてはYK区から出土したものが古墳時代後半と考えられるほかは時期が特定できない。先述した奈良時代の造成土と考えられる土層から古代の土器や古墳時代後半の須恵器とともに炉壁(精錬、鍛冶)が約20点、鉄滓(精錬、鍛冶)が約40点出土している。時期については、

共伴遺物からは古代なのか古墳時代後半なのかは明らかにできなかった。(平井)



第207図 その他の出土遺物 (古墳時代1) (1/4・1/3)

第3章 発掘調査の概要



第208図 その他の出土遺物（古墳時代2）（1/4）

第6節 古代・中世・近世の遺構・遺物

1. 概要

遺構・遺物は時期を特定できないものもあるが、大きくは奈良時代～平安時代前期、平安時代中期、平安時代後期～中世、近世に区分して考えることができる。奈良時代～平安時代前期の遺構は、掘立柱建物6棟、土塋1基、溝・溝状遺構11条、柵列状遺構などがある。これらの多くはYA2A・HC1A区に集中している。この地区は現状でも西側の水田から一段高い丘陵裾部にあたっており、こうした場所が意識的に選ばれたものと考えられる。掘立柱建物群は規則的に建てられており、またこれらを区画するためと推定できる溝も検出できていることから、公的な性格をもった建物群であり、規模や形状、あるいは同時期の遺物が少ないことなどから倉庫に用いられたものと推測している。平安時代中期の遺構・遺物もYA2A・HC1A区に多い。建物69は身舎が5×2間で、西側に底を伴う特徴的な建物である。遺物は少面積の調査であるにもかかわらず、多量に出土している。これらは溝や斜面堆積からの出土が多いが、完形に復元できる土師器(特に供膳具)が多いことや、緑釉陶器・灰釉陶器・陶硯・陶馬などが含まれていること、あるいは完形の土器や河原石・鉄器などを埋納している土塋195～198の存在を含めて、何らかの祭祀が行われたのではないかと考えている。(平井)

2. 遺構・遺物

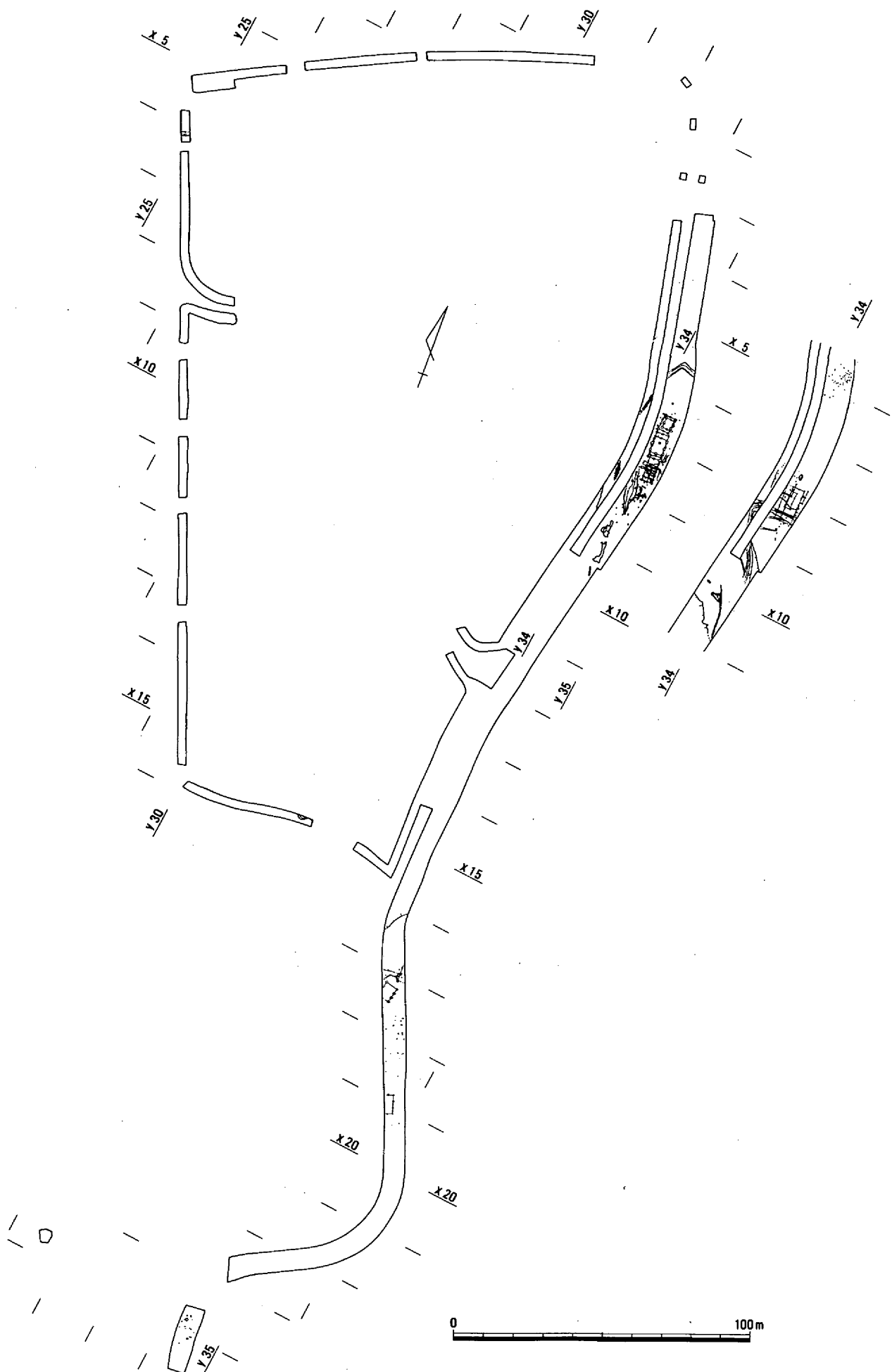
(1) 建物

建物63(第210・215図、巻頭図版3)

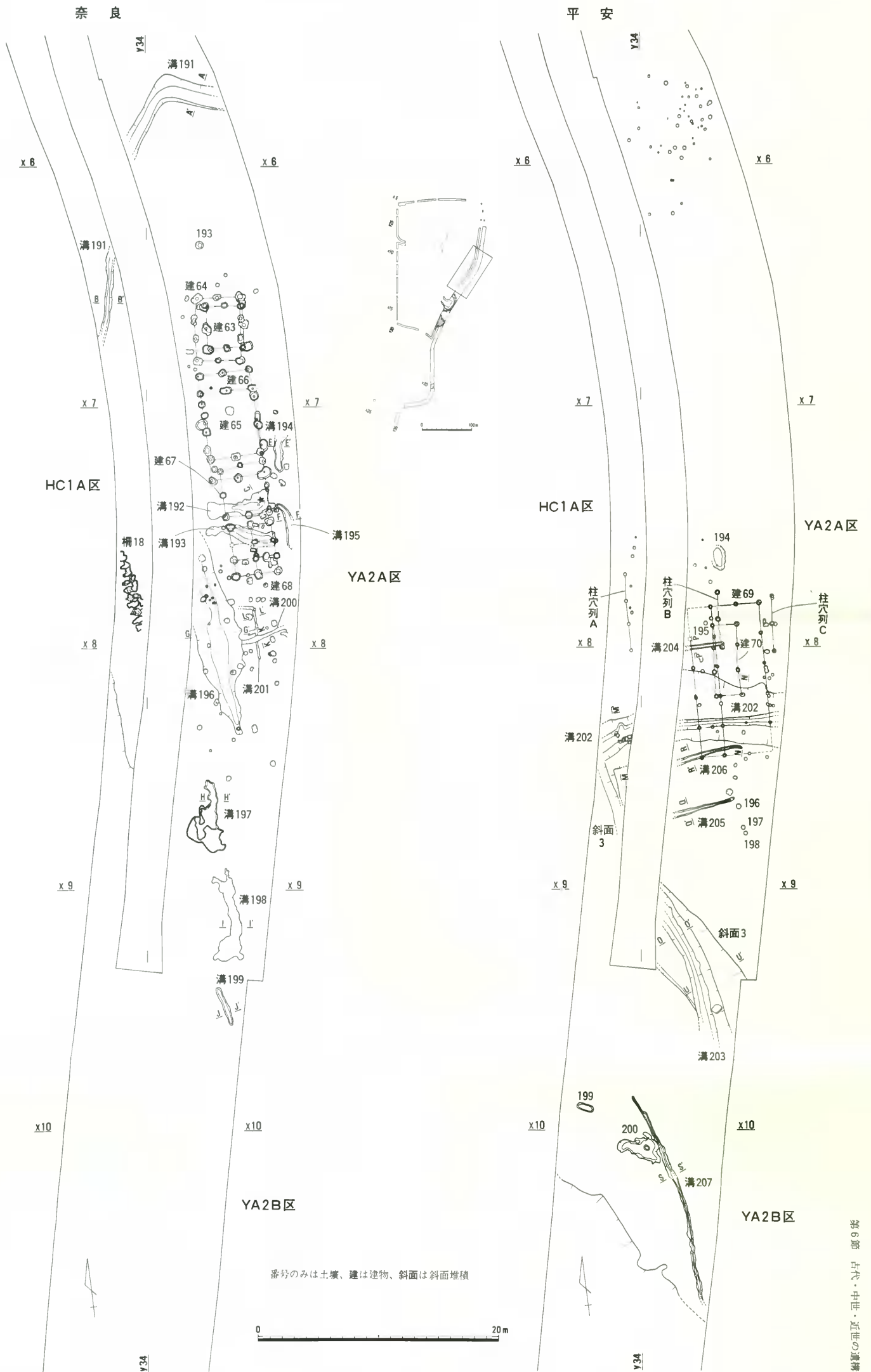
YA2A区の北半部において検出した掘立柱建物である。建物を構成する各柱穴は平安時代中期の遺構検出面となっている土層を掘り下げている途中で検出することができた。また柱穴の埋土の識別についても簡単ではなかった。したがって各柱穴の平面形や断面形、深さについては必ずしも明確ではない。検出できた柱穴掘り方の平面形は方形を意識したものが多い。梁間の中間に位置するP2・7は他の柱穴に比べて掘り方の規模は小さいという特徴が認められる。柱痕跡は明瞭なものともそうでないものがあった。P5の北端部は建物64のP5によって切られている。建物の規模は2×2間で、桁行は345cm、梁間は276～292cmである。方向は真北を意識しているように思われる。柱穴の埋土中からは少量の土器片などが出土している。時期を明確にすることのできる遺物は出土していないが、包含層出土遺物などから奈良時代～平安時代前期頃ではないかと考えている。(平井)

建物64(第210・216図、巻頭図版3)

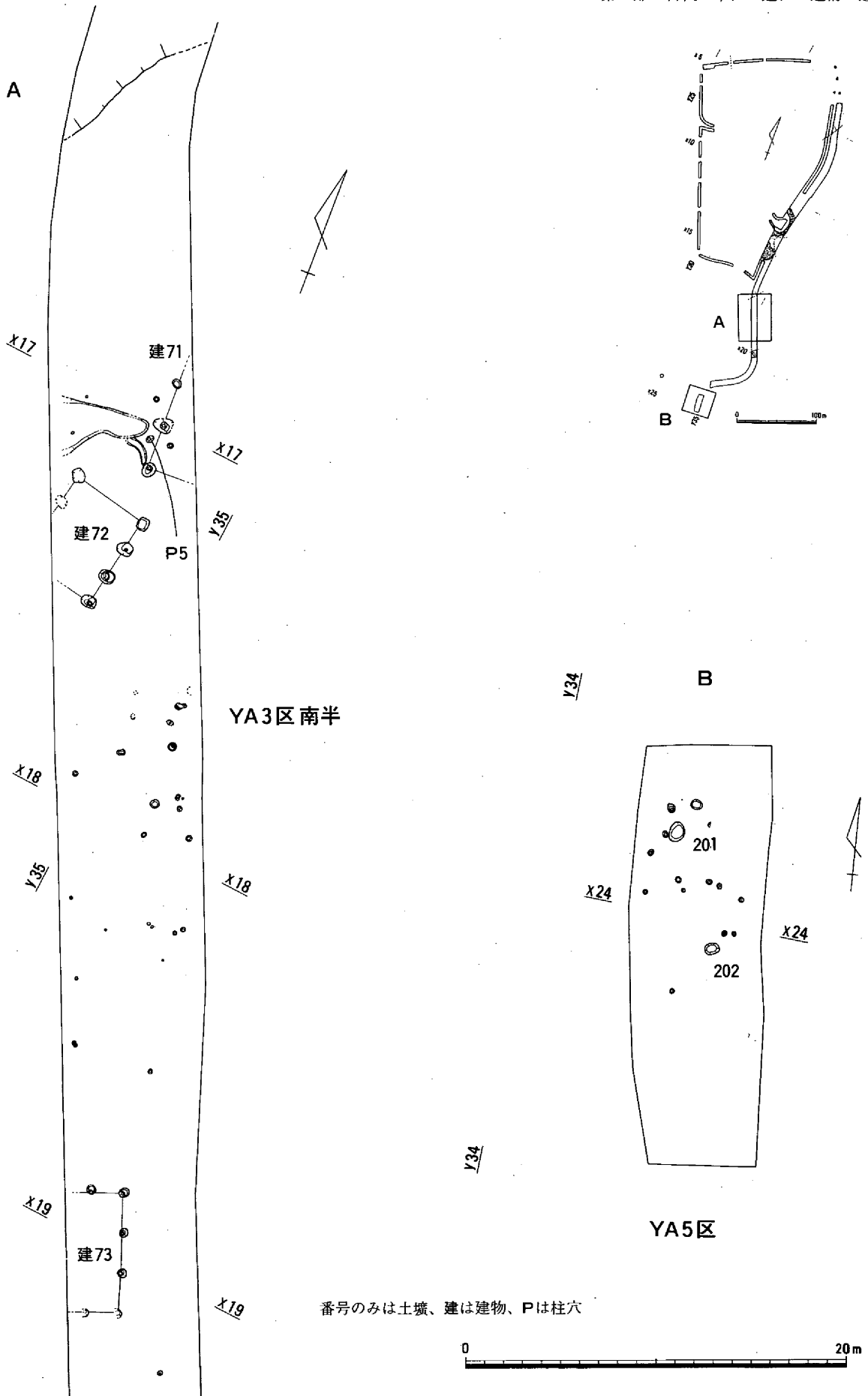
YA2A区において建物63と重複するかたちで検出できた掘立柱建物である。建物63と同じく平安時代中期の遺構面となっている土層を掘り下げ中に柱穴は検出できた。また、柱穴の埋土の識別も困難で、その規模や形については必ずしも明確ではない。柱穴掘り方の平面形は方形を意識したものが多い。また建物63と同じく、梁間の中間に位置するP2・9は他の柱穴に比べて規模は小さい。埋土は炭・焼土を含む褐灰白色砂質土で、柱痕跡が確認できる柱穴はなかった。P1の底面には小礫が1個存在していた。建物の規模は3×2間で、桁行は510～525cm、梁間は356～370cmである。方向は建



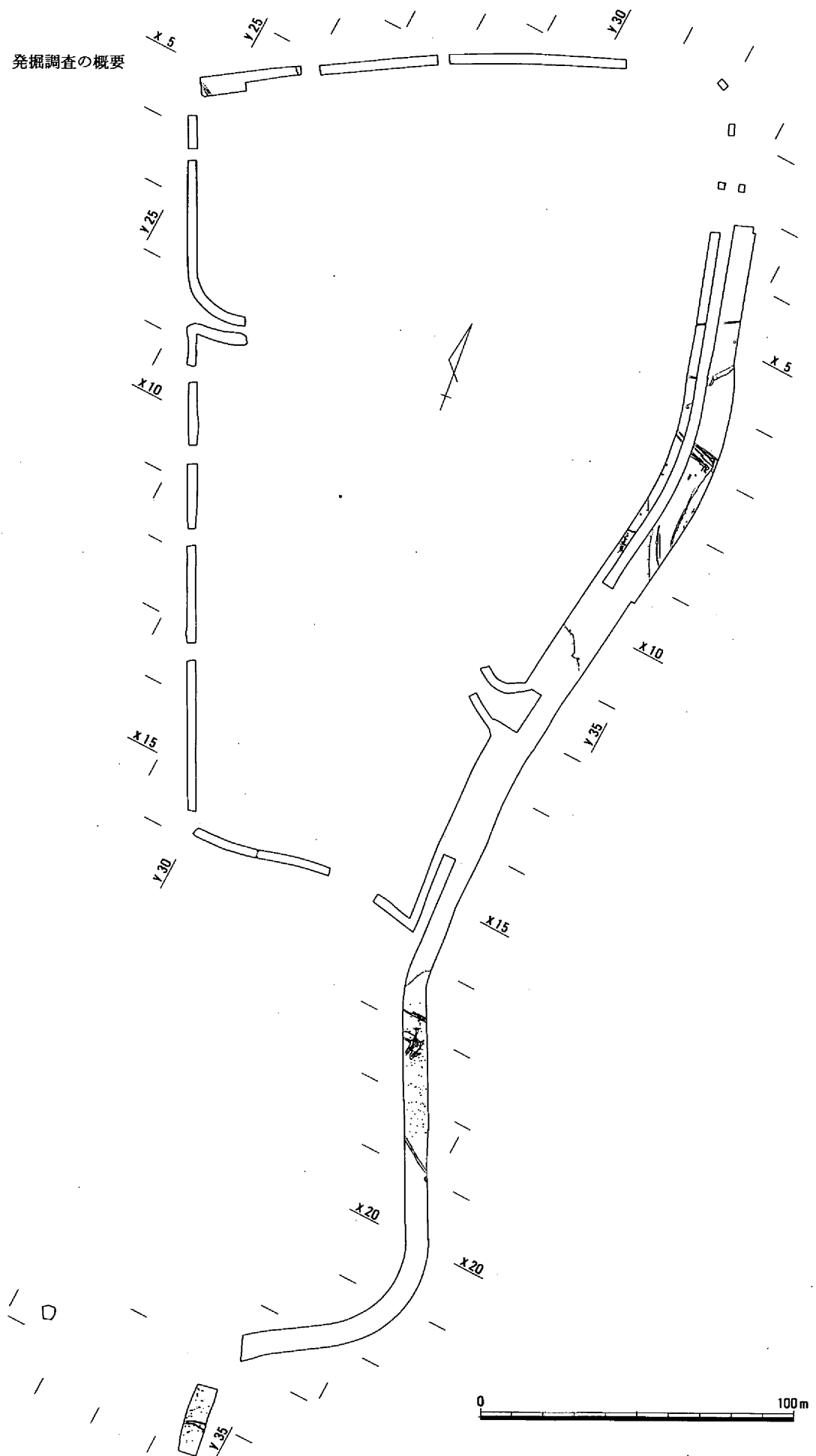
第209図 古代遺構全体図(1) (1/1800)



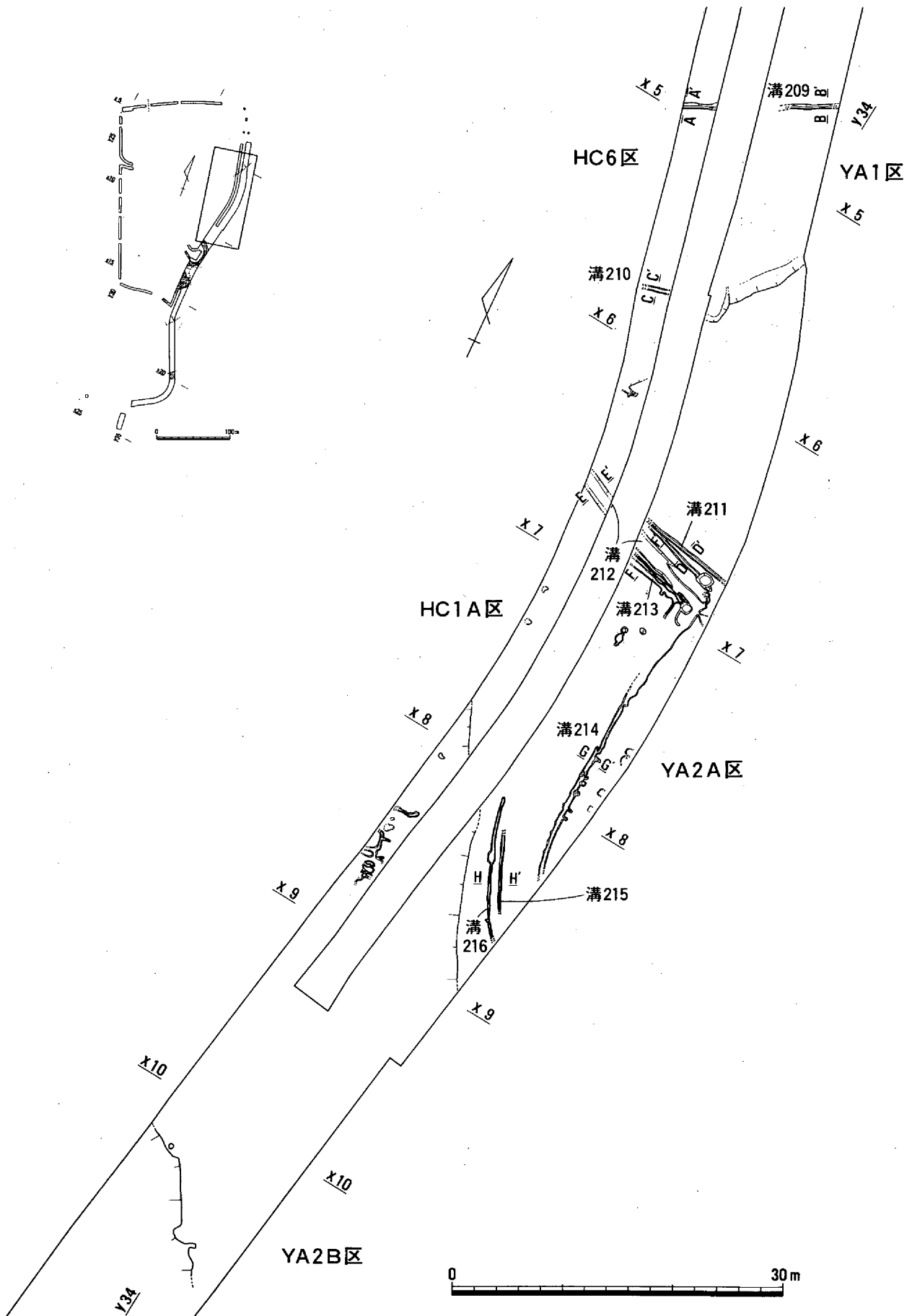
第210図 古代遺構全体図(2) (YA2A・2B区、HC1A区) (1/300)



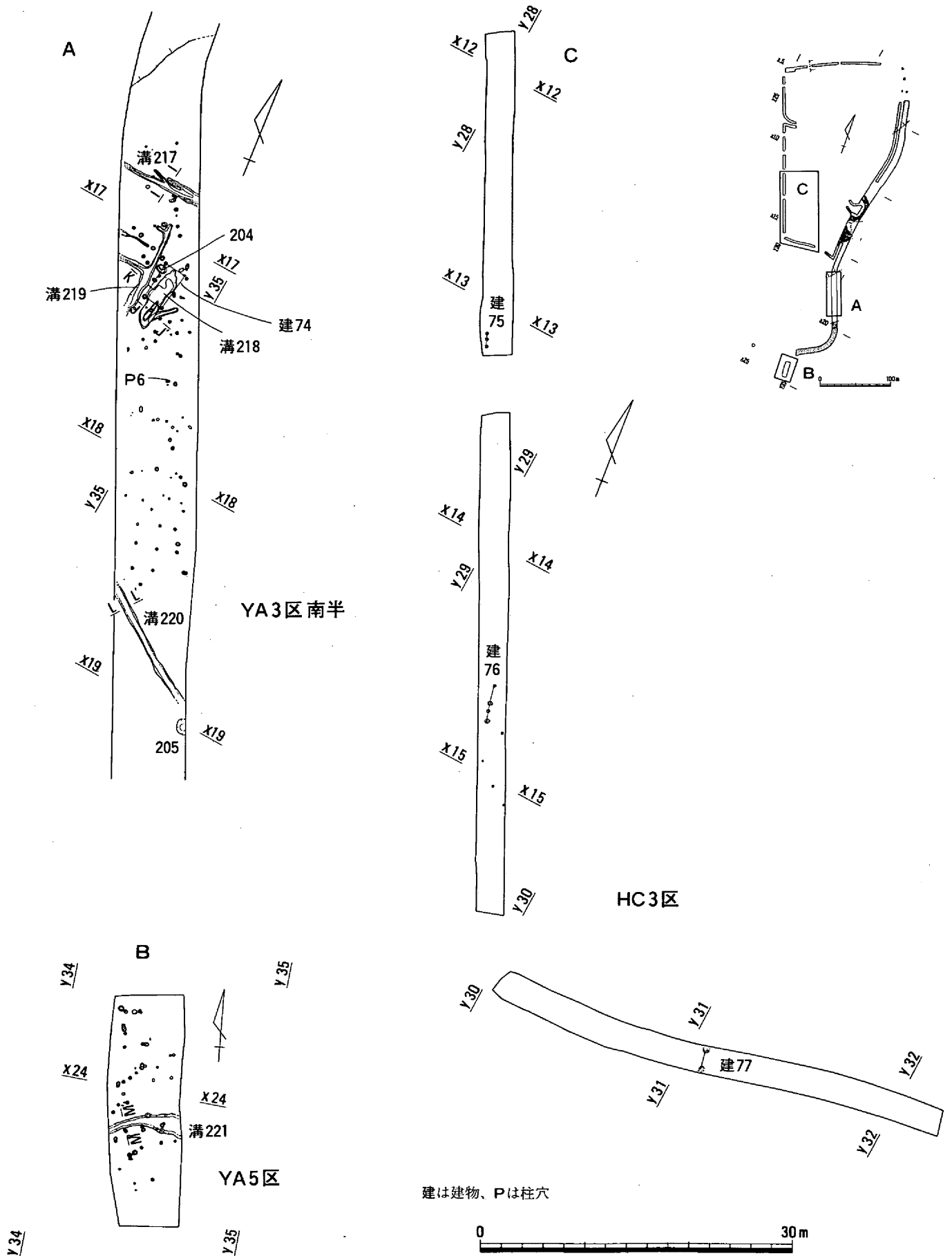
第211図 古代遺構全体図(3) (YA3区南半・5区) (1/300)



第212図 中世・近世遺構全体図(1) (1/1800)



第213図 中世・近世遺構全体図(2) (YA1・2A・2B区、HC1A・6区) (1/500)



第214図 中世・近世遺構全体図(3) (YA3区南半・5区、HC3区) (1/500)

物63と同じく真北を意識しているように思われる。柱穴の埋土中からは少量の土器片のほかに、P1・10から鍛冶滓が、またP4から炉壁が出土している。時期を明確にできる遺物は出土していないが、P5が建物63の柱穴を切っていることやその位置関係から、建物63を建て替えたのが建物64であると推測できる。時期は奈良時代から平安時代前期頃ではなかろうか。 (平井)

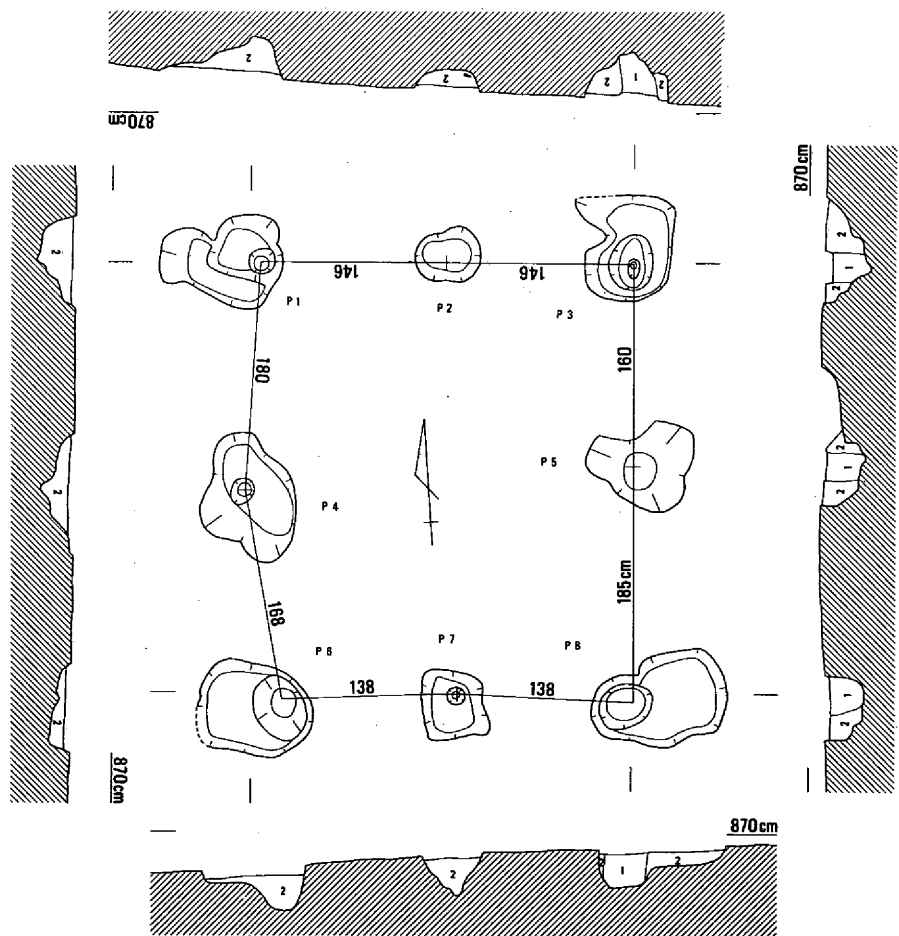
建物65(第210・217図、巻頭図版3)

YA2A区の建物63・64の南において検出した掘立柱建物である。建物63・64と同じく平安時代中期の遺構検出面となっている土層を掘り下げ中に柱穴は検出できた。また、柱穴の埋土の識別も困難で、その規模や形は必ずしも明確ではない。柱穴掘り方の平面形は、楕円形のものが多く、規模は一定していない。柱痕跡は確認できたものが多い。次に述べる建物66の柱穴と切り合い関係にある柱穴が多く、P3・4・5・7はそれぞれ建物66のP5・6・7・10によって切られている。建物の規模は3×2間で、桁行695~715cm、梁間425~445cmである。方向は建物63・64とは異なっており、磁北を意識しているように思われる。柱穴の埋土中からは少量の土器片のほかに、P4からは鉄塊系遺物が出土している。時期を特定できる遺物は出土していないが、時期は奈良時代から平安時代前期頃と考えている。なお、溝194はその位置関係から、この建物に伴う可能性が考えられる。 (平井)

建物66(第210・218図、巻頭図版3)

YA2A区の北半部において建物65と重複するかたちで検出した掘立柱建物である。建物63~65と同じく、平安時代中期の遺構検出面とな

っている土層を掘り下げ中に柱穴は検出できた。また、柱穴の埋土の識別もむづかしく、その規模や形については必ずしも明確ではない。検出できた柱穴の掘り方の平面形は、方形のものや楕円形や円形のものがある。すべての柱穴で柱痕跡が確認でき、柱は直径15~20cm前後の円柱であったと推測できる。建物の規模は3×2間で、桁行は696cm、梁間は424cmである。建物63~65とは異な



1. 褐灰色砂質土

2. 淡褐灰色砂質土

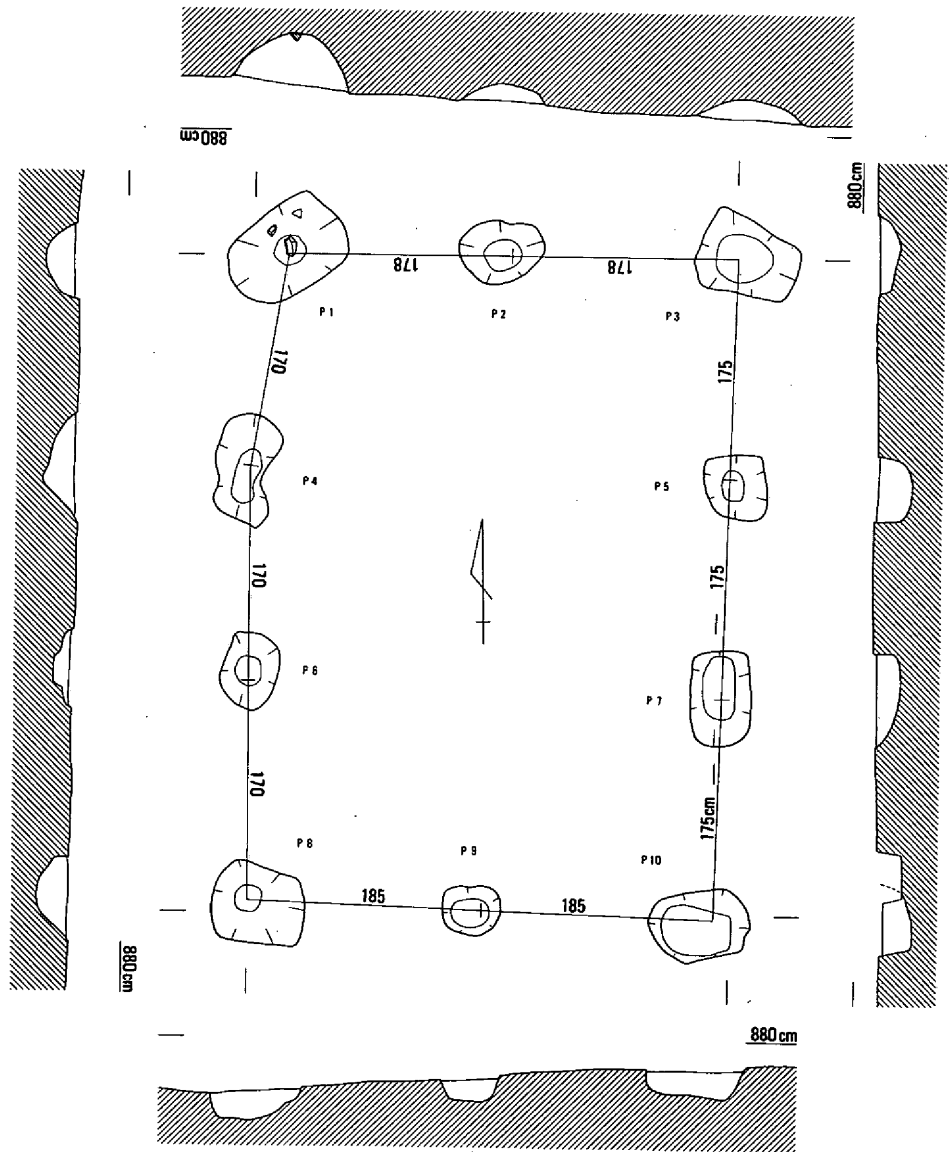
第215図 建物63 (1/60)

て、柱間の間隔は規則的であり、桁行は232cm、梁間は212cm間隔である。また柱通りも直線的である。方向は建物65と同じく磁北を意識しているように思われる。柱穴の埋土中からは少量の土器片のほかにP 5から鍛冶滓が出土している。図示した土器のうち2198はP 7、2199はP 9、2200はP 4から出土した。2199の内外面は赤色顔料が剥がれたものと理解している。これらの土器の時期は奈良時代前半であろう。先述したようにこの建物の柱穴は、建物65の柱穴を切っており、また規模的に両者は近似していることから、建物66は建物65を建て替えたものと推測している。時期については奈良時代～平安時代前期の幅で捉えている。(平井)

建物67(第210・219図、図版16-1)

YA 2 A区において検出した掘立柱建物で、建物65と一部重複している。建物63～66と同じく、平安時代中期の遺構検出面となっている土層を掘り下げ中に柱穴は検出した。また、柱穴の埋土の識別は困難で、その規模や形は必ずしも明確ではない。柱穴の掘り方は方形や楕円形、円形で、建物63～66の柱穴に比べて規模が小さい。埋土は黄色粘土ブロックを含む淡褐灰色砂質土で、柱痕跡が確認できた柱穴はな

なかった。建物の規模は2×2間と考えているが、P 1がずれているのが建物とするには問題ではある。西隣りにP 9が検出できたが、この位置でも問題は残る。本報告書では2×2間の掘立柱建物として報告し、規模的には次に述べる建物68に近似しているのが特徴的である。方向は建物65・66と同じく、磁北を意識しているように思われる。柱穴の埋土中からは少量の土器片のほか

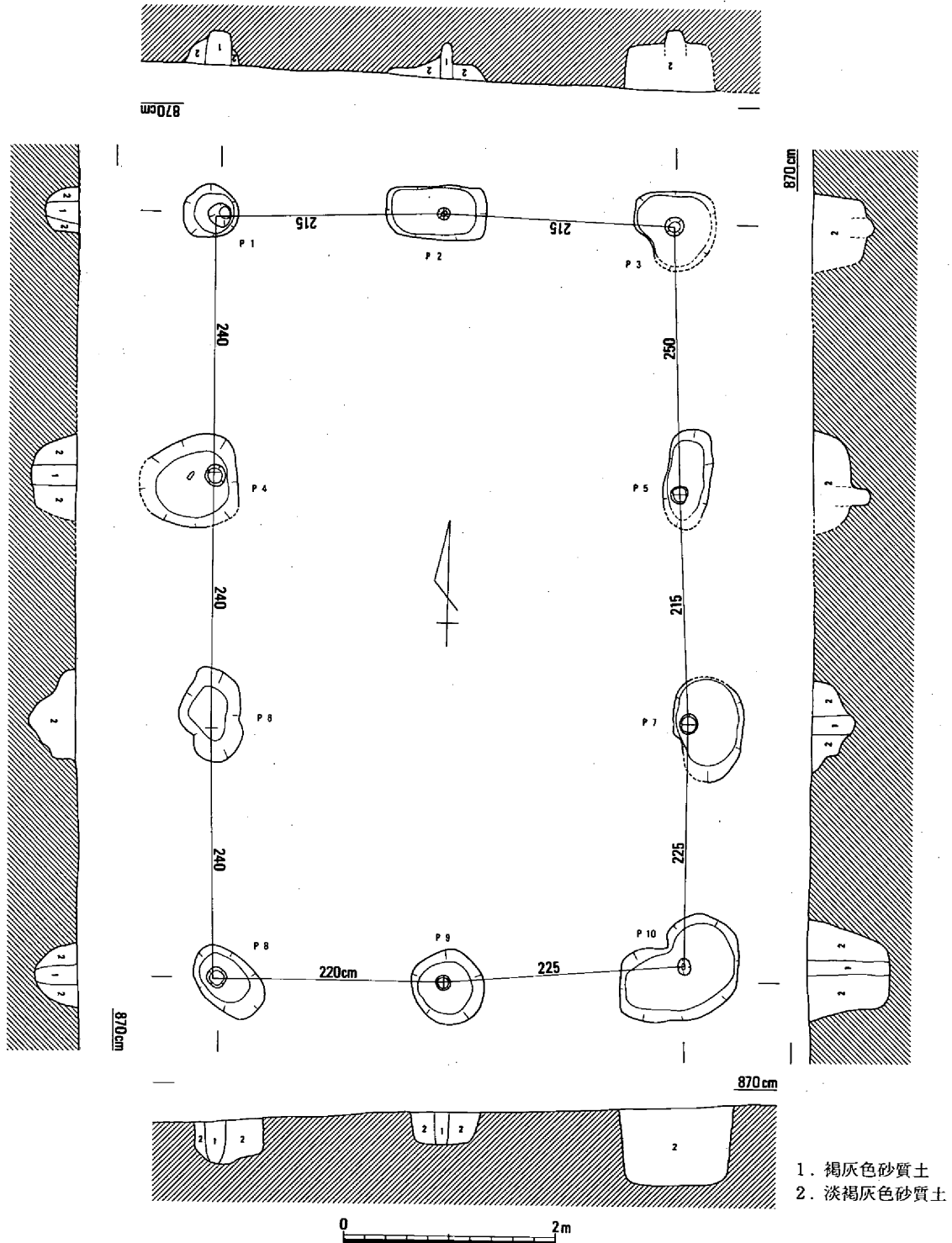


第216図 建物64 (1/60)

に、P 9から鍛冶滓が出土している。土器のうち2201・2204はP 5、2203はP 7、2202はP 4から出土している。図示した土器の時期は奈良時代であろうが、建物の時期は奈良時代～平安時代前期の幅で考えている。なお、後述する溝193はこの建物に伴う可能性がある。(平井)

建物68(第210・220図、図版16・17-1)

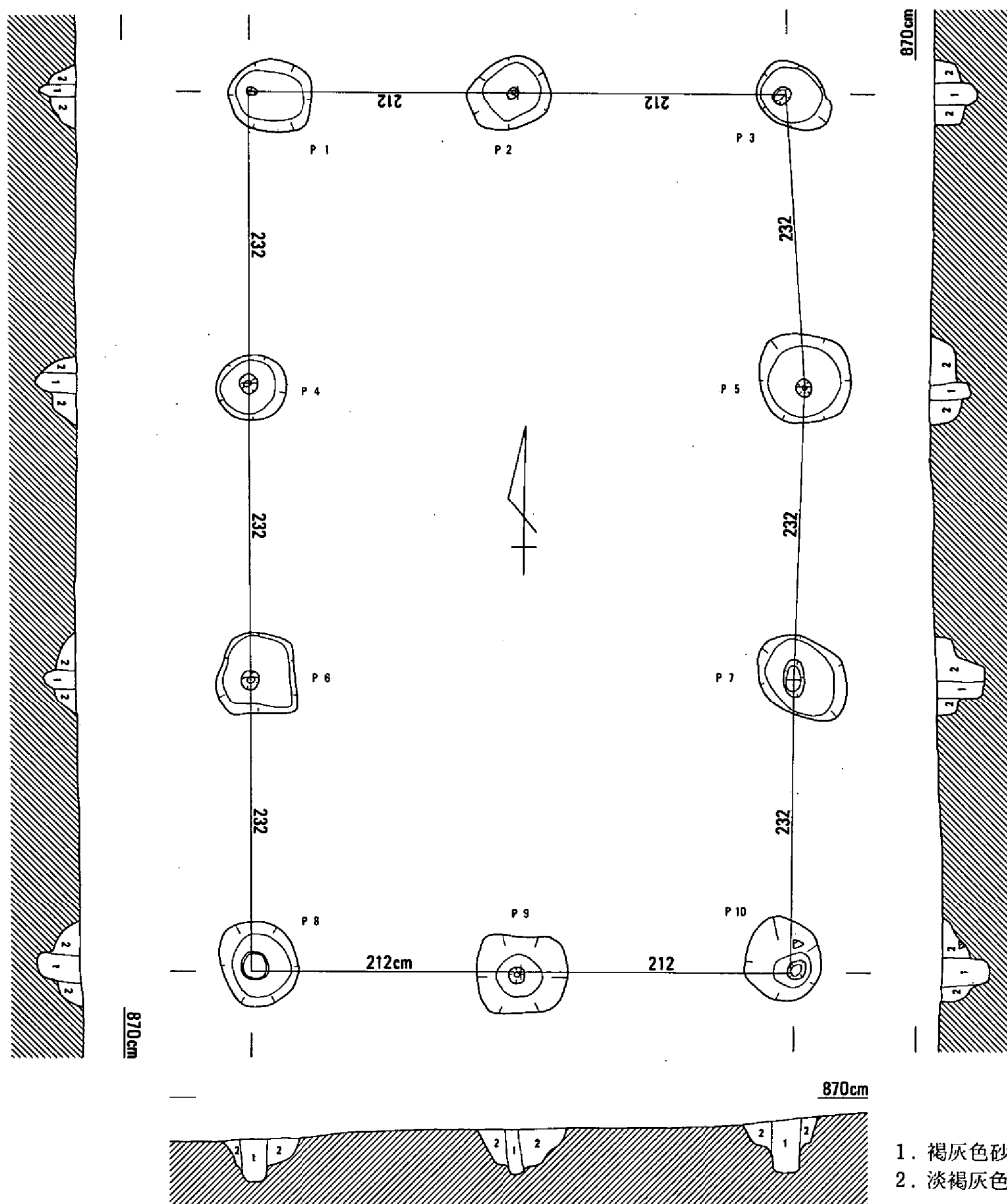
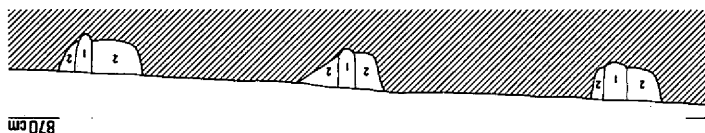
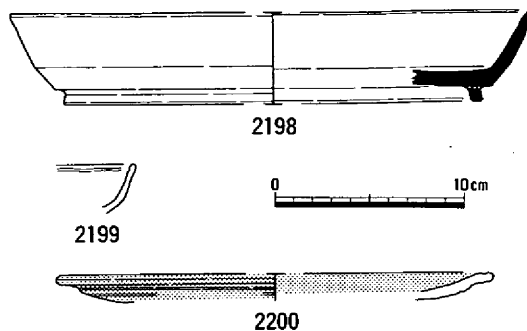
YA 2 A区の中央部で検出した掘立柱建物である。建物63～67と同じく、平安時代中期の遺構検出面になっている土層を掘り下げ中に柱穴は検出できた。柱穴埋土の識別は、建物63～67と比べると容



第217図 建物65 (1/60)

第3章 発掘調査の概要

易であった。柱穴の掘り方の平面形は、方形が多いが、楕円形や円形のものもあった。建物の規模は3×2間で、建物63～67とは異なって総柱構造である。桁行405cm、梁間350cmで、柱間隔は規則的である。P4はトレンチのためにごく一部が検出できたにすぎない。柱痕跡が確認できた柱穴が多く、P12には柱材(ヒノキ)そのものも残存しており、それらによると柱は直径25～30cm前後の



- 1. 褐灰色砂質土
- 2. 淡褐灰色砂質土

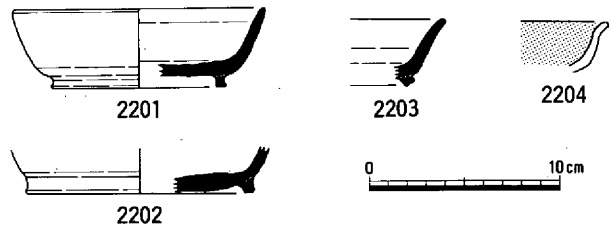
0 2m

第218図 建物66 (1/60)・出土遺物 (1/4)

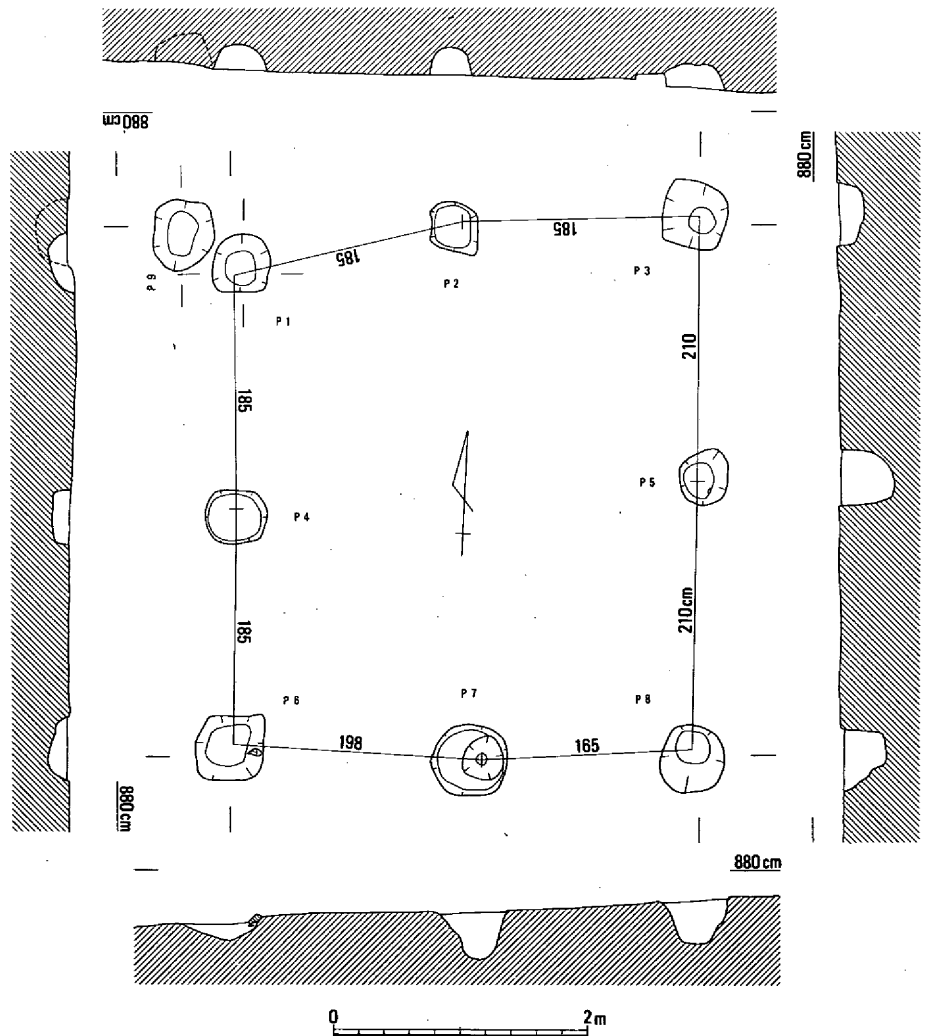
円柱と推測できる。このように柱が他の建物に比べて太いことや総柱構造であることから、この建物は倉庫と考えておきたい。方向は建物65～67と同じく磁北を意識しているように思われる。柱穴の埋土中からは少量の土器片のほかに、P5・9から鍛冶滓が出土している。またP11の底面には長さ10～20cmの杭状の木材が放射状に検出でき、柱の下に意識的に据えられたものと考えられる。規模的には建物67と近似しており、両者は位置関係から同時存在は考えにくい。建て替えの関係にあるのではなかろうか。時期を明確にできる遺物は出土していないが、奈良時代～平安時代前期の幅で捉えておきたい。なお後述する溝192・195はその位置関係から、この建物に伴う可能性が高いと考えている。 (平井)

建物69(第221・222図、巻頭図版4-1)

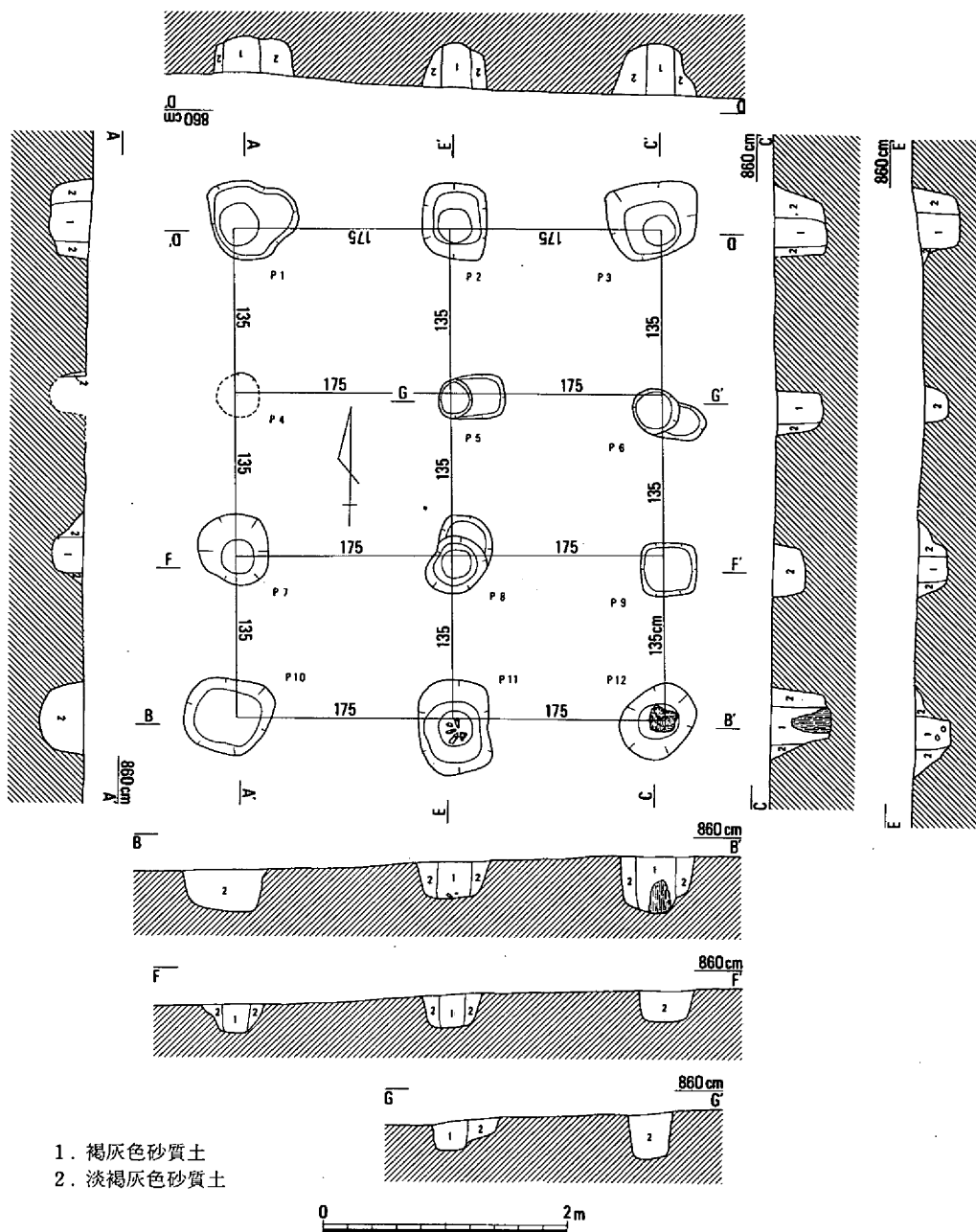
YA2A区の中央部において検出した掘立柱建物である。灰白色粘土の中世包含層を除去した面で柱穴は検出できた。また柱穴の埋土は灰黒色砂質土で、建物63～68の柱穴とは異なって識別は容易であった。柱穴の平面形は20～30cm前後の円形や楕円形で、深さは20～30cm前後残存していた。柱穴の規模は建物63～68に比べて小さく、柱の



太さより特別に大きい掘り方は存在していない点に特徴がある。建物の規模は5×2間で、西側に長さ5間の底を伴うと考えている(第221図P1～18)。ただし東側に底があったかどうかについては、調査区の幅が狭いため不明確な点もあるが、P18の東側には西側の底の柱穴と同じ距離の位置には柱穴は検出できなかった。桁行の長さは12.34m、梁間の長さは4mである。柱はほぼ直



第219図 建物67 (1/60)・出土遺物 (1/4)



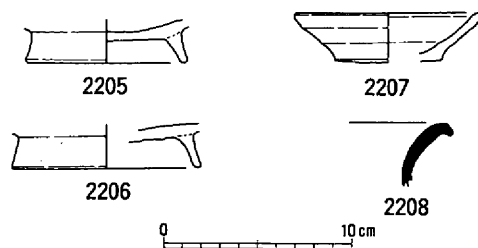
第220図 建物68 (1/60)

線的に並んでおり、柱間間隔についても規則的であるといえよう。建物の方向は磁北を意識しているように思われる。柱穴の埋土中からは少量の土器片が出土しており、時期は平安時代中期頃であると考えている。

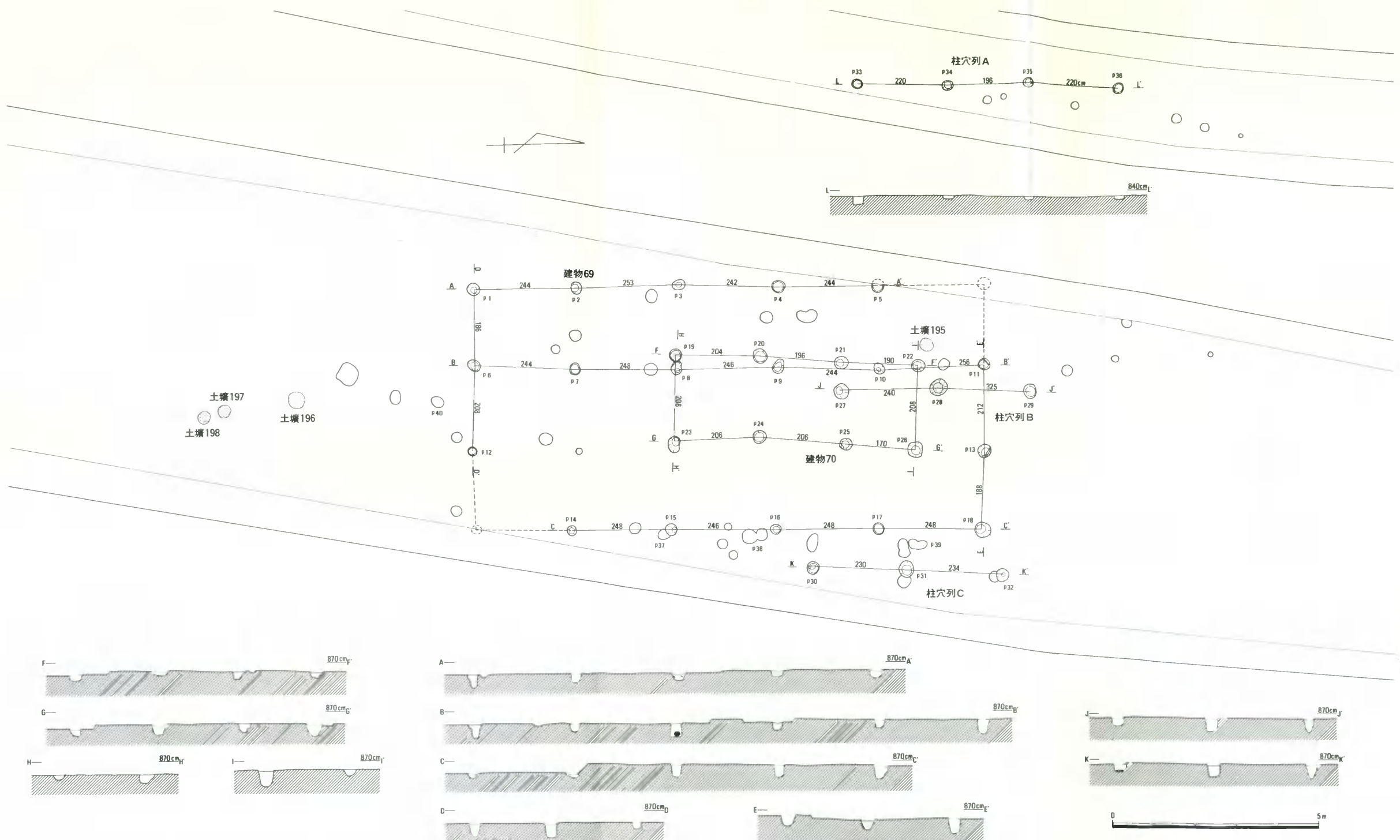
(平井)

建物70(第222・223図、巻頭図版4-1・図版17-2)

YA2A区の中央部において建物69と重複するかたちで検出できた掘立柱建物である(P19~26)。ただし図示しているように、柱は直線的には並んでいないため、これらの柱穴は建物を構成しない可能性も考えられる。またP23~26についてはその位置関係から、建物69の母屋に関する柱穴であるとも考えることもできる。遺物は



第221図 建物69出土遺物 (1/4)



第222图 建物69・70、柱穴列A・B・C、土坑195~198 (1/80)

2209(破片)がP 26から出土したほかに、南西隅の柱穴P 19内には、第222図に示したような状態で土器2210~2214や漆塗り?の木器が出土している。

2210~2213

はほぼ完璧で、2214

は小破片である。性格

については明確ではない。土器の時期

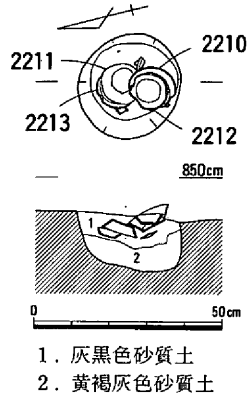
は平安時代中期であ

らう。また漆塗り?

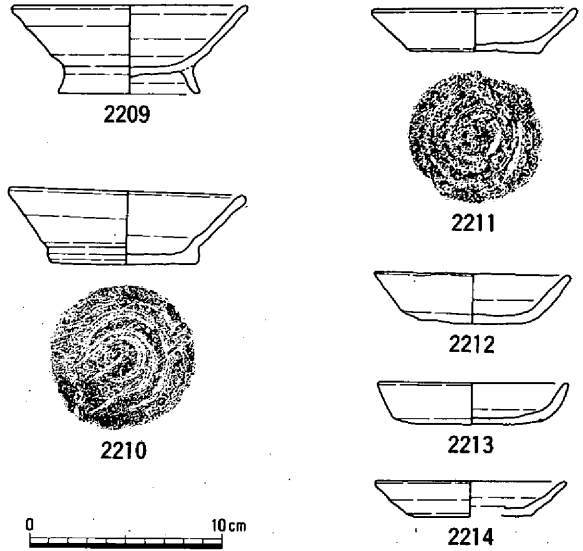
の木器については残

存状態が悪く、器種

などは不明である。



第223図 建物70、P-19 (1/20)・出土遺物 (1/4)

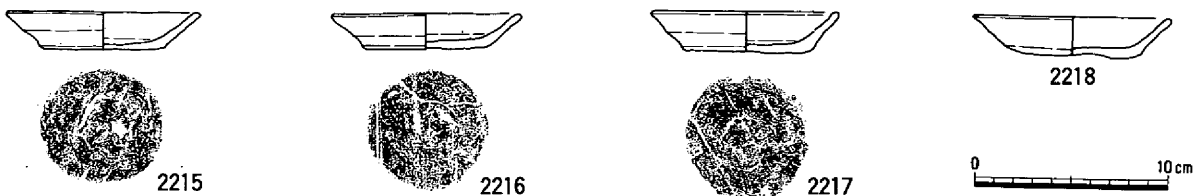
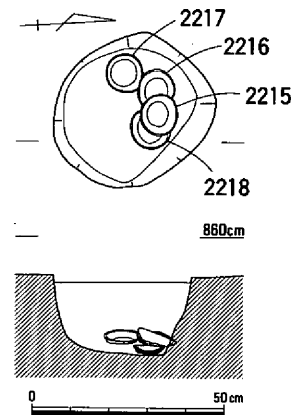


なおP 37~39はその位置関係からこの建物に関係する柱穴であるかもしれない。

ところで建物69・70の周辺には同時期と考えられる柱穴が30個あまり検出できており、ほぼ直線的に並ぶ柱穴について「柱穴列」A・B・Cとして第222図に示している。これらの方向は基本的に建物69と一致しているといえよう。柱穴列Aについては側溝のために検出できていないが、南側にのびる可能性がある。柱穴列BのP 28には第224図に示しているように完形の土器が4点出土しているが、性格はよくわからない。

またP 40には礎石が存在していた。

(平井)

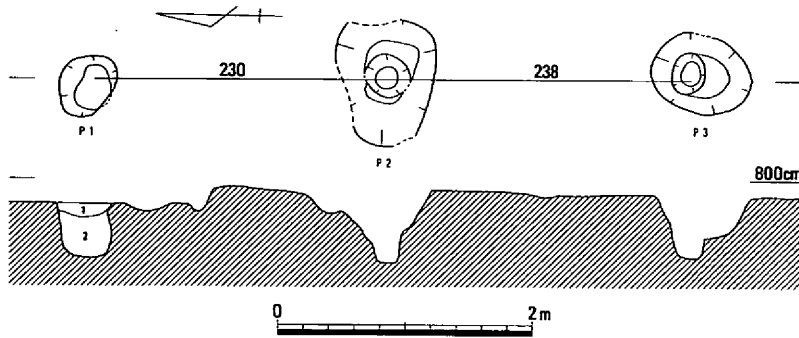


第224図 柱穴列B、P-28 (1/20)・出土遺物 (1/4)

建物71(第225図、図版17-3)

YA 3区中央の微高地上に位置する。調査当初はP 2・3の2本しか検出しておらず、単独の柱穴としか認識していなかった。しかしベースを下げた時点でP 1を検出し、同じ軸線上にはほぼ等間隔で並ぶことと底面のレベルが7.32~7.37mに揃うことから、同一の建物を構成する柱と考えた。P 1は検出面が低いいため形状が異なるが、本来はP 2のようなやや角のある楕円形を呈していたと想定される。P 1より北は調査区外となるため柱穴の有無を確認することができなかった。時期の特定できる遺物は出土していないが、軸方向がYA 2 A区微高地上の建物63~66と同じくほぼ南北方向をとり、柱穴の形状も似ていることから同時期に建てられた可能性が考えられる。また、建物66の桁側の柱間と当建物の柱間はほぼ同規模で、共通性が高い。(久保)

第3章 発掘調査の概要

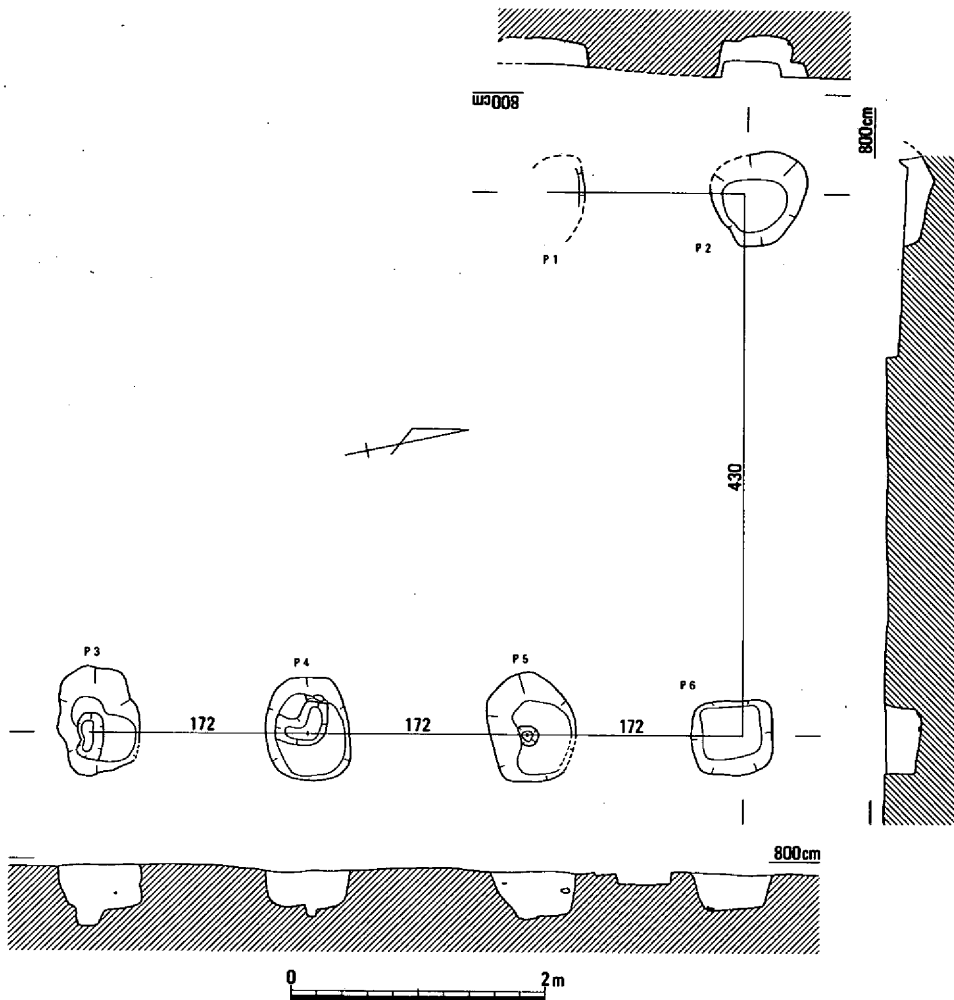


- 1. 暗茶褐色砂混じり粘質土 (砂多)
- 2. 暗灰褐色砂混じり粘質土

第225図 建物71 (1/60)

建物72(第226図、図版18-1)

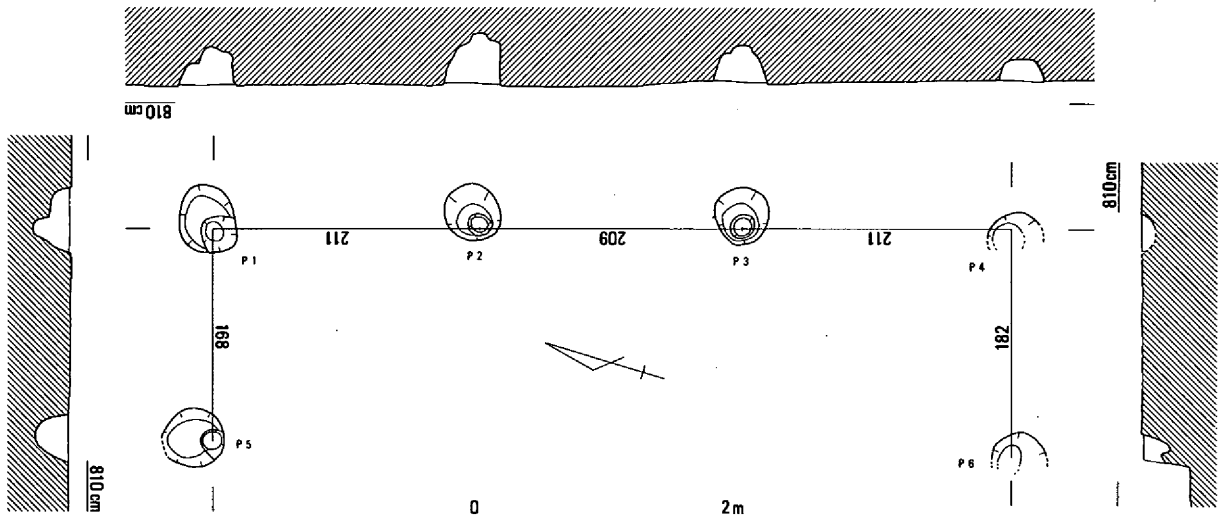
建物71の南に位置する。P 3～6の軸で、磁北より約12度東へ振り、建物71より若干東に傾いている。西南側は調査区外となり全容は不明であるが、東辺のP 3より東に柱穴がないことから南北に棟の伸びる3×1間の建物と推定した。桁側の柱間距離は全て172cmに揃っているが、梁間は丁度この数値を2.5倍したものにあたり、規格性の高い建物といえる。各柱穴の形態は不整形であるがやや角張った部分が認められ、P 6はほぼ方形を呈している。底面の海拔高はおおよそ7.85mで、P 3～5は



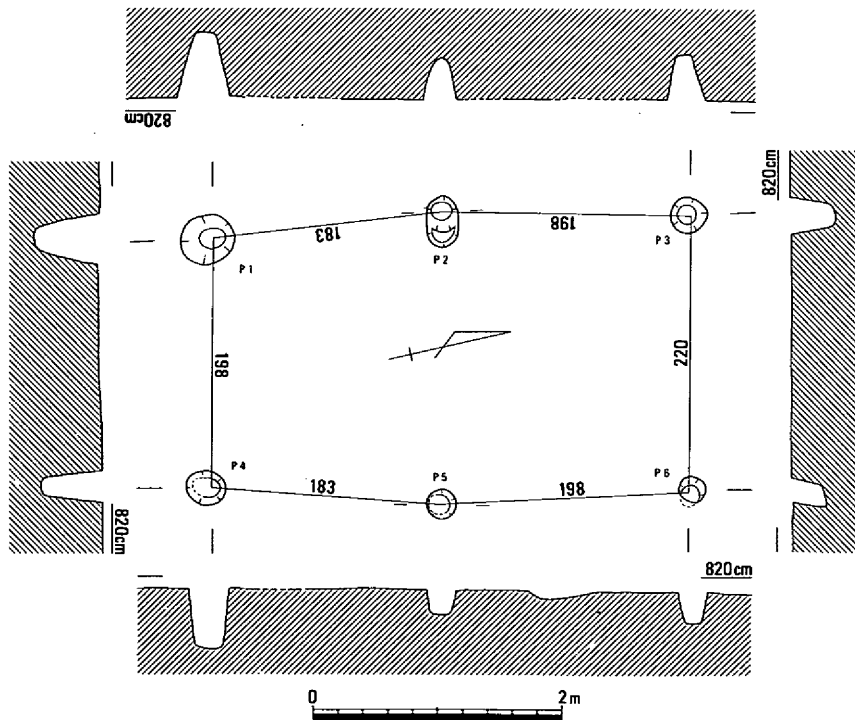
第226図 建物72 (1/60)

柱痕部分が若干沈んでいる。当建物からも時期の特定できる遺物は出土していないが柱穴形態の類似や棟方向が南北をとることから、建物71と同じくYA2A区微高地上の建物63~66との関連が想定される。しかし、両者の軸がずれることや近接しすぎていることから併存していた可能性は低い。(久保) 建物73(第227図、図版18-2)

建物72の南に位置する。西側が調査区外となり、東西1間、南北3間分検出している。東西側の柱間の間隔が南北側より短いことから、南北に棟方向をもつ3×2間の規模を有すると想定される。桁側のP1~4の柱間隔はほぼ揃っている。主軸は磁北から約17度西へ振っている。柱穴は直径45cm前



第227図 建物73 (1/60)



第228図 建物74 (1/60)

後の円形で、底面の深さは7.6~7.7mを測る。P1~3では直径約20cmの柱痕が確認された。時期の特定できる遺物の出土はないが、須恵器細片が出土している。また、南溝手遺跡において奈良時代以降中世の間に堆積したと考えられる水田層や素掘溝群などによく似た灰色味の強い土で埋没しており、平安時代に属する可能性が高い。(久保)

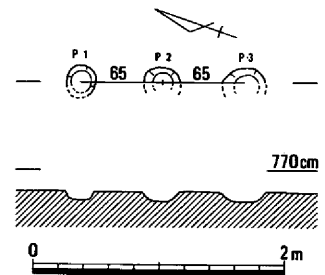
建物74(第228図)

YA3区中央の微高地上で、建物71の北西に位置する。南北に棟をとる2×1間の建物で、主軸は磁北から約10度東へ振っている。柱穴の大きさは直径20~40cmとバラツキがあり、底面の海拔高は角に有るP1・3・4・6が7.6~7.7mと比較的深いのに対して、桁行の中間にあたるP2・5は7.8~7.9mと浅く、構造上の特徴を示していると考えられる。調査途上で建物と判断したため詳細な土層観察は行っていないが、上面には中世以降の耕作土と同様の黄灰色~褐黄色の砂質土が堆積していた。また、各柱穴から中世と考えられる土器細片が出土している。(久保)

建物75(第229図、図版18-3)

やや西に振る南北方向に3本の柱穴が並んで検出された。柱間は65cmとあまりに狭く、建物と断定するには無理があるが、小規模な建築遺構の可能性を考慮して建物として扱った。柱掘り方は径約20~30cm前後の円形を呈し、深さは10cm未満ときわめて浅い状態で検出された。

出土遺物は皆無であるが、検出層位や埋積土などから中世の可能性が高いと判断しているが、付近に同時期の遺構は存在しない。(岡田)

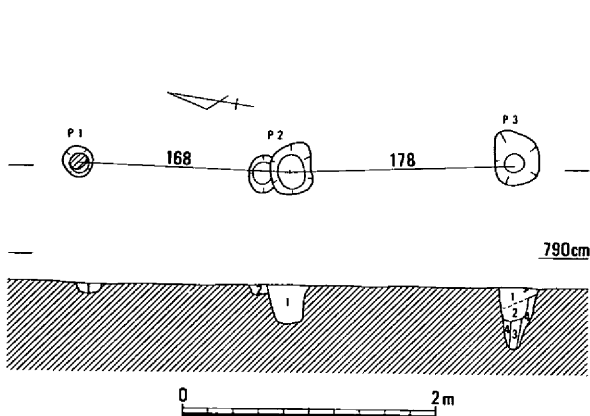


第229図 建物75 (1/60)

建物76(第230図)

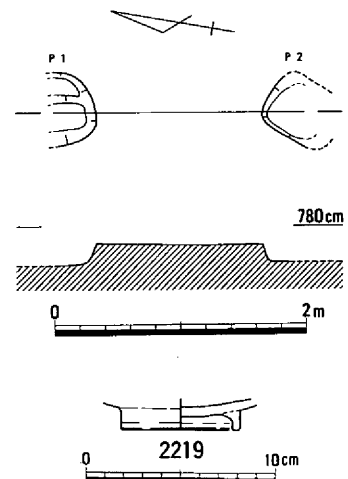
ほぼ南北方向に検出された3本の柱穴からなる掘立柱建物の一部とみられる柱穴列である。P1・P3には明瞭な柱痕跡が認められている。柱穴の掘り方はまちまちで、P2・3は不整なしかもいびつな円形を示している。周囲の状況からみると南北それぞれの延長部に柱穴が検出されていないので、建物の梁行部分と考えて良いだろう。

時期的には出土遺物が皆無であるが、中世に比定される可能性が高い。(岡田)



1. 暗灰褐色粘質土 2. 灰褐色粘質土 3. 暗灰色粘土 4. 黄灰色粘質土

第230図 建物76 (1/60)



第231図 建物77 (1/60)・出土遺物 (1/4)

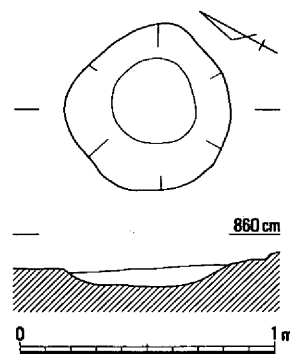
建物77(第231図)

建物76の南東方向約40mで検出された2本の南北方向の柱穴列である。建物の規模はかなり大形と推定できる。出土遺物には、P2から出土した土師質土器碗2219がある。全形は不明であるが、いわゆる早島式土器で鎌倉時代に比定できるものである。建物も同時期と推定される。(岡田)

(2) 土 壙

土壙193(第232図)

YA2A区の北半部、建物63・64の北において検出した。平面形は直径60cm前後の円形で、深さは約10cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は灰白色微砂と炭を含む褐灰色砂質土が一層のみであった。この形状から柱穴ではないであろう。遺物は弥生時代中期の土器片が出土したのみではあるが、検出面や埋土から建物63～68などと同じ奈良時代～平安時代前期頃と考えている。(平井)



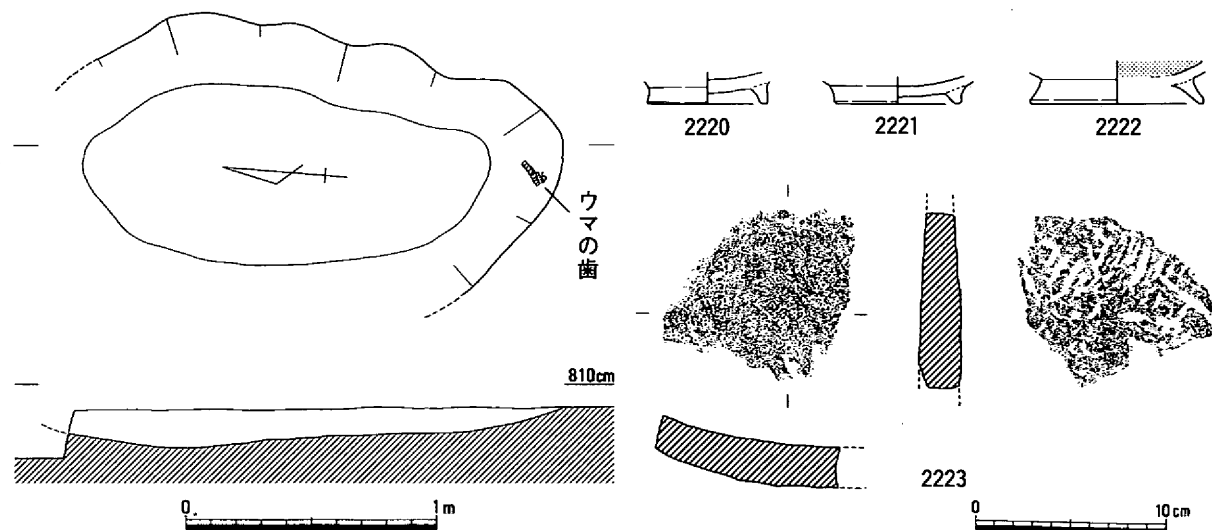
第232図 土壙193 (1/30)

土壙194(第233図)

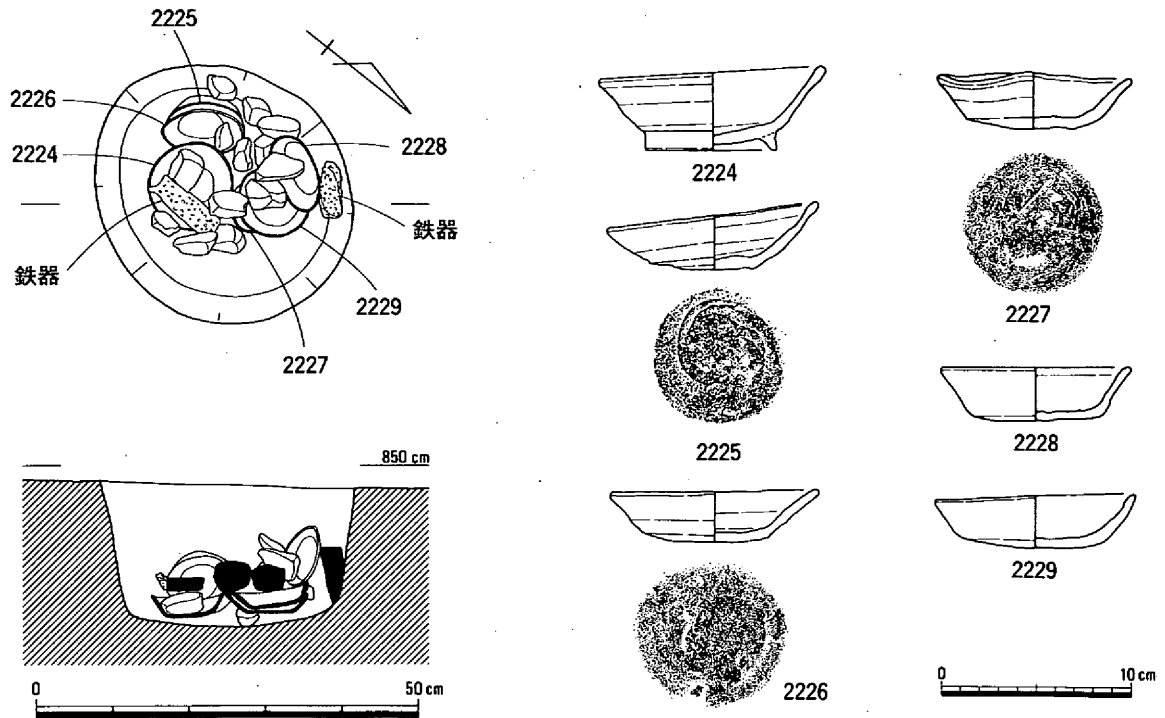
YA2A区の中央部、建物69の北において検出した。西側の一部は不明確ではあるが、平面形はおそらく長楕円形で、深さは約15cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は炭や焼土を含む灰褐色砂質土が一層のみであった。遺物は少量の土器片や瓦片が、また南端の肩部からはウマの下顎臼歯列が出土している。土器は建物69や溝202出土土器に類似しており、時期は平安時代中期であろう。(平井)

土壙195(第222・234図、巻頭図版4-2)

YA2A区の中央部において建物69と重複するかたちで検出した。平面形は36×32cmの楕円形で、深さは19cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は黒灰色砂質土であった。この土壙内からは図示したようなかたちで、土器・鉄器・河原石が出土した。土器は5点出土し、いずれもほぼ完形品で、2224・2227・2229は底を下にし、また2227・2229は重ねた状態であった。それ以外の3点は立てた状態で、そのうち2225・2226は重ねた状態で出土した。鉄器は2点出土した。板状の形態を示していた



第233図 土壙194 (1/30)・出土遺物 (1/4)

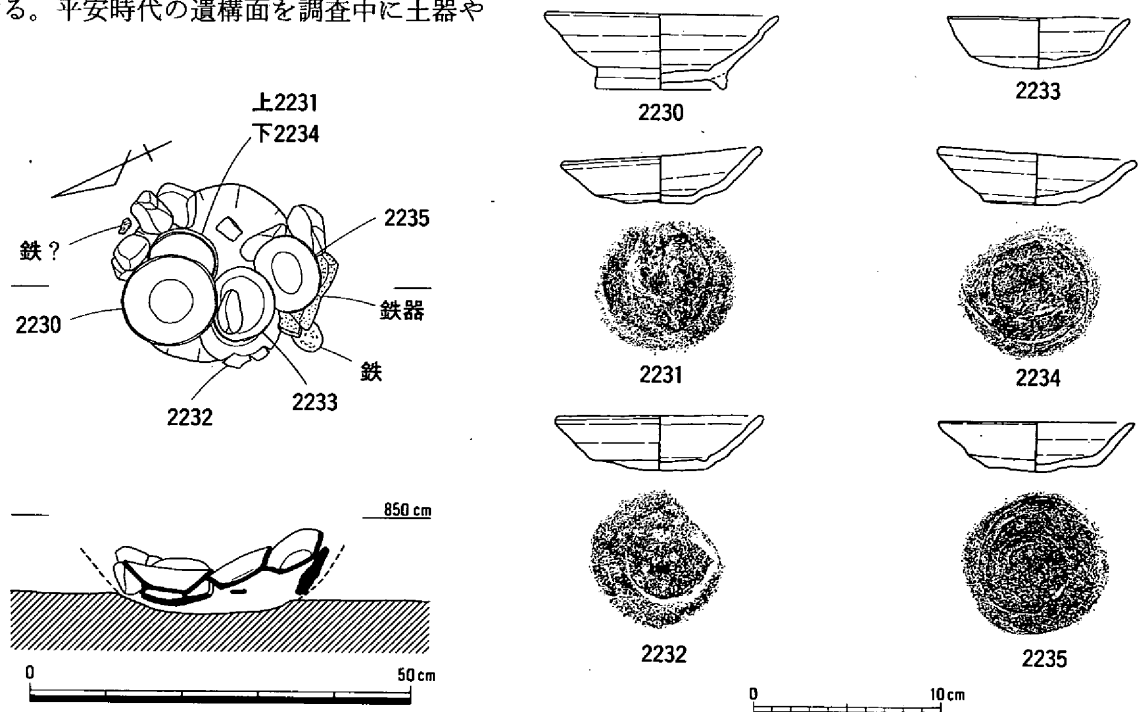


第234図 土壌195 (1/10)・出土遺物 (1/4)

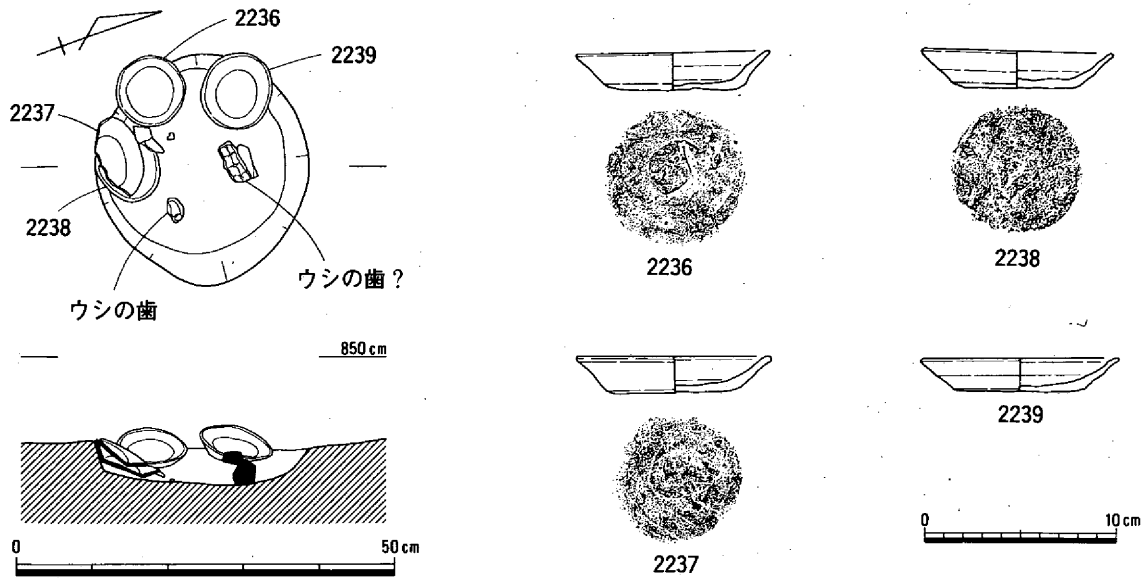
が、いずれも錆が著しく器種は確定できなかった。また北側の鉄器は意識的に壁に立てかけられているように観察できた。河原石は10数個あり、土器や鉄器の間に不規則に存在していた。これらの遺物については、何らかの祭祀に用いられた後にこの穴(柱穴の可能性もある)に納められたのではなかろうか。土器の時期は平安時代中期と考えている。(平井)

土壌196(第222・235図、図版19-1)

YA2A区の南端部、建物69の南に位置する。平安時代の遺構面を調査中に土器や



第235図 土壌196 (1/10)・出土遺物 (1/4)

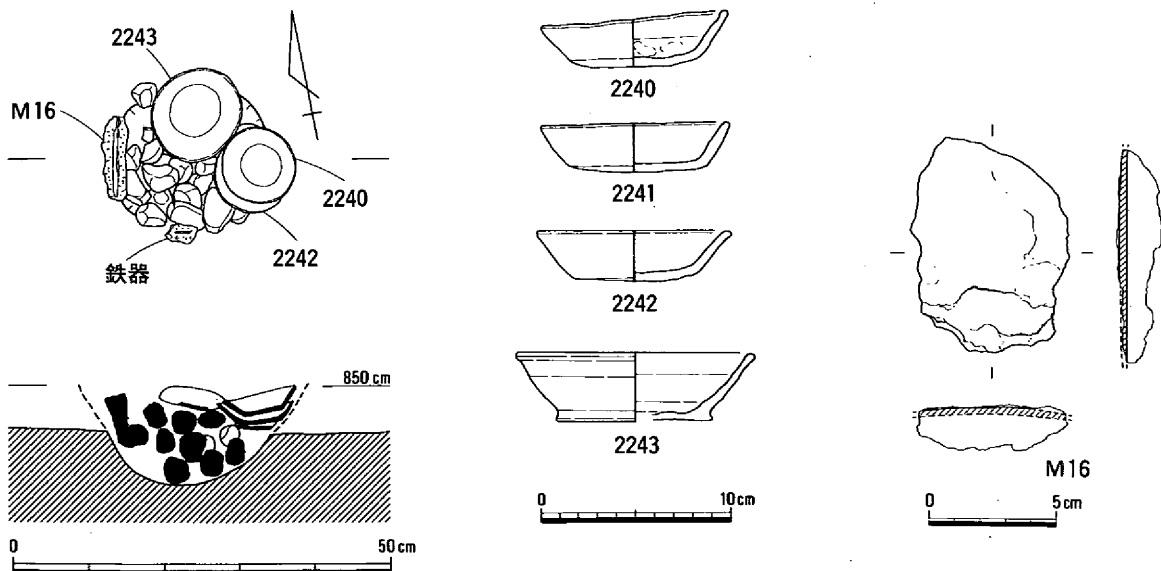


第236図 土壌197 (1/10)・出土遺物 (1/4)

河原石がまとまって出土したため、周辺を精査したが明確な遺構は検出できなかった。しかしながら遺物を取り上げた後にわずかではあるがくぼみが確認できたため、本来は土壌の中に遺物が納められていたものと推測している。埋土は黒灰色砂質土である。遺物は土器、鉄器・鉄、河原石がある。土器は6点出土し、いずれもほぼ完形品である。2231と2234は底を下にし、重ねられていた。その他の土器は底を下にし斜めになっていた。鉄器は南東隅に立てかけられており、板状の形態であったが錆のために器種は不明である。鉄としたものは淬か錆と判断している。河原石は7個で、特に規則性は認められない。遺物は何らかの祭祀に用いられた後に、納められたのではなかろうか。土器の時期は土壌195と同じで、平安時代中期と考えている。 (平井)

土壌197(第222・236図、図版19-2)

YA2A区の南端部、土壌196の南において検出した。平面形は31×28cmの楕円形で、深さは約5cm残存していた。埋土は灰黒色砂質土である。遺物は土器や河原石の他に、老齢のウシの上顎前臼歯が



第237図 土壌198 (1/10)・出土遺物 (1/4・1/3)

第3章 発掘調査の概要

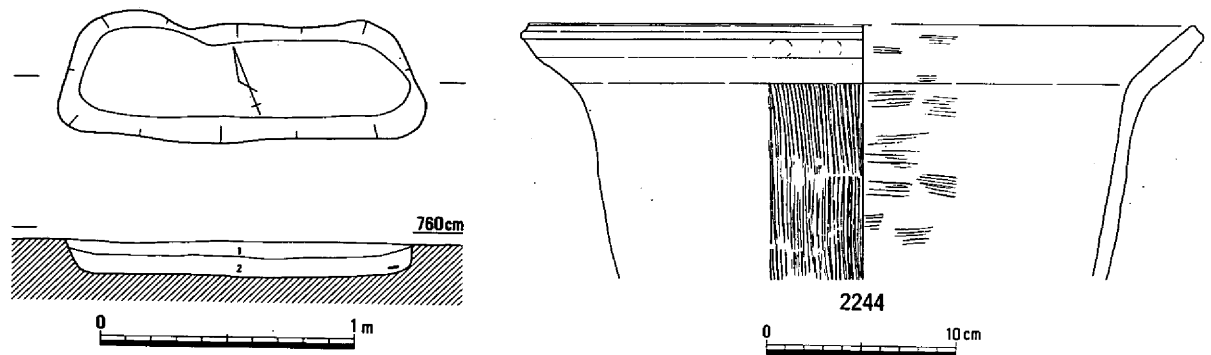
出土している。土器は4点出土し、2237が調査中に口縁部の約1/4を欠損した他は、いずれもほぼ完
品であった。これらは土壇の西端部に底を下にして斜めに置かれていた。河原石は1個出土したにす
ぎない。土器の時期は土壇195・196と同じく、平安時代中期と考えている。(平井)

土壇198(第222・237図、図版19-3)

YA2A区の南端部、土壇197の南に位置する。土壇196と同じく平安時代の遺構面を調査中に土器
や鉄器、河原石が出土したが、その時点では遺構は検出できなかった。しかしながら遺物の取り上げ
中に図示したようなくぼみが検出できたため、遺物は本来土壇の中に納められていたものと判断して
いる。埋土は黒灰色砂質土で、遺物は土器、鉄器、河原石が出土した。土器は4点で、いずれも底を
下にしており、ほぼ完品であった。2241は2242の下に重ねられていた。M16は板状の鉄器で、西端部
に立てられていた。南端部から出土した鉄器は錆が著しく、器種は不明である。河原石は20個前後
で、いずれも土器より下からまとまって出土している。こうした出土状況から遺物は、土壇の底に河
原石を敷き詰めた後、その上部に土器と鉄器を意識的に据えたものと考えている。ただし目的はよく
わからない。土器の時期は土壇195~197と同じく、平安時代中期と考えている。(平井)

土壇199(第238図)

YA2B区の北端部において検出した。平面形は約140×50cmの長方形で、深さは約15cm残存し
ていた。埋土は二層に分離でき、炭や焼土を含んでいた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期
は平安時代中期であると考えられる。(平井)



1. 暗褐色粘質土 (炭、焼土多く含む) 2. 灰黄色粘質土 (炭粒少量含む)

第238図 土壇199 (1/10)・出土遺物 (1/4)

土壇200(第239図)

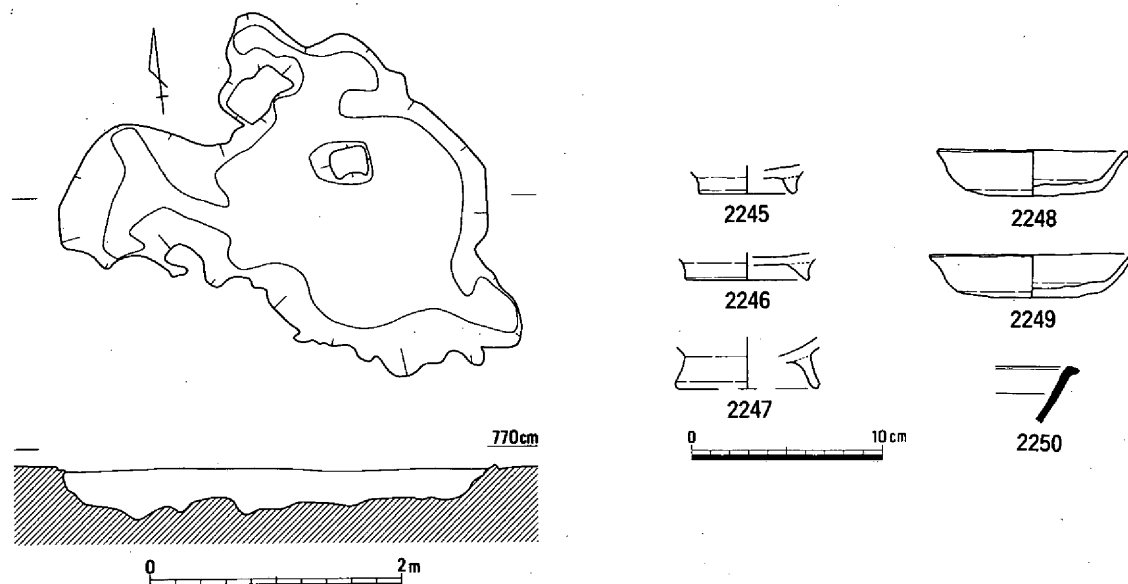
YA2B区の北端部、土壇199の南東部において検出した。平面形は図示したように不整形で、深さ
は約40cm残存していた。埋土は小礫を含む灰色粘質土で、底面には多くの凹凸が認められた。遺物は
少量の土器片の他に鍛冶滓が出土しており、時期は平安時代中期であると考えている。(平井)

土壇201(第240図)

YA5区に位置する。1m×80cmの不整楕円形で、南側が一段低くなっている。中央部の底面の海
抜高は7.68mを測る。南端に柱穴上の凹みがあるが、この位置は断面の2層と対応し、別の柱穴が切
り合っていると考えられる。細片のため図化し得なかったが、土師質碗の高台片および丹塗の杯片が
出土しており、古代と考えられる。(久保)

土壇202(第241図)

土壇201の南に位置する。75cm×60cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平らで、海拔高は7.77mを測



第239図 土壙200 (1/10) : 出土遺物 (1/4)

る。遺物は出土していないが、土壙201と同じ茶褐色粘質土で埋没しており、土壙201と同時期である可能性が高い。(久保)

土壙203(第242図)

最大検出幅約2.5m、深さ約30cmあまりの浅いたわみ状の土壙である。壙底は比較的平坦で、土壙の堆積状況は最下層に青灰色粘土、中層に黒灰色粘土、上層に青黒色～暗青色粘土が埋積していったことが確かめられた。

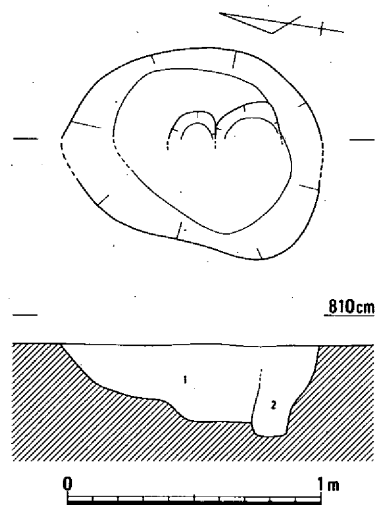
出土遺物は小片のみで図化できるものは皆無であったが、古代それも平安時代の時期的範囲におさまる可能性が高いと推定される。(岡田)

土壙204(第243図)

YA3区中央の微高地上で、建物74の西に位置する。上面95cm×74cmの楕円形だが北西部が一段楕円形に低くなっており、2つの遺構が重複している可能性も考えられる。底面の海拔高は上段で8.07m、下段で8.0mを測る。埋土から早鳥式と呼称される土師質高台碗片が出土しており、中世と考えられる。土壙東半が建物74の身舎内にかかるが、時期は細かく特定できず、両者の関係は明らかでない。(久保)

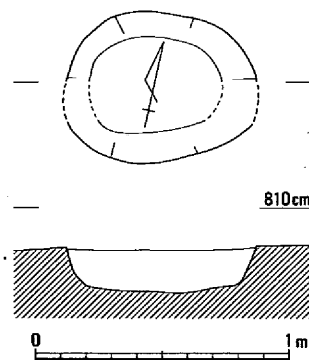
土壙205(第244図)

土壙204の南に位置する。東側は調査区外となり不明であるが、南北長150cmで、円形か楕円形を呈すると想定される。断面U字の比較的深い土壙で、底面の海拔高は7.5mを測る。図示していないが白磁碗の口縁部片が出土しており、中世と考えられる。(久保)

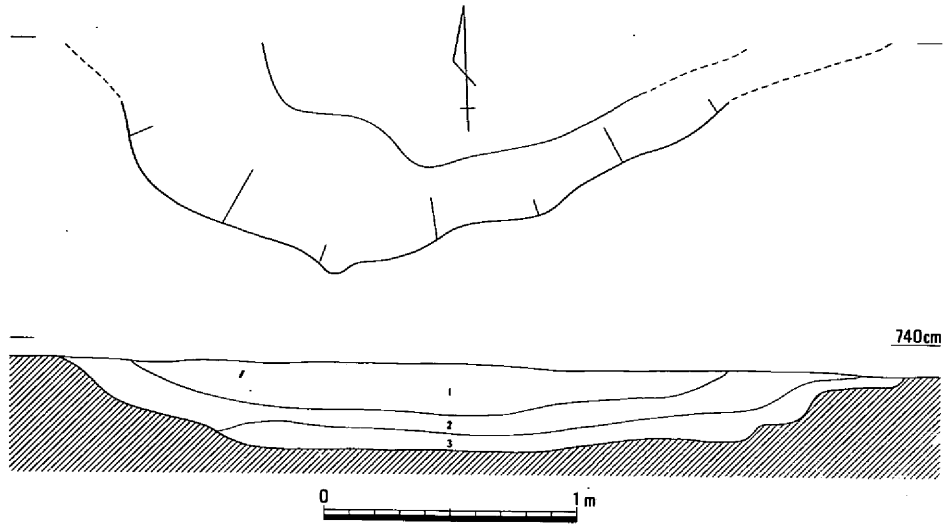


1. 茶褐色粘質土 2. 暗茶褐色粘質土

第240図 土壙201 (1/30)

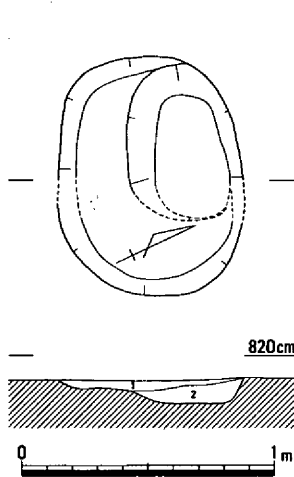


第241図 土壙202 (1/30)



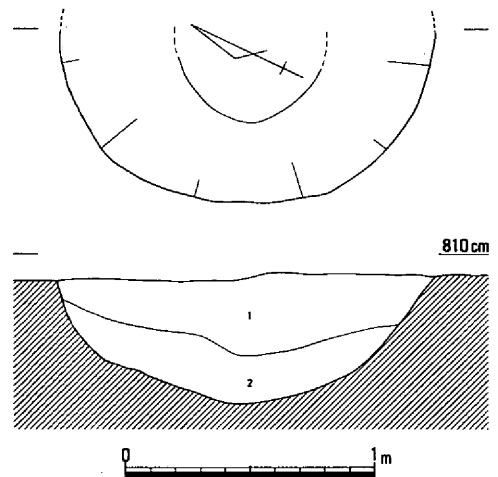
1. 青黒色～暗青色粘土 2. 黒灰色粘土 3. 灰黄混じり青灰色粘土

第242図 土壌203 (1/30)



1. 灰褐色砂質土 2. 黄褐色砂質土

第243図 土壌204 (1/30)



1. 黄灰色粗砂混じり粘質土 2. 緑灰色粗砂混じり粘質土

第244図 土壌205 (1/30)

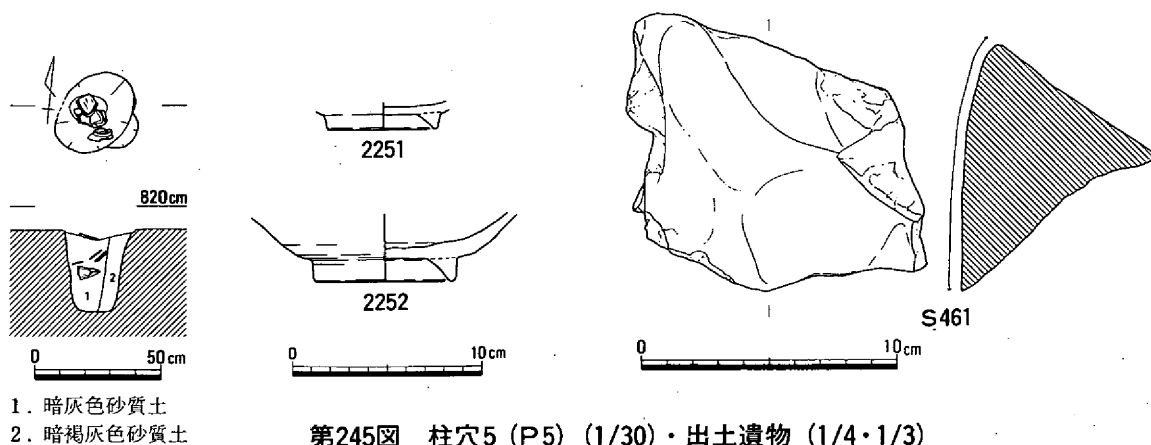
(3) 柱 穴

柱穴 5 (第245図)

Y A 3区中央の微高地上で、建物71の西に位置する。35cm×27cmの楕円形で、深さ32cm、底面の海拔高7.78mを測る。西寄りに直径約15cmの柱痕が確認され、柱痕内から土器や砥石 S461が出土している。2251は内面黒色の高台椀で、平安時代と考えられる。(久保)

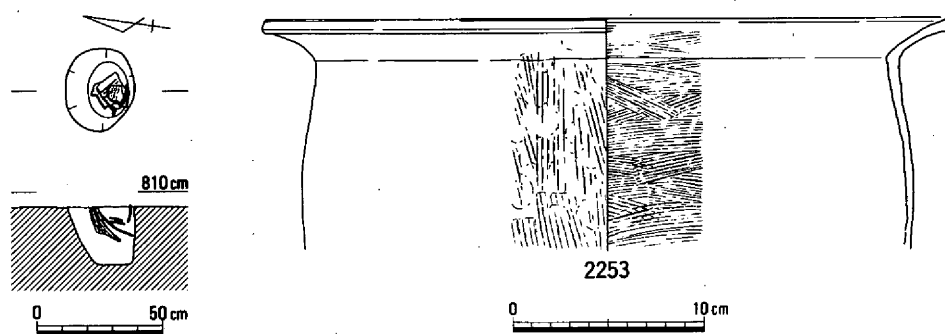
柱穴 6 (第246図)

柱穴 5の南に位置する。31cm×25cmの楕円形で、深さ24cm、底面の海拔高7.81mを測る。断面では捉えられなかったが平面において直径約17cmの柱痕を検出しており、柱痕内に押し潰れた状態で2253が出土した。時期は古代～中世と考えられる。(久保)



1. 暗灰色砂質土
2. 暗褐色灰色砂質土

第245図 柱穴5 (P5) (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

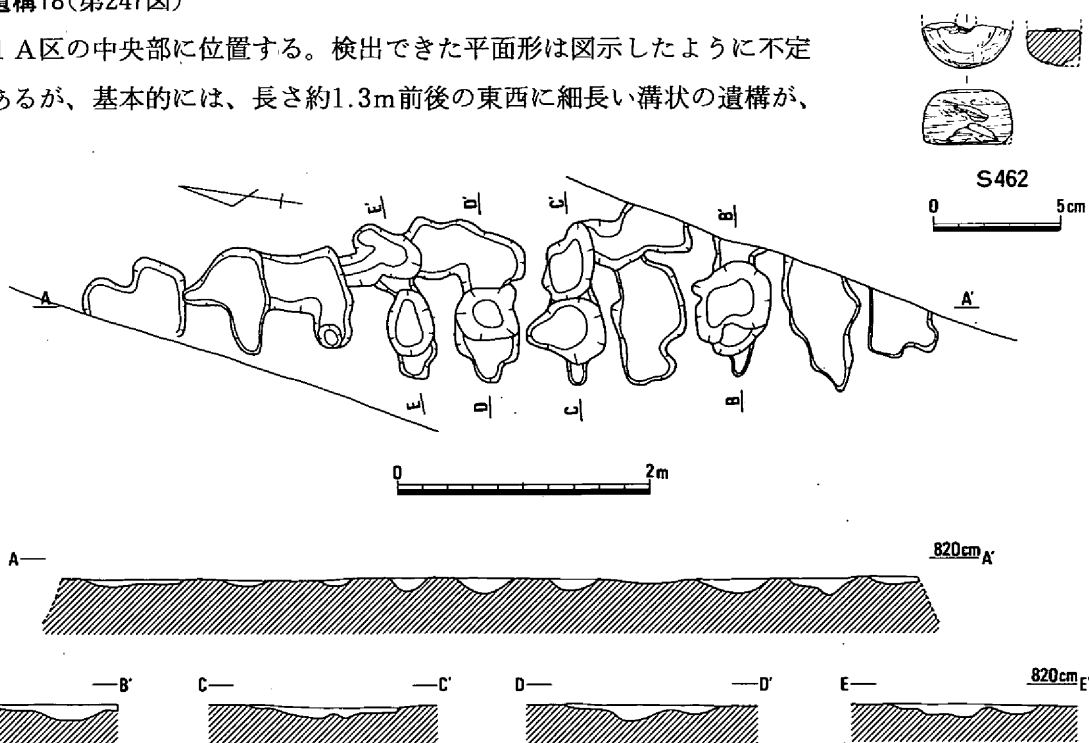


第246図 柱穴6 (P6) (1/30)・出土遺物 (1/4)

(4) 柵列状遺構

柵列状遺構18(第247図)

HC 1 A区の中央部に位置する。検出できた平面形は図示したように不定形ではあるが、基本的には、長さ約1.3m前後の東西に細長い溝状の遺構が、



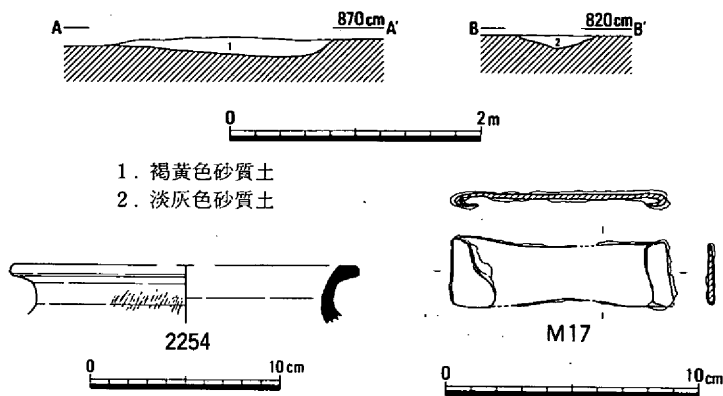
第247図 柵列状遺構18 (1/60)・出土遺物 (1/2)

50cm前後の間隔で南北に並んだ遺構と考えている。また東西に細長い溝状の遺構については、残存状態の良いものには東西に二か所くぼみが確認できた。埋土は淡灰色砂質土である。柵列状遺構とはしているが、杭の痕跡は認められず、溝の底の部分のみが残存した遺構と考えている。遺物は少量の土器片と滑石製紡錘車S462が出土した。S462はE-E'断面の西半部から出土しているが、古墳時代のもので、混入品と考えている。時期を特定できる遺物は出土していないが、溝191・197・198に関連するものと考えて、奈良時代～平安時代前期と理解している。(平井)

(5) 溝

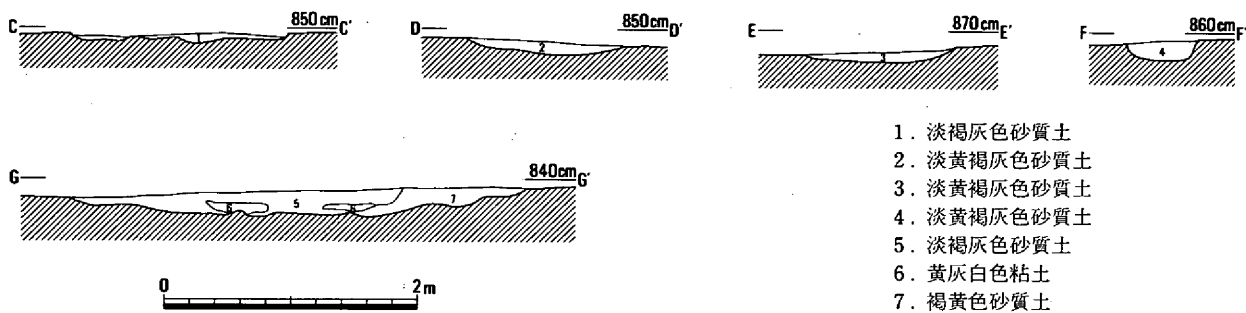
溝191(第210・248図)

YA2A区とHC1A区の北端部において検出した溝で、形状や深さは異なっているが、その位置関係から同一の溝であると判断している。底の海拔高はYA2A区で8.3～8.5m、HC1A区で8.1m前後であった。遺物は土師器、須恵器などの少量の土器片の他に、YA2A区からは鉄鎌M17や



第248図 溝191断面図(1/60)・出土遺物(1/4・1/3)

鍛冶滓が出土している。時期を特定できる遺物は出土していないが、奈良時代～平安時代前期と考えている。ただしM17はこの時期より古いものが混入したのではなかろうか。建物63～68などを区画する溝と理解している。(平井)



第249図 溝192～196断面図(1/60)、溝192・195出土遺物(1/4)

溝192(第210・249図)

YA2A区の中央部、建物66の南に位置する。長さ約5m、幅60~170cm、深さ約10cmが検出できたが、これらは遺構検出面での形状であり、本来の溝の形状とは少し異なっているであろう。埋土中からは須恵器2255~2260や土師器の他に、鉄器片(小片のため器種不明)と鍛冶滓が出土した。須恵器は奈良時代のものが多い。位置関係から建物68に伴う溝と考えている。(平井)

溝193(第210・249図)

YA2A区の中央部、溝192の南に位置する。検出できた長さは約5.8m、幅は40~130cm、深さは10cm前後である。遺物は奈良時代らしき須恵器などが少量出土している。形状や位置から、建物67に伴う溝である可能性が高いのではなかろうか。(平井)

溝194(第210・249図)

YA2A区の中央部、建物66の東に位置する。検出できた長さは約2.8m、幅は60cm前後、深さは10cm前後である。遺物は奈良時代らしき須恵器などが少量出土している。形状や位置から、建物66に伴う溝である可能性が高いのではなかろうか。(平井)

溝195(第210・249図)

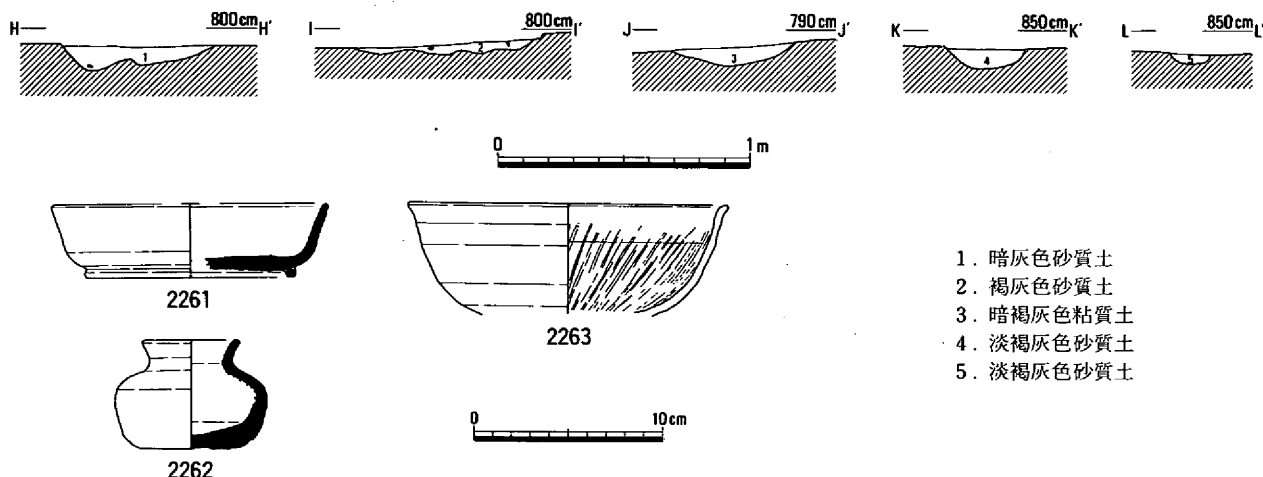
YA2A区の中央部、建物68の東に位置する。検出できた長さは約3.5m、幅は60cm前後、深さは15cm前後であった。奈良時代の須恵器(2225、溝192から出土した須恵器と接合した)などが少量出土している。形状や位置から、建物68に伴う溝である可能性が高いと考えている。(平井)

溝196(第210・249図)

YA2A区の中央部に位置する。検出できた長さは約16m、最大幅は約3.8m、深さは20cm前後であった。検出作業は比較的むづかしかったが、埋土中に黄灰白色粘土を含んでいるのが他の溝とは異なった特徴であった。方向は磁北にちかいといえる。遺物は奈良時代らしき須恵器や7世紀代の土師器2263などの土器片のほかに、鍛冶滓や炉壁、ウシカウマの歯が出土している。建物63~68に関連する溝と考えている。(平井)

溝197(第210・250図)

YA2A区の南端部に位置する。検出できた平面形は不整形で、底には凹凸が多く認められた。その形状から、溝の底の部分のみが検出できたものと理解している。遺物は須恵器などの少量の土器片が出土した。時期は特定できないが、建物63~68などを区画する溝の一部と考えている。(平井)



第250図 溝197~201断面図(1/60)、溝196・197・199出土遺物(1/4)

溝198(第210・250図)

YA2A区の南端部、溝198の南に位置する。検出できた平面形は不整形で、底面には凹凸が多かった。溝の底のみが検出できたものと理解しており、形状や位置から、溝197と同じ溝と考えている。遺物は奈良時代の須恵器2261などの土器片の他に、シカの右下顎が出土している。(平井)

溝199(第210・250図)

YA2A区の南端部、溝198の南に位置する。検出できた長さは約3.3m、幅は40cm前後、深さは10cm前後であった。遺物は少量の土器片2262が出土した。検出面や埋土から奈良時代頃と考えている。(平井)

溝200(第210・250図)

YA2A区の中央部、溝196の東に位置する。検出できた長さは約4m、幅は40cm前後、深さは10cm前後残存していた。遺物は少量の土器片が出土した。時期を特定できる遺物は出土しなかったが、溝196と同時期で、奈良時代頃と考えている。(平井)

溝201(第210・250図)

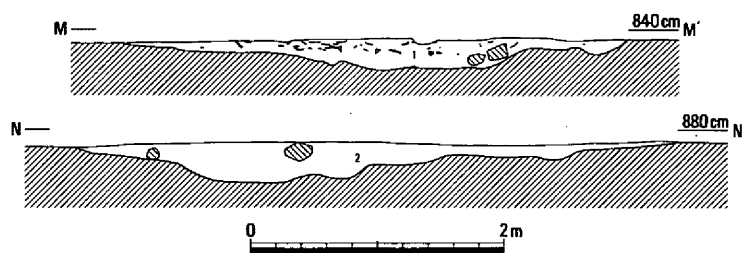
YA2A区の中央部において溝200に切られるかたちで検出した。幅は15cm、深さは5cm前後の小規模な溝で、北側で折れ曲がっていた。遺物は少量の土器片が出土したのみである。時期は明確ではないが、検出面や埋土から奈良時代頃と考えている。(平井)

溝202(第210・251~254図)

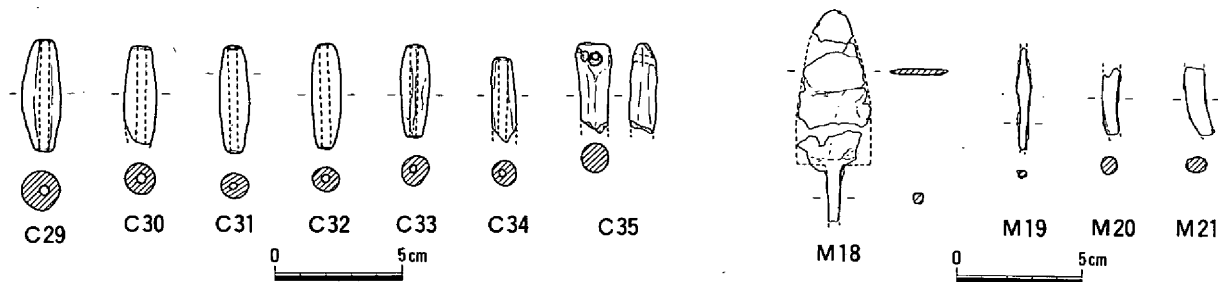
YA2A区とHC1A区の南半部においてほぼ東西方向に検出できた溝である。幅はYA2A区とHC1A区とは異なっているが、これは検出面の違いによるものであろう。溝の中央部には一段深い部分が存在していた。深さは20~30cm残存しており、底面の海拔高は8.1~8.5mで、西半部が低かった。建物69・70の柱穴との切り合い関係は明確にはできなかったが、溝202の方が先に検出することができたため、溝202を新しく考えておきたい。

埋土中からは炭・焼土・小礫とともに多くの土器や瓦2314、土錘C29~35、鉄器、鍛冶滓8、鉄塊

系遺物1、炉壁1などが出土した(コンテナ約15箱)。土器には土師器、須恵器、緑釉陶器2401~2411、灰釉陶器2398・2399、白磁2400などがあり、土師器がもっとも多く、その中には30個前後のほ

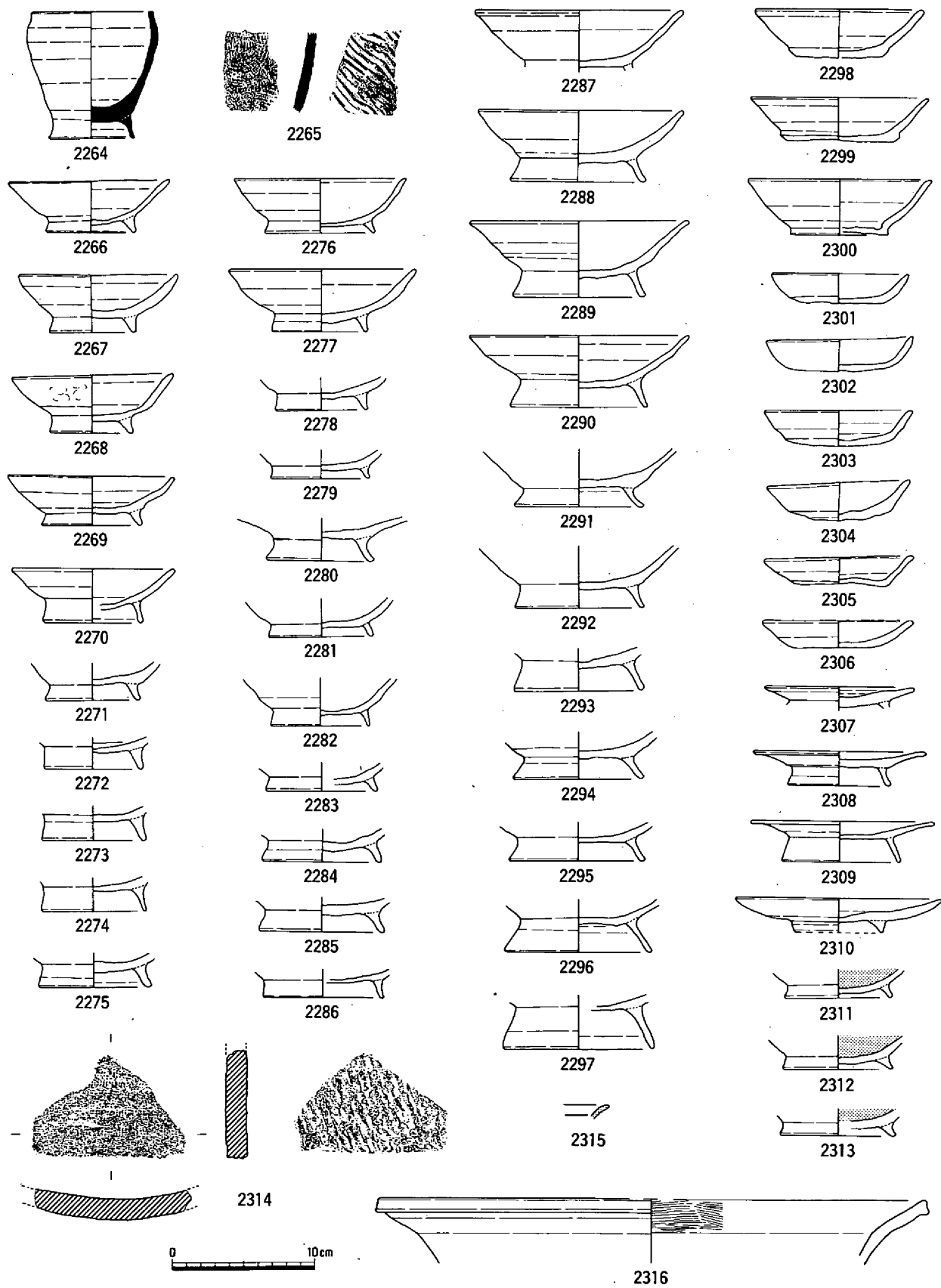


1. 暗褐灰色砂質土(小礫、土器多い) 2. 黒灰色砂質土(炭、焼土、小礫、土器多い)

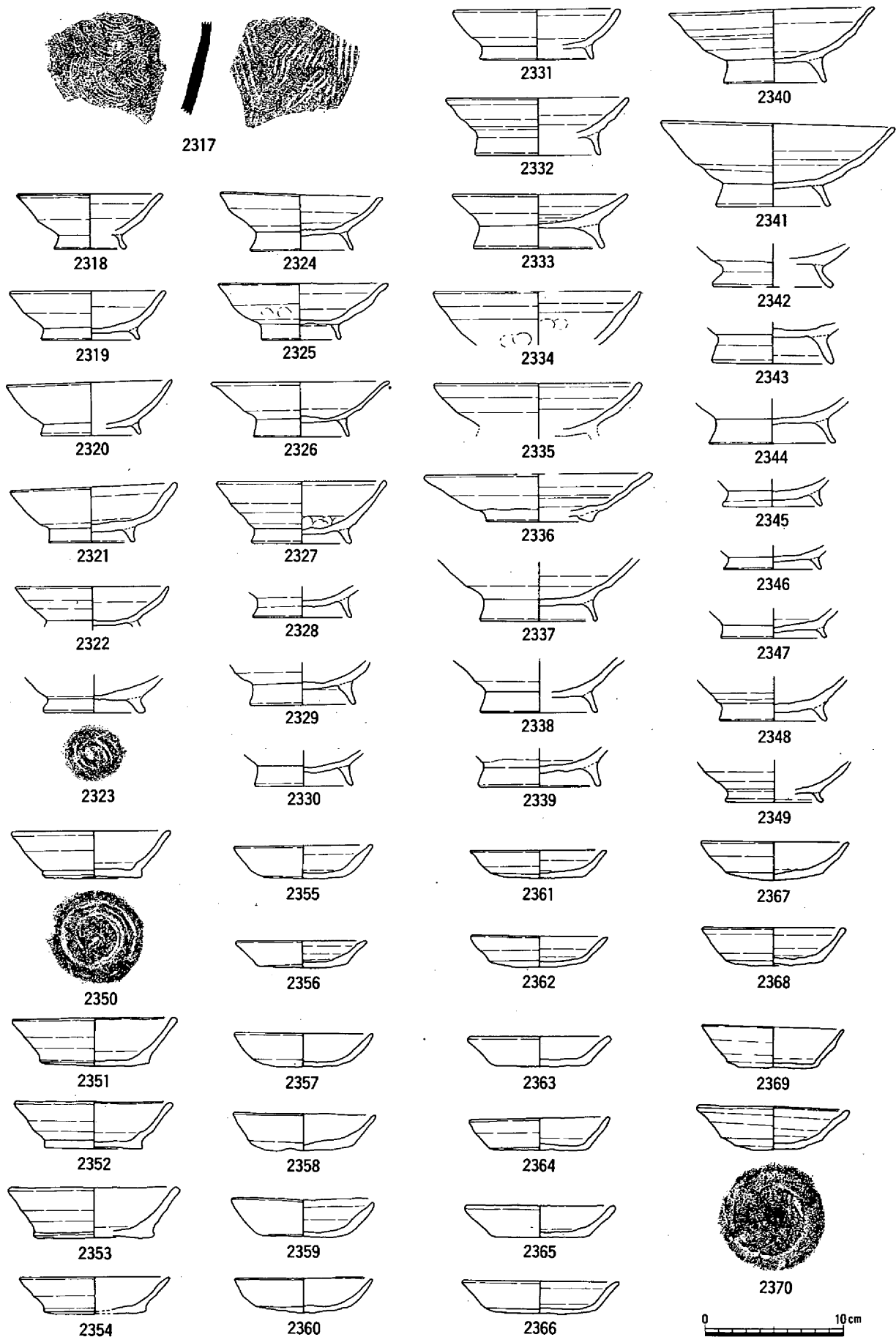


第251図 溝202断面図(1/60)・出土遺物(1)(1/3)

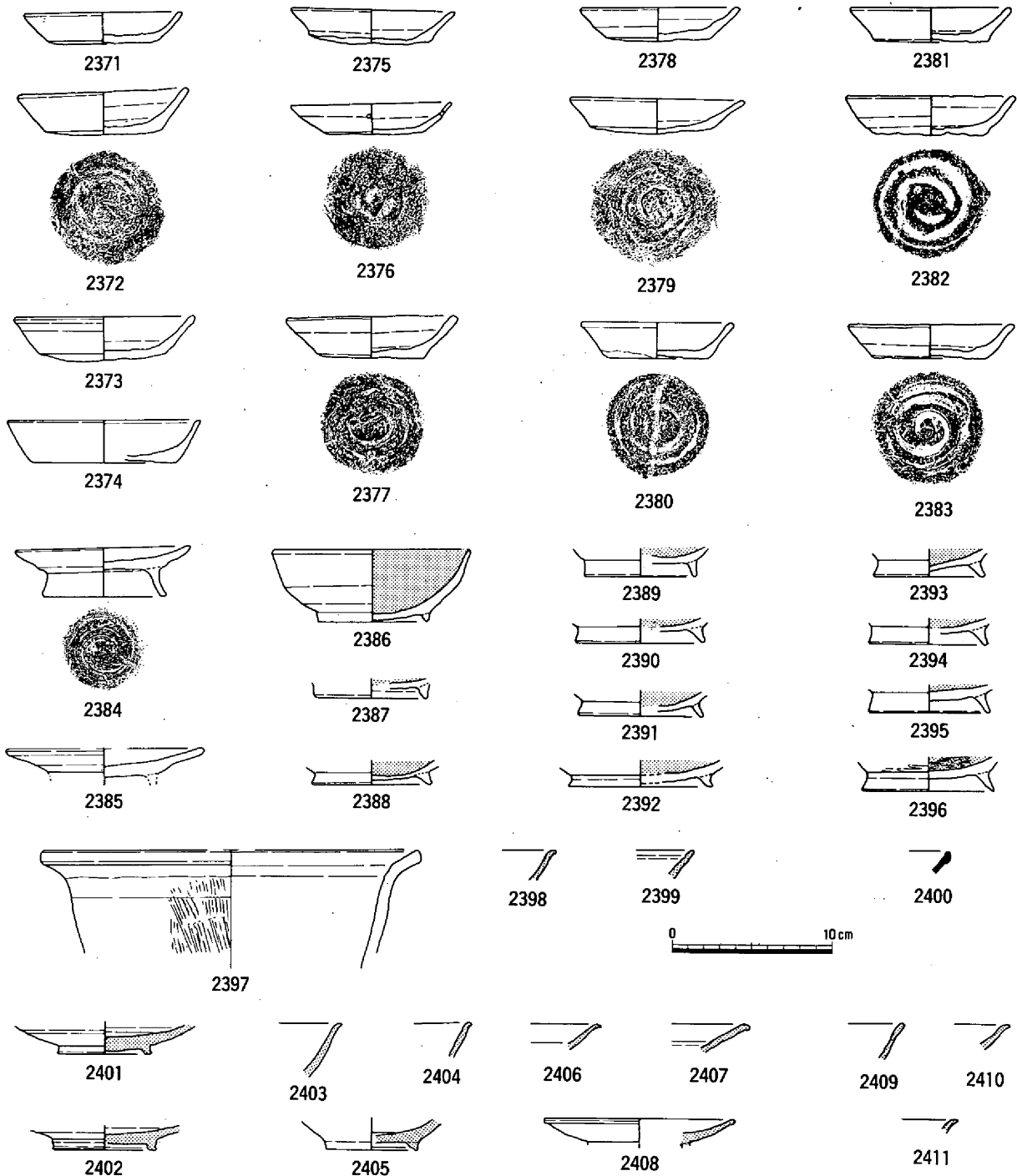
ぼ完形品が含まれていたのが特徴的である。2311～2313・2386～2396はいわゆる内黒土器である。須



第252図 溝202出土遺物(2) (1/4)



第253図 溝202出土遺物(3) (1/4)



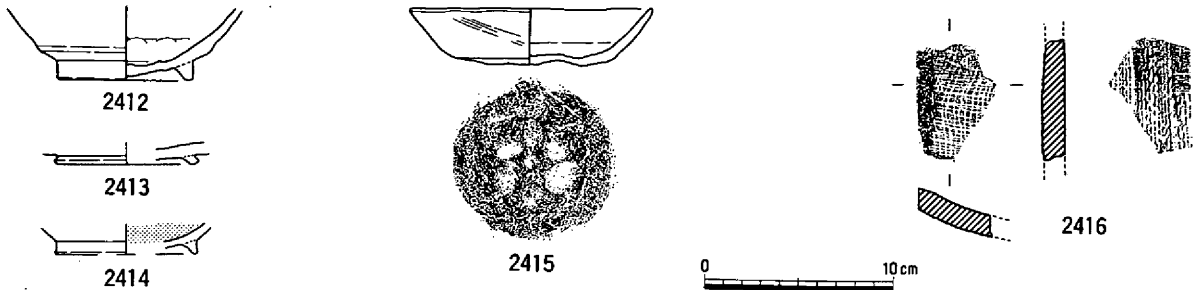
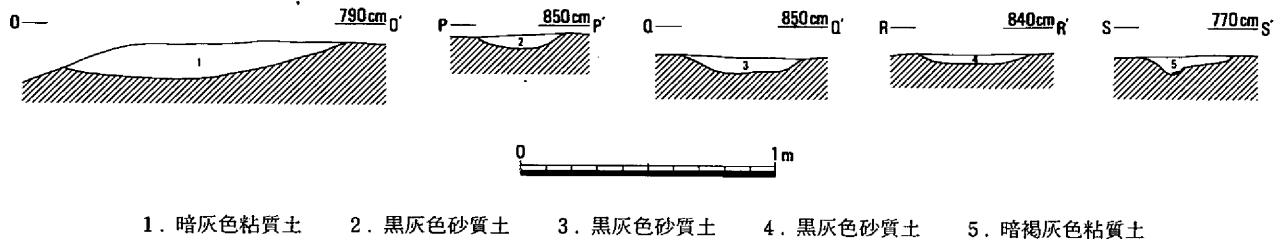
第254図 溝202出土遺物(4) (1/4)

恵器はごく少量である。2398は黒笹14号窯、2399は虎溪山1号窯段階ではなかろうか。2401・2402は京都産、2403～2408は近江産、2409・2410は周防産、2411は東海産？と考えている。第252図はHC1 A区、第253・254図はYA2 A区から出土した土器である。鉄器のうちM18・19は鎌、M20・21は釘であろう。古い時期のものが少量含まれているが、多くの土器の時期は平安時代中期と考えている。溝の性格はよくわからないが、遺物に完形品の土器が多く含まれていることなどから、何らかの祭祀に用いられたものが廃棄されたのではなかろうか。(平井)

溝203(第210・255図)

YA2 A区の南端部斜面に位置する。検出できた長さは約12m、幅は1m前後、深さは15cm前後で

第3章 発掘調査の概要



第255図 溝203～207断面図(1/30)、溝204・206出土遺物(1/4)

あった。遺物は奈良時代と平安時代の土器片が少量出土している。旧地形が南東に下がる部分に位置する溝で、時期的には斜面堆積3と同じ平安時代中期と考えられる。(平井)

溝204(第210・255図)

YA 2 A区の南半部においてほぼ東西方向に検出できた。長さ約3m、幅30cm、深さ5cm前後の小規模な溝である。遺物は少量の土器片2412が出土した。建物70の柱穴に切られているが、時期は平安時代中期であると考えている。(平井)

溝205(第210・255図)

YA 2 A区の南半部、溝205の南においてほぼ東西方向に検出した。長さ約5m、幅20～50cm、深さ5cm前後の小規模な溝である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は平安時代中期であると考えられる。(平井)

溝206(第210・255図)

YA 2 A区の南半部においてほぼ東西方向に検出できた。長さ5.3m、幅20～50cm、深さ10cm前後の小規模な溝である。遺物は少量の土器片2413～2415や瓦片2416が出土した。建物69の柱穴に切られているが、時期は平安時代中期であると考えている。(平井)

溝207(第210・255図)

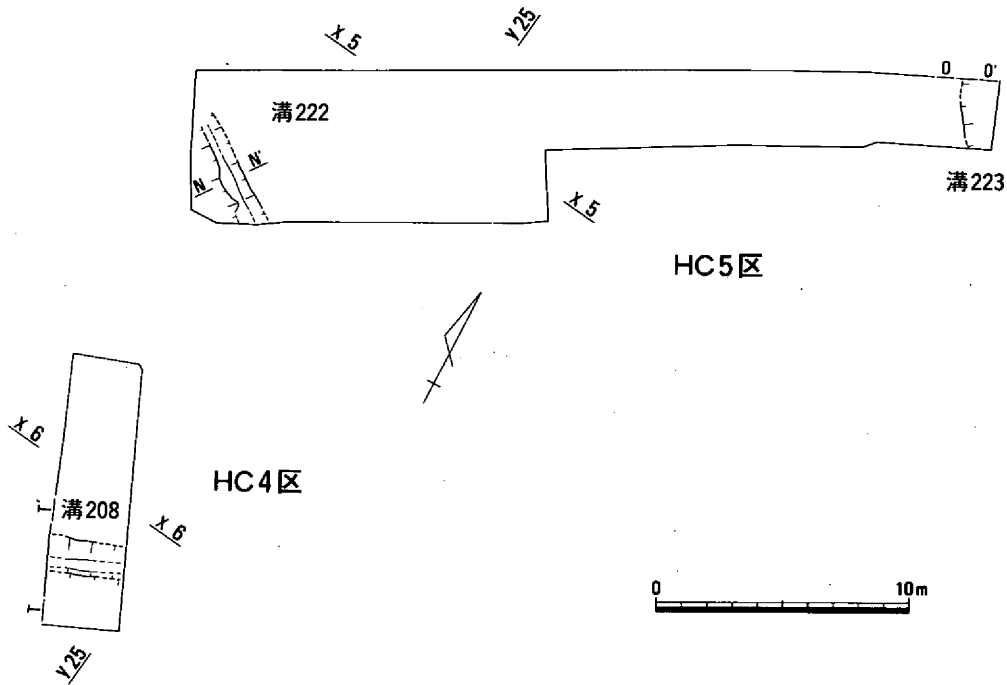
YA 2 B区の北端部、土壙200の東に位置する。検出できたのは長さ約18m、幅10～60cm、深さ5～10cm前後であった。埋土中には小礫や土器片が多く含まれていた。土壙220を切っており、時期は平安時代中期であると考えている。(平井)

溝208(第256・257図、図版9-3)

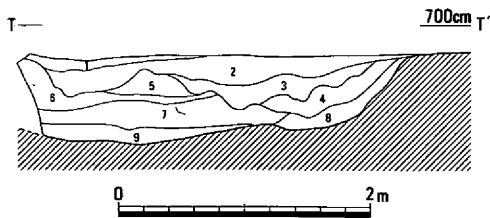
HC 4区の北端近くで検出された東北東から西南西を示す、直線的な溝である。検出全長は3m足らず、幅約2～3m、深さ約70cm前後を測る。土層断面図では数条の溝が重複しているように見えるが出土遺物からみた時期は限定される。出土遺物はすべて土師器で、杯2417～2422、碗2423、皿2424・2425がある。2418・2422には内面に丹塗りが認められ、2424・2425は内外面に同様な赤橙色の丹塗りが施されている。いずれも平安時代、それも9世紀中ごろから後半に比定される。(岡田)

溝209(第213・258図)

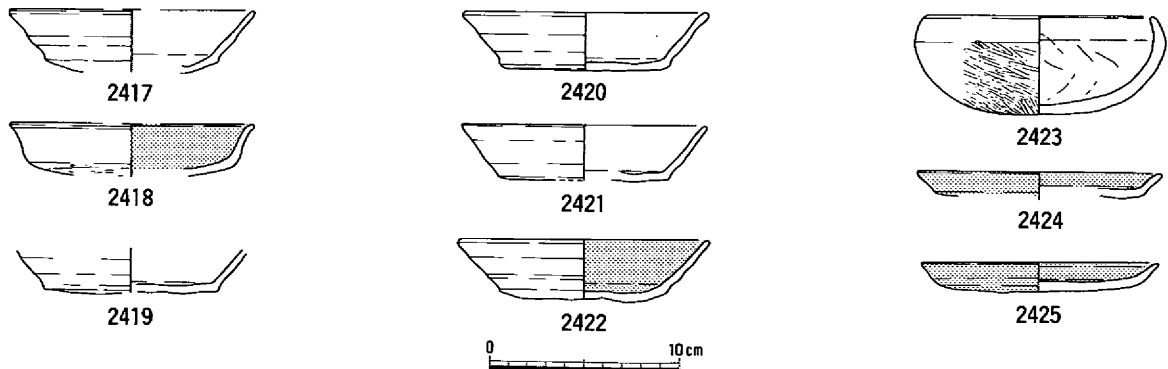
YA1区とHC6区の南半部において東西方向に検出できた溝である。規模や形状から同一の溝であると判断している。幅は35~50cm、深さは10cm前後残存していた。断面形は基本的に皿形で、埋土は灰白色粘土が一層のみであった。底面の海拔高は7.25~7.3mで、HC6区の方が少し低かった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は中世と考えている。(平井)



第256図 溝208・222・223 (1/300)



1. 黒灰色微砂粘土
2. 灰黄色粘土と暗灰色粘土の混在層 (炭混じり)
3. 灰黄色粘土 (木質含む)
4. 灰色微砂粘土層 (木質少)
5. 黒灰色粘土
6. 暗灰~黒灰色粘土 (木質少)
7. 黒灰色微砂質土 (砂を含む)
8. 灰黒色粘土
9. 灰黒色微砂質粘土



第257図 溝208断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)

溝210(第213・258図)

HC 6 区の南端部において東西方向に検出できた溝である。幅は40~50cm、深さは5cm前後残存していた。断面形は皿形で、埋土は淡灰色砂質土である。底面の海拔高は7.45m前後である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は中世と考えている。(平井)

溝211(第213・258図)

YA 2 A 区の中央部において東西方向に検出できた溝である。途中から二本の溝に分かれており、深さは10cm前後残存していた。断面形は皿形で、埋土は灰白色砂質土であった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は近世と考えている。(平井)

溝212(第213・258図)

YA 2 A 区の中央部とHC 1 A 区の北半部に位置する。規模や形状から同一の溝と判断している。現代の暗渠によってかなり破壊されているため、本来の形状は明らかではないが、幅は約1~1.5m、深さは10cm前後残存していた。断面形は皿形で、埋土は灰白色砂質土である。YA 2 A 区の東端部では、部分的に溝213とつながっていたり、南側に折れ曲がっていた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は近世と考えている。(平井)

溝213(第213・258図)

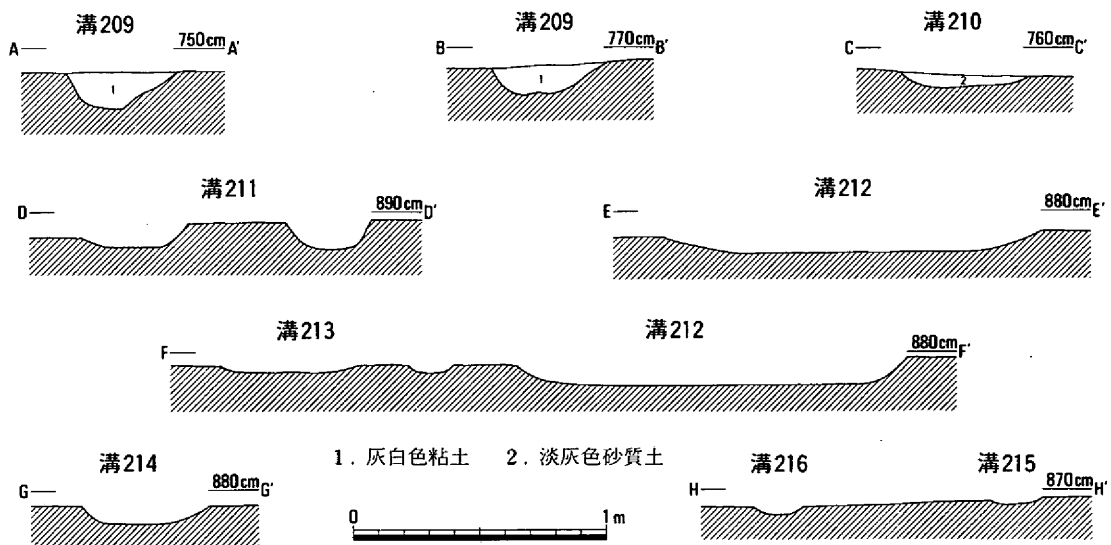
YA 2 A 区の中央部において東西方向に検出できた。幅は30~60cm、深さは5cm前後残存していたにすぎない。断面形は皿形で、埋土は灰白色砂質土である。東端部で南側に曲がっており、溝214に続く可能性が高い。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は近世と考えている。(平井)

溝214(第213・258図)

YA 2 A 区の南半部において南北方向に検出できた。幅は25~80cm、深さは5cm前後残存していた。断面形は皿形で、埋土は灰白色砂質土である。溝212・213に続く可能性が高い。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は近世と考えている。(平井)

溝215・216(第213・258図)

YA 2 A 区の南端部において、旧地形に沿うかたちで検出できた並行する二本の溝である。規模は類似しており、幅25cm前後、深さ3cm前後が残存していたのみである。断面形は皿形で、埋土は灰白



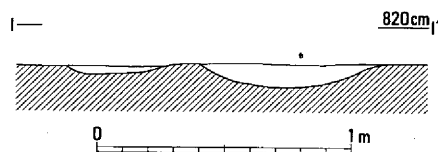
第258図 溝209~216断面図(1/30)

色砂質土である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は近世と考えている。

以上報告した近世と考えられる溝211～216については、現在の水田地割には一致していないが、近世(近代の可能性もある)の水田に関連する溝と理解している。(平井)

溝217(第214・259図)

YA3区中央の微高地上に位置する。底面の海拔高は7.96mを測るが一定でない。遺構面上面に堆積していた中世以降の耕作土と同じ灰黄色砂質土で埋没しており、耕作痕の可能性はある。溝内から土器は出土していないが、埋土の状況から中世以降と考えられる。(久保)



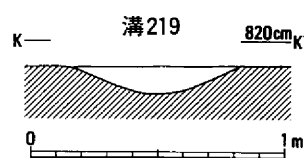
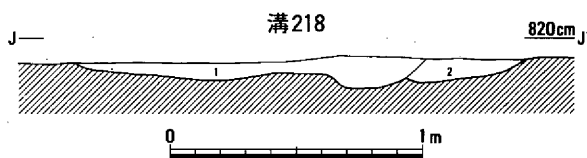
第259図 溝217断面図 (1/30)

溝218(第214・259図)

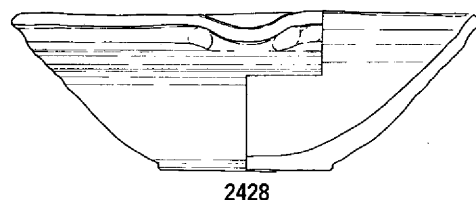
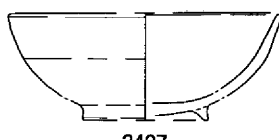
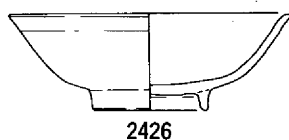
溝217の南に位置する。幅1.5m、長さ約6mの不整楕円形の浅いたわみ状の遺構で、底面も平らでなく、人為的な土壌でない可能性もある。底面の海拔高は最深部で7.96mを測る。この遺構は弥生時代後期から平安時代後半の遺物を含む包含層上面から掘削され、また埋土内から土師質高台碗2426と魚住焼の捏ね鉢2428が出土しており、古代末～中世と考えられる。(久保)

溝219(第214・260図)

溝218の西に位置する。T字状に検出されたが西側は調査区外となり全容は不明である。幅は一定でなく、北から南へ太くなっており、底面も南端が北端より10cm程度深くなっている。南端の底面の海拔高は7.99mを測る。溝218と同一面で検出されたが溝内から土師質高台碗2427が出土しており、溝218より新しいと考えられる。(久保)



1. 茶灰色砂質土 2. 暗灰褐色砂質土



第260図 溝218・219断面図 (1/30)・出土遺物 (1/4)

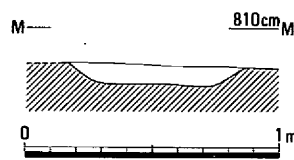
溝220(第214・261図)

溝217～219の南に位置する。北西から南東方向に、微高地をほぼ直線的に横断する。幅60～70cmで、



1. 灰黄褐色粗砂混じり粘質土
2. 灰褐色粗砂混じり粘質土

第261図 溝220断面図 (1/30)



第262図 溝221断面図 (1/30)

底面の海拔高は約7.96mを測る。現代の暗渠がこの溝の中央部に同一方向で重複しているため平面的には確認できなかったが、第261図にみられる堆積状況から、掘り返しが行われた可能性も想定される。時期は、白磁片が出土していることから中世と考えられる。(久保)

溝221(第214・262図)

YA5区に位置する東西方向の溝で、若干弧を描がいているが東西両端とも調査区外となり、全容は不明である。幅は西端で65cm、東端で1m、底面の海拔高は西端で7.87m、東端で7.81mを測り、東側に広く深くなっている。土器細片が出土しており、中世と考えられる。(久保)

溝222(第256・263図)

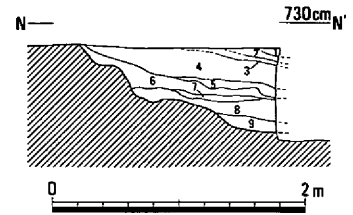
西半分の残存が確かめられた南北方向の溝である。幅は2m以上と推定されるにとどまる。

深さは約65cm前後を測り、埋積土層はかなり複雑である。頻繁な流水があったことがこれによって示唆される。出土遺物は、土師質土器細片のみであるが时期的には中世それも鎌倉時代に比定される。(岡田)

溝223(第256・263図)

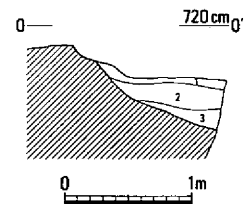
溝222と同様一部を残すのみである。残存最大幅は約1mであるが3層の埋積土が確かめられている。最下層には淡青色、中層には暗青色、上層には灰色の微砂が堆積している。

出土遺物は土器小片のみであるが、中世に比定される可能性がもっとも高い。(岡田)



1. 暗黄灰色粘質土
2. 淡黄灰色微砂
3. 暗灰色粘質土 (淡灰色微砂混じり)
4. 青黄灰色粘質土 (炭化物含む)
5. 暗黄灰色粘質土
6. 暗灰色粘土と黄灰色粘土の混在層
7. 暗灰黄色粘質土
8. 暗灰色粘土混じり淡灰色細砂
9. 淡青灰色粘土

第263図 溝222断面図 (1/60)



1. 灰色微砂
2. 暗青灰色粘土
3. 淡青灰色粘土

第264図 溝223断面図 (1/60)

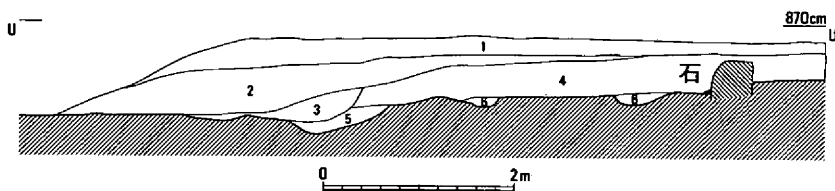
(6) 斜面堆積

斜面堆積3(第210・265~269図)

YA2A区とHC1A区の南端部において平安時代の旧地形が60cm程下がる斜面部分とそこに堆積していた遺物を斜面堆積3として報告したい。

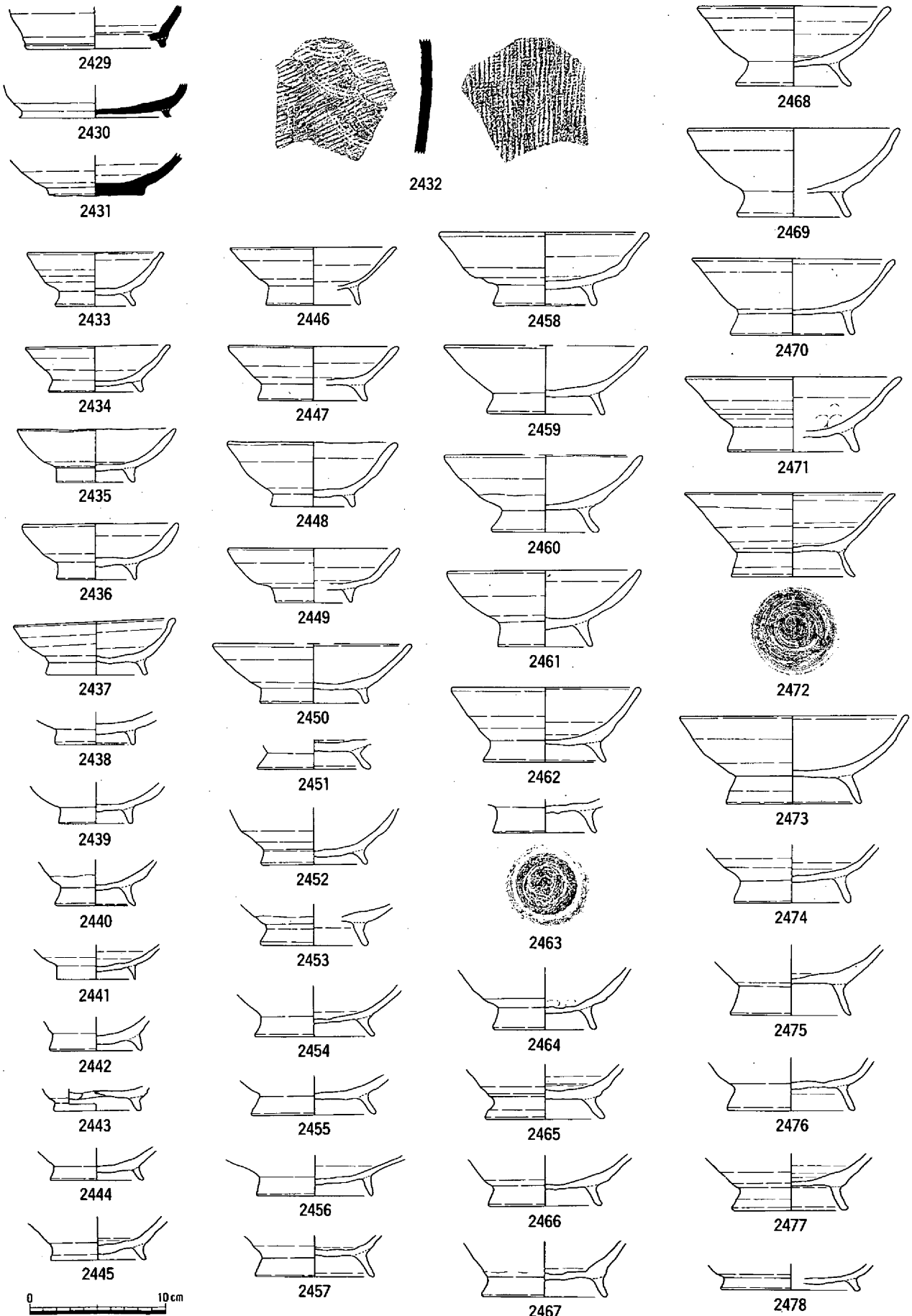
発掘調査区の地形は、東側にある長良山の西側の丘陵先端部に位置しており、調査前の状況は開墾によって水田化されていた。また第3図の地形図でみられるように、YA2A・HC1A区とYA2B・YA1・HC6区との境は現状でも約1mの段差が存在していた。

第265図は第210図のU-U'断面で、2層が斜面堆積3に相当する土層である。図の上面は重機に

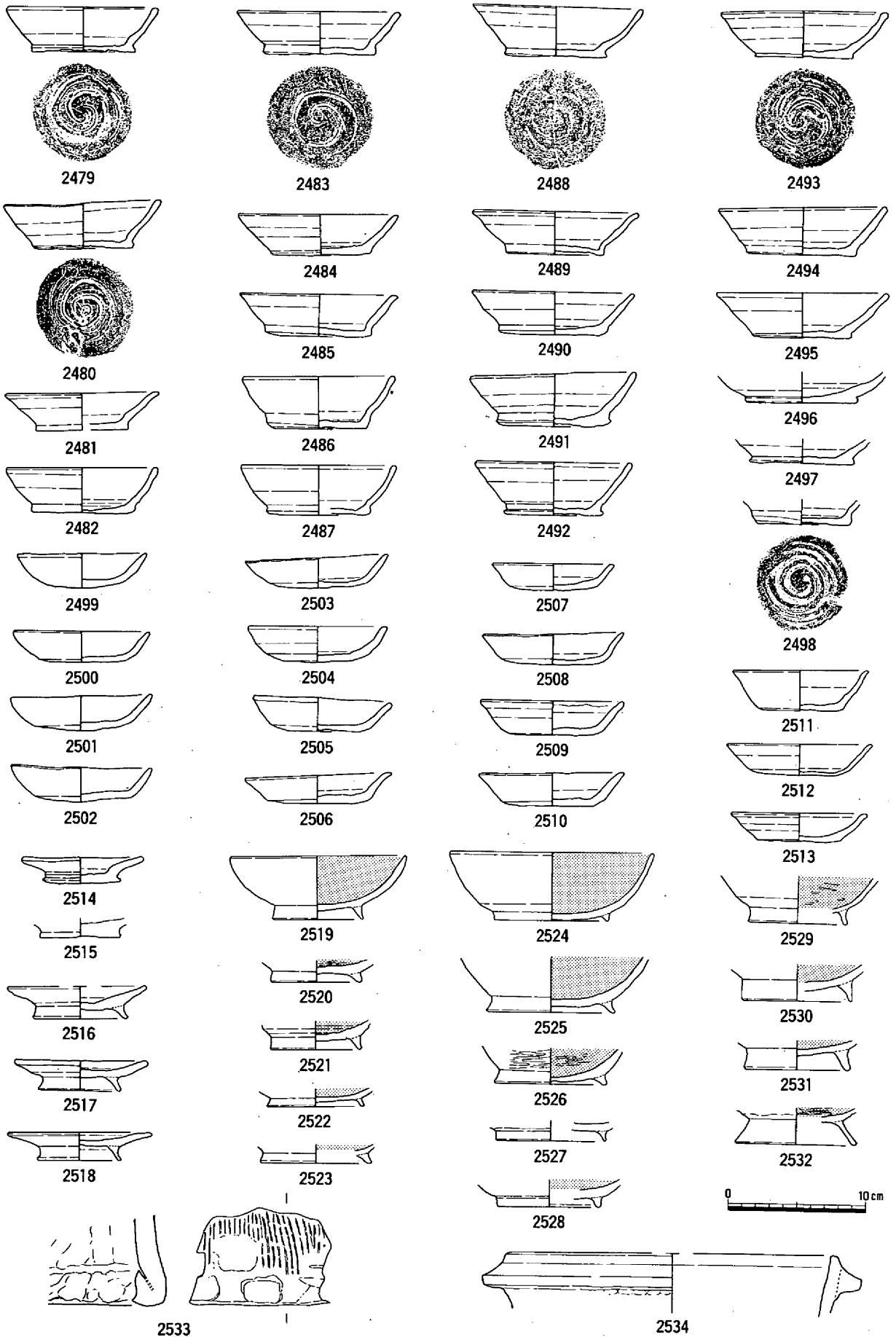


1. 淡褐灰色砂質土 (中世)
2. 黒褐灰色砂質土 (炭・焼土・小礫含む) (斜面堆積3)
3. 暗灰色粘土 (溝203)
4. 褐灰色砂質土
5. 褐灰色粘土 (溝178)
6. 暗褐灰色粘質土

第265図 斜面堆積3断面図 (1/80)

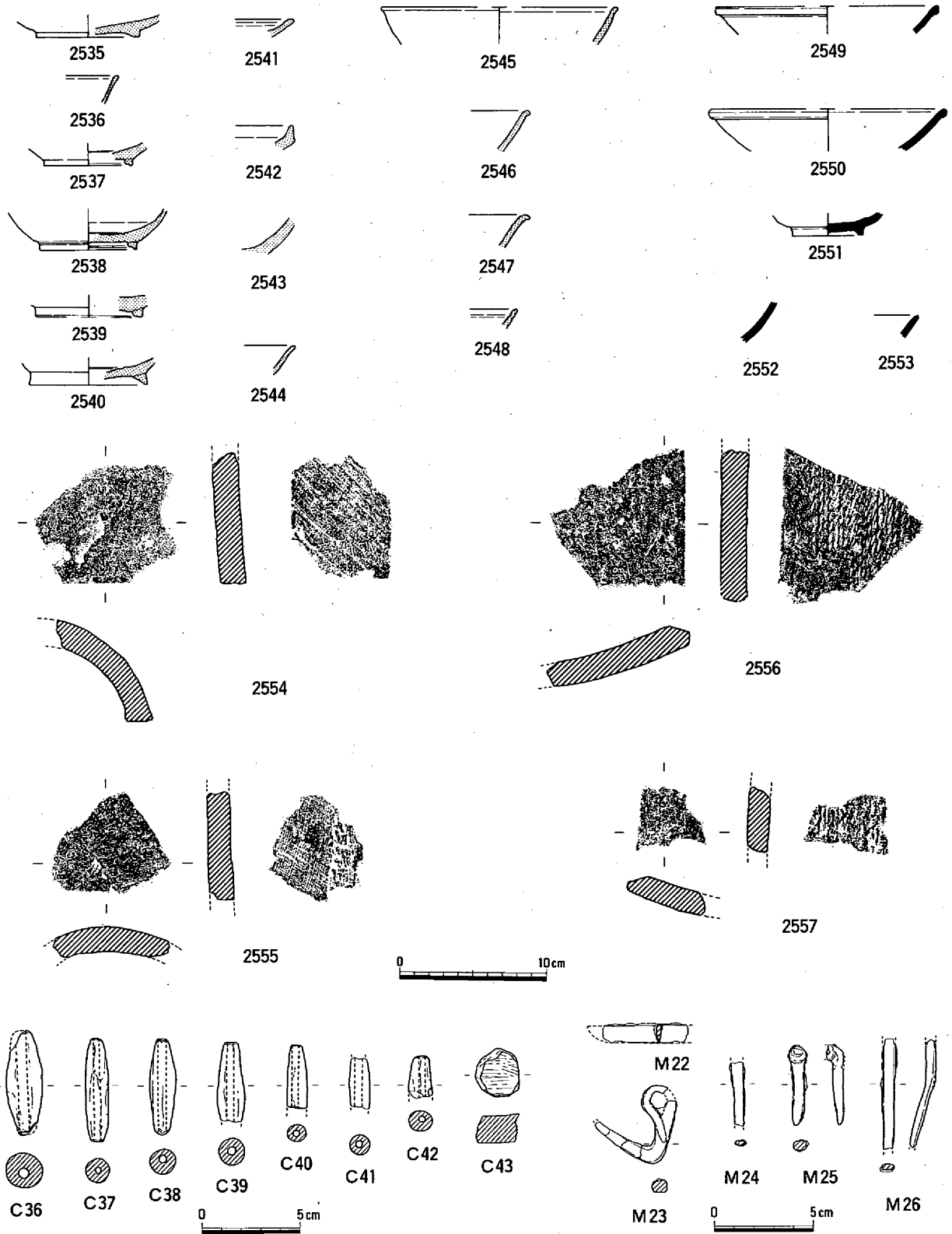


第266図 斜面堆積3出土遺物(1) (1/4)



第267図 斜面堆積3出土遺物(2) (1/4)

よる掘削面で、1層には古代末～中世の遺物を含んでいた。1層の下面が建物69・70や土壇195～198などの平安時代中期の遺構を検出した面である。3層は先述した溝203で、斜面堆積3と同時期の遺物が出土している。4層からはおもに古墳時代後半～奈良時代・平安時代前期の土器が包含されており、平安時代前期頃の造成土と考えている。5層は先述した溝178で、古墳時代前期前葉から7世紀前

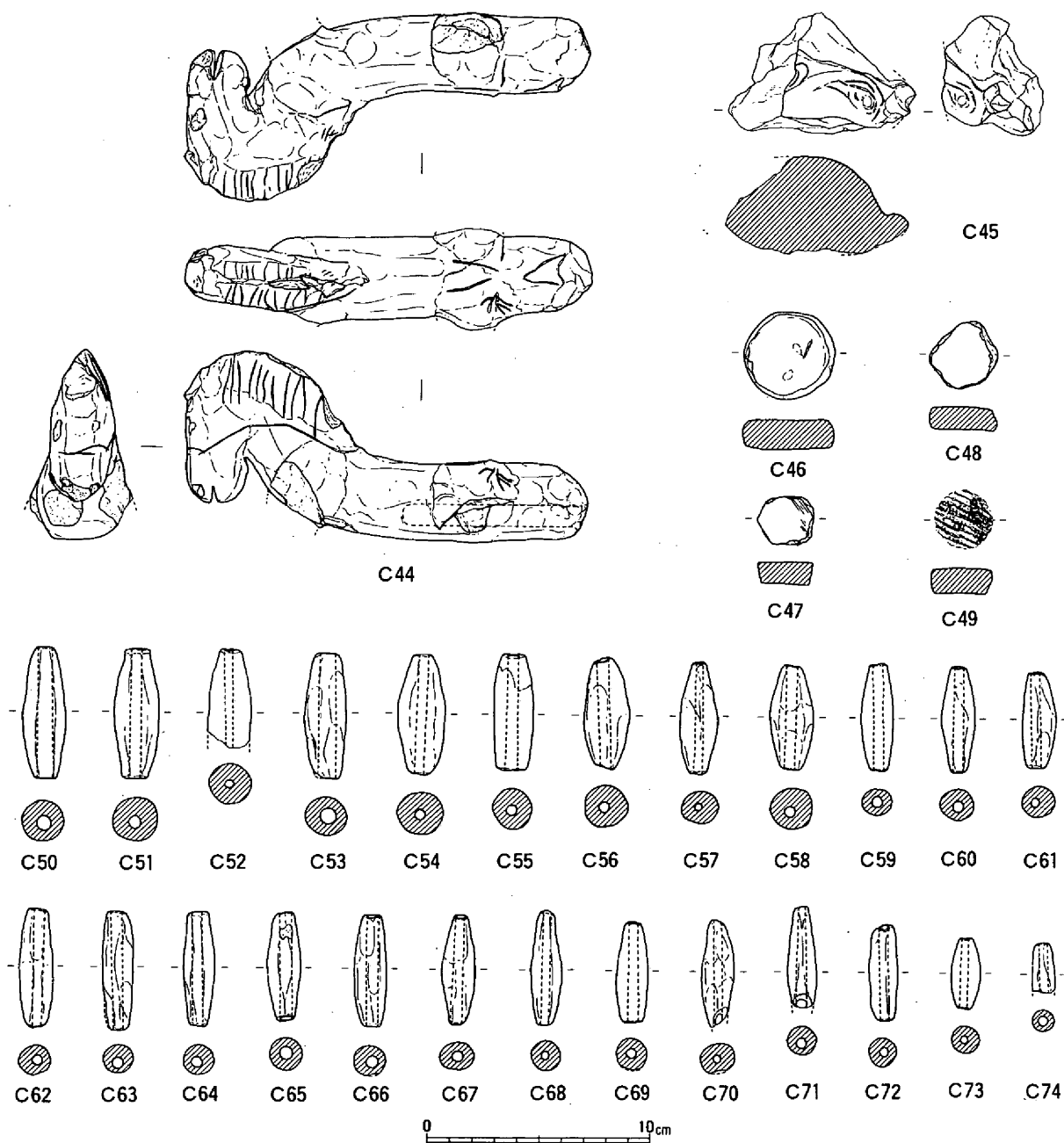


第268図 斜面堆積3出土遺物(3) (1/4・1/3)

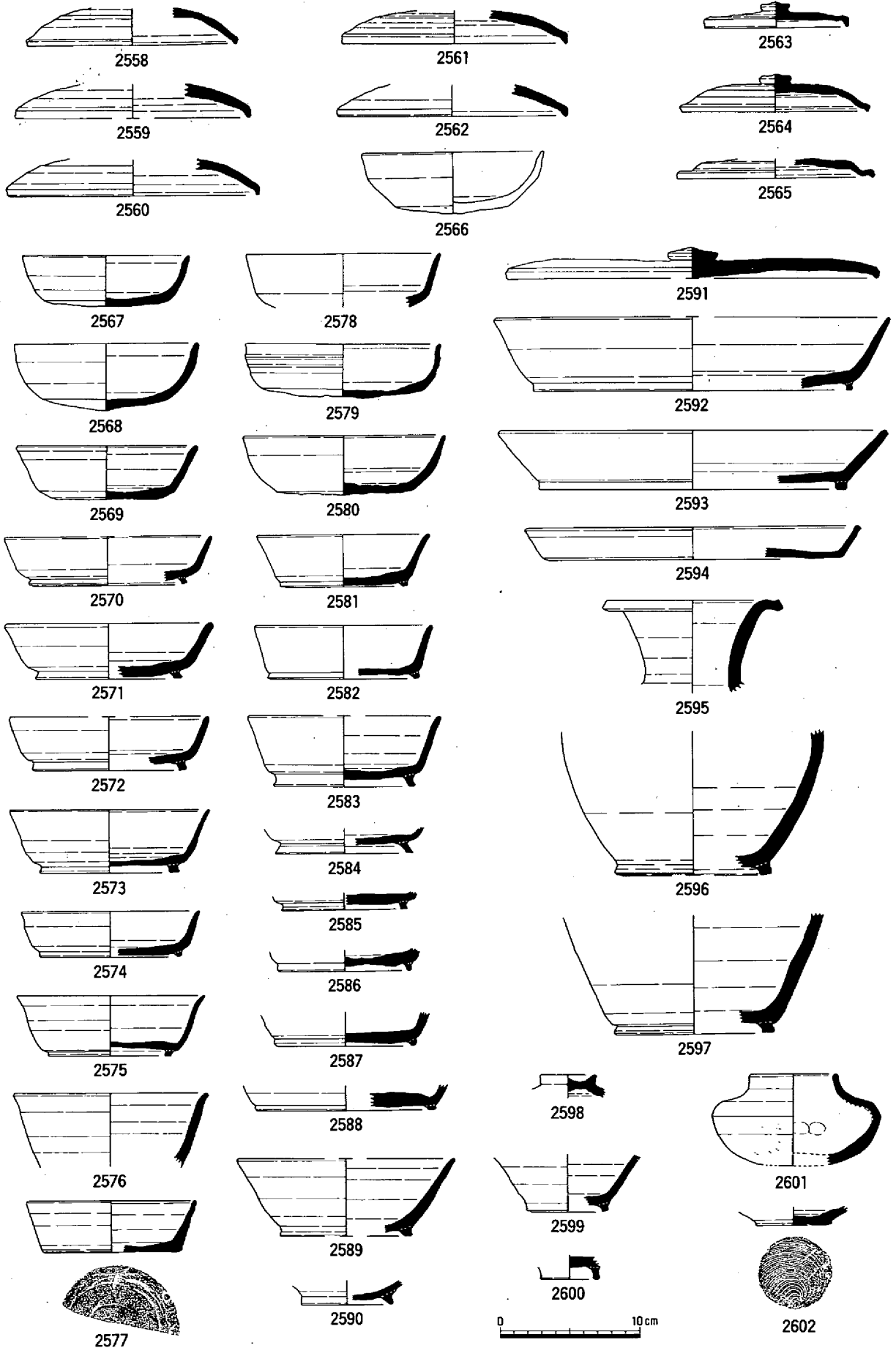
葉の幅で捉えている。

遺物は土器、瓦、土製品C36~43、鉄器M22~26、鍛冶滓9、製錬滓1、炉壁5、ウシカウマの歯などが出土しており、北側にひろがる生活面から廃棄されたものであろう。土器には須恵器、土師器、緑釉陶器2535~2544、灰釉陶器2545~2548、白磁2549~2552、青磁2553などがあり、量的には土師器が圧倒的に多く、その他はごく少量であった。土師器の中には25個前後のほぼ完形品が含まれており、先述した溝202出土土器と同じく特徴的である。2535は京都産、2536~2541は近江産、2542・2543は周防産、2544は東海か近江産ではなかろうか。2545~2547は黒笹14窯、2548は虎溪山1号窯段階と考えている。瓦には丸瓦と平瓦があり、出土量は少ない。C36~42は土錘、C43は円板状土製品であろう。M22は刀子、M23~26は釘ではなかろうか。古い時期のものが少量含まれているが、ほとんどの遺物の時期は平安時代中期であると考えている。

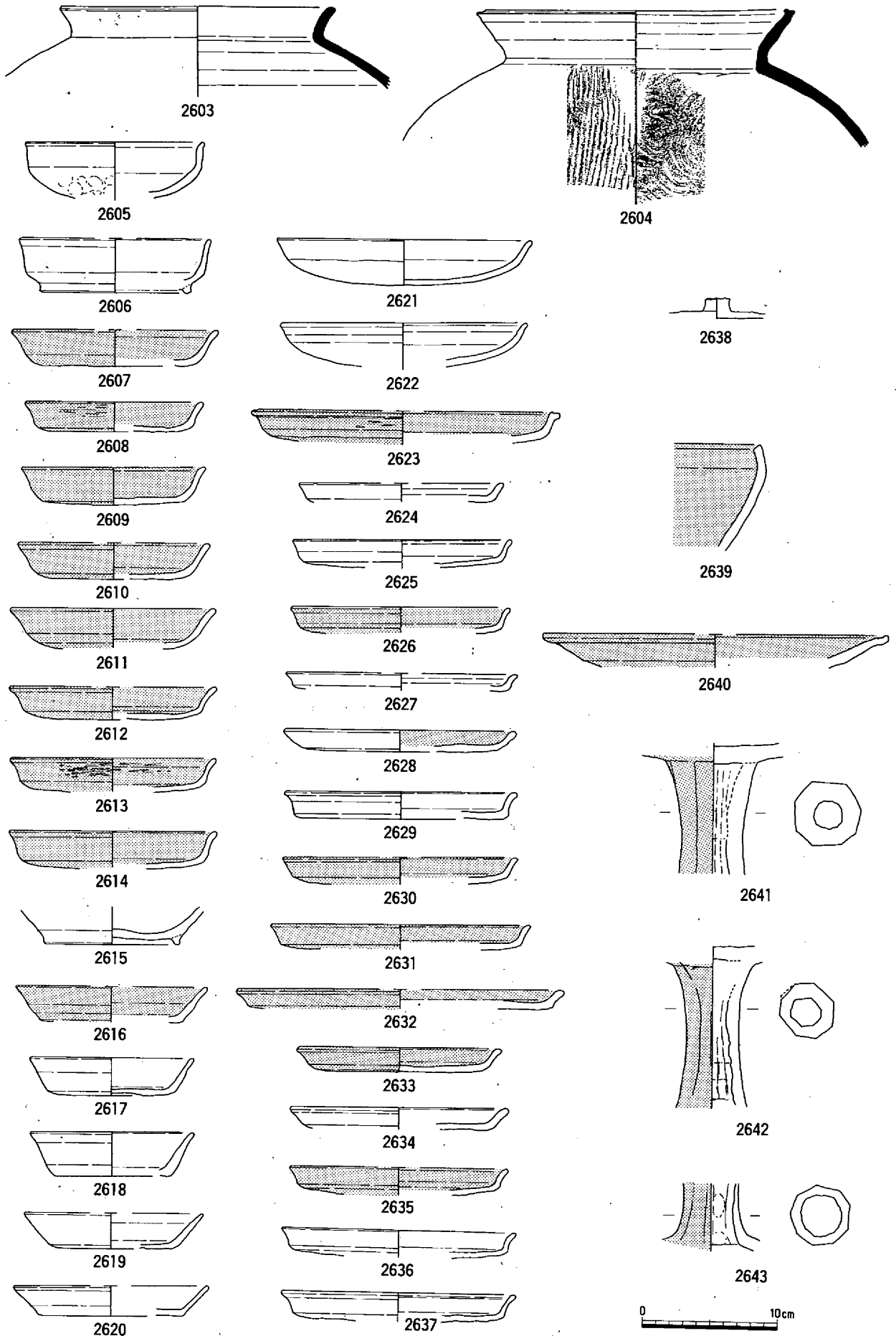
(平井)



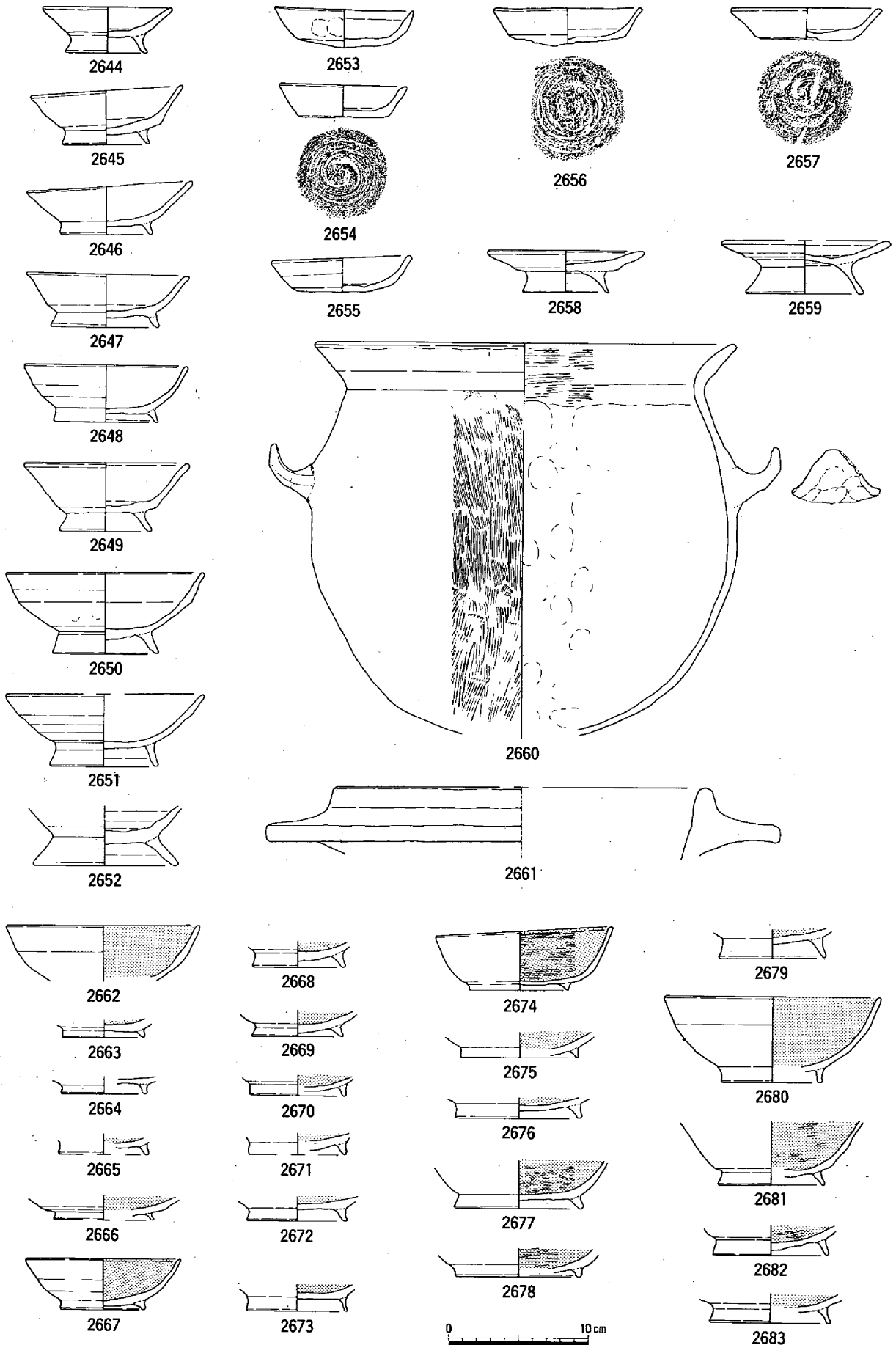
第269図 その他の出土遺物 (古代・中世・近世1) (1/3)



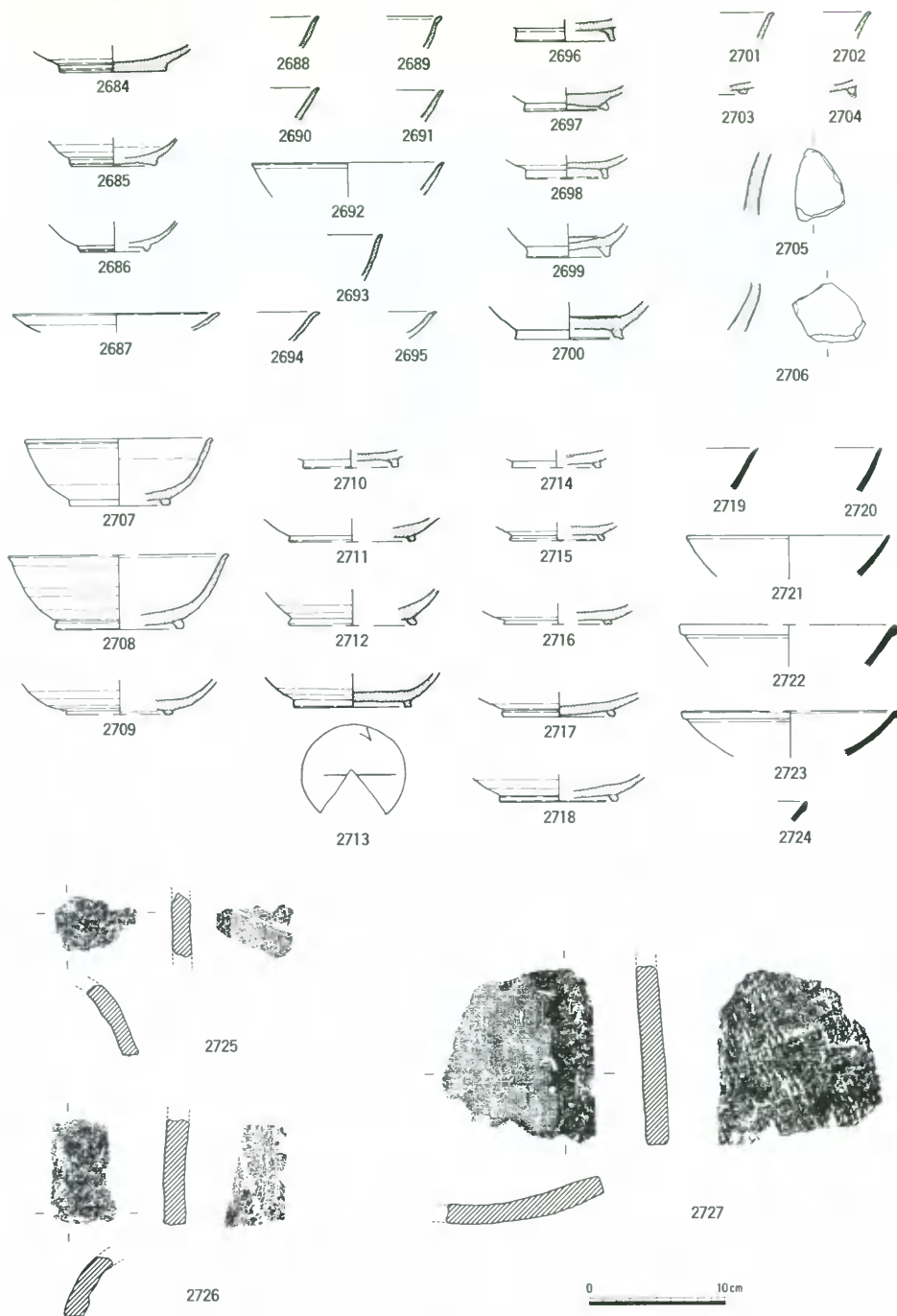
第270図 その他の出土遺物（古代・中世・近世2）（1/4）



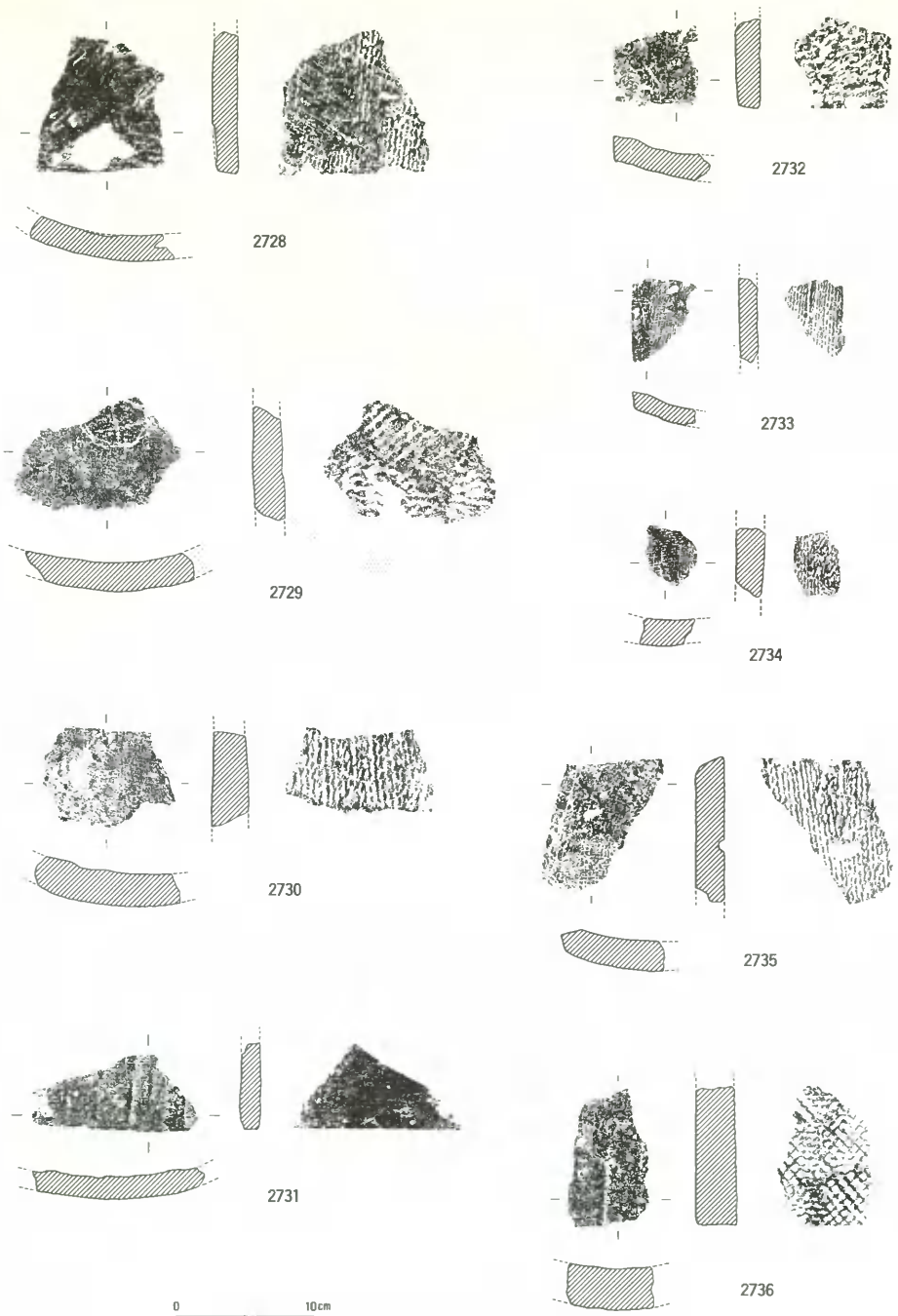
第271図 その他の出土遺物（古代・中世・近世3）（1/4）



第272図 その他の出土遺物 (古代・中世・近世4) (1/4)



第273図 その他の出土遺物（古代・中世・近世5）（1/4）

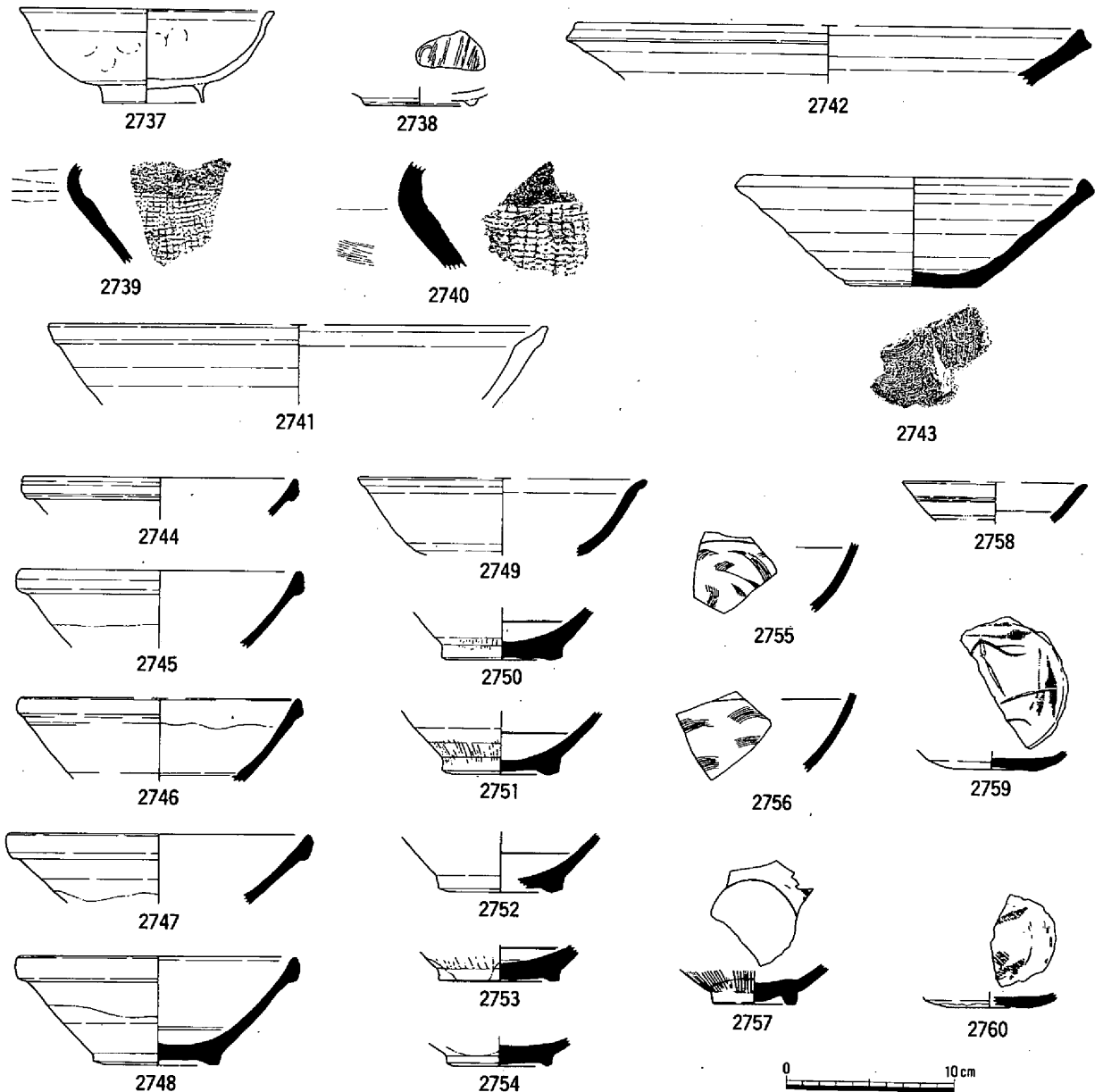


第274図 その他の出土遺物（古代・中世・近世6）（1/4）

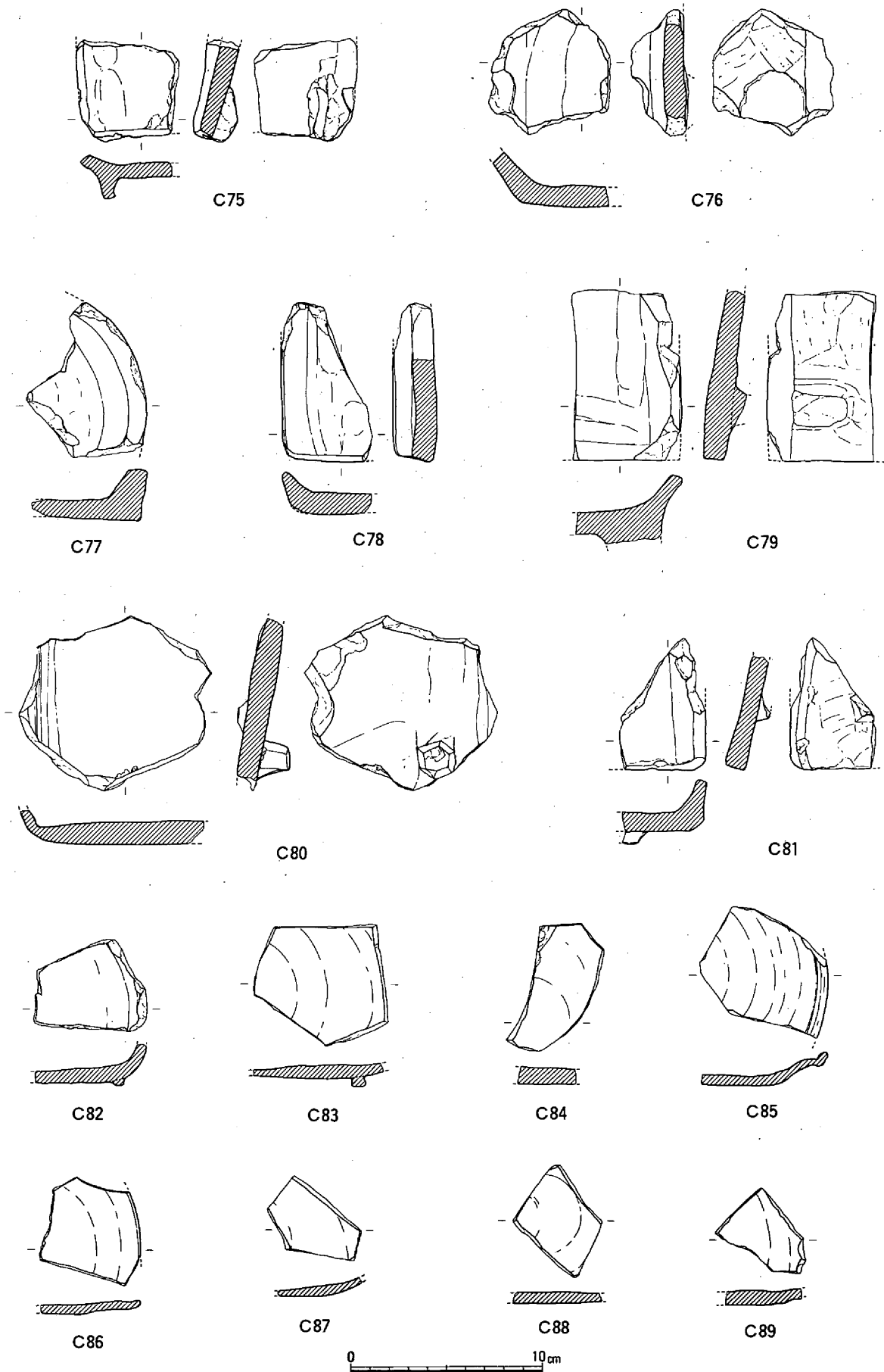
(7) その他の遺構・遺物

古代の柱穴はおもにYA2A区とYA3区の南半部やYA5区で検出した。YA2A区の北端部には30~40個の平安時代中期と考えられる柱穴を検出したが、建物としてはまとまらなかった。古代のくぼみはYA2B区の北半部からYA3区の北半部にわたって存在しており、おもに平安時代の遺物が出土した。中世・近世の包含層は各調査区において存在していた。

その他の出土遺物として図示した遺物は、遺構に伴わなかった遺物である。C44はYA2B区の北半部から出土した須恵質の馬である。足は四本とも欠損している。頭部と胴部には細い線刻でたてがみの他に、面繫、手綱、尻繫らしき表現が観察できる。また胴部には直径約1cmの穴が穿たれている。C45は何らかの顔(竜?、鳥?)を表現した土製品の破損品である。C46~49は円板状土製品、C50~74は土錘である。2558~2604は須恵器である。一部時期不明のものがあるが、多くは奈良時代と平安時代であろう。2566の焼成は土師質である。2605~2683はおもにYA2A区から出土した土師器



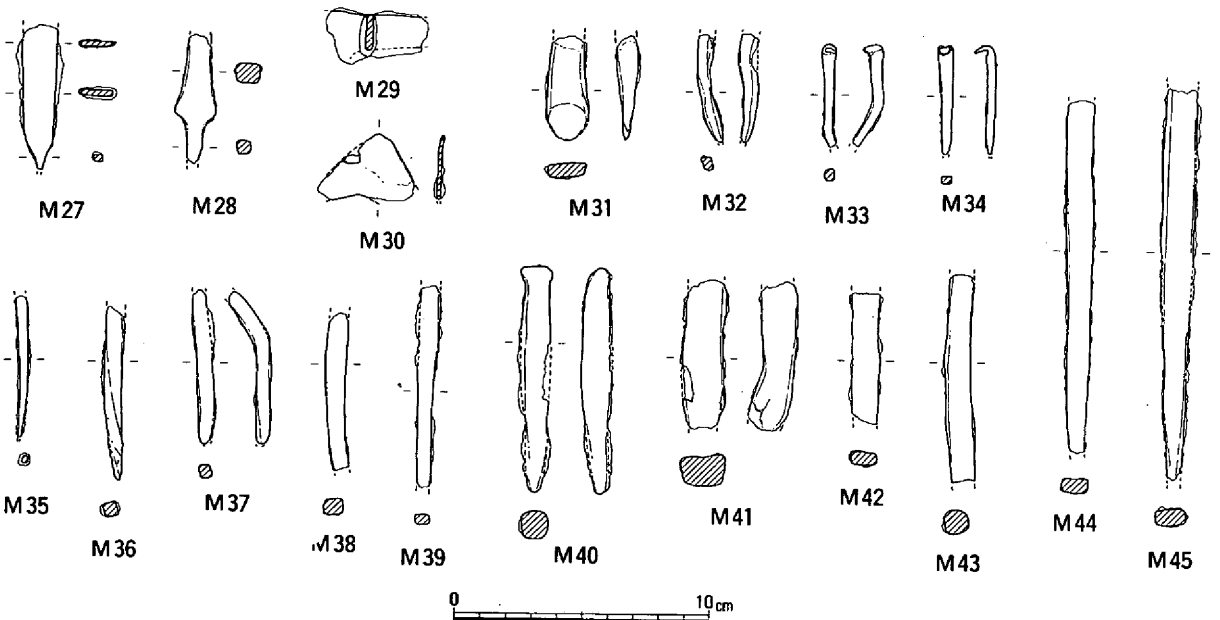
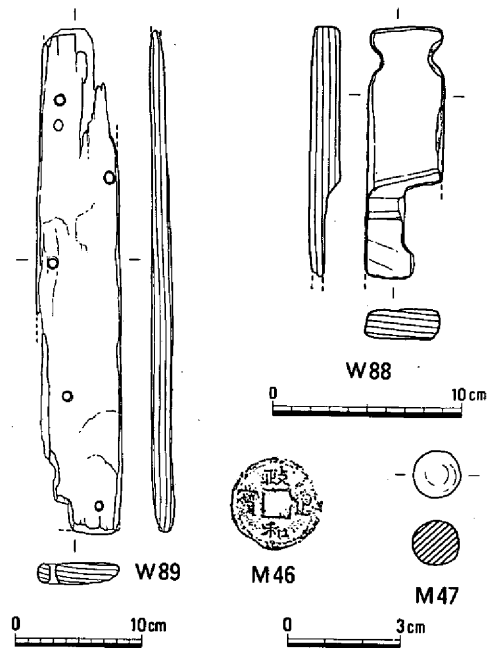
第275図 その他の出土遺物(古代・中世・近世7)(1/4)



第276図 その他の出土遺物 (古代・中世・近世8) (1/3)

第3章 発掘調査の概要

である。2605～2643は杯、皿、鉢、高杯で、スクリーントーンは現状で赤色顔料が確認できる部分のみを示している。2684～2706はYA2A区とHC1A区から出土した緑釉陶器である。2684～2687は京都産、2688・2689・2693・2694・2696～2700は近江産、2690～2692・2695は近江産か京都産、2701～2706は周防産と考えている。2684は平高台で、今回の調査では最も古い時期のものである。2707～2718は灰釉陶器でYA2A・2B、HC1A・1B区から出土している。いずれも黒笹14号窯段階であろう。2707はHC1B区の南側溝と斜面堆積3から出土した2546とが接合した。2719～2721は越州窯系青磁、2722～2724は白磁である。2725～2736は瓦である。2738は瓦器碗、2739・2740は亀山焼、2742・2743は東播系須恵器鉢、2741は瓦質鉢、2744～2758は白磁、2759・2760は同安窯系青磁である。第277図C75～81は風字硯、C82～89は須恵器の杯を転用した硯である。第278図M27～45は鉄器で、M27・28は鏃、M29は刀子、M30は火打ち鎌、M31は鑿、M32～45の多くは釘ではなかろうか。時期は特定できないが古墳時代から中世のものである。W88はYA4区、W89はHC2B区から出土した木器で、時期は古代～中世と考えている。M46・47はYA2A区から出土し、46は古銭(政和通寶)、47は鉛製の鉄砲玉である。これらの他にYK区から製錬炉底滓1・炉壁1、HC1A区から鍛冶滓5・製錬滓5・炉壁2、YA1区から鍛冶滓1・炉壁1、YA2A区から鍛冶滓(碗形滓を含む)50・製錬滓13・炉壁19・鉄塊系遺物1、YA2B区から鍛冶滓10・炉壁7が出土しているが(数量は概算)、時期は奈良時代～平安時代の土器と共に出土した場合が多いものの古墳時代後期の須恵器も出土しており、特定できなかった。またYA2A・2B・3区を中心にウマカウソの歯や骨が50点あまり出土している。(平井)



第277図 その他の出土遺物(古代・中世・近世9)(1/6・1/4・1/2・1/3)

第4章 ま と め

第1節 発掘調査成果の概要

窪木遺跡は岡山県の南西部の総社市窪木に位置する。遺跡は標高8.5m前後の平野部と、そこに接する標高約90mの独立小丘陵である長良山の西麓に立地していた。

発掘調査は岡山県立大学の建設に伴うもので、約3年間にわたって実施した。この発掘調査において設定された調査区は、約30ヘクタールの大学用地内の広範囲に分布しており、第2図に示しているように、現行の行政区画に従うかたちで、西側が南溝手遺跡、東側が窪木遺跡という名称を用いることとしている。今回報告する調査区は窪木遺跡の最も東側に位置する。

発掘調査報告書は4分冊に分けることとし、すでに『南溝手遺跡1』・『南溝手遺跡2』・『窪木遺跡1』を刊行している。

今回『窪木遺跡2』として報告する調査区では、縄文時代後期初頭の土器や平安時代の建物や土器が特に注目されるが、以下報告書の節立てに沿うかたちで、発掘調査成果についてまとめてみたい。なお、すでに報告している調査区の成果との関連など、全体としての考察が求められるが、筆者の力不足のため必要な点にのみふれるにとどめたい。

1. 縄文時代の遺構・遺物

斜面堆積1から後期の土器と石器、土壌1と斜面堆積2から晩期の土器が出土している。その他に遺構に伴わない後期・晩期の土器が少量出土した。これらについては本文中に説明されているが、ここでは斜面堆積1から出土した後期初頭の中津式段階の土器について若干のまとめを行いたい。

(1) 出土状況について

本文中に述べられているように、東から西にのびた丘陵裾部の斜面堆積土中から出土した。これらは確実ではないが、出土地の東部の丘陵緩斜面上に想定できる集落地から廃棄された土器と考えられる。出土した範囲は約18×5mの範囲で、おそらく廃棄された土器のすべてを採集できたものと思われる。同時期の遺物は、調査区外に存在している可能性が考えられるものの、いわゆる遺跡内における「地点」としてのまとまりとして捉えることのできる資料であろう。

(2) 出土土器について

斜面堆積1から出土した縄文土器の総量はコンテナ約4箱分である。このうち図示しているのは、ほとんどすべての有文土器の口縁部・胴部と無文土器の口縁部、および底部と残存状態のよい無文土器の胴部片である。⁽¹⁾これらは本文中でも述べられているように、少量の福田K2式や津雲A式および型式不詳の土器を除くと、ほとんどはいわゆる中津式段階の土器であると考えられる。⁽²⁾本文中の説明と重複する部分もあるが、これらの中津式段階の土器について以下のような観点からその特徴をまとめてみたい。対象とした土器は1561～1582、1585・1586・1589・1590・1596～1624・1626～1629・1636～1695・1704～1713⁽³⁾である。

(1) 器種については小片のため不明確なものが多いが、深鉢・浅鉢・壺？(1596)が確認できる。⁽⁴⁾深鉢に

は有文と無文があり、無文深鉢のほとんどは粗製である。浅鉢にも有文と無文があり、ミガキなどによって丁寧に調整されているものがほとんどである。個体数についてははっきりしないが、有文土器の口縁部形状や文様の相違、無文土器の口縁部形状や調整などから推定するならば、有文深鉢20前後、無文深鉢15前後、有文浅鉢1～2、無文浅鉢3～5ではなかろうか。しかし底部の数は10個体前後と少ないことから、多くは破片の状態で廃棄されたものと推測できよう。

(2)有文深鉢の器形については、頸部以下まで接合できる個体がほとんどないため、口縁部の形状のみで判断すれば、平縁のものと波状口縁のものがある。波状口縁のものには、(A)ゆるやかなもの(1563・1564・1576?)、(B)突起状のもの(1581・1597)、(C)いわゆる水平な頂部をもつ富士山形のもの(1561・1562・1568?・1572?・1573?)がある。波状口縁として判断したもの以外は平縁で、平縁のものの方がかなり多い。なお1614には胴部と頸部をつなぐかたちで橋状把手がついている⁽⁶⁾。無文深鉢の器形はほとんどすべてが平縁ではなかろうか。有文浅鉢1585は小型の碗形である。無文浅鉢には皿形のもの(1579～1581)と碗形のものがあるようである。皿形の無文浅鉢の口縁端部にはやや肥厚し、内傾するものがある。また1673・1679には突起が、1682には円形の穿孔がある。

(3)口縁端部形状については、磨滅の度合いによって不明瞭なものもあるが、有文深鉢では、(a)肥厚せず角張るもの⁽⁶⁾(1561～1563・1567・1569など)と、(b)わずかに肥厚し丸みを持つもの(1575～1580など)との二種類が認められる。無文深鉢では、角張るもの(1637・1639・1641・1650・1651など)、丸みをもつもの(1642・1644～1649など)、先が尖り気味なもの(1636・1638・1640・1653・1664～1666など)がある。浅鉢には角張るもの(1646)と、わずかに肥厚するもの(1677～1682)とがある。

(4)口唇部には文様を施したものは少ないが、有文深鉢では1561の波頂部に磨消縄文部の擬縄文が、1562の波頂部に円形刺突、1563の波頂部に刻目が、1581の突起部に刺突を施した沈線と縄文が、1590には縄文が施されている。また無文土器では1574～1576に刻目が施されている。

(5)口縁部や頸部などの外面には以下のような文様が施されている。有文深鉢の中では磨消縄文が最も多い(磨滅のため縄文の有無が不明瞭なものも含む)⁽⁷⁾。沈線のみと考えているのは、1571・1582・1586・1603・1619・1627である。また1589・1590は縄文のみである⁽⁸⁾。有文浅鉢1585は磨消縄文である。

(6)磨消縄文の文様構成の特徴については以下の点が指摘できる。1581・1564(推測)は口縁部に窓枠状の区画文がある⁽⁹⁾。1562は小さなJ字文が描かれている。1585・1598(推測)は紡錘文が描かれており、1585は口縁端部文様帯に接している。1586・1607には渦巻文が描かれている。1581・1621・1622(これらは同一個体)は直線的な磨消縄文である。1561にはスペード文が描かれている。1565・1566は横に流れるような磨消縄文である。また縄文帯が口縁端部にあるものとないものとの割合についてみると、約半数ずつである。なお沈線のうち1562は巻貝の頂部を利用してのように観察できた。

(7)磨消縄文の縄文については、小形の巻貝による擬縄文が最も多い(同一個体もあるので約22片)。縄文の撚りについては、RLが約10片(このうち1589は他と比べて節が小さいのが特徴的である)、LRが1片である。沈線がつぶれているかどうかや縄文の方向が異なっているかどうかについての観察結果によれば、ほとんどがいわゆる充填縄文と考えておきたい。

(8)文様としての沈線の太さ・深さについては、施されている部位によっても異なるが、幅3～4mm、深さ1～2mmのものが多く、1571・1602・1616のように幅2mm、深さ1mm前後のものが少量認められる。ただし1570・1619は他と比べて太く、深い印象を受ける。沈線内に刺突を施しているのが1651・1581・1614・1615で確認できる。

(9)縄文帯の幅(沈線外端間の距離)については、一つの破片のなかでも、また各破片間でも一定しておらず、およそ8~24mmと様々である。これは磨消縄文の文様構成が整然とせず定型化していないことの反映であると考えられる。

(10)内外面の調整をみると、有文深鉢では、外面はナデかミガキである。内面は巻貝条痕が残っているものが約10片あり、基本的には巻貝によってナデたり、削ったりしたのちにミガキやナデによって調整したものと推測できる。無文粗製土器では、外面は巻貝条痕のままのものが多く、のちにナデを施したものが少量認められ、内面は巻貝条痕の後にナデを施したものがほとんどである。ただし1656は異質で、外面には巻貝条痕ではなく、原体不詳の条痕が認められる。また1695の外面には巻貝条痕の後に1本ずつ引いた条痕が認められた。さらに1702には巻貝条痕は残っておらず、外面は横方向のケズリのちナデで、内面はナデのちミガキ?ではないかと観察でき、他とは大きく異なっている。時期的・形式的に古いものかもしれない。

(11)底部については、1704・1705・1707・1708・1710・1713が平底で、1707は縁のある凹み底、1709には僅かにリング状の縁が認められる。⁽¹⁰⁾

(12)色調については観察表に記しているように、数種類が認められる。胎土にはおもに1~4mm程度の花崗岩起源の砂粒を含んでおり、量的には多いものと少ないものがある。焼成には良好とやや不良とがあり、無文深鉢にはやや不良のものが多い。また有文深鉢には1561・1563・1581・1614などの良好なものが多いが、少量ではあるが1571・1586・1603・1607は良好ではなく、磨滅が著しい。器壁の厚さについては、深鉢では5~6mm前後で、薄い印象をうける。浅鉢は深鉢より少し厚く、7mm前後のものが多いようである。

ところで、中津式をめぐっては、近年資料が増加しつつある中期末の土器群をもとに、その変遷過程を地域的に明らかにすることや、関東地方の称名寺式土器との関係など、その成立の歴史的背景を明らかにすることが課題とされている。そうしたなかで中津式の編年についても、今村氏の中津Ⅰ式・Ⅱ式の細分編年案⁽¹¹⁾を基本に、玉田氏による中津Ⅰ式(古)・中津Ⅰ式(新)・中津Ⅱ式の編年案⁽¹²⁾や澤下氏による中津式古段階・新段階区分⁽¹³⁾が提唱されており、基本的な編年基準については認知されつつあると思われる。そこで、ここではこうした各氏の編年案に基づくと、今回出土した土器群がどのように位置づけられるのかという点について少し考えてみたい。

前述した諸特徴のなかで、器形の点では、富士山形の波状口縁や口唇部形状が角張るものの存在、および磨消縄文の文様構成の点では口縁部の窓枠状区画文や紡錘文の存在は、これらの土器群が中津Ⅰ式段階のものと想定できる根拠となりうるであろう。この他に、小さなJ字文や渦巻き文の存在も矛盾しないと思われる。逆に中津Ⅱ式と考えられる特徴はほとんど存在していない。したがって斜面堆積Ⅰ出土の中津式土器群は、中津Ⅰ式段階のものと理解することができるのではなかろうか。

次に中津Ⅰ式のなかではどのように位置づけられるのかについて、玉田氏が中津Ⅰ式の古段階の典型資料とされているケンギョウ田遺跡⁽¹³⁾(岡山県総社市)出土土器群との若干の比較を試みてみたい。⁽¹⁴⁾

ケンギョウ田遺跡は、窪木遺跡から北西に約12km離れた内陸部の高梁川左岸に位置する自然堤防上に形成された小規模な遺跡である。出土した土器量は多くなく、遺跡のあり方や出土状況の点で窪木遺跡との共通性が認められる。ケンギョウ田遺跡出土土器を中津Ⅰ式の古段階と考える特徴としては、器形では、横に走る隆帯によって区画された口縁部に沈線による文様帯をもつ深鉢や筒状の突起をもつ波状口縁深鉢など中期末的な要素をもった土器の存在が指摘されている。また磨消縄文の文様

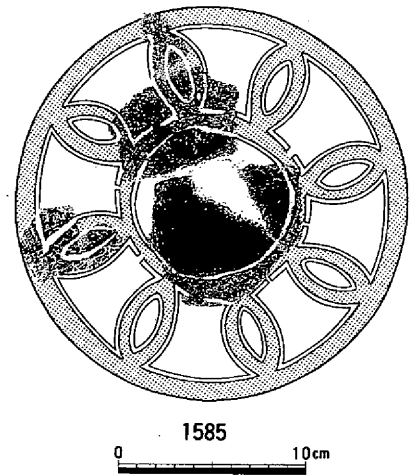
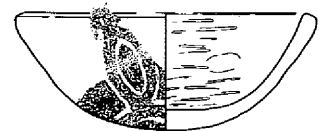
構成については、口縁部に窓枠状の区画文をもつものが多いこと、胴部の紡錘文、直線的なものや整然としていない(典型的な磨消縄文になっていない)ものが多いことがその特徴として指摘されている。

一方窪木遺跡では、中期末的な要素をもつ土器としてケンギョウ田遺跡では顕著でない富士山形の突起をもつ波状口縁深鉢や口縁部外面と口唇部に縄文を施した深鉢⁽¹⁵⁾の存在を指摘することができる。また、ケンギョウ田遺跡出土の報告書番号図7-1番の深鉢と窪木遺跡1581とは器形の点では口縁部が突起状の波状口縁になっており(ただし突起の形状は異なる)、また文様構成の点では、口縁部に窓枠状の区画文をもち、頸部には直線的な磨消縄文が描かれる点で共通性が認められる。さらにケンギョウ田遺跡出土の報告書番号図8-21番の深鉢は、磨消縄文ではなく巻貝条痕地に沈線で文様を描いたものであるが、口縁部と胴部に巡らされた横方向の帯の間を紡錘文でつないでいる。この文様構成については、窪木遺跡の浅鉢1585の磨消縄文(第278図)が、器種は異なり、また擬縄文を充填しているという相違はあるが、共通性が認められるのではなかろうか。そのほかに文様ではスペード文や小さいJ字文の存在や沈線内に円形刺突を施すものの存在も両者に共通している。したがって、ケンギョウ田遺跡と同じ器形の中期末的な深鉢は含まれていないものの、窪木遺跡斜面堆積1出土土器は、中津式では古い段階のもの、玉田氏の中津I式古段階として理解できるのではなかろうか。

しかしながら、両者には相違点もかなり認められる。たとえば有文深鉢の文様手法において、ケンギョウ田遺跡では巻貝条痕地に沈線文のみ施したものの割合が多いのに対して、窪木遺跡では磨消縄文のものが圧倒的に多い。磨消縄文については、擬縄文が用いられている割合に違いがあり、窪木遺跡の方がかなり多い。また沈線に囲まれた文様内に刺突を施す中期末的な文様がケンギョウ田遺跡にはあるが窪木遺跡にはない。有文深鉢の口縁端部形状において、ケンギョウ田遺跡では角張るものがほとんどであるのに対して、窪木遺跡ではわずかに肥厚するものが一定量存在している。無文深鉢の口縁端部形状についても、ケンギョウ田遺跡では角張るものが多く、かつ口唇部に刻目を施すものが一定量存在するのに対して、窪木遺跡では口縁端部は丸みを帯びたものや先細りのものが多く、口唇部に刻目を施すものも僅かにすぎない。底部についても、ケンギョウ田遺跡では縁を持つ凹み底が多いのに対して、窪木遺跡では凹み底が少なく平底の方がかなり多い。浅鉢が存在している点では共通しているが、窪木遺跡の1681のように口縁端部が内傾して浅い形態のものが、ケンギョウ田遺跡には存在しない。

こうした土器にみられる相違点は、資料の制約上の問題かもしれないが、時期差や地域性を反映したものとも考えることができる。しかしながら、今はそうした問題を検討する力量はなく、両者の共通点と相違点を指摘するにとどめたい⁽¹⁶⁾。

ところで窪木遺跡やケンギョウ田遺跡は、中津式土器を出土する遺跡の中では、中津貝塚・阿津走出遺跡・里木貝塚など当時の海岸線に近い位置に所在する遺跡とは異なって、内陸部に形成された遺跡である点に特色がある。また、岡山県立大学の建設に伴う発掘調査では、今回報告する中津式～津雲A式段階の後の彦崎K2式段階には、約700m南西の沖積地内に位置する南溝手遺跡において集落が形成されているこ



第278図 斜面堆積1出土土器 (1/4)

とをすでに報告している⁽¹⁷⁾。

こうした海岸部の貝塚を伴う遺跡とは異なる遺跡については、近年海岸から離れた扇状地や山裾に位置する中期末の長縄手遺跡⁽¹⁸⁾や中期末～後期の朝寝鼻貝塚⁽¹⁹⁾、沖積地に位置する津島岡大遺跡⁽²⁰⁾などの発掘調査がおこなわれ、新たな知見が得られつつある。

たとえば、朝寝鼻貝塚はおもに中期末から後期前葉にかけて沖積地に接する丘陵裾部に形成された貝塚で、この貝塚を形成した人々の居住地は未確認ではあるが、先述した長縄手遺跡の例から、丘陵の裾部に小規模な集落を構成していたのではないかと推測される。そしてこの朝寝鼻貝塚から旧河道をはさんで数十m南東の沖積地上に位置する津島岡大遺跡では後期前葉から中葉に形成された集落の実態が明らかにされつつあるのである。

このように中期末から後期初頭段階には、海岸に近い場所に居住した人々とは別に、内陸部の扇状地や丘陵裾部に占地し始めた人々があり、この人々は後期前葉から中葉には近隣の沖積地上に本格的や定住集落をつくって生活するようになったことが、一部ではあるが実証されつつある。こうした人々の生業が、海産資源に多くを依存していたと思われる海岸部の人々とは違っていたことは、集落を取り巻く環境が異なっていることから明らかであろう。

この点については、従来漠然と農耕との関連が推測されていたが、ここ数年の間に南溝手遺跡⁽²¹⁾や津島岡大遺跡⁽²²⁾・長縄手遺跡⁽²³⁾で次々に発見されたイネなどの植物珪酸体は、そのことを実証する第一歩である。今後は稲作やそれ以外の農耕について、種子の目的意識的な検出や自然科学的手法による分析などによって、生産地や生産用具などのより具体的な実態を解明するとともに、狩猟・採集との関連⁽²⁴⁾なども明らかにする必要があるであろう。

ところで、岡山県立大学の建設に伴う発掘調査成果のうち、縄文時代については、後期の稲作について『南溝手遺跡1』・『南溝手遺跡2』において、また晚期中葉・後葉の土器(孔列文土器や丹塗り磨研土器を含む)について『南溝手遺跡1』・『南溝手遺跡2』・『窪木遺跡1』において若干のまとめを行っているので参照されたい。

2. 弥生時代前期～中期前葉の遺構・遺物

この時期の遺構・遺物は、東から西に張り出した丘陵裾部に位置するYA 2・A・2B・3区とHC 1A・6区において、竪穴住居2軒、掘立柱建物1棟、土壇26基、溝12条が検出できている。時期は前期後葉～中期前葉のものが多く、竪穴住居はいずれも中期前葉である。竪穴住居28は埋土中からサヌカイトの石器や剝片が比較的多く出土していること、および竪穴住居29は火災を被っている点が特徴である。土壇は不整形なものが多く、出土遺物も少量であった。溝は小規模なものが多く、水路と考えられるものは少ない。

ところで今回の調査区からは検出できていないが、岡山県立大学の建設に伴う発掘調査で判明した注目すべき成果の一つとして、岡山県下では数少ない弥生時代前期前葉～中葉の遺構・遺物の発見がある。未調査区が多いことや同時期に存在していた遺構の認定が不確実であることなどを前提条件としたうえではあるが、遺構・遺物の数が中期中葉以降に比べて少なく、集落規模は小さいといえよう。たとえば竪穴住居は約15ヘクタールの範囲内に存在していたのは、おそらく10軒以下であると推測できる。またこれらの竪穴住居は、2～3軒が50m前後の距離を隔ててまとまって占地し、掘立柱建物や土壇とともに一つの生活単位を形成していたものと考えられる。さらにこうした生活単位は、おそらく旧地形(河道や水田など)に規制されるかたちで、約100mの間隔で数か所に散在して、一つ

の共同体を形成していたのではないかと想定できる。(第279図参照)

岡山県下では、弥生時代前期の集落については、これまで百間川沢田遺跡において前期中葉の「環濠集落」の存在が想定されているが、それとは異なる集落の形態が明らかになったことになる。

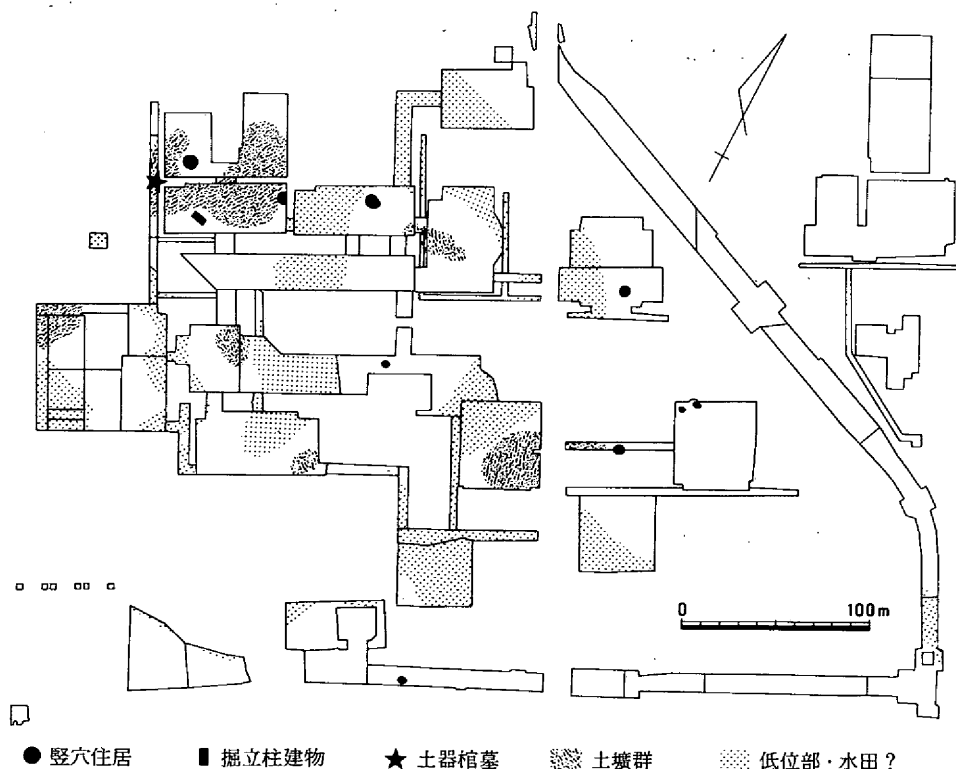
また縄文時代晩期との関連が同一遺跡で考察できたことも成果の一つといえる。すなわち晚期中葉の中段階に炉跡や土器溜りを残した人々は、中葉の新段階には場所を移動したらしく、遺構や遺物はあまり残していない。その後晩期後葉には検出できた遺構は少ないが、土器はかなり残されていた。しかしながら土器でみると後葉新段階の時期のもの(「沢田式」)が少ない。後葉新段階の時期には場所を移動したのか、未調査区に遺構・遺物が眠っているのであろうか。あるいはこの地域では、土器は晩期後葉中段階から「沢田式」が欠落するかたちで弥生前期前葉に変化するのであろうか。

こうした土器の時期的な変遷の問題とは別に、遺構については、弥生時代前期では竪穴住居や土塙が比較的明瞭(埋土が褐色系統)に検出できたのに対して、縄文時代晩期の遺構は、土塙の一部を除けば検出が困難であった。たとえば土器溜りとして報告している土器については、何らかの穴に廃棄されているのではないかと慎重に調査したが、そうした痕跡は見いだせなかった。また火処として報告したものも、多くは掘り方が検出できていない。竪穴住居の存在も当然のことながら想定しながら調査を進めたが、確認できなかったことを記しておく⁽²⁵⁾。

出土した土器については、岡山県下では最古級のものが含まれており注目したいが、久保氏によるおもに編年的な観点からのまとめが、『窪木遺跡1』において行われているので参照されたい。

3. 弥生時代中期中葉～後期の遺構・遺物

検出できた遺構は、竪穴住居10軒、掘立柱建物2棟、土塙37基、袋状土塙7基、溝12条、火処1、護岸状遺構1、石列1、柱穴などで、今回の調査区では最も多い。時期が特定できない遺構もあるが、



第279図 南溝手遺跡・窪木遺跡の弥生時代前期遺構概略図 (1/4,000)

時期ごとに立地が変化していることが窺えることを、遺構・遺物の概要の項で述べた(P48)。全体的に細長い調査区であるため、集落構成は不明であるが、地形から考えても、なだらかな丘陵裾部に位置するYA2A区やHC1A区周辺が集落の中心であったであろう。

岡山県立大学建設に伴う発掘調査成果との関連では、これまでIN区の井戸だけで、遺構・遺物が僅かであった後期末葉の竪穴住居の存在が注目される。

ところで、今回報告する調査区は、全体の調査区の東端部に当たり、また調査面積が少なく、かつ細長いため、集落の構成や変遷についての考察には不十分であることはすでに述べたところであるが、これまで『南溝手遺跡1』・『南溝手遺跡2』・『窪木遺跡1』で報告した調査区を含め、全体としてみた場合に指摘すべきと思われる二・三の点について記しておきたい。

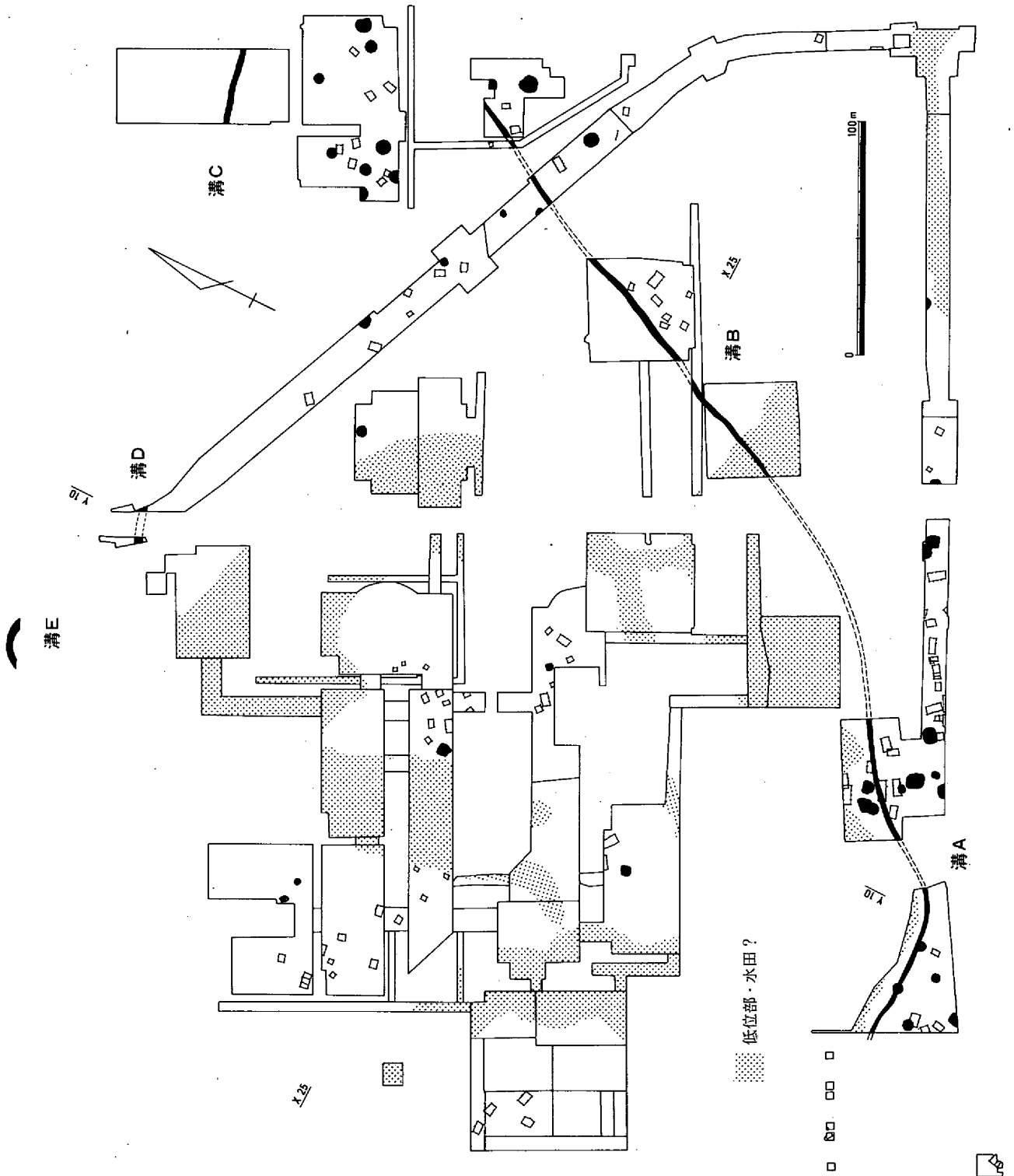
第280図はこれまで中期中葉～後期の遺構として示した全体図をもとに、竪穴住居と掘立柱建物やおもな溝などを示したものである(今回報告した調査区は除く)。時期としては建物など特定しにくいものもあるが、中期後葉から後期前葉段階のものがほとんどを占めていると考えられる。

まず竪穴住居や掘立柱建物の分布をみると、低位部・水田によって5～6にグルーピングできそうである。しかし未調査区も多く実態は明らかにしがたい。つぎに竪穴住居と掘立柱建物の数についてみると、特徴が認められる。すなわち竪穴住居に比べて掘立柱建物の数がかかなり多いことが指摘できる。同時期に存在していた数は不詳であるが、すべての数を数字で示せば、竪穴住居44軒に対して掘立柱建物113棟である。岡山県下では弥生時代の集落構成が窺える遺跡は多くはないが、たとえば県北部では中期後半に丘陵上に営まれた小規模な集落が、数軒の竪穴住居と数棟の掘立柱建物で構成されている場合が多いことは、沼遺跡の発掘調査⁽²⁶⁾を嚆矢に、その後もいくつかの遺跡において検証されている。一方、大規模な集落については、県南部の丘陵上に立地する奥坂遺跡では、集落全域が調査されているわけではないが、中期後葉には竪穴住居7軒、掘立柱建物5棟、後期前葉には竪穴住居11軒、掘立柱建物2棟で構成されると考えられている⁽²⁷⁾。また平野部に形成された集落としては、百間川遺跡群が知られている。百間川遺跡群は百間川の改修工事に伴う発掘調査によって明らかにされつつあり、調査区は東西には長くのびるものの、南北は現在60～80mの調査区であるため、集落の全体が明らかにされているわけではないが、百間川今谷遺跡では中期中葉の掘立柱建物群が検出されており、周辺で出土した「ガラス滓」や竪穴住居がほとんど存在しないことから、なんらかの工房跡と推定されている⁽²⁸⁾。また百間川原尾島遺跡の低水路調査区では、後期全段階の総数としては、竪穴住居約45軒に対して、掘立柱建物40棟近くと報告されている⁽²⁹⁾。さらに南溝手遺跡・窪木遺跡の南東約4kmに位置する津寺遺跡では、これまでに中期後葉～後期の竪穴住居約65軒に対して、掘立柱建物は約3棟のみが報告されており、南溝手遺跡・窪木遺跡とは対照的な状況を示している⁽³⁰⁾。以上大雑把な比較ではあるが、南溝手遺跡・窪木遺跡のように掘立柱建物が竪穴住居の2～3倍も存在する例は少ないようである。

竪穴住居に比べて掘立柱建物がかかなり少ない場合、その掘立柱建物は、従来指摘されているように、米などを保管するための高床倉庫と想像できるが、南溝手遺跡・窪木遺跡のように多数の掘立柱建物が存在する場合は、その掘立柱建物には高床倉庫以外に平地住居や高床住居、作業場・集会所あるいは祭場など様々な用途のものが含まれていると考えるべきであろう。

この点については、検出した掘立柱建物の平面形や柱穴の規模の違いから、住居と倉庫が区別できるのではないかとの指摘を『南溝手遺跡1』と『南溝手遺跡2』のまとめにおいて述べた。倉庫・住居以

外については、具体的な用途を推定する情報は得られなかったが、南溝手遺跡・建物66については、規模は3×1間で面積は27.5㎡と近年各地で見つかった巨大建物に比べれば小規模ではあるが、今回検出できた掘立柱建物のなかでは最も規模は大きく、楕円形や方形を呈する柱穴の掘り方も一辺80cm強の大形で、深さも検出面から100～110cm残存しており、他の掘立柱建物の柱穴とは規模の点で



第280図 南溝手遺跡・窪木遺跡の弥生時代中期後葉～後期前葉遺構概略図 (1/2,500)

大きく異なっていた。⁽³¹⁾何らかの特別な用途を考えるべきと思う。

南溝手遺跡・窪木遺跡は、平野部で確認できた弥生時代中期後葉～後期前葉の集落としても重要であろう。集落の全貌は明らかではないが、いくつかの集団が最低でも500m四方の範囲に生活し、水田経営も行っていたことが窺える遺跡である。⁽³²⁾

一方、こうした平野部に生活した人々とは別に、丘陵上に居住していた人々のいたことも知られている。南溝手遺跡・窪木遺跡の北西約1.5kmに位置する西山遺跡は、標高約30mの北へのびる舌状丘陵先端部に形成された中期後葉の集落である。A・B両地点から合計で竪穴住居7、掘立柱建物1、段状遺構1、土壇2が検出されている。⁽³³⁾また北西約2.2kmに位置する中山遺跡は南に張り出した標高約50mの舌状丘陵頂部に形成された中期後葉の集落で、竪穴住居2、掘立柱建物9、段状遺構11、土壇7が検出されている。⁽³⁴⁾

平野部に存在する南溝手遺跡・窪木遺跡と丘陵部に存在する西山遺跡・中山遺跡では、出土土器型式からは同時期の段階がある。ただし、南溝手遺跡・窪木遺跡の場合は中期後葉以降も集落は継続しているが、西山遺跡・中山遺跡では中期後葉のみの遺構・遺物しか出土していない。しかしながら、西山遺跡・中山遺跡で出土した遺物は、壺・甕・高杯などの土器や石器・鉄器などで、量的には少ないものの、内容的には南溝手遺跡・窪木遺跡と相違はないと考えられる。遺構の点でも、丘陵部には段状遺構という性格不詳の遺構はあるが、竪穴住居、掘立柱建物とも規模・内容に大きな相違は認められない。こうしたことから平野部と丘陵部の集団間に、対立的な関係や従属的な関係を認めるよりは、たとえば母村・分村といった関係を想定すべきかもしれないが、実証する資料は得られていない。

次に、第280図において黒く塗っている溝A・B・C・Dについてふれておきたい。これらの溝については、『南溝手遺跡2』と『窪木遺跡1』において規模や時期などは説明しているが、問題はその用途について、「環濠」と考えることができるかどうかである。

まずこれらの溝について重要と思われるいくつかの特徴について、まとめておきたい。溝の規模は検出面の深さに関係してくるが、溝A・Bではほぼ共通しており、検出面では幅140～280cm、深さ70～120cmを測る。本来の規模については、削平をどの程度考えるかによって違ってくる。たとえば周辺で検出される竪穴住居は浅いもので5～10cm、深いものだと30～40cm、袋状土壇は深いもので50～60cm残存している。したがって1m以上の削平は考えがたく、一応50cm前後と推定したい。そうすると本来の溝は約1m幅広く、50cm前後深かったと推測でき、かなり規模は大きい。溝C・Dでは検出面の幅は190～320cm、深さは66～160cmで、さらに大規模である。「環濠」と考えるには十分な規模である。

溝の断面形については場所によって若干の相違が認められるが、いずれも逆台形を呈している点で共通している。ただし、各断面図に示した形が掘削時の形状を示しているかどうかは検討を要する。たとえば、底部近くが屈曲し、底面が平坦なのは溝浚えを行った可能性が考えられる。また、埋土の状況からは大きく上・下層に区分でき、最終的には炭や焼土とともに意図的に埋められた可能性が高いことを上層の観察から指摘した(溝A)。この最終段階の状態を示していると思われる上層の断面形は、底面は平らでなくV字形にちかい。なお溝Aでは、最下層に堆積しているグライ化した灰色系の粘土の存在から、水が流れていた可能性が高いと考えているが、実証できたわけではない。

溝A・Bの掘削から廃絶の時期については、竪穴住居や他の溝との切り合い関係、および上層から出土した土器から、後期前葉の時期幅の間の短期間に、掘削し廃絶されたものと考えられる。機能し

ていた期間が短い(一土器型式の間におさまる)という特徴がある。溝Cについては、出土土器から中期中葉頃にはすでに機能していなかったと報告されている。溝Dは出土土器から後期前葉の可能性が高いと報告されている。

これらの溝の接続関係については、溝A・Bがつながる可能性が高いことは、その検出位置やこれまで記した規模や断面形、出土遺物の時期が一致することからいえよう。また溝C・Dについては、報告されている時期に違いはあるが、規模・形状からはつながる可能性が高いと判断したい。

問題は、溝A・Bと溝C・Dがつながるかどうかである。規模や断面形状などからつながると考えることはできるが、つながらない可能性もあり、実証できない。つながるとすると『窪木遺跡1』の河道3を横切ることになる。河道3は、出土土器から弥生時代中期中葉から古墳時代後期までの長期間にわたって機能していたと報告されており、不都合である。しかしながら、調査範囲は狭く、後期前葉の時期には一時埋没していたと考えられないこともない。ちなみに底面の海拔高を比べると、溝A・Bがおよそ7.1~7.7m、溝C・Dがおよそ6.5~6.9mで、異なっている。

さて仮に溝A・B・C・Dがつながり、集落を囲む「環濠」と考えた場合、次のような問題点が指摘できる。第一に「環濠」の内と外に同時期の堅穴住居や掘立柱建物が存在していることになる。この点については、「環濠」内外の遺構に土器型式ではわからない時期差がある、あるいはこの「環濠」の外側に内外の遺構を囲むより大規模な「環濠」があると想像することもできるかもしれない。第二に明確な形で検出できたわけではないが、「環濠」の内側に、『南溝手遺跡1』の第450図に示した水田域が存在していることになる。水田域を取り囲むような「環濠」はあるのであろうか。⁽³⁵⁾

回りくどい記述になってしまったが、結論は溝A・BとC・Dはつながらない可能性が高く、仮につながったとしても「環濠」にはならないと考える。水田のための用・排水路や水害から集落をまもる溝などと考えるべきではなかろうか。⁽³⁶⁾

南溝手遺跡・窪木遺跡では後期中葉~後葉の遺構・遺物がほとんど検出できなかったことや、後期末葉の遺構・遺物もIN区の井戸やYA3区の堅穴住居などで、中期後葉~後期前葉に比べればごく僅かであることも特徴である。こうした事実の持つ意味については、未調査地がかなり存在することや、周辺に存在する遺跡の状況も十分には判明していないため、今後の課題とせざるを得ない。

今回出土した遺物については、堅穴住居31から出土した緑色安山岩か緑色頁岩製の勾玉および管玉などの未製品や溝166・171から出土した木製の鋤や建築材、護岸状遺構出土の木製鋸、および時期は特定できないが磨製石鋸や分銅形土製品、ガラス小玉などが注目される。⁽³⁷⁾

ところで、土器については、『南溝手遺跡1』・『南溝手遺跡2』で、中期前葉と中葉の区別が難しいと記した。そこで、この点を含め、中期の土器について少し述べておきたい。

今回報告する調査区からは、土壙165や溝165・166などから中期中葉の土器が出土している。この土器群は壺・甕の体部内面下半や高杯脚部内面にケズリが観察できないことや、壺の頸部に凹線文がないことなどから、中葉のなかでも新相より古いことは明らかである。しかしながら、壺における胴が強く張る器形や口唇部における凹線文の出現を指標とする中葉中相なのか、それ以前の古相なのかは、よくわからない。

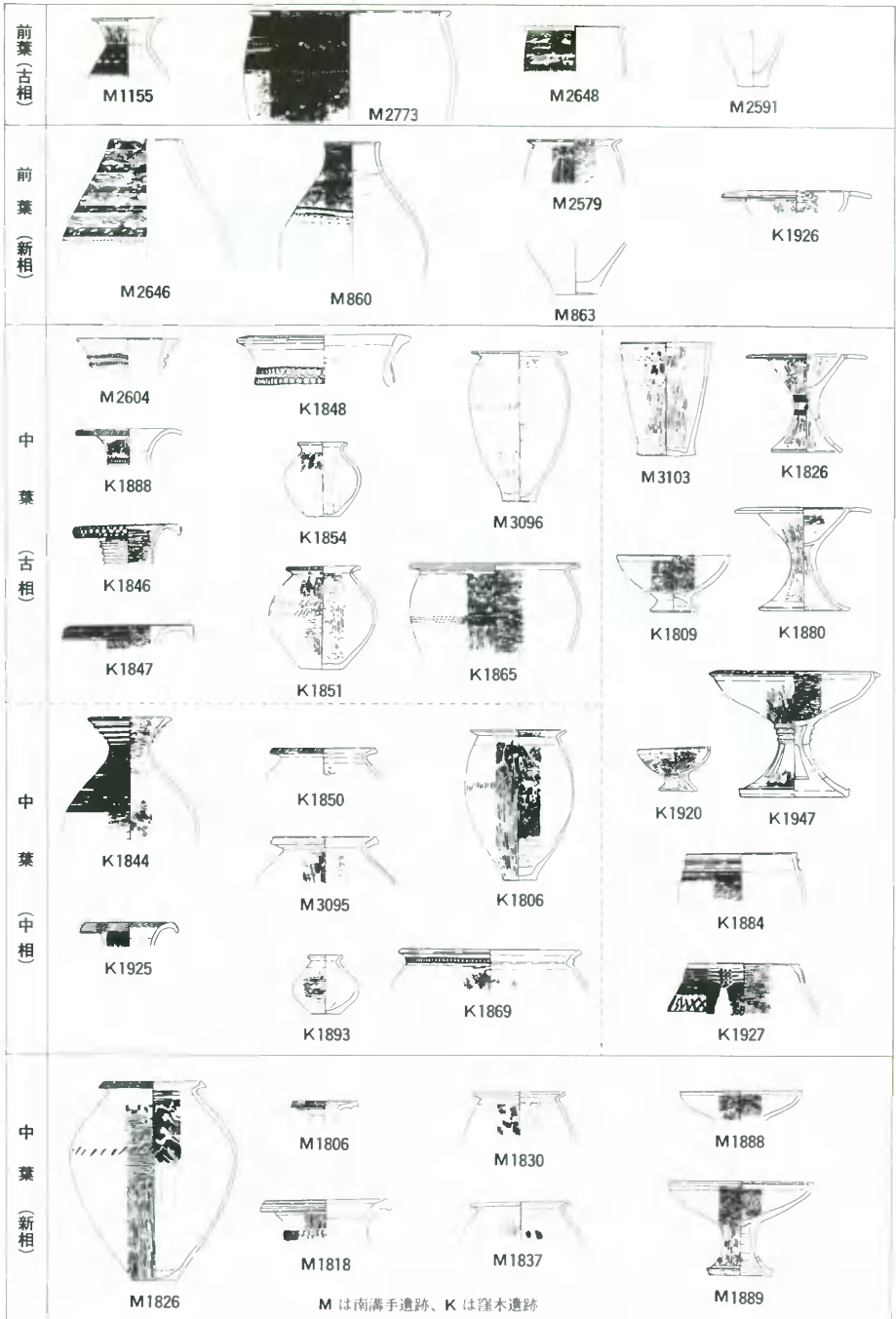
中期前葉から中葉にかけての土器については、備中のみならず備前を含めても公表されている資料は少なく、またこの時期は器種も豊富で、かつ器種ごとに微妙な変化を示しているため、必ずしも明確なかたちで編年が示されているとは思われない。この時期の土器について詳しく検討する紙幅はな

いが、今回の報告では、南溝手遺跡と窪木遺跡で出土している当該期の甕について、すでに指摘されていることではあるが、おもに口縁部の形状や調整、体部内面の調整、底部の形状といった視点から次に述べるような基準で区分した。

口縁部が、くの字、あるいは倒L字形で、体部外面上位にクシ描き文や刺突文を施し、かつ体部上半に膨らみをもつものを前葉の古段階とした。底部は厚みがある。M2648・863など(Mは南溝手遺跡を指す。以下同じ)。前葉の新段階は、くの字形の口縁部でクシ描き文は施されない。口縁部と体部内面はミガキ調整であり、このことに関係してか口縁部はゆるく外湾しているのが特徴である。M2579など。

前葉と中葉の区分は口縁部内面のミガキが省略され、弱いながらもヨコナデ調整のままの甕を考え、これを二中葉古相とした。口縁部の形状は、前段階と同じく、ゆるく外湾している。底部は前葉のものに比べて薄くなる。M2656・3096など。中相には口縁部に強いヨコナデが施され、特に口縁端部のヨコナデによって口唇部は面をもち、僅かではあるが上方につまみあげられているような甕を考えた。口縁部形状はヨコナデのために外湾しない。底部は平底で、内面が指オサエなどによって屈曲しているのが特徴である。また円盤状の接合痕が観察できる底部が多い。体部内面上半の調整がミガキのものと、押圧やハケメのものがあり、時期差と考えることもできる。K1905～1907など(Kは窪木遺跡を指す。以下同じ)。中相まで最終段階のケズリは観察できない。新相の甕は口縁部は中相と同じようにヨコナデが施されているが、口唇部がヨコナデによってより上方につまみ上げられており、一条の凹線が観察できるものも多い。中相の甕との大きな違いは体部内面下半にケズリが認められることである⁽³⁸⁾。色調は中相以前が赤みを帯びているのに対して、灰白色系統になっている。M1830など。

壺についてはよくわからない。M860・K2604・K1844などは中部瀬戸内型ともよぶべき特徴的な壺であるが、口縁部が外反せず、貼り付け突帯のないものを前葉新相とした。この形態の壺は中葉新相段階まで存在するが、突帯の貼り付け方や胴部形状の変化とともに、口縁部が逆三角形形状に変化するものと考えられる。しかしながら今回の資料では、破片が多いことや甕などとの組み合わせ関係が明らかではないことから、詳しい変化は不明である。また口頸部がラッパ状に開くK1848やK1894のような大形壺、くの字形の口縁部をもつK1851のような壺は中葉古相～中相と考えられる。これらの壺は中相以降に口唇部が拡張され、数条の凹線文が施されるようになると考えられるが、これらの壺のすべてが中相の段階で同時に凹線文化されるかどうかは、今回の資料ではわからなかった。ただし新相にはこれらの壺の口唇部にはほぼ凹線文は施されるのではなかろうか。K1846・1888・1894のように口唇部にヘラ描き沈線や円形浮文、頸部に貼り付け突帯を施す壺は中葉古相から中相に特徴的なものであろう。壺の頸部の凹線文については、新相のなかでも新しい段階に成立するものと考えているが、これが前段階の断面三角形の張り付け突帯からの変化であり、当初は凸部分が意識されていたとの指摘はすでに行われている。一方口唇部の凹線文については、沈線文からの変化として捉える考え方もあるが、今回出土したK1847の口唇部には3条の細い張り付け突帯が巡らされていることから、頸部の変化と同じように、張り付け突帯をヨコナデすることによって口唇部の凹線文もまず成立したのと考えたい。同じことはK1810・1884・1927の存在から、鉢の口縁部の凹線文の成立についてもいえよう。なお壺K1925の口唇部凹線文は一本ずつ引かれたようで、中葉新相以降のものに比べて深く、しっかりしているのが特徴である。古い凹線文形状と考えたい。なおこうした壺や鉢、高杯に貼り付け突帯を多用する時期・段階が存在するかどうかについては今回の資料からはわからない。



第281図 南満手遺跡・窪木遺跡出土弥生時代中期前葉～中葉の土器 (1/10)

また、中葉段階の各器種にみられる各種の紋様(クシ描き斜格子文やヘラ描き刻目文など)についての時期的な特徴についても今回の資料からは明らかにはできなかった。

ジョッキ形土器は中葉段階まで残らないと通常考えられているが、クシ描き文がなく刺突文のみで紋様が簡略化されているM3103は中葉古相と考えている。

高杯についてはM1789・K1926が前葉新相、K1809・1826・1880・1913・1920・1947が中葉古相⁽⁴⁰⁾～中相、M1886～1889が中葉新相と考えている。

4. 古墳時代の遺構・遺物

前期前葉の堅穴住居5軒、掘立柱建物1棟、土壙4基、溝13条、水田、後期の堅穴住居2軒、掘立柱建物1棟、溝2条などが検出できた。

南溝手遺跡・窪木遺跡ではこれまでに前期の井戸6基、土壙2基、溝16条、水田、後期の掘立柱建物5棟、溝5条の他に柵列状遺構29などを報告しているが、全体的な遺構密度は低く、集落構造を云々できる状況ではない。⁽⁴¹⁾

前期前葉の水田については、いわゆる「小区画水田」で、旧地形に規制されている点に一つの特徴がある。またおもにPU・TA・H18・19区の畦畔については、帯状に観察できたマンガン・鉄分の痕跡を畦畔痕跡であると理解したもので、その理由については『南溝手遺跡1』のまとめにおいて記した。しかしながら、明確に実証できたとは思われず、今後の類列に注意したい。⁽⁴²⁾ 時期についても、明確な洪水砂などによって埋没している訳ではないので、絶対ではないが、前期前葉と考えた理由については、前述したまとめにおいて述べた。

「柵列状遺構」とした遺構も注目できる。古墳時代後期の須恵器が埋土中から出土する例はあるが、掘削から廃絶までの時期は明確ではない。古代・中世の節で報告している「柵列状遺構」の時期についても中～近世以外は不確実で、「柵列状遺構」の時期については古墳時代後期～古代と考えるべきと筆者は理解している。これらの「柵列状遺構」はすべてが同時期に存在していた訳ではなく、また穴の形状や方向も異なっていることは、すでに報告しているとおりである。形状については南溝手遺跡4・14や窪木遺跡1～6などのように、極端に言えばピーナツ状の平面形に、二か所のくぼみがあるものと、窪木遺跡11のように洗濯板状に細い溝が連なるものがある。方向は旧地形に規制されているのか、一定しておらず、また鋭角に屈曲したり、方位に沿ってもない。

「柵列状遺構」については、他遺跡の類例や「道路遺構」の可能性があることなどについて『南溝手遺跡1』のまとめにおいて述べた。また最近では南溝手遺跡は「道路遺構」の検出例としてあげられてもいる。⁽⁴³⁾ これまで報告した「柵列状遺構」のすべてが「道路遺構」とは思えないが、窪木遺跡1・2・4～7・15は幅約6mの道路の側溝に関係する遺構として、また窪木遺跡11は道路敷の下に埋め込んだ枕木の痕跡と考えることもできそうである。時期については古墳時代から古代と前述したが、「道路遺構」の可能性のあるものについては、今回報告した奈良・平安時代の遺構・遺物の存在から、古代と考えた方が良いように思える。

出土遺物については、窪木遺跡溝179・185出土土器について少しふれたい。溝179からはコンテナ約90箱の土器が出土した。小片も含め掲載すべきと考えた土器は実測し、136点を図示している。土器の時期は弥生時代後期末葉～古墳時代前期前葉頃である。これらの土器には形態や調整手法から吉備南部地域⁽⁴⁴⁾以外からの搬入品の可能性がある破片が少量含まれていたため、胎土分析を白石氏に依頼した。分析結果については付載4として掲載しているが、調査担当者としての見解を若干記しておきた

い。2015はCグループに入っており、口縁部下端に貼り付け突帯を施す形態からも他地域産と考えるべきなのかもしれない。2018・2019・2022は讃岐あるいは畿内の分布領域に入っているが、器形からは讃岐産と考える⁽⁴⁵⁾。2020は西部瀬戸内系ではないかと考えたが、分析値からはCグループに分類された。2023は畿内産の可能性を考えたが、分析値からは岡山県南部産と考えられている。2024も畿内産の可能性を考えたが、分析値からはEグループの吉備南部と山陰の領域に入っている。2025は畿内系と考えたが、Cグループに分類された。2029・2030は西部瀬戸内系と考えたが、Eグループに分類された。2063・2065は白っぽい色調と右上がりの細かいタタキが特徴であるが、2063はDグループ、2065は讃岐あるいは畿内の分布領域に入っている。2077・2078は白っぽい胎土・色調と肩部外面のクシ描き直線文・波状文が特徴的で、山陰産を考えたが、Eグループに分類された。2079・2081・2082は讃岐あるいは畿内の分布領域に入っているが、角閃石を多く含む胎土とチョコレート色の色調や器形から、畿内産と考えてよいであろう。2103は脚部内面のケズリや器形から吉備南部以外の地域か時期差を考えたが、分析値からは山陰領域に分類された。2104も円盤充填法と器形から他地域か時期差を考えたが、分析値からはEグループに分類された。2106は器形や胎土からは吉備南部産と考えたが、分析値では山陰領域に分類された。2118は口縁部の刻目や器形から他地域産を考えたが、分析値ではEグループに分類されている。2131は器形から山陰産と考え、分析値でも山陰領域に分類された。2132・2133も器形から山陰産と考えたが、分析値では山陰以外のCグループに分類された。

なお、2119は内面朱付着土器として注目される土器である(付載3参照)。朱は内面に付着しており、底部から口縁部付近まで認めることができた。朱は量的に多くなく、注意して観察しないと見逃しかねない。朱の付着状況は、面的に塗布した状態ではなく、ケズリ痕やかすかな割れ目にしみこんだ状態であった。このことから朱は液状か粉状になっていたものと推測できる。底部内面は摩耗しているが、磨られたかどうかは不詳である。外面には明瞭な被熱痕跡は観察できなかったため、煮炊きに用いられたかどうかは不明である。肩部外面には細く鋭い沈線が施されている。時期は明確ではないが、一応前期前葉と考えている。産地については、胎土分析からは吉備南部と山陰が重複する領域に分布している。

溝185出土の平底鉢2151は、器形から朝鮮系軟質土器との関わりが想定できる。口縁端部は欠損しているが、口縁部は強いヨコナデによって緩く外反させられている。体部外面にはかすかではあるが、縦方向のタタキとナデが観察できた。底部は剝離している可能性があり、本来は平底であったと考えている。体部と底部内面はナデである。色調は、外面が黄褐色(2.5YR5/3)、内面がオリーブ黄色(5Y6/3)であるが、出土地点がグライ層であったため、変色している可能性がある。胎土は石英・長石などの花崗岩起源の砂粒が多いが、角閃石の細粒も認められた。時期は伴出した須恵器から6世紀前半と考える⁽⁴⁶⁾。

鍛冶炉の羽口と鉄滓(精錬・鍛冶)・炉壁(精錬・鍛冶)についても少しふれておきたい。これらは竪穴住居44・45の排土と溝179、および包含層中から出土しているが、いずれも本文で述べている理由から、時期が特定しにくかったが、いくつかの状況証拠と発掘時の印象から、筆者は古墳時代後期(6世紀後半～7世紀前半)ではないかと考えている。今後の確実な出土例を期待したいが、先述の朝鮮系軟質土器も製鉄・鍛冶集団や渡来人との関連で理解することができるのかもしれない⁽⁴⁷⁾。

5. 古代・中世の遺構・遺物

古代と考えられる遺構・遺物は今回報告する調査区で多く検出でき、掘立柱建物12棟、土壇11基、

溝21条、柵列状遺構などの遺構と、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・陶硯・陶馬・鉄器・鉄滓などの遺物を報告している。奈良時代～平安時代前期では規則的に並んだ6棟の掘立柱建物(同時併存ではない)とこれらを区画するためと推定できる溝も検出できていることから、これらは公的な建物群であり、規模や形状、あるいは同時期の遺物が少ないことから、倉庫に用いられていたと推測している⁽⁴⁸⁾。また平安時代中期の建物69は身舎が5×2間で、西側に庇を伴う特徴的な建物である⁽⁴⁹⁾。遺物は小面積の調査であるにもかかわらず、多量に出土している。これらの遺物は溝や斜面堆積からの出土が多いが、完形に復元できる土師器(特に供膳具)が多いこと、および陶馬やウシとウマの歯が出土していることから、何らかの祭祀が行われたものと考えている。このように、平安時代中期の遺構・遺物についても、公的な色彩が強いと考えている。

土壇195～198については、完形の土器や河原石・鉄器などを埋納している点に大きな特徴がある。単なる土壇ではないことは明らかであり、地鎮などの祭祀に関連する土壇と考えている。しかしながら、銭貨を伴っていないなど決定的な証拠はなく、今後の類例の発見に期待したい⁽⁵⁰⁾。

ところで、古代の遺構・遺物のほとんどは、YA2・HC1A区に集中しているが、この調査区から続く東側にも、当該期の遺構・遺物が存在する可能性の高い地形が続いている。また岡山県立大学用地の西側は、明確な遺構は発見されていないが、備中国府推定域の一つでもある。そうした未調査部分を考慮に入れて、これらの遺構・遺物についてはさらに検討すべきと考えている⁽⁵¹⁾。

次に、『南溝手遺跡1・2』、『窪木遺跡1』で報告した「素掘溝群」についてふれておきたい。「素掘溝群」の機能については、現存する耕地地割に沿っていることから、何らかの農地耕作に関連する遺構と考えていることなどを、『南溝手遺跡1・2』のまとめにおいて述べた。

「素掘溝群」については、こうした機能の問題の他に、現存する地割がいつ頃形成されたのかを考えるための資料としても重要である。現存する地割については、「備中国賀夜郡服部郷図」に描かれている地割とはほぼ一致しており、地形や地名から発掘調査地が描かれている図の一部に相当することは明らかである⁽⁵²⁾。「備中国賀夜郡服部郷図」の作成年代については、永仁6(1298)年までは遡れるとするのが一般的である。記載内容については平安時代までは遡れないとする意見があるが、地割がどこまで遡れるかについては定説はないようである⁽⁵³⁾。

「素掘溝群」の時期については、平安時代後期の遺物は出土しているが、土層や切り合い関係などを考慮すれば、平安時代後期から鎌倉時代前半頃の幅でしかとらえられないものの、この時期には現存する条里地割が形成されていた可能性が高い。

また、「素掘溝群」以外では南溝手遺跡溝63～71と窪木遺跡溝208が条里地割に沿っている。溝の時期は、出土遺物からは平安時代前期(9世紀中葉～後葉か?)に遡る可能性がある。また、条里地割に沿って検出できた水田9の畦畔内から出土した「馬養」銘須恵器は、生産地や時期は明確ではないが、現段階では9世紀中葉～後葉の製作と考えている。このことから、「備中国賀夜郡服部郷図」に見られるような条里地割は、部分的には平安時代前期に施工されていたと考えておきたい。

今回の出土遺物のうち、土師器・緑釉陶器・灰釉陶器などの土器については、第3節で若干のまとめを行っている。その他の遺物では鉄滓(製錬・鍛冶)、炉壁、鉄塊系遺物が、溝202や斜面堆積3の遺構や平安時代中期の遺物包含層中から出土している。しかしこれらの製鉄関連遺物の時期については、6世紀後半のものが混入している可能性もあり、明確ではないことを記しておきたい。(平井)

註

- (1) 小片のために、傾きや上下が明らかではない破片も多い。また同一個体の破片も掲載しており、判明したものについては、土器観察表の備考欄に記載している。
- (2) 分層発掘ができていないが、津雲A式など時期の新しい遺物については、上層に堆積していた可能性が考えられる。
- (3) 1587・1588・1633～1635は時期を明確にしがたいので分析対象から除外しているが、節の小さい縄文に特徴がある。1591・1592・1625・1632は福田K 2式段階、1563～1565・1696～1699は津雲A式段階と考えている。1700の外表面と1701の内表面にはアルカ属の貝による条痕らしき痕跡が観察でき、中津式ではなく、中期末か晩期中葉と考えている。1703は晩期中葉の浅鉢で混入と考えている。また無文深鉢・浅鉢のなかには福田K 2式のものも含まれているかもしれないが、区分できなかった。
- (4) 浅鉢と鉢の区別はしていない。
- (5) 類例は調べられていないが、把手の施されている位置から中津式段階のものと考えている。
- (6) 磨滅によるものははっきりしないが、角がやや丸くなっているものも含めている。
- (7) 1578～1580は縄文部分が欠落しているものと判断し、磨消縄文として分類している。
- (8) 1590の外表面には凹線が観察できるが、文様かどうかは判断できなかった。
- (9) 1582も可能性はあるが、口唇部形状などやや異質な感じをうける。中津式とは考えない方がよいかもしれない。
- (10) 1714の凹底については、中津式ではなく、津雲A式かそれ以降のものであると考えている。
- (11) 今村啓爾「称名寺式土器の研究(上)・(下)」『考古学雑誌』63巻1・2号 1977年
- (12) 玉田芳英「中津・福田KⅡ式土器」『縄文土器大観』4 小学館 1989年
玉田芳英「中津式土器様式」『調査研究集録』第七冊 横浜市埋蔵文化財センター 1990年
- (13) 澤下孝信「土器様式伝播考」『古文化談叢』第25集 1991年
- (14) 間壁忠彦・間壁菫子「岡山県昭和町ケンギョウ田(建行田)遺跡」『倉敷考古館研究集報』第3号 1967年
ケンギョウ田遺跡出土土器については実見していないため、以下の比較のための理解はおもに報告書の記載に基づいている。
- (15) 1590は矢部奥田遺跡出土の中期Ⅳa類にちかいと考えている。
- (16) ところで、岡山県下では本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査の報告書において阿津走出遺跡と舟津原遺跡出土の中津式土器が取り上げられ、中津式土器を前葉・中葉・後葉に区分する考えが述べられている。前葉・中葉・後葉の区分の説明は簡略になされており、十分理解しえたとはいえず、またこれらは海岸部の遺跡出土土器である点も考慮する必要があるかもしれないが、最も古く考えられている前葉の土器は、ケンギョウ田遺跡や窪木遺跡出土土器よりも古く位置づけられるのではなかろうか。さらに矢野氏が示されている「中津式成立期の土器」^(b)についても、ケンギョウ田遺跡や窪木遺跡出土土器よりも古いもの^(c)と考えたい。また岡山県内の中期末の土器については、すでに矢部奥田遺跡出土土器が報告されており、最近では長縄手遺跡において堅穴住居や土壌に伴って多くの土器が出土しており、その一部については報告されている。矢部奥田遺跡と長縄手遺跡の中期末の土器については、長縄手遺跡出土土器の全容が明らかではないが、傾向とすれば矢部奥田遺跡→長縄手遺跡という時間的変遷を考えている。したがって、現段階では矢部奥田→長縄手遺跡出土土器→「中津式成立期の土器」→窪木遺跡・ケンギョウ田遺跡出土土器という時期的な変遷を想定しておきたい。
- (a) 下澤公明「第22章第1節 縄文土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71—本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ—』岡山県教育委員会 1988年
- (b) 矢野健一「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』第16集 1994年
- (c) 「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82 1993年
- (d) 亀山行雄「岡山県備前市長縄手遺跡」『日本考古学年報』46 1995年
- (17) 「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 1996年
- (18) 前掲註(16)の(d)と同じ。
- (19) 1997年夏に岡山理科大学によって発掘調査が実施されている。
- (20) (a) 「津島岡大遺跡3」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第5冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1992年
(b) 「津島岡大遺跡4」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年
- (21) (a) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 1995年
(b) 「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 1996年

- (22) 「津島岡大遺跡4」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年
- (23) 高橋 護「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古稀記念論文集』 1997年
- (24) 今回出土した後期の土器のうち5点については、植物珪酸体分析を依頼した。分析結果については付載1として掲載しており、イネの植物珪酸体は検出されていない。しかしながら、存在しないという証明にはならないことは、言うまでもない。
- (25) 調査の未熟さによるものなのであろうか。(たとえば晩期中葉の竪穴住居は岡山市の吉野口遺跡で報告されており、竪穴住居の調査中に見学する機会を得た。基盤層の色調や土質は南溝手遺跡に類似し、また遺物の出土状況も同じようにみえたが、竪穴住居の存在は明確には捉えられなかった。) または地質に大きな変化があったのであろうか。あるいは縄文時代晩期は竪穴住居ではなく平地住居なのであろうか(ただし柱穴も確認できていない)。
- (26) 近藤義郎他『津山弥生住居址群の研究』 津山市津山郷土館 1957年
- (27) 「天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53 岡山県教育委員会 1983年
- (28) 「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1982年
- (29) 「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1996年
- (30) (a) 「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1995年
 (b) 「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1996年
 (c) 「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1995年
- (31) 大規模な柱穴をもつ掘立柱建物としては、足守川矢部南向遺跡の掘立柱建物1が報告されている。時期は弥生時代中期中葉～後期前葉で、柱穴の平面形は直径1mの円形で、深さは50～80cm残存している。「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 岡山県教育委員会 1995年
- (32) NC・YO区の南約50mの地点において市道拡幅に伴う発掘調査が総社市教育委員会によって実施されており、当該期の遺構・遺物が出土している。また、HW区の南約100mで調査された窪木宮後遺跡でも当該期の遺構・遺物は検出されている。さらに県立大学用地の北に位置する服部遺跡、北溝手遺跡の調査でも、少量ではあるが当該期の遺構・遺物が検出できており、集落域はさらに広がっている可能性が高い。したがって、すでにこの平野ではほぼ全域に、旧河道や水田域・溝などで区画されながら、微高地上にいくつかの集団が生活していたと考えるべきであろう。
- (33) 西山遺跡の場合、A・B地点は丘陵端部であり、集落は調査地点以外にも広範囲に存在している可能性が高い。「西山遺跡・西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997年
- (34) 「中山遺跡・中山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997年
- (35) 池上曾根遺跡(大阪府)では、「環濠」内に水田が存在する可能性があるとの指摘がある。高橋 学「稲作と環境考古学」『季刊考古学』第56号 雄山閣出版 1996年
- (36) 第280図の溝Eは北溝手遺跡で検出されている溝である(報告書番号溝10)。幅1.4m前後、深さ1.5m前後で、後期初頭に埋没しており、時期や位置関係から溝A～Dとともに、集落を囲む溝の一部である可能性が強いと報告されている。「北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997年
- (37) 今回、附載2として掲載している藁科氏による碧玉の産地同定結果によれば、南溝手遺跡竪穴住居23出土の碧玉製管玉片(S725)が、佐賀県内で多く出土する他は、愛媛県や香川県で使用が確認されていたにすぎず、また玉作りの行程を示す石片・剥片が発見された遺跡が確認されていないことから、産地分析結果からは、韓国で作られたと推測できると報告されている。南溝手遺跡・窪木遺跡では、縄文時代晩期～弥生時代前期において、遺物(孔列土石器、丹塗り磨研土器、玉作り関連遺物)や遺構(「松菊里型住居」)から朝鮮半島とのつながりが窺えることをすでに報告しており、今回の産地分析結果からの推論に注目したい。
- (38) 中葉中相段階ですでに甕の体部内面下半や脚部内面にケズリが行われ、後にナデやミガキによって消されて

いる可能性は考えられるが、今回の資料では観察できなかった。

- (39) 平井泰男「弥生時代中期の土器」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 岡山県教育委員会 1982年)の註37において、壺の頸部凹線文が体部内面下半のケズリより遅れて出現する可能性を考えた。
- (40) なお今回出土した1753のように、前期後葉の甕と同じ器形で、ヘラ描き沈線のみがクシ描き沈線に置き換えられたような甕は、中期前葉古相として報告しているが、いわゆる船山2類とされるもので、前期終末に位置づける傾聴すべき考え方がある。
- 高橋 護「弥生土器—山陽1—」『月刊考古学ジャーナル』173号 ニューサイエンス社 1980年
- (41) 推測ではあるが、CH4・5区の掘立柱建物やYK区の竪穴住居の検出から、これらの地区に安定した微高地があり、古墳時代後半期の遺構・遺物が存在しているのではなかろうか。
- (42) 岡山県内でも、こうしたマンガンや鉄の痕跡を畦畔として報告している例は多いが、時期の特定なども含め、なお検討すべき問題があるように思える。
- (43) 「道路跡一覧」『古代交通研究』第7号 古代交通研究会 1997年
- (44) 「吉備南部地域」という用語には問題があると思うが、具体的には、岡山県南部の旭川から高梁川下流域の範囲を想定している。
- (45) 2017についても、胎土分析を実施していないが、讃岐産と考えられるのではなかろうか。
- (46) 類例をあまり知らないが、大県南遺跡土壌2出土の平底鉢が参考になるかもしれない。
- 『大県・大県南遺跡』 柏原市教育委員会 1985年
- (47) この他の古墳時代遺物として、『窪木遺跡1』で報告している溝71出土の銅鏃M2が、前期前葉の土器に伴うものと考えている。時期については、溝71出土の前期前葉の土器と溝73出土土器が共伴する可能性が高く、掲載した土器からは、高橋編年のX-d・e期や上東編年の亀川上層期よりは古いと考えておきたい。
- この銅鏃は有茎腸扶柳葉式のほぼ完形品である。全長4.9cm、鏃身長3.7cm、最大幅1.6cm、最大厚0.4cm程の大きさで、鏃身部は左右非対照である。有茎腸扶柳葉式銅鏃は兵庫県権現山51号墳などで出土しているが、これらに比べて全長と鏃身長が長く、最大幅と最大厚は同じである。
- 有茎腸扶柳葉式銅鏃が集落から出土した例は珍しく、また土器型式から時期を特定できる点で重要であろう。
- 『権現山51号墳』 権現山51号墳刊行会 1991年
- (48) 公的な倉庫としての具体的な内容については、立地場所からは備中国府に関連するものとも推測できるが、実証する資料は検出できていない。
- (49) 建物69と同等の規格の建物は、岡山県内では、津寺遺跡(a)や横寺遺跡(b)、菅生小学校裏山遺跡(c)などで検出されている。いずれも公的な施設に関連すると思われる遺物が出土しており、こうした規格に意味があるのかもしれない。
- (a) 前掲注(30)の(c)
- (b) 「新本新庄地区は場整備事業に伴う発掘調査1 横寺遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』 総社市教育委員会 1994年
- (c) 「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1993年
- (50) 今回報告する調査区以外からは、明確な古代の遺構・遺物は少ない。このうち『南溝手遺跡1』で報告した溝68・69については、その形状や、現存する地割に沿って幅約12mの間隔で直線的に検出できていることから、道路の側溝である可能性を指摘しておきたい。また遺物としては、窪木遺跡HW3区から出土した軒丸瓦1504はいわゆる「平城宮6225亜式」であるが、小破片であり他地域からの搬入品と考えている。
- (51) 備中国府との関連については、発掘調査中から埋蔵文化財保護対策委員会の諸先生をはじめ多くの方々から教示を賜った。すでに報告したように、平野部分では古代の遺構・遺物は僅かしか検出できなかった。このことについて、本来当該期の遺構・遺物が存在していなかったのか、あるいは後世の大規模な削平によって失われたのかについての見解が求められていた。いずれか判断する明確な証拠があるわけではないが、筆者は、先述した「道路遺構」の残存状態などから建物の柱穴痕跡が失われるような大規模な削平は考えがたく、この平野部には(丘陵裾部の遺構群は除く)備中国府関連の遺構は存在していなかったものと考えている。
- (52) 発掘調査地と「備中国賀賀郡服部郷図」との位置関係についての図面上のすり合わせについては、実施したがいくつかの問題点があり、また紙幅の関係上からも掲載することができなかった。今後を期したい。
- (53) 高重 進「中世村落の復元—服部郷図による農業経営の分析—」『史学研究』第73号 史学研究会 1959年

第2節 南溝手遺跡・窪木遺跡出土の石器・石製品

昨年度までに『南溝手遺跡1・2』『窪木遺跡』が刊行され、本報告が最終分冊にあたる。しかし、各地点で時期ごとに遺構の密度が偏在しており、4分割したことによってかえって各分冊単位では時期的な変遷が捉えにくくなってしまった。そこで今回は両遺跡で出土した資料をひとつにまとめ、各器種の特徴の変化や消長に検討を加えてみたい。表1は『南溝手遺跡1・2』『窪木遺跡1』および本報告書所載の石器・石製品を集計したものである。時期については器種によって細かく限定できるものとそうでないものがあるため、本文とは違って縄文時代後期、同晩期、弥生時代前期、中期、後期におおまかに区分しなおした。器種の認定や分類は『南溝手遺跡2』での基準を踏襲しているが、明確に区分しきれない点もあり、筆者の主観によった部分があることを予め断っておきたい。また、できるだけ時期の特定できる遺構から出土した資料を対象としたが、出土遺構に時期幅が認められるときは新しい時期に編入している。縄文時代後期から弥生時代前期については包含層出土資料も本文中の区分にしたがって各期に含めた。

まず主要な石器について種別にその特徴を明らかにしていきたいが、個々の石器についての説明は『南溝手遺跡2』において既述したものについては割愛し、窪木遺跡出土品もしくは今回の中で特に必要と思われるものに限って行なうこととする。

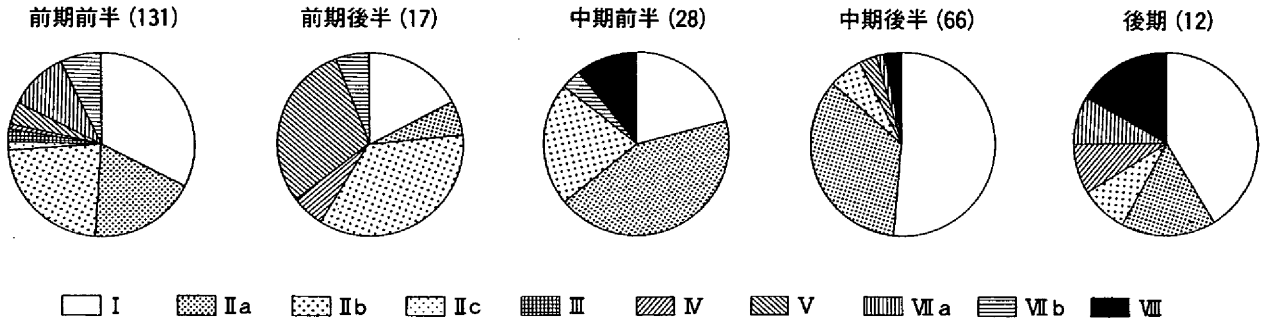
	石鏃	石槍	石剣	打製石丁	磨製石丁	石鏃石器	石包丁状石器	太形石斧	型刃石斧	伐採石斧	偏片石斧	柱状石斧	加工石斧	のみ状石器	打製石鏃	石匙	スクレイパー	楔形石器	石錐	石鏃	砥石など	玉類	計
縄文時代後期	4					3	1			1					27	1	12	6		6	5		66
縄文時代晩期	46	1		2						5			2		15		68	41	15	5	33		233
弥生時代前期	189	1			6		1	4			1	2			8	2	76	75	60	4	4	3	436
弥生時代中期	114	1		12	14			7	8	5			1	3	5	3	120	94	31	5	38	2	463
弥生時代後期	52	2		9	7			2					1	1	8	2	49	16	13		20	5	187
その他	252	3	1	40	19			4	9	2	2			2	21	9	390	221	81	7	62	2	1127
総数	657	8	1	63	46	3	2	17	23	8	4	4	4	6	84	17	715	453	200	27	162	12	2512

第4表 南溝手遺跡および窪木遺跡出土石器・石製品一覧表

石鏃・槍・剣など

石鏃は平面形態により、平基式のⅠ類、凹基式のⅡ類、凸基無茎式のⅢ類、多角形のⅣ～Ⅵ類、いわゆるロケット鏃に近いⅦ類、凸基有茎式のⅧ類に分類した。またⅡ類はくりの深さで浅いものからa～c類に、Ⅶ類は鏃身の長さで鏃身の長いものをa類、鏃身と脚部の長さが同じくらいのものをb類に細分している。各類に分類できたものは254点で、結果をグラフ1に示す。また、石鏃の長さの分布範囲を第5表に示す。まず形態では、全体的に最も多いのはⅠ類で、Ⅱa類、Ⅱb類が次ぎ、この3種で全体の2/3を占める。縄文時代晩期ではこの3種に若干のⅢ～Ⅴ、Ⅶb類が出土している。弥生時代前期前半ではⅡ類の中でもくりの深いb・c類の割合が増え、Ⅰ類が減少している。前期後半ではさらにⅡb類やⅦb類が増え、前段階の傾向が続いている。中期前半はⅠ類は少ないがⅡa類が増加し、多角形鏃が減少する。またⅧ類が出現している。中期後半ではⅠ類とⅡa類が8割以上を占めるようになるが、Ⅰ類の中でも大形のものが顕著となってくる。後期には各類が減少する中でⅧ類が少ないながらも一定量を占めている。次に長さからみると、全期間を通して21～25mmのものが主体を占めているが、弥生時代中期を境に分布範囲が移り変わっており、弥生時代中期以前には欠損品を含

めても30mmを超えるものが10%前後であるのに対し、弥生時代後期では20%近くにのぼり、逆に15mm以下の小形のものが無くなる。石槍や石剣といった石製武器も弥生時代中期中葉以降出現しており、このような石鏃の大形化は、従来から指摘されているように狩猟具から武器としての変質を現わすものであろう。しかし、縄文時代にすでに3cmをこえる比較的大形なものも存在しており、狩猟対象への使い分けによる分化も考慮に入れねばならない。形態面では縄文色を強く残した多角形やえぐりの深いものから単純なⅠ類やⅡa類に変化しており、直接的には製作作業の軽減につながっているが、その動きは石鏃の大形化や石槍、石剣といった武器の出現と連動しており、石鏃に対する意識の変化として捉えることができよう。



グラフ1. 弥生時代石鏃の型式分類 (()内は資料個数)

	対象資料 個体数	長さmm								
		0~5	6~10	11~15	16~20	21~25	26~30	31~35	36~40	40~
縄文時代	22(18)			1(2)	6(7)	9(6)	3(1)	2(0)	1(2)	
弥生時代前期	54(71)			6(8)	13(19)	22(31)	9(6)	3(5)	0(1)	
弥生時代中期	28(57)			1(7)	9(29)	12(13)	2(5)	2(2)	1(1)	1(0)
弥生時代後期	12(14)			0(1)	2(5)	6(5)	2(2)	2(0)		0(1)

第5表 石鏃の長さによる分布範囲 (欄内は個数、()内は欠損品)

石包丁・石鎌状石器など

細片や時期不明も合わせると打製石包丁は63点、磨製石包丁は46点出土している。また石包丁的な機能を有するものとして石包丁状石器や石鎌状石器などが挙げられるが、ここで合わせて概要を捉えていきたい。なお、打製石包丁には長方形のⅠ類と背部の湾曲するⅡ類があり、各々両端にえぐりのないものをA類、えぐりのあるものをB類に分類した。磨製石包丁は全形の分かる資料が少なく、有益な結果を導きだせなかったためここでは分類を行なわない。

縄文時代後期には南溝手遺跡の後期中葉のトレンチからS40・41の若干内湾する刃部をもった横に長細い削器が出土し、形態から石鎌状石器としている。石鎌を雑穀の収穫に結びつける見方もあるが、近年では石鎌の出現する縄文時代後・晩期に遡る稲作関連資料が増加しており、収穫穀類のひとつにイネが含まれる可能性は大きい。また同じトレンチから外湾刃半月形の磨製石包丁の影響を受けたのではないかとみられるS525が出土している。晩期には後葉の南溝手遺跡河道1から打製石包丁S33・34が出土しており、ⅠB類に分類される。弥生時代前期には打製石包丁は出土していない。磨製石包丁は確実に前期といえるのは南溝手遺跡S293一点のみであるが、窪木遺跡S127は正三角形に近い半月形を呈していると考えられ、形態の面から前期に遡る可能性も考えられる。また、南溝手遺跡S675~677・681は前期後葉の遺物を多く含む河道の出土で、おそらく前期後葉のものであろう。中期には打製石包丁は中葉の窪木遺跡S267・273・301、後葉の南溝手遺跡S737・738・765・766・828・831など

の12点で、S267・301はⅡA類、S273はⅡB類に分類される。窪木遺跡S195はS267と類似した形態をしているが、明確な使用痕が認められなかったため、スクレイパーに分類している。後葉のものはいずれもⅠB類に分類される。磨製石包丁は中葉の窪木遺跡S295・302、後葉の南溝手遺跡S377・699・748・749・773・824・835などの14点が出土している。S377・824・835は中期中葉からの時期幅の認められる河道からの出土で、中期中葉に遡る可能性がある。後期前半では打製石包丁が南溝手遺跡S755・S809～811、窪木遺跡S57・58・71・221・313などの9点、磨製石包丁は南溝手遺跡S812・813、窪木遺跡S271などの7点となっている。なお、細片のため掲載していないが後期後半の遺構からも打製石包丁および磨製石包丁が各1点出土している。後期の打製石包丁のうち形のわかるものは全てⅠB類に分類されるが、中期後葉と比べて矮小化している。中部瀬戸内地域では弥生時代前期には外来文化の影響を受けて磨製石包丁が普及するものの、以降は打製石包丁に転換しており、当遺跡でも前期に磨製石包丁が多いという点ではその流れに一致した動きを示している。しかし、中期以降後期にいたってなお磨製石包丁が半数近くを占めているという状況は、県南部平野に立地する百間川遺跡群とは大きく異なる様相を示している。『南溝手遺跡2』で既述したが、県内では磨製石包丁が盛行するのは石材の産地でもある北部地域で、北部では全般にわたって磨製石包丁が主体となっている。当遺跡でみられる状況は量的には中間的な様相を示しているが、弥生時代中期～後期にもサヌカイト製の石器や核、剥片などは多く出土しており、単純に地理的な条件や石材入手の簡便さから磨製石包丁を選択したとは考えにくい。サヌカイトで結ばれた交易圏の一端に属しながらあえて磨製石包丁を使い続けている点に、県北部との政治的な繋がりを認めることができないだろうか。なお、磨製石包丁には未製品や制作時の剥片がみられないことおよび破損後再利用したものが多いことから製品の形での搬入を想定した。しかし、窪木遺跡S360の石錐には回転痕が認められることから磨製石包丁の穿孔具の可能性が高く、集落内での製作を完全には否定しきれない要素もある。

石斧・ノミ状石器など

石斧には大型蛤刃石斧、偏平片刃石斧、柱状片刃石斧といった典型的な大陸系磨製石器のほか縄文時代以来の大型の磨製石斧も認められ、伐採用石斧として区分し、小形の偏平な磨製石斧などは加工用石斧とした。しかし、個々の石斧の形態の変化については分類できるほどの量に恵まれておらず、時期的な消長を概観するととどまっている。また、ノミ状石器としたものも、その使用痕から木器などの加工に使われた可能性が高く、石斧と一緒にその動向に眼を向けてみたい。

縄文時代後期は総体的に出土量が少なく、石斧もトレンチから出土したS535のみである。縄文時代晩期には包含層や土器溜りから、大型の伐採用石斧が5点、加工用とおもわれる小形の磨製石斧2点が出土している。弥生時代前期には前葉に特定できる資料はないが、前期中葉から後葉には、大型蛤刃石斧や小型方柱状片刃石斧や柱状片刃石斧、偏平片刃石斧などのいわゆる大陸系磨製石器が出現している。小型方柱状石斧および大型蛤刃石斧については未製品も出土しており、集落内での製作を想定できる。中期には出土数はさらに多くなり、特に偏平片刃石斧の増加が顕著に認められる。中期後葉の南溝手遺跡土壙238からは偏平片刃石斧の未製品と思われるS760と大型の砥石が共伴しており、集落内での製作を裏付ける傍証となろう。ノミ状石器には南溝手遺跡S721・829があり、中期中葉以降出現しているようである。大小の差はあるが、細長い基部の先端に片刃が付いており、特に傾斜した側の面がよく磨滅していることが特徴で、刃部に対して直角に線条痕がみられるものもある。これらの使用痕から、加工用磨製石斧と同様に、木器などの加工に使われたのではないかと考えてい

第4章 まとめ

る。後期には他の石器と同じく減少する傾向にあり、太型蛤刃石斧2点、ノミ状石器1点、偏平片刃石斧1点のみである。しかし、これらはいずれも出土状況から、その使用された時期が弥生時代中期後葉以前に遡る可能性の高いものである。以上の他に、時期の特定できないものの中にも太型蛤刃石斧や柱状片刃石斧、偏平片刃石斧、ノミ状石器に加えて、環状石斧も2点出土している。これら全てを合わせると、太型蛤刃石斧を含めた伐採用石斧とノミ状石器を含めた加工用石斧の比率は約5:3となる。

打製石鍬

縄文時代後期には18点出土しており、平面がバチ状を呈するⅠ類9点、短冊形を呈するⅡ類5点がある。石材はサヌカイト、安山岩、流紋岩、粘板岩、玄武岩、頁岩など様々で特に石材の選択は行われていないようである。大きさはおおむね長さ9～11cm、幅4～6cmに集中している。晩期には14点出土しており、Ⅰ類7点、Ⅱ類4点となっている。石材は後期とほぼ同じ内容で、緑色片岩製のものが1点加わる。大きさは縄文時代後期と変わらないものもあるが、幅は4～6cmに収まるが長さが150cmをこえる長大なものがみられる。弥生時代以降は出土数が減少し、前期6点、中期2点、後期3点を数える。石材は粘板岩製のものが認められない。出土数の少なさに加えて完形品も少なく、大きさについては何も論じ得ないが、石材では若干サヌカイト製が優勢な傾向が認められる。

縄文時代後期の石器はトレンチおよび斜面堆積の資料で、全体の出土量も少ないため当時の一般的な組成を反映しているとは言いがたいが、打製石鍬が非常に多いという点が指摘できる。また、注目すべき点は石鎌状石器や石包丁状石器が共伴していることで、当遺跡周辺において何らかの農耕が行なわれたことを示唆している。当期には被熱面や集石遺構も検出されており、沖積地への進出および定住が農耕の導入と無縁でなかったことは想像に難くない。また石錘も比較的多く、食物資源を依然漁撈などに頼っていたことも窺える。縄文時代晩期にも比較的打製石鍬が多いが、狩猟具や伐採具、加工具、調理具なども増加し、定住生活の発達が窺える。

石匙

横形石匙のうちつまみが上につくものをⅠ類、上につくものをⅡ類とし、縦形石匙をⅢ類とした。石匙の動向はおおむね『南溝手遺跡2』では弥生時代中期前葉以前がⅡ類のみで、中期後葉以降はⅠ類と、Ⅲ類に変化することを指摘した。中期中葉の例はⅠ類の南溝手遺跡S782のみであったため様相が不確かであったが、窪木遺跡では土壌156からⅡ類のS279および溝165からはⅠ類のS298の2点が出土しており、過渡的な様相が看取される。Ⅱ類には南溝手遺跡S670に残された使用痕から打製石包丁に準じた使用法を推定したが、Ⅰ類は同じ横形石匙でもつまみが上にあるという点でⅢ類に近い使用法を想定でき、中期中葉を境にその用いられ方が変化したと考えられる。

さて、当遺跡ではⅡ類からⅠ・Ⅲ類への変遷が捉えられたのに対し、縄文時代後期の広江・浜遺跡および百間川原尾島遺跡の弥生時代前期後葉の石匙はⅠ類と異なった状況を示している。弥生時代前期の石器の豊富な香川県鴨部・川田遺跡においても石匙はⅠ・Ⅲ類のみで、前期段階にⅡ類が盛行するという事は当遺跡の特殊性と位置付けられよう。

スクレイパーなど

時期不明を含めて700点以上と大量に出土しており、様々な形態をとっている。百間川沢田・長谷遺跡出土資料に検討を加えた山田雅子はスクレイパーについて個体差が激しく一貫した技法が見出せないこと、定形化されておらず作りが粗雑であることから、「持続的な使用よりも一過性の使用が行

われた」と結論付けている。当遺跡についても同様の事が言え、作りの粗雑な様々な形態のスクレイパーがあり、鋭利な剝片や石核片を利用したものも認められた。しかし、スクレイパーⅣとしたものは、打点を頂部とする三角形の横長剝片に連続した細部調整を加えた定形的なもので、特に弥生時代前期以前に出土が偏る傾向が認められる。また、縦長の長方形を呈する定形的なものもあり、部分的にはこれら目的的に製作したスクレイパーの存在が認められる。後者にあたる南溝手遺跡S729は刃部端部が横方向に磨滅しており、玉を含めた石製品を擦切る工具の可能性も考えられる。また、特に大形の剝片を利用したスクレイパーがあるが、中期前葉以前に比較的出土が限られる傾向が認められる。他に、中期中葉～後葉に彫器も出土している。

玉類

古墳時代前期の資料を加えて総数で13点出土している。南溝手遺跡からは弥生時代前期前半期の堅穴住居2から緑色凝灰岩製の管玉未製品S153・154、前期中葉～後葉の溝133から碧玉製の管玉未製品S652、中期中葉の土壙249から碧玉製管玉S764、中期後葉の堅穴住居23から碧玉製管玉S725、中期後葉～後期前葉の溝158から碧玉製管玉未製品S820、時期の特定できない柱穴64から緑色凝灰岩製管玉S795が出土している。窪木遺跡では本報告所載の堅穴住居31から勾玉S222、管玉未製品S223および研磨の進んだ素材片S224・225が出土している。なお、この堅穴住居からは中期前葉～後期前葉までの土器が出土しており、玉類も時期が特定できない。S224・S225はその形から前者が勾玉、後者が管玉の未製品と考えられる。この2点には擦切り溝は認められず、「荒割り→形割り→研磨→穿孔→仕上げの研磨」といった工程が推定できる。しかし、S225の段階から研磨によってS223の段階まで成形したのであるならばS223の表面は全て研磨されているはずである。しかし、S223の側面による剝離による成形痕が残っており、S225からさらに分割していったと想定できる。この場合、S225の平坦面から、形割りの前段階に板状に素材を成形したと推察できる。板状に素材を成形して板チョコ状に連続して形割り素材を得る技法は、山陰や丹後などでみられる技法であるが、それらには施溝分割を伴っており、その点で大きく異なっている。擦切り溝の有無を確認するには数が少なく確かなことは言えないが、ここで問題点として指摘しておきたい。また古墳時代前期の溝179から碧玉製の管玉S457が出土している。包含損からもS222～225と同一素材の勾玉および管玉が出土している。さて、これらの石材について藁科哲男氏に産地同定を実施したところ、碧玉製についてS764およびS820については女代南B群、S725は未定C群、S457は花仙山産という結果を得た。詳しくは付載を参照されたいが、藁科氏によると女代南B群は原産地は不明であるが豊岡市女代南遺跡で主体的に使われていた石材で、弥生時代においても比較的広範囲に確認されており、県内では長尾・沖田遺跡、百間川原尾島遺跡、下郷原和田遺跡で出土している。未定C群も原産地は不明であるが、今のところ西北九州地方および中部瀬戸内沿岸地方に出土が偏っているようだ。当遺跡においては、S725以外は弥生時代前期から古墳時代にいたるまで日本海沿岸地方から原石が搬入されたと考えられ、技法の面からも矛盾はない。しかし、局地的な分布を示す未定C群が中期後葉の段階においてもたらされた背景には、何らかの政治的な要因が隠されているのではなかろうか。

石器・石製品からみた南溝手遺跡および窪木遺跡の一樣相

以上、種別の特徴や変遷をみてきたが、幾つかの画期や問題点が明らかになった。その点について、当集落の動向を踏まえながらさらに検討を加えてみたい。まず、第1の画期はいうまでもなく縄文時代から弥生時代への移行期にある。打製石鏃の項でふれたが、縄文時代後期から晩期にかけては

定住化の兆しが認められ、弥生時代前期になると大陸系磨製石器を伴った本格的な農耕経済への動きが石器組成に反映されている。遺構の立地も、縄文時代後期前半には土器や石器が丘陵部斜面に堆積していることから丘陵上に生活域を想定できるが、後期後半には沖積平野内に移動しており、弥生時代前期以降は微高地部に居住空間を設け、低位部で水田を営む安定した集落が形成されていることが窺える。第2の画期は、各石器に顕著な変化のみられた弥生時代中期中葉にある。石鏃の形態や大きさから戦闘用武器への変化を見出すことができたが、その緊張関係を考える一助として焼失住居の問題にふれてみたい。一口に焼失住居といってもその要因には様々なパターンが挙げられ、①故意に自ら火を放つ場合②過失による失火③攻撃を受けた場合などが考えられる。①の場合、必要なものについては持ち出すであろうから住居内の床面に残される遺物は少なく、②・③では不意のことであるから残される遺物も比較的多いはずである。表3に遺物の多数を分けて焼失住居の数を示した。住居71軒中19軒が焼失しており、うち18軒が中期中葉から後期前葉に集中している。特に中期後葉では②・③の場合が多くみられる。②・③は想定される痕跡としては見分けにくく、現代の火事の原因や火元を調べるような焼け跡の詳細な分析が必要になってくるが、焼失した住居の分布が南溝手遺跡NC1～3区、窪木遺跡BU区、YA1・2区の3ブロックに集中しており、偶発的な事故とは考えにくい。このことはやはり、戦闘に巻き込まれて生じる③の可能性を指摘でき、石鏃の変化と呼応するものと考えられる。また磨製石包丁にみられる県北部との繋がりや石匙の独自性、玉の製作技法や石材の変化など戦闘に結び付けるのは短絡的であろうが、周辺地域との関係を反映するものと考えられ、その変化の背景に何らかの政治的な要因を想定することができる。

最後に鉄器化についてであるが、当遺跡では弥生時代中期後葉の堅穴住居3軒、後期前葉の堅穴住居3軒から鉄器片が出土している。いずれも小片で器種の特定はできなかったが刀子や鎌とみられる鉄片がみられる。それらの堅穴住居の石器をみるといずれも極めて少ないが、石鏃のみ伴出していることが注目される。この事は、従来指摘されてきたように鉄器化がまず工具から行われたことの傍証になると共に、石鏃の必要性も物語っている。なお、後期後半期以降の遺構に確実に伴う石器としては他に打製石包丁、磨製石包丁磨製石斧がある。

	全住居数	焼失住居	
		遺物少	遺物多
前期	9		
中期前葉	5	1	
中期中葉	7	2	2
中期後葉	13	1	3
後期前葉	35	8	2
後期後葉	1		
不明	1		
総数	71	12	7

第6表 焼失住居の数

以上、南溝手遺跡および窪木遺跡出土の石器・石製品にみられる特徴や変化から遺跡の動向について触れたが、筆者の石器類に対する基本的な認識不足と、両遺跡と比較検討しうる遺跡があまりないため非常に視野の狭いものとなった。ここにみられた動きが、この遺跡のみのごく在地的な動きであるのか、複数の遺集落と歩調をともにするのか、逆に全く異なる動きをとる集落が存在するのか、周辺の動向を見たらうで地域性を明らかにしていかなければならないが、ここで認められた様相をひとつの可能性として今後の叩き台にし、機会があれば稿を改めて検討していきたい。(久保)

参考文献

平井勝『考古学ライブラリー64 弥生時代の石器』ニューサイエンス社 1991年
 平井典子「中・四国における弥生時代の石器」『考古学ジャーナル No.290』1988年
 間壁忠彦「7. 打製石包丁」『弥生時代の研究 道具と技術』雄山閣出版 1985年
 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」『考古学研究』第35巻4号 1989年
 森格也「鴨部・川田遺跡出土の石器」『鴨部・川田遺跡1』香川県埋蔵文化財研究会 1997年
 山田雅子「第2節 石器」『百間川沢田遺跡2』岡山県教育委員会 1958年

第3節 古代の土器について

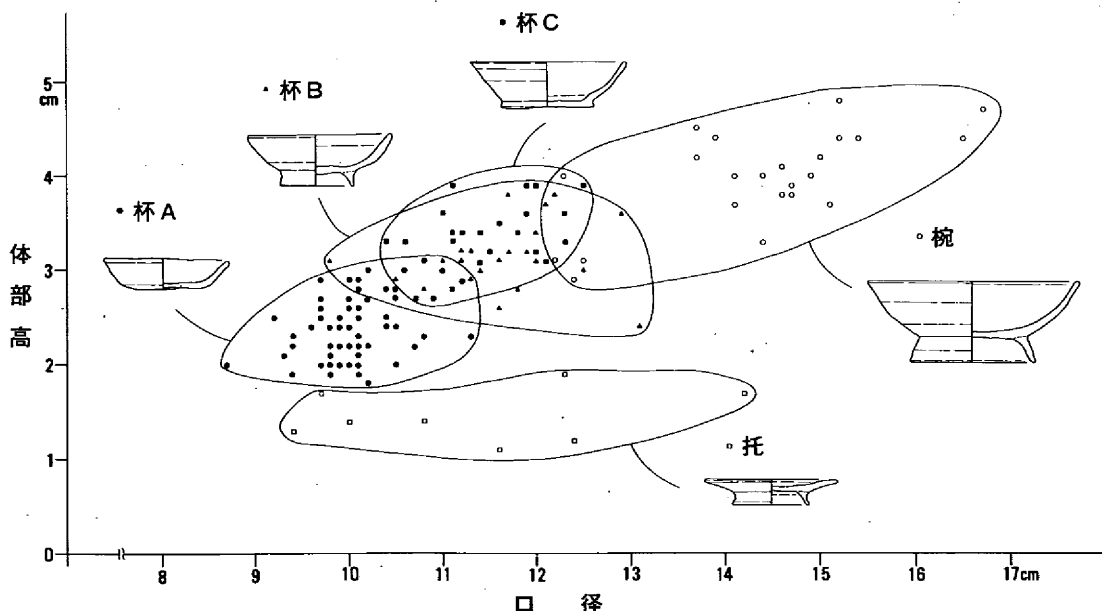
今回報告する調査区の発掘調査による重要な成果の一つとして、古代と考えられる遺物が多く出土したことがあげられる。遺物には土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁などの土器の他に、瓦・陶馬・陶硯・鉄器などがあるが、この節では出土量が多い平安時代の土器(土師器・緑釉陶器・灰釉陶器)について若干のまとめを行いたい。

1. 土師器について

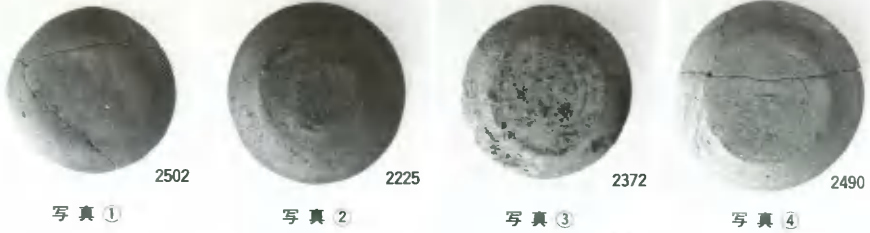
ここではYA2A・HC1A区の平安時代中期の遺構である建物70のP-19、柱穴列BのP-28、土壇195~198、溝202、斜面堆積3から出土した土師器をおもに取り上げたい。(なお、これらの土器群全体については、山陰川調査区からの出土が多いことから、本節においては「窪木・山陰川」と呼ぶことにする。)

(1) 器種構成について

形態や法量などから杯A・B・C、碗、托、内黒碗、甕、羽釜、竈などに分類した⁽¹⁾。杯Aの法量は、口径約9~11cm、器高約2~3cmで、第281図の法量分布図からは口径10cm、器高2.5cm付近が多いといえる。杯Bは杯Aの底部を押し出して、底に高台を貼り付けたものと理解して、杯と呼んでいる⁽²⁾。法量分布図からは杯Aと重複する部分を持ちながらも、主体は杯Aよりは大型であるといえよう。杯Cは10~11世紀の瀬戸内地域で多く出土するもので、「円盤高台杯」や「平底杯」などと呼ばれる土器である。法量的には杯Aよりやや大型で、杯B分布域に重複している。口径にはバラツキがあるが、底径は7~8cmにおさまっている。托は「高台付皿」とも呼べるもので、高台にはいわゆる足高のものも認められる。口径にバラツキがあるのが特徴である。碗はすべて高台付碗で、明瞭ではないが大・中・小の法量分化が認められる。小は口径12~13cmで、杯Bとの区別が難しいものも多い。中は口径14~15cmで、今回出土した碗の中では最も多かった。大は口径16~17cmを測る。大型のものは足高高台である。内黒碗については、小片の出土が多く全体の器形が捉えにくかったが、法量



第282図 「窪木・山陰川」法量分布図

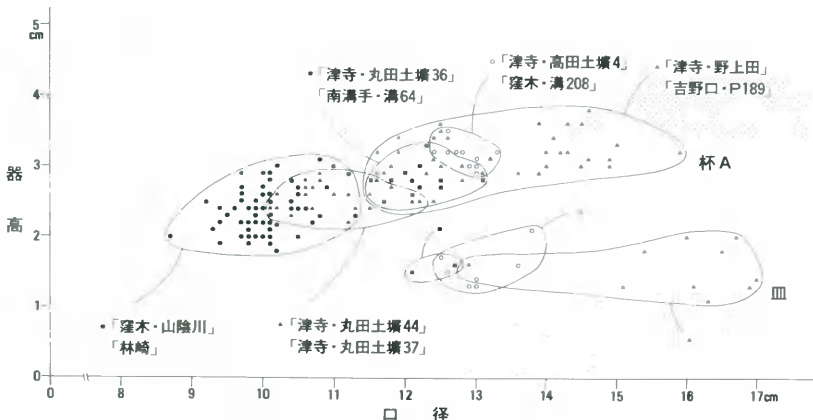


的には2524・2680と2519・2674と2667のように大・中・小が認められる。³⁾ 甕、羽釜、竈などのいわゆる煮炊き具は少量であり、このことは土器の使用目的や遺跡の性格を考えるうえで参考にすべき特徴であろう。

(2)成形、調整方法について

杯Aと杯Cについて検討する。杯Aの成形は、2382の底部外面に粘土紐痕が確認できることや口縁部の凹凸などから考えて、底部から口縁部までいわゆる「粘土紐巻き上げ成形」であると理解できる。口縁部調整はヨコナデである。⁴⁾ 底部外面の成形・調整には、大きくは以下の三手法が観察できた。「a手法」とするのは、指オサエ(観察表では押圧と表記している)とナデのみによる調整である(写真①)。「b手法」とするのは、底部周縁にのみヘラ切り痕跡(幅1~2cmのものが多い)があり、中央部には粘土紐痕を消す目的で指オサエ(押圧)やナデ調整が施されているものである⁵⁾(写真②)。ただし中央部の最終調整については、押圧やナデが明瞭に観察できないものもあった。⁷⁾ 「c手法」とするのは、底部中央までヘラ切りが及んでいるものである⁸⁾(写真③)。ヘラ切り後は未調整のものが多いが、ナデを施したものもある。

杯Cについては、まず口縁部調整はヨコナデ調整で、少数ではあるが粘土紐痕が観察できるものがある。次に底部については、外面のほとんどに中心までのヘラ切り痕跡が観察できる点に大きな特徴がある(写真④)。また、円盤状の粘土の上に口縁部を縫ぎ足したように底部と口縁部の境に明瞭な屈曲部が認められる。これらのことから杯Cは、円柱状の粘土の上面の縁から粘土紐を巻き上げて口縁部を成形し、口縁部にヨコナデ調整⁹⁾を施した後に、円柱の粘土を底部の厚さ分だけ、ヘラを中心まで



第283図 各遺跡出土土器法量分布図

差し込みながら切り離した(ヘラ切り)ものと考えている。⁽¹⁰⁾

以上、器種構成と成形・調整方法の二点についてのみ簡単に特徴をまとめた。次に今回出土した土器群の編年的位置や地域の特徴などを把握するために、周辺の遺跡出土土器との比較を行ってみたい。ただし、筆者の力不足から今回比較する指標としては、(ア)杯Aの法量、(イ)杯Aの底部成形・調整方法、(ウ)器種構成のみで行った。⁽¹¹⁾

(ア)杯Aの法量 第283図は杯Aと皿の法量分布図である。⁽¹²⁾ 共伴する須恵器や緑釉陶器・灰釉陶器の年代観などから、杯Aは時期が新しくなるにしたがって小型化することはすでに指摘されているとおりであろう。従って今回用いた資料群では、「津寺・野上田」⁽¹³⁾、「吉野口・P189」⁽¹⁴⁾→「津寺・高田土壙4」⁽¹⁵⁾、「窪木・溝208」⁽¹⁶⁾→「津寺・丸田土壙36」⁽¹⁷⁾、「南溝手・溝64」⁽¹⁸⁾→「津寺・丸田土壙44」⁽¹⁹⁾、「津寺・丸田土壙37」⁽²⁰⁾→「窪木・山陰川」(本報告書)、「林崎」⁽²¹⁾という編年的序列を想定することができる。⁽²²⁾

(イ)杯Aの底部成形・調整方法 「b手法」→「c手法」へという編年的推移が考えられる。今回利用した資料群でいえば、「津寺・野上田」段階から「津寺・丸田土壙44」段階まではすべて「b手法」である。そして「窪木・山陰川」段階において、「b手法」が多いが「c手法」が一定量含まれるようになると考えたい。ちなみに、「窪木・山陰川」における各手法の割合については、「a手法」が9/72で13%、「b手法」が44/72で61%、「c手法」が19/72で26%である。⁽²³⁾

(ウ)器種構成 すでに指摘されているように皿は「津寺・丸田土壙36」段階までで、それ以降は出土しなくなるようである。杯Cは「津寺・丸田土壙44」段階から出現するのではなかろうか。このこともすでに指摘されている。ところで、杯Cについては前述したようにほとんどすべてが「c手法」である。したがって、先にみた杯Aの手法の変化との関連で考えるならば、杯Cの出現が杯Aの成形・調整方法に影響を与えたと理解しておきたい。内黒碗を除く高台付碗については、多くなるのは「窪木・山陰川」段階からであろう。またこの段階にはすでに大・中・小といった法量分化が認められる。杯Bについても、「窪木・山陰川」段階から多くなるものと考えられる。この他に、杯Aや皿の丹塗り(ベンガラ塗布)については、「津寺・丸田土壙36」段階から施されなくなるようである。⁽²⁴⁾

最後に歴年代観について少しふれておきたい。まず「窪木・山陰川」は後述する緑釉陶器・灰釉陶器の年代観から、10世紀後葉と考えたい。また「津寺・丸田土壙44」についても、伴出した緑釉陶器の年代観から10世紀前葉～中葉と考えたい。⁽²⁵⁾

2. 緑釉陶器について

小片のものがほとんどではあるが、144点出土している(第7表参照)。このなかには同一個体片が含まれており、出土個体数は少なくなる。しかしながら未調査区の状況もふまえ、一遺跡からの出土数としてはかなり多い印象をうける。

緑釉陶器については、おもに平尾政幸氏(京都市埋蔵文化財研究所)と高橋照彦氏(国立歴史民俗博物館)の両氏から御教示・御指導をいただいた。⁽²⁶⁾ このことをふまえて、若干のまとめを行いたい。

(1)生産地について

京都・近江・防長・東海というレベルでの区分について記しておきたい。様々な制約があることを承知で、破片数から判断すれば、近江産と防長産が同じくらいの割合で多く、京都産は少量、東海産は可能性のあるものが3点のみで、明確なものはなかった。具体的な数字を示せば(近江産と防長産の区別が困難な破片が多かったが、可能性の高い方に含めた)、京都産が16/144で11%、近江産が70/144で49%、防長産が55/144で38%、東海産が3/144で2%である。以下、量的に多い近江産と防長

産について少し述べておきたい。

近江産と考えた破片は、焼成には須恵質(硬質)と土師質(軟質)とがある。土師質のものが圧倒的に多く、胎土の色調が黄橙色系であることを特徴としている。釉の色調は濃緑色のものが多く、底部外面まで全面に施釉されているものと、底部外面が無釉のものがある。成形技法については、高台はすべて貼り付けて、底部外面に糸切り痕が観察できるものがある(2538・2700)。高台の形状はいわゆる「有段輪高台」がほとんどであるが、2540のみは三角形の高台であった。また見込み部分に圈線を施したものも多かった。2404は輪花の可能性もある。器種には碗と皿があり、量的には碗が多い。

防長産と考えた破片の焼成はすべて土師質である。胎土の色調は白色系のものと、中心部分が灰色で表面部分が白色系のもの(サンドイッチ状態、写真⑤)とがあり、この胎土の色調が、今回近江産と防長産を区別した最大の根拠でもある⁽³¹⁾。釉の色調は濃緑色のものが多く、近江産との区別は難しかった。ただし碗と長頸瓶のなかには釉がゴマ粒状にはじけたものがあり、特徴的である⁽³¹⁾。高台はすべて貼り付けて、形状のわかるものは少ないが、角高台にちかい。器種には碗・皿の他に、長頸瓶?の存在が特徴的である。量的には碗が多く、長頸瓶?についてはすべて同一個体かもしれない。



写真 5

(2)時期について

最も古いのは京都産の2684である。平高台で、全面施釉である。9世紀前葉～中葉と考えられるが、確実な出土はこの1点のみであった。9世紀後葉～10世紀前葉のものとしては、これ以外の京都産が相当するであろうが⁽³²⁾、やはり量的には少ない。10世紀中葉の可能性のあるのは、近江産の2696のみである。ただし年代観によっては10世紀前葉～中葉は欠落していると考えられるかもしれない。ところで今回の資料で圧倒的に多いのは10世紀後葉のものである。時期の判明するものでは約90%を占めている。なおこれらは編年研究の進んでいる近江産のものであり、防長産については小片でもあり、細かな年代は不詳としている。しかしながら、防長産の多くは、周防国府の出土例との比較から10世紀代の可能性が高いと考えられ、近江産との年代の比較や当遺跡での出土状況などから考えれば、防長産としたものほとんどは10世紀後葉と考えて良いのではなかろうか。このように考えるならば、出土総破片数の約95%が、10世紀後葉のものとなる。また窪木遺跡では、10世紀後葉において、近江産と防長産が同じくらいの割合で搬入されていたことになる。最後に、11世紀前葉まで下がる可能性のあるのは、近江産の2540のみである⁽³¹⁾。

(3)胎土分析結果について

胎土分析を行った目的は、考古学的な観察では近江産と防長産の区別が困難な破片が多くあったため、胎土分析によって産地が特定できるかどうかを調べることであった。

附載4として白石氏による分析結果と考察を掲載しているが、調査担当者としてのコメントを記しておきたい。

(a)あ・いグループを京都産と考え、かついグループが9世紀中葉、あグループが9世紀後葉～10世紀前葉であるため、時期によって(窯によって)胎土が異なるとする結論には賛同したい。今後分析試料を増加して検証していきたい。しかしながら、131(2544)については、京都産以外の可能性が高く再検討すべきであろう。ただし後述する理由から、近江産や防長産の可能性はまず無いであろう。

(b)近江産と防長産については、K—Ca 散布図で、Ca 量が0.5%より低いえ・か・きのグループとおグループの半分を近江産に、0.5%より高いうグループとおグループの半分を防長産と考える結論

にはほぼ賛同したい。考古学的観察結果からは、少しのバラツキが認められるが、例えば胎土の中心部が灰色で表面に近い部分が灰白色のいわゆるサンドイッチ状態を呈する防長産の長頸瓶[?]や椀(10、57、78、111、112、9、18、50、52、69、92、114、115、125、2、84、105)に限って調べると、これらほうグループとおグループのCa量が0.5%以上とくグループのCa量が0.37~0.59%に限られている。一方「有段輪高台」や「見込み部分の圏線」といった特徴を持つ近江産(36、66、75、86、116)については、え・か・きグループとおグループのCa量が0.5%以下に限られており、いずれも白石氏の結論に矛盾するものではない。なお付け加えるならば、くグループのうち2・84・105は先述したサンドイッチ状態の胎土をもつ防長産であり、53・74については近江産としているが防長産の可能性もある破片である。また、う・お・くグループ内における長頸瓶[?]については、珍しい器種であり、すべてが同一個体である可能性が考えられる。そうであるならば、これらう・お・くグループは一つのグループとして捉え、防長産と考えた方が良いかもしれない。

胎土分析結果をこのように考えるならば、まずうグループの103(2698)と126(2689)については、近江産より防長産と考えるべきだと思う。また、え・か・きグループにおいて京都産や防長産と考えた少量の破片については、近江産の可能性を考えて再検討すべきであろう。ただしかグループの60(2535)ときグループの99(2687)は考古学的には京都産と考えられるため、再度胎土分析を行う必要があるかもしれない。おグループについては、59のみが京都産で例外ではあるが、これについては近江産の可能性もあり、Ca量のほぼ0.5%を境にして防長産と近江産に区別して良いと思う。

ここまで述べたように、今回出土した緑釉陶器から得られた成果としては、第一に防長産緑釉陶器の存在が明らかになったことがあげられる。この防長産は量的にも多く、従来周防、長門や太宰府など狭い地域にしか分布していなかったとしていた考え方に対して、再考をせまるものとして重要であろう⁽³⁴⁾。第二に時期的な考察から、10世紀後葉にピークがあることが明らかになったことである。緑釉陶器の地方への波及のあり方に様々なパターンがあることは当然であり、岡山県下では美作国府や馬屋遺跡、菅生小学校裏山遺跡では9世紀から10世紀前葉までの京都産を中心とした緑釉陶器が出土しているとされている(東海産も少量含まれている)。これに対して窪木遺跡では、10世紀後葉の近江産・防長産が主体を占めており、遺跡の性格を考える上でも参考になるであろう。また後述するように灰釉陶器の主体が9世紀前葉~中葉にあることから、窪木遺跡においては緑釉陶器と灰釉陶器の搬入の割合が、時期によって異なっていたことが窺えるのである。第三に、白石氏による胎土分析の結果から、京都産・近江産・防長産の区別ができる可能性がでてきたことである。今後試料数を増やして、さらに究明したい。

3. 灰釉陶器について

総破片数で30点出土している。詳細は第8表を参照していただくこととし、時期的な特色のみについて記しておきたい。⁽³⁵⁾

判明した型式では、「黒笹14号窯式(K14)」が23点、「虎溪山1号窯式」・「東山72号窯式」が2点である。歴年代観には諸説があるが、ここでは前者を9世紀前葉~中葉、後者を10世紀後葉と考えることとする。したがって、灰釉陶器は緑釉陶器の少ない9世紀前葉~中葉が多く、逆に緑釉陶器が増加する10世紀後葉には少なくなるといえる。⁽³⁷⁾9世紀後葉と考えられる「黒笹90号窯式(K90)」については窪木遺跡からは明確なものは出土していないが、隣接する南溝手遺跡ではごく僅かではあるが出土している。⁽³⁸⁾

(平井)

註

- (1) 名称については、これまで発表された報告書や論文を参考にしているが、異なっているものもあり、今回は便宜的に使用している。
- (2) 器形や底部外面の調整痕の観察、および実験からこのように考えたが、これはすでに鈴木氏が中世の吉備系土師器碗の製作方法について指摘されている「底部押し出し技法」と同じ考え方である。
鈴木康之「土師質土器の成形技法に関する研究ノート」『草戸千軒』217号 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1992年
- (3) その他に色調では橙色系と白色系とに区別できる。また器壁が薄く、底が深く、高台の小さいものと、相対的にはあるが器壁が厚く、底が浅く、高台の大きいものとの分類できそうであるが、今後の課題としたい。
- (4) 口縁端部は水平ではなく、歪んだものが多いため、早く強い回転力が利用されていたとは考えにくい。
- (5) ただし、底部調整のうちナデとしているものについては、調整手法なのか使用による磨減なのか区別しにくいものも多かった。
- (6) 武田氏が提唱している「底部押圧技法」や山本氏が「①タイプ、②タイプ」と報告されているものに相当すると思う。また、こうした成形・調整方法については山本氏が究明されているように、回転台の上で粘土紐による巻き上げ成形を行い、口縁部にヨコナデを施した後、ヘラを底部周縁に約1~2cm差し込み、回転を利用して切り離す(ヘラ切り)。その後ヘラ切りの及んでいない中央部を指オサエやナデによって調整したものと考えられ、実験でも成形可能であった。なお、底部外面に数条の直線的な筋が観察できるものがあり、これについてはヘラ切り後、ヘラを差し込んで起こした時の痕跡と考えており、観察表には「ヘラ起こし」と表記している。
 - (イ) 武田恭彰「古代土器生産についての一予察」『古代吉備』第11集 1989年
 - (ロ) 山本悦世「備前地域における古代後半の土器様相—津島岡大遺跡第6次調査地点S D 13出土の小形器種を中心に—」『津島岡大遺跡6—第6・7次調査—』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- (7) 土壌197出土の2236~2239で、時期差というより工人差かもしれない。
- (8) 山本氏の報告されている「⑤タイプ」に相当すると思われる。(前掲註7のロ)
- (9) 杯A・Bに比べて早く強い回転を利用していたことが、水平な口縁端部や均一的なヨコナデ痕によって窺えるのではなからうか。
- (10) 佐藤氏が述べられている須恵器蓋杯の技法や緑釉陶器・灰釉陶器の成形技法の一つとして指摘されている「底部円柱作り」を参考にしており、実験によっても成形可能であった。
 - (イ) 佐藤浩司「古墳時代須恵器蓋杯の研究(1)—製作技法と法量変化からみた須恵器生産の画期について—」『研究紀要』第3集 北九州教育文化財団埋蔵文化財調査室 1989年
 - (ロ) 高橋昭彦「緑釉陶器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995年
- (11) ところでこうした試みは、すでに武田氏の一連の研究をはじめとして試みられていることであり、その成果についても公表されている。従って目新しい試みではないが、筆者なりの確認作業として実施しておきたい。
武田恭彰「岡山県に於ける回転台土師器の成立と変遷」『中近世土器の基礎研究』X 1994年
- (12) 第283図は各報告書において示されている計測値、および明記されていないものについては掲載図から測定した数値に基づいて作成している。
- (13) 津寺遺跡野上田調査区6区土器溜まり出土土器群を示している。この土器群と「吉野口P189」は大小二つのグループに区分できる。時期の異なるものが混在していると考え意見があるが、同一器形の法量による器種分化であり、奈良時代からの流れが継続している段階と考えることもできる。
「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1994年
- (14) 吉野口遺跡P189出土土器群を示している。
『吉野口遺跡—岡山市立鯉山小学校給食棟建築事業に伴う発掘調査報告—』岡山市教育委員会 1997年
- (15) 津寺遺跡高田調査区土壌4出土土器群を示している。
「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997年
- (16) 窪木遺跡溝208出土土器群を示している。(本報告書P167)
- (17) 津寺遺跡丸田調査区土壌36出土土器群を示している。
「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委

員会 1994年

- (18) 南溝手遺跡溝64出土土器群を示している。
「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995年
- (19) 津寺遺跡丸田調査区土壙44出土土器群を示している。(前掲註17文献)
- (20) 津寺遺跡土壙37出土土器群を示している。(前掲註17文献)
- (21) 「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』1 総社市教育委員会 1992年
- (22) 「窪木・山陰川」の次の段階については良好な資料は公表されていない。杯Aの底部ヘラ切りが主体になる段階があって、その後いわゆる中世的な碗・杯・小皿の器種構成になると現状では推測している。
- (23) この数値は実測図に掲載した土器の内、確認できたものに限られている。
- (24) ただし「津寺・丸田土壙44」では出土していないようである。
- (25) いちいち明記はしなかったが、土師器についての結論の多くは総社市教育委員会の武田氏の一連の研究成果として公表されている。またその成果に導かれているところも多く、日頃より教示も受けている。記して感謝します。
- (26) 津寺遺跡丸田調査区土壙44出土の緑釉陶器については、篠窯跡群の「前山2・3号窯段階」と推定しており、歴年代観としては10世紀前葉～中葉との考え方に従っている。
- (27) これ以外には明確な根拠は見あたりにくい。見通しのみを述べるならば、「津寺・丸田土壙36」段階が10世紀前葉、「津寺・高田土壙4」段階が9世紀後葉、「津寺・野上田」段階が9世紀中葉ではなかろうか。なお、樋本遺跡No.21土壙とその周辺出土遺物は、小片のため法量が不確かなものが多いが、先述の資料群の中では、「津寺・高田土壙4」段階に類似していると考えられる(「津寺・丸田土壙36」段階との中間の可能性もある)。この土器群の中には、K14～K90時期併行の灰釉陶器が含まれていることから、年代観としては9世紀中葉～後葉と推測しておきたい。
- (28) 平尾氏には1993年10月に、また1994年2月には古代土器研究会の諸氏とともに実見していただいた。まだ十分に整理できていない段階でかつ短時間であったにもかかわらず、様々な事柄に対して懇切丁寧な教示を数多く賜った。特に防長産緑釉陶器の存在を初めて指摘され、この資料群の重要性を説かれたことが印象に残っている。その後平尾氏に高橋氏を紹介され、1996年9月に実見していただくことができた。この時も短時間ではあったが、防長産のみならず緑釉陶器全般にわたって懇切丁寧な教示を数多く賜った。両氏から多くのことを学ばせていただいたことに対し、深く感謝いたします。なお、第7表、および附載4の第3表に必要上から両氏による生産地比定を掲載させていただいている。これは先の実見時に、短時間で、しかもあわたたしい中での観察にもかかわらず、教示いただいたことを筆者達がメモしたものに基づいたもので、両氏に対してご迷惑をかけるかもしれませんが、了承をお願いいたします。
- (29) 今回の資料で防長産としているのは、具体的には周防産を想定している。
- (30) ただし、近江産のものにも白色系の胎土をもつものがあるという教示も頂いており、また防長産の窯跡が未調査であることから、胎土の色調のみで両者を区別することはできないであろう。
- (31) ただし近江産としたものの中にもゴマ粒状の釉をしたものもある。
- (32) 京都産の中ではこの時期のものが多いことは、岡山県下で出土する京都産の時期的な傾向とも一致する。
- (33) 2540は胎土分析結果からは防長産の可能性が考えられる。
- (34) 岡山県内で報告された緑釉陶器の中では、川入遺跡(98の瓶)と南溝手遺跡(2020の碗)で防長産を確認することができた。また報告書近刊予定の北方中溝遺跡・高下遺跡・政所遺跡においてもその存在が確認できている。今後県外を含めて分布域が広がる可能性は高いであろう。ただし今回防長産とした緑釉陶器については、周防での生産地(窯跡)が未調査であり、また出土量も十分であるとはいえず、今後も理化学的手法による検討を含めて究明されるであろう。したがって今回の資料の位置づけもまた、見直されるべきであろう。
- (イ) 「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年
- (ロ) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995年
- (35) 灰釉陶器については柴垣勇夫氏・浅田員由氏(愛知県立陶磁資料館)や高橋照彦氏(国立歴史民俗博物館)などに実見していただき、年代をはじめとする多くのご教示を賜った。厚くお礼申し上げます。
- (36) 「K14」の新段階である「黒笹5号窯式(K5)」に最も近いものが多いという教示も頂いている。
- (37) 未調査区があるため今回出土した資料のみで判断することは危険であるが、こうした緑釉陶器と灰釉陶器の搬入のされ方の違いが、需要・供給どちらの側の理由によるものなのかについては、今回は明らかにできなかった。他遺跡との比較を含め、今後の課題としたい。
- (38) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995年

第7表 窪木遺跡出土緑釉陶器一覧表

遺物番号	掲載図番号	器種	焼成	釉の色調	胎土の色調	生産地(平尾氏)	生産地(高橋氏)
1	2703	皿?	軟質	深い緑	灰白 N 8/1	長門・周防?	防長か(近江)
2		瓶	軟質	明るい緑	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 黄灰2.5Y 6/1		防長
3		碗	軟質	深い緑	淡黄 2.5Y 8/3	近江?(長門・周防)?	近江
4		碗?	軟質	外面オリーブ 内面明るい緑	灰白 10YR 8/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
5		碗	硬質	外面灰オリーブ 内面オリーブ灰	灰 10Y 6/1	近江	近江
6		碗	硬質	明るい黄緑	灰 5Y 6/1		近江
7		碗	軟質	深い緑	にぶい黄橙 10YR 7/3	近江	近江
8		碗	硬質	オリーブ灰	灰 7.5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	近江
9		瓶?	軟質	明るい緑(ゴマ状)	表面 灰白2.5Y 8/2 中心部 灰 5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	防長
10		瓶?	軟質	明るい緑(ゴマ状)	表面 明るい赤灰2.5YR 7/2 中心部 灰 5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	防長
11		碗	軟質	黄緑	灰白 2.5Y 8/2	近江?(長門・周防)?	京都
12		碗	硬質	明るい緑	黄灰 2.5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	近江
13		皿?	軟質	深緑	灰白 10YR 8/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
14	2697	碗	軟質	明るい緑	浅黄橙 10YR 7/3	近江	近江
15		碗	軟質	深緑	にぶい黄橙 10YR 7/2	近江?(長門・周防)?	近江
16		碗	硬質	オリーブ	灰 5Y 6/1	京都	近江?
17		碗	軟質	暗いオリーブ	にぶい黄橙 10YR 7/4	近江	近江
18		瓶	軟質	明るい緑と深緑(はじけている)	表面 灰白10YR 8/1 中心部 灰7.5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
19		碗?	軟質	明るい緑	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 灰7.5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
20		碗?	軟質	明るい緑	表面 灰白5Y 8/1 中心部 灰 5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
21		碗	軟質	緑	灰白 10YR 8/2	近江?(長門・周防)?	近江
22		碗	硬質	黄緑(ゴマ状)	灰 5Y 6/1	京都	近江?
23		碗	軟質	明るい緑	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 黄灰2.5Y 6/1	近江?(長門・周防)	防長
24	2409	碗	軟質	やや明るい緑	灰白 2.5Y 7/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
25	2404	碗	軟質	深緑(内面ゴマ状)	灰白 10YR 8/2	近江?(長門・周防)?	近江
26		碗	硬質	オリーブ黄	灰 5Y 6/1	京都	京都
27		碗?	軟質	明るい緑	灰白 5Y 8/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
28		碗?	軟質	緑	灰白 2.5Y 8/1	近江?(長門・周防)	防長か(近江)
29	2401	皿	硬質	黄緑	にぶい橙 5YR 6/4	京都	京都
30	2403	碗	硬質	深緑(つぶ状)	灰 N 6/	近江	近江
31		碗	硬質	黄褐	黄灰 2.5Y 5/1	京都	京都
32		碗	軟質	明るい緑	浅黄橙 10YR 8/3	近江?(長門・周防)	近江
33	2410	皿	軟質	黄緑	灰白 5Y 8/1	近江?(長門・周防)?	防長
34	2411	皿	硬質	灰オリーブ	灰白 5Y 7/1	強いていえば近江	東海か
35	2408	皿	硬質	灰オリーブ(はじけている)	灰 7.5Y 5/1	京都	近江
36	2405	碗	軟質	深緑	灰白 10Y 8/1	近江に近い	近江
37		碗	硬質	オリーブ灰	灰 7.5Y 5/1	京都	近江
38		碗	軟質	明るい緑(泡沫状)	表面 灰白10YR 8/1 中心部 灰 5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
39	2407	皿	軟質	深緑(ゴマ状)	淡黄 2.5Y 8/3	近江?(長門・周防)?	近江
40	2406	皿?	軟質	明るい緑	浅黄橙 10YR 8/3	近江?(長門・周防)?	近江
41		碗	軟質	明るい緑	灰白 2.5Y 8/2	近江	近江
42	2402	碗	硬質	黄緑	表面 にぶい橙7.5YR 6/4 中心部 灰7.5Y 6/1	京都	京都
43		碗	軟質	明るい緑	灰白 2.5Y 8/2	近江?(長門・周防)?	近江?(>防長?)
44		碗	軟質	明るい緑	灰白 5Y 8/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
45		碗?	軟質	深緑	灰白 2.5Y 8/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
46		碗	軟質	深緑(ゴマ状)	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 黄灰2.5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	防長
47		碗	軟質	黒オリーブ	にぶい黄橙 10YR 7/3	近江	近江
48		碗	軟質	深緑	灰白 2.5Y 8/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
49		碗	硬質	暗いオリーブ	黄灰 2.5Y 5/1	京都	近江?
50	2543	瓶?	軟質	深緑と黄緑(ゴマ状)	表面 灰白2.5Y 8/2 中心部 黄灰2.5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
51		碗	硬質	灰オリーブ	灰 5Y 6/1	近江	近江?(>防長?)
52		瓶?	軟質	緑とうすい緑(泡沫状)	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 黄灰2.5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
53		碗?	軟質	緑	表面 にぶい橙10YR 7/3 中心部 褐灰10Y 6/1	近江?(長門・周防)?	近江
54		碗	軟質	緑	黄灰 2.5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	近江
55		碗	軟質	黄緑(ゴマ状)	浅黄橙 10YR 8/3	近江	近江
56		碗	軟質	深緑	にぶい黄橙 10YR 7/2	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
57		碗	軟質	明るい緑(ゴマ状)	表面 灰白10Y 8/2 中心部 黄灰2.5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
58		碗	軟質	うすい緑	灰白 10YR 8/1	京都	京都
59		皿?	軟質	灰オリーブ	灰白 2.5Y 8/2		京都
60	2535	碗	硬質	うすい緑	灰 5Y 6/1	篠	京都
61		碗	軟質	深緑	灰 7.5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
62		碗	軟質	緑	灰 5Y 7/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
63	2536	碗	硬質	深緑	灰白 N 5/	近江か美濃?	近江

第3節 古代の土器について

遺物番号	掲載図番号	器種	焼成	釉の色調	胎土の色調	生産地(平尾氏)	生産地(高橋氏)
64	2541	皿	軟質	黄緑と深緑	にぶい黄橙 10YR 7/2	近江?(長門・周防)?	近江
65		碗?	軟質	やや深緑	灰白 2.5Y 8/1	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
66	2539	碗	軟質	黄緑と深緑	灰白 2.5Y 8/2	近江?(長門・周防)?	近江
67		碗	軟質	深緑	灰白 N 8/	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)
68	2538	碗	軟質	緑	灰白 N 8/	近江	近江
69	2542	瓶	軟質	明るい緑(ゴマ状)	表面 灰白10YR 8/1 中心部 灰5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	防長
70		碗	軟質	深緑	灰白 2.5Y 8/1	近江?(長門・周防)?	防長
71		碗	軟質	残存していない	表面 灰黄2.5Y 7/2 中心部 にぶい橙7.5YR 7/4	近江	近江
72		碗	軟質	緑	表面 にぶい黄橙7.5YR 7/3 中心部 黄灰2.5Y 6/1	近江	近江
73		碗	硬質	オリーブ	灰 10Y 6/1	近江?(長門・周防)?	近江
74	2540	碗	軟質	深緑とうすい緑	浅黄橙 10YR 8/3	近江	近江
75		碗	軟質			近江	近江
76		碗	硬質	オリーブ黒	灰 N 5/	京都	近江
77		碗	軟質	うすい緑と黄緑	灰白 10YR 8/2		近江
78		碗	軟質	うすい緑(ゴマ状)	表面 灰白10YR 8/1 中心部 灰5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
79		碗	軟質	オリーブ黒	にぶい黄橙 10YR 7/3	近江?(長門・周防)?	近江
80	2701	碗	軟質	やや明るい緑	灰白 2.5Y 8/1	近江(長門・周防)?	防長
81	2686	碗	硬質	うすい緑	灰 N 5/	京都(小塩1号)	京都
82		碗	軟質	緑	灰白 2.5Y 8/2	近江?(長門・周防)?	近江
83		碗	軟質	黄緑	浅黄橙 10YR 8/3	近江	近江
84		碗?	軟質	明るい緑と緑(ゴマ状)	表面 灰白10YR 8/1 中心部 褐灰10Y 6/1	近江?(長門・周防)?	防長
85		碗	軟質	うすい緑	灰 5Y 5/1	京都	京都
86	2699	碗	軟質	明るい緑	にぶい橙 5YR 6/4	近江	近江
87	2691	碗	硬質	やや深緑	灰 10Y 5/1	京都	近江
88		碗	軟質	深緑	浅黄橙 10YR 8/4	近江	近江
89		碗	軟質	緑	表面 灰白10YR 8/1 中心部 褐灰10Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長か(>近江)
90	2690	碗	硬質	明るい緑～深緑	灰 N 6/	京都	近江
91	2688	碗?	硬質	深みのあるオリーブ黒	灰 N 6/		近江(>東海か)
92		瓶	軟質	明るい緑(泡沫状)	表面 灰白10YR 8/1 中心部 黄灰2.5Y 6/1	近江?(長門・周防)?	防長
93		碗	軟質	オリーブ黒	黄灰 2.5Y 7/2	近江?(長門・周防)?	近江
94		碗	軟質	黄緑	にぶい黄橙 10YR 7/3	近江	近江
95		碗	軟質	深緑	にぶい黄橙 10YR 7/2	近江?(長門・周防)?	近江
96	2702	碗	軟質	明るい緑	灰 5Y 5/1	近江?(長門・周防)?	防長
97	2695	皿?	硬質	オリーブ灰	灰 10Y 6/1	京都	近江
98	2692	碗	硬質	オリーブ黒	灰 7.5Y 5/1	京都	近江
99	2687	皿	硬質	灰オリーブ	灰 5Y 6/1	京都	京都か(>近江)
100	2685	碗	硬質	灰がったオリーブ	表面 にぶい褐7.5YR 5/4 中心部 灰N 6/	京都(幡枝)	京都
101		碗	軟質	深緑	淡黄 2.5Y 8/3	近江?(長門・周防)?	近江
102		碗	硬質	深緑	灰 N 5/	美濃か近江?	近江
103	2698	皿?	軟質	深緑	浅黄橙 10YR 8/4	東海?(長門・周防)?	近江
104	2684	碗	硬質	黄緑	灰白 2.5Y 8/1	京都	京都
105		碗	軟質	明るいオリーブ灰	表面 灰白5Y 8/1 中心部 黄灰2.5Y 6/1	近江	防長?(>近江?)
106		碗	硬質	暗いオリーブ	表面 にぶい黄橙10YR 7/4 中心部 黄灰2.5Y 6/1		近江
107	2694	碗	硬質	暗いオリーブ	灰 5Y 5/1		近江
108		碗	軟質	うすい黄緑	浅黄橙 10YR 8/3		京都?
109		碗	硬質	オリーブ黒	灰 N 6/	近江	近江
110	2696	碗?	硬質	明るい緑	灰 7.5Y 6/1	美濃(近江)?	近江
111	2704	碗	軟質	明るいうす緑(ゴマ状)	表面 灰白5Y 8/1 中心部 灰5Y 4/	長門・周防?	防長
112	2706	瓶	軟質	明るい緑(ゴマ状)	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 灰7.5Y 5/1	長門・周防	防長
113		碗?	軟質	緑と深緑	灰白 2.5Y 8/1	長門・周防?	防長か(>近江)
114	2705	瓶?	軟質	明るい緑(釉が垂れている)	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 黄灰2.5Y 6/1	長門・周防?	防長
115		瓶?	軟質	明るい緑(ゴマ状)	表面 灰白10YR 8/1 中心部 灰5Y 6/1	近江(長門・周防)	防長
116	2700	碗	硬質	やや明るい緑	灰 N 7/	近江	近江
117		碗	軟質	緑	灰黄褐 10YR 5/2	近江?	防長
118		碗	硬質	明るい緑	灰 5Y 6/1	近江	近江
119		碗	軟質	緑	黄灰 2.5Y 7/2		防長か(>近江)
120		碗	軟質	緑と黄緑	灰白 2.5Y 7/1 浅黄橙10YR 8/4	近江?	防長か(>近江)
121		碗	硬質	オリーブ灰	灰 5Y 5/1		近江
122		碗	軟質	緑	灰白 5Y 8/1		防長か(>近江)
123	2537	碗	軟質	深緑と緑	灰白 10YR 8/2		近江
124		碗?	軟質	やや深緑	にぶい黄橙 10YR 7/4		近江
125		瓶?	軟質	緑とうす緑(ゴマ状)	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 黄灰2.5Y 5/1		防長

第4章 まとめ

遺物番号	掲載図番号	器種	焼成	釉の色調	胎土の色調	生産地(平尾氏)	生産地(高橋氏)
126	2689	碗?	軟質	やや深緑	灰白 10YR 8/2		近江
127		碗	軟質	うすい緑(ごま状)	表面 淡黄2.5Y 8/3 中心部 灰黄2.5YR 6/2		防長
128		碗	軟質	うすい緑	灰白 2.5Y 8/2		京都?
129	2693	碗	硬質	深緑と黄緑	灰 7.5Y 5/1	近江	近江
130		碗	硬質	黄緑と深緑	灰 7.5Y 5/1		近江
131	2544	皿	硬質	黄褐	灰黄褐 10YR 5/2	近江?	東海か(>近江)
132		碗	硬質	黄緑	表面 にぶい黄橙7.5YR 7/3 中心部 灰5Y 6/1		京都?
133		碗	軟質	うすい緑(ごま状)	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 灰7.5Y 5/1		防長
134		碗?	軟質	緑	灰白 2.5Y 8/2		防長か
135		瓶?	軟質	うすい緑(ごま状)	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 黄灰2.5Y 5/1		防長
136		碗	軟質	緑	にぶい黄橙 10YR 7/3		近江
137		碗	軟質	深緑	灰白 2.5Y 8/1		防長?
138		碗	軟質	緑	灰白 5Y 8/1		防長?
139		碗	軟質	やや深緑と緑	灰白 2.5Y 8/1		防長?
140		碗	軟質	やや深緑と緑	灰白 2.5Y 8/1		防長?
141		碗	軟質	緑	にぶい黄 2.5Y 6/3		近江
142		碗	軟質	緑	灰白 2.5Y 7/1		防長?
143		碗	軟質	黄緑	浅黄橙 7.5YR 8/3		近江?
144		瓶	軟質	うすい緑(釉が垂れている)	表面 灰白2.5Y 8/1 中心部 灰5Y 5/1		

第8表 窪木遺跡出土灰釉陶器一覧表

遺物番号	実測図番号	掲載図番号	器種	型式名	型式名	備考
1			?	K14	K14	
2			小瓶		?	
3	1298	2398	碗	K14	?	
4	1299	2399	碗	O-53?	虎溪山1号(東濃)	H72(猿投)
5	1300	2547	碗?	K14	?	
6			?	K14	K14	三叉トチンの跡有り
7			?		?	
8	1301	2548	?	O-53の可能性あり	虎溪山1号(東濃)	内外の沈線。H72(猿投)
9	1302	2545	碗	K14	K14	
10			?	K90	K14?美濃にちかい?	
11			?	K14	K14	
12	1303	2546	碗	K90(O53と類似)	K14	
13	1304	2713	碗	K14	K14	
14	1305	2707	碗	K14	K14	K11
15	1306	2714	皿?	K14	K14	
16	1307	2715	碗	K14	K14	
17	1308	2712	碗	K14	K14	
18	1309	2716	皿?	K14	K14	
19			?	K14	K14	
20			?	K14	K14	
21	1310	2709	碗	K14	K14	
22	1311	2717	皿?	K14	K14	釉かからず?
23	1312	2718	碗	K14	K14	
24	1313	2708	碗		K14	25と同一個体
25	1314	2708	碗	K14?	K14	
26	1315	2713	碗	K14	K14	トチン跡あり
27	1316	2710	碗		K14	
28			?		K14	
29	1317	2711	碗	K14	K14	
30			小瓶		?	

付載 1 窪木遺跡出土土器の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール(植物珪酸体)分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

ここでは、窪木遺跡より出土した土器5点について、当該時期における稲作の痕跡を探る目的で植物珪酸体分析を行った結果について報告する。

2. 試料

分析試料は、土器掲載番号1698、1562、1681、1711、1684、の5点であり、いずれも縄文時代後期初頭のものとしてされている。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)」および「プラント・オパール土器胎土分析法(藤原、1982)」を基本に、次の手順で行った。

- 1) 土器片を採図(コピー)する。
- 2) 土器片を3～4 cm角程度に分割し分析試料とする。
- 3) 試料の表面を研削し異物を除去する。
- 4) 超音波照射(200W・42kHz・10分間)により洗浄する。
- 5) 煮沸後再び超音波照射により試料を柔軟化する。
- 6) 試料を圧砕し土壌化する。
- 7) 試料土を恒温乾燥機(105℃・24時間)で絶乾する。
- 8) 試料土約1 gを秤量し、ガラスビーズ(直径約40 μm 、約0.02 g)を添加する。
- 9) 電気炉灰化法により脱有機物処理を行う。
- 10) 超音波照射(300W・42kHz・10分間)により分散する。
- 11) 沈底法により微粒子(20 μm 以下)を除去後乾燥する。
- 12) 封入剤(オイキット)中に分散し、プレパラートを作成する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来する植物珪酸体(以下、植物珪酸体と略す)を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が2000以上になるまで行った。これはほぼプレパラート5枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1 g中の植物珪酸体個数(試料1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。

4. 分析結果

植物珪酸体分析の結果を表1に示す。

土器試料5点について分析を行った。分析の結果、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科、マコモ属の植

表1 窪木遺跡出土土器胎土の植物珪酸体分析結果

(単位：個/ε)

試料名	ヨシ属	ウシクサ族	タケ亜科	マコモ属	その他	総数
1698	900	1,100	1,300	100	10,800	14,200
1562	400	600	3,700	0	12,800	17,500
1681	400	300	1,800	0	6,800	9,300
1711	2,200	3,100	6,600	0	44,400	56,300
1684	1,500	100	1,900	0	9,700	13,200

物珪酸体が同定された。

5. 所見

土器の胎土からイネの植物珪酸体が検出された場合、1) 土器の原料である粘土中にイネの植物珪酸体が含まれていた、2) 土器の製作の過程において人為的に稲藁が混入された、3) 土器の製作中、偶然イネの植物珪酸体が混入した、などの理由が考えられる。

今回、5点の土器試料について分析を行ったが、イネの植物珪酸体はいずれからも検出されなかった。このことは、これらの土器の原料となった粘土にはイネの植物珪酸体は含まれておらず、また、土器の製作の過程においてもイネの植物珪酸体の混入が生じなかったことを意味する。したがって、少なくとも原料として用いられた粘土が採取された地点一帯では稲作は行われていなかったと判断される。

なお、試料No.435においては、他に比べ植物珪酸体含有量が多く、その他(未同定)をはじめ各植物の検出密度も明らかに高い値である。したがって、No.435土器の原料となった粘土は、他のものとは異なる地点で採取された可能性が考えられる。

6. まとめ

窪木遺跡より出土した縄文時代後期初頭の土器5点について、当該時期における稲作の存否を確認する目的で植物珪酸体分析を行った。その結果、いずれの試料からもイネの植物珪酸体は検出されず、稲作の痕跡を見いだすことはできなかった。

文献

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9: p15-29.

藤原宏志(1982)プラント・オパール分析法の基礎的研究(4)—熊本地方における縄文土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出—, 考古学と自然科学, 14: p55-65.

付載2 窪木遺跡・南溝手遺跡出土の碧玉製管玉、 管玉片の産地分析

京都大学原子炉実験所 藁科哲男

・はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉作り遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何か所かあるヒスイの原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法⁽¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^(2,3)が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析を正確に行った例⁽⁴⁾が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えられられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになる玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類は、岡山県総社市の窪木遺跡の溝179出土の管玉S457および包含層出土の管玉片S433、また南溝手遺跡の堅穴住居23出土の弥生時代中期後葉の管玉片S725および土壙249出土の弥生時代中期中葉の管玉片S764の合計4で、玉類の分析結果が得られたので報告する。

・非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している非破壊⁽⁴⁾で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されて

いる常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。⁽⁵⁾

・碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を図1に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図1で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

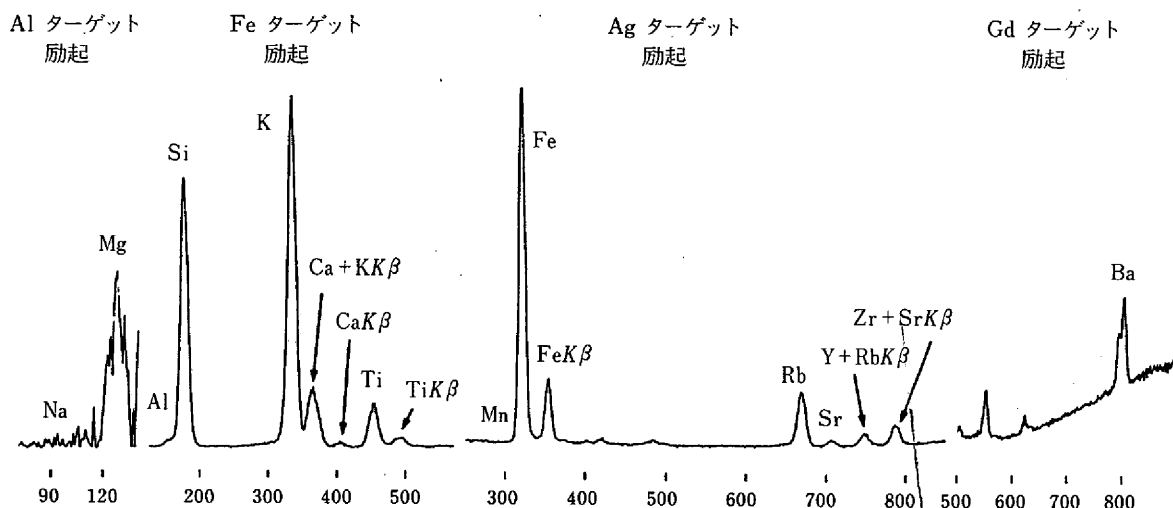


図1 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

・碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図2に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーントフ的なものである。産出量は豊富であつたらしく採石跡が何ヶ所も見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーントフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であつた。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間は31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違つても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶色系と緑色系の縞があるなど、多少色の違いがあつても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は②島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剝離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーントフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがつて比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間は10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーントフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違

い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。このような良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は、医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25~2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地、⑦北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になってい

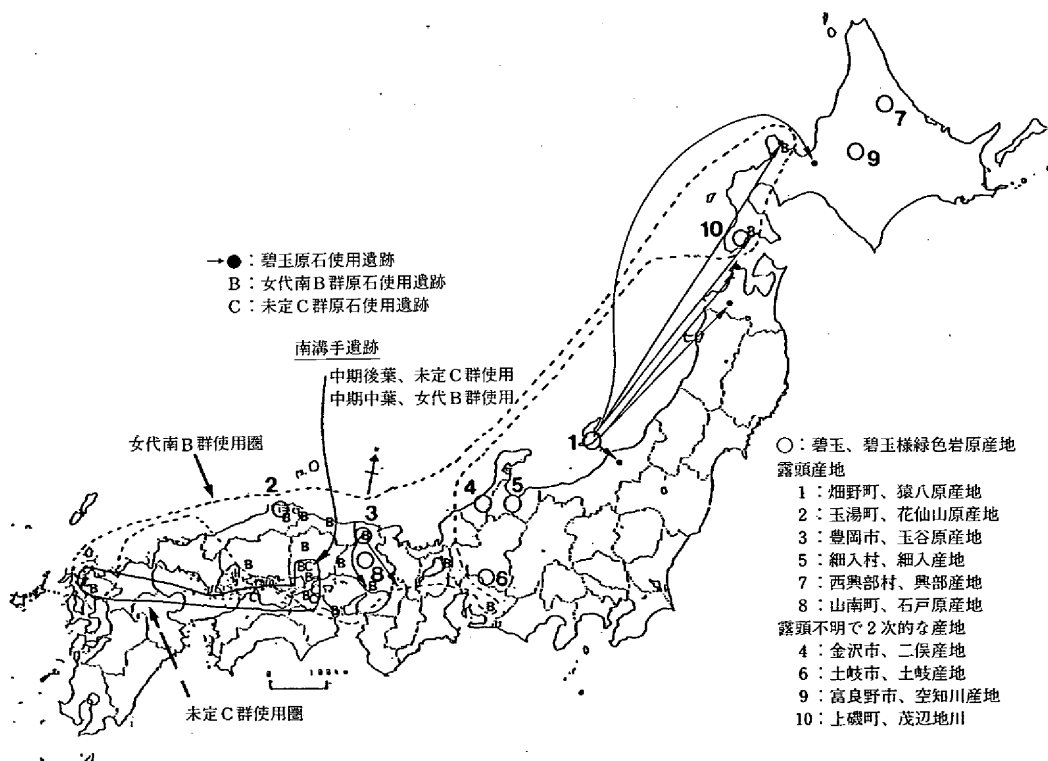


図2 碧玉および碧玉様緑色岩の原産地および弥生(続縄文)時代の碧玉製管玉の原材使用分布図

表1 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析 個数	Al/Si ±σ	K/Si ±σ	Ca/K ±σ	Ti/K ±σ	K/Fe ±σ
興部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
空知A1	10	0.049±0.017	1.044±0.299	2.308±0.556	0.484±0.096	0.052±0.012
空知A2	3	0.019±0.009	0.675±0.377	0.623±0.203	0.172±0.031	0.040±0.007
空知B	2	0.066±0.001	3.927±0.267	0.088±0.004	0.089±0.003	0.283±0.034
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
茂辺地川	4	0.031±0.002	1.847±0.246	0.077±0.024	0.222±0.052	0.092±0.021
女代南B	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099
未定C	58	0.030±0.028	4.416±0.618	0.013±0.013	0.207±0.034	0.589±0.130

原石群名	分析 個数	Rb/Fe ±σ	Fe/Zr ±σ	Rb/Zr ±σ	Sr/Zr ±σ	Y/Zr ±σ
興部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
空知A1	10	0.108±0.042	4.658±2.044	0.438±0.089	15.676±4.311	0.054±0.041
空知A2	3	0.037±0.010	27.651±10.97	1.132±0.759	5.930±3.179	0.349±0.251
空知B	2	0.455±0.010	2.281±0.278	1.035±0.104	0.235±0.084	0.129±0.022
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
茂辺地川	4	0.190±0.052	5.566±1.549	0.980±0.044	0.300±0.032	0.171±0.051
女代南B	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047
未定C	58	0.650±0.113	0.583±0.110	0.369±0.035	0.090±0.030	0.070±0.026

原石群名	分析 個数	Mn/Fe ±σ	Ti/Fe ±σ	Nb/Zr ±σ	比重 ±σ
興部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
空知A1	10	0.078±0.152	0.019±0.005	0.003±0.007	2.495±0.039
空知A2	3	0.009±0.003	0.006±0.002	0.118±0.167	2.632±0.012
空知B	2	0.015±0.002	0.022±0.004	0.123±0.010	2.607±0.001
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
茂辺地川	4	0.003±0.008	0.016±0.001	0.132±0.069	2.536±0.033
女代南B	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019
未定C	58	0.002±0.001	0.101±0.019	0.019±0.016	2.646±0.023

：平均値、σ：標準偏差値

女代南B：女代南遺跡（豊岡市）使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

未定C：宇木汲田遺跡（唐津市）で使用されている原石産地不明の管玉で作った群

る。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地、⑧兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.62.5が5個、2.52.4が5個である。碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質の碧玉を多数収集することは困難である。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉で不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表1に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが、比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒に行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索するという目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B(女代(B))群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。また、宇木汲田遺跡の管玉に産地未発見の原石を使用した同質の材料で作られた管玉で作った未定C(未定(C))群をそれぞれ原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村多鯨池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

・窪木遺跡・南溝手遺跡出土の管玉、管玉片と国内産碧玉原材料との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原材産地の同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

・蛍光X線法による産地分析

これらの玉類の蛍光X線分析のスペクトルを図3～6に示し、比重および玉類の蛍光X線分析から原材料の元素組成比を求めて結果を表2に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光X線分析でRb、Sr、Y、Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。これら遺物の元素組成比の結果を碧玉原石群(表1)の結果と比較してみる。分析個数が少なく統計処理ができる群が作れなかった産地については、原石の元素組成比を今回分析した遺物と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリング⁽⁶⁾T²検定により同定を行ったところ、興部、玉谷、猿八の各群に一致する管玉は見られず、花仙山、女代南B、未定Cの各群に同定された。これら群への帰属確率の結果を表3に示した。より正確に産地を特定するためにESR分析を併用して産地分析を行った。

・ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡

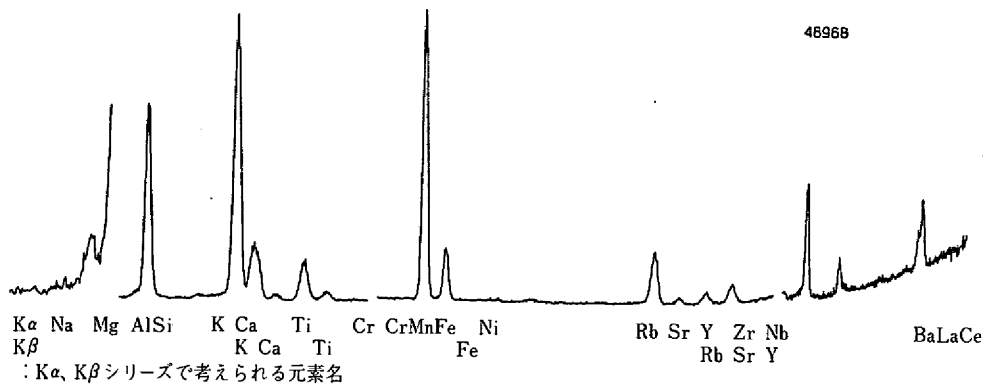


図3 窪木遺跡出土、管玉 S 457 (48968) の蛍光 X 線スペクトル

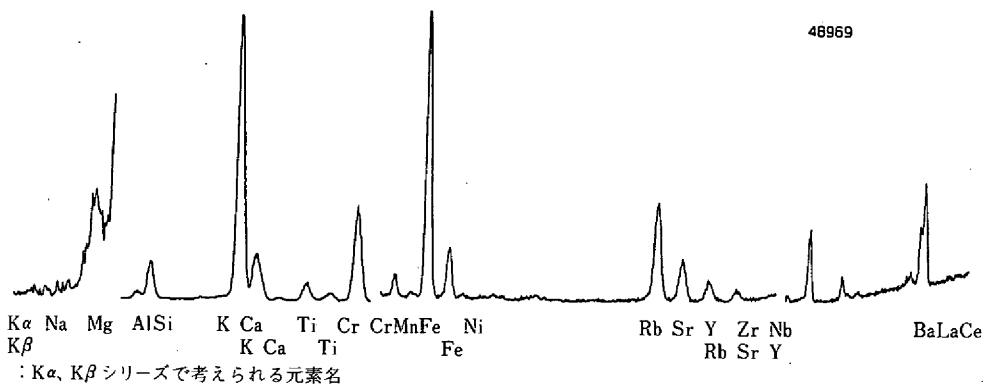


図4 窪木遺跡出土、管玉片 S 433 (48969) の蛍光 X 線スペクトル

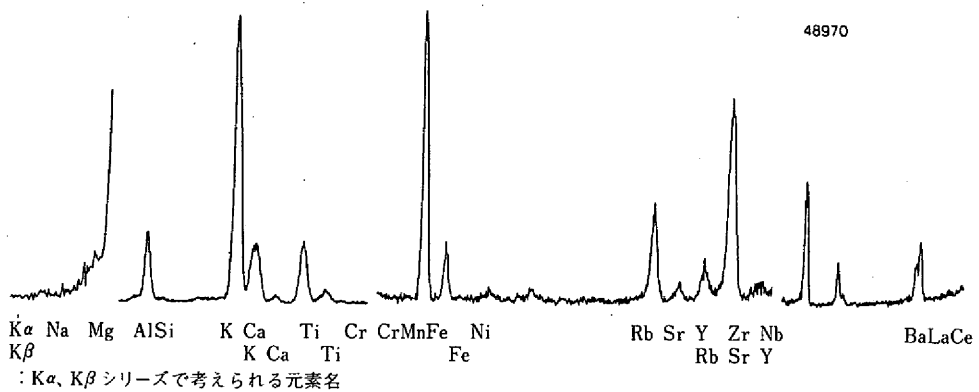


図5 南溝手遺跡出土、管玉 S 725 (48970) の蛍光 X 線スペクトル

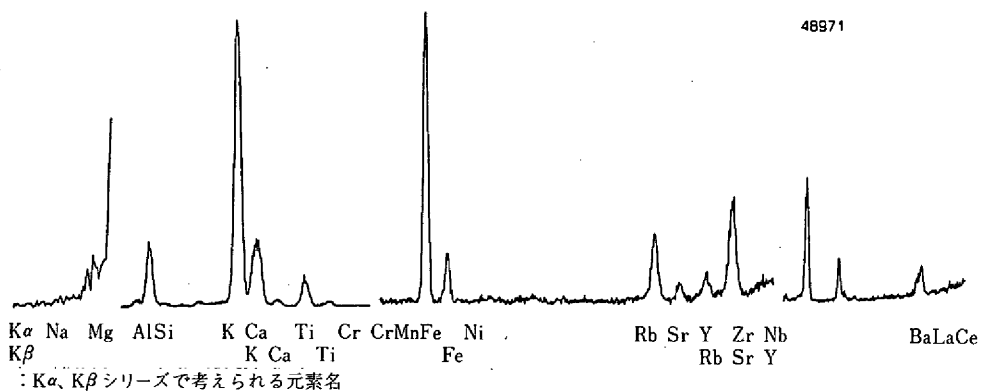


図6 南溝手遺跡出土、管玉片 S 764 (48971) の蛍光 X 線スペクトル

表2 窪木、南溝手遺跡出土管玉、管玉片の分析結果

遺跡一試料番号	分析番号	元 素 比							
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
窪木-管玉-S457	48968	0.000	1.464	0.041	0.152	0.069	0.234	12.851	3.004
" - " -S433	48969	0.151	7.327	0.031	0.064	0.233	0.457	45.457	20.776
南溝手- " -S725	48970	0.054	4.292	0.023	0.234	0.365	0.433	0.898	0.388
" - " -S764	48971	0.057	4.813	0.020	0.099	0.347	0.273	2.380	0.650
JG-1 ^{a)}		0.071	3.741	0.769	0.227	0.122	0.266	3.739	0.996

遺跡一試料番号	分析番号	元 素 比					重量 gr	比重	備考
		Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr			
窪木-管玉-S457	48968	0.328	0.127	0.003	0.008	0.000	1.9206	2.545	管玉
" - " -S433	48969	8.798	0.538	0.011	0.013	0.000	1.5207	2.719	管玉片
南溝手- " -S725	48970	0.076	0.085	0.003	0.073	0.031	0.0311		"
" - " -S764	48971	0.137	0.098	0.006	0.027	0.040	0.0416		"
JG-1 ^{a)}		1.343	0.235	0.023	0.024	0.080			

a) : 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192.

表3 窪木、南溝手遺跡出土管玉、管玉片の原石産地分析結果

遺跡	試料番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率					ESR 信号形	総合判定 原石産地
			興部群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群		
窪木	S457	48968	1X10 ⁻⁶ %	<10 ⁻¹⁰ %	96 %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	花仙山
"	S433	48969	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	不明
南溝手	S725	48970	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	1X10 ⁻⁹ %	4 %	未定(C)
"	S764	48971	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻¹⁰ %	0.0003 %	0.1 %	<10 ⁻¹⁰ %	女代(B)

麻粒大で分析ができる場合がある。図7-(1)の ESR のスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g 値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、g 値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されている。図7-(1)では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、図7-(2)、-(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉類の中で信号(II)が信号(III)より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号(III)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図8-(1)に花仙山、猿八、玉谷、土岐を図8-(2)に興部、石戸、八代谷-4、女代(B)遺物群、八代谷および図8-(3)に富良野市空知川の空知(A)、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号(III)のスペクトルを示す。図8-(4)には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。ESR 分析では分析した管玉の ESR 信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石の産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した玉類の ESR 信号(III)の結果を図9に示す。窪木-S457(48968)の信号IIIでc、1のピークが小さいが花仙山原石の信号に一致し、窪木-S433(48969)の信号IIIに一致する原石は見られない。南溝手-S725(48970)は未定C群に一致し、-S764(48971)はベースラインに小さな信号が見られるが、主体の信号は女代B群である。正確な原石産地を推測するために蛍光X線

分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合のみ、その群の原石と同じものが使用されているとして総合判定原石産地の欄に結果(3)を記した。

・結 論

今回分析を行った窪木遺跡の179溝出土の管玉S457は蛍光X線分析、ESR 分析の両結果が花仙山となり花仙山産原石製管玉と判定された。管玉片S433は比重が2.719で碧玉とは言えず、分析結果も何れの原石群とも一致しなかった。南溝手遺跡の竪穴住居23出土の弥生時代中期後葉の管玉片S725は西北九州地域で多く出土する産地未発見の未定C群の原石を使用した管玉に、蛍光X線分析、ESR 分析の両結果が一致し、土壙249出土の弥生時代中期中葉の管玉片S764は女代B群に一致した。南溝手遺跡では中期中葉に女代B群の管玉が使用され、中期後葉に未定C群の玉が使用されている。今回の分析で使用が確認された女代南B群は弥生時代を中心に使用された原石で、豊岡市の女代南遺跡の中期の玉作り過程の石片、滋賀県の筑摩佃、立花遺跡出土の管玉、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉には

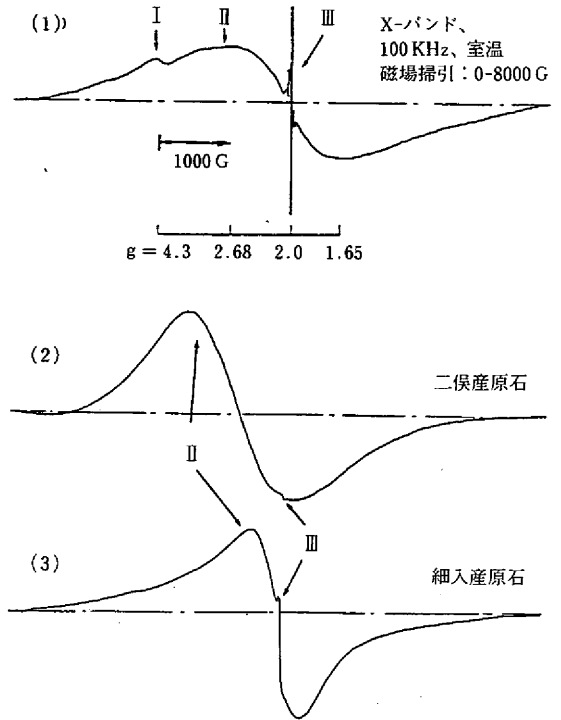


図7 碧玉原石の ESR スペクトル (花仙山、玉谷、猿八、土岐)

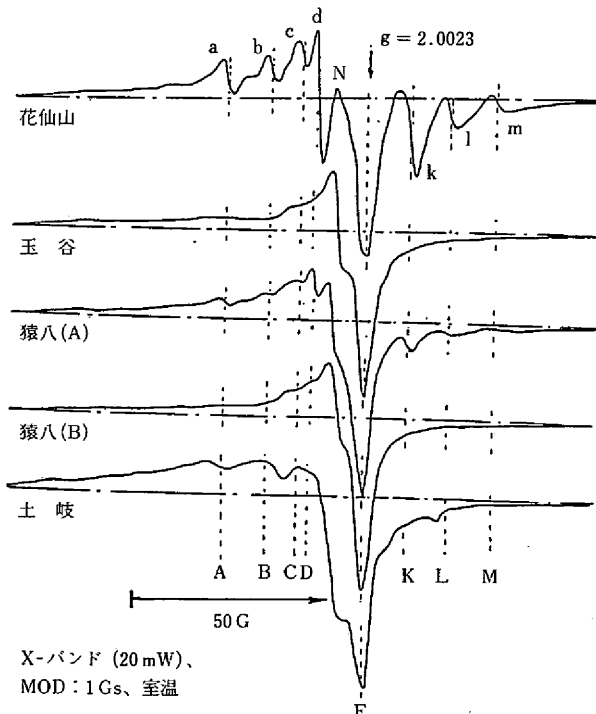


図8-(1) 碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

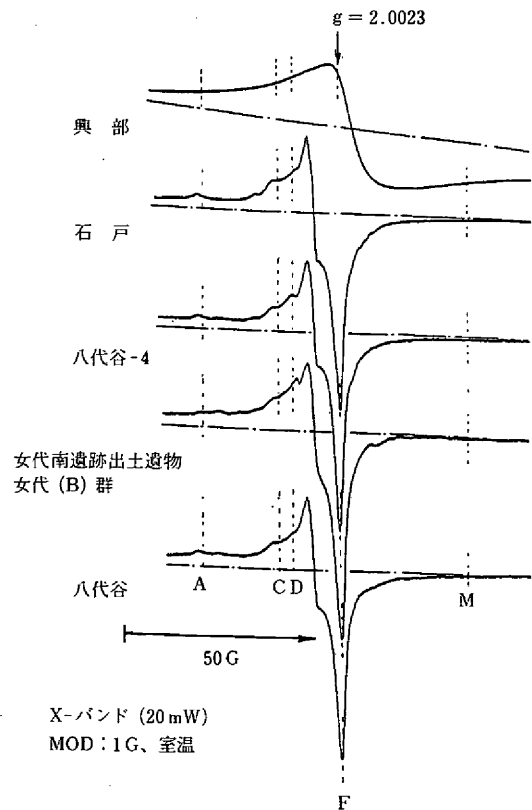


図8-(2) 碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

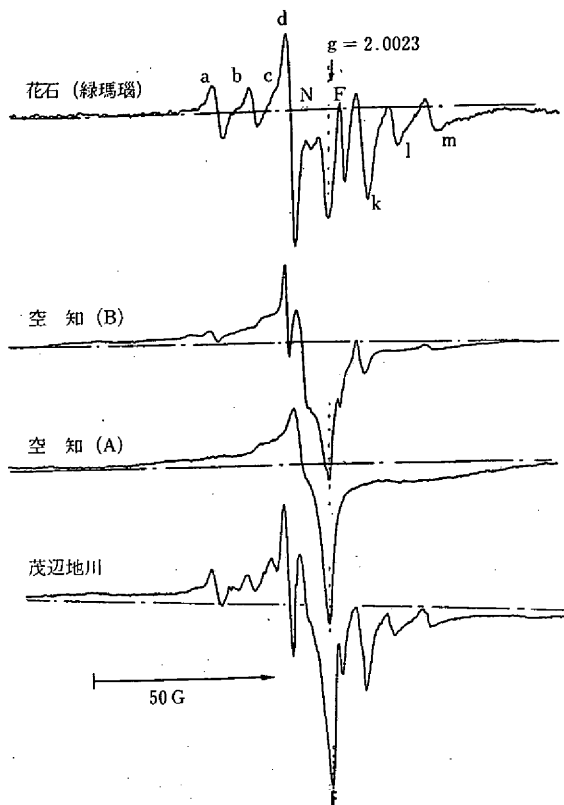


図 8-(3) 碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

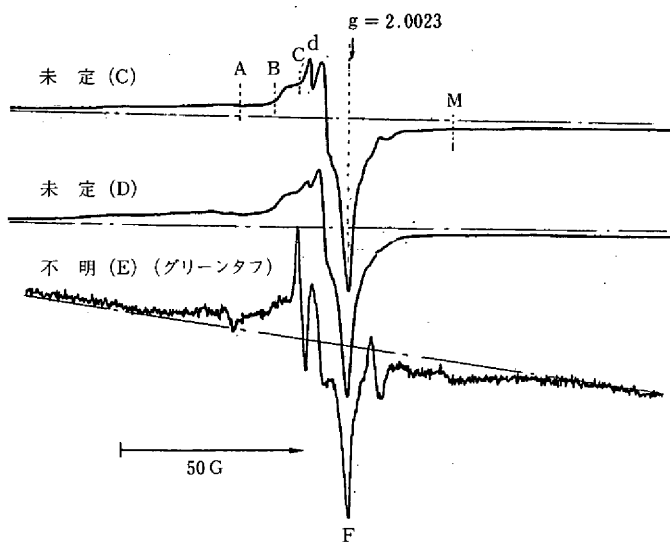


図 8-(4) 碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

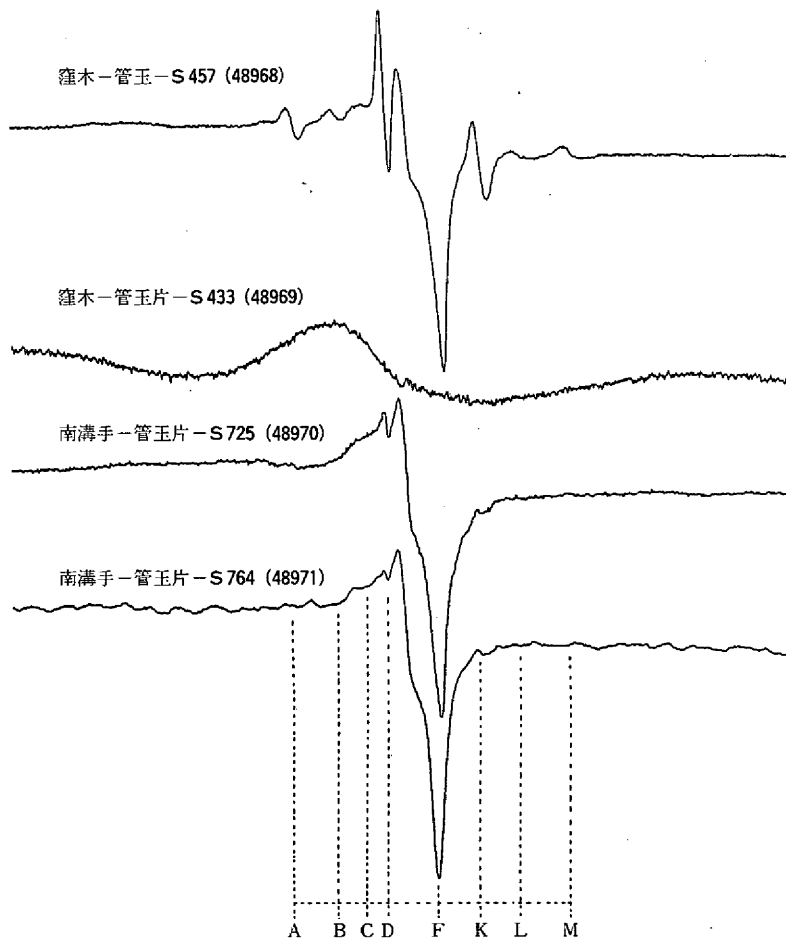


図 9 窪木、南溝手遺跡出土管玉、管玉片の信号Ⅲの ESR スペクトル

玉谷産と共に使用されていた。東海地方では新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代の管玉に、また中国地方では、作用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の後期前葉の玉材(S820)、岡山市の百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第2主体部出土の管玉、東広島市の西本6号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県板野町の蓮華谷古墳群Ⅱ、2号墳、3世紀末の管玉、香川県善通寺市の彼ノ宗遺跡の末期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉に使用されていた。女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに匹敵する広い分布圏を示している。一方、南溝手遺跡の中期後葉の管玉片S725には、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C群の原石が使用され、この未定C群は坂出市の龍川・五条遺跡の管玉、今治市の持田町3丁目遺跡の前期の管玉、大和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、吉野ヶ理遺跡の南西サブトレ出土の管玉に使用されていたに過ぎない。また、猿八産原石が弥生時代に使用されている遺跡は、北海道余市町の大川遺跡および茂別遺跡の統縄文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大麻22遺跡出土の統縄文(後北C1式)の管玉に、七飯町の大中山13遺跡(統縄文)出土の管玉に使用され、佐渡島以北で主に使用されていることが明らかになっている。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剝片出土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県など日本海側で、これら玉類が日本海の玉材原産地地方で作られ、これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ルートとし遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡をリレー式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合などが考えられる。一方、未定C群の管玉は佐賀県内で多く出土し、他の遺跡では、愛媛県、香川県で使用が確認されていたに過ぎず、また、玉作りの行程を示す石片、剝片が発見された遺跡が確認されていないため、推測は空論になるが、未定C群の管玉が韓国で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ルートを通して愛媛県、香川県地方、岡山県南溝手遺跡へ流入したと推測しても産地分析の結果と矛盾しない(図2)。玉類の産地分析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団(原石群を作り、原石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、佐渡島猿八産原石が佐渡島以南に本当に伝播していないかを調査し、女代南B群、未定C群、不明の管玉などの原石産地を明らかにし、これらの不明の原石群を作ること、また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管玉を数多く分析することが重要で、今回行った産地分析は完全な非破壊である。碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われま

参考文献

- (1) 茅原一也(1964), 長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報). 長者ヶ原, 新潟県魚川市教育委員会: 63-73
- (2) 藁科哲男・東村武信(1987), ヒスイの産地分析. 富山市考古資料館紀要6: 1-18
- (3) 藁科哲男・東村武信(1990), 奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析. 橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』, 14: 95-109
- (4) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析. 考古学と自然科学, 16: 59-89
- (5) Tetsuo Warashina (1992), Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19: 357-373
- (6) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法. 考古学と自然科学, 9: 77-90

付載3 窪木遺跡出土土器に付着した赤色顔料について

別府大学文学部 本 田 光 子

窪木遺跡2出土の古墳時代前期前葉の鉢形土器(第192図2119)の内面に付着残存している赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察および蛍光X線分析を行った。

出土土器に赤色物が付着残存している場合、その赤色の由来としては三つのことが考えられる。第1は装飾を目的にした赤色塗彩、第2は赤色物の貯蔵容器、第3はいわゆる内面朱付着土器である。現在までの知見に寄れば、三種の出土土器に付着残存する赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。第1の装飾と、第2の貯蔵についてはベンガラと朱の両者が認められ、第3の場合は朱である。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

顕微鏡観察

土器の底部や口縁部の内面に少量の赤色物が付着している。実体顕微鏡で観察した所、内面朱付着土器の特徴が認められた。朱と思われる赤色物が土器胎土のヒビ割れの中に深く入り込んでおり、単なる付着や塗彩の状態とは考えられない。針先に付く程度の量を採り検鏡した所、朱粒子を確認した。

蛍光X線分析

堀場製作所製 MESA-500を用い、15 kV-440 μA ; 50秒、50 kV-20 μA ; 50秒、大気、の条件で行った。赤色物が比較的残りの良い口縁部のなるべく平らな部分を測定した。

主成分元素としては、水銀と硫黄が検出された。他には珪素、アルミニウム、鉄等が検出されたが、砒素は確認できなかった。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

結 果

顕微鏡観察により、朱及び内面朱付着土器の特徴を認め、蛍光X線分析により水銀と硫黄が検出されたことから、本例に認められる赤色物は朱であり、その用途としては内面朱付着土器が考えられる。

内面朱付着土器は近畿、瀬戸内、北部九州地方の弥生時代中期末から古墳時代前期に認められ、朱を液状にして加熱するために用いたと推定される特殊な用途を持つものである。香川県上天神遺跡出土の内面朱付着土器からは朱以外に砒素が検出されたが、本例からは確認できなかった。

付載 4 窪木遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1. はじめに

この胎土分析では、蛍光X線分析法により窪木遺跡出土の古墳時代前期前葉の土師器および緑釉陶器の分析を行い、以下のことについて検討した。

(1)YA2A 調査区の溝179出土の土器は古墳時代前期前葉の時期で、形態・技法的に在地系、非在地系の土師器がみられる。そこで、これらの土器が胎土分析でどの地域の土器に類似しているか検討した。比較した地域の土器は、吉備南部(足守川流域)讃岐・畿内・山陰の各地域の土器である。

(2)主に YA2A 調査区で出土した緑釉陶器が形態・技法・肉眼観察で近江・京都・防長の各産地に分類(第3表参照)されているが、胎土分析ではどのように分類されるか。また、緑釉陶器表面の釉を非破壊で分析し、釉の分析値より生産地に差異があるかどうか検討した。

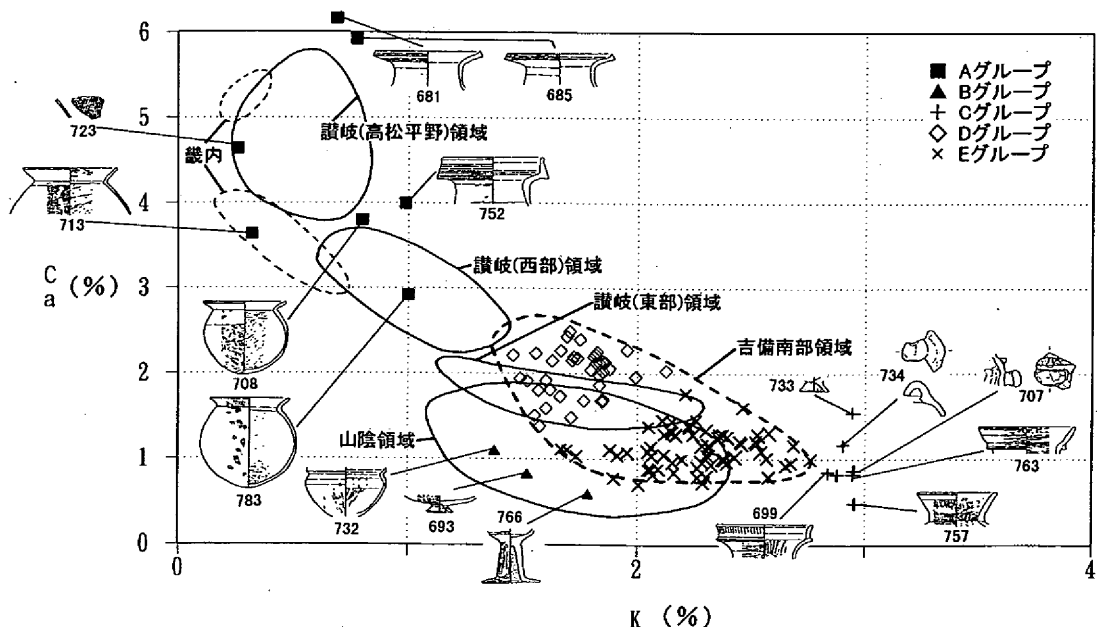
2. 分析方法・結果

分析方法は、波長分散型蛍光X線分析装置により分析し、試料の調整・測定方法などは現在までに実施している方法で行った。

分析試料は、第2・3表に掲載した土器で、古墳時代前期前葉の試料が123点、緑釉陶器が92点である。

分析の結果、K・Ca・Fe・Ti・Sr・Rb の6元素に顕著な差異がみられることから、これらの元素を用いてXY散布図を作成し検討した。

(1)の課題である古墳時代前期前葉の土器の生産地推定では、第1図 K-Ca 散布図で比較すると、K(カリウム)量が1%以下、Ca(カルシウム)量が3%以上の範囲に試料番号681, 685, 708, 713, 723, 752, 783(Aグループ)の7点が分布し胎土が明らかに異なっている。また、番号693, 732, 766(Bグループ)の3点はCa量が1%以下の部分に分布した。番号699, 707, 733, 734, 757, 763,

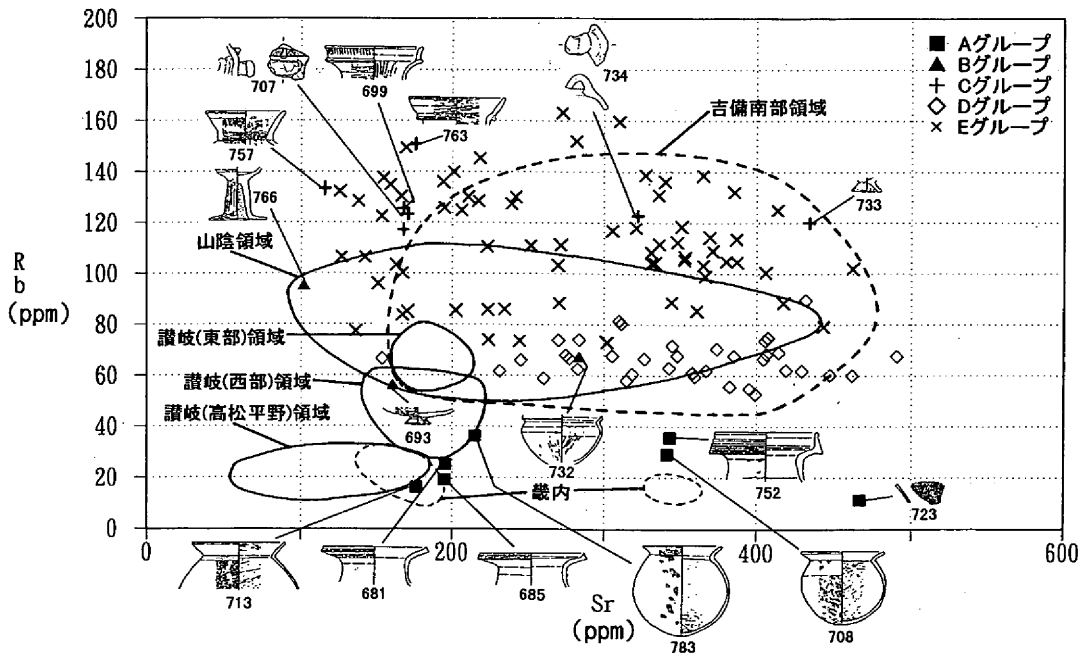


第1図 窪木遺跡溝179出土古墳時代前期前葉土師器と各地域との比較

790(Cグループ)の7点はK量が2.8%以上の所に分布した。その他の土器は、Ca量が1.4%を境界として大きく二つに分けることが可能である。Ca量が多いグループがDグループで、少ないグループがEグループである。

第2図 Sr-Rb 散布図でもAグループは、Rb(ルビジウム)量が40以下の所に分布する。Bグループは693と766が Sr(ストロンチウム)量が200以下の範囲に分布し、Cグループも733、734を除く他の土器が Sr量200以下、Rb量120以上の範囲に分布する傾向を示している。また、DグループとEグループも Rb量が80を境界として分かれる傾向にある。

この様に、Aグループが分布する範囲は、讃岐・畿内系の土器の分布領域にあたる。Bグループの分布域は山陰の領域に、D・Eグループの分布域は吉備南部地域の領域にあたる。



第2図 窪木遺跡溝179出土古墳時代前期前葉土師器と各地域との比較

(2)検討課題である緑釉陶器の分析では、表面の緑釉と内部の胎土の両面から分析し、産地ごとの差異について検討した。分析した緑釉陶器の試料調整は、はじめに陶器の表面に付着している釉を非破壊で分析したあと釉を研磨機で完全に除去し、粘土のみの分析を実施した。

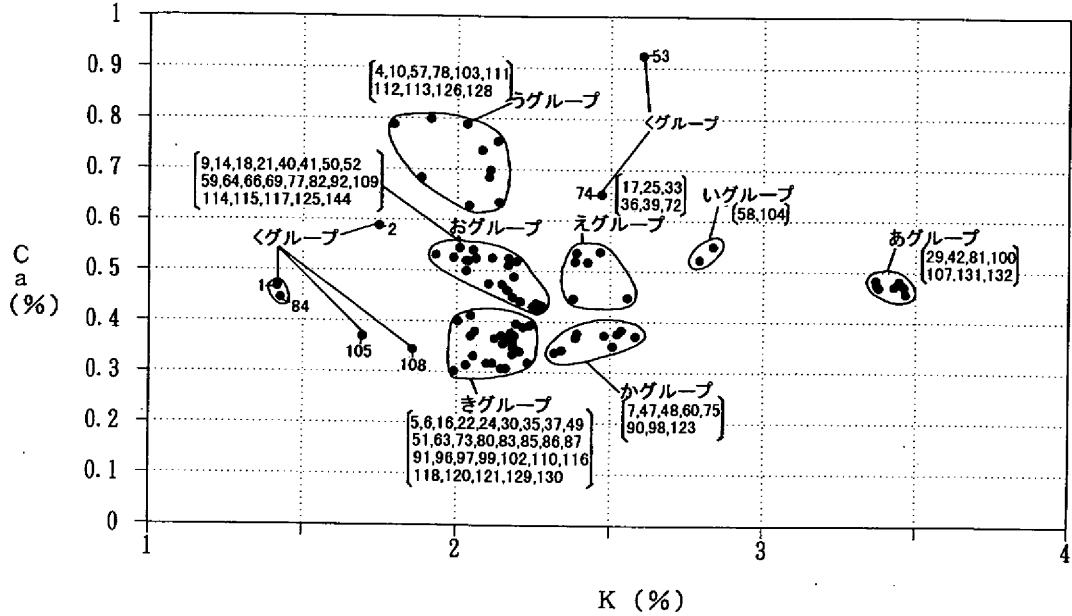
この結果、粘土のみによる胎土の比較では第3図 K-Ca 散布図から8つのグループに分類されることが読みとれる。そこで、この8つのグループをあ〜きのグループに分類すると、

- ・あグループ(試料番号29, 42, 81, 100, 107, 131, 132)
- ・いグループ(試料番号58, 104)
- ・うグループ(試料番号4, 10, 57, 78, 103, 111, 112, 113, 126, 128)
- ・えグループ(試料番号17, 25, 33, 36, 39, 72)
- ・おグループ(試料番号9, 14, 18, 21, 40, 41, 50, 52, 59, 64, 66, 69, 77, 82, 92, 109, 114, 115, 117, 125, 144)
- ・かグループ(試料番号7, 47, 48, 60, 75, 90, 98, 106, 123)
- ・きグループ(試料番号5, 6, 16, 22, 24, 30, 35, 37, 49, 51, 63, 73, 80, 83, 85, 86, 87, 91, 96, 97, 99, 102, 110, 116, 118, 120, 121, 129, 130)

・くグループ(試料番号1, 2, 53, 74, 84, 105, 108)

となる。なお、くのグループはどのグループにも入らず単独に近い分布をなしているものである。

そして、胎土分析で8グループに分類された各グループを考古学的(形態・技法・肉眼観察)な検討から生産地が決定されている結果と比較すると以下のようになる。



第3図 窪木遺跡出土緑釉陶器の胎土差によるグループ分け

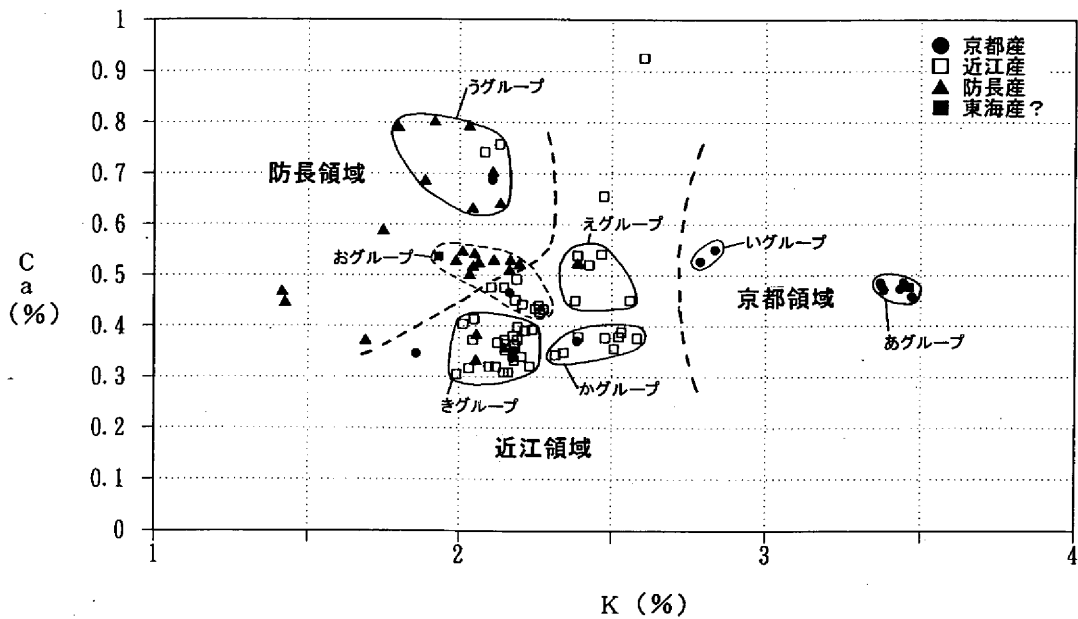
第1表 各グループと生産地の比較

生産地	各グループ試料番号
京都産	あグループ(29, 42, 81, 100, 107, 132) いグループ(58, 104) おグループ(59) かグループ(60) きグループ(85, 99) くグループ(108)
近江産	うグループ(103, 126, 128) えグループ(17, 25, 36, 39, 72) おグループ(14, 21, 40, 41, 55, 64, 66, 77, 82, 109) かグループ(7, 47, 48, 75, 90, 98, 106, 123) きグループ(5, 6, 16, 22, 24, 30, 35, 37, 49, 51, 63, 73, 83, 86, 87, 91, 97, 102, 110, 116, 118, 121, 129, 130) くグループ(53, 74)
防長産	うグループ(4, 10, 57, 78, 111, 112, 113) えグループ(33) おグループ(9, 18, 50, 52, 69, 92, 114, 115, 117, 125) きグループ(80, 96, 120) くグループ(1, 2, 84, 105)
東海産?	あグループ(131) おグループ(144)

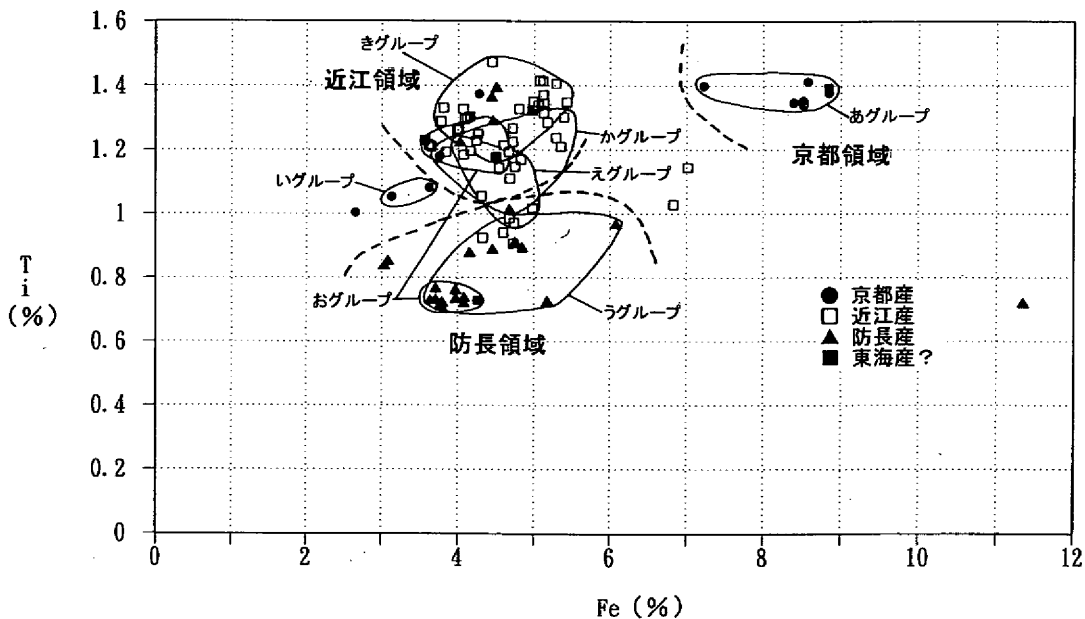
第1表から京都産は、おもにあおよびいのグループに集中している。また、第4図 K-Ca 散布図で近江産は Ca 量が0.5%ぐらいを境界として、それより低いところに分布する傾向にある。グループでいえばえ、か、きのグループとおグループの半分がそれにあたる。防長産は近江産に対して Ca 量が0.5%以上に分布し、グループではうグループとおグループの半分がそうである。

第5図 Fe-Ti 散布図でも各グループとも第4図 K-Ca 散布図と概ね同様な分布を示した。特に、おグループが近江と防長の二つに明確に分かれた。

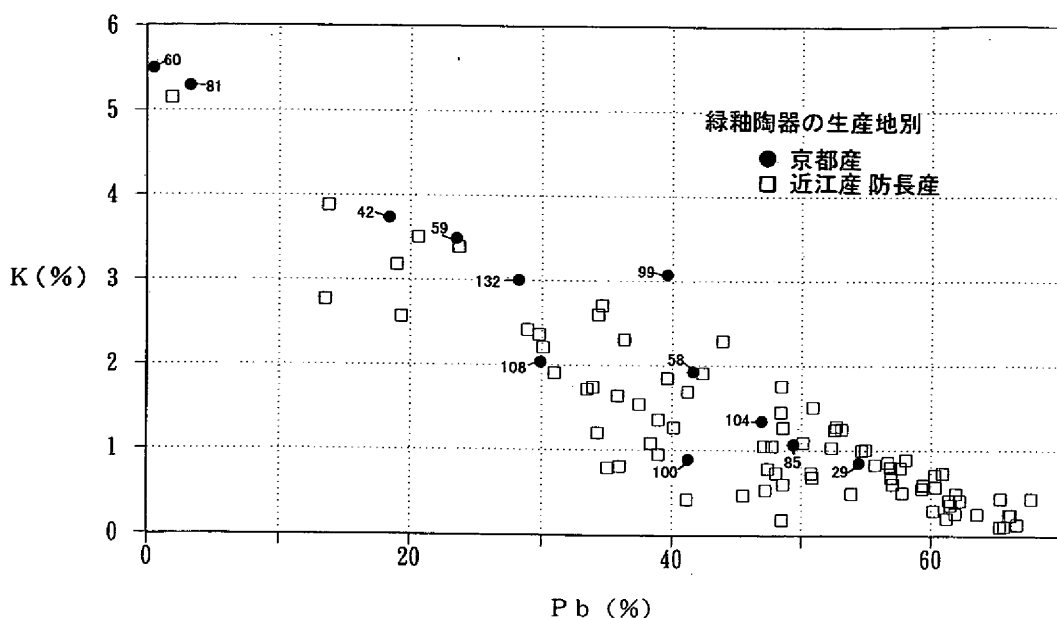
次に、緑釉陶器の表面を非破壊で分析した結果、Pb(鉛)とK(カリウム)に顕著な差がみられ、第6図のような Pb-K の散布図を作成し検討した。この散布図では、Pb 量が少ないところに京都産の緑釉が分布する傾向がみられた。他の近江・防長産の区別は、この表面分析では差がでなかった。



第4図 窪木遺跡出土緑釉陶器の胎土差によるグループと各生産地との比較



第5図 窪木遺跡出土緑釉陶器の胎土差によるグループと各生産地との比較



第6図 窪木遺跡出土緑釉陶器の表面釉分析による産地比較

3. まとめ

蛍光X線分析法により窪木遺跡出土の土師器・緑釉陶器の胎土分析を実施し、分析の点から明らかになったことを述べまとめとしたい。

(1)古墳時代前期前葉の土師器の生産地推定では、吉備南部、讃岐、山陰、畿内のどの生産地と胎土が同じか検討した。そして、第1・2図のようにAグループの681(壺)、685(壺)、708(甕)、713(甕)、723(甕)、752(壺)、783(甕)の7点が明らかに他の土器と離れて分布し、讃岐あるいは畿内の分布領域に分布している。また、Bグループの693(脚部)、732(鉢)、766(高坏)の3点は山陰領域の分布範囲に入っている。D・Eグループは吉備南部の分布領域にすべて分布しているが、この分布領域には、山陰の分布領域が半分ほど重なっている。Cグループはどの領域にも入らなかった。このように古墳時代前期前葉の土器の胎土分析では、A・Bグループの土器が胎土的に異なっており、Aは讃岐、畿内の胎土に類似し、Bは山陰の胎土に似ていた。また、Cグループはどの領域にも入らず不明であった。現段階の蓄積データから推測できることは以上の事柄である。

(2)緑釉陶器の分析では、第4・5図 K-Ca-Fe-Ti 散布図で検討した結果、考古学的(形態・技法・肉眼観察)に各産地に同定されている緑釉陶器を胎土分析の側面で検討すると、京都・近江・防長の各産地にほぼ識別することが可能であった。また、近江産と防長産がやや胎土的に似ていることもわかった。そして、京都産は9世紀代(58, 104)と10世紀代(29, 42, 81, 100, 107, 132)の緑釉で胎土が異なっているようである。

また、緑釉の表面非破壊分析では京都産の緑釉に Pb 量が少ない傾向がみられることがわかった。

以上のように窪木遺跡出土緑釉陶器の胎土分析では、ほぼ生産地別に識別でき、京都産では時期ごとに分かれる可能性がある。今後の重要な課題としては、各生産地の窯跡試料を分析し比較検討する必要がある。

この分析を実施するにあたり、平井泰男氏をはじめ岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはお世話になった。記して感謝いたします。

(編者註) 本文中および挿図の土器番号については、試料番号に統一されており、本報告書の掲載番号との対照関係については、第2・3表に示した。また、第3表の生産地については、平尾政幸氏(京都市埋蔵文化財研究所)と高橋照彦氏(国立歴史民俗博物館)による御教示をまとめたものである。両氏に深く感謝いたします。

第2表 古墳時代前期前葉の土器分析値一覧表(%)

試料 番号	掲載図 番号	遺構名	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb	備考
670	2006	溝179	2.53	2.72	64.85	0.64	20.71	1.19	322	117	Eグループ
671	2029	溝179	2.07	9.61	59.38	0.76	20.92	1.05	172	85	Eグループ
672	2068	溝179	2.27	3.87	65.83	0.73	22.84	0.91	168	130	Eグループ
673	2104	溝179	2.58	7.87	60.51	0.74	22.21	1.01	139	128	Eグループ
674	2101	溝179	2.40	9.31	55.50	0.63	21.01	0.96	225	110	Eグループ
675	2112	溝179	1.87	5.69	62.75	0.87	18.95	2.14	346	71	Dグループ
676	2114	溝179	2.16	6.11	54.91	0.92	20.54	1.32	372	108	Eグループ
677	2060	溝179	2.12	6.17	54.46	0.94	19.67	1.46	388	104	Eグループ
678	2116	溝179	1.84	7.21	50.19	0.78	20.85	2.14	409	75	Dグループ
679	2023	溝179	1.56	8.75	57.16	0.89	17.05	1.53	407	68	Dグループ
680	2088	溝179	1.85	9.30	51.18	0.78	19.29	2.16	416	68	Dグループ
681	2018	溝179	0.73	11.72	50.34	2.43	16.17	6.16	197	25	Aグループ
682	2095	溝179	2.66	7.56	64.99	0.84	19.56	0.93	128	106	Eグループ
683	2115	溝179	1.53	5.83	52.38	0.80	18.94	1.93	358	61	Dグループ
684	2042	溝179	1.70	6.60	55.95	0.74	18.50	2.43	463	59	Dグループ
685	2019	溝179	0.77	12.00	48.54	2.58	16.62	5.95	197	19	Aグループ
686	2010	溝179	1.85	4.91	61.30	0.74	18.87	1.69	375	70	Dグループ
687	2005	溝179	2.59	5.03	58.45	0.64	19.25	1.32	414	125	Eグループ
688	2030	溝179	1.92	5.58	55.26	0.66	21.28	1.05	283	152	Eグループ
689	2077	溝179	2.16	4.11	55.44	0.67	19.94	1.46	463	101	Eグループ
690	2024	溝179	2.47	10.86	51.59	1.06	16.62	1.61	271	103	Eグループ
691	2125	溝179	2.47	4.34	56.05	0.77	20.26	1.19	365	138	Eグループ
692	2061	溝179	1.96	9.32	53.84	0.78	17.03	2.27	407	73	Dグループ
693	2131	溝179	1.53	10.38	57.22	1.29	22.10	0.85	162	57	Bグループ
694	2102	溝179	2.17	5.80	60.71	0.80	23.88	0.85	155	122	Eグループ
695	2130	溝179	2.22	9.24	54.09	0.86	16.12	1.77	444	79	Eグループ
696	2072	溝179	2.39	3.71	60.00	0.67	24.71	1.00	240	127	Eグループ
697	2107	溝179	2.40	4.90	59.47	0.68	21.24	1.26	306	116	Eグループ
698	2076	溝179	2.20	3.96	62.32	0.68	23.24	1.01	219	128	Eグループ
699	2020	溝179	2.85	4.52	67.19	0.64	20.48	0.85	169	126	Cグループ
700	2008	溝179	1.61	8.98	55.83	0.92	23.25	1.61	155	67	Eグループ
701	2013	溝179	1.74	8.87	51.80	0.82	19.73	2.18	405	66	Dグループ
702	2084	溝179	1.72	7.71	56.53	0.83	21.02	2.16	343	62	Dグループ
703		溝179	1.80	7.32	59.57	0.91	21.67	2.05	284	67	Dグループ
704	2012	溝179	2.31	5.39	56.18	0.61	21.10	1.06	328	138	Dグループ
705		溝179	2.46	4.45	55.59	0.75	19.84	1.21	386	132	Eグループ
706	2026	溝179	2.68	4.24	60.58	0.66	21.45	0.97	274	163	Eグループ
707	2133	溝179	2.95	4.11	72.85	0.58	17.50	0.87	172	123	Cグループ
708	2081	溝179	0.80	7.99	49.11	0.53	20.95	3.82	342	29	Aグループ
709	2011	溝179	1.86	7.14	59.49	0.77	20.16	2.03	276	68	Dグループ
710		溝179	1.88	9.40	57.55	0.86	18.63	2.11	306	67	Dグループ
711	2049	溝179	1.50	5.66	56.75	0.84	19.75	1.95	360	59	Dグループ
712	2128	溝179	2.58	7.23	57.91	0.66	20.34	0.80	220	145	Eグループ
713	2065	溝179	0.32	10.52	44.45	0.49	24.82	3.66	178	16	Aグループ
714	2027	溝179	1.67	6.58	55.21	0.79	19.78	2.28	448	60	Dグループ
715	2097	溝179	2.36	4.71	63.43	0.71	18.02	1.26	352	118	Eグループ
716	2057	溝179	2.25	5.28	54.67	0.89	20.04	1.30	349	112	Eグループ
717	2040	溝179	1.81	6.70	55.40	0.78	21.18	2.21	360	59	Dグループ
718	2046	溝179	2.17	5.37	55.27	0.88	20.19	1.28	370	114	Eグループ
719	2050	溝179	2.32	4.93	59.76	0.80	19.56	1.17	336	130	Eグループ
720	2033	溝179	2.44	3.89	58.43	0.63	20.10	1.04	311	159	Eグループ
721	2009	溝179	2.31	7.74	58.89	0.63	17.63	1.34	332	108	Eグループ
722	2031	溝179	2.37	3.66	57.10	0.83	20.73	1.29	381	104	Eグループ
723	2079	溝179	0.26	10.68	38.31	0.39	19.55	4.64	468	11	Aグループ
724	2078	溝179	2.33	3.94	62.08	0.68	23.92	0.94	196	136	Eグループ
725	2117	溝179	1.58	6.57	51.16	0.84	22.89	1.40	312	80	Dグループ
726	2034	溝179	2.53	5.15	62.75	0.76	22.02	1.21	203	140	Eグループ
727	2109	溝179	2.05	5.04	59.15	0.65	20.44	1.39	362	85	Eグループ
728	2054	溝179	1.83	7.47	58.87	0.79	20.13	2.27	262	58	Dグループ
729	2069	溝179	2.18	7.06	49.31	1.07	21.94	1.30	337	111	Eグループ

試料番号	掲載図号	遺構名	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb	備考
730	2056	溝179	1.71	6.69	52.75	0.75	19.16	2.51	492	67	Dグループ
731	2096	溝179	1.74	7.23	65.54	0.98	18.25	1.05	204	85	Eグループ
732	2106	溝179	1.38	10.01	58.59	0.87	15.68	1.12	284	67	Bグループ
733	2135	溝179	2.95	4.96	57.69	0.82	18.28	1.55	435	119	Cグループ
734	2132	溝179	2.91	3.31	69.00	0.57	16.88	1.18	323	122	Cグループ
735	2039	溝179	1.73	9.38	51.22	0.86	18.74	2.20	420	62	Dグループ
736	2032	溝179	2.26	8.18	57.50	0.87	16.19	1.46	367	99	Eグループ
737	2073	溝179	2.77	2.14	58.21	0.54	23.04	1.00	341	136	Eグループ
738	2059	溝179	1.82	8.61	53.55	0.84	17.07	2.24	367	62	Dグループ
739	2052	溝179	2.17	5.41	54.93	0.82	20.42	1.28	353	105	Eグループ
740	2108	溝179	1.83	8.91	51.14	0.76	17.96	2.13	386	67	Dグループ
741	2124	溝179	2.23	7.17	49.55	1.05	21.61	1.41	366	103	Eグループ
742	2099	溝179	2.54	5.19	59.14	0.64	19.65	1.29	387	113	Eグループ
743	2098	溝179	2.16	7.21	64.31	0.65	16.67	0.97	272	88	Eグループ
744	2028	溝179	2.38	7.40	59.24	1.12	19.07	1.01	253	111	Eグループ
745	2118	溝179	2.38	5.44	58.83	0.60	19.04	1.29	354	106	Eグループ
746	2110	溝179	1.88	8.56	58.09	0.88	20.07	2.07	271	74	Dグループ
747	2113	溝179	2.29	4.99	60.81	0.89	21.34	0.98	212	130	Eグループ
748	2123	溝179	2.07	7.46	63.28	0.82	15.20	1.15	345	88	Eグループ
749	2137	溝179	1.89	7.46	49.66	0.93	22.73	1.12	303	73	Eグループ
750	2136	溝179	2.29	4.94	54.93	0.85	20.90	1.17	243	130	Eグループ
751	2007	溝179	1.84	6.93	56.28	0.78	19.27	1.98	349	67	Dグループ
752	2022	溝179	0.99	10.75	47.23	1.18	19.17	4.01	344	35	Aグループ
754	2053	溝179	2.31	5.72	61.60	0.97	22.29	0.80	171	149	Eグループ
755	2016	溝179	2.00	8.11	59.04	0.75	19.82	1.98	285	74	Dグループ
756	2014	溝179	2.05	4.85	58.92	0.75	26.03	0.88	161	135	Eグループ
757	2025	溝179	2.96	5.03	65.69	1.02	20.18	0.49	117	133	Cグループ
758	2067	溝179	2.70	4.10	62.48	0.87	17.30	1.17	334	104	Eグループ
759	2055	溝179	1.63	7.71	53.73	0.78	19.21	2.16	430	61	Dグループ
760	2004	溝179	2.13	6.76	58.85	0.72	17.64	2.04	327	66	Dグループ
761	2036	溝179	1.75	7.10	54.73	0.74	18.85	2.41	383	55	Dグループ
762	2043	溝179	1.85	8.85	49.81	0.79	18.88	1.69	319	60	Dグループ
763	2015	溝179	2.95	4.84	61.48	0.63	19.18	0.83	177	151	Cグループ
764	2090	溝179	2.32	4.21	57.95	0.73	20.08	1.14	332	104	Eグループ
765	2062	溝179	2.27	5.49	61.71	0.95	21.49	0.79	156	138	Eグループ
766	2103	溝179	1.79	10.83	45.98	1.54	25.18	0.61	103	96	Bグループ
767	2063	溝179	1.61	6.00	63.89	0.87	18.92	1.93	433	89	Dグループ
768	2066	溝179	2.05	3.71	54.59	0.98	21.95	1.10	418	88	Eグループ
769	2086	溝179	2.12	6.05	55.04	0.85	18.80	1.06	273	111	Eグループ
770	2092	溝179	1.72	7.50	65.42	0.84	17.33	1.48	311	81	Dグループ
771	2074	溝179	2.10	4.37	63.17	0.81	23.14	0.89	197	125	Eグループ
772	2037	溝179	1.84	7.65	57.71	0.80	19.73	1.88	278	66	Dグループ
773	2051	溝179	1.63	7.68	55.41	0.74	20.42	1.83	284	62	Dグループ
774	2058	溝179	1.77	7.87	55.89	0.83	18.95	1.70	233	61	Dグループ
775	2129	溝179	2.15	4.42	55.50	0.62	21.33	1.34	407	100	Eグループ
776	2089	溝179	2.12	6.19	59.38	0.67	18.74	1.30	225	86	Eグループ
777	2119	溝179	1.70	5.17	54.84	0.64	22.21	1.11	236	86	Eグループ
778	2121	溝179	2.24	9.78	55.91	1.25	21.46	1.38	144	106	Eグループ
779	2041	溝179	1.46	7.73	51.75	0.82	20.28	2.23	396	54	Dグループ
780	2094	溝179	2.32	8.78	59.97	0.98	18.76	1.05	169	100	Eグループ
781	2038	溝179	1.56	7.53	52.35	0.81	18.93	2.24	400	52	Dグループ
782	2044	溝179	1.58	7.99	52.25	0.77	20.83	1.82	316	58	Dグループ
783	2082	溝179	1.00	7.64	54.05	0.58	19.44	2.93	217	36	Aグループ
784	2047	溝179	2.55	6.18	60.26	0.64	17.58	1.10	208	125	Eグループ
785	2048	溝179	2.30	6.17	60.51	0.95	21.78	0.73	127	132	Eグループ
786	2045	溝179	1.67	6.16	59.37	0.82	19.39	1.75	247	66	Dグループ
787	2085	溝179	2.01	4.40	63.51	1.03	19.54	0.71	169	84	Eグループ
788	2111	溝179	2.06	6.40	55.51	0.84	20.20	0.88	165	103	Eグループ
789	2120	溝179	1.96	9.19	52.85	1.00	18.82	1.08	226	74	Eグループ
790		溝179	2.88	4.06	61.28	0.67	20.19	0.82	169	117	Cグループ
791	2126	溝179	2.08	6.08	58.21	0.84	21.31	0.83	153	96	Eグループ
792	2127	溝179	1.90	8.06	58.66	1.12	20.94	0.79	138	77	Eグループ
793	2093	溝179	1.68	8.57	63.24	0.94	16.58	1.13	246	73	Eグループ

第3表 緑釉陶器分析値一覧表(%)

グループ名	試料番号	掲載図番号	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb	生産地(平尾氏教示)	生産地(高橋氏教示)	備考
あグループ	29	2401	3.44	8.56	60.03	1.42	19.61	0.47	86	128	京都	京都	107と同一個体 京都ではない
	42	2402	3.45	8.50	60.00	1.36	19.46	0.48	89	123	京都	京都	
	81	2686	3.47	7.20	60.94	1.41	19.73	0.46	92	134	京都	京都	
	100	2685	3.38	8.50	60.75	1.35	19.19	0.47	97	131	幡枝	京都	
	107	2694	3.37	8.38	60.78	1.35	18.81	0.48	91	119		近江	
	131	2544	3.46	8.83	58.65	1.38	18.97	0.47	95	125	近江?	東海か(>近江)	
	132		3.37	8.83	59.50	1.39	19.00	0.48	89	116		京都?	
いグループ	58		2.84	3.12	65.33	1.06	23.61	0.55	151	159	京都	京都	
	104	2684	2.79	3.59	63.76	1.09	23.07	0.53	158	163	京都	京都	
うグループ	4		2.11	4.13	66.95	0.88	22.97	0.70	131	140	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)	近江、防長(平井)
	10		2.13	5.16	65.23	0.72	21.19	0.64	128	96	近江?(長門・周防)?	防長	
	57		2.03	4.74	62.41	0.91	23.90	0.79	143	121	近江?(長門・周防)?	防長	
	78		1.91	4.84	62.02	0.90	23.48	0.80	147	109	近江?(長門・周防)?	防長	
	103	2698	2.13	4.66	61.74	0.99	22.55	0.75	151	97	東海?(長門・周防)の特徴をもつ	近江	
	111	2704	1.79	6.07	57.24	0.97	23.95	0.79	130	87	周防・長門?	防長	
	112	2706	2.04	3.75	64.74	0.72	23.45	0.63	120	97	周防	防長	
	113		1.88	4.44	63.73	0.89	23.22	0.68	145	144	周防・長門?	防長か(>近江)	
	126	2689	2.08	4.30	62.46	0.93	23.33	0.74	144	125		近江	
128		2.11	2.96	67.26	1.96	20.55	0.69	172	113		京都?		
えグループ	17		2.38	4.72	72.43	0.98	17.69	0.45	102	114	近江	近江	
	25	2404	2.39	4.67	69.29	1.12	20.01	0.54	119	125	近江?(長門・周防)?	近江	
	33	2410	2.47	4.02	62.55	1.23	20.66	0.54	133	114	近江?(長門・周防)?	防長	
	36	2405	2.56	4.81	66.24	1.18	20.35	0.45	99	121	近江に近い	近江	
	39	2407	2.39	4.74	68.39	1.15	19.36	0.52	116	128	近江?(長門・周防)?	近江	
	72		2.42	4.96	69.00	1.02	19.27	0.52	101	118	近江	近江	
おグループ	9		2.11	3.70	67.08	0.73	21.65	0.52	106	111	近江?(長門・周防)?	防長	
	14	2697	2.21	3.82	72.90	1.20	17.88	0.44	105	101	近江	近江	
	18		2.03	3.64	68.26	0.73	21.71	0.50	112	94	近江?(長門・周防)?	防長	
	21		2.15	4.15	67.40	1.20	19.97	0.47	94	105	近江?(長門・周防)?	近江	
	40	2406	2.11	4.24	67.37	1.25	19.54	0.47	93	96	近江?(長門・周防)?	近江	
	41		2.17	4.05	69.36	1.19	19.01	0.53	99	110	近江	近江	
	50	2543	2.17	3.72	67.98	0.72	21.56	0.51	95	110	近江?(長門・周防)?	防長	
	52		2.03	4.07	65.94	0.74	22.46	0.52	112	96	近江?(長門・周防)?	防長	
	55		2.19	4.53	72.67	1.15	16.91	0.49	139	101	近江	近江	
	59		2.16	3.65	71.18	1.21	19.18	0.46	116	100		京都	
	64	2541	2.25	3.62	71.81	1.21	18.74	0.43	128	113	近江?(長門・周防)?	近江	
	66	2539	2.26	3.62	70.52	1.22	19.08	0.44	134	117	近江?(長門・周防)?	近江	
	69	2542	2.01	4.06	67.45	0.72	22.66	0.55	101	103	近江?(長門・周防)?	防長	
	77		2.28	3.55	71.76	1.23	19.17	0.43	97	115		近江	
	82		2.19	3.91	65.40	1.26	21.60	0.45	95	109	近江?(長門・周防)?	近江	
	92		2.05	3.76	67.54	0.72	22.62	0.54	112	101	近江?(長門・周防)?	防長	
	109		2.26	4.24	68.22	1.23	20.70	0.43	101	121	近江	近江	
	114	2705	1.99	3.95	67.08	0.76	22.61	0.53	93	100	一応周防・長門?	防長	
	115		2.06	3.96	66.06	0.73	23.29	0.52	106	110	一応近江(周防・長門)	防長	
117		2.20	4.44	64.58	1.29	21.40	0.52	94	118	一応近江	防長		

グループ名	試料番号	掲載図番号	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb	生産地(平尾氏教示)	生産地(高橋氏教示)	備考
	125 144		2.04 1.93	3.69 4.24	67.18 63.26	0.77 0.73	22.84 22.50	0.51 0.53	90 131	107 87		防長 東海か	
かグループ	7	2535	2.53	5.34	67.21	1.22	20.17	0.39	83	129	近江	近江	68と同一個体
	47		2.52	5.27	65.83	1.24	20.79	0.38	86	127	近江	近江	
	48		2.51	5.37	61.49	1.31	22.36	0.36	80	133	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)	
	60		2.39	2.63	70.76	1.01	20.67	0.38	140	117	篠	京都	
	75	2690	2.58	4.70	66.37	1.27	21.04	0.38	95	142	近江	近江	
	90		2.34	4.58	73.82	1.22	17.46	0.35	86	121	京都	近江	
	98		2692	2.32	4.59	74.07	1.22	17.89	0.34	85	122	京都	
	106	2537	2.39	6.82	65.76	1.03	19.84	0.37	77	130		近江	
	123		2.48	5.17	63.37	1.29	21.94	0.38	89	138		近江	
きグループ	5	2409	2.19	5.02	66.10	1.34	20.26	0.37	69	105	近江	近江	102と同じ
	6		2.13	4.04	72.23	1.33	18.73	0.36	86	110		近江	
	16		2.03	5.04	73.12	1.42	17.89	0.31	65	105	京都	近江?	
	22	2403	2.12	4.97	71.43	1.35	17.41	0.31	70	109	京都	近江?	
	24		2.05	3.75	70.69	1.29	19.70	0.41	91	106	近江?(長門・周防)?	防長か(近江)	
	30		2.19	3.99	72.12	1.26	19.32	0.39	91	116	近江	近江	
	35		2408	2.16	4.58	65.50	0.94	24.18	0.36	58	118	京都	
	37	2536	1.99	4.79	72.13	1.32	17.81	0.30	59	100	京都	近江	
	49		2.16	5.10	72.91	1.41	17.66	0.30	71	107	京都	近江?	
	51		2.18	4.42	68.52	1.47	21.18	0.35	80	116	近江	近江?(>防長?)	
	63	2701	2.23	5.08	74.52	1.34	17.61	0.32	73	121	近江か美濃?	近江	
	73		2.22	4.07	71.69	1.29	19.51	0.39	94	124	近江?(長門・周防)?	近江	
	80	2699	2.05	4.97	66.00	1.32	20.26	0.37	77	75	一応近江(周防の可能性も考える)	防長	
	83		2.01	3.78	67.85	1.33	20.29	0.40	95	110	近江	近江	
	85		2.21	4.65	74.12	1.19	18.00	0.34	70	125	京都	京都	
	86	2691	2.24	6.99	64.67	1.14	20.36	0.39	79	117	近江	近江	
	87		2.18	4.70	72.66	1.22	18.24	0.33	75	120	京都	近江	
	91	2702	2.18	5.11	73.01	1.37	17.64	0.33	84	122		近江(>東海か)	
	96		2.05	4.49	67.33	1.39	20.22	0.33	67	86	近江?(長門・周防)?	防長	
	97		2695	2.10	5.27	72.63	1.40	17.66	0.31	80	120	京都	
	99	2687	2.22	4.26	68.36	1.37	21.34	0.38	102	130	京都	京都か(>近江)	
	102		2.20	5.11	73.75	1.31	17.65	0.33	82	127	美濃か近江?	近江	
	110	2700	2.18	4.48	73.24	1.18	17.45	0.34	81	129	美濃(近江)?	近江	
116	2.17		4.11	70.90	1.30	18.87	0.38	96	133	近江	近江		
118	2.15		4.13	72.30	1.30	19.11	0.37	88	124	近江	近江		
120	2693	2.15	4.41	68.09	1.36	20.56	0.35	88	111	近江?	防長か(>近江)		
121		2.21	3.97	70.84	1.26	19.55	0.39	89	123		近江		
129		2.15	5.12	73.56	1.34	17.41	0.30	75	117	近江	近江		
130		2.06	5.42	66.49	1.35	20.31	0.38	84	128		近江		
くグループ	1	2703	1.41	3.02	80.09	0.84	16.76	0.47	112	103	周防・長門?	防長か(近江)	63と同じ
	2		1.75	11.36	57.27	0.72	19.41	0.59	96	65		防長	
	53	2540	2.60	4.71	63.32	0.91	20.40	0.93	140	98	近江?(長門・周防)	近江	
	74		2.47	4.29	66.38	1.06	20.96	0.65	116	134	近江	近江	
	84		1.42	3.07	78.29	0.85	17.45	0.45	109	97	近江?(長門・周防)	防長	
	105		1.69	4.67	69.11	1.02	20.76	0.37	96	107	近江	防長?(>近江?)	
108		1.86	3.74	59.97	1.19	25.23	0.35	82	97		京都?		

付載5 窪木遺跡・南溝手遺跡出土製鉄関連遺物の 金属学的調査

大澤正己

概要

窪木遺跡・南溝手遺跡から出土した1)古墳時代前期前葉(?), 2)6世紀後半~奈良・平安時代、3)平安時代と3期にわたる製鉄関連遺物(炉壁、鉄滓：製錬滓・鍛冶滓・ガラス質滓、鉄塊系遺物)を調査して次の事が明らかになった。

〈1〉古墳時代前期前葉(?):鍛錬鍛冶を実証するガラス質滓の出土があった。該品は、赤熱鉄材の酸化防止に塗布された粘土汁が熔融ガラス化した滓である。この滓は、古墳時代初頭が証明されるならば、この時期に鉄器製作の作業があった事になる。

〈2〉6世紀後半~奈良・平安時代:出土鉄滓は、鉱石製錬滓から精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓が存在して製鉄の一連作業、いわゆる製鉄一貫体制のあった事を表す。製鉄工程を鉄滓の成分組成でみると、鉱石製錬滓は脈石成分が多く、特に酸化マンガン(MnO)を指標に挙げれば0.28~0.96%、荒鉄(製錬生成鉄で表皮スラグや捲き込みスラグ、更には炉材粘土など不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物)の成分調整を行った精錬鍛冶滓は0.20%、鉄素材の折返し曲げの鍛接で鍛打作業を繰り返す時点で排出される鍛錬鍛冶滓は0.10%などと、漸次作業の進行でマンガン含有量は低減する。

また、鉱物組成は、製錬滓はファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)主体が、鍛冶滓になると、ヴェスタイト(Wüstite: FeO)へと変化する。

〈3〉平安時代:製鉄炉の炉壁と鉱石系精錬鍛冶滓、これに砂鉄を始発原料とした鉄塊系遺物が検出された。平安時代と限定された時期になると、露頭磁鉄鉱石の枯渇からか、砂鉄系荒鉄の搬入があった可能性を示唆する。なお、砂鉄系の判定は、鉄中の非金属介在物(鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混ざりもの)にウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)を同定している。また、砂鉄原料の鉄塊系遺物は、冷却能力の低い(溜水)水中冷却が施され、鉄塊表層にベイナイト(Bainite:フェライトと炭化物の混合組織)を析出していた。製鉄炉解体時の生成物は水鋼の手法がとられていた。岡山県下の製鉄炉では古墳時代からみかける作業形態である。

1. いきさつ

窪木遺跡・南溝手遺跡は、岡山県総社市窪木・南溝手に所在する。県立大学建設用地に伴う埋蔵文化財の発掘調査で縄文時代から近世までの複合遺跡であることが判明した。その中で、古墳時代前期前葉から平安時代にかけての層位から製鉄関連遺物が出土したので、当時の鉄生産の実態を解明すべく目的から、金属学的調査を行った。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table. 1に示す。出土遺物は収納箱3箱程度を1993. 11. 24に岡山県赤磐郡山陽町の岡山県古代吉備文化財センター山陽町整理事務所で筆者が炉壁、鉄滓、鉄塊系遺物の分類を行った。その中から10点が発掘担当者から抽出されて供試材となっている。なお、他に、45点の炉壁観察モレがあったので、これも後日追加観察を行った。

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察 (2) マクロ組織 (3) 顕微鏡組織 (4) ビッカース断面硬度
(5) CMA(Computer Aided X-ray Micro Analyzer)調査 (6) 粉末X線回折
(8) 化学組成分析

3. 調査結果

(1) YA-1: 炉壁

① 肉眼観察: 内側の炉壁溶融面は、黒色流動状滑らか肌に、浅く木炭痕を残し、小気泡を散発させる。外面の胎土は、灰色基地に赤錆色を混じり白色石英粒が散在する。

② 顕微鏡組織: Photo. 1の①~③に示す。鉱物組成は、暗黒色ガラス質スラグに白色樹状晶のマグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)を晶出させる。箱形製鉄炉の炉壁を想定させる。

③ 化学組成分析: Table. 2に示す。鉄分(Fe_2O_3)が9.14%とやや高めであって、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が13.77%と低めで、耐火性は左程高温化は望めないが、鉄と滓の分離を促進させて自媒剤となる塩基性成分($\text{CaO}+\text{MgO}$)は1.65%と適度に含み、製鉄炉の炉壁としては適切な胎土の選択である。胎土中には砂鉄の混入はなくて、二酸化チタン(TiO_2)は0.27%、バナジウム(V)0.001%と低めであった。

(2) YA-2: 含鉄鉄滓(鍛錬鍛冶滓)

① 肉眼観察: 灰色粘土と赤錆に覆われた不整形で亀裂を走らせた含鉄鉄滓である。一部の表面錆の剝離した地肌は、鉄錆色の鉄基地と、気泡痕をもつ黒色滓の二面性を有していた。

② 顕微鏡組織: Photo. 1の④~⑧に示す。金属鉄の残留はなく、④右側半分にみられる錆化鉄のゲーサイト(Goethite: $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$)が鉄の組織を代表し、滓の鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイト(Wüstite: FeO)と、その粒間に淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。他に⑦に示す木炭の噛み込みがあった。該滓の晶癖は、鉄素材の折返し曲げにもとづく高温鍛接時の排出滓で鍛錬鍛冶滓に分類される。

③ ビッカース断面硬度: Photo. 1の⑧に白色粒状結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は450Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値が450~500Hvであって、この範疇に収まりヴスタイトに同定される。

④ 化学組成分析: Table. 2に示す。鉄分が多くてガラス質の少ない成分系となる。全鉄分(Total Fe)は、52.54%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.06%、酸化第1鉄(FeO)24.41%、錆化鉄が多くて酸化第2鉄(Fe_2O_3)が主体となり47.91%を占める。ガラス質成分($\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$)は19.16%に対して、塩基性成分($\text{CaO}+\text{MgO}$)は少なくとも0.84%となる。また、その他の脈石成分も低減化傾向にあり、二酸化チタン(TiO_2)0.10%、バナジウム(V)0.001%などと共に酸化マンガ(MnO)は0.10%と少なく、鉄素材の原料は砂鉄ではなくて鉱石系が想定される。更に、銅(Cu)の0.050%、五酸化燐(P_2O_5)の0.86%など高めも鉱石系を裏付ける。

(3) YA-3: 鉄滓(鉱石製錬滓)

① 肉眼観察: 灰黒色を呈した不整形滑らか肌鉄滓の破片である。灰色薄被膜の粘土が付着し、小気泡が散在する。また、裏面は赤錆と木炭痕が認められた。

② 顕微鏡組織: Photo. 2の①~⑤に示す。鉱物組成は淡灰色長柱状結晶のファイヤライト、白色粒状のヴスタイト、極微量の金属鉄および基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉱石製錬

滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 2の③に淡灰色長柱状結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は707Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値の600～700Hvの上限を若干上まわるがファイヤライトに同定できる。

④ 粉末X線回折：Fig. 1に示す。鉱物相は、Fayalite($\text{Fe}_2\cdot\text{SiO}_4=2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)47.7%、Wüstite(FeO)38.6%、Hongquite(?)13.7%となる。主要鉱物相は顕微鏡組織に準じたものであった。

⑤ 化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)を51.11%含み、ガラス質成分は多くて32.75%あり、このうち塩基性成分(CaO+MgO)も高く3.42%を含有する。この脈石成分の多きは酸化マンガン(MnO)にも及び、0.38%であった。二酸化チタン(TiO_2)の0.13%、バナジウム(V)0.001%からみて、鉱石製錬滓に分類される。なお、銅(Cu)の0.010%は一般レベルであろう。

(4) YA-4：鉄滓(鉱石製錬滓)

① 肉眼観察：表面は灰褐色粘土付着の板状炉内滓の一部欠損品である。送風孔近くの酸化雰囲気中に曝されて小豆色を呈す。緻密質。裏面は灰褐色基地に酸化土砂を付着し木炭痕も認められた。

② 顕微鏡組織：Photo. 2の⑥～⑧に示す。鉱物組成は淡灰色長柱状結晶のファイヤライトと白色粒状結晶のヴスタイト、それに海綿状粒状鉄の銹化物(⑥の不定粒状ゲーサイト)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鉱石製錬滓の晶癖である。

③ 化学組成分析：Table. 2に示す。該品も脈石成分の高め傾向の鉱石製錬滓に分類される。全鉄分(Total Fe)は44.98%に対して、塩基性成分(CaO+MgO)が4.21%と多く、酸化マンガン(MnO)0.36%を占める。二酸化チタン(TiO_2)は0.21%、バナジウム(V)0.004%、銅(Cu)0.004%などは鉱石系の成分系となる。

(5) YA-5：鉄滓(精錬鍛冶滓)

① 肉眼観察：表裏共に黄褐色土砂に覆われた団塊状鍛冶滓で、表面全面に小気泡が点在する。また、裏面も鉄銹が粘土に溶け込んだ状態で厚く付着する。

② 顕微鏡組織：Photo. 3の①～⑤に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトと、淡灰色盤状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。なお、局部的に海綿状の金属鉄(②③参照)が点在する。鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 3の④に白色粒状結晶の硬度測定の際の圧痕を、⑤に少量のパーライトを析出したフェライトの硬度圧痕を示す。硬度値は、前者が488Hvでヴスタイトに同定され、後者は89.0Hvでそれぞれ組織に見合った値であった。

④ 粉末X線回折：Fig. 2に示す。鉱物相は、Wüstite(FeO)64.2%、Quartz($\alpha\text{-SiO}_2$)21.3%、Fayalite($\text{Fe}_2\cdot\text{SiO}_4=2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)14.5%であった。顕微鏡組織に対応した結果であった。

⑤ 化学組成分析：Table. 2に示す。製錬滓に比べると鍛冶滓なので酸化精錬を受けて鉄分が多く、脈石成分は減少している。すなわち、全鉄分(Total Fe)は58.30%に対し、金属鉄(Metallic Fe)が0.10%、酸化第1鉄(FeO)54.22%が主体で、鉄銹を若干含んで酸化第2鉄(Fe_2O_3)22.96%の割合である。ガラス質成分は少なく18.92%、このうち塩基性成分(CaO+MgO)1.33%を含む。また、酸化マンガン(MnO)0.26%、二酸化チタン(TiO_2)は0.13%、バナジウム(V)0.003%など脈石成分をやや高め傾向に含んでいて、鉄素材成分調整の精錬鍛冶滓に分類される。

(6) YA-6：鉄滓(精錬鍛冶滓)

① 肉眼観察：鍛冶炉の炉底に堆積形成された楕円形状の小型碗形鍛冶滓である。表面は僅かに凹凸状で赤錆に覆われ、気泡を散在させる。裏面は灰黒色で付着粘土に鉄錆を発生し、反応痕が認められた。

② 顕微鏡組織：Photo. 3の⑥～⑧に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴェスタイトと、その粒内微小析出物のヘーシナイト(Hercynite： $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$)、これに淡灰色盤状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。荒鉄の成分調整の精錬鍛冶滓に分類される。

③ 化学組成分析：Table. 2に示す。鍛冶滓としては、鉄分が少なくガラス質の多い成分系で、精錬鍛冶滓としては成分調整の初期段階の排出滓である。全鉄分(Total Fe)は39.70%、ガラス質成分43.64%で、このうちの塩基性成分($\text{CaO}+\text{MgO}$)が3.32%と高い。また、酸化マンガン(MnO)も0.20%と多くて脈石成分は高め傾向にある。二酸化チタン(TiO_2)0.41%、バナジウム(V)0.004%、銅(Cu)の0.020%などの構成から鉱石系荒鉄の成分調整で派生された精錬鍛冶滓に分類される。

(7) YA-7：鉄滓(鉱石製錬滓)

① 肉眼観察：表面は灰黒色流動状肌に鉄錆を付着した炉内滓の破片である。裏面は黄褐色錆混じりの粘土と石英礫を付着する。

② 顕微鏡組織：Photo. 4の①に示す。鉱物組成は、淡灰色短柱状結晶のファイヤライトと小粒白色粒状結晶のヴェスタイト、それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される鉱石製錬滓に分類される。

③ 化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は47.33%、ガラス質成分が35.98%でこのうち、塩基性成分($\text{CaO}+\text{MgO}$)を2.26%、酸化マンガン(MnO)が多くて0.96%、二酸化チタン(TiO_2)0.13%、バナジウム(V)0.002%、銅(Cu)0.006%の成分構成から鉱石製錬滓に分類される。

(8) YA-8：鉄滓(鉱石製錬滓)

① 肉眼観察：表裏共に赤褐色の不定形炉内滓である。肌は凹凸をもち、木炭痕を残す。裏面は小粒石英含みの粘土を付着する。破面は灰黒色で気泡を散在させる。

② 顕微鏡組織：Photo. 4の②～④に示す。鉱物組成は、淡灰色盤状結晶のファイヤライトと、白色粒状小粒のヴェスタイト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどで構成される。鉱石製錬滓の晶癖である。

③ 粉末X線回折：Fig. 3に示す。検出された鉱物相は、Fayalite($\text{Fe}_2\text{SiO}_4=2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)41.2%、Wüstite(FeO)38.2%、Quartz Low(SiO_2)20.6%などである。顕微鏡組織とよく対応する。

④ 化学組成分析：Table. 2に示す。鉄分は多く全鉄分(Total Fe)が50.95%、ガラス質成分30.20%に対して塩基性成分($\text{CaO}+\text{MgO}$)1.59%を含む。酸化マンガン(MnO)は0.28%、二酸化チタン(TiO_2)0.10%、バナジウム(V)0.002%など低めで鉱石製錬滓に分類される。

(9) YA-9：鉄滓(ガラス質滓)

① 肉眼観察：灰黒色を呈する軽質ガラス質滓である。表裏共に凹凸を有し、気泡を散発させる。鍛冶素材の酸化防止に粘土汁を塗布したものがガラス化した滓である。

② 顕微鏡組織：Photo. 4の⑤～⑦に示す。鉱物組成は、鉄分の含有は少なく暗黒色ガラス質スラグ主体で、微小マグネタイトが局部に散在し、僅かに未溶解の砂鉄粒子が認められた。砂鉄粒子の還元はなく、低温作業の鍛冶で派生した滓に分類される。

③ CMA調査：Photo. 7はSE(2次電子像)に示した砂鉄粒子と暗黒色ガラス質スラグと、その

中に析出した微小マグネタイトの分析結果である。検出元素は次のものである。珪素(Si)、アルミニウム(Al)、チタン(Ti)、鉄(Fe)、カルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)、カリウム(K)、ナトリウム(Na)、アンチモン(Sb)、マンガン(Mn)となる。チタン(Ti)が強く検出されるのは砂鉄粒子が磁鉄鉱(Magnetite: $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{FeO}$)ではなく、チタン鉄鉱(Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)のためである。

面分析の特性X線像から次の事がいえる。分析元素の存在は白色輝点の集中度によって読み取ることができる。例えば、砂鉄粒子には鉄(Fe)とチタン(Ti)に白色輝点が集中し、当粒子はチタン鉄鉱のイルミナイト($\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)と同定される。また、暗黒色ガラス質スラグは、ガラス質成分($\text{Si} + \text{Al} + \text{Ca} + \text{Mg} + \text{K} + \text{Na}$)に白色輝点が集中し、砂鉄粒子は黒く抜ける。同じく微小結晶のマグネタイトは鉄(Fe)のみが検出されて、ガラス質成分側は黒く抜けている。

暗黒色ガラス質スラグは粘土汁の熔融物で砂鉄粒子は混入物であろう。

④ 化学組成分析: Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は5.74%と少なく、その主成分はガラス質スラグ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)であって、塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)も5.68%と高い。また、砂鉄粒子の混入が顕微鏡組織で認められた様に、二酸化チタン(TiO_2)0.86%、バナジウム(V)0.010%と多くて前述してきた炉壁や鉄滓成分とは異なっている。

(10) YA-10: 鉄塊系遺物

① 肉眼観察: 酸化土砂と鉄錆に覆われた小型(21g)の鉄塊である。ただし完形品ではなく、一部欠損品。破面は渦巻状の黒錆を露出する。

② マクロ組織: 表層側は0.15% [C]の高炭素域の水入投入冷却組織をもつベイナイト(Bainite: フェライトと炭化物の混合物)組織の明瞭な表層と、内側の吸炭されていない純鉄のフェライトと、吸炭されて0.1% C程度の組織の混在する内層をもつ。当組織写真は割愛。

③ 顕微鏡組織: Photo. 6の①は、低炭素域の縦断組織である。フェライト・パーライトの混在で、炭素量は0.15%前後となろう。

Photo. 5の①は鉄中の非金属介在物であり、②~⑦はフェライト結晶粒界に析出したパーライトを示す。

④ ビッカース断面硬度: Photo. 5の⑧はフェライトの、また⑨はベイナイトの硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は、前者が87.0Hvと軟質で、後者は108Hvであった。炭素含有量の相違が硬度値に影響するのが判る。

⑤ CMA調査: Photo. 8は面分析の特性X線像と定量分析結果である。構成元素は、鉄(Fe)、珪素(Si)、チタン(Ti)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、カリウム(K)、マンガン(Mn)、ナトリウム(Na)、硫黄(S)である。SE(2次電子像)の非金属介在物の1と番号を付けた茶褐色部は、67.08%FeO-24.63% TiO_2 組成でウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)が同定されて、鉄塊の製鉄原料は砂鉄が推定される。また、2の番号のついた白色楕円状結晶は、97.12% FeOでヴスタイト(Wüstite: FeO)、これには2.4% TiO_2 を含み、3の番号の暗黒色ガラス質は、31.51% SiO_2 -4.5% Al_2O_3 -8.1%CaO-1.2%MgO-1.3% K_2O の硅酸塩系であり、この中には微小淡灰色析出物があって、51.5%FeOの存在からファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)が存在する。いずれにしても、該品は、砂鉄原料の鉄塊であり、これ以外で今回調査の製錬滓と鍛冶滓が鉱石系であった事に対して注意すべき結果となった。

南溝手遺跡では平安時代になると、鉱石系と砂鉄系の原料からなる製鉄産物の鍛冶作業があったと

推定される。

4. まとめ

岡山県下の古代製鉄の動向は、県南の場合、古墳時代から古代にかけては鉱石製錬が主体であるが、砂鉄製錬も僅かに認められる。その傾向は、総社久代製鉄遺跡群⁽²⁾、窪木薬師遺跡⁽³⁾、津寺遺跡⁽⁴⁾、鬼ノ城製鉄遺跡群⁽⁵⁾などで捉えられている。そして、今回の窪木遺跡でも鉱石系の製錬滓や鍛冶滓に混じって砂鉄原料の鉄塊系遺物が検出された。当鉄塊系を鍛冶原料として排出された精錬鍛冶滓が存在するの否か興味深い問題点を残すが、今回の供試材の中に、これに答えるものが含まれていなかった。今後の課題としておきたい。

註

- (1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968、ヴェタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvが報告されている。
- (2) 大澤正己「総社久代製鉄遺跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『水島機械金属工業団地共同組合西団地内遺跡群』（総社市埋蔵文化財調査報告9）総社市教育委員会 1991
- (3) 大澤正己「窪木薬師遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『窪木薬師遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86）岡山県教育委員会 1993
- (4) 大澤正己「津寺遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『津寺遺跡4』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116）日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997
- (5) 大澤正己「鬼ノ城製鉄遺跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『鬼ノ城ゴルフクラブ造成工事に伴う発掘調査～奥坂遺跡群～』（総社市埋蔵文化財発掘調査報告15）総社市教育委員会 1997

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

番号	調査区	出土位置	出土名称	出土日	種類	時期	旧番号	調査項目					
								顕微鏡組成	ピッカース断面硬度	粉末X線回折	C/MN調査	化学組成分析	
YA-1	YA 2 A	斜面堆積3	製鉄炉の炉壁	920803	平安時代中期	平安時代中期	炉壁22	○	-				○
2	YA 2 A	南部 黄褐色砂質土除去中	鍛冶滓(鍛鉄)	920910	6 C後半~奈良・平安時代	6 C後半~奈良・平安時代	鉄滓81	○	○				○
3	YA 2 A	北端部 褐色砂質土除去中	製鉄滓	921001	6 C後半~奈良・平安時代	6 C後半~奈良・平安時代	鉄滓101	○	○	○			○
4	Y K	排土内	製鉄滓 炉内滓	921125~26	6 C後半?	6 C後半?	鉄滓10	○	-				○
5	YA 2 A	斜面堆積3	鍛冶滓(精鉄)	920803	平安時代中期	平安時代中期	鉄滓40	○	○	○			○
6	YA 2 A	中央部 褐色砂質土除去中	柄形鍛冶滓(精鉄)	920909	6 C後半~奈良・平安時代	6 C後半~奈良・平安時代	鉄滓94	○	-				○
7	YA 2 A	北部 暗褐色砂質土除去中	製鉄滓	921013	6 C後半~奈良・平安時代	6 C後半~奈良・平安時代	鉄滓103	○	-				○
8	YA 2 A	北部 暗褐色砂質土除去中	製鉄滓	921013	6 C後半~奈良・平安時代	6 C後半~奈良・平安時代	鉄滓105	○	-	○			○
9	H 4	溝58 (南勝手遺跡)	ガラス質滓	910521	古墳時代前期前葉	古墳時代前期前葉	鉄滓141 (その他1)	○	-			○	○
10	YA 2 A	溝202段出中	玻璃系遺物 Fe(+)	920722	平安時代中期	平安時代中期	鉄滓33	○	○			○	○

Table. 2 供試材の化学組成

原料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金風鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミナ (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化チタン (TiO ₂)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化マンガン (MnO)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	ケイ素 (Y)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe
YA-1	榎木	YA2A 斜面堆積3	炉壁溶融物	平安時代中期	7.03	0.07	9.14	47.91	66.58	13.77	1.14	0.51	4.850	2.490	0.10	0.27	0.018	0.01	0.11	0.14	0.001	0.001	0.001	89.340	12.708	0.038
2	榎木	YA2A 南部黄褐色砂質土	鍛冶滓	6 C後半~奈良・平安	52.54	0.06	24.41	47.91	14.53	3.06	0.52	0.32	0.508	0.218	0.10	0.10	0.005	0.06	0.86	0.27	0.001	0.050	0.050	19.156	0.365	0.002
3	榎木	YA2A 北端部褐色砂質土	磁石製鉄滓	6 C後半~奈良・平安	51.11	0.08	60.72	5.51	23.00	4.47	2.87	0.55	1.540	0.316	0.13	0.007	0.01	0.35	0.06	0.001	0.001	0.010	0.010	32.746	0.641	0.003
4	榎木	YK 排土内	磁石製鉄滓	6 C後半?	44.98	0.12	45.38	13.71	24.80	5.70	3.15	1.06	1.470	0.514	0.36	0.21	0.008	0.02	0.42	0.16	0.004	0.004	0.004	36.694	0.816	0.005
5	榎木	YA2A 斜面堆積3	精鉄鍛冶滓	平安時代中期	58.30	0.10	54.22	22.96	13.05	3.67	0.87	0.46	0.656	0.216	0.26	0.13	0.006	0.03	0.17	0.14	0.003	0.006	0.006	18.922	0.325	0.002
6	榎木	YA2A 中央部褐色砂質土	精鉄鍛冶滓	6 C後半~奈良・平安	39.70	0.06	36.54	16.07	26.22	9.37	2.26	1.06	1.380	0.354	0.20	0.41	0.007	0.06	0.51	0.09	0.004	0.020	0.020	43.644	1.099	0.010
7	榎木	YA2A 北端部褐色砂質土	磁石製鉄滓	6 C後半~奈良・平安	47.33	0.04	51.88	9.96	25.49	6.22	1.61	0.65	1.560	0.446	0.96	0.13	0.007	0.01	0.31	0.10	0.002	0.006	0.006	35.976	0.760	0.003
8	榎木	YA2A 北部暗褐色砂質土	磁石製鉄滓	6 C後半~奈良・平安	50.95	0.06	52.76	14.13	22.89	4.23	1.10	0.49	1.070	0.418	0.28	0.10	0.004	0.02	0.32	0.09	0.002	0.008	0.008	30.198	0.593	0.002
9	南勝手	H4 溝58	ガラス質滓	古墳時代前期前葉	5.74	0.10	1.75	6.12	61.65	17.26	3.60	2.08	3.430	2.210	0.14	0.86	0.022	0.01	0.20	0.12	0.010	0.004	0.004	90.230	15.720	0.150

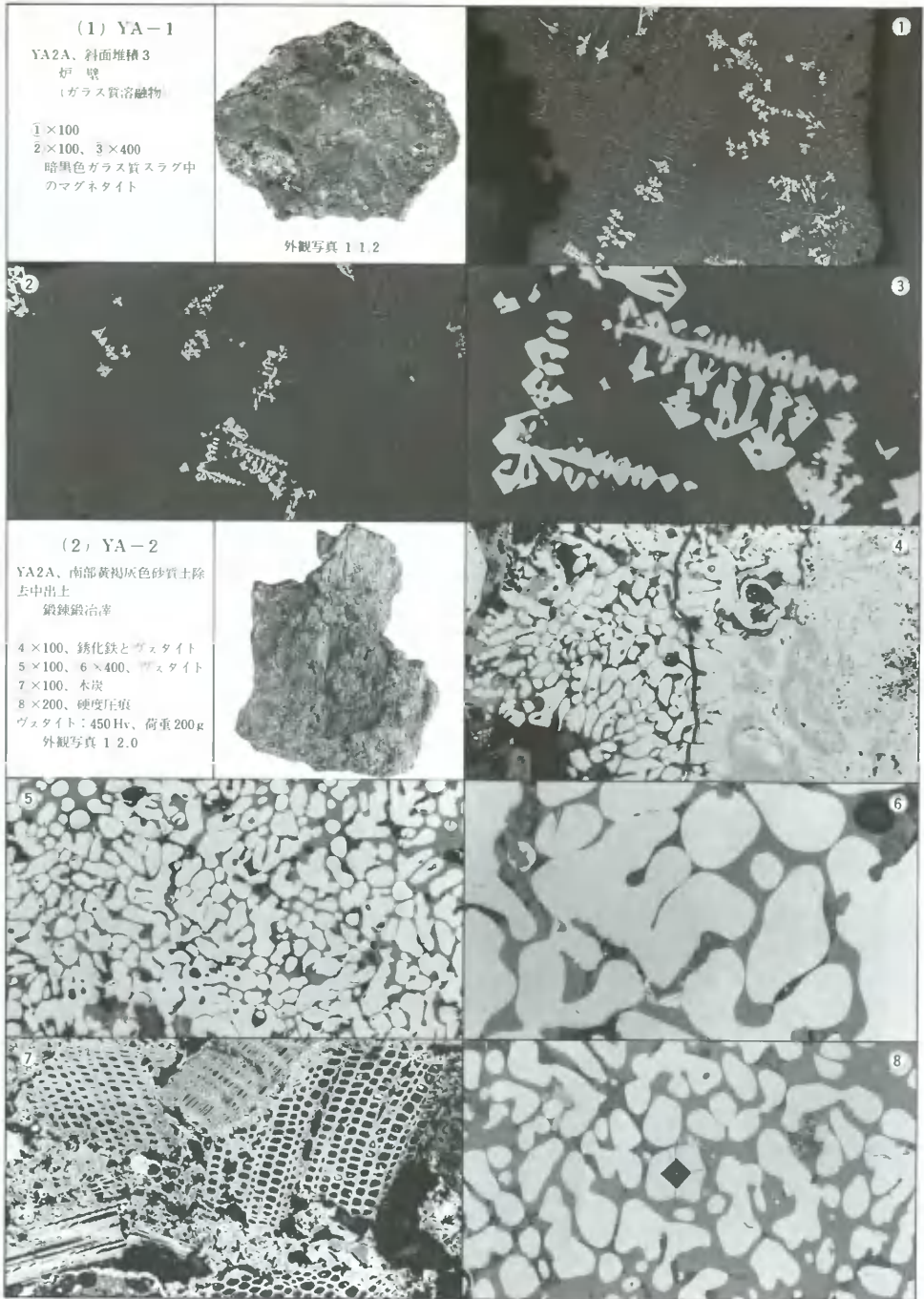


Photo. 1 炉壁と鉄滓の顕微鏡組織

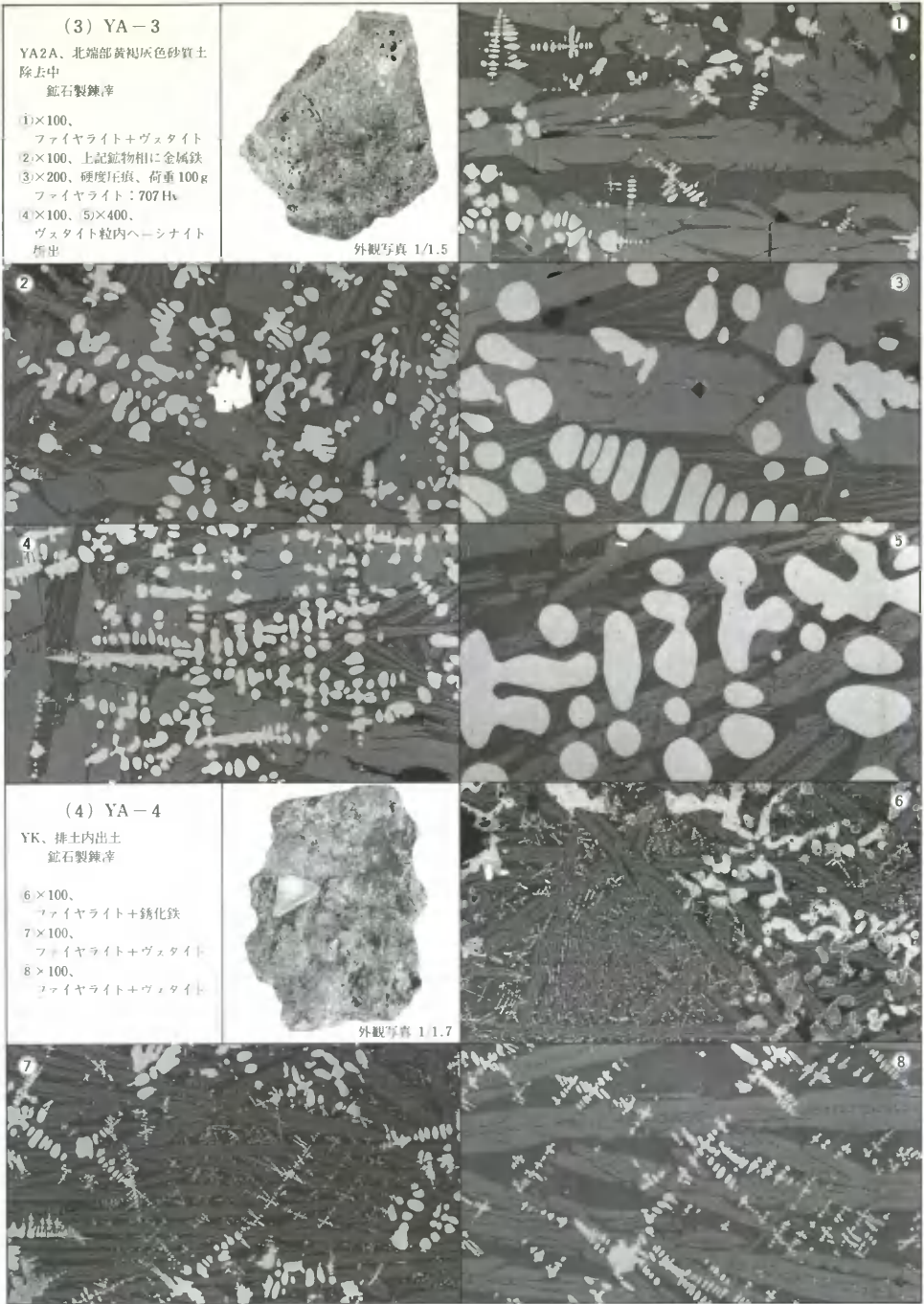


Photo. 2 鉄滓の顕微鏡組織

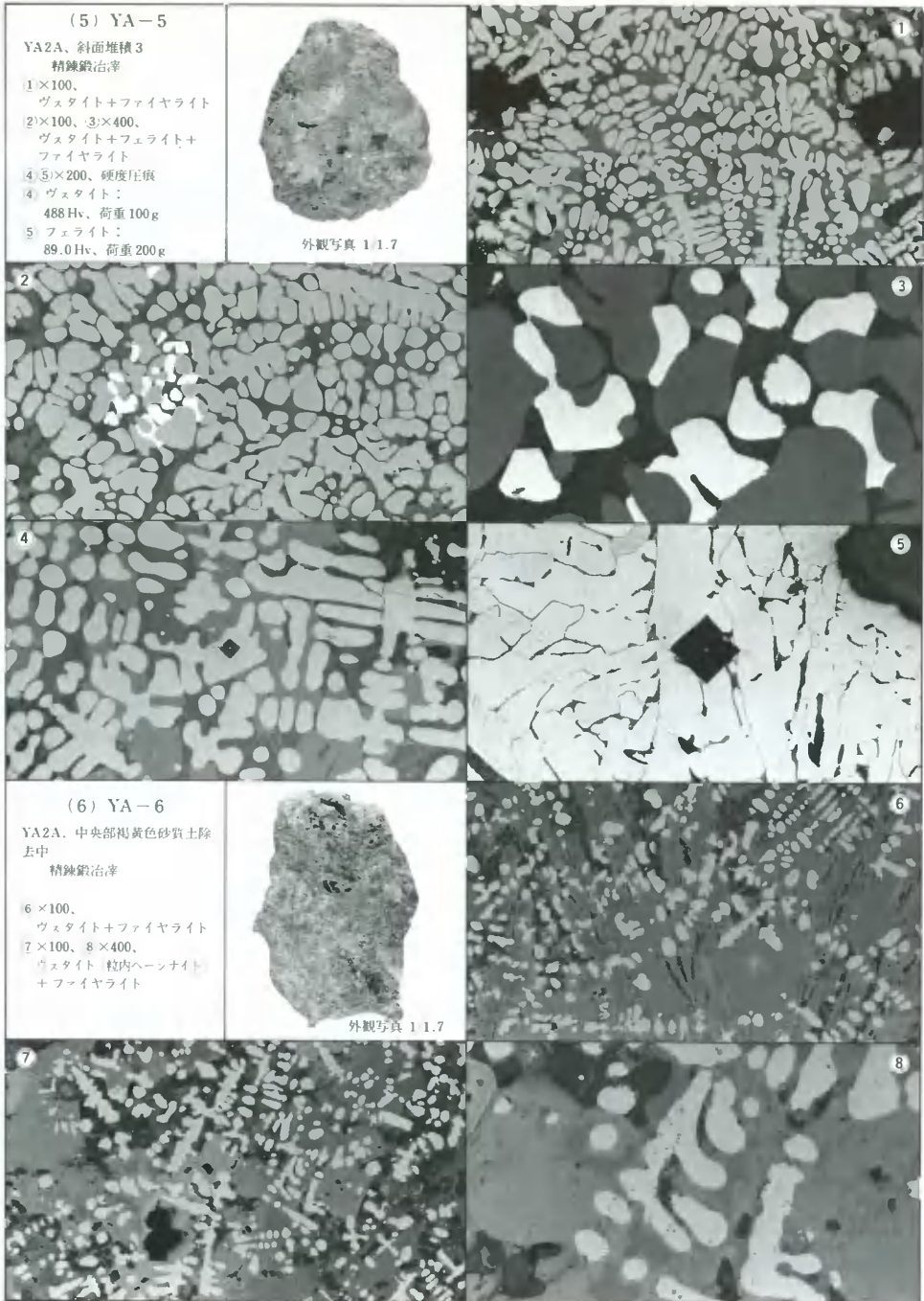


Photo. 3 鉄滓の顕微鏡組織

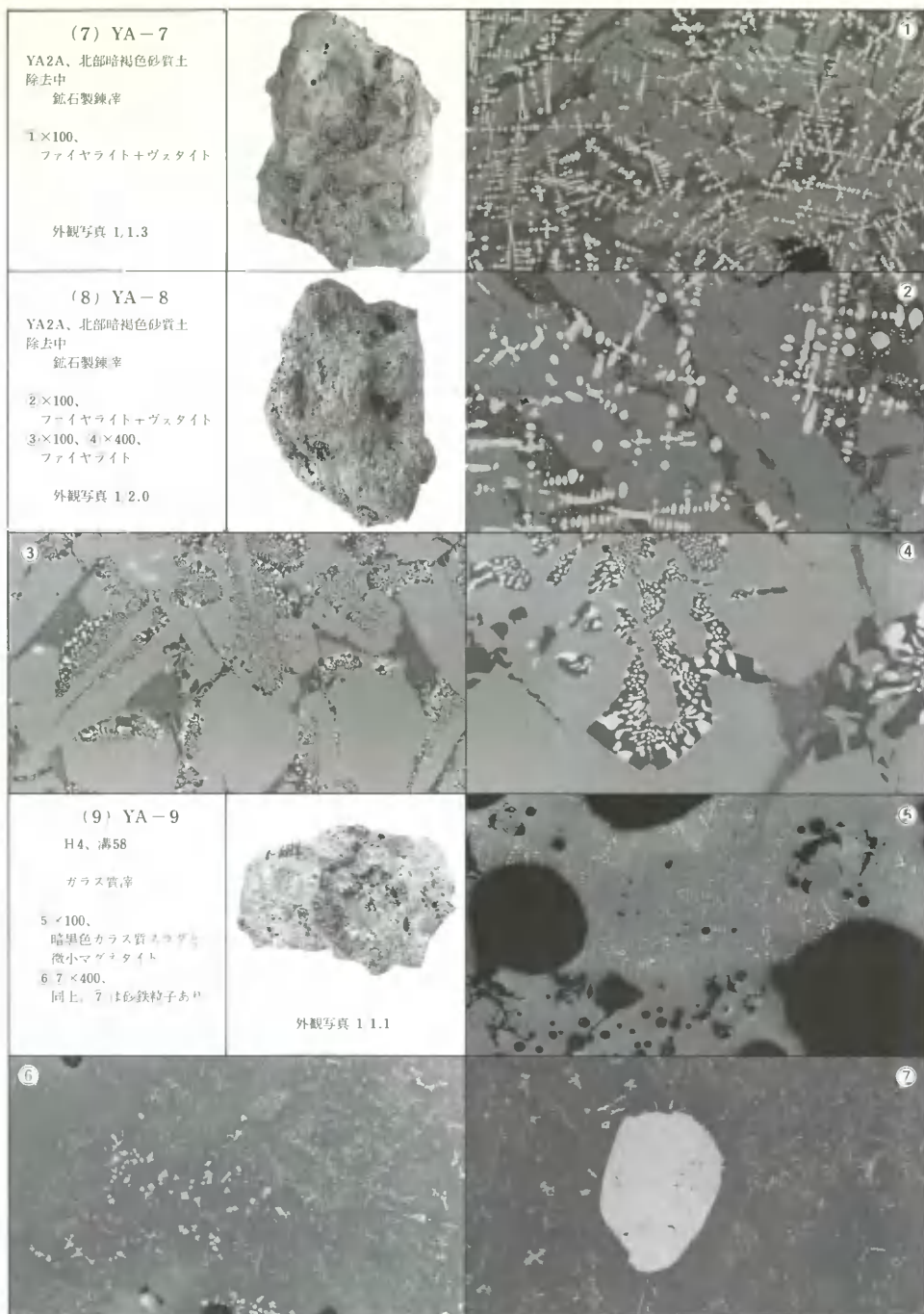


Photo.4 鉄滓の顕微鏡組織

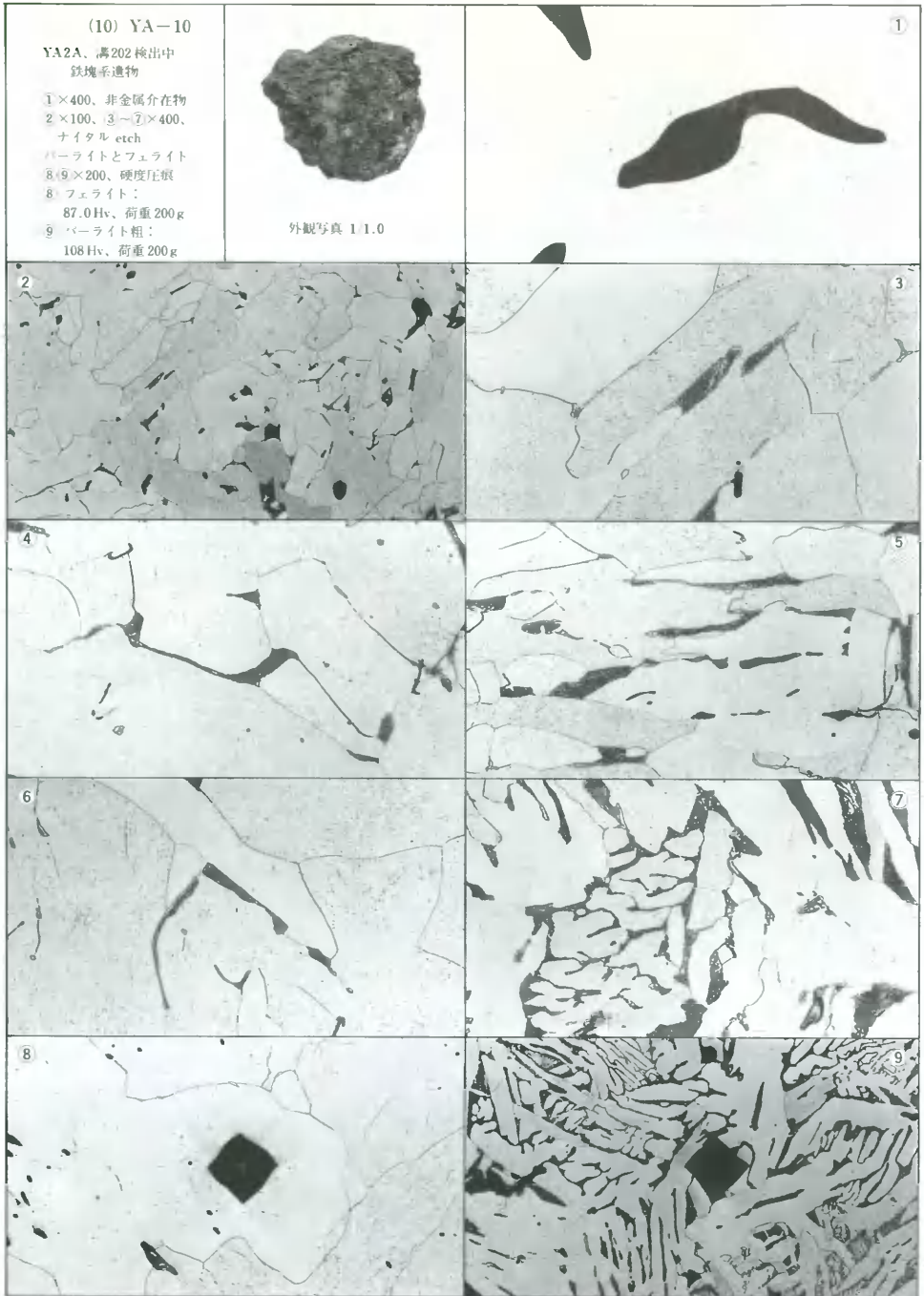
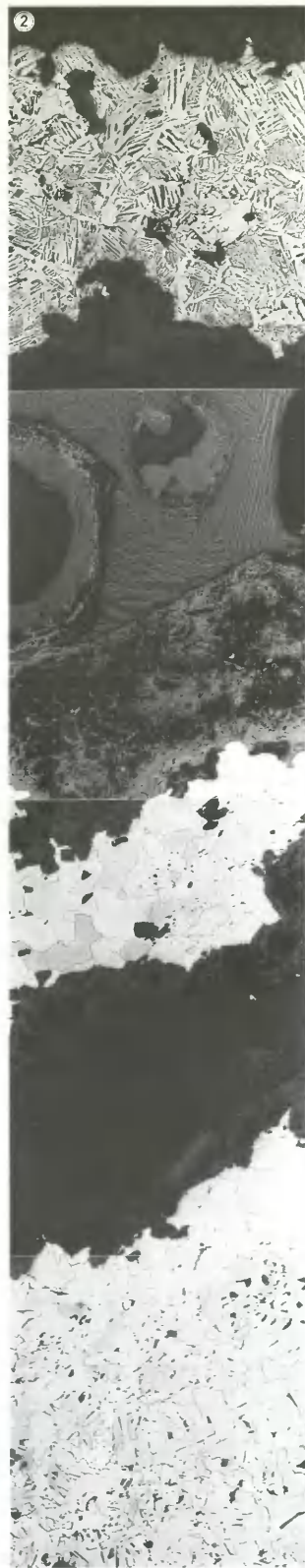


Photo. 5 鉄塊系遺物の顕微鏡組織



表層組織
ベイナイト
(0.15%C)

フェライト
(0.008%C)

フェライト・
パーライト
(0.10%C)

Photo. 6 鉄塊系遺物の顕微鏡組織 (×50)



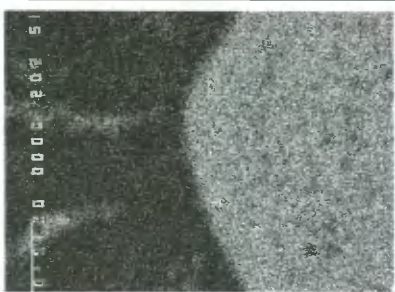




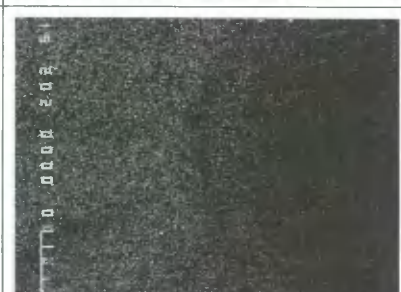


SE			Si
Fe			Al
Ti			Ca
Mn			Mg
Na			K

Photo. 7 ガラス質滓 (YA-9) 砂鉄粒子とガラス質滓、微小マグネタイトの特性 X線像 (×2,000、縮小 0.7)

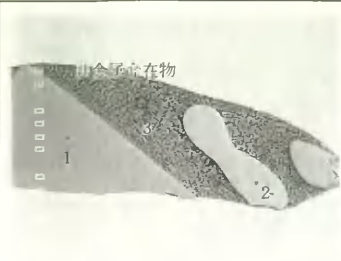
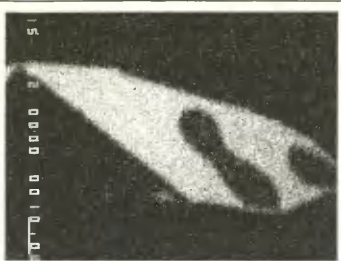
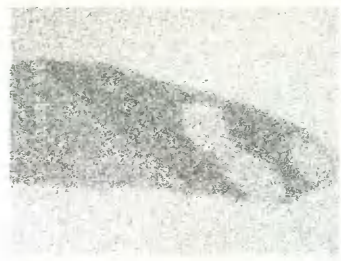



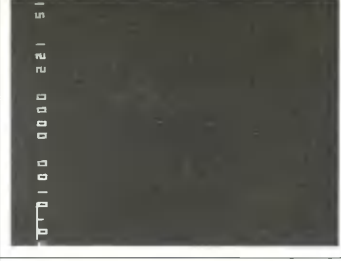

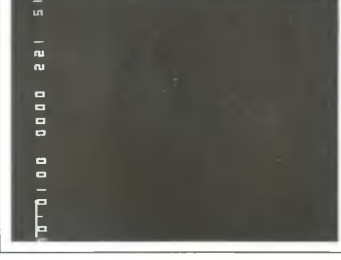

SE			Si
Fe			Al
Ti			Ca
Mn			Mg
Na			K

Photo. 8 鉄塊系遺物 (YA-10) 鉄中非金属介在物の特性 X線像と定量分析値 (×1,200、縮小0.6)

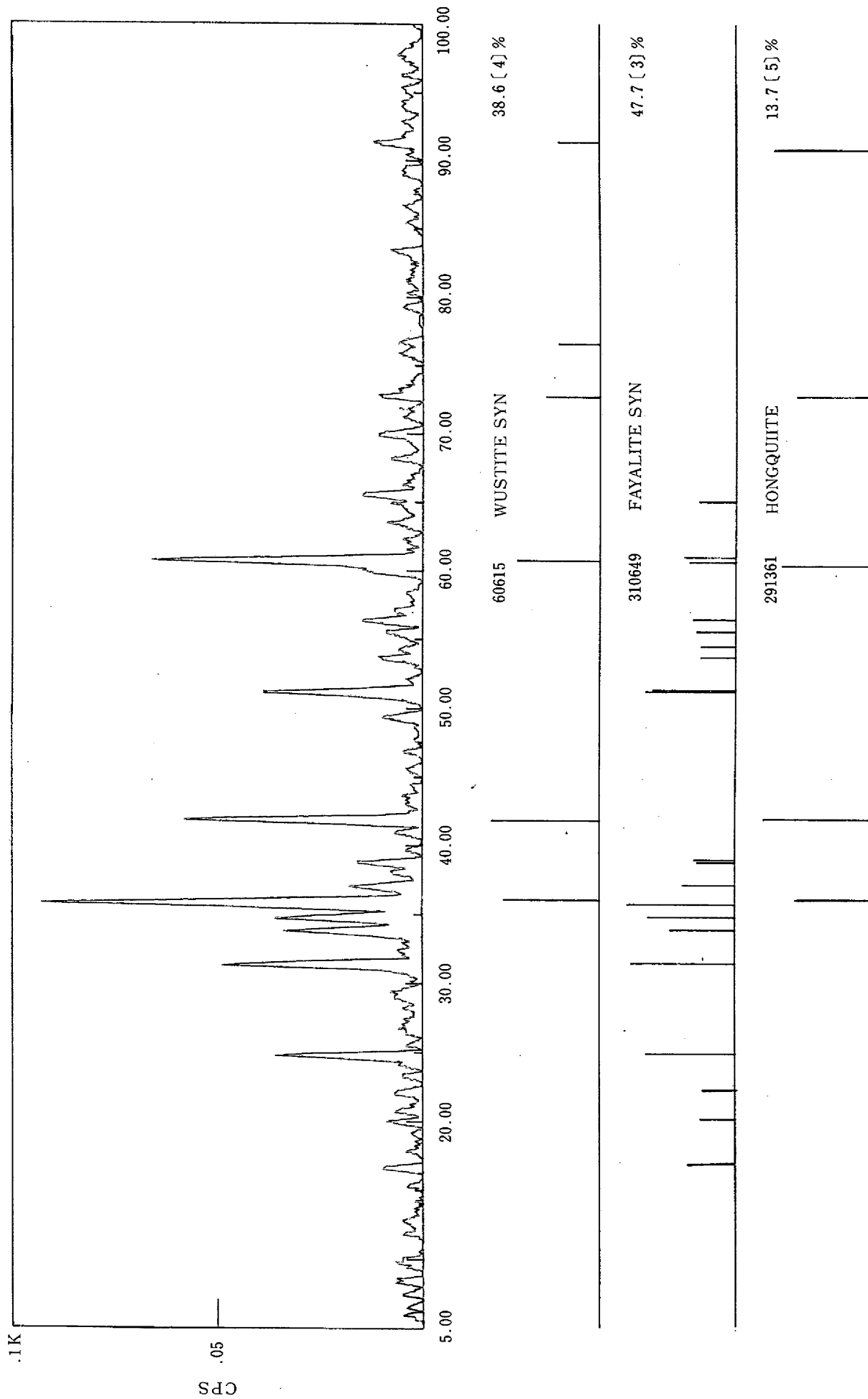


Fig. 1 鈮石製鍊淨 (YA-3) の X線回折プロファイル

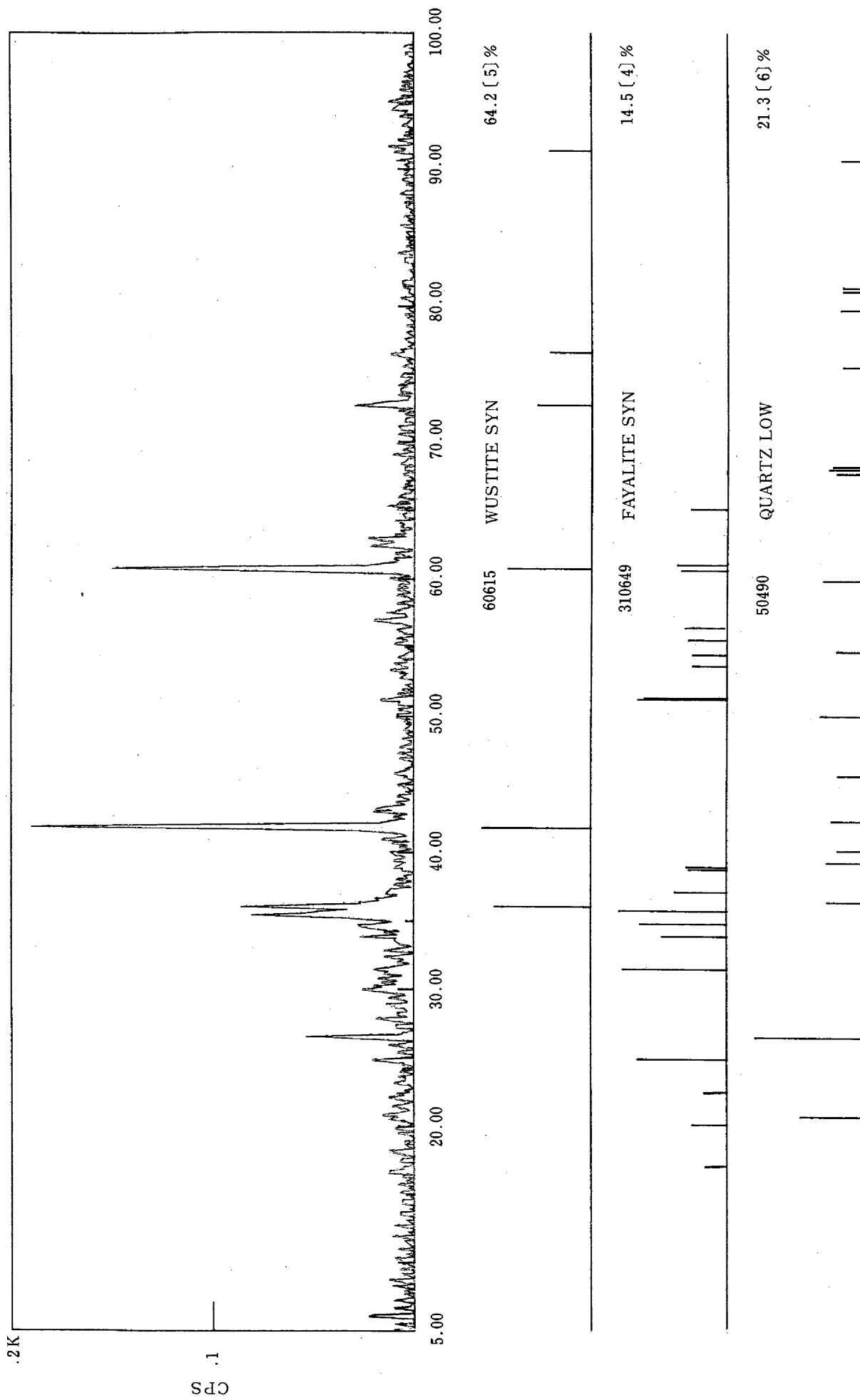


Fig. 2 精鍊鐵冶滓 (YA-5) の X線回折プロファイル

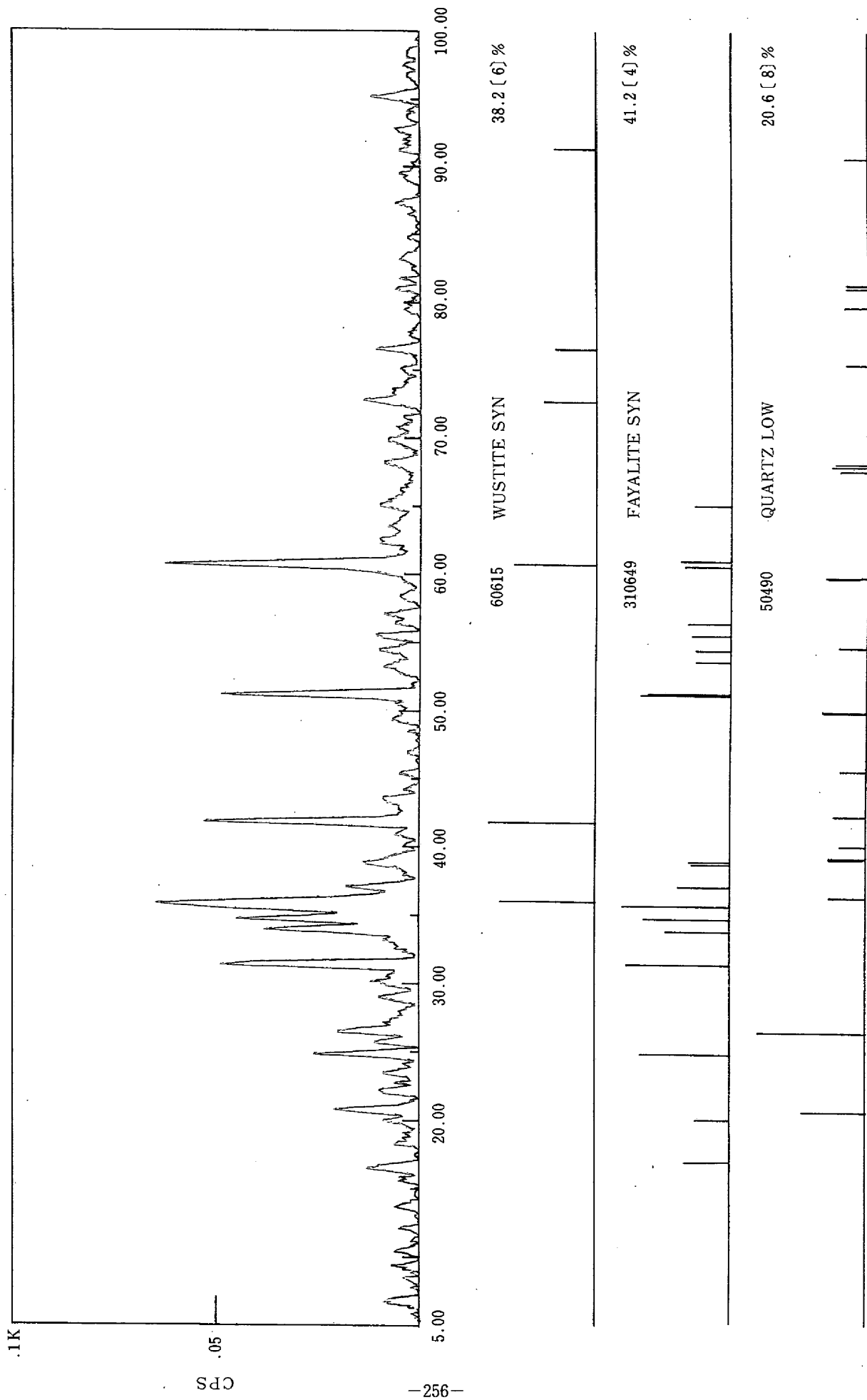


Fig. 3 鉍石製鍊淨 (YA-8) の X線回折プロフィール

第9表 竪穴住居一覧表

番号	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	床面積 (㎡)	主穴 柱数	中央穴			焼土 面	壁体 溝	時 期	備 考
					形	規模 (cm)	深さ (cm)				
28	円	-	-	?	長楕円	88×70	13	-	無	弥生時代中期前葉～中葉	
29	隅丸方形	470×450	18.4	4?	長楕円	68×52	23	-	無	弥生時代中期前葉	焼失住居
30	円	-	-	3+α	-	-	-	-	有	弥生時代中期前葉～中葉	焼失住居?
31	円?	-	-	?	-	-	-	1	有	弥生時代中期前葉～ 後期前葉	柱穴に根石、管玉未製品 出土
32	円	-	-	?	楕円	58×50	55	-	有	弥生時代中期前葉～中葉	焼失住居?
33	円	-	-	2+α	-	-	-	-	有	弥生時代中期～後期	柱穴に根石
34	不整円	-	-	4+α	長方	110×70	25	-	有	弥生時代後期前葉	建て替え、柱穴に根石
35	円	-	-	-	-	-	-	-	有	弥生時代中期中葉	建て替え
36	円	-	-	1+α	-	-	-	1	有	弥生時代中期中葉	焼失住宅
37	円	430～540×500	20+α	4	長方	90×55	45	-	無	弥生時代後期末葉	中央穴周辺に炭面
38	-	-	-	-	-	-	-	-	有	弥生時代後期	
39	円?	-	-	4?	不整長方	-	30	-	有	弥生時代後期前葉	焼失住居
40	方	385(～425)×350	13.5	?	無	-	-	3	有	古墳時代前期前葉	
41	長方	650×400	26+α	2?	無	-	-	?	有	古墳時代後期	南辺にカマド
42	円	415～460×-	-	3+α	円	120×-	14	-	有	古墳時代前期前葉	数次にわたって建て替え
43	方	-	-	3+α	方	60×45	3	1	有	古墳時代前期前葉	ベッド有
44	-	-	-	-	-	-	-	1	有	古墳時代前期前葉	
45	-	-	-	-	-	-	-	-	有	古墳時代後期	

第10表 建物一覧表

番号	規模 (間)	柱間距離		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	柱穴形状	時 期	備考
		桁 (cm)	梁 (cm)						
58	-	216	-	-	-	-	円	弥生時代前期後葉～中期前葉	
59	-	175～192	-	-	-	-	円	弥生時代後期前葉	
60	2×1	184～225	258～260	410	258～260	11.0	円	弥生時代中期後葉	
61	-	140	-	-	-	-	円	古墳時代後期	土玉出土
62	-	163～175	-	-	-	-	隅丸方形	古墳時代前期前葉	
63	2×2	160～185	138～146	345	276～292	10.2	不整楕円	奈良時代～平安時代前期	
64	3×2	170～175	178～185	512～522	341～356	17.7	不整方	奈良時代～平安時代前期	
65	3×2	215～240	215～225	694～717	427～445	31.6	不整楕円	奈良時代～平安時代前期	
66	3×2	232	212	700	424	30.3	不整円・不整方	奈良時代～平安時代前期	
67	2×2	185～210	165～198	370～420	362～368	14.9	不整円・不整方	奈良時代～平安時代前期	
68	3×2	135	175	405	350	14.3	不整円・不整方	奈良時代～平安時代前期	柱材残存
69	5×2	244～256	188～212	1238	400	73.3	円	奈良時代中期	
70	3×1	170～206	208	-	208	11.8	円	奈良時代中期	
71	-	230・238	-	-	-	-	不整円～不整方	奈良時代～平安時代前期	
72	×1	172	430	-	430	-	隅丸方～方	奈良時代～平安時代前期	
73	3×	209・211	168・182	631	-	-	円	平安時代	
74	-	65	-	-	-	-	円	中世	
75	3×1	183・198	198・220	341	198・220	8.4	円	中世	
76	-	168・178	-	-	-	-	円	中世	
77	-	-	-	-	-	-	方?	鎌倉時代	

第11表 土製品一覧表

番号	出土 調査区	遺構名	器 種	計測最大値 (mm)			重量 (g)	時 期	備 考
				長さ	幅(径)	厚さ			
C12	YA2A	竪穴住居35	紡錘車	30.7	31.0	7.3	7.62	弥生時代中期中葉	土器転用、完
C13	YA2A	竪穴住居35	紡錘車	34.4	32.0	4.3	4.75	弥生時代中期中葉	土器転用、完
C14	HC1A	土壇156	紡錘車	35.5	30.7	6.2	7.92	弥生時代中期中葉	土器転用、完
C15	YA2B	溝165	紡錘車	57.3	64.2	6.5	24.49	弥生時代中期中葉	土器転用、欠
C16	HC2B	その他(弥生)	分銅形土製品	71.2	10.9	15.4	112.26	弥生時代	欠
C17	YA2A	その他(弥生)	分銅形土製品	55.4	68.2	17.5	60.57	弥生時代	欠
C18	HC1A	その他(弥生)	紡錘車	40.0	37.5	6.3	10.77	弥生時代	土器転用、欠
C19	HC1A	その他(弥生)	紡錘車	27.3	25.6	8.1	7.15	弥生時代	土器転用、未製品
C20	YK	竪穴住居44.45	フイゴ羽口	74.6	51.9	19.5	154.87	古墳時代	欠
C21	HC3	建物61	丸玉	15.4	-	-	27.10	古墳時代	完
C22	HC3	建物61	丸玉	15.6	-	-	3.36	古墳時代	完
C23	YA2A	溝179	フイゴ羽口	71.9	61.5	23.8	178.77	古墳時代前期前葉?	混入の可能性もある、欠

番号	出土調査区	遺構名	器種	計測最大値(mm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅(径)	厚さ			
C24	YA 2 A	溝179	フイゴ羽口	71.1	73.9	27.7	111.56	古墳時代前期前葉?	混入の可能性もある、欠
C25	YA 2 A	溝179	円板状土製品	30.3	31.9	7.6	8.32	古墳時代前期前葉	欠
C26	YA 2 A	その他(古墳)	フイゴ羽口	68.4	102.8	24.5	279.19	古墳時代?	欠
C27	YA 2 B	その他(古墳)	フイゴ羽口	52.4	46.6	21.3	60.47	古墳時代?	欠
C28	YA 2 A	その他(古墳)	丸玉	22.0	19.9	-	7.12	古墳時代	欠
C29	HC 1 A	溝202	土鍾	43.6	15.2	-	8.63	平安時代中期	完
C30	HC 1 A	溝202	土鍾	38.3	12.9	-	5.77	平安時代中期	欠
C31	YA 2 A	溝202	土鍾	42.7	12.9	-	5.81	平安時代中期	完
C32	YA 2 A	溝202	土鍾	41.4	11.5	-	5.43	平安時代中期	完
C33	YA 2 A	溝202	土鍾	37.0	12.8	-	4.85	平安時代中期	完
C34	YA 2 A	溝202	土鍾	34.0	9.8	-	3.08	平安時代中期	欠
C35	YA 2 A	溝202	土鍾	37.1	13.6	-	5.59	平安時代中期	欠
C36	YA 2 A	斜面堆積3	土鍾	52.3	19.1	-	16.59	平安時代中期	欠
C37	HC 1 A	斜面堆積3	土鍾	51.7	12.3	-	7.60	平安時代中期	完
C38	YA 2 A	斜面堆積3	土鍾	47.3	13.7	-	7.16	平安時代中期	完
C39	HC 1 A	斜面堆積3	土鍾	40.3	14.3	-	7.08	平安時代中期	欠
C40	YA 2 A	斜面堆積3	土鍾	32.4	9.9	-	2.85	平安時代中期	欠
C41	HC 1 A	斜面堆積3	土鍾	25.9	10.2	-	2.66	平安時代中期	欠
C42	YA 2 A	斜面堆積3	土鍾	21.4	11.8	-	2.57	平安時代中期	欠
C43	YA 2 A	斜面堆積3	円板状土製品	25.2	21.9	14.0	9.67	平安時代中期	須恵器、完
C44	YA 2 B	その他(古代・中世)	陶馬	180.0	45.5	38.5	363.85	古代	欠
C45	YA 2 B	その他(古代・中世)	不明(動物形?)	53.2	69.7	-	130.35	古代~中世	欠
C46	HC 3	その他(古代・中世)	円板状土製品	40.4	38.4	13.5	24.28	古代~中世	土師質、完
C47	YA 2 A	その他(古代・中世)	円板状土製品	24.0	21.9	10.6	8.45	古代~中世	須恵器、完
C48	YA 2 A	その他(古代・中世)	円板状土製品	30.2	30.9	10.3	10.14	古代~中世	須恵器、完
C49	HC 1 A	その他(古代・中世)	円板状土製品	30.0	26.9	-	11.94	古代~中世	須恵器、完
C50	YA 1	その他(古代・中世)	土鍾	58.8	19.4	-	19.01	古代~中世	完
C51	HC 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	59.0	20.4	-	22.77	古代~中世	完
C52	HC 1 A	その他(古代・中世)	土鍾	44.1	18.8	-	14.93	古代~中世	欠
C53	HC 6	その他(古代・中世)	土鍾	56.0	19.1	-	18.21	古代~中世	欠
C54	YA 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	54.1	19.0	-	20.26	古代~中世	完
C55	HC 1 A	その他(古代・中世)	土鍾	52.5	18.2	-	16.22	古代~中世	完
C56	YA 1	その他(古代・中世)	土鍾	50.1	20.3	-	17.83	古代~中世	完
C57	YA 2 B	その他(古代・中世)	土鍾	50.9	17.8	-	12.07	古代~中世	完
C58	YA 1	その他(古代・中世)	土鍾	47.1	19.0	-	14.96	古代~中世	完
C59	HC 2 B	その他(古代・中世)	土鍾	48.5	14.8	-	9.25	古代~中世	完
C60	HC 3	その他(古代・中世)	土鍾	47.7	14.4	-	8.82	古代~中世	完
C61	YA 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	43.4	14.9	-	8.07	古代~中世	完
C62	HC 1 A	その他(古代・中世)	土鍾	52.8	13.8	-	10.63	古代~中世	完
C63	HC 6	その他(古代・中世)	土鍾	53.8	13.2	-	9.47	古代~中世	欠
C64	YA 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	51.3	13.4	-	9.07	古代~中世	完
C65	HC 3	その他(古代・中世)	土鍾	48.6	14.9	-	10.24	古代~中世	完
C66	YA 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	50.0	13.8	-	9.92	古代~中世	完
C67	YA 2 B	その他(古代・中世)	土鍾	48.7	14.9	-	8.31	古代~中世	完
C68	YA 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	51.2	14.0	-	8.31	古代~中世	完
C69	YA 3	その他(古代・中世)	土鍾	44.7	14.1	-	7.84	古代~中世	完
C70	YA 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	48.1	13.8	-	7.95	古代~中世	欠
C71	YA 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	45.5	12.9	-	7.41	古代~中世	欠
C72	HC 1 A	その他(古代・中世)	土鍾	43.3	13.2	-	6.93	古代~中世	欠
C73	YA 3	その他(古代・中世)	土鍾	31.8	12.9	-	4.30	古代~中世	完
C74	YA 2 A	その他(古代・中世)	土鍾	23.2	10.4	-	2.11	古代~中世	欠
C75	HC 6	その他(古代・中世)	風字硯	53.0	54.2	9.7	40.57	古代	欠
C76	YA 2 A	その他(古代・中世)	風字硯	68.3	64.7	10.2	64.18	古代	欠
C77	YA 2 A	その他(古代・中世)	風字硯	81.4	61.4	10.5	94.77	古代	欠
C78	YA 2 B	その他(古代・中世)	風字硯	81.9	47.4	12.0	58.67	古代	欠
C79	YA 2 B	その他(古代・中世)	風字硯	89.7	59.3	12.0	116.51	古代	欠
C80	YA 1	その他(古代・中世)	風字硯	93.3	98.4	11.7	127.44	古代	欠
C81	HC 1 A	その他(古代・中世)	風字硯	69.1	43.7	11.5	49.25	古代	欠
C82	YA 2 B	その他(古代・中世)	須恵器杯転用硯	48.6	6.9	8.7	31.33	古代	欠
C83	YA 2 A	その他(古代・中世)	須恵器杯転用硯	66.1	73.2	7.2	46.80	古代	欠
C84	YA 2 A	その他(古代・中世)	須恵器杯転用硯	79.3	34.8	18.9	31.49	古代	欠
C85	YA 2 A	その他(古代・中世)	須恵器杯蓋転用硯	67.2	67.9	5.6	27.56	古代	欠
C86	HC 2 A	その他(古代・中世)	須恵器杯転用硯	58.2	61.2	15.8	18.34	古代	欠
C87	YA 2 A	その他(古代・中世)	須恵器杯蓋転用硯	37.1	48.8	5.8	11.43	古代	欠
C88	YA 2 A	その他(古代・中世)	須恵器杯転用硯	58.0	46.1	5.9	14.24	古代	墨付着、欠
C89	HC 2 A	その他(古代・中世)	須恵器杯蓋転用硯	47.7	44.4	7.4	14.81	古代	欠

第12表 石器・石製品一覧表

番号	調査区	出土地点	時期	器種	型式	石材	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)
175	HC2B	斜面堆積1	縄文時代後期	楔形石器	I b	サヌカイト	完	30.5	22.5	9.5	6.80
176	HC2B	斜面堆積1	縄文時代後期	楔形石器?	I a	サヌカイト	完	34.5	34.0	7.0	9.91
177	HC2B	斜面堆積1	縄文時代後期	楔形石器	II a	サヌカイト	完	37.5	40.5	20.0	23.10
178	HC2B	斜面堆積1	縄文時代後期	スクレイパー	I	サヌカイト	欠	36.5	40.5	10.0	11.20
179	HC2A	斜面堆積1	縄文時代後期	錘	I a	花崗斑岩	完	43.5	38.0	23.0	50.6
180	HC2A	斜面堆積1	縄文時代後期	錘	I a	安山岩	完	50.0	47.5	17.0	59.9
181	HC2A	斜面堆積1	縄文時代後期	石錘	I c	流紋岩	完	94.0	72.0	18.5	174.8
182	HC2A	斜面堆積1	縄文時代後期	不明		凝灰岩?	完	99.5	24.0	10.0	35.8
183	HC2A	斜面堆積1	縄文時代後期	敲石		安山岩	欠	117.5	62.0	29.0	304.7
184	YA2B	その他	縄文時代後期	スクレイパー	M	サヌカイト	完	64.5	40.5	6.0	19.43
185	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	II b	サヌカイト	欠	17.0	14.5	2.0	0.47
186	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	II a	サヌカイト	欠	14.0	10.0	2.0	0.30
187	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	VI b	サヌカイト	欠	17.5	17.0	2.8	0.48
188	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	錐	I	サヌカイト	欠	26.0	20.5	3.5	1.29
189	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	錐	I	サヌカイト	完	19.5	11.5	3.3	0.56
190	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	錐	I	サヌカイト	欠	14.0	24.5	7.0	1.98
191	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	楔形石器	II a	サヌカイト	完	26.5	18.0	6.0	3.35
192	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	楔形石器	II a	サヌカイト	完	20.0	17.5	5.4	2.54
193	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	ノッチドスクレイパー	I b	サヌカイト	完	55.5	34.0	6.0	11.60
194	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	52.5	50.0	6.5	21.4
195	YA2A	竪穴住居28	弥生時代中期前葉~中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	103.0	40.5	9.5	41.30
196	YA2B	竪穴住居29	弥生時代中期前葉	R. F?	I b	サヌカイト	完	52.5	36.0	4.5	8.83
197	YA2A	建物58	弥生時代前期後葉~中期前葉	鎌	II a	サヌカイト	完	22.0	17.5	2.5	0.83
198	HC1A	土壇129	弥生時代中期前葉	鎌	II a	サヌカイト	欠	20.0	11.5	2.2	0.5
199	HC1A	土壇129	弥生時代中期前葉	鎌	II a	サヌカイト	欠	18.5	13.5	2.4	0.5
200	HC1A	土壇129	弥生時代中期前葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	30.5	21.0	5.5	3.5
201	HC1A	土壇130	弥生時代中期前葉	鎌	I	サヌカイト	欠	15.5	16.5	3.5	1.0
202	YA2A	土壇137	弥生時代前期後葉	鎌	I	サヌカイト	欠	23.5	20.0	3.5	1.8
203	YA2A	土壇145	弥生時代前期後葉	鎌	II a	サヌカイト	完	19.5	17.0	2.2	0.7
204	YA2A	土壇145	弥生時代前期後葉	鎌	I b	サヌカイト	完	25.0	18.0	3.0	1.1
205	YA2A	土壇145	弥生時代前期後葉	錐	I	サヌカイト	完	28.0	18.0	5.5	2.1
206	YA2A	土壇145	弥生時代前期後葉	錐	I	サヌカイト	完	16.0	14.5	3.3	0.7
207	YA2A	土壇145	弥生時代前期後葉	錐	?	サヌカイト	欠	13.0	7.5	4.2	0.4
208	HC6	溝154	弥生時代前期後葉	錐	III	サヌカイト	完	22.5	11.0	5.8	1.6
209	YA2A	溝157	弥生時代前期後葉~中期前葉	砥石			欠	71.5	99.0	35.0	249.2
210	YA2A	溝155	弥生時代中期前葉	鎌	I	サヌカイト	完	21.0	17.0	3.5	1.1
211	YA2A	溝155	弥生時代中期前葉	鎌	II	サヌカイト	欠	14.0	17.0	2.8	0.6
212	YA2A	竪穴住居30	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	I	サヌカイト	完	18.0	12.5	2.5	0.5
213	YA2A	竪穴住居30	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	I	サヌカイト	欠	16.0	12.0	3.3	0.5
214	YA2A	竪穴住居30	弥生時代中期前葉~中葉	錐		サヌカイト	欠	18.5	9.5	3.7	0.7
215	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	砥石?		流紋岩	欠	71.0	35.0	14.3	60.8
216	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	磨石		斑岩	欠	73.0	73.5	60.5	478.9
217	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	鎌	II a	サヌカイト	欠	21.0	13.5	3.4	1.1
218	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	鎌	I	サヌカイト	欠	15.5	9.5	3.0	0.4
219	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	鎌	?	サヌカイト	欠	21.5	15.0	3.5	1.4
220	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	鎌		サヌカイト	完	27.0	19.0	3.0	1.8
221	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	打製石包丁	I B	サヌカイト	欠	16.5	43.0	9.2	4.8
222	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	勾玉		緑色安山岩か緑色頁岩	完	10.0	7.5	2.5	0.3
223	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	管玉未製品		緑色安山岩か緑色頁岩	欠	10.0	8.0	6.0	0.6
224	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	管玉未製品		緑色安山岩か緑色頁岩	欠	16.0	13.5	3.7	1.0
225	HC1A	竪穴住居31	弥生時代中期前葉~後期前葉	管玉未製品		緑色安山岩か緑色頁岩	完	23.5	13.0	7.3	3.6
226	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	I	サヌカイト	欠	35.0	22.5	4.0	3.1
227	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	II a	サヌカイト	完	35.0	23.5	4.5	3.2
228	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	VI	サヌカイト	欠	17.5	17.0	3.7	1.2
229	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	I a	サヌカイト	欠	14.0	20.0	3.0	0.7
230	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	II a	サヌカイト	欠	20.5	18.5	3.0	1.2
231	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	I a	サヌカイト	欠	19.5	16.5	3.0	1.0
232	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	II a	サヌカイト	完	20.5	15.0	3.8	0.9
233	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	I a	サヌカイト	完	19.0	11.0	3.2	0.7
234	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	II b	サヌカイト	欠	21.0	9.5	2.5	0.4
235	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	I a	サヌカイト	欠	18.0	12.0	2.5	0.4
236	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌	II a	サヌカイト	欠	19.0	11.5	3.0	0.4
237	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	鎌?	K	サヌカイト	欠	17.0	12.5	4.0	0.9
238	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐	I	サヌカイト	完	33.5	29.0	4.3	3.4
239	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐	I	サヌカイト	欠	31.5	29.5	6.3	5.2
240	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐	M	サヌカイト	完	30.5	21.5	6.0	3.7
241	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐	M	サヌカイト	完	28.5	15.5	4.9	2.1
242	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐	II	サヌカイト	欠	20.0	9.5	2.6	0.4
243	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐か?	M	サヌカイト	完	43.0	13.0	7.5	3.7
244	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐	III	サヌカイト	完	31.5	10.0	4.6	1.5
245	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐	III	サヌカイト	欠	39.0	14.5	6.0	2.4
246	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉~中葉	錐	III	サヌカイト	欠	23.5	6.0	3.5	0.5

番号	調査区	出土地点	時期	器種	型式	石材	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)
247	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器?	I a	サヌカイト	完	36.0	37.0	8.0	11.0
248	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	24.0	46.0	8.8	8.8
249	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	II a	サヌカイト	欠	32.0	29.5	8.5	9.1
250	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	I b	サヌカイト	欠	30.5	30.5	8.0	6.5
251	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	スクレイパー→楔形石器	I	サヌカイト	完	36.0	25.0	9.0	8.1
252	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	II a	サヌカイト	完	21.0	32.0	7.0	5.4
253	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	20.0	26.5	4.8	3.7
254	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	II b	サヌカイト	完	39.0	19.5	9.5	7.7
255	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	?	サヌカイト	欠	28.5	17.5	11.0	5.1
256	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	II a	サヌカイト	欠	15.0	22.0	6.0	2.3
257	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	22.5	21.0	5.0	2.5
258	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	II a	サヌカイト	完	23.5	15.5	8.5	4.1
259	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器?	I b	サヌカイト	完	22.5	16.0	6.0	2.3
260	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	17.0	18.0	5.5	1.8
261	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	14.0	19.0	4.0	1.1
262	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	19.5	10.5	4.8	1.2
263	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	スクレイパー?	?	サヌカイト	完	86.0	40.0	14.0	35.1
264	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	55.0	30.0	8.0	14.4
265	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	スクレイパー		サヌカイト	完	45.0	29.5	9.4	10.5
266	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	スクレイパー		サヌカイト	完	40.0	43.0	7.0	8.7
267	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	打製石包丁	II A	サヌカイト	欠	56.0	43.0	8.5	19.1
268	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	大型蛤刃石斧		安山岩	欠	87.5	60.5	41.0	256.8
269	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	大型蛤刃石斧柄		閃緑岩(細粒)?	欠	69.5	61.0	41.5	218.4
270	HC1A	竪穴住居32	弥生時代中期前葉～中葉	鏝	I a	斑岩	完	63.0	45.0	13.5	61.8
271	YA2A	竪穴住居34	弥生時代後期前葉	磨製石包丁→ スクレイパー		熔結凝灰岩	欠	48.0	27.0	7.0	12.59
272	YA2A	竪穴住居34	弥生時代後期前葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	24.0	21.5	10.0	5.4
273	YA2A	竪穴住居35	弥生時代中期中葉	打製石包丁	II B	サヌカイト	完	48.0	51.0	10.0	26.86
274	YA2A	竪穴住居35	弥生時代中期中葉	打製石鏃	II	頁岩	完	77.5	40.5	21.0	85.8
275	YA2A	竪穴住居36	弥生時代中期中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	37.5	23.0	7.8	7.6
276	YA2A	建物59	弥生時代後期前葉	扁平両刃石斧未製品		安山岩	欠	62.0	43.0	11.0	56.7
277	HC1A	袋状土城30	弥生時代中期中葉	鏝	I a	サヌカイト	完	38.0	19.0	4.8	3.3
278	HC1A	土城156	弥生時代中期中葉	鏝	?	サヌカイト	欠	23.0	13.0	3.3	1.0
279	HC1A	土城156	弥生時代中期中葉	石匙	II	サヌカイト	欠	33.5	28.0	6.5	5.6
280	HC1A	土城156	弥生時代中期中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	19.5	20.0	4.0	1.6
281	HC1A	土城157	弥生時代中期前葉～中葉	鏝	M	サヌカイト	完	30.5	20.5	5.0	2.5
282	HC1A	土城185	弥生時代中期前葉～中葉	鏝	M	サヌカイト	完	43.0	31.0	8.5	7.4
283	YA2A	土城168	弥生時代中期中葉	鏝	I	サヌカイト	欠	33.0	18.5	6.0	2.88
284	YA2A	土城168	弥生時代中期中葉	スクレイパー?	I	サヌカイト	欠	46.5	31.0	6.5	10.3
285	YA2A	土城168	弥生時代中期中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	52.5	43.5	7.5	16.6
286	YA2A	土城169	弥生時代中期中葉	鏝	I a	サヌカイト	完	19.0	12.5	4.0	0.8
287	YA2A	土城170	弥生時代後期前葉	鏝	II	サヌカイト	完	53.0	26.0	7.0	10.5
288	YA2A	土城173	弥生時代中期中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	欠	46.5	31.0	6.5	10.3
289	HC3E	土城185	弥生時代中期中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	28.5	32.0	12.0	13.30
290	YA2A	柱穴1(P1)	弥生時代中期中葉以降	鏝	I	サヌカイト	完	45.5	15.5	4.0	2.1
291	HC6	溝164	弥生時代中期後葉～後期初頭	楔形石器	I a	サヌカイト	完	30.5	37.0	6.5	9.0
292	YA2B	溝165	弥生時代中期中葉	大型蛤刃石斧		安山岩	完	124.5	62.5	40.5	509.5
293	YA2B	溝165	弥生時代中期中葉	磨製石斧		安山岩	完	100.0	50.5	31.5	221.5
294	YA2B	溝165	弥生時代中期中葉	大型蛤刃石斧		安山岩	欠	100.0	72.0	45.0	538.4
295	YA2B	溝165	弥生時代中期中葉	磨製石包丁	VA	粘板岩	欠	87.0	53.5	9.0	53.5
296	HC2A	溝165	弥生時代中期中葉	鏝	I b	サヌカイト	完	41.5	18.0	8.3	5.9
297	YA2B	溝165	弥生時代中期中葉	スクレイパー?	I b	サヌカイト	完	64.0	35.0	10.0	27.41
298	YA2B	溝165	弥生時代中期中葉	石匙	I	サヌカイト	欠	48.0	54.0	10.0	16.19
299	YA2B	溝165	弥生時代中期中葉	核		サヌカイト	完	145.0	111.5	27.0	473.33
300	YA2B	溝165	弥生時代中期中葉	打製石鏃	II	頁岩	欠	124.0	60.0	21.5	198.7
301	YA3	溝166	弥生時代中期中葉	打製石包丁	II A	サヌカイト	欠	58.0	50.5	13.5	34.0
302	YA3	溝166	弥生時代中期中葉	磨製石包丁→再利用		頁岩か流紋岩	欠	70.0	44.0	7.5	29.7
303	HC2B	溝166	弥生時代中期中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完	61.5	62.5	20.7	83.9
304	YA3	溝166	弥生時代中期中葉	楔形石器	I a	サヌカイト	完?	62.5	32.5	13.0	22.2
305	YA3	溝166	弥生時代中期中葉	槍		サヌカイト	欠	74.0	33.0	12.6	44.6
306	YA3	溝166	弥生時代中期中葉	大型蛤刃石斧		安山岩	欠	140.0	66.0	50.5	834.1
307	YA3	溝166	弥生時代中期中葉	敲石		花崗岩	欠	62.0	75.0	50.5	274.1
308	HC2B	溝166	弥生時代中期中葉	敲石?	I B	玄武岩	完	64.0	52.5	41.5	187.1
309	YA3	溝166	弥生時代中期中葉	砥石		細粒花崗岩	完	127.5	122.5	61.0	1212.6
310	YA3	溝166	弥生時代中期中葉	砥石		細粒花崗岩	完	275.0	186.0	111.5	6100.0
311	YA4	溝169	弥生時代中期中葉	スクレイパー	M	サヌカイト	完	58.0	50.5	14.0	34.54
312	HC3A	溝175	弥生時代後期	R・F?		サヌカイト	欠	40.0	36.5	5.5	8.4
313	HC5C	護岸状遺構	弥生時代後期前葉	打製石包丁	I B	サヌカイト	完	84.0	47.0	9.2	45.8
314	HC5C	護岸状遺構	弥生時代後期前葉	R・F		サヌカイト	完	38.5	39.5	6.5	10.4
315	YA2A	その他		鏝	I a	サヌカイト	完	16.0	15.0	3.5	0.7
316	YA2B	その他		鏝	I a	サヌカイト	欠	18.5	17.5	3.2	0.78
317	YA2A	その他		鏝	I a	サヌカイト	欠	19.0	13.0	3.0	0.8
318	HC6	その他		鏝	I a	サヌカイト	欠	18.5	11.5	3.5	0.71
319	HC1A	その他		鏝	I a	サヌカイト	欠	19.0	11.0	2.8	0.7

番号	調査区	出土地点	時期	器種	型式	石材	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)
320	YA2A	その他		鎌	Ia	サヌカイト	完	20.5	16.5	3.2	1.0
321	YA2A	その他		鎌	Ia	サヌカイト	完	22.5	15.5	4.5	1.2
322	HC2B	その他		鎌	Ia	サヌカイト	欠	21.5	16.5	3.2	1.10
323	YA3	その他		鎌	Ia	サヌカイト	完	23.5	10.0	2.4	0.59
324	YA2A	その他		鎌	Ia	サヌカイト	欠	24.5	19.5	4.3	1.9
325	YA2A	その他		鎌	Ia	サヌカイト	欠	25.0	16.5	3.5	1.17
326	YA2A	その他		鎌	Ia	サヌカイト	完	31.0	18.5	5.1	2.7
327	YA2A	その他		鎌	Ia	サヌカイト	欠	34.0	20.0	4.9	2.8
328	YA2A	その他		鎌	Ia	サヌカイト	完	35.5	17.5	6.4	3.31
329	YA2A	その他		磨製石鎌		粘板岩(スレート)	完	39.0	13.5	2.5	1.8
330	YA2A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	完	16.0	11.5	3.0	0.5
331	HC1A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	欠	17.0	14.5	3.0	0.5
332	YA2A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	欠	18.0	12.0	2.6	0.5
333	YA2A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	完	18.0	16.5	3.5	0.85
334	HC1A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	完	18.0	14.5	2.5	0.5
335	YA2A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	完	19.0	15.0	2.5	0.84
336	YA2A	その他		鎌	IIb	サヌカイト	完	19.0	14.0	3.1	0.6
337	HC1A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	欠	20.0	20.5	4.5	1.7
338	YA2A	その他		鎌	IIb	サヌカイト	完	21.0	15.0	3.2	0.8
339	HC1A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	欠	21.0	15.5	3.7	1.1
340	YA2A	その他		鎌	IIb	サヌカイト	完	22.5	18.0	3.0	1.0
341	YA2A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	完	25.0	16.0	3.5	1.0
342	YA1	その他		鎌	IIa	サヌカイト	完	27.5	19.0	4.2	1.77
343	HC3C	その他		鎌	IIa	サヌカイト	完	15.0	28.5	3.3	1.0
344	HC1A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	欠	30.0	19.5	4.5	1.5
345	YA2A	その他		鎌	IIa	サヌカイト	完	30.0	21.5	4.7	2.8
346	YA3	その他		鎌	II	サヌカイト	欠	21.0	12.0	2.0	0.34
347	HC1A	その他		鎌	VIa	サヌカイト	欠	19.5	12.5	2.5	0.4
348	YA2A	その他		鎌	VIb	サヌカイト	欠	20.0	16.5	3.2	0.75
349	YA2A	その他		鎌	VIb	サヌカイト	欠	23.5	18.0	3.7	1.4
350	YA2A	その他		鎌	VII	サヌカイト	欠	29.5	17.5	3.3	1.22
351	YA2A	その他		鎌	III	サヌカイト	完	18.0	11.5	2.1	0.45
352	YA2A	その他		鎌	VIII	サヌカイト	完	30.0	12.5	2.9	1.13
353	YA2A	その他		鎌	VIII	サヌカイト	完	33.2	13.1	4.5	1.50
354	YA2A	その他		鎌	VIII	サヌカイト	欠	36.0	13.0	5.0	2.5
355	YA2A	その他		鎌末製品か錐	VIII	サヌカイト	完	39.0	13.0	4.0	2.4
356	YA2A	その他		錐	II	サヌカイト	完	29.0	22.0	8.0	2.8
357	HC1A	その他		錐	II	サヌカイト	完	42.0	24.0	8.0	6.8
358	YA2A	その他		錐	II	サヌカイト	完	43.0	30.5	6.0	5.6
359	YA2A	その他		錐	II	サヌカイト	完	43.5	40.0	5.6	6.45
360	HC1A	その他		錐	III	サヌカイト	完	75.0	22.0	9.4	11.1
361	YA2A	その他		錐	II	サヌカイト	完	16.0	12.5	3.3	0.6
362	HC1A	その他		錐	IV	サヌカイト	完	17.5	14.5	3.0	1.0
363	YA2A	その他		錐?	II	サヌカイト	完	20.0	14.0	4.0	1.0
364	HC1A	その他		錐	III	サヌカイト	完	21.0	12.0	3.5	0.9
365	HC1A	その他		錐	I	サヌカイト	完	25.5	14.0	5.3	1.4
366	HC1A	その他		錐	I?	サヌカイト	完	25.5	19.5	3.5	1.4
367	YA2A	その他		錐?	III	サヌカイト	完	31.0	8.5	4.7	1.80
368	YA2A	その他		錐	III	サヌカイト	欠	36.5	10.0	5.5	2.2
369	YA2A	その他		錐	IV	サヌカイト	完	39.0	18.5	7.0	4.20
370	YA2A	その他		錐	III	サヌカイト	先端欠	43.0	12.0	6.5	4.4
371	YA2A	その他		打製石包丁	II B	サヌカイト	完	132.0	59.0	12.5	105.55
372	YA3	その他		打製石包丁	IB	サヌカイト	欠	46.5	43.5	13.0	34.39
373	YA2A	その他		打製石包丁	IB	サヌカイト	欠	36.5	50.5	8.0	21.6
374	HC2B	その他		打製石包丁	IB	玄武岩?	完	95.0	45.0	15.0	66.2
375	YA2A	その他		打製石包丁	IB	サヌカイト	完	94.0	43.5	11.0	46.6
376	YA2A	その他		打製石包丁	IB	サヌカイト	欠	24.5	28.5	6.0	5.4
377	HC2B	その他		打製石包丁	IB	サヌカイト	完	82.0	48.0	10.5	43.9
378	YA2A	その他		打製石包丁	IB	サヌカイト	欠	92.0	50.5	11.0	55.4
379	YA2A	その他		打製石包丁	IB	サヌカイト	欠	55.0	35.5	13.0	25.98
380	YA2A	その他		打製石包丁	IA	サヌカイト	欠	32.0	32.0	8.5	10.4
381	YA2A	その他		打製石包丁	II B	サヌカイト	欠	41.5	52.5	8.0	20.4
382	HC1A	その他		打製石包丁	IB	サヌカイト	欠	54.0	64.5	9.0	34.8
383	YA2A	その他		打製石包丁	II	サヌカイト	欠	89.0	54.5	11.0	50.9
384	YA2A	その他		磨製石包丁	V	粘板岩?	欠	54.5	5.0	7.0	28.0
385	YA2A	その他		磨製石包丁	V	緑色片岩	欠	45.0	50.5	10.5	41.08
386	YA3	その他		石匙	II	サヌカイト	完	72.5	37.5	6.0	16.26
387	YA2A	その他		スクレイパー	II b	サヌカイト	欠	46.0	47.5	7.0	19.9
388	YA2A	その他		スクレイパー	II b	サヌカイト	欠	53.0	51.0	12.0	36.6
389	YA2A	その他		スクレイパー	II b	サヌカイト	完	62.0	69.0	15.0	68.8
390	HC1A	その他		スクレイパー	II b	サヌカイト	欠	60.0	36.5	17.0	34.6
391	YA2A	その他		スクレイパー	IA	サヌカイト	完	51.0	43.0	5.0	13.6
392	YA2A	その他		スクレイパー	II b	サヌカイト	完	56.5	43.0	6.0	18.9
393	YA2A	その他		スクレイパー	II b	サヌカイト	欠	63.5	48.5	11.0	37.07

番号	調査区	出土地点	時期	器種	型式	石材	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)
394	YA2A	その他		スクレイパー	I a	サヌカイト	完	39.5	30.5	5.0	9.1
395	YK	その他		スクレイパー	I a	サヌカイト	欠	56.0	29.0	10.2	18.04
396	YA2A	その他		スクレイパー	I b	サヌカイト	完	60.0	33.5	14.5	33.7
397	YA2B	その他		スクレイパー	I a	サヌカイト	完	49.5	40.0	12.0	28.14
398	YA2A	その他		スクレイパー	I	サヌカイト	完	52.0	36.5	8.0	15.22
399	YA2A	その他		スクレイパー	I b	サヌカイト	完	64.5	54.0	9.5	31.9
400	YA2A	その他		スクレイパー	N	サヌカイト	完	68.0	39.0	5.0	13.7
401	HC4A	その他		R. F	I a	サヌカイト	欠	77.0	50.0	15.0	46.1
402	YA2A	その他		尖頭器		サヌカイト	欠	35.0	17.5	7.5	4.7
403	YA2A	その他		尖頭器		サヌカイト	欠	38.0	25.5	8.7	7.0
404	YA2B	その他		尖頭器		サヌカイト	欠	57.5	25.0	10.0	12.42
405	YA2A	その他		尖頭器		サヌカイト	完	52.5	31.5	11.0	18.89
406	HC1A	その他		打製石包丁?→楔形石器	II a	サヌカイト	完	26.5	24.0	9.5	5.7
407	YA2A	その他		楔形石器		サヌカイト	完	37.5	23.5	7.5	7.0
408	HC1A	その他		楔形石器	II a	サヌカイト	完	21.0	33.0	6.2	6.2
409	YA2A	その他		楔形石器	I a	サヌカイト	完	25.5	21.0	4.5	2.8
410	HC1A	その他		楔形石器	I a	サヌカイト	完	27.0	25.0	6.5	4.8
411	YA2A	その他		打製石包丁→楔形石器	II a	サヌカイト	完	37.0	23.0	9.0	10.3
412	YA2A	その他		楔形石器?	II a	サヌカイト	完	40.5	28.5	9.5	12.29
413	HC1A	その他		楔形石器	II a	サヌカイト	完	24.5	16.5	4.5	2.3
414	YA2A	その他		楔形石器	I a	サヌカイト	完	32.0	21.0	7.5	5.5
415	YA2A	その他		楔形石器	I a	サヌカイト	完	27.0	19.0	7.5	4.2
416	HC1A	その他		楔形石器	I a	サヌカイト	完	38.0	24.0	8.5	7.4
417	YA2A	その他		楔形石器	II a	サヌカイト	完	38.5	27.5	15.5	18.8
418	YA2A	その他		楔形石器	II a	サヌカイト	完	42.0	24.5	12.0	12.6
419	YA2A	その他		楔形石器	I a	サヌカイト	完	31.5	26.0	7.0	7.7
420	YA2A	その他		打製石包丁→楔形石器	II a	サヌカイト	完	50.0	38.0	12.5	33.3
421	YA2A	その他		楔形石器?	I a	サヌカイト	完	63.0	46.0	17.0	54.8
422	HC1A	その他		楔形石器	II a	サヌカイト	完	78.0	77.0	16.0	108.4
423	YA2A	その他		核		サヌカイト	完	126.0	89.5	32.0	499.97
424	YA3	その他		不明		サヌカイト	完	32.5	28.0	7.4	7.69
425	YA2A	その他		楔形石器	III	サヌカイト	完	41.0	24.0	9.0	13.0
426	YA2B	その他		残核		サヌカイト		59.5	39.0	23.0	62.66
427	YA2A	その他		すれ石		サヌカイト	欠	38.5	21.5	7.5	8.0
428	HC1A	その他		打製石鏃	I	流紋岩	欠	121.0	67.0	28.5	293.3
429	HC6	その他		打製石鏃	I	砂質片岩(ウンモ片岩)	欠	111.0	49.0	21.5	155.4
430	HC1A	その他		打製石鏃		石英安山岩	欠	80.5	69.0	23.5	180.1
431	YA2A	その他		扁平片刃石斧未製品		安山岩	欠	96.0	72.0	14.0	149.1
432	YA2A	その他		勾玉		緑色安山岩か緑色頁岩	欠	18.0	11.0	3.8	0.8
433	YA2A	その他		管玉		?	欠	16.5	10.0	7.0	1.5
434	YA2A	その他		凹み石		花崗閃緑岩	完	83.0	83.0	53.0	617.7
435	YK	その他		錘	III a	結晶質の流紋岩	完	88.0	65.0	49.0	394.6
436	YA2A	その他		斧		安山岩	欠	119.0	68.0	45.0	627.7
437	YA2A	その他		磨製石斧		安山岩	欠	73.0	71.5	32.0	199.1
438	YA2B	その他		大型蛤刃石斧		安山岩	欠	76.0	40.5	19.5	469.0
439	YA2B	その他		敲石か		流紋岩	欠	81.0	69.0	13.0	60.5
440	YA2A	その他		石斧か		流紋岩か	完	111.0	49.5	21.0	165.1
441	YA2A	その他		磨製石斧柄		安山岩?	欠	48.0	57.0	40.5	147.79
442	YA2B	その他		大型蛤刃石斧柄		安山岩	欠	168.5	75.0	52.5	1263.9
443	HC1A	その他		磨製石斧柄		安山岩	欠	86.5	42.0	32.5	192.9
444	YA2A	その他		磨製石斧柄		安山岩	欠	99.0	63.5	48.5	436.69
445	YA2A	その他		方柱状片刃石斧?		安山岩	欠	60.5	23.5	30.0	62.0
446	YA2A	その他		石斧未製品		安山岩	欠	123.5	101.0	57.0	939.77
447	HC1A	その他		ノミ状石器		頁岩	欠	85.0	16.0	13.5	22.0
448	YA2A	その他		砥石		頁岩~粘板岩	欠	41.5	17.0	14.0	17.1
449	YA2A	その他		砥石		流紋岩質凝灰岩	欠	63.0	23.0	15.5	24.1
450	HC5B	その他		砥石		泥岩?	完	80.5	32.0	27.0	105.0
451	HC1A	その他		砥石		流紋岩	欠	107.0	81.5	40.5	430.5
452	YA3	竪穴住居41	古墳時代後期	砥石		半花崗岩	欠	114.5	77.5	67.5	555.8
453	YA3	竪穴住居41	古墳時代後期	管玉		流紋岩	欠	26.0	9.4	8.5	3.4
454	YA3	竪穴住居42	古墳時代前期前葉	台石兼砥石		細粒花崗岩	完	261.0	167.0	165.0	8500.0
455	YK	竪穴住居44・45	古墳時代前期前葉・古墳時代後期	管玉未製品		滑石	完	22.5	6.0	6.0	1.3
456	YA2A	溝176	7C前半	敲石か		?	完	71.5	40.5	21.0	90.2
457	YA2A	溝179	古墳時代前期前葉	管玉		碧玉	完	24.0	7.0	7.2	1.92
458	YA2A	溝179	古墳時代前期前葉	砥石		流紋岩	完	89.5	71.0	37.0	279.32
459	YA2A	溝179	古墳時代前期前葉	磨石		安山岩	欠	92.0	81.0	36.0	344.4
460	YA2A	溝179	古墳時代前期前葉	敲石		流紋岩	欠	114	99.5	70.5	1062.8
461	YA3	柱穴5(P5)	平安時代	砥石		S392と同じ	完	109.5	115.5	76.0	808.4
462	HC1A	櫛列状遺構18	奈良時代~平安時代前期	紡錘車		滑岩	欠		35.0	21.5	19.3

第13表 土器観察表

掲載番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
1560	縄文土器	浅鉢	口唇部ミガキ。口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ミガキ。胴部指オサエ、ナデ。	暗灰黄 2.5Y4/2	
1561	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部沈線、沈線内円形刺突2個、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	巻貝条痕のちナデ。	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。
1562	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ、円形刺突。口縁部巻貝による沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。胴部巻貝条痕、ナデ。	口縁部指オサエ、ナデ、巻貝条痕。胴部指オサエ、ナデ、ミガキ。	にぶい黄 2.5Y6/3	
1563	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。体部沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。波状口縁。
1564	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部沈線、磨消縄文(LR)。	巻貝条痕。	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。波状口縁。
1565	縄文土器	深鉢	口唇部ミガキ。口縁部沈線、磨消縄文(RL)。	ミガキ。	にぶい黄 2.5Y6/3	傾き不詳、1566と同一個体。
1566	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部沈線、磨消縄文(RL)。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。
1567	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文?)。	ナデ。	灰黄褐 10YR5/2	傾き不詳。
1568	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部沈線、磨消縄文(RL?)。	ナデ?	灰白 7.5YR8/1	傾き、上下不詳。
1569	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1570	縄文土器	深鉢	口唇部ミガキ?。沈線。磨消縄文(細かい縄文RL)。	巻貝条痕、ナデ。	暗灰黄 2.5Y5/2	傾き不詳。
1571	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部磨減、沈線。	ナデ?	灰色 2.5Y6/2	1603と胎土・焼成類似。
1572	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ?。沈線。磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデかミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。
1573	縄文土器	深鉢	波状口縁?。口唇部ナデ。口縁部沈線、磨消縄文。	巻貝条痕、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	傾き不詳。波状口縁。
1574	縄文土器	深鉢	波状口縁?。口唇部ナデかミガキ。口縁部沈線、磨消縄文?。	ナデかミガキ。	灰白 10YR8/1	傾き不詳。
1575	縄文土器	深鉢	口唇部磨減。口縁部磨減、沈線、縄文有無不詳。	ナデかミガキ。	灰色 2.5Y8/1	傾き不詳、1577と接合。
1576	縄文土器	深鉢	口唇部刻目?。口縁部沈線、磨消縄文。	指オサエ、ナデ。	灰白 5Y7/1	傾き不詳。
1577	縄文土器	深鉢	磨減、沈線、磨消縄文?。	ナデ。	灰白 2.5Y8/1	傾き不詳。
1578	縄文土器	深鉢	口唇部ミガキ。口縁部沈線、磨消縄文、ミガキ。	ナデ、ミガキ。	黒 10YR2/1	傾き不詳。
1579	縄文土器	深鉢	口唇部ミガキ。口縁部沈線、ミガキ。	ミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。
1580	縄文土器	深鉢	磨減、沈線。	磨減。	にぶい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
1581	縄文土器	深鉢	沈線内円形刺突、磨消縄文(RL)。	ナデ。	にぶい赤褐 5YR5/4	傾き不詳。波状口縁、1621・1622と同一個体。
1582	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文?。	磨減。	にぶい黄褐 10YR5/3	内面煤。
1583	縄文土器	深鉢	口唇部沈線。口縁部沈線、ミガキ。	ミガキ。	褐灰 10YR5/1	傾き不詳、1584と接合。
1584	縄文土器	深鉢	口唇部沈線、磨消縄文。入組文。	ミガキ。	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。
1585	縄文土器	浅鉢	口唇部ナデ。胴部・底部沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	指オサエ、ミガキ。	にぶい黄褐 10YR5/3	傾き不詳。
1586	縄文土器	浅鉢	口唇部ナデ。口縁部磨減、沈線。	指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1587	縄文土器	浅鉢?	口縁部ナデ、細かい胴部縄文(RL)。	ナデ、ミガキ?	黄灰 2.5Y6/1	傾き不詳。
1588	縄文土器	浅鉢?	波状口縁。口縁部指オサエ、ナデ、胴部ナデ。	指オサエ、ナデ。	褐 10YR4/1	傾き不詳。
1589	縄文土器	深鉢	細かい縄文(RL)。	指オサエ、ナデ。	灰白 10YR7/1	傾き不詳。
1590	縄文土器	深鉢	口唇部縄文(RL)。口縁部縄文(RL)、ナデ。	ナデ?	暗灰黄 2.5Y5/2	傾き不詳。
1591	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(RL)。	ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	傾き不詳。
1592	縄文土器	浅鉢	口唇部沈線、ナデ。口縁部沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	指オサエ、ナデ、ミガキ。	灰黄 2.5Y5/1	傾き不詳。
1593	縄文土器	深鉢	波状口縁、口唇部沈線、細かい縄文(RL)。頸部ナデ、沈線。	ミガキ。	淡黄 2.5Y8/4	波状口縁。
1594	縄文土器	深鉢	口唇部深い沈線、細かい縄文(RL)?か巻貝による擬縄文?。頸部ナデ?	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/4	傾き、上下不詳。
1595	縄文土器	深鉢	口縁部沈線?3本。口縁部指オサエ、ナデ、ミガキ、沈線。	ナデかミガキ。	褐灰 10YR6/1	傾き不詳。
1596	縄文土器	壺	ナデ、穿孔。		灰白 2.5Y8/1	
1597	縄文土器	深鉢	ナデ、沈線、縄文?。	指オサエ、沈線。	灰 5Y4/1	
1598	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	巻貝条痕のちナデ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳、1599~1601と同一個体。
1599	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ、ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/2	傾き不詳。
1600	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ?	灰白 10YR8/2	傾き不詳。
1601	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	巻貝条痕のちナデ。	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。
1602	縄文土器	浅鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文、充填)。	巻貝条痕?、ナデ?	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。
1603	縄文土器	深鉢	沈線、ナデ?	磨減。	灰黄褐 10YR6/2	傾き、上下不詳。
1604	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文?)。	ナデ?	暗灰黄 2.5Y5/2	
1605	縄文土器	深鉢	沈線、ミガキ。	ナデ?	暗灰黄 2.5Y5/2	傾き不詳。波状口縁。
1606	縄文土器	浅鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ミガキ。	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。
1607	縄文土器	深鉢	沈線、縄文。	ナデ?	灰黄褐 10YR6/2	傾き、上下不詳。
1608	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(RL)。	ナデ?	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。
1609	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(RL)。	ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。
1610	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ?	暗灰黄 2.5Y5/2	傾き、上下不詳。
1611	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/3	傾き、上下不詳。
1612	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	傾き、上下不詳。
1613	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。
1614	縄文土器	深鉢	ミガキ、沈線、沈線内刺突、磨消縄文(RL)。	ミガキ。	灰黄褐 10YR4/2	
1615	縄文土器	浅鉢	沈線、円形刺突、縄文(RL?)。	ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き上下不詳。
1616	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(RL)。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。
1617	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデかミガキ。	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。
1618	縄文土器	深鉢	沈線、磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	傾き不詳。
1619	縄文土器	深鉢	沈線、ミガキ。	ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。

掲載番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
1620	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ。巻貝条痕。	淡黄 2.5Y8/3	傾き不詳。
1621	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文(R.L)。	巻貝条痕のちミガキ?。	暗灰黄 2.5Y5/2	傾き不詳。1581・1622と同一個体。
1622	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文(R.L)。	巻貝条痕のちミガキ?。	灰褐 7.5YR5/2	傾き不詳。内面煤。1621と接合。
1623	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	巻貝条痕。	灰白 10YR8/2	傾き不詳。
1624	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文(巻貝による擬縄文)。	ナデ、ミガキ。	灰白 10YR8/2	傾き、上下不詳。内面被熱。
1625	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文?。	ナデ。	にぶい黄褐 10YR5/3	
1626	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文(R.L)。	指オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。
1627	縄文土器	浅鉢	沈線。ミガキ。	ミガキ?。	灰黄 2.5Y6/2	傾き不詳。
1628	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文(R.L)。	ナデ。	灰白 10YR8/2	傾き不詳。
1629	縄文土器	深鉢	磨滅。沈線。	磨滅。	明赤褐 5YR6/3	傾き不詳。
1630	縄文土器	深鉢	沈線。ミガキ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR5/3	傾き不詳。
1631	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文(R.L)。	ミガキ。	褐灰 10YR5/1	傾き、上下不詳。
1632	縄文土器	深鉢	沈線。磨消縄文。	指オサエ、ミガキ?。	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き、上下不詳。
1633	縄文土器	深鉢	細かい縄文(R.L)、ミガキ。	ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	傾き不詳。1634と類似。
1634	縄文土器	深鉢	細かい縄文(R.L)。	ナデかミガキ。	にぶい黄 2.5Y6/3	傾き、上下不詳。
1635	縄文土器	深鉢	縄文(R.L?)とナデ。	ナデ。	暗灰黄 2.5Y5/2	傾き不詳。
1636	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。胴部巻貝条痕。	巻貝条痕、ナデ。	にぶい黄褐 10YR5/3	傾き不詳。
1637	縄文土器	深鉢	口唇部指オサエ、ナデ。口縁部指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
1638	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕。	指オサエ。巻貝条痕のちナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1639	縄文土器	深鉢	口唇部指オサエ、ナデ。口縁部磨滅、ナデか条痕。	指オサエ、ナデ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
1640	縄文土器	深鉢	口縁部ナデ。口縁部条痕?。	ナデ。	にぶい黄 2.5Y6/3	傾き不詳。
1641	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ?。口縁部巻貝条痕?。	ナデかミガキ。	淡黄 2.5Y8/3	精製
1642	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部磨滅。巻貝条痕。	巻貝条痕のちナデ。	灰黄褐 10YR6/2	黒斑有り。傾き不詳。
1643	縄文土器	深鉢	口唇部・口縁部巻貝条痕。	磨滅、ナデ?。	褐灰 10YR4/1	傾き不詳。
1644	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕、ナデ。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。精製。
1645	縄文土器	深鉢	口唇部巻貝条痕、ナデ。口縁部巻貝条痕。	指オサエ、ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。
1646	縄文土器	浅鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕。	巻貝条痕のちナデ。	褐灰 10YR4/1	
1647	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部磨滅。	指オサエ、ナデ。	にぶい黄褐 10YR5/3	
1648	縄文土器	深鉢	口唇部・口縁部巻貝条痕、ナデ。	巻貝条痕のちナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
1649	縄文土器	深鉢	磨滅。ナデ?。	条痕。	にぶい黄橙 10YR7/2	傾き不詳。
1650	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕。	ナデ、ミガキ。	黄灰 2.5Y5/1	傾き不詳。
1651	縄文土器	深鉢	口唇部巻貝条痕。口縁部巻貝条痕、ナデ。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。
1652	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ?。口縁部巻貝条痕。	巻貝条痕のちナデ。	にぶい褐 7.5YR6/3	傾き不詳。
1653	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部ナデ。	磨滅。	橙 7.5YR7/6	
1654	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部条痕(原体不詳)。	ナデ。	暗灰黄 10YR5/2	
1655	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕。	磨滅。	にぶい褐 7.5YR6/3	傾き不詳。
1656	縄文土器	深鉢	条痕(原体不詳)。	条痕(原体不詳)のちナデ、ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1657	縄文土器	深鉢	口唇部巻貝条痕、ナデ。口縁部巻貝条痕。	巻貝条痕。	にぶい黄橙 10YR7/4	
1658	縄文土器	深鉢	口唇部ミガキ。口縁部ミガキ。	ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	
1659	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕。	ナデ、ミガキ。	にぶい橙 7.5YR7/4	傾き不詳。
1660	縄文土器	深鉢	口唇部指オサエ、ナデ。口縁部巻貝条痕?。	指オサエ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1661	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部貝殻条痕。	巻貝条痕のちナデ。	灰黄褐 10YR5/2	傾き不詳。
1662	縄文土器	深鉢	ナデ?。	ナデ?。	暗灰黄 2.5Y5/2	
1663	縄文土器	深鉢	口唇部磨滅、ナデ?。口縁部巻貝条痕、ナデ。	指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	傾き不詳。
1664	縄文土器	深鉢	磨滅。巻貝条痕?。	磨滅、ナデ?。	灰黄褐 10YR6/2	傾き、上下不詳。
1665	縄文土器	深鉢	波状口縁。口唇部磨滅。口縁部磨滅。	巻貝条痕?のちナデ。	黄灰 2.5Y5/1	傾き不詳。
1666	縄文土器	深鉢	磨滅。巻貝条痕、ナデ?。	磨滅、ナデ?。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。
1667	縄文土器	浅鉢	口唇部、口縁部ミガキ?。	ミガキ?。	にぶい黄橙 10YR7/2	傾き不詳。
1668	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕のちナデ。	丁寧なナデ。	灰褐 7.5YR5/2	傾き不詳。
1669	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕。	巻貝条痕のちナデ。	黒褐 10YR3/2	
1670	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部巻貝条痕。	磨滅、指オサエ、ナデ?。	にぶい黄橙 10YR7/2	傾き不詳。
1671	縄文土器	深鉢	口唇部磨滅、ナデ?。口縁部巻貝条痕。	ナデ。	にぶい黄褐 10YR5/3	傾き不詳。
1672	縄文土器	深鉢	口唇部ナデ。口縁部磨滅。	巻貝条痕。	にぶい黄橙 10YR7/4	
1673	縄文土器	浅鉢	波状口縁。巻貝条痕のちミガキ。	ナデ、ミガキ。	浅黄橙 10YR8/3	傾き不詳。
1674	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。口縁部巻貝条痕。	指オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	傾き不詳。
1675	縄文土器	浅鉢	口唇部刻目。口縁部巻貝条痕。	ミガキ。	浅黄 2.5Y7/3	傾き不詳。
1676	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。口縁部磨滅、ミガキ?。	ナデ?。	灰白 2.5Y7/1	傾き不詳。
1677	縄文土器	浅鉢	口唇部ミガキ。口縁部ミガキ。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。1679と同一個体。
1678	縄文土器	浅鉢	口唇部・口縁部ナデ?。	巻貝条痕、ナデ。	暗灰黄 2.5Y4/2	傾き不詳。
1679	縄文土器	浅鉢	波状口縁。ミガキ。	ミガキ。	にぶい黄褐 10YR5/3	波状口縁。傾き不詳。
1680	縄文土器	浅鉢	口唇部ミガキ。口縁部ナデかミガキ。	ミガキ。	灰 7.5Y5/1	傾き不詳。
1681	縄文土器	浅鉢	口縁部ナデ。指オサエ。巻貝条痕のちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	1682と同一個体。平面方形か。
1682	縄文土器	浅鉢	波状口縁。口縁部ミガキ。円形穿孔。胴部ミガキ。	磨滅、ミガキ?。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。波状口
1683	縄文土器	深鉢	巻貝条痕。	巻貝条痕。	灰黄 2.5Y6/2	傾き不詳。
1684	縄文土器	深鉢	巻貝条痕、ナデ?。	巻貝条痕、ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	
1685	縄文土器	深鉢	巻貝条痕。	巻貝条痕のちナデ。	灰黄褐 10YR5/2	傾き不詳。
1686	縄文土器	深鉢	巻貝条痕?。	巻貝条痕、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。
1687	縄文土器	深鉢	巻貝条痕。	ナデ、ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	傾き不詳。
1688	縄文土器	深鉢	巻貝条痕。	巻貝条痕。	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。
1689	縄文土器	深鉢	巻貝条痕。	ナデ。粗痕?。	灰黄褐 10YR5/2	傾き、上下不詳。
1690	縄文土器	深鉢	巻貝条痕、ナデ。	ナデ?。	浅黄橙 7.5YR8/4	傾き不詳。

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1691	縄文土器	深鉢	磨滅。ナデ?	指オサエ、巻貝条痕。	にぶい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
1692	縄文土器	深鉢	巻貝条痕。	ナデ。	黄灰 2.5Y6/1	傾き不詳。
1693	縄文土器	深鉢	巻貝条痕。	ナデ。	にぶい赤褐 5YR5/4	傾き、上下不詳。 1694と同一個体か。
1694	縄文土器	深鉢	巻貝条痕。	ナデ。	にぶい褐 7.5YR5/3	傾き、上下不詳。
1695	縄文土器	深鉢	巻貝条痕、1本ずつの条痕。	ナデ?	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。
1696	縄文土器	深鉢	条痕。	ミガキ。	灰黄 2.5Y6/2	傾き不詳。
1697	縄文土器	深鉢	沈線。	ナデ、ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/2	傾き、上下不詳。 1698と同一個体か。
1698	縄文土器	深鉢	ミガキ、沈線。	ミガキ。	暗灰黄 2.5Y5/2	傾き不詳。
1699	縄文土器	深鉢	ナデ、沈線。	ミガキ。	にぶい黄褐 10YR5/3	傾き不詳。
1700	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕?	ナデ?	橙 7.5YR7/6	傾き不詳。
1701	縄文土器	深鉢	ケズリ。	アルカ属貝条痕。	浅黄 2.5Y7/3	傾き不詳。
1702	縄文土器	深鉢	ヨコのケズリのちナデ?	ミガキ?	にぶい黄橙 10YR7/4	傾き、上下不詳。
1703	縄文土器	浅鉢	ヨコナデ、ミガキ。	巻貝条痕のちナデ。	浅黄 2.5Y7/3	
1704	縄文土器	深鉢	胴部巻貝条痕、底部ナデ。	巻貝条痕。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1705	縄文土器	深鉢	胴部巻貝条痕のちナデ、底部磨滅。	胴部指オサエ、ナデ、巻貝条痕、底部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1706	縄文土器	深鉢	胴部・底部指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
1707	縄文土器	深鉢	巻貝条痕のちナデ?・ミガキ?	指オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
1708	縄文土器	深鉢	胴部指オサエ、ナデ、底部磨滅。	ナデ?	にぶい黄褐 10YR5/4	
1709	縄文土器	深鉢	胴部、底部ナデ、底部縁条痕(原体不詳)。	指オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y7/1	
1710	縄文土器	深鉢	ナデ?	ナデ?	灰黄褐 10YR6/2	
1711	縄文土器	深鉢	胴部巻貝条痕、ナデ、底部磨滅。	指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
1712	縄文土器	深鉢	磨滅。	ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	傾き不詳。
1713	縄文土器	深鉢	磨滅。ナデ。	ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/2	
1714	縄文土器	深鉢	胴部指オサエ、ナデ、底部ミガキ?、中央くぼみ。	ナデ。	にぶい黄 2.5Y6/3	
1715	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕のちナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1716	縄文土器	深鉢	頸部刺突文、胴部ケズリ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。
1717	縄文土器	深鉢	頸部タテとヨコの刺突文、ナデ。	ナデ。	にぶい黄 2.5Y6/3	傾き不詳。
1718	縄文土器	浅鉢	口縁部ヨコナデ、段、口縁部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、口縁部ミガキ。	灰黄 2.5Y6/2	
1719	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	黒 10YR2/1	傾き不詳。
1720	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
1721	縄文土器	浅鉢	胴部ケズリ、底部周縁指オサエ。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1722	縄文土器	深鉢	磨滅。ナデ、沈線。縄文有無不詳。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	傾き不詳。
1723	縄文土器	深鉢	8本単位の沈線、ナデ。	ミガキ、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。
1724	縄文土器	深鉢	タテの沈線。	ヨコのミガキ。	にぶい黄 2.5Y6/3	傾き不詳。
1725	縄文土器	深鉢	沈線、縄文(R/L)。	指オサエ、ナデ。	灰褐 7.5YR5/2	上下傾き不詳。
1726	縄文土器	浅鉢	磨滅、波状口縁。	口唇部刻目、沈線。	にぶい黄褐 10YR5/4	波状口縁?。傾き不詳。
1727	縄文土器	深鉢	口唇部刺突。口頸部アルカ属貝条痕。	口頸部ナデ。	黒 10YR1.7/1	
1728	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	にぶい黄 2.5Y6/3	傾き不詳。
1729	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。口頸部アルカ属貝条痕?・刺突文。胴部ケズリ。	口頸部・胴部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	煤。
1730	縄文土器	深鉢	ナデ、刺突文。	不詳。	浅黄 7.5Y7/4	傾き、上下不詳。
1731	縄文土器	深鉢	口頸部ナデ?、刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。	浅黄 7.5Y7/3	傾き不詳。
1732	縄文土器	深鉢	胴部アルカ属貝条痕、底部周縁強い指オサエ。	ナデ?	にぶい橙 7.5YR6/4	
1733	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、刻目貼付突帯。	橙 5YR6/8	
1734	弥生土器	壺	クシ描き沈線、三角形の刺突文。	不詳。	明赤褐 2.5YR5/6	傾き不詳。
1735	弥生土器	甕	口唇部米粒状の刺突文。胴部クシ描き沈線、米粒状の刺突文。	指オサエ、ナデ。	明赤褐 2.5YR5/6	煤。
1736	弥生土器	壺	口唇部凹線2本、刻目。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰黄褐 10YR5/2	
1737	弥生土器	甕	口唇部刻目。胴部上半クシ描き沈線。	胴部内面ナデ?	にぶい褐 7.5YR5/3	外面煤。
1738	弥生土器	蓋	天井部ナデ、三つの小穴、体部ナデ?	ナデ。	にぶい黄褐 10YR5/3	
1739	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ?、ヘラ描き沈線2本。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	煤。
1740	弥生土器	甕	口唇部刺突文。口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ描き沈線10本、山形文。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ。	橙 7.5YR6/6	
1741	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ描き沈線17本。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ、タテのミガキ。	橙 7.5YR7/6	
1742	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、指オサエ。胴部タテのミガキ?	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ、ミガキ?	橙 7.5YR6/6	
1743	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部磨滅、焼成後穿孔。	ナデ。	橙 7.5YR7/6	
1744	弥生土器	甕	胴部不詳。底部端ナデ、刺突2か所。	ナデ。	灰黄褐 10YR4/2	
1745	弥生土器	壺	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、ミガキ。	明赤褐 5YR5/6	
1746	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちクシ描き沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ?	にぶい褐 7.5YR5/4	
1747	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ、焼成後穿孔途中。	ナデかミガキ?	にぶい褐 7.5YR5/4	
1748	弥生土器	甕	口縁部ナデ。胴部ヘラ描き沈線12本。	指オサエ、ナデ、のちミガキ?	橙 5YR6/6	
1749	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。胴部クシ描き沈線(6本単位)。	ナデ。	橙 5YR6/6	
1750	弥生土器	壺	ヨコナデ。	刻目貼付突帯。	にぶい褐 7.5YR5/3	傾き不詳。
1751	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。胴部クシ描き沈線(4本単位)、刺突文。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	橙 5YR6/6	
1752	弥生土器	甕	口縁部刻目貼付突帯。胴部クシ描き沈線、刺突文。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ミガキ。	灰黄褐 10YR4/2	
1753	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。胴部上半クシ描き沈線(7本単位)、刺突文、下半ミガキ。	指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	外面煤。
1754	弥生土器	壺	ミガキ。ヘラ描き沈線2本。	指オサエのちミガキ?	にぶい橙 7.5YR6/4	
1755	弥生土器	壺	ミガキ。ヘラ描き沈線6本。	指オサエ、ナデ、ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1756	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部指オサエ、ヨコナデ。胴部ヘラ描き沈線9本、ミガキ?	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	にぶい黄 2.5Y6/3	

掲載番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
1757	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ描き沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1758	弥生土器	甕	口唇部凹線、突帯状。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。
1759	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部タテのハケメ。	口縁部・胴部ミガキ。	灰褐 7.5YR5/2	傾き不詳。
1760	弥生土器	甕	口唇部凹線 3本。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	
1761	弥生土器	高杯	口縁部凹線 3本。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	にぶい赤褐 5YR5/4	
1762	弥生土器	壺	ハケメ、クシ描き沈線文。	指オサエ、ナデ。	灰褐 7.5YR4/2	傾き不詳。
1763	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ・4個単位の刺突文、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ミガキ、下半ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1764	弥生土器	甕	磨滅。口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ・煤。底部ナデ、焼成後穿孔。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ミガキ、下半ケズリのちナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	煤。
1765	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	明赤褐 5YR5/6	
1766	弥生土器	甕	口唇部凹線 2本。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	橙 7.5YR6/6	
1767	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部磨滅。	胴部ナデ。底部指オサエ、ケズリ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
1768	弥生土器	甕	胴部磨滅、ミガキ。底部磨滅。	磨滅。指オサエ、ナデ。	明赤褐 5YR5/6	
1769	弥生土器	高杯	脚部クシ描き沈線、ヘラ描き沈線、円形すかし穴。脚端部ヨコナデ。	脚部ケズリ。脚端部ヨコナデ。	橙 7.5YR6/6	
1770	弥生土器	台付鉢	口縁端部ヨコナデ、刻目突帯、円形穴。肩部細いヘラ描き沈線、刺突文。	口縁端部ヨコナデ。体部指オサエ、ナデ。	にぶい黄褐 10YR5/3	
1771	弥生土器	壺	口唇部凹線 3本、刻目。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1772	弥生土器	壺	口唇部凹線 3本、刻目、円形浮文。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい褐 7.5YR6/3	
1773	弥生土器	甕	磨滅。	口縁部ヨコナデ。	灰黄褐 10YR5/2	傾き不詳。
1774	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	指オサエ、ケズリ。	橙 5YR6/6	外面煤。
1775	弥生土器	鉢？	磨滅、ミガキ？	ナデかミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1776	弥生土器	甕	胴部ミガキ？、下端ヨコナデ、底部ナデ。	ケズリ？	にぶい橙 7.5YR6/4	煤。
1777	弥生土器	高杯	口唇部凹線 2本、口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部磨滅、円形すかし穴。脚部ヘラ描き沈線。脚端部凹線 2本。	口縁部ヨコナデ。杯部磨滅。脚部ケズリ。	橙 7.5YR7/6	
1778	弥生土器	高杯	脚部クシ描き沈線、7本1組のヘラ描き沈線。脚端部凹線？	ケズリ。	橙 5YR6/6	
1779	弥生土器	壺？	ハケメのちミガキ、刺突文。	指オサエ、ナデ、ハケメ。	にぶい赤褐 5YR5/3	
1780	弥生土器	高杯	口縁端部板による刺突文。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	にぶい赤褐 5YR5/4	
1781	弥生土器	鉢	口縁端部刻目。体部ミガキ。	口縁端部ヨコナデ。体部ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	
1782	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線 4〜5本。胴部ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y8/1	
1783	弥生土器	甕	胴部幅の狭いハケメ？。底部ハケメのち一部ミガキ。	ケズリ。	橙 7.5YR6/6	
1784	弥生土器	高杯	口唇部凹線 2本。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ？	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	橙 5YR6/8	
1785	弥生土器	器台	脚部ミガキ。脚部ヨコナデ、凹線 4本。脚端部凹線 2本。	脚部ナデ？。脚部ヨコナデ。	灰白 2.5Y8/2	
1786	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ、凹線 3〜4本。胴部上半タキハケメ・刺突文、下半タキのちミガキ。底部ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部・底部ケズリ。	にぶい橙 5YR7/4	
1787	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線 5本。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのち指オサエ、ナデ。	明赤褐 5YR5/6	
1788	弥生土器	高杯	口唇部凹線 5本。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。円盤充填。	橙 5YR6/6	
1789	弥生土器	製塩土器	指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	にぶい橙 5YR7/3	
1790	弥生土器	高杯	口唇部凹線 4本。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。円盤充填。	橙 5YR7/6	
1791	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1792	弥生土器	壺	口唇部沈線 3本。口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ、板による刺突文。	口縁部ヨコナデ。浅い沈線。頸部ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
1793	弥生土器	甕	口唇部凹線 3本。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ？	口縁部ヨコナデ。沈線 2本。胴部指オサエ、ナデ？	にぶい橙 5YR6/4	
1794	弥生土器	甕	口唇部凹線 3本。口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部上半指オサエ、ナデ、下半ケズリ。	橙 5YR6/6	
1795	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ、ミガキ。胴部磨滅。	灰白 2.5Y8/2	
1796	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
1797	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	ケズリのちナデかミガキ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1798	弥生土器	壺	口縁端部ヨコナデ。頸部刻目貼付突帯、クシ描き波状文。	口縁端部ヨコナデ。頸部磨滅。	にぶい褐 7.5YR5/4	
1799	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部板ナデ。	にぶい褐 7.5YR5/4	
1800	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ？	にぶい橙 7.5YR6/4	
1801	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ？	橙 5YR6/6	
1802	弥生土器	壺	口唇部凹線 2本、刻目。口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ、爪痕跡。	口縁部ヨコナデ。斜格子文。頸部ミガキ。	にぶい赤褐 5YR5/4	
1803	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ、ミガキ。胴部上半ミガキ、下半指オサエ、ナデ。	灰褐 7.5YR4/2	外面煤。
1804	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ？	明赤褐 5YR5/6	
1805	弥生土器	甕	磨滅。口縁部ヨコナデ。胴部不詳。	磨滅。口縁部ヨコナデ。胴部不詳。	赤 10R5/8	
1806	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半貝殻刺突文・ミガキ。	口縁部ヨコナデ、ミガキ。胴部指オサエ、ハケメ。	黒褐 10YR3/2	
1807	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部磨滅、ミガキ？	指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1808	弥生土器	壺	口唇部刻目、一部斜格子。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ、ハケメ。	明赤褐 5YR5/8	
1809	弥生土器	高杯	口縁端部刻目。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ヨコナデ、ナデ。	杯部ミガキ。脚部ヨコナデ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
1810	弥生土器	台付鉢	口唇部斜格子文。口縁端部円形の穿孔 3か所。口縁部ヨコナデ。貼付突帯、塊状浮文 2個単位で 8か所。体部ハケメのちミガキ。脚部貼付突帯、ヨコナデ。	口縁端部ヨコナデ。体部ハケメのちミガキ。円盤充填。脚部ヨコナデ。	灰黄褐 10YR5/2	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1811	弥生土器	甕	口唇部板による刻目。口縁部ヨコナデ、刻目貼付突帯、胴部上半ハケメ、下半ミガキ・貝殻?刺突文。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ。	オリブ黒 7.5Y3/1	
1812	弥生土器	壺	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、クシ描き波状文。	灰褐 7.5YR6/2	傾き不詳。
1813	弥生土器	壺	口唇部ヘラ描き斜格子文。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙 5YR6/4	煤。
1814	弥生土器	甕	底部ミガキ。底部ミガキ、焼成後穿孔。	指オサエ、ナデ。	灰褐 7.5YR6/2	煤。
1815	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部上半ミガキ、下半ハケメ。	灰白 10YR7/1	
1816	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。胴部細かいハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部細かいハケメ。	にぶい褐 7.5YR5/4	
1817	弥生土器	壺	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。頸部刻目貼付突帯、ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。	にぶい褐 7.5YR5/4	
1818	弥生土器	壺	口唇部凹線2本?。口縁部ヨコナデ。	口縁部剝離。胴部指オサエ、ナデ。	橙 7.5YR7/6	
1819	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部上半指オサエ・ナデ・ミガキ、下半指オサエ・ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
1820	弥生土器	甕	口唇部凹線2本。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	橙 5YR6/6	
1821	弥生土器	高杯	口唇部凹線?2本。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	ミガキ。	橙 5YR6/6	
1822	弥生土器	高杯	口唇部凹線?3本。口縁部ヨコナデ。杯部ヨコのミガキ。	ミガキ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
1823	弥生土器	壺	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ・貼付突帯。	口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。	にぶい橙 5YR6/4	
1824	弥生土器	壺	クシ描き直線文・波状文・斜格子文、円形浮文。	指オサエ・ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
1825	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部不詳。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ・ハケメ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1826	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部・脚部タテのミガキ。脚部ヘラ描き沈線・三角形のすかし穴5個。	口縁部2個一対の穴。杯部ミガキ。脚部ナデ。	灰白 10YR8/2	
1827	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。凹線4本。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部不詳。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1828	弥生土器	壺	磨滅。口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ?。	口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。	浅黄 2.5Y8/3	
1829	弥生土器	甕	磨滅。口縁部ヨコナデ。胴部不詳。	磨滅。口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ?。	にぶい黄橙 10YR7/4	
1830	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。凹線3本。胴部上半ハケメ・指オサエ・ナデ、下半ケズリ?。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	外面一部煤。
1831	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。凹線5本。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	灰黄褐 10YR6/2	黒斑付着。
1832	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。凹線3本。胴部上半ハケメ・刺突文、下半ミガキ?。	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅、指オサエ、ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	煤。
1833	弥生土器	高杯	脚部ミガキ?。脚端部ヨコナデ。	脚部ケズリ。脚端部ヨコナデ。	灰白 2.5Y8/2	
1834	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ?。	にぶい赤褐 5YR5/4	外面煤。
1835	弥生土器	台付鉢	口縁部刻目。口縁部ヨコナデ。沈線4本。刻目。体部上半ハケメ・刺突文、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	橙 2.5YR6/6	
1836	弥生土器	壺	口唇部凹線。口唇部ヨコナデ。凹線7本。円形穿孔2孔一対?。胴部上半ハケメ・板による刺突文、下半ミガキ。	口唇部ヨコナデ。胴部上半指オサエ・ハケメ、下半ケズリ。	暗灰黄 2.5Y5/2	傾き不詳。
1837	弥生土器	壺	口唇部凹線4本。口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ、鋭い凹線9本。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1838	弥生土器	壺	口唇部凹線3本。口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ、凹線5本。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1839	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。凹線3本。頸部刻目貼付突帯。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1840	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。凹線2本。胴部ミガキ?。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエのちハケメ。	にぶい黄橙 10YR7/3	外面若干煤。
1841	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。凹線2~3本。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ハケメ。	灰黄褐 10YR6/2	
1842	弥生土器	壺	口縁部刻目。口縁部ヨコナデ。頸部刻目貼付突帯。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1843	弥生土器	壺	口縁部刻目。口縁部ヨコナデ。刻目貼付突帯。頸部磨滅。	口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
1844	弥生土器	壺	口唇部クシ描き斜格子文。口縁部ヨコナデ。頸部ヨコナデ、刻目貼付突帯。胴部上半ハケメ・クシ描き直線文・波状文・下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。胴部指オサエ、ナデ、ハケメ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1845	弥生土器	壺	口唇部刻目。凹線2本。口縁部ヨコナデ。頸部は、刻目貼付突帯。胴部ハケメ、ミガキ?。	口縁部ヨコナデ。刻目。頸部ミガキ。胴部ケズリ。	褐灰 10YR4/1	
1846	弥生土器	壺	口唇部クシ描き斜格子文。口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ、貼付突帯。	口縁部ヨコナデ。クシ描き文、円形浮文。頸部ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	
1847	弥生土器	壺	口唇部刻目貼付突帯4本、棒状浮文2本一組で6単位、クシ描き波状文。口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。	口縁部クシ描き波状文・円文、円形浮文。頸部ミガキ。	橙 5YR7/6	
1848	弥生土器	壺	口唇部綾杉文。口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ?、刻目貼付突帯。	ナデ、ミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1849	弥生土器	壺?	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデのちミガキ。	褐灰 10YR6/1	
1850	弥生土器	壺?	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅、ミガキ。	浅黄橙 10YR8/3	
1851	弥生土器	壺	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。円形穿孔2孔一対?。胴部上半ハケメ・貝殻刺突文、下半ミガキ。底部指オサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半指オサエ・ミガキ、指オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	
1852	弥生土器	壺	口唇部刻目。円形浮文3個。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、ミガキ。胴部ミガキ。	灰黄褐 10YR6/2	外面煤。
1853	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部上半磨滅、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ、ハケメ。	灰黄 2.5Y6/2	
1854	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。底部磨滅、ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
1855	弥生土器	壺	磨滅。	指オサエ、ナデ、ハケメ。	浅黄 2.5Y8/3	
1856	弥生土器	壺	胴部ナデかミガキ、沈線3本。底部ナデかミガキ。	ナデかミガキ。	灰白 10YR8/2	
1857	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部クシ描き沈線。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
1858	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ・刺突文、下半ミガキ。底部指オサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。底部指オサエ、ナデ。	灰黄褐 10YR5/2	
1859	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。
1860	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ハケメ。	黄灰 2.5Y4/1	
1861	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	灰黄褐 10YR5/2	

掲載番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1862	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	明褐色 7.5YR7/2	外面煤。
1863	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ？。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1864	弥生土器	甕	口唇部凹線2本。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。指オサエ、ナデ、ミガキ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
1865	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ、刺突文。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面煤。
1866	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ、刺突文。	口縁部ヨコナデ。ミガキ。胴部指オサエ、ハケメ、ミガキ。	にぶい橙 7.5YR7/3	外面煤付着。
1867	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	
1868	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
1869	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部刻目貼付突帯。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1870	弥生土器	壺	胴部ミガキ。底部丁寧ナデ。	指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1871	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部縁ヨコナデ。	指オサエ、ナデ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
1872	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部縁指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデのちミガキ。	にぶい黄橙 10YR6/3	煤。
1873	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ミガキ、縁ナデ。	ナデ？。	灰黄褐 10YR6/2	
1874	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ、焼成後穿孔。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1875	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部磨減。	口縁部ヨコナデ。杯部ハケメのちミガキ。	灰黄褐 10YR6/2	外面若干煤。
1876	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ミガキ。円形すかし穴4個。脚端部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
1877	弥生土器	高杯	杯部ミガキ。脚部へら描き沈線。	円盤充填。脚部しぼり痕、ナデ。	浅黄 2.5Y7/3	
1878	弥生土器	高杯	杯部ミガキ。脚部磨減、へら描き沈線、すかし穴。脚端部ヨコナデ。	杯部ミガキ。円盤充填。脚部指オサエ、ナデ。	にぶい黄 2.5Y6/3	
1879	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ミガキ。円形すかし穴4個。脚端部ヨコナデ。	口縁部ミガキ。杯部ミガキ。	灰黄褐 10YR6/2	
1880	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。円形穿孔2孔一対？。杯部ミガキ。脚部ミガキ。脚端部ハケメ、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。円盤充填。脚部しぼり痕、ナデ。脚端部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1881	弥生土器	蓋	天井部ナデ。体部指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	
1882	弥生土器	蓋？	天井部指オサエ、ナデ、ヨコナデ。体部ミガキ。	指オサエ、ナデのちミガキ。	灰白 10YR8/2	
1883	弥生土器	ジョッキ形	体部ハケメのちミガキ。底部磨減。	指オサエ、ナデ。	灰黄褐 10YR5/2	
1884	弥生土器	台付鉢	口唇部斜格子文。口頸部刻目貼付突帯。胴部ハケメ、押し引き刺突文、ミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	被熱。
1885	弥生土器	台付鉢	体部ミガキ。脚部刻目貼付突帯、円形すかし穴14個。脚端部ヨコナデ。	体部ハケメ？。脚部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1886	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。	灰黄 2.5Y6/1	
1887	弥生土器	壺	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
1888	弥生土器	壺	口唇部板による刻目。口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ、刻目貼付突帯。	口縁部ヨコナデ。頸部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1889	弥生土器	壺	口唇部刻目。口縁部指オサエ、ヨコナデ。頸部タテのハケメ。	口縁部ヨコナデ。斜格子文。	黄灰 2.5Y4/1	傾き不詳。
1890	弥生土器	壺	口唇部突帯状の凹線4本、円形浮文4個。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。斜格子文。	黄灰 2.5Y4/1	
1891	弥生土器	壺	口唇部突帯状の凹線3本、刻目。口縁部ヨコナデ。	磨減。口縁部ヨコナデ。	褐灰 10YR4/1	傾き不詳。
1892	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	黄灰 2.5Y4/1	
1893	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。底部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部・底部ナデ？。	灰黄 2.5Y7/2	
1894	弥生土器	壺	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。頸部刻目貼付突帯。	ミガキ。	にぶい赤褐 5YR5/4	
1895	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部タテのミガキ？。胴部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。頸部・胴部ミガキ？。	黄灰 2.5Y6/1	
1896	弥生土器	台付鉢？	磨減。口縁部ヨコナデ。凹線5本、円形穿孔2個一対か。	磨減。口縁部ヨコナデ。	赤 10R5/6	
1897	弥生土器	台付鉢？	口縁部刻目貼付突帯、円形穿孔。胴部タテのハケメ、クン描き沈線文。	口縁部ヨコナデ。胴部タテのハケメ、ヨコのミガキ。	黄灰 2.5Y4/1	傾き不詳。
1898	弥生土器	壺	胴部ミガキ、刻目貼付突帯。	胴部ハケメのち指オサエ。	灰黄褐 10YR6/2	外面煤。
1899	弥生土器	壺	磨減。ミガキ？。	胴部ハケメ、ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1900	弥生土器	壺	胴部ミガキ。底部ヨコナデ、ナデ。	胴部粗いハケメ。底部ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	
1901	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、ミガキ。胴部ミガキ。	オリーブ黒 5Y3/1	煤。
1902	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのち一部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	灰黄 2.5Y6/2	
1903	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部刻目貼付突帯。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1904	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ミガキ、下半ハケメ。	褐灰 10YR4/1	外面煤。
1905	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	黄灰 2.5Y6/1	煤。
1906	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ハケメ、ヨコナデ。胴部ハケメ。	にぶい黄褐 10YR5/3	煤。
1907	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部細かいハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/2	煤。
1908	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	暗灰黄 2.5Y4/2	
1909	弥生土器	甕	クン描き沈線、刺突文、ミガキ。	指オサエ、ナデ。	黄灰 2.5Y4/1	傾き不詳。
1910	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ、焼成後穿孔。	不詳。	橙 2.5Y4/2	
1911	弥生土器	甕	胴部指オサエ、ハケメのちミガキ。底部縁指オサエ、ヨコナデ、ミガキ。	指オサエ、ナデのちミガキ。	灰黄褐 10YR6/2	煤。
1912	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部指オサエ、ミガキ、焼成後穿孔。	胴部ミガキ。底部指オサエ、ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	煤。
1913	弥生土器	高杯？	口唇部ミガキ。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	ハケメのちミガキ。	灰黄 2.5Y6/2	
1914	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。円形穿孔。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰黄 2.5Y7/2	
1915	弥生土器	高杯	杯部・脚部ミガキ。円盤充填。脚端部ヨコナデ。	杯部ミガキ。脚部しぼり痕、ナデ。脚端部ヨコナデ。	褐灰 7.5YR6/2	
1916	弥生土器	ジョッキ形	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	黄灰 2.5Y5/1	煤。
1917	弥生土器	ジョッキ形	口縁部刻目。口縁部ヨコナデ。円形穿孔。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	にぶい黄褐 10YR5/3	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1918	弥生土器	ジョッキ形	口縁端部刻目。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ、刺突文2段。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエのちミガキ?	橙 5YR6/6	
1919	弥生土器	ジョッキ形	胴部上半ミガキ、下端ヨコナデ・ハケメ。底部ナデ。	胴部上半ハケメ、下端ナデ。底部ナデ。	灰白 2.5Y8/2	外。
1920	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ、円形穿孔2孔一対2か所。杯部ミガキ。胴部ハケメ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ハケメのちミガキ、円盤充填。指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1921	弥生土器	台付鉢	脚部ミガキ。	底部ミガキ。円盤充填。脚部ヨコナデ。	灰黄褐 10YR5/2	煤付着。
1922	弥生土器	鉢?	体部ミガキ?。脚部ナデ?	体部ミガキ?。脚部ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	外面煤→二次焼成?
1923	弥生土器	蓋	つまみヨコナデ。体部ヨコナデ、ハケメ、円形穿孔。	ナデ。	黄灰 2.5Y5/1	
1924	弥生土器	蓋	ミガキ。	天井部粗いナデ。体部しぼり痕、ミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
1925	弥生土器	壺	口唇部突帯状の凹線3本、円形浮文。口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。斜格子文。頸部ヨコナデ。	灰黄褐 10YR4/2	
1926	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ、2孔一対の穿孔。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ハケメのちミガキ。	にぶい褐 7.5YR6/3	
1927	弥生土器	台付鉢	口頸部ヨコナデ、突帯状の凹線4本、円形浮文。胴部ハケメ、クシ描き直線文・波状文・斜格子文。	口縁部ヨコナデ、ミガキ。胴部ミガキ。	黒褐 2.5Y3/1	
1928	弥生土器	台付鉢	体部ミガキ?。脚部ヨコナデ、貼付突帯、すかし穴。	体部ナデ?。円盤充填。脚部指オサエ、ヨコナデ。	黒 5Y2/1	
1929	弥生土器	甕	口唇部沈線2本。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、ミガキ。胴部ハケメのちミガキ。	にぶい黄 2.5Y6/4	煤。
1930	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ、凹線9本。頸部刻目貼付突帯。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	明黄褐 2.5Y7/6	
1931	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ、凹線4本。頸部ハケメ、沈線(2本ずつ螺旋状)。	口縁部ヨコナデ。頸部指オサエ、ナデ、ハケメ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR6/4	器台に転用。
1932	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
1933	弥生土器	壺	口頸部ミガキ、細いヘラ描き沈線1本。	口縁部ミガキ。頸部指オサエのちミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
1934	弥生土器	壺	口縁端部ヨコナデ。頸部指オサエ・ヘラ描き沈線1本。	ハケメ、ミガキ。	灰黄褐 10YR6/2	
1935	弥生土器	壺	口縁端部ヨコナデ。頸部・胴部ハケメ?のちミガキ、ヘラ描き沈線2本。	口縁部ミガキ。頸部ナデ。胴部ハケメ?のちミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1936	弥生土器	壺	口縁部ナデ。頸部ミガキ?	口縁部ナデ。頸部ナデ?	にぶい黄 2.5Y6/3	
1937	弥生土器	壺	口唇部部分的に沈線。口頸部ミガキ、削り出し突帯。	口縁端部指オサエ。口縁部ミガキ?	浅黄橙 7.5YR8/4	
1938	弥生土器	壺	口唇部ヨコナデ。頸部細かいハケメのちミガキ、ヘラ描き沈線4本。胴部細かいハケメのちミガキ。	口頸部ミガキ。胴部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1939	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部強い指オサエ。胴部ヘラ描き沈線7本、ナデかミガキ。	口縁部指オサエ、ナデ。胴部指オサエ、ナデ、ミガキ。	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面煤付着。
1940	弥生土器	甕	口縁部強い指オサエ。胴部上半ミガキ、下半板ナデ。	口縁部指オサエ、ナデ。胴部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	つまみ有り。
1941	弥生土器	甕?	胴部ミガキ。底部周縁工具痕?	不詳。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1942	弥生土器	台付鉢	口縁端部ヨコナデ、刻目貼付突帯、円形穿孔1残存。胴部刺突文、2本単位の波状文。	口縁端部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	灰黄褐 10YR5/2	
1943	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半磨減。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	灰黄褐 10YR5/2	
1944	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	褐 7.5YR4/3	
1945	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部不詳。	口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
1946	弥生土器	蓋?	ミガキ、円形穿孔2孔一対。	指オサエ、ナデ。	明赤褐 5YR5/6	
1947	弥生土器	高杯	口唇部斜格子文。口縁部ヨコナデ、円形穿孔。杯部ミガキ。脚柱部貼付突帯、長方形すかし穴5個、ハケメ。脚端部ヨコナデ。	口縁端部ヨコナデ。杯部ミガキ。円盤充填。脚部しぼり痕、ナデ。脚端部ヨコナデ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
1948	弥生土器	蓋	体部ミガキ。口縁部ヨコナデ。	体部指オサエ、ナデ。口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1949	弥生土器	甕	ヨコナデ。口縁端部刻目貼付突帯、円形穿孔1個。	ミガキ。	橙 2.5Y7/6	
1950	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線4本。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
1951	弥生土器	高杯	口唇部凹線4本。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚柱部クシ描き沈線、円形すかし穴。脚端部ヘラ描き沈線5か所。脚端部ヨコナデ。	口縁部ミガキ。杯部ミガキ、円盤充填。脚部ケズリ。脚端部ヨコナデ。	橙 7.5YR7/6	
1952	弥生土器	高杯	ヨコナデ?。矢羽すかし穴。	ケズリ。	淡黄 2.5Y8/3	傾き不詳。
1953	弥生土器	高杯	脚部ミガキ、矢羽すかし穴。脚端部ヨコナデ。	磨減。ケズリ?	灰白 10YR8/2	
1954	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ、凹線3~4本。杯部ミガキ。脚部磨減、ミガキ。脚端部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ケズリ。	灰白 10YR8/2	
1955	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	にぶい橙 5YR6/4	
1956	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ、凹線2本。杯部ミガキ。脚柱部ハケメ。脚端部ミガキ。脚端部沈線2本。円形のすかし穴4個。	杯部ミガキ。脚柱部ナデ。脚端部ハケメ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1957	弥生土器	壺	刻目貼付突帯。ヘラ描き沈線文。	磨減。	にぶい橙 7.5YR7/3	2004と同一個体。外面丹塗り。
1958	弥生土器	製塩土器	ケズリ。	しぼり痕、ケズリ。	褐灰 10YR6/1	
1959	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線7本。胴部細かいハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
1960	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線5本。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR5/2	
1961	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線?	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1962	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨減、ハケメ。	口縁部ヨコナデ、ハケメ?。胴部磨減、指オサエ、ナデ。	褐 7.5YR4/4	外面煤。
1963	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部磨減、指オサエ、ハケメ?	にぶい橙 5YR6/4	外面煤。
1964	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ハケメ。胴部ケズリ。	橙 2.5YR6/6	
1965	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ、下端円形穿孔2個?	口縁部ヨコナデ、ハケメ。胴部指オサエ、ナデ、ハケメ?	橙 2.5YR6/6	
1966	土師器	壺	磨減。口唇部円形浮文。口縁部ヨコナデ、円形浮文。	磨減。	浅黄橙 7.5YR8/3	
1967	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、粗いクシ描き沈線5本。胴部ミガキ?	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR5/2	内外面煤。

掲載番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1968	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線6本、胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR6/3	外面煤。
1969	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線5本、胴部上半ハケメ・刺突、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。
1970	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、粗いクシ描き沈線5本。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1971	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線3〜4本。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	橙 7.5YR7/6	
1972	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部磨滅。上半ハケメ?、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部上半ケズリ、下半指オサエ・ナデ・ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
1973	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部上半タタキ?、下半タタキ?のちハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1974	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ナデかミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	
1975	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ、脚部ミガキ、円形すかし穴4個、脚端部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、杯部ミガキ、脚部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	内面口縁部煤。
1976	土師器	高杯	杯部・脚部ミガキ?。	磨滅、脚部ナデ?。	にぶい黄橙 10YR7/4	
1977	土師器	高杯	脚部ミガキ?、円形すかし穴4個。	磨滅。	橙 5YR6/6	
1978	土師器	台付鉢	体部ナデかミガキ、底部指オサエ、ナデ。	体部ナデかミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1979	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ?、胴部磨滅、ミガキ?。	口縁部ヨコナデ?、胴部磨滅、指オサエ・ナデ・ミガキ?。	橙 5YR7/6	傾き不詳。
1980	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙 5YR7/4	
1981	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	褐灰 10YR4/1	
1982	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線7本。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。
1983	土師器	鉢	磨滅。	磨滅。	橙 7.5YR6/6	
1984	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ、体部ミガキ、底部ケズリ。	口縁部ヨコナデ、体部指オサエ、ナデのちミガキ。	にぶい赤褐 5YR5/4	
1985	土師器	高杯	磨滅。	磨滅。	橙 5YR6/8	
1986	土師器	高杯	磨滅、脚部円形すかし穴4個?。	磨滅、杯部ミガキ。	橙 5YR6/6	
1987	土師器	製塩土器	磨滅。	磨滅。	にぶい赤橙 10R6/4	
1988	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線9本。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
1989	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	橙 5YR6/6	
1990	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	灰白 10YR8/2	
1991	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1992	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ、ミガキ、胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。	橙 5YR6/6	
1993	土師器	鉢	指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	手捏ね。
1994	土師器	壺?	指オサエ、ハケメ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	橙 5YR7/6	手捏ね。
1995	須恵器	杯身	口縁部・体部ヨコナデ、底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N6/	傾き不詳。
1996	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線8本、胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1997	土師器	甕	磨滅。口縁部クシ描き沈線?。	磨滅。	灰黄褐 10YR6/2	
1998	土師器	高杯	磨滅、脚部円形すかし穴4個。	磨滅。	浅黄橙 7.5YR8/3	
1999	土師器	壺	口頸部ヨコナデ。胴部上半ハケメ・刺突3、下半ミガキ、底部ナデ。	口頸部ヨコナデ、胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2000	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線9本、胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、ハケメ、胴部ケズリ。	灰白 7.5YR8/2	
2001	土師器	高杯	脚部ハケメのちミガキ?、脚端部ヨコナデ。	杯部磨滅、脚柱部ケズリ、ナデ、脚端部ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2002	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ、底部ナデ。	口縁部ヨコナデ、底部ナデ。	灰 7.5Y5/1	
2003	須恵器	壺	ヨコナデ。	ナデ。	灰 N6/	
2004	土師器	壺	口縁部凹線、2個一対の円形浮文、頸部ミガキ?、ヘラ描き沈線文、刻目貼付突帯、胴部ミガキ?、ヘラ描き沈線文。	口縁部・頸部ミガキ?、胴部磨滅。	明赤褐 2.5YR5/6	内外面丹塗。1957と同一個体。
2005	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ、指オサエ。	ヨコナデ。	橙 7.5YR7/6	
2006	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ。	灰白 5Y8/1	
2007	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、頸部磨滅。	口縁部ヨコナデ、頸部磨滅。	灰白 5YR8/2	
2008	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2009	土師器	壺	口頸部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR5/2	
2010	土師器	壺	口縁部・頸部ヨコナデ、胴部上半ハケメ・刺突3、下半ミガキ?。	口縁部・頸部ヨコナデ、胴部上半ケズリ、下半指オサエ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2011	土師器	壺	口頸部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、胴部ケズリ。	にぶい橙 5YR7/3	
2012	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、ミガキ?、頸部指オサエ、ヨコナデ、ミガキ?。	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ。	灰白 2.5Y8/1	
2013	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、胴部指オサエ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2014	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、ハケメ、頸部ハケメ。	灰白 2.5Y8/2	
2015	土師器	壺	口縁部ミガキ、貼付突帯、頸部ヨコナデ。	口頸部ミガキ。	橙 7.5YR6/6	
2016	土師器	壺	口頸部ヨコナデ。胴部上半ハケメ・貝殻刺突文、下半ハケメのちミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部磨滅、指オサエ・ナデ?。	橙 7.5YR7/6	
2017	土師器	壺	口頸部ヨコナデ、胴部磨滅。	口頸部ヨコナデ、胴部ナデ。	橙 5YR7/8	
2018	土師器	壺	口唇部凹線2本、口縁部ヨコナデ、頸部不詳。	口縁部ヨコナデ、頸部不詳。	橙 5YR6/6	
2019	土師器	壺	口唇部凹線2本、口縁部ヨコナデ、頸部不詳。	口縁部ヨコナデ、頸部不詳。	橙 7.5YR6/6	
2020	土師器	壺	口縁部ヨコナデのちミガキ、刻目、頸部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、頸部ハケメのちミガキ。	灰白 10YR8/2	
2021	土師器	壺	ヨコナデ。	ヨコナデ、ミガキ。	橙 2.5YR6/6	
2022	土師器	壺	口縁部浅い凹線5本、頸部ハケメのちヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、頸部指オサエ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部一部に煤。
2023	土師器	壺	口縁部ヨコナデのちミガキ、頸部ミガキ、胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデのちミガキ、頸部ナデ、胴部指オサエ、ナデ。	橙 5YR6/6	
2024	土師器	壺	クシ描き波状文2段。	クシ描き波状文2段。	橙 5YR6/6	傾き不詳。
2025	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、ハケメ、胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、ハケメ、胴部指オサエ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2026	土師器	壺	磨滅。	磨滅。	浅黄橙 10YR8/3	

掲載番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
2027	土師器	壺	口頸部ミガキ。胴部ハケメのちミガキ。	口頸部ミガキ。胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2028	土師器	壺	磨滅。	磨滅。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2029	土師器	壺	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。頸部指オサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。	橙 5YR7/8	
2030	土師器	壺	頸部ヨコナデ。ヘラ描き沈線、山形文。胴部ハケメのち一部ミガキ？	頸部指オサエ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
2031	土師器	壺	口頸部ヨコナデ。	口頸部ヨコナデ。頸部ケズリ。	浅黄 2.5Y7/3	
2032	土師器	壺	口縁部ハケメ？。頸部細かいハケメ。胴部ハケメのち細かいミガキ。	ハケメのちミガキ。胴部指オサエ、ナデ。	にぶい赤褐 5YR5/4	
2033	土師器	壺	頸部ヨコナデ。刻目貼付突帯。胴部ハケメのちミガキ。	頸部ミガキ。胴部ケズリ、一部ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
2034	土師器	壺	胴部ハケメのち一部ミガキ。底部ナデ。	ハケメ。	灰黄褐 10YR6/2	
2035	土師器	壺	胴部ハケメのちミガキ。底部指オサエ、ハケメ、ミガキ。	ハケメ。	にぶい黄褐 10YR5/3	
2036	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線5本。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部指オサエ、ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
2037	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線。胴部磨滅、ハケメ・ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部上半指オサエ、下半ケズリ。底部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2038	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7本。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2039	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7本。胴部上半ハケメ・刺突3個、下半ハケメ・ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR6/3	煤。
2040	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線8本。胴部上半ミガキ・刺突1個、下半磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2041	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7本。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
2042	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線5~6本。胴部ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。底部指オサエ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2043	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線8~9本。胴部上半ハケメのちミガキ・刺突3個、下半ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2044	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7本。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
2045	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線。胴部上半ハケメ・刺突2個、下半磨滅・ナデ？	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	煤。
2046	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7本。胴部上半ハケメ・刺突3個、下半磨滅・ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部上半ケズリ、下半指オサエ、ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
2047	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線5本。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ケズリ、下半指オサエ、ケズリ。	浅黄橙 10YR8/3	煤。
2048	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線6本。胴部上半指オサエ・ハケメ・刺突2個、下半磨滅・ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい橙 5YR6/4	
2049	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線。胴部上半ケズリ。下半指オサエ、ケズリ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ・刺突2、下半ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2050	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線。胴部上半2種類のハケメ、下半磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ケズリ。下半指オサエ・ケズリ。	灰褐 7.5Y5/2	
2051	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線9~10本。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2052	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線6本。胴部上半ハケメ・下半ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2053	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線6~7本。胴部上半ハケメ・刺突4個、下半磨滅。	口縁部ヨコナデ。指オサエ。胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2054	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線。胴部上半ハケメ・刺突1個、下半ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2055	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7本。胴部ハケメのちミガキ、刺突3個。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2056	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7~8本。胴部上半ミガキ、刺突3個。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	外面煤。
2057	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線8本。胴部上半ハケメ・刺突3個、下半不詳。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR5/2	煤。
2058	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7本。胴部ハケメ・刺突1個。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	明赤褐 5YR5/6	
2059	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線。胴部上半ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2060	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線7本。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2061	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい褐 7.5YR6/3	煤。
2062	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。クシ描き沈線4本。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	煤。
2063	土師器	甕	口縁部凹線？1本。口縁部ヨコナデ。胴部右上がりタタキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙 10YR8/4	
2064	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
2065	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部右上がりタタキのちハケメ。	口縁部ハケメ、ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
2066	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	黒斑あり。
2067	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエのちケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
2068	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
2069	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
2070	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2071	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
2072	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
2073	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメカタタキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
2074	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
2075	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
2076	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
2077	土師器	甕	胴部ハケメ、クシ描き波状文、直線文。	胴部ケズリ。	灰 2.5Y8/2	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2078	土師器	甕	ハケメ、クシ描き波状文。	ケズリ。	灰白 2.5Y8/2	傾き不詳。
2079	土師器	甕	右上がりの細かい平行タタキ。	ケズリ。	黄褐 2.5Y5/3	傾き不詳。チョコ レート色。
2080	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ？。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄褐 10YR5/3	
2081	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ケズリ、 下半指オサエ、ケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	チョコレート色。
2082	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。ハケメ。胴部磨減、ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズ リ。	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石多い、チョコ レート色。
2083	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部タタキ？。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズ リ。	灰黄褐 10YR6/2	
2084	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨減。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナ デ。	浅黄橙 10YR8/4	
2085	土師器	甕	口縁部磨減、ヨコナデ？。胴部ハケメのちミガキ ？。	口縁部磨減、ヨコナデ。胴部ナデ？。	浅黄橙 7.5YR8/4	煤。
2086	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ・刺突3個、下半 ミガキ？。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ケズリ、下 半指オサエ、ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
2087	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。凹線1本。頸部ヨコナデ、タテの ナデ。胴部ハケメ？。	口縁部ヨコナデ。頸部、胴部指オサ エ、ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	
2088	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰褐 7.5YR6/2	
2089	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨減、ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ、板ナ デ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
2090	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ、ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2091	土師器	高杯	杯部磨減、ミガキ。脚柱部指オサエ、ミガキ。	杯部上半ミガキ、下半多角形状のハ ケメのちミガキ。脚部しぼり痕、ナ デ。	浅黄橙 10YR8/4	
2092	土師器	高杯	杯部ミガキ。脚部磨減、ミガキ？。	杯部ミガキ。脚部ナデ？。	明赤褐 5YR5/6	
2093	土師器	高杯	杯部磨減、ミガキ。脚柱部ナデ？。脚部部ミガキ、円 形すかし穴4個。	杯部磨減。脚柱部しぼり痕。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2094	土師器	高杯	脚柱部ミガキ？。脚部部ハケメ？、円形すかし穴4 個。	磨減。	橙 5YR7/6	
2095	土師器	高杯	杯部細かいミガキ。	杯部細かいミガキ。	浅黄橙 7.5YR8/4	
2096	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部上半ミガキ、下半ケズリの ちミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	橙 5YR7/6	
2097	土師器	高杯	磨減。杯部、脚部ミガキ？。脚部部ミガキ？、円形す かし穴4個。	磨減。杯部ミガキ。脚部しぼり痕、ナ デ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2098	土師器	高杯	磨減。すかし穴なし。	脚柱部しぼり痕、ナデ。脚部部磨減。	橙 5YR6/8	
2099	土師器	高杯	脚柱部面取りのちハケメのちミガキ。脚部部ハケ メのちミガキ、円形すかし穴4個。	脚柱部ナデ。脚部部ナデ、ハケメ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2100	土師器	台付鉢	脚部ハケメ。円形すかし穴4個。脚部部指オサエ、 ヨコナデ。	脚部ハケメ、ナデ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
2101	土師器	高杯	脚部ケズリのちミガキ。脚部部指オサエ、ハケメ、 ミガキ？。	脚部指オサエ、ナデ？。	橙 5YR6/6	
2102	土師器	高杯	脚部ミガキ。	脚部しぼり痕、ナデ、ハケメ。	灰黄褐 10YR6/2	
2103	土師器	高杯	杯部ミガキ。脚部ミガキ。	杯部ナデ。脚柱部ケズリ。脚部部磨 減。	にぶい褐 7.5YR5/4	
2104	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ。ハケメ。杯部ミガキ。脚部ハケ メ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部 しぼり痕、ハケメ。	にぶい黄橙 10YR7/2	円盤充填。
2105	土師器	器台？	脚部磨減、ミガキ。	杯部ミガキ。脚部しぼり痕、ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2106	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコナデ・初庄痕、下半 ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半指オサエ ナデ、下半ミガキ。	橙 5YR7/6	傾き不詳。
2107	土師器	鉢	体部タテのハケメのちヨコの細かいミガキ。脚部 ヨコの細かいミガキ。	口縁部ハケメ。体部指オサエ、ナデ。	にぶい赤褐 2.5YR5/4	
2108	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部ハケメのちナデ。脚部指オ サエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ、指オサ エ、ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
2109	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部ハケメ。底部ミガキ。	磨減。一部ハケメ。	浅黄橙 10YR8/3	
2110	土師器	鉢	口縁部・体部上半指オサエ・ナデ、下半ケズリ。	指オサエ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2111	土師器	鉢	体部上半ナデ？、下半ケズリ。	指オサエ、ナデ。	橙 5YR7/6	
2112	土師器	鉢	口縁部ナデ。体部ケズリ？。	口縁部ヨコナデ。体部指オサエ、ナ デ。	黄灰 2.5Y7/2	
2113	土師器	鉢	口縁部・体部上半指オサエ・ナデ、下半ケズリ。	指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2114	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部ケズリのちナデ？。	口縁部ヨコナデ。体部指オサエ、ナ デ、ハケメ？。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2115	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部下半ケズリ。	口縁部ヨコナデ。体部部分的に粗 いハケメ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2116	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部タタキ？のちナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリのちナ デ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2117	土師器	鉢	口頸部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口頸部ヨコナデ。ケズリのちヨコの ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2118	土師器	鉢	口唇部板による刻目。口縁部ヨコナデ。頸部ハケ メ。	口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。	黄灰 2.5Y6/1	
2119	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ハケメ、ナデ、細い 沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。底部磨 減。	灰黄 2.5Y6/2	内面の口縁部付近ま で朱付着。外面被熱 なし。
2120	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部磨減。	口縁部ヨコナデ。体部磨減。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2121	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	橙 7.5YR6/6	
2122	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部磨減。	口縁部ヨコナデ。胴部磨減。	暗灰黄 2.5Y5/2	
2123	土師器	鉢	口縁部ミガキ？。胴部ナデ。	口縁部ミガキ？。胴部ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
2124	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデ、下半ケズリ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2125	土師器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ？。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナ デ。	淡黄 2.5Y8/3	
2126	土師器	壺	口縁部ハケメのちミガキ。胴部ケズリ？のちミガ キ。	口縁部ミガキ？。体部指オサエ、ナ デ。	にぶい橙 5YR7/4	
2127	土師器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ？のちミガキ。	口縁部ミガキ。胴部丁寧なナデ。	橙 5YR7/6	
2128	土師器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部指オサエ。胴部上半ナデ、下 半ケズリのちナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナ デ。	にぶい黄橙 10YR7/2	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2129	土師器	器台	口縁端部ヨコナデ、杯部ミガキ、脚部ナデ、円形すかし穴3個、杯部ミガキ。	杯部ミガキ、脚部指オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	
2130	土師器	脚部	ヨコナデ、ミガキ。	ヨコナデ。	にぶい褐 7.5Y R5/4	
2131	土師器	低脚杯	杯部ミガキ、脚部ヨコナデ、円形穿孔。	杯部ナデかミガキ、脚部ヨコナデ。	橙 5Y R6/6	
2132	土師器	コシキ形	指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	灰 5Y6/1	
2133	土師器	コシキ形	貼付突帯、把手。指オサエ、ナデ。	ナデ。	褐灰 10Y R5/1	
2134	土師器	製塩土器	指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	にぶい黄褐 5Y R5/3	
2135	土師器	製塩土器	指オサエ、ナデ。	ナデ?	橙 2.5Y R6/6	
2136	土師器	製塩土器	脚部指オサエ、ナデ。	脚部指オサエ、ナデ。	橙 7.5Y R6/6	
2137	土師器	製塩土器	体部タタキ、脚部指オサエ、ナデ。	体部指オサエ、脚部指オサエ、ナデ。	橙 2.5Y R6/6	
2138	土師器	製塩土器	脚部指オサエ、ナデ。	脚部指オサエ、ナデ。	にぶい黄褐 2.5Y R5/4	
2139	土師器	製塩土器	体部ケズリ、脚部指オサエ、ナデ。	体部ナデ、脚部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2140	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線3本。	口縁部ヨコナデ。	橙 7.5Y R6/6	
2141	土師器	甕	磨滅。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2142	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線4本。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	
2143	土師器	甕	磨滅。胴部ミガキ。	磨滅。胴部ケズリ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	外面煤。
2144	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、沈線4本。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5Y R7/3	
2145	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅、ミガキ?	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5Y R7/3	
2146	土師器	甕?	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ナデ。	褐灰 10Y R6/1	
2147	土師器	高杯	磨滅。	磨滅。	にぶい赤褐 2.5Y R5/4	
2148	土師器	高杯	脚部ミガキ、円形すかし穴4個。	磨滅。脚柱部ナデ。	明赤褐 5Y R5/6	
2149	土師器	鉢	磨滅。底部指オサエ、ハケメ?	磨滅。体部ハケメ、ナデ?。底部指オサエ。	明赤褐 5Y R5/6	
2150	須恵器	杯身	ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。体部・底部使用による磨滅。	灰 5Y6/1	ロクロ回転右。
2151	土師器	平底鉢	口縁部ヨコナデ。胴部タテのタタキのちナデ。底部中央刺摩?	口縁部ヨコナデ。胴部・底部ナデ。	黄褐色 2.5Y5/3	
2152	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10Y R8/2	
2153	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10Y R7/1	
2154	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	黒 2.5Y2/1	
2155	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き沈線7本。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
2156	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
2157	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ?	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄 2.5Y7/3	
2158	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10Y R7/4	
2159	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10Y R7/4	煤。
2160	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	黒 2.5Y2/1	外面全体が黒い。
2161	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線3本。	口縁部ヨコナデ。	橙 7.5Y R7/6	
2162	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
2163	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線5本。胴部上半ハケメのちミガキ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10Y R7/3	外面煤。
2164	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、凹線4本。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2165	土師器	甕	口縁部ハケメのちヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ハケメのちヨコナデ。胴部指オサエ、ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	煤。
2166	土師器	壺?	貼付突帯、ナデ。ヘラ描き沈線文。	ナデ。	明赤褐 10Y R6/6	傾き不詳。
2167	土師器	壺?	貼付突帯。上半ナデ?。下半ヘラ描き沈線文。	ナデ?	浅黄橙 7.5Y R8/4	傾き不詳。
2168	土師器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部磨滅。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ?	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2169	土師器	甕	口縁部指オサエ、ヨコナデ。胴部右上がりのタタキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
2170	土師器	甕	口縁部指オサエ、ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ハケメ、ヨコナデ。胴部ナデ。	にぶい橙 5Y R7/4	
2171	土師器	コシキ形	磨滅。ハケメ?、指オサエ、ナデ。	ケズリ。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2172	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部・底部ケズリ。	口縁部ヨコナデ。体部・底部押圧のち丁寧なナデ。	灰白 10Y R8/2	外面煤付着。
2173	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。底部指オサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部指オサエ、ナデ。	橙 5Y R6/6	
2174	土師器	器台	杯部磨滅。脚柱部押圧、ナデ。脚部すかし穴1個残存。	杯部磨滅。脚部部押圧。	浅黄橙 10Y R8/3	
2175	土師器	製塩土器	指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	にぶい橙 5Y R6/4	
2176	土師器	製塩土器	指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	明赤褐 2.5Y R5/6	
2177	土師器	製塩土器	口縁部タタキ、胴部指オサエ、ナデ。	指オサエ、ナデ。	黒褐 10Y R3/2	
2178	須恵器	杯蓋	天井部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 7.5Y6/1	傾き不詳。
2179	須恵器	杯蓋	ケズリ。ヘラ記号。	ナデ、ヨコナデ。	灰白 N7/	
2180	須恵器	高杯	脚柱部細長いすかし穴2、沈線2本。	杯部ナデ。脚柱部不詳。	灰 N6/0	
2181	須恵器	杯蓋	天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	天井部ハケメ?。口縁部ヨコナデ。	灰白 2.5Y7/1	
2182	須恵器	杯蓋	天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	天井部ナデ。口縁部ヨコナデ。	灰黄褐 10Y R6/2	
2183	須恵器	杯蓋	天井部ヘラ切りのちナデ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰黄 2.5Y6/1	
2184	須恵器	杯蓋	天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N5/0	ロクロ回転左。
2185	須恵器	杯蓋	天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	天井部指オサエ、ナデ。口縁部ヨコナデ。	灰 7.5Y6/1	
2186	須恵器	杯蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N4/	
2187	須恵器	杯身	口縁部・体部ヨコナデ。底部ケズリ。全体に自然釉。	ヨコナデ。	灰 5Y6/1	
2188	須恵器	杯身	口縁部・体部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 7.5Y5/1	
2189	須恵器	杯身	口縁部・体部ヨコナデ。底部ケズリ。自然釉。	ヨコナデ。	灰 5Y6/1	
2190	須恵器	杯身	口縁部・体部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 7.5Y6/1	
2191	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 N7/0	ロクロ回転左。
2192	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白 N7/0	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2193	須恵器	高杯	ヨコナデ。凹線1本。すかし穴1残存。	ヨコナデ。	灰 5Y6/1	
2194	須恵器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ケズリ。脚部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ナデ。脚部ヨコナデ。	灰白 2.5Y7/1	
2195	須恵器	壺	口頸部ヨコナデ。胴部平行タタキ。穿孔2か所。	口頸部ヨコナデ。胴部青海波文、ナデ。	灰白 5Y7/1	
2196	須恵器	壺	口縁部・体部上半ヨコナデ。体部下半ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N4/	内面にタール状の付着物。
2197	須恵器	甕?	口縁部ヨコナデ。頸部ヨコナデ。「X」印。胴部タタキ。	口縁部ヨコナデ。頸部指オサエ。胴部青海波文。	灰白 5Y7/1	
2198	須恵器	杯	体部ヨコナデ。下端ケズリ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
2199	土師器	杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	橙 5YR6/6	
2200	土師器	高杯	ヨコナデ。沈線3本。	ヨコナデ。口縁部沈線1本。	橙 7.5YR6/6	内外面丹塗り。
2201	須恵器	杯	体部ヨコナデ。底部ナデ?	ヨコナデ。	灰白 2.5Y8/2	
2202	須恵器	杯	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。	灰 7.5Y6/1	
2203	須恵器	杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 5Y7/1	傾き不詳。
2204	土師器	杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	明赤褐 2.5YR5/6	傾き不詳。内外面丹塗り。
2205	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。中央部ナデ。	ヨコナデ?	にぶい橙 7.5YR6/4	
2206	土師器	碗	高台部ヨコナデ。	不詳。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2207	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2208	須恵器	壺	ヨコナデ。	ヨコナデ。	暗灰 N3/	
2209	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。	灰黄褐 10YR6/2	
2210	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り→ヘラ起し。	体部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 5YR7/6	
2211	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	口縁部ヨコナデ。底部ヨコナデ。粘土粗痕。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2212	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り。中央押圧、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	橙 2.5YR6/6	
2213	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り。中央押圧、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2214	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。粘土粗痕。底部ヘラ切り。	口縁部ヨコナデ。	橙 7.5YR6/6	
2215	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→ヘラ起し→中央ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	橙 7.5YR6/6	2216~2218に類似。
2216	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→ヘラ起し→中央ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2217	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→ヘラ起し→中央ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2218	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→ヘラ起し→中央ナデ?	口縁部ヨコナデ。底部ナデ?	にぶい橙 5YR6/4	
2219	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ナデかミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
2220	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y8/1	
2221	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
2222	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2223	瓦	平瓦	凸面細目タタキ、ナデ。	凹面磨減。布目?	にぶい黄橙 10YR7/2	土師質。
2224	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧?、ナデ。	体部ヨコナデ。底部ナデ。	橙 5YR6/6	底部押し出し。
2225	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 7.5YR6/6	
2226	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→未調整。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ?、粘土粗痕。	橙 5YR6/6	いびつ。
2227	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→ヘラ起し。	口縁部ヨコナデ。底部ヨコナデ?	橙 5YR6/6	
2228	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→未調整。	口縁部ヨコナデ。底部縁強いナデ。中央ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	
2229	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→ナデ?	ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2230	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	体部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 5YR6/6	
2231	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 5YR6/6	
2232	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 5YR6/6	
2233	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ、粘土粗痕。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2234	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 5YR6/4	
2235	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→未調整?	ヨコナデ。底部粘土粗痕。	橙 5YR6/6	
2236	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→ヘラ起し→未調整。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	2037~2039に類似。
2237	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→ヘラ起し→未調整。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2238	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→ヘラ起し→未調整。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2239	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→ヘラ起し→未調整。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2240	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部縁強いナデ。中央押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	2241・2242に類似。
2241	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部縁強いナデ。中央ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2242	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部縁強いナデ。中央押圧?、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	497・498に類似。
2243	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	体部・底部ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2244	土師器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。ハケメ。胴部ハケメ、ナデ。	灰黄褐 10YR5/2	煤。
2245	土師器	杯	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	不詳。	灰白 2.5Y8/2	
2246	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ?	灰白 10YR8/2	
2247	土師器	碗	高台部ヨコナデ。	ナデ。	にぶい黄 7.5YR6/3	
2248	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り。中央部指オサエ、ナデ?	口縁部ヨコナデ。底部指オサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2249	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り。中央部指オサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部指オサエ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2250	白磁	碗	ケズリ。細い沈線。施釉。		(釉)灰白 10Y7/1	
2251	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
2252	土師器	碗	体部・底部ナデ。高台部ヨコナデ。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2253	土師器	網	口縁部ヨコナデ。胴部指オサエ、ハケメ。	口縁部ヨコナデ、ハケメ。胴部ハケメ。	にぶい黄褐 10YR8/3	外面煤。
2254	須恵器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ？。	ヨコナデ。	灰 7.5Y5/1	
2255	須恵器	杯蓋	つまみヨコナデ。天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	天井部押圧、ナデ。口縁部ヨコナデ。	灰 5Y5/1	墨付着？硯として使用か？。
2256	須恵器	杯蓋	天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 7.5Y5/1	墨付着？硯として使用か？。
2257	須恵器	杯蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。	黄灰 2.5Y5/1	
2258	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部ケズリ？。	ヨコナデ。	灰白 2.5Y7/1	
2259	須恵器	長頸瓶	体部・高台部ヨコナデ。底部ケズリ。	体部ヨコナデ。底部ナデ。	黄灰 2.5Y6/1	
2260	須恵器	皿	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ？。	ヨコナデ、ナデ。	灰 7.5Y6/1	
2261	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。	灰 10Y6/1	
2262	須恵器	壺	口縁部・胴部ヨコナデ。底部ヘラ切りのち粗いナデ。自然釉。	ヨコナデ。	灰 N6/0	
2263	土師器	碗	ヨコナデ、ナデ。	ミガキ。	橙 5YR6/6	内面に漆？付着。
2264	須恵器	台付鉢	口縁部ヨコナデ。体部ヨコナデのち何らかの工具によるナデ。高台部・底部ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
2265	須恵器	杯	平行タタキ。	青海波文。	灰 7.5Y6/1	傾き、上下不詳。
2266	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	明赤褐 5YR5/6	
2267	土師器	杯B	口縁部・高台部ヨコナデ。体部・底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/6	
2268	土師器	杯B	口縁部・高台部ヨコナデ。体部押圧、ナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2269	土師器	杯B	磨滅。体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	磨滅。ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 7.5YR6/6	
2270	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	傾き不詳。
2271	土師器	杯	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
2272	土師器	杯	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	押圧、ナデ。	橙 5YR6/6	
2273	土師器	杯	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2274	土師器	杯	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2275	土師器	杯	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2276	土師器	碗	磨滅。体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	磨滅。ヨコナデ。底部ナデ。	橙 7.5YR6/6	
2277	土師器	碗	口縁部・高台部ヨコナデ。体部ナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2278	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰黄褐 10YR4/2	
2279	土師器	碗	磨滅。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	押圧、ナデ。	にぶい橙 5YR6/4	
2280	土師器	碗	磨滅。体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	磨滅。ヨコナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
2281	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	暗灰黄 2.5Y4/2	
2282	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2283	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ。	明赤褐 2.5YR5/6	
2284	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	橙 5YR6/6	
2285	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2286	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	磨滅。	橙 7.5Y6/6	
2287	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	橙 5YR6/6	
2288	土師器	碗	磨滅。口縁部・高台部ヨコナデ。体部押圧、ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 5YR6/6	
2289	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2290	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2291	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り？。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2292	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2293	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2294	土師器	碗	体部ナデ。高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ナデ。	橙 7.5Y7/6	
2295	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 7.5YR6/6	
2296	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧。	押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2297	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ナデ。	にぶい褐 7.5YR5/4	
2298	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
2299	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2300	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2301	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅、押圧、ナデ？。	磨滅。ヨコナデ。底部ナデ？。	橙 7.5Y6/6	
2302	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 5YR6/4	
2303	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ？。	橙 7.5Y6/6	
2304	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切りヘラ起こし、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	橙 2.5YR6/6	
2305	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り、押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2306	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。	ヨコナデ。底部ナデ。	橙 7.5Y6/6	いびつ。
2307	土師器	托	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り？、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2308	土師器	托	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ヨコナデ。底部ナデ。	橙 5YR6/6	
2309	土師器	托	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 7.5YR6/6	
2310	土師器	托	体部磨滅。高台部ヨコナデ。	磨滅。底部ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	
2311	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ？。	明褐 7.5YR5/6	
2312	土師器	内黒碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2313	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ。	明褐灰 7.5YR7/2	
2314	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。	凹面布目(2mm前後)。	灰 7.5Y5/1	
2315	緑釉陶器	碗？	ヨコナデ。	ヨコナデ。	(釉)暗オリーブ 5Y4/3	東海産？。
2316	土師器	甕	ヨコナデ。	口縁部ハケメ。胴部ナデ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
2317	須恵器	甕	平行タタキ。	青海波文。	灰 7.5Y5/1	傾き、上下不詳。
2318	土師器	杯B	磨滅。ヨコナデ？。	磨滅。ヨコナデ？。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2319	土師器	杯B	磨滅。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2320	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ？。	ヨコナデ。底部押圧。	橙 5YR6/6	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2321	土師器	杯B	口縁部ヨコナデ、ナデ。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ？。底部押圧？、ナデ。	橙 7.5YR6/6	高台付杯。
2322	土師器	杯B	口縁部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り→ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	高台付杯。
2323	土師器	杯	体部不詳。高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	押圧、ナデ？。	浅黄橙 10YR8/3	
2324	土師器	杯B	口縁部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	高台付杯。
2325	土師器	杯B	体部上半ヨコナデ、下半押圧・ナデ。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	底部押し出し。
2326	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2327	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り→ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	
2328	土師器	杯	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	磨滅。	にぶい橙 7.5YR7/3	
2329	土師器	杯	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2330	土師器	杯	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。	にぶい褐 7.5YR6/3	
2331	土師器	杯	口縁部・底部磨滅。高台部ヨコナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2332	土師器	杯B？	ヨコナデ。	ヨコナデ。底部押圧？、ナデ？。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2333	土師器	杯B？	口縁部・高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ？。	浅黄橙 10YR8/4	
2334	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。体部指オサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。体部指オサエ、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	傾き不詳。
2335	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2336	土師器	碗	口縁部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り→ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2337	土師器	碗	体部不詳。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。	にぶい橙 5YR6/4	
2338	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2339	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ？。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2340	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	いびつ。
2341	土師器	碗	磨滅。体部ミガキ。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	体部ミガキ？。底部押圧、ナデ？。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2342	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ヨコナデ。底部ナデ？。	浅黄橙 7.5YR8/4	
2343	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。	浅黄橙 7.5YR8/3	
2344	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ。	橙 7.5YR7/6	
2345	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	胎土精良。
2346	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2347	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2348	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2349	土師器	碗	ヨコナデ。	ヨコナデ。	橙 5YR7/6	内黒碗を意議。
2350	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
2351	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2352	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。	浅黄橙 10YR8/4	
2353	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り？。	ヨコナデ。底部押圧？、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2354	土師器	杯C？	磨滅。口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→ヘラ起こし。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 10YR8/2	
2355	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 5YR6/8	
2356	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2357	土師器	杯A	磨滅。口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ？。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2358	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部歪んでいる。
2359	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ？。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2360	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧。	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部歪んでいる。
2361	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。縁ヘラ切り→中央ナデ？。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2362	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。縁ヘラ切り→中央ナデ？。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2363	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 5YR6/4	
2364	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2365	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	
2366	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。縁ヘラ切り→中央ナデ？。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2367	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2368	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧？、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
2369	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ？。	ヨコナデ。中央ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2370	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。粘土組織。底部押圧、ナデ。	橙 5YR6/6	
2371	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。	ヨコナデ。底部粘土組織。	灰白 10YR8/2	
2372	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2373	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。ヘラ切り？。	ナデ。	にぶい橙 5YR7/4	
2374	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ？。	灰白 10YR8/2	
2375	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	
2376	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。円形穿孔1個。底部ヘラ切り。磨滅。	磨滅。ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2377	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
2378	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り？。磨滅。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2379	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
2380	土師器	杯A	磨滅。口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→未調整。	磨滅。ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰白 10YR8/2	
2381	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部粘土組織。	浅黄橙 10YR8/3	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2382	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部へら切り?、粘土紐痕。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2383	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部へら切り?。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ、粘土紐痕。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2384	土師器	托	口縁部・高台部ヨコナデ。底部へら切り→ナデ。	ヨコナデ。粘土紐痕。	浅黄橙 10Y R8/3	
2385	土師器	托	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	
2386	土師器	内黒碗	磨滅。体部ミガキ?。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	磨滅、ミガキ?。	灰白 2.5Y 8/1	
2387	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部不詳。	ミガキ?。	にぶい黄橙 10Y R7/4	
2388	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部へら切り、ナデ。	ミガキ。	浅黄橙 10Y R8/4	
2389	土師器	内黒碗	磨滅。底部ナデ。	磨滅。	にぶい橙 7.5Y R7/4	
2390	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	磨滅。	灰白 10Y R8/2	
2391	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ?。	ナデ?。	にぶい橙 7.5Y R6/4	
2392	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ?。	ナデかミガキ?。	にぶい橙 7.5Y R6/4	
2393	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部磨滅。	磨滅。	浅黄橙 10Y R8/3	
2394	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ?。	磨滅。	浅黄橙 7.5Y R8/6	
2395	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	磨滅。	橙 7.5Y R7/6	
2396	土師器	内黒碗	体部ミガキ。高台部ヨコナデ。底部へら切り、ナデ。	ミガキ。	にぶい黄橙 10Y R7/4	
2397	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰黄褐 10Y R6/2	
2398	灰釉陶器	碗	ヨコナデ。釉不詳。	ヨコナデ。釉不詳。	灰白 5Y 7/1	傾き不詳。
2399	灰釉陶器	碗	ヨコナデ。無釉。	ヨコナデ。口縁部凹線1本。施釉(ゴマ状)。	灰白 5Y 7/1	傾き不詳。
2400	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(釉)灰白 10Y 7/1	11~12C。
2401	緑釉陶器	碗	体部ヨコナデ?。高台部・底部ケズリ。削り出し高台。底部以外施釉。	施釉。見込みミガキ。	(釉)調)にぶい黄 2.5Y 6/4	
2402	緑釉陶器	碗	削り出し高台。畳付・底部以外施釉。	ヨコナデ?。施釉。	(釉)黄色かかった緑	(露胎部)にぶい橙 7.5Y R6/4
2403	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。口唇部はげている。	ヨコナデ。施釉。	(釉)深みのある緑	
2404	緑釉陶器	皿?	ヨコナデ。口唇部輪花?。施釉。貫入。	ヨコナデ。施釉(ゴマ状)。	(釉)深みのある緑(黒に近い緑)	2407と釉が類似。
2405	緑釉陶器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部糸切り。貼付高台。体部。底部全面施釉。	ヨコナデ。底部沈線。施釉。	(釉)深みのある緑	
2406	緑釉陶器	皿	ヨコナデ。ハケメ?。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉)明るめの緑	
2407	緑釉陶器	皿	ヨコナデ。施釉(はじけている)。	ヨコナデ。施釉(はじけている)。	(釉)深みのある緑	
2408	緑釉陶器	皿?	ヨコナデ?。削り出し高台。施釉。	ヨコナデ?。施釉。	(釉)灰オリーブ 7.5Y	
2409	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉)やや明るめの緑	
2410	緑釉陶器	碗?	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉)明るい緑	傾き不詳。
2411	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉)灰オリーブ 5Y 5/3	傾き不詳。
2412	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5Y R6/4	
2413	土師器	碗	磨滅。	磨滅。	にぶい橙 7.5Y R6/4	
2414	土師器	内黒碗	磨滅。	磨滅。	橙 7.5Y R6/6	
2415	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。ハケメ?。底部縁へら切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	浅黄 2.5Y 7/3	
2416	瓦	平瓦	凸面純目タタキ。	凹面布目(2~3mm)。	灰 7.5Y 7/1	
2417	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁へら切り→中央押圧・ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰黄褐 10Y R6/2	
2418	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰黄褐 10Y R6/2	内面丹塗り。
2419	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁へら切り→底部押圧・ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	
2420	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁へら切り→中央押圧・ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10Y R7/4	
2421	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁へら切り→中央押圧・ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	
2422	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁へら切り→中央押圧・ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄褐 10Y R6/2	内面丹塗り。
2423	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。底部指オサエのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部・底部ナデ。	灰白 7.5Y R8/2	
2424	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部磨滅。	口縁部ヨコナデ。	橙 2.5Y R6/6	内外面丹塗り。
2425	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部縁へら切り→中央押圧・ナデ。	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	内面丹塗り?。
2426	土師器	碗	磨滅。口縁部ヨコナデ。体部ミガキ?。高台部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部・底部ミガキ?。	灰黄褐 10Y R5/2	
2427	土師器	碗	磨滅。体部ミガキ?。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	磨滅。ミガキ?。	浅黄 2.5Y 8/3	図上復元。
2428	東播系須恵器	鉢	体部ヨコナデ。ナデ。底部磨滅。片口。	ヨコナデ。体部・底部使用による磨滅。	灰白 5Y 7/1	(口唇部)灰 5Y 5/1
2429	須恵器	杯	ヨコナデ。自然釉。	ヨコナデ。	灰白 N7/	
2430	須恵器	杯	磨滅。ヨコナデ?。	体部ヨコナデ。底部ナデ?。	にぶい橙 5Y R7/4	
2431	須恵器	碗	体部ヨコナデ。底部磨滅。	体部ヨコナデ。底部ナデ。	灰 5Y 6/1	
2432	須恵器	甕	タタキ。細い沈線2本。	平行タタキのち青帯波タタキ。	灰 N6/	傾き不詳。
2433	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	
2434	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部へら切り、へら起こし。	ヨコナデ。底部ナデ。	橙 5Y R7/6	
2435	土師器	杯B	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。高台部ヨコナデ。底部ナデ。爪痕。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	
2436	土師器	杯B	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R7/4	底部押し出し。
2437	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部へら切り?のちナデ。	ヨコナデ。底部押圧。	にぶい黄橙 10Y R6/4	
2438	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	押圧、ナデ。切痕。	にぶい橙 7.5Y R6/4	
2439	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5Y R6/4	
2440	土師器	杯B	体部ナデ。高台部ヨコナデ。底部へら切りのちナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙 10Y R8/3	
2441	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/4	
2442	土師器	杯B	体部・高台部底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰褐 7.5Y R6/2	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2443	土師器	杯B	高台部ヨコナデ。底部ナデ。焼成後穿孔。	ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	
2444	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい褐 7.5YR6/3	
2445	土師器	杯B	体部・底部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
2446	土師器	杯B	ヨコナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2447	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2448	土師器	杯B	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	
2449	土師器	杯B	体部押圧、ヨコナデ。高台部ヨコナデ。底部磨減。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2450	土師器	杯B?	体部磨減。高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	体部ヨコナデのちミガキ。底部ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	
2451	土師器	碗?	高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り?	ナデ?。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2452	土師器	碗?	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	磨減。底部押圧、ナデ。	橙 7.5YR6/6	
2453	土師器	碗?	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	体部ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
2454	土師器	碗?	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	
2455	土師器	碗?	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ?。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 5YR7/6	
2456	土師器	碗?	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	ヨコナデ。押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	煤。
2457	土師器	碗?	体部ナデ。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	底部押圧、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
2458	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	底部押し出し。
2459	土師器	碗	体部磨減。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2460	土師器	碗	体部磨減。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	浅黄橙 10YR8/4	
2461	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。体部押圧、ナデ。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。体部押圧。底部ナデ。	橙 5YR6/6	底部押し出し。
2462	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
2463	土師器	碗	高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2464	土師器	碗	体部ヨコナデ。沈線1本。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 5YR6/4	
2465	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
2466	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	ナデかミガキ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2467	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2468	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ミガキ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2469	土師器	碗	体部磨減。高台部ヨコナデ。底部ナデ?。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰白 10YR8/2	
2470	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	体部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2471	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。体部押圧、ヨコナデ。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。体部下半・底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	底部押し出し。
2472	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2473	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り?のちナデ。	磨減。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2474	土師器	碗	体部ナデ。高台部ヨコナデ。底部磨減。	ヨコナデ。底部伏ったような沈線、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2475	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2476	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部磨減。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰黄褐 10YR5/2	
2477	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2478	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ?。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	内黒碗のつくり。
2479	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2480	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄 2.5Y7/3	
2481	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ?。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄褐 10YR5/2	
2482	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り?。	体部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
2483	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2484	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	黄灰 2.5Y6/1	
2485	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り?→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。	にぶい褐 7.5YR6/3	
2486	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
2487	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り、ナデ?。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2488	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	橙 5YR6/6	
2489	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。指オサエ。	ヨコナデ。底部縁指オサエ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2490	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り→ヘラ起こし。	ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
2491	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄褐 10YR5/3	
2492	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
2493	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	体部・底部ヨコナデ。	明褐灰 7.5YR7/2	
2494	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2495	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
2496	土師器	杯C	磨減。体部ヨコナデ。底部縁細い沈線。	磨減。ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2497	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	
2498	土師器	杯C	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り?。螺旋状の痕跡。	体部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
2499	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2500	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2501	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2502	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2503	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2504	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り?→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
2505	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部磨減。縁ヘラ切り→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2506	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい褐 7.5YR6/3	
2507	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧?・ナデ?。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰褐 7.5YR6/2	
2508	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2509	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	
2510	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	
2511	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	
2512	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2513	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→未調整。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
2514	土師器	托	口縁部ヨコナデ。底部縁ヘラ切り→中央未調整。	ヨコナデ。中央部粘土粗痕。	灰白 10YR8/2	
2515	土師器	托	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。	灰 5Y4/1	
2516	土師器	托	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2517	土師器	托	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰白 10YR8/2	
2518	土師器	托	体部・高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2519	土師器	内黒碗	体部磨減。高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	体部ミガキ？。底部ナデ？。	にぶい橙 5YR7/4	
2520	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	押圧のちミガキ。	浅黄橙 10YR8/3	
2521	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	押圧、ナデ。	にぶい橙 2.5YR6/4	
2522	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ナデ？。	灰白 10YR8/2	
2523	土師器	内黒碗	ヨコナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
2524	土師器	内黒碗	体部ミガキ？。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	体部ミガキ？。底部ナデ？。	にぶい橙 5YR7/4	
2525	土師器	内黒碗	体部ミガキ。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	磨減。ミガキ？。	浅黄橙 10YR8/3	
2526	土師器	内黒碗	体部ミガキ。高台部ヨコナデ。底部押圧？、ナデ。	ミガキ。	浅黄橙 10YR8/3	
2527	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部磨減。	ミガキ。	灰黄 2.5Y6/2	
2528	土師器	内黒碗	ヨコナデ。	磨減。	にぶい黄橙 10YR7/2	
2529	土師器	内黒碗	ヨコナデ？。	ミガキ？。	明赤褐 5YR5/6	
2530	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ？。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2531	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ナデ？。	橙 2.5YR6/6	
2532	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
2533	土師器	甕	指オサエ、ナデ、粗いハケメ。	強い指オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y8/2	煤。
2534	土師器	羽釜	口縁部貼付突帯。指オサエ、ナデ。	ナデ。	にぶい橙 5YR6/4	
2535	緑釉陶器	碗	ケズリ、削り出し高台。豊付・底部以外施釉。	ナデ。一部施釉。	(釉)薄い緑色	
2536	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。口唇部はげている。	ヨコナデ。施釉。	(釉)深みのある緑	
2537	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。貼付高台に段。全面施釉。	ヨコナデ。施釉。圏線1本。	(釉)深緑	
2538	緑釉陶器	碗	体部・高台部ヨコナデ。施釉。底部米切り、一部施釉。貼付高台に段。	ヨコナデ。施釉。底部に圏線1本。	(釉)明るめの深緑	(露胎部)にぶい橙 7.5YR6/4
2539	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。貼付高台。高台部わずかに段。全面施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉)黄色かかった緑と深みのある緑	
2540	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。貼付高台。全面施釉。	ヨコナデ。底部凹線1本。施釉。	(釉)深みのある緑	
2541	緑釉陶器	皿	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉)深みのあるきみどり	
2542	緑釉陶器	長頸瓶？	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉)明るめの緑地	
2543	緑釉陶器	長頸瓶？	施釉(はじけている、ゴマ状)。	ヨコナデ。押圧。施釉。	(釉)深緑ときみどり色と薄い緑	
2544	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。ミガキ？。口縁端部沈線1本。施釉。	ヨコナデ。ミガキ。施釉。	(釉)黄褐色	
2545	灰釉陶器	碗	ヨコナデ。無釉。	ヨコナデ。薄く施釉(ハケ塗り?)。	灰白 5Y7/1	
2546	灰釉陶器	碗	ヨコナデ。無釉。	ヨコナデ。薄く施釉(ゴマ状)。	(釉)明るい緑がかかった灰色	
2547	灰釉陶器	碗	ヨコナデ。無釉？。	ヨコナデ。無釉？。	灰 5Y6/1	傾き不詳。
2548	灰釉陶器	碗	ヨコナデ。無釉。	ヨコナデ。口縁端部沈線1本。施釉(ゴマ状)。	灰白 N7/	傾き不詳。
2549	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(釉)灰白 10Y8/1	邢州窯系(9C中頃)。
2550	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(釉)灰白 N8/	邢州窯系(9C中頃)。
2551	白磁	碗	ケズリ。体部施釉。高台部・底部露胎。	ケズリ。施釉。見込み部分環状に釉をかきとっている。	(釉)灰白 5Y7/2	
2552	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(釉)灰白 N8/	邢州窯系(9C中頃)。傾き不詳。
2553	青磁	碗	ケズリ。施釉。口唇部釉がはげている。	ケズリ。施釉。	(釉)灰オリブ 5Y6/2	9C後半。
2554	瓦	丸瓦	凸面ナデ？。	凹面布目(1mm前後)のち工具ナデ？。	淡橙 5YR8/3	
2555	瓦	丸瓦	凸面ナデ。	凹面布目(1mm前後)。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2556	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。端部ナデ。	凹面布目(1~2mm)。	浅黄橙 10YR8/3	
2557	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。	凹面布目(2mm前後)。	浅黄橙 7.5YR8/6	
2558	須恵器	杯蓋	天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰 N5/	
2559	須恵器	杯蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。天井部ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	軟質、粗い、備中産？。
2560	須恵器	杯蓋	天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N6/	
2561	須恵器	杯蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。天井部ナデ。	灰 5Y6/1	
2562	須恵器	杯蓋	体部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 5Y8/1	
2563	須恵器	蓋	ヨコナデ。自然釉。	ヨコナデ。	灰 5Y6/1	
2564	須恵器	杯蓋	つまみヨコナデ。天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	天井部ナデ。口縁部ヨコナデ。	灰 7.5Y6/1	
2565	須恵器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ナデ。	口縁部ヨコナデ。天井部ナデ。	灰 7.5Y6/1	
2566	須恵器？	杯身	磨減。口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り？。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ？。	橙 7.5YR7/6	焼成土師質。
2567	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切りのちナデ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 7.5Y7/1	
2568	須恵器	杯身	体部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰 5Y6/1	2580に類似。
2569	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰白 2.5Y8/1	
2570	須恵器	杯身	体部上半ヨコナデ。下半ケズリ。高台部ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 5Y7/1	
2571	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白 7.5Y7/1	
2572	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部不詳。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰 7.5Y6/1	

掲載番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
2573	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部へラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰 5Y5/1	
2574	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 5Y6/1	
2575	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部へラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰 10Y5/1	
2576	須恵器	杯身	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 7.5Y5/1	
2577	須恵器	杯身	体部ヨコナデ。底部へラ切りのちナデ？。	ヨコナデ。体部・底部使用による磨減。	灰 7.5Y6/1	
2578	須恵器	杯身	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 2.5Y8/2	
2579	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部へラ切りのちナデ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰 5Y6/1	
2580	須恵器	杯身	体部ヨコナデ。底部へラ切り。	ヨコナデ。底部粘土組痕。	灰 7.5Y6/1	
2581	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部へラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 2.5Y7/1	焼成ややあまい。
2582	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。	暗灰 N3/0	
2583	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 5Y7/1	
2584	須恵器	杯身	ヨコナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 7.5Y7/1	
2585	土師器	杯身	高台部ヨコナデ。底部へラ切り。	ヨコナデ。	灰 N6/	
2586	土師器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部へラ切り？。	ヨコナデ。	褐灰 10YR6/1	
2587	須恵器	杯身	体部・高台部ヨコナデ。底部へラ切りのちナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 2.5Y7/1	内面が磨減してつるつるしている。
2588	須恵器	杯身	体部ヨコナデ。底部へラ切り。	ヨコナデ。	灰 7.5Y6/1	観として使用した可能性有り。
2589	須恵器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。	灰白 2.5Y7/1	
2590	須恵器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	灰白 2.5Y7/1	
2591	須恵器	杯蓋	つまみナデ。天井部ケズリ。口縁部ヨコナデ。	天井部ナデ。口縁部ヨコナデ。	灰 10Y6/1	
2592	須恵器	皿	ヨコナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰 5Y6/1	
2593	須恵器	皿	体部・高台部ヨコナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 2.5Y8/1	
2594	須恵器	皿	口縁部ヨコナデ。底部ナデ？。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	灰白 2.5Y7/1	
2595	須恵器	瓶	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 N7/0	
2596	須恵器	瓶	胴部上半・高台部ヨコナデ。胴部下半ケズリ。	ヨコナデ。体部・底部使用による磨減。	灰白 2.5Y8/1	
2597	須恵器	瓶	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N5/	
2598	須恵器	蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N5/0	
2599	須恵器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。	灰 7.5Y6/1	
2600	須恵器	碗？	ヨコナデ。	ナデ。	灰 7.5Y6/1	
2601	須恵器	壺	口縁部・胴部上半指オサエ、ヨコナデ。胴部下半ケズリのちナデ。	指オサエ、ヨコナデ。	灰 N7/0	
2602	須恵器	碗	体部ヨコナデ。底部糸切り。	ヨコナデ。	灰 7.5Y6/1	
2603	須恵器	甕	ヨコナデ。自然釉。	ヨコナデ。	灰 5Y6/1	
2604	須恵器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部平行タタキ。自然釉。	口縁部ヨコナデ。胴部青海波文。	暗オリーブ灰 5GY4/1	全体に自然釉。
2605	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。体部押圧、ナデ。	口縁部ヨコナデ。体部押圧、ナデ？。	橙 5YR6/6	
2606	土師器	杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2607	土師器	杯	口縁部ミガキ？。底部ケズリ。	ミガキ？。	橙 2.5YR6/6	内外面丹塗り。
2608	土師器	杯	口縁部ミガキ？。底部磨減。	磨減。	明褐灰 7.5YR7/2	内外面共丹塗り。
2609	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	素地 浅黄橙 10YR	内外面丹塗り。
2610	土師器	杯	口縁部ミガキ？。底部磨減。	口縁部ミガキ？。底部磨減。	にぶい橙 5YR6/4	内外面丹塗り。
2611	土師器	杯	口縁部ミガキ。底部磨減。	口縁部ミガキ？。底部ミガキ？。	橙 5YR6/6	内外面丹塗り。
2612	土師器	杯	口縁部ミガキ？。底部磨減。	口縁部ミガキ。底部磨減。	橙 5YR6/6	内外面丹塗り。
2613	土師器	杯	口縁部ミガキ。底部磨減。	口縁部ミガキ。底部ミガキ？。	橙 2.5YR6/6	内外面丹塗り。
2614	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	素地 浅黄橙 7.5YR8/3	内外面丹塗り。
2615	土師器	杯	体部磨減。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	磨減。	にぶい黄橙 10YR6/4	器形は須恵器。
2616	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部不詳。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面丹塗り。
2617	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部へラ切り→中央押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	内面に一部丹塗り残存？。
2618	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
2619	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部へラ切り→中央押圧。	ヨコナデ。	橙 7.5Y6/6	
2620	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部へラ切り？。	ヨコナデ。	明赤褐 5YR5/6	
2621	土師器	杯	口縁部ミガキ？。底部縁静止ケズリ・ナデ、中央押圧・ナデ。	口縁部ミガキ？。底部磨減。	橙 5YR7/6	
2622	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	口縁部ヨコナデ。底部ミガキ？。	橙 5YR6/6	
2623	土師器	皿	口唇部凹線。口縁部ミガキ？。底部ケズリ。	ミガキ。	橙 2.5YR6/6	内外面丹塗り。
2624	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	ヨコナデ。	橙 5YR7/6	
2625	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2626	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ？。	明赤褐 2.5YR5/6	内外面丹塗り。
2627	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	ヨコナデ。	にぶい黄橙 7.5YR6/4	
2628	土師器	皿	口縁部ミガキ？。底部磨減。	口縁部ミガキ？。底部磨減。	浅黄橙 10YR8/3	内面丹塗り。
2629	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	にぶい黄橙 10YR6/4	
2630	土師器	皿	磨減。口縁部ヨコナデ。底部不詳。	ヨコナデ？。	にぶい赤褐 5YR5/4	内外面丹塗り。
2631	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	橙 5YR6/6	
2632	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部磨減。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ？。	にぶい黄橙 10YR6/4	内外面丹塗り。
2633	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。ミガキ？。底部へラ切り→中央押圧・ナデ。	口縁部ミガキ。底部磨減。押圧、ナデ。	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面丹塗り。
2634	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部へラ切り？。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ？。	にぶい橙 7.5YR6/4	
2635	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部へラ切り。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR6/4	内外面丹塗り。
2636	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部へラ切り。	ヨコナデ。	橙 7.5YR6/6	
2637	土師器	皿	口縁部ヨコナデ。底部へラ切り→中央押圧・ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	橙 7.5YR6/6	
2638	土師器	蓋	ヨコナデ、ミガキ。	ヨコナデ、ミガキ。	橙 5YR7/6	
2639	土師器	鉢	ミガキ？。	ミガキ？。	にぶい橙 5YR7/4	内外面共丹塗り。

掲載番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
2640	土師器	高杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	内外面丹塗り。
2641	土師器	高杯	磨減。脚柱部8角形の面取り。	脚柱部しぼり痕。	にぶい橙 7.5Y R6/4	本来丹塗り。
2642	土師器	高杯	磨減。脚柱部。8角形の面取り。	脚柱部しぼり痕。	にぶい黄橙 10Y R6/4	
2643	土師器	高杯	ミガキ。9角形の面取り。	指オサエ、ナデ。	橙 5Y R6/6	外面丹塗り。
2644	土師器	杯B	磨減。ヨコナデ？。	磨減。ヨコナデ？。	橙 5Y R7/6	
2645	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	橙 2.5Y R6/8	
2646	土師器	杯B	磨減。体部・高台部ヨコナデ？。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R7/2	
2647	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り？のちナデ、爪痕。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい褐 7.5Y R6/3	高台付杯。
2648	土師器	杯B	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り？のちナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/4	
2649	土師器	杯B	口縁部ヨコナデ。体部ナデ、爪痕跡。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R7/4	
2650	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。体部押圧、ナデ。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	口縁部ヨコナデ。体部・底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	
2651	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ。	不詳。	灰黄 2.5Y 6/2	
2652	土師器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ヘラ切り？、ナデ。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	
2653	土師器	杯A	磨減。口縁部押圧、ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい橙 5Y R6/4	
2654	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	
2655	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り？。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R6/4	
2656	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り？、同心円状の凹線。	ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	にぶい黄橙 10Y R7/4	
2657	土師器	杯A	口縁部ヨコナデ。底部ヘラ切り。	ヨコナデ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2658	土師器	托	体部磨減。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	磨減。底部押圧、ナデ。	浅黄橙 7.5Y R8/4	
2659	土師器	托	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ヨコナデ、押圧、ナデ、ミガキ？。	浅黄橙 10Y R8/3	
2660	土師器	鍋	口縁部指オサエ、ヨコナデ。胴部上半細かいハケメ、下半粗いハケメ。	口縁部ハケメ、ヨコナデ。胴部磨減、指オサエ・ナデ。	にぶい橙 7.5Y R7/4	
2661	土師器	羽釜	ヨコナデ。	ナデ。	灰白 7.5Y R8/2	
2662	土師器	内黒碗	磨減。ミガキ？。	磨減。ミガキ。	にぶい褐 7.5Y R5/4	
2663	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ？。	浅黄橙 7.5Y R8/4	
2664	土師器	内黒碗	不詳。	不詳。	灰黄 2.5Y 7/2	
2665	土師器	内黒碗	ナデ？。	ミガキ？。	にぶい黄橙 10Y R7/2	傾き不詳。
2666	土師器	内黒碗	磨減。	磨減。	橙 7.5Y R6/6	
2667	土師器	内黒碗	口縁部・高台部ヨコナデ。体部ミガキ。底部ナデ。	ヨコナデ？。	浅黄橙 10Y R8/3	
2668	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ？。	橙 7.5Y R7/6	
2669	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部押圧・ナデ。	ナデ？、ミガキ？。	灰白 2.5Y 8/2	
2670	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ。	にぶい褐 7.5Y R5/4	
2671	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ナデ？。	灰白 10Y R8/2	傾き不詳。
2672	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ナデ？、ミガキ？。	にぶい橙 7.5Y R7/4	
2673	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ミガキ？。	橙 7.5Y R7/6	
2674	土師器	内黒碗	体部磨減。高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ミガキ。	浅黄橙 10Y R8/3	
2675	土師器	内黒碗	ヨコナデ。	ナデ？。	淡橙 5Y R8/3	
2676	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ミガキ？。	浅黄橙 10Y R8/4	
2677	土師器	内黒碗	体部ミガキ。高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ミガキ。	にぶい黄橙 10Y R6/3	
2678	土師器	内黒碗	体部・高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	ミガキ。	灰黄褐 10Y R6/2	
2679	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ？。	磨減。	橙 5Y R6/6	
2680	土師器	内黒碗	体部ミガキ？。高台部ヨコナデ。	ミガキ？。	橙 5Y R6/6	
2681	土師器	内黒碗	体部ミガキ。高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ヨコナデ、ミガキ。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2682	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ミガキ。	灰白 10Y R8/2	
2683	土師器	内黒碗	高台部ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ？、ミガキ？。	にぶい黄橙 10Y R7/3	
2684	緑釉陶器	碗	ケズリ、ヨコナデ。平高台。全面施釉。	ミガキ。施釉。	(釉) 淡い黄緑	(素地) 灰白 2.5Y 8/1
2685	緑釉陶器	碗	ケズリ、ヨコナデ？。削り出し高台(圓線高台)。底部圓線1本。体部施釉。底部露胎。	ヨコナデ、ミガキ。施釉。	(釉) 灰色がかったオリブ	(素地) にぶい褐 7.5Y R5/4
2686	緑釉陶器	碗	ケズリ、ヨコナデ？。削り出し高台。畳付・底部以外施釉。	ヨコナデ。わずかにミガキ？。施釉。	(釉) 橙がかった薄緑	
2687	緑釉陶器	皿	ヨコナデ。施釉。口唇部はげている。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 深みのある緑(灰オリブ)	
2688	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 深みのある黒っぽい緑	
2689	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。貫入。	ヨコナデ。施釉。貫入。	(釉) やや深みのある緑	
2690	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。口唇部はげている。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 深みのある緑と明るい緑	
2691	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。口唇部少しはげている。	ヨコナデ。施釉。	(釉) やや深みのある緑	
2692	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。口唇部はげている。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 深みのある緑(オリブ黒)	
2693	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。口唇部はげている。	ヨコナデ、タテのミガキ？。施釉。	(釉) 濃い緑ときみどり色	
2694	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 暗いオリブ	(素地) 暗灰黄
2695	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 明るめの緑(オリブ灰)	
2696	緑釉陶器	碗？	ヨコナデ、ナデ。貼付高台。全面施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 明るい緑色	
2697	緑釉陶器	碗	体部・高台部ヨコナデ。高台部段。底部糸切り？。体部・高台部一部の底部に施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 明るい緑	
2698	緑釉陶器	碗	ヨコナデ、ナデ？。貼付高台。全面施釉。	ナデ。施釉。	(釉) 深いグリーン	(素地) 浅黄橙 10Y R8/4
2699	緑釉陶器	碗	底部不詳(ナデ？)。貼付高台。畳付・底部以外施釉。	ヨコナデ。底部圓線1本。施釉。	(釉) 明るめの緑	(露胎部) にぶい橙 7.5Y R7/4
2700	緑釉陶器	碗	体部・高台部ヨコナデ。底部糸切り。貼付高台、段。畳付・底部以外に施釉。	ヨコナデ。施釉。底部に圓線1本。	(釉) 明るい緑色	
2701	緑釉陶器	碗？	ヨコナデ。施釉。	ヨコナデ。施釉。	(釉) やや明るめの緑	
2702	緑釉陶器	碗	ヨコナデ。施釉。口唇部はげている。	ヨコナデ。施釉。	(釉) 明るめの緑	

掲載 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
2703	緑釉陶器	碗?	貼付高台?。施釉。	施釉。	(釉)深緑	
2704	緑釉陶器	碗?	ヨコナデ。貼付高台。施釉(ゴマ状)。	ヨコナデ。施釉(ゴマ状)。	(釉)明るい緑色	傾き不詳。
2705	緑釉陶器	長頸瓶?	不詳。施釉(たれている)。	不詳。施釉。	(釉)明るい緑色	傾き、上下不詳。
2706	緑釉陶器	長頸瓶?	ヨコナデ?。施釉。	ヨコナデ。施釉(ゴマ状)。	(釉)明るい緑色	傾き不詳。
2707	灰釉陶器	碗	体部上半ヨコナデ。体部下半・高台部・底部ケズリ?。無釉。	ヨコナデ。薄く施釉(ゴマ状)。	(釉)明るい緑がかった灰色	
2708	灰釉陶器	碗	体部上半・高台部ヨコナデ。体部下半ケズリ。底部ヘラ切り?。体部上半薄く施釉。	ヨコナデ。施釉(ハケ塗り?)。	(釉)灰 10Y5/1	
2709	灰釉陶器	碗	体部ケズリ?。高台部ヨコナデ。無釉。	不詳。厚く施釉。	灰白 7.5Y7/1	
2710	灰釉陶器	碗	高台部ヨコナデ。底部ケズリ。無釉。	施釉。重ね焼き痕跡。	灰白 5Y7/1	
2711	灰釉陶器	碗	体部・底部ケズリ。高台部ヨコナデ。無釉。	ナデ。厚く施釉。	(釉)うすい灰色がかったオリーブ	(素地)灰白 N7/
2712	灰釉陶器	碗	体部ケズリ。高台部ヨコナデ。無釉。	ナデ?。厚く施釉。	灰白 N7/	
2713	灰釉陶器	碗	体部ヨコナデ。ケズリ?。底部ケズリ。無釉。	ナデ。施釉(ハケ塗り?)。	灰白 5Y7/1	
2714	灰釉陶器	碗?	高台部ヨコナデ。底部ケズリ、ナデ?。無釉。	ヨコナデ。薄く施釉。	(釉)明るい緑がかった灰色	
2715	灰釉陶器	碗	体部・底部ケズリ?。高台部ヨコナデ。無釉。	ナデ?。厚く施釉。	灰白 N7/	
2716	灰釉陶器	碗	ヨコナデ。無釉。	不詳。厚く施釉。	灰白 7.5Y8/1	
2717	灰釉陶器	碗	体部・底部ケズリ。高台部ヨコナデ。無釉。	ヨコナデ。無釉。	灰白 7.5Y7/1	
2718	灰釉陶器	碗	体部・底部ケズリ。高台部ヨコナデ。無釉。	ヨコナデ。薄く施釉。	(釉)灰黄 2.5Y6/2	
2719	青磁	碗	ケズリ。施釉。口唇部ザラザラしている。	ケズリ。施釉。	(素地)灰白 5Y8/1	越州窯(9~11C)。傾き不詳。
2720	青磁	碗	ケズリ。施釉。口唇部はげている。	ケズリ。施釉。	(素地)灰白 N7/0	越州窯。傾き不詳。
2721	青磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(素地)灰白 2.5GY8/1	越州窯(10C初頭~前葉)。
2722	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(素地)灰白 2.5GY8/1	胎土が白くない。
2723	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(釉)灰白 7.5Y8/1	けい州窯系。
2724	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(釉)灰オリーブ 7.5Y6/2	11C初頭。傾き不詳。
2725	瓦	平瓦	凸面ナデ?。	凹面布目(1~2mm)。	灰 7.5Y5/1	
2726	瓦	平瓦	凸面ナデ?。	凹面布目(1~2mm)。	橙 2.5YR7/6	
2727	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ、ナデ?。	凹面布目(1mm前後)。端部ケズリ。	灰 7.5Y6/1	須恵質。
2728	瓦	平瓦	凸面縄目タタキのちナデ?。	凹面布目、ナデ。	(表)褐灰 10YR5/1	土師質。
2729	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。	凹面布目(1mm前後)。焼成後記号?。	暗灰黄 2.5Y5/2	
2730	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。	凹面布目(1~2mm)。	(表)橙 7.5YR7/6	土師質。
2731	瓦	瓦	凸面ナデ。	凹面タテ方向に筋。布目(1mm前後)。	灰白 10YR8/2	
2732	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。	凹面布目(1mm前後)。	灰白 2.5Y8/1	須恵質。
2733	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。	凹面布目(1~2mm)。端部ナデ?。	灰 N5/	須恵質。
2734	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。	凹面布目(2mm前後)。	灰白 N7/0	須恵質。
2735	瓦	平瓦	凸面縄目タタキ。	凹面布目(2~3mm)。	灰白 10YR8/1	土師質。
2736	瓦	平瓦	凸面格子タタキ。	凹面布目(1mm前後)。	灰 10Y5/1	須恵質。
2737	土師器	碗	口縁部ヨコナデ。体部押圧、ナデ。高台部ヨコナデ。底部押圧、ナデ。	ヨコナデ。押圧、ナデ。	浅黄橙 10YR8/2	
2738	瓦器	碗	ナデ。	ミガキ。	灰 N4/	
2739	亀山焼	甕	頸部ヨコナデ。胴部格子タタキ。	頸部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰 N6/	傾き不詳。
2740	亀山焼	甕	頸部ヨコナデ。胴部長方形格子タタキ。	頸部ヨコナデ。胴部指オサエ?。ハケメ。	灰 N5/	傾き不詳。
2741	瓦質	鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N6/	黒斑付着。
2742	東播系須恵器	鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 N7/	口唇部黒斑。
2743	東播系須恵器	鉢	体部ヨコナデ。底部米切り。	ヨコナデ。	灰白 N7/0	
2744	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(素地)灰白 5Y8/1	
2745	白磁	碗	ケズリ。体部上半施釉、下半露胎。	ケズリ。施釉。	(素地)灰白 5Y8/1	
2746	白磁	碗	ケズリ。施釉。貫入。	ケズリ。施釉。貫入。沈線。	(釉)灰 5Y8/1	
2747	白磁	碗	ケズリ。体部上半施釉、下半露胎。	ケズリ。施釉。釉がたれている。	(釉)灰白 7.5Y7/1	
2748	白磁	碗	ケズリ。体部上半施釉、下半露胎。底部露胎。	ケズリ。沈線。施釉。	(釉)灰オリーブ 7.5Y6/2	
2749	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。	(釉)灰白 5Y7/1	
2750	白磁	碗	ケズリ。露胎。	ケズリ。沈線。施釉。	(素地)灰白 7.5Y7/1	内面のみ施釉。
2751	白磁	碗	ケズリ。露胎。	ケズリ。沈線。施釉。	灰白 7.5Y7/1	
2752	白磁	碗	ケズリ。露胎。	ケズリ。沈線1本。施釉。	(素地)灰白 5Y7/1	
2753	白磁	碗	ケズリ。露胎。	ケズリ。沈線。施釉。	(釉)灰 7.5Y6/1	
2754	白磁	碗	ケズリ。体部施釉。高台部・底部露胎。	ケズリ。施釉。	(素地)灰白 N7/0	
2755	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。施釉。クシ描き沈線文。	(素地)灰白 N8/0	傾き不詳。
2756	白磁	碗	ケズリ。施釉。	ケズリ。沈線。クシ描き沈線文。施釉。	(素地)灰白 N8/0	傾き不詳。
2757	青磁	碗	ケズリ。体部クシ描き沈線。施釉。	ケズリ。施釉。	(釉)灰 10Y6/1	
2758	白磁	皿	ケズリ。沈線。施釉。	ケズリ。段。施釉。	(素地)灰白 N8/0	
2759	青磁	皿	ケズリ。底部以外施釉。貫入。	ケズリ。クシ描き沈線文。施釉。貫入。	(釉)オリーブ黄 7.5Y	同安窯系。
2760	青磁	皿	ケズリ。体部下端・底部以外施釉。	ケズリ。クシ描き沈線文。施釉。	(釉)灰 10Y6/1	同安窯系。

第14表 新旧遺構名称对照表

新遺構名	調査区名	旧遺構名	時 期
斜面堆積 1	H C 2 A H C 2 B		縄文時代後期初頭
斜面堆積 2	H C 2 A		縄文時代晩期中葉
土壇124	Y A 1	No. 2	縄文時代晩期中葉
竪穴住居28	Y A 2 A	No.110	弥生時代中期前葉～中葉
竪穴住居29	Y A 2 B	No. 3	弥生時代中期前葉
建物58	Y A 2 A	No.113	弥生時代前期後葉～中期前葉
土壇125	Y A 2 A	No.116	弥生時代前期後葉
土壇126	Y A 2 A	No.118	弥生時代前期後葉
土壇127	Y A 2 A	No.119	弥生時代前期後葉
土壇128	H C 1 A	No.35	弥生時代前期後葉～中期前葉
土壇129	H C 1 A	No.30	弥生時代中期前葉
土壇130	H C 1 A	No.34	弥生時代中期前葉
土壇131	H C 1 A	No.29	弥生時代前期後葉～中期前葉
土壇132	Y A 2 A	No.114	弥生時代前期後葉～中期前葉
土壇133	Y A 2 A	No.115	弥生時代前期後葉
土壇134	Y A 2 A	No.66	弥生時代前期中葉
土壇135	Y A 2 A	No.91	弥生時代前期後葉～中期前葉
土壇136	Y A 2 A	No.67	弥生時代前期後葉
土壇137	Y A 2 A	No.86	弥生時代前期後葉
土壇138	Y A 2 A	No.68	弥生時代前期
土壇139	H C 1 A	No.28	弥生時代前期
土壇140	Y A 2 A	No.76	弥生時代前期後葉
土壇141	Y A 2 A	No.107	弥生時代前期後葉
土壇142	Y A 2 A	No.108	弥生時代中期前葉
土壇143	H C 1 A	No.17	弥生時代中期前葉
土壇144	Y A 2 A	No.94	弥生時代中期前葉
土壇145	Y A 2 A	No.111	弥生時代前期後葉
土壇146	Y A 2 A	No.64	弥生時代中期前葉
土壇147	Y A 2 A	No.89	弥生時代前期後葉～中期前葉
土壇148	Y A 2 A	No.47	弥生時代中期前葉
土壇149	Y A 2 A	No.57	弥生時代中期前葉
土壇150	Y A 2 A	No.58	弥生時代前期後葉～中期前葉
溝152	H C 6	No. 4	弥生時代前期後葉
溝153	H C 6	No. 5	弥生時代前期後葉
溝154	H C 6	No. 6	弥生時代前期後葉
溝155	Y A 2 A	No.98	弥生時代中期前葉
溝156	Y A 2 A	No.106	弥生時代前期後葉～中期前葉
溝157	Y A 2 A	No.92	弥生時代前期後葉～中期前葉
溝158	Y A 2 A	No.109	弥生時代前期～中期前葉
溝159	Y A 2 A	No.99	弥生時代中期前葉
溝160	Y A 2 A	No.83	弥生時代中期前葉
溝161	Y A 2 B	No.11	弥生時代前期
溝162	H C 2 A	No. 3	弥生時代前期中葉～後葉
溝162	H C 2 A	No. 5	弥生時代前期中葉～後葉
溝162	H C 2 B	No. 2	弥生時代前期中葉～後葉
溝162	Y A 2 B	No. 9	弥生時代前期中葉～後葉
溝163	Y A 3	No.15	弥生前期～中期前葉
竪穴住居30	Y A 2 A	No.105	弥生時代中期前葉～中葉
竪穴住居31	H C 1 A	No.23	弥生時代中期前葉～後期前葉
竪穴住居32	H C 1 A	No.22	弥生時代中期前葉～中葉
竪穴住居33	Y A 2 A	No.117	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居34	Y A 2 A	No.63	弥生時代後期前葉
竪穴住居35	Y A 2 A	No.75	弥生時代中期中葉
竪穴住居36	Y A 2 A	No.90	弥生時代中期中葉
竪穴住居37	Y A 3	No.39	弥生時代後期末葉
竪穴住居38	H C 3 B	SH02	弥生時代後期
竪穴住居39	H C 3 B	SH01	弥生時代後期前葉
建物59	Y A 2 A	No.70	弥生時代後期前葉
建物60	Y A 2 A	No.88	弥生時代中期後葉
袋状土壇29	Y A 2 A	No.71	弥生時代後期前葉
袋状土壇30	H C 1 A	No.15	弥生時代中期中葉
袋状土壇31	Y A 2 A	No.101	弥生時代後期前葉
袋状土壇32	Y A 2 A	No.100	弥生時代中期中葉
袋状土壇33	Y A 5	No. 4	弥生時代後期前葉
袋状土壇34	Y A 5	No. 2	弥生時代後期前葉

新遺構名	調査区名	旧遺構名	時 期
袋状土壇35	Y A 5	No. 1	弥生時代後期前葉
土壇151	Y A 2 A	No.103	弥生時代中期中葉
土壇152	Y A 2 A	No.102	弥生時代中期中葉～後期
土壇153	Y A 2 A	No.78	弥生時代中期後葉～後期前葉
土壇154	Y A 2 A	No.72	弥生時代中期中葉
土壇155	Y A 2 A	No.69	弥生時代中期中葉
土壇156	H C 1 A	No.32	弥生時代中期中葉
土壇157	H C 1 A	No.31	弥生時代中期前葉～中葉
土壇158	Y A 2 A	No.65	弥生時代中期中葉～後期
土壇159	H C 1 A	No.19	弥生時代中期中葉
土壇160	H C 1 A	No.14	弥生時代中期後葉
土壇161	Y A 2 A	No.73	弥生時代中期中葉～後期
土壇162	Y A 2 A	No.74	弥生時代中期中葉
土壇163	Y A 2 A	No.79	弥生時代中期中葉～後葉
土壇164	Y A 2 A	No.84	弥生時代中期中葉
土壇165	H C 1 A	No.24	弥生時代中期前葉～中葉
土壇166	H C 1 A	No.18	弥生時代中期前葉～中葉
土壇167	H C 1 A	No.27	弥生時代中期中葉
土壇168	Y A 2 A	No.87	弥生時代中期中葉
土壇169	Y A 2 A	No.95	弥生時代中期中葉
土壇170	Y A 2 A	No.93	弥生時代後期前葉
土壇171	Y A 2 A	No.82	弥生時代中期前葉～中葉
土壇172	Y A 2 A	No.53	弥生時代中期中葉
土壇173	Y A 2 A	No.85	弥生時代中期中葉
土壇174	Y A 2 B	No. 6	弥生時代中期中葉
土壇175	Y A 2 B	No. 5	弥生時代中期中葉
土壇176	Y A 3	No.43	弥生時代中期後葉
土壇177	Y A 3	No.44	弥生時代中期後葉
土壇178	Y A 3	No.34	弥生時代
土壇179	Y A 3	No.29	弥生時代中期後葉
土壇180	Y A 3	No.31	弥生時代中期後葉
土壇181	Y A 3	No.35	弥生時代
土壇182	Y A 3	No.33	弥生時代中期後葉
土壇183	Y A 3	No.47	弥生時代中期後葉
土壇184	Y A 3	No.48	弥生時代
土壇185	H C 3 E	SX04	弥生時代中期中葉
土壇186	H C 3 C	SX05	弥生時代中期中葉以降
土壇187	H C 3 C	SK02	弥生時代中期後葉
火処 5	Y A 2 A	No.81	弥生時代
柱穴 1	Y A 2 A	P 170	弥生時代中期中葉以降
柱穴 2	Y A 3	P 125	弥生時代中期後葉
柱穴 3	Y A 3	P 134	弥生時代中期後葉
柱穴 4	Y A 3	P 127	弥生時代中期後葉
溝164	H C 6	No. 3	弥生時代中期後葉～後期初頭
溝165	H C 2 A	No. 1	弥生時代中期中葉
溝165	H C 2 A	No. 2	弥生時代中期中葉
溝165	H C 2 A	No. 4	弥生時代中期中葉
溝165	Y A 2 B	No. 8	弥生時代中期中葉
溝165	Y A 2 B	No.10	弥生時代中期中葉
溝166	H C 2 B	No. 1	弥生時代中期中葉
溝166	Y A 3	No.13	弥生時代中期中葉
溝167	Y A 3	No.46	弥生時代
溝168	Y A 3	No.32	弥生時代
溝169	Y A 4	No. 4	弥生時代中期中葉
溝170	H C 4 B	SD09	弥生時代
溝171	H C 4 A	SD07	弥生時代中期～後期
溝172	H C 3 E	SD04	弥生時代
溝173	H C 3 C	SD10	弥生時代中期
溝174	H C 3 A	SD01	弥生時代後期
溝175	H C 3 A	SD03	弥生時代後期
護岸状遺構	H C 5 C	SA01	弥生時代後期前葉
石列	H C 2 B	No. 3	弥生時代中期中葉以前
竪穴住居40	Y A 3	No.41	古墳時代前期前葉
竪穴住居41	Y A 3	No.23	古墳時代後期
竪穴住居42	Y A 3	No.37	古墳時代前期前葉
竪穴住居42	Y A 3	No.38	古墳時代前期前葉

新遺構名	調査区名	旧遺構名	時 期
竪穴住居43	YA 3	No.36	古墳時代前期前葉
竪穴住居44	YK	住居古	古墳時代前期前葉
竪穴住居45	YK	住居新	古墳時代後期
建物61	HC 3 B	SB03	古墳時代後期
建物62	HC 3 A	SB02	古墳時代前期前葉
土壌188	YA 2 A	No.97	古墳時代前期前葉
土壌189	YA 2 A	No.77	6 C後半
土壌190	YA 3	No.20	古墳時代前期前葉
土壌191	YA 3	No.42	古墳時代前期前葉
土壌192	YA 3	No.30	古墳時代前期前葉
柵列状遺構17	HC 3 A	SC01	古墳時代
溝176	HC 1 A	No.12	7 C前半
溝176	HC 1 A	No.16	7 C前半
溝176	HC 1 A	No.25	7 C前半
溝176	YA 2 A	No.54	7 C前半
溝176	YA 2 A	No.61	7 C前半
溝177	HC 1 A	No.20	古墳時代前期前葉～7 C前葉
溝177	YA 2 A	No.50	古墳時代前期前葉～7 C前葉
溝177	YA 2 A	No.104	古墳時代前期前葉～7 C前葉
溝178	HC 1 A	No.21	古墳時代前期前葉～7 C前葉
溝178	YA 2 A	No.52	古墳時代前期前葉～7 C前葉
溝178	YA 2 A	No.56	古墳時代前期前葉～7 C前葉
溝179	YA 2 A	No.55	古墳時代前期前葉
溝179	YA 2 A	No.112	古墳時代前期前葉
溝180	HC 1 A	No.10	古墳時代前期前葉
溝181	YA 2 A	No.80	古墳時代前期前葉
溝182	YA 3	No.25	古墳時代前期前葉
溝183	YA 3	No.24	古墳時代前期前葉
溝184	YA 3	No.27	古墳時代前期前葉
溝185	YA 4	No. 3	6 C前半
溝186	HC 5 A	SD12	古墳時代前期前葉
溝187	HC 4 A	SD07	古墳時代前期前葉
溝188	HC 3 F	SD06	古墳時代前期前葉
溝189	HC 3 F	SD05	古墳時代前期前葉
溝190	HC 3 A	SD02	古墳時代前期前葉
水田	YA 4	No. 1	古墳時代前期前葉
建物63	YA 2 A	No.38	奈良時代～平安時代前期
建物64	YA 2 A	No.31	奈良時代～平安時代前期
建物65	YA 2 A	No.37	奈良時代～平安時代前期
建物66	YA 2 A	No.36	奈良時代～平安時代前期
建物67	YA 2 A	No.32	奈良時代～平安時代前期
建物68	YA 2 A	No.35	奈良時代～平安時代前期
建物69	YA 2 A	No.22	平安時代中期
建物69	YA 2 A	No.23	平安時代中期
建物70	YA 2 A	No.24	平安時代中期
建物71	YA 3	No.22	奈良時代～平安時代前期
建物72	YA 3	No.21	奈良時代～平安時代前期
建物73	YA 3	No.28	平安時代
建物74	HC 3 C	SB04	中世
建物75	YA 3	No.14	中世
建物76	HC 3 B	SB05	中世
建物77	HC 3 A	SB01	鎌倉時代
柱穴列A	HC 1 A	No. 7	平安時代中期
柱穴列B	YA 2 A	No.26	平安時代中期
柱穴列C	YA 2 A	No.25	平安時代中期
土壌193	YA 2 A	No.33	奈良時代～平安時代前期
土壌194	YA 2 A	No.96	平安時代中期
土壌195	YA 2 A	No.21	平安時代中期
土壌196	YA 2 A	No.30	平安時代中期
土壌197	YA 2 A	No.20	平安時代中期
土壌198	YA 2 A	No.19	平安時代中期
土壌199	YA 2 B	No. 4	平安時代中期
土壌200	YA 2 B	No. 2	平安時代中期
土壌201	YA 5	No. 5	古代
土壌202	YA 5	No. 6	古代
土壌203	HC 3 A	SK01	平安時代
土壌204	YA 3	No. 2	中世

新遺構名	調査区名	旧遺構名	時 期
土壌205	YA 3	No. 8	中世
柱穴 5	YA 3	P009	平安時代
柱穴 6	YA 3	P076	古代～中世
柵列状遺構18	HC 1 A	No.11	奈良時代～平安時代前期
溝191	HC 1 A	No. 8	奈良時代～平安時代前期
溝191	YA 2 A	No.34	奈良時代～平安時代前期
溝191	YA 2 A	No.60	奈良時代～平安時代前期
溝192	YA 2 A	No.39	奈良時代
溝193	YA 2 A	No.44	奈良時代
溝194	YA 2 A	No.43	奈良時代
溝195	YA 2 A	No.42	奈良時代
溝196	YA 2 A	No.40	奈良時代
溝197	YA 2 A	No.59	奈良時代
溝198	YA 2 A	No.48	奈良時代
溝199	YA 2 A	No.51	奈良時代
溝200	YA 2 A	No.45	奈良時代
溝201	YA 2 A	No.46	奈良時代
溝202	HC 1 A	No. 5	平安時代中期
溝202	YA 2 A	No.16	平安時代中期
溝203	YA 2 A	No.49	平安時代中期
溝204	YA 2 A	No.29	平安時代中期
溝205	YA 2 A	No.27	平安時代中期
溝206	YA 2 A	No.28	平安時代中期
溝207	YA 2 B	No. 1	平安時代中期
溝208	HC 4 B	SD08	9 C中～後半
溝209	HC 6	No. 1	中世
溝209	YA 1	No. 1	中世
溝210	HC 6	No. 2	中世
溝211	YA 2 A	No.18	近世
溝212	HC 1 A	No. 2	近世
溝213・214	YA 2 A	No.15	近世
溝215	YA 2 A	No.14	近世
溝216	YA 2 A	No.13	近世
溝217	YA 3	No. 4	中世以降
溝218	YA 3	No. 6	古代末～中世
溝219	YA 3	No. 5	古代末～中世
溝220	YA 3	No. 1	中世
溝221	YA 5	No. 3	中世
溝222	HC 5 A	SD11	鎌倉時代
溝223	HC 5 A	SD13	中世
斜面堆積 3	HC 1 A	No. 6	平安時代中期
斜面堆積 3	YA 2 A	No.17	平安時代中期



遺跡周辺の地形（航空写真：1985年）



1. 斜面堆積1 断面
(YA3区、南東から)



2. 斜面堆積1
(HC2B・YA3区、
南西から)

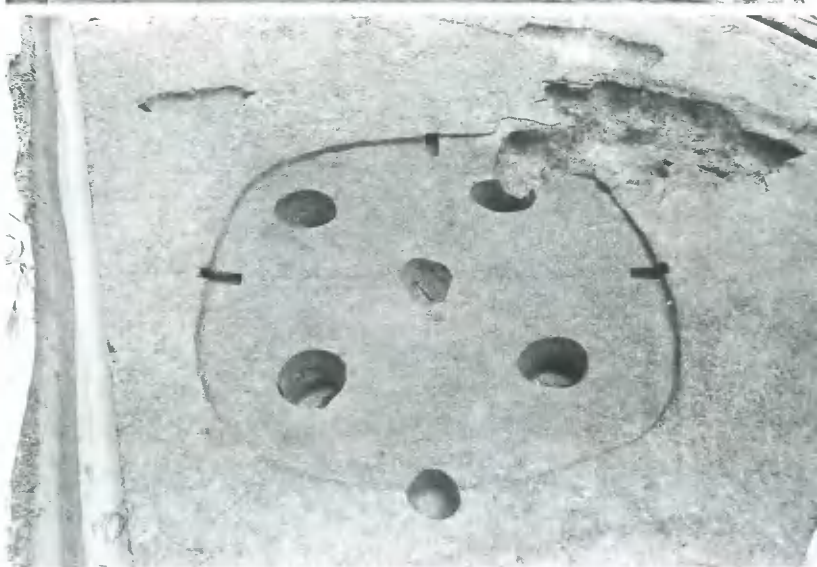


3. 斜面堆積1
(HC2A区、北西から)

1. 竪穴住居28
(YA2A区、北東から)



2. 竪穴住居29
(YA2B区、南西から)

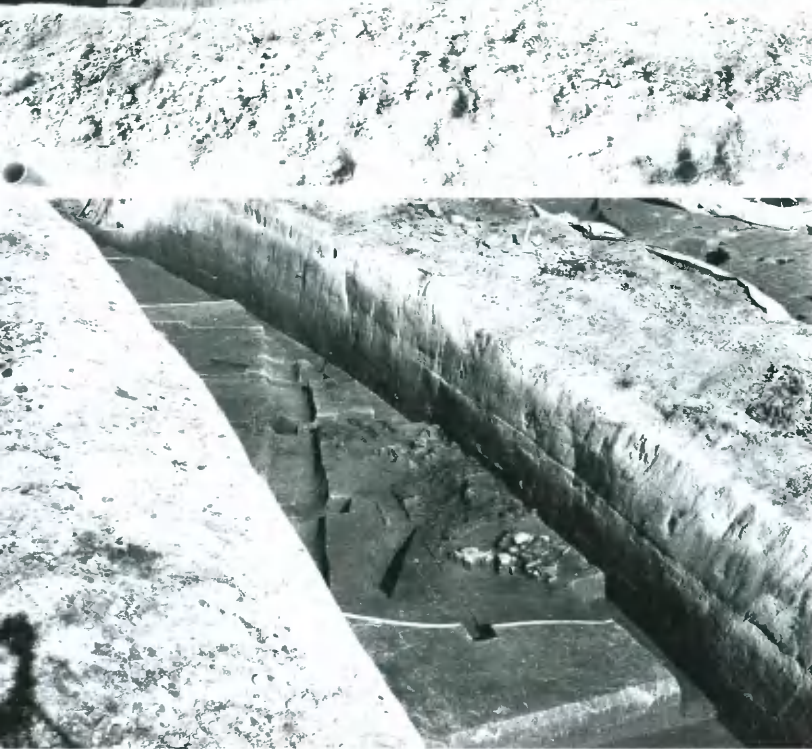


3. 竪穴住居30
(YA2A区、東から)

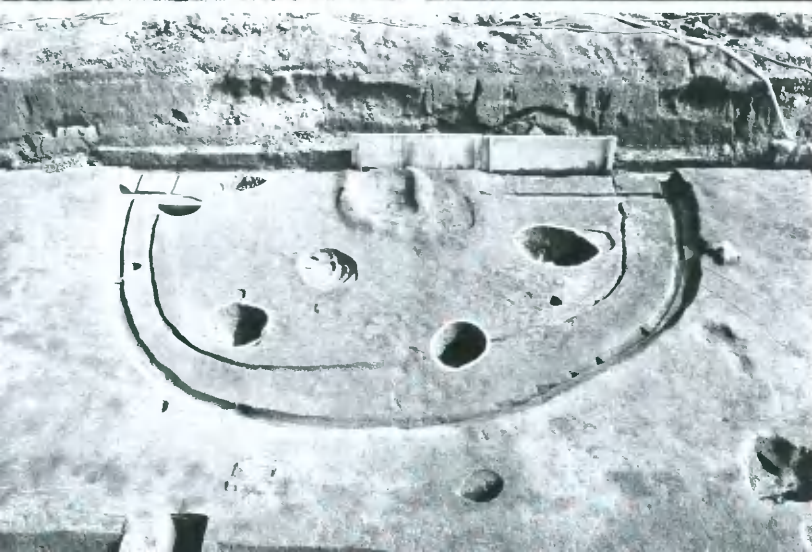




1. 竪穴住居31
(HC1A区、東から)



2. 竪穴住居32
(HC1A区、南西から)



3. 竪穴住居34
(YA2A区、西から)

1. 竪穴住居35
(YA2A区、東から)



2. 竪穴住居37
(YA3区、南西から)



3. 竪穴住居38
(HC3区、東から)





1. 竪穴住居39
(HC3区、北から)



2. 袋状土壇33
(YA5区、西から)



3. 袋状土壇34
(YA5区、東から)



1. 土坑165
(HC1A区、南西から)



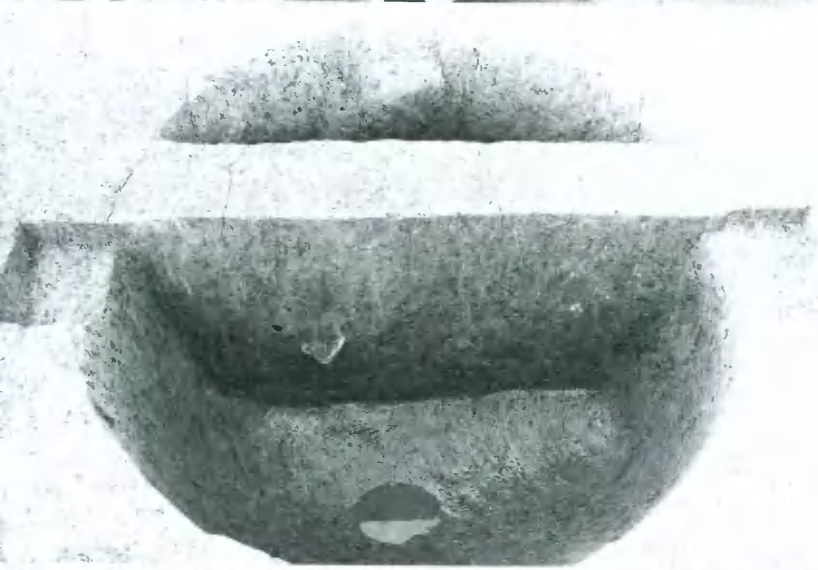
2. 土坑170
(YA2A区、東から)



3. 土坑175
(YA2B区、北東から)



1. 土壙182
(YA3区、東から)



2. 土壙183
(YA3区、南から)



3. 溝162・165
(YA2B区、南西から)

1 溝166
(YA3・HC2B区、
南西から)



2 溝166木器出土状況
(YA3区、西から)



3 溝170・208
(HC4区、北から)





1. 溝171・187
(HC4区、北西から)



2. 護岸状遺構
(HC5区、北から)



3. 竪穴住居40・41
(YA3区、西から)

1. 竪穴住居41のカマド
(YA3区、北から)

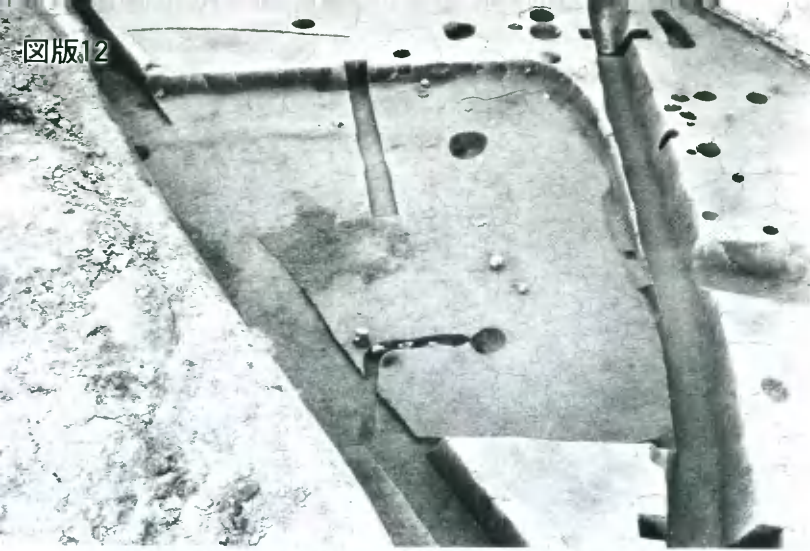


2. 竪穴住居42
(YA3区、北東から)



3. 竪穴住居42
(YA3区、北東から)





1. 竪穴住居43
(YA3区、南から)



2. 竪穴住居44・45
(YK区、西から)



3. 土壙192
(YA3区、西から)

1. 溝176・177
(YA2A区、北から)



2. 溝179
(YA2A区、南から)



3. 溝179断面
(YA2A区、南から)





1. 溝183
(YA3区、西から)



2. 溝184
(YA3区、西から)



3. 溝185木器出土状況
(YA4区、西から)



1. 溝186
(HC5区、北西から)



2. 溝188・189
(HC3区、西から)



3. 古墳時代の水田
(YA4区、南から)



1. 建物67・68
(YA2A区、北から)



2. 建物68
(YA2A区、南から)



3. 建物68、P-11
(YA2A区、東から)



1. 建物68、P-12
(YA2A区、西から)



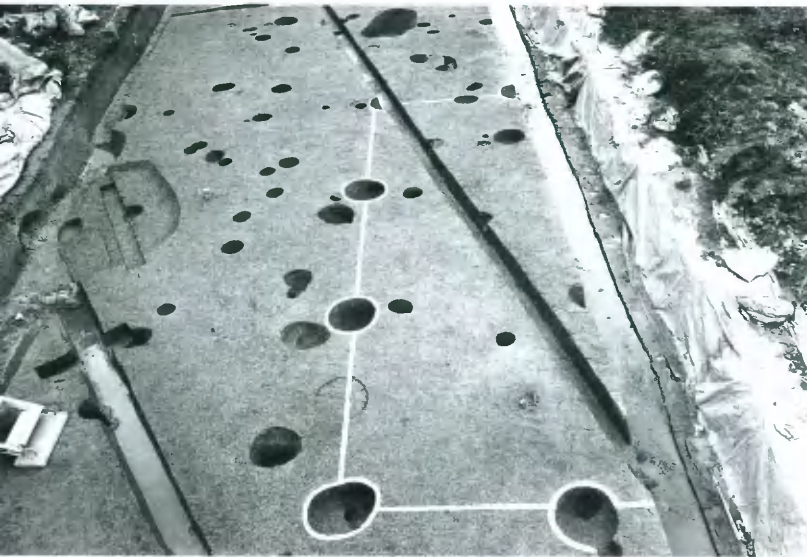
2. 建物70、P-19
(YA2A区、南西から)



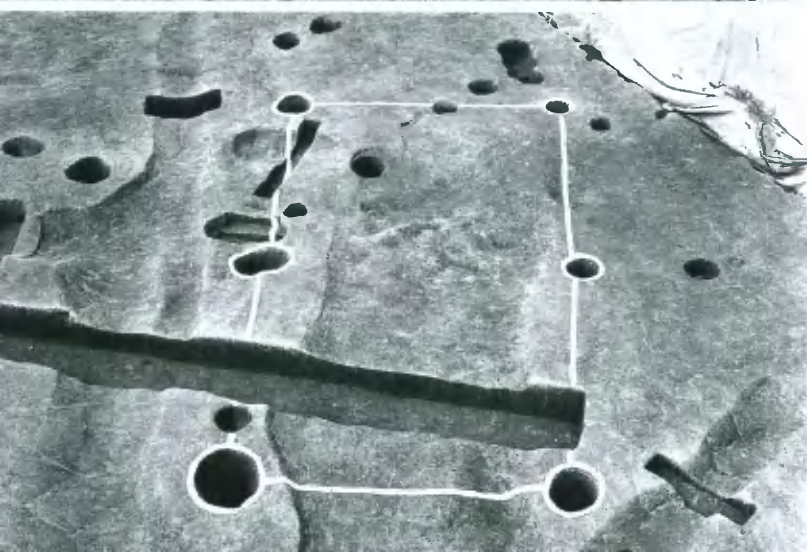
3. 建物71
(YA3区、西から)



1. 建物72
(YA3区、北から)



2. 建物73
(YA3区、北から)



3. 建物74
(YA3区、南から)

1. 土壙196
(YA2A区、南東から)



2. 土壙197
(YA2A区、東から)



3. 土壙198
(YA2A区、南西から)





1581

1. 縄文時代後期の土器（斜面堆積1出土）



1566



1565



1563



1568



1582



1571



1574

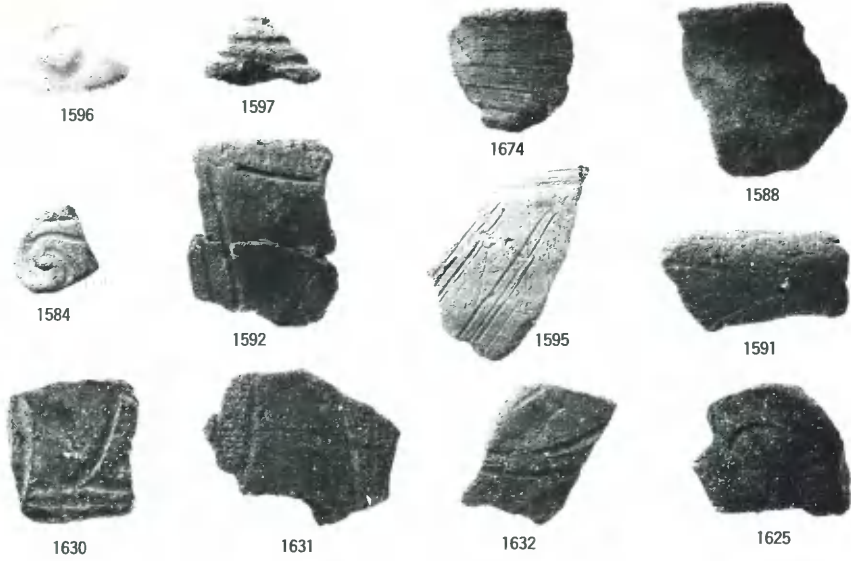


1564



1586

2. 縄文時代後期の土器（斜面堆積1出土）



1. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)



2. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)



1646



1656



1670



1678

1. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)



1593



1594



1697



1696



1699



1698

2. 縄文時代後期の土器 (斜面堆積1出土)



1786



1854



1851



1853



1893



1809



1753



1826



1880



1954



1777



1951

図版24



2048



2045



2044



2082



2050



2049



2047



2081



2097



2119



2128



2124



2123



2111



2112



2115



2114

古墳時代の土器（溝179出土）



2224



2230



2243



2225



2226



2227



2228



2232



2234



2235



2236



2239



2240



2241



2242

1. 古代の土器（土壙195・196・197・198出土）



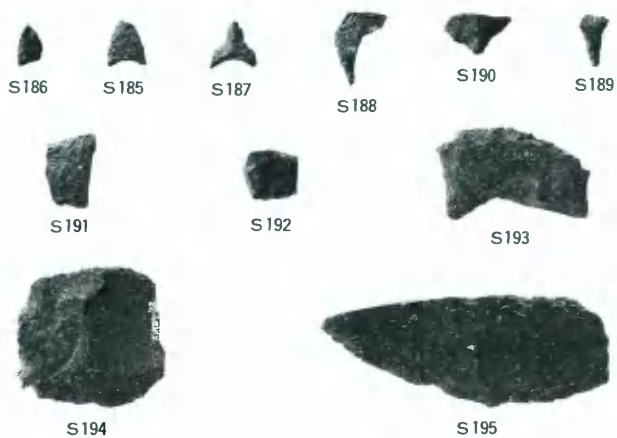
2. 古代の土器（溝202出土）



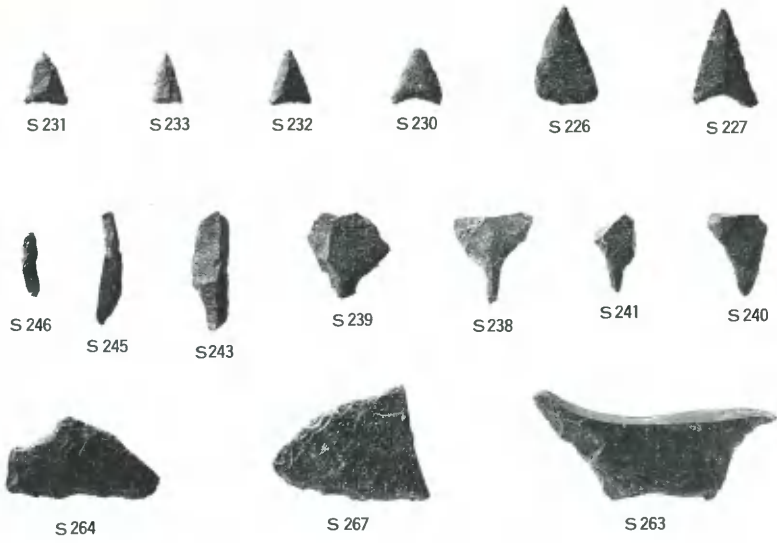
3. 古代の土器（斜面堆積3出土）



1. 縄文時代後期の石器 (斜面堆積1出土)



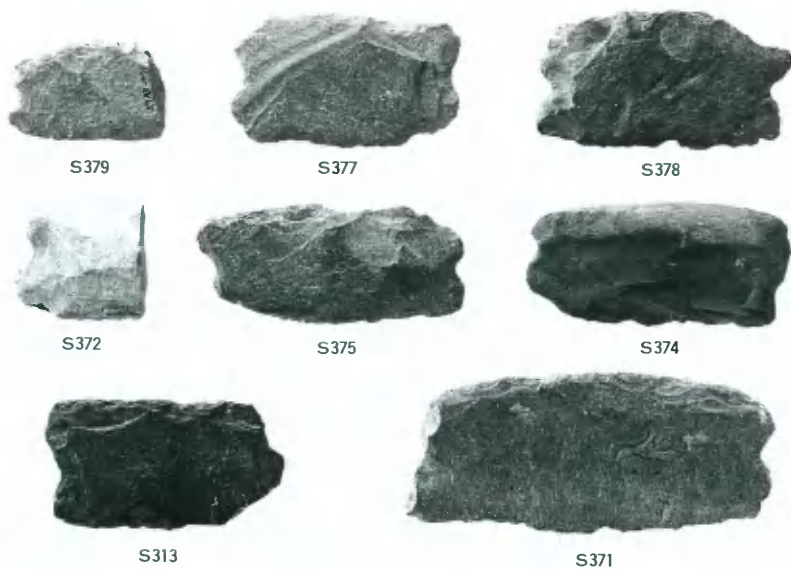
2. 弥生時代中期の石器 (竪穴住居28出土)



1. 弥生時代中期の石器（竪穴住居32出土）



2. 弥生時代中期の石器（溝165・166出土）



1. 弥生時代の打製石包丁



2. 弥生時代の太型蛤刃石斧



S293



S430



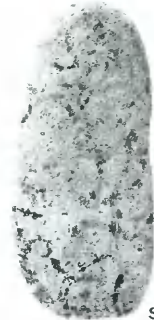
S274



S429

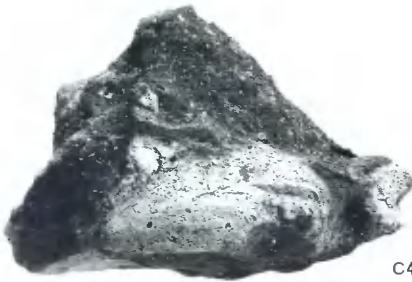


S428



S440

1. 弥生時代の石斧



C45



M46



W69



S329



S370

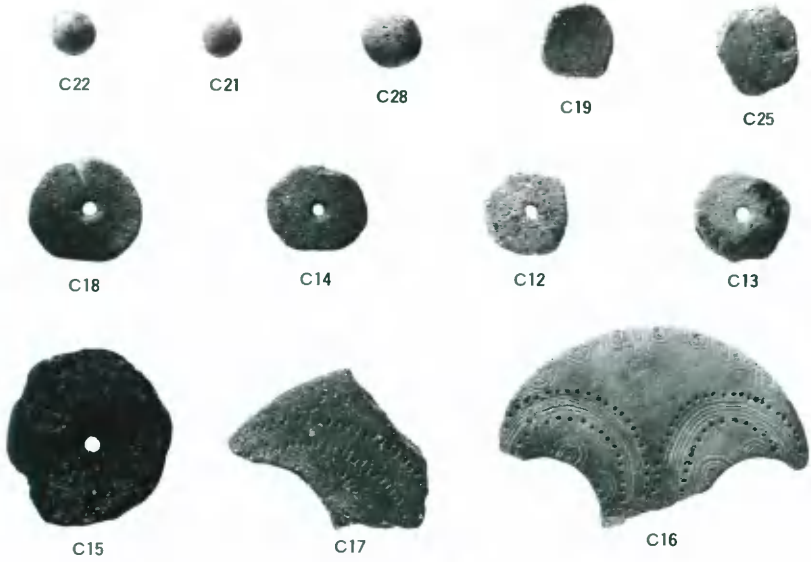


S455

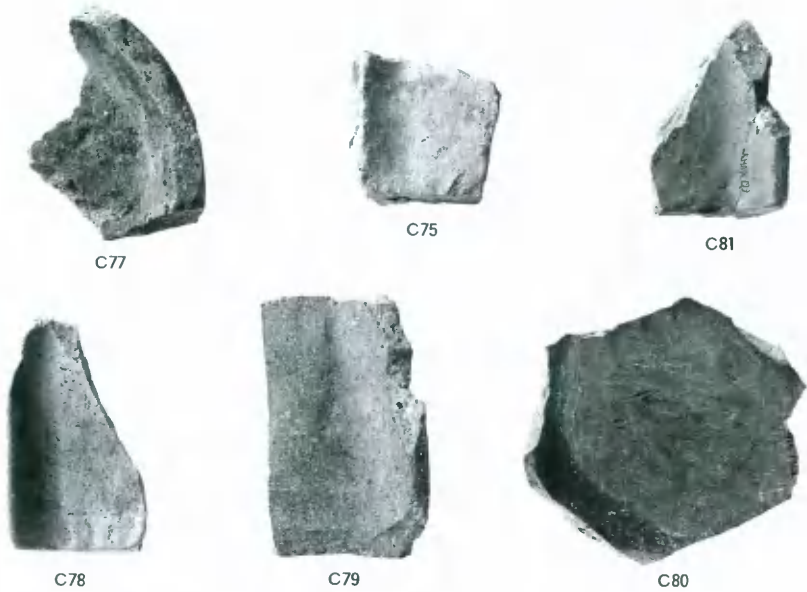


2. 土製品、古銭、石器、木鏃

図版30



1. 弥生時代・古墳時代の土製品



2. 古代の陶硯



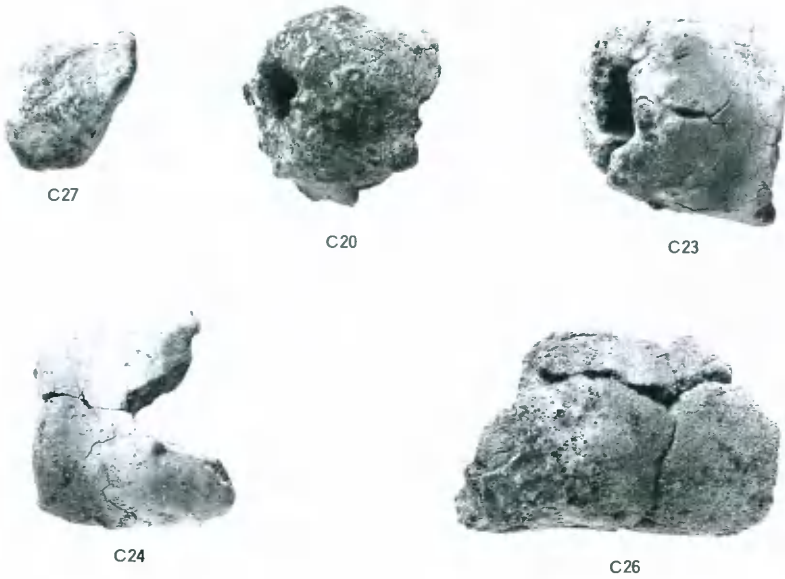
1. 古代・中世の土製品



2. 古墳時代・古代・中世の鉄器



1. 古代・中世の鉄器



2. 土製品（羽口）

報 告 書 抄 録

ふりがな	くぼきいせき							
書 名	窪木遺跡 2							
副 書 名	岡山県立大学建設に伴う発掘調査							
巻 次	Ⅳ							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	124							
編 著 者 名	平井泰男・久保恵里子・岡田博・葛原克人・柳瀬昭彦							
編 集 機 関	岡山県古代吉備文化財センター							
所 在 地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発 行 機 関	岡山県教育委員会							
所 在 地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-1111							
発行年月日	1998年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺 跡 番 号	° ' "	° ' "		m ²	
くぼきいせき 窪木遺跡	おかやまけん 岡山県 そうじやし 総社市 くぼき 窪木	33208	—	34度 41分 15秒	133度 47分 5秒	19920609 ～ 19921211	5,605	岡山県立大学・ 岡山県立大学短 期大学部建設に 伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
窪木遺跡	集落跡	縄文	土壇 1基 斜面堆積 2	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、緑 釉、灰釉、陶馬、陶 硯、輸入陶磁器、石 器・石製品、土製品、 鉄製品、木器、製鉄 及び鍛冶関連遺物		<ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代後期初頭の土器が斜面堆積からまとまって出土。 ・弥生時代後期の竪穴住居から石製玉の未製品が出土。 ・弥生～古墳時代の溝から鋤などの木器が出土。 ・奈良～平安時代の掘立柱建物と多種、多様な出土遺物。 		
		弥生	竪穴住居 12軒 掘立柱建物 3棟 袋状土壇 7基 土壇 63基 溝 24条 護岸状遺構 1 石列 1					
		古墳	竪穴住居 6軒 掘立柱建物 2棟 土壇 5基 柵列状遺構 1 水田 1 溝 15条					
		古代～ 中世	掘立柱建物15棟 土壇 13基 溝 33条 斜面堆積 1					

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124

窪木遺跡 2

岡山県立大学建設に伴う発掘調査Ⅳ

1998年3月13日 印刷

1998年3月30日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷 西日本法規出版株式会社
岡山市高柳西町1-23